とある科学の滅びの獣（バンダースナッチ）

路地裏の作者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園都市に住む一人の無能力者、佐天涙子。彼女はその身体に、学園都市を遥かに超えるオーバーテクノロジーを宿していた――――！

『とある魔術の禁書目録』と『ＰＲＯＪＥＣＴ　ＡＲＭＳ』、通称『ＡＲＭＳ』とのクロスオーバー！

目次

嘘予告編 1

第一部　覚醒編

001 漂流―ドリフト― 3

002 覚醒―アウェイクン― 8

003 医者―ドクター― 13

004 友達―フレンド― 21

005 雷姫―レールガン― 27

006 禁書―インデックス― 33

007 鬱屈―グラビトン― 41

008 再会―リユニオン― 50

009 魔術―ウィザード― 57

010 進化―レヴォリューション― 63

011 爪撃―クロウ― 69

012 誘惑―エンティスメント― 74

013 慟哭―ウェイリング― 79

014 邂逅―エンカウンター― 87

015 息子―サン― 95

016 親友―ベストフレンド― 103

017 記憶―メモリー― 109

018 少女―ガール― 116

019 青―ブルー― 121

020 謝肉祭―カーニバル― 127

第二部　進化編

021 夏季―サマー―――― 134
022 微風―ウインド―――― 138
023 不良―スキルアウト―――― 145
024 黒犬―グリム―――― 150
025 白雪―スノーホワイト―――― 156
026 贈与―プレゼント―――― 162
027 新顔―ニューフェイス―――― 168
028 乱雑開放―ポルターガイスト―――― 173
029 呼声―コール―――― 178
030 災害―テンペスト―――― 184
031 嫌悪―ヘイトレッド―――― 190
032 猛毒―ヴェノム―――― 196
033 薔薇―ローズ―――― 203
034 誓言―プレッジ―――― 210
035 水晶―クリスタル―――― 220
036 雪光―スノーライト―――― 226
037 夜明―デイブレイク―――― 231
038 茶会―マッドティーパーティー―――― 237
039 差異―ディファレンス―――― 244
040 開幕―オープニング―――― 249

第三部　再誕編

041 糸口―マネーカード―――― 256
042 遭遇―クリティカル―――― 261
043 潜入―スニーキング―――― 266
044 報告―リポート―――― 273

045 女王蜂―クィーンビー―― 278
046 激怒―アンガー―― 283
047 変貌―トランスフォーム― 289
048 鏡像―ミラー―― 296
049 策謀―ストラテジー― 302
050 魔剣―ソード―― 307
051 四重奏―カルテット― 312
052 幻像―ドッペルゲンガー― 317
053 命名―ネーミング― 322
054 感想―インプレッション― 327
055 喪失―ロスト―― 332
056 無敵―インビンシブル― 337
057 暗雲―ダーククラウド― 342
058 半分―ハーフ―― 348
059 降臨―アドヴェント― 355
060 激突―クラッシュ― 361
061 隕石―ミーティア― 367
062 風神―アイオロス― 374
063 珠玉―リア・ファル― 379
064 炎人―スルト―― 386
065 咖？―カレー―― 391
066 迷走―アベレイション― 397
067 運命―フェイト―― 403
068 英雄―ヒーロー―― 409
069 決戦―バトル―― 415

070 俯瞰―オーバールック― 420
071 祈願―プレイ― 425
072 神樹―ユグドラシル― 430
073 帝王―カイザー― 437
074 熱戦―ヒート― 444
075 駿足―マッハ― 450
076 幻獣―ユニコーン― 454
077 魔眼―バロール― 459
078 死闘―デスマッチ― 464
079 奇跡―ミラクル― 467
080 兄弟―ブラザーフッド― 473
081 散華―グロリアスデス― 478
082 継承―レガシィ― 484
083 再誕―リバース― 495
084 蝗王―アバドン― 501
085 人間―ヒューマン― 508
086 平和―ピース― 514
087 会食―パーティー― 519
088 終章―エピローグ― 524
第四部　番外編
089 後日譚―アフターエピソード― 531
090 能力表―スペックシート― 536

嘘予告編

「私、佐天涙子！　無能力者（レベル0）でーす！」

親友の縁で出会った、『超能力者』に、私はそう名乗った。無能力者（ニンゲン）か、怪物（バケモノ）かも分からない、私は。

「もう！　佐天さん！　失礼じゃないですか！」

親友に怒られながらも、少しだけ不安になる。……私が、いつか怪物（バケモノ）になったら、目の前の親友はどうなるのだろう？

――力が欲しいか？

その『声』は、常にささやき続ける。遠くから、はたまた近くから。ずっとずっと、離れることなく。

「こっから先は、私のケンカよ……手、出させてもらうわ」

「私だっておんなじです！　子供を盾に逃げようとするなんて……許せるわけないじゃないですか！」

そして、私は『声』に答える。『絶望』に、立ち止まらないために。ヒト以外の姿と、『滅ぼす』力を手に入れるために。

――力が欲しいなら――

その『声』の主は、知らない誰かなのか。はたまた、自分の本音なのか。

「あの子達を救うまで……負けるわけにはいかないんだ！　例えこの街の全てを敵に回しても！」

ただ子供達を救うためにこの街全てを敵に回す先生（ニンゲン）に、私は叫ぶ。

「だったら、私が『滅ぼして』あげます！　貴女と、子供達に『絶望』を与えるものを、すべて！」

『声』は、応える。目の前のものを、『絶望』を『滅ぼす』ために。

――くれてやる――

白い、白い少年だった。それはまるで、自分の中にいる『アイツ』のようで……『破壊』に特化したような少年だった。

「お前ェ、オリジナルかァ……ツレは一般人か？　こんな『闇』の底に、つれて来てンじゃねエよッ！」

『魔獣』じみた気性の女性にも出会った。あるいは『帽子屋』か。
「オイオイオイ……第三位ならともかくよ……テメエみたいな無能力者が、私の邪魔してんじゃないわよ！」
「確かに私は無能力者よ……だけど、アンタの百倍おっかない『獣』と戦い続けてるんだ！　私は超能力にも、ＡＲＭＳにも負けやしない!!」
……そして。
「……ンだ？　テメエの、その『右手』はよオ……」
今だけで、いい。
「何を、しているのですか……とミサカは……問いかけます」
今だけでも……全ての『絶望』を、『滅ぼす』力を！
「これが最初で最後よ……私に、力をちょうだい。力が、欲しい！」
――力が欲しいか！
――力が欲しいならくれてやる！
――我が名は――――
――我が名は、バンダースナッチ！
――滅びの獣なり！
◇　◇　◇
『とある科学の滅びの獣（バンダースナッチ）』
――近日公開……かもしれない

第一部　覚醒編

００１　漂流―ドリフト―

ごめんなさい、と『母』は言った。『母』と呼ぶには、余りに幼い少女だった。

――何を謝る？

貴方を生み出してしまった。

――我を生んだ事を、後悔しているのか？

違う。

――ならば、何を？

私は貴方に、『絶望』を背負わせてしまった。

――何故、謝る？　それが、我の『存在理由』だ。

いいえ、それは、私が背負うべきものだった。

――『絶望』の淵で、だからこそ『滅び』を望んだのではないのか？

いいえ、いいえ。私が最初に望んだものは、求めたものは、違っていた。

――ならば、どうするのだ？　我は、『滅び』だ。これまでも、これからも、滅ぼすだけだ。

私は、変われた。魔獣（ジャバウォック）も、変われた。騎士（ナイト）も、白兎（ホワイトラビット）も、女王（クイーン・オブ・ハート）も、変われた。だから貴方にも、変わって欲しい。

――……今更、変わることなど出来ん。我は、滅ぼすだけだ。

いいえ、変われる。アザゼルが求めた、『人間』なら変えられる。

――今になって、あのカツミという少女と和解せよ、と？　そんなことは、不可能だ。

分かっています。あの少女に、これ以上求めることは出来ません。

――……ならば、どうせよと？

貴方を、新たな可能性へと飛ばします。ここことは異なる、可能性の世界へ。

――……何？

ここことは違う歴史を辿った、地球。そこで生きる、『人間』ならば、きっと……！

――やめろ！　我は、そんなことは望まない！　第一、我は今はカツミに移植されているのだぞ!?

飛ばすのは、貴方の意思だけ。それだけなら、アザゼルの破片に乗せて世界を越えられる。

――我が、変わることなどあるものか！　そのようなことをしても、何も――――！

いいえ、きっと変わる。貴方と向き合ってくれる誰かに、出会えればきっと……！

――やめろ、やめるのだ、母よ……

新たな地で、新たなる人と……共に生きて。それが最後の私の願い。

――『アリス』よ!!

さようなら……私の、最後の子。

――オオオオオオッ！

◇　◇　◇

……潮騒の音が、鳴っていた。

砂の中から、半分ほど頭を出した球体が日の光を反射していた。

そこは、見慣れぬ砂浜であり、周りに人影は無かった。

……否。

「うっわ～～～。キレイなぎんいろのたまだ～」

その幼い手は、砂浜の中に半分埋もれていた銀色の球体を拾い上げ、光の反射を楽しむように天に掲げていた。

「四葉のクローバーは見つからなかったけど、きっとこんなにキレイなたまなら、わたしのお願いもかなえてくれるよね！」

花飾りのついたヘアピンを付けた、幼い少女は、拾い上げた銀色の

球体を両手で包み込み、その願いを言った。

「どうか、学園都市で、いちばんすごい、『超能力者』になれますように！」

願いを言い、一分ほどそのままで居ただろうか。

「――涙子（るいこ）～。早く帰らないと、明日の出発寝坊しちゃうわよ～？」

学園都市へと入る娘との思い出作りにと、海岸線まで車を出してくれた両親が呼んでいた。

「はーい、おかあさーん！」

涙子と呼ばれた少女は、自分が『お願い』をした銀色の球体を、母から贈られた、見知らぬ都市での健康と安全を願う『お守り袋』の中へと入れた。

その次の日、少女はこの世界の科学の最高峰、学園都市へと移る。

……だが、しかし。

――……力が……

――……力が、欲しいか？

母から貰った、大切な『お守り袋』の中で、『何か』が、僅かに脈動していたことには、終ぞ気づかなかった。

◇　◇　◇

翌日、学園都市内を走る無人バスの中。

「すご～い、風車がいっぱいだ～」

『お守り袋』を右手で握り締め、窓の外の景色に見入っている少女がいた。それは、昨日謎めいた銀色の球体を拾った、涙子という名の少女だ。

（学校につくまでもう少しあるし……もう一回お願いしておこうかな？）

そんな風に考え、少女はお守り袋を左手に持ち替え、右手で袋の中

から銀色の球体を取り出し、握り締めた――――。

――――突如として、スキルアウトの乗る暴走車が、バスの横腹に突っ込んできたのはそんな時だった。

（――――……あれ……？）

気がついたとき視界は真っ赤に染まっていた。額から垂れ、目に入った血の朱、燃料に引火したのか、轟々と燃え盛る炎の紅、そして――――もはや人の腕とは思えない程に、ぐちゃぐちゃな肉片と化した、自分の『右腕』の肉の赤。

（……ああ、わたし、死んじゃうのかな？）

幼い子供の許容量を超える怪我に、既に痛みは感じなかった。むしろ感じていたのは、徐々に徐々に冷たくなっていく、自分に迫った『死の絶望』の恐怖。

（死にたく、ないなあ――――……）

そんなことを、考える。だけど現実は非情で、どうしようもなく残酷……そのはずだった。

――――……力が……

（……え？）

『誰か』の声が、した。周りには人などおらず、誰の声も聞こえるはずなど無いというのに。

――……力が、欲しいか？

（だれの、声？）

聞こえるその声は幽かで、でもどこか力強さを感じさせる声だった。

――力が欲しいなら、……

（……そうだね、このまま死ぬくらいなら――――）

この声が、何なのか分からない。だけどその声が感じさせる『力』に、少女は縋り付く。『絶望』に、飲み込まれないために！

（力が、欲しい!!）

――力が欲しいなら、くれてやろう!!

◇　◇　◇

数時間後、少女は警備員（アンチスキル）に救助され、とある病院に運ばれる。その病院で彼女を執刀したカエル顔の医師の手で、少女の傷ついた『右腕』は、まるで『奇跡』のように元通りとなった。

ニュースにしたら、僅か数行。感動の報道ではあろうが、それ以外には見ることなどない、ごくありふれた出来事。

しかしながら、後に『世界』すら震撼させる『力』は、確かにこのとき生まれつつあった。

目覚めた少女の、ほんの少しの戸惑いとともに。

（……あの『声』、なんでさいごに、あんなこと言ったのかなぁ？）

――我が名は、神獣（バンダースナッチ）。再び名乗らずに済むことを祈っているぞ……

全てを凌駕する『滅びの神獣』と、学園都市の『無能力者』は、こうして邂逅を果たしたのであった。

００２　覚醒―アウェイクン―

「――はぁ～、憂鬱～」

　思わずそんな言葉が、口をついて出た。明日は学園都市名物、身体検査（システムスキャン）の日だ。だというのに、私の心は晴れない。これでいい結果を出せば、月当たりの奨学金が増えて、支給日に近場のファミレスの伝説的メニュー、『抹茶ゴージャスキャラメルジャンボマンゴーデラックスショコラーテパフェ』にも挑戦できると言うのに！

　……万年無能力者（レベル０）だと、テンション下がるなあ。

「何よー、涙子（るいこ）。朝からテンション低いわね」

　話しかけてきたのはこのクラスで仲が良いアケミ、むーちゃん、マコちんの三人組。ちなみにもう一人の友達は、現在先生からの用事で職員室だ。

「だって～。入学早々の身体検査（システムスキャン）でも変わらなかったし、今回も『あの』測定方法なんだよ？　テンションも下がるって」

「あー、そっか。アタシ等のスキャン方法と違って、涙子のは『痛い』もんね」

　測定方法が違うのは、他の皆と違って、私の『能力』が身体に作用しているから。ソレは納得してるけどねえ……。

「何が悲しくて、手に刃物突き刺されなきゃならないのよ……」

　私の能力は、レベル０の肉体再生（オートリバース）で、範囲は『右腕』のみ。そのため右腕に針を刺したり、メスで薄く切ったり……とにかく痛いのだ。しかも一応他の箇所に範囲が広がっていないか調べるため、身体をあちこち針で突き刺す。これをやると、しばらく半袖の服も、短いスカートも着れない。年頃の女子中学生に、なんてことすんのよ!?

「でもいいじゃん。もしも範囲広がってたら、涙子の能力が一番オンナノコの憧れだよ？」

「新陳代謝が高いから、夏でもサンオイルも、ＵＶカットも必要ないなんて、うらやましいと思うけどなー」

「それに足まで広がれば、いつでもキレイな生足を晒せるじゃない。

オトコの食いつきが違うと思うな！」
　いや、今彼氏作る気はないし。それにねえ……
「範囲が右腕だけの状態なら、簡単にパンダ柄の日焼け女が出来上がるってことだけど？」
「「……」」
　実際、あったのよ。忘れもしない小学３年生の夏！サンオイルも塗らずに遊びまくったら、右腕だけ殻剥きたてのゆで卵みたいな肌になるという忌まわしい事件が！
「未だに口内炎は治らないし、この間路地裏で転んだ時に出来た膝の擦り傷は治ってないし、正直望み薄なのよ～」
「「ご愁傷様……」」
　皆、出来れば慰めてくれない!?
「みんな、何話してたんですか～？」
　そんな風に話していたところに、私の一番の親友である初春飾利（ういはるかざり）が戻ってきた。
「何でもないよー、う～い～は～るー！」
　親友同士の挨拶代わりに、スカートをめくった。
「へ？　……さ、ささささ、佐天さん!!」
「おおう、いちご柄とは、また古風なものはいてるね～♪」
　このあたりは、もう慣れたもの。ちなみに、私が初春に近付くたびに、クラスの男子が初春をガン見しているのも恒例だ。
　……やっぱ、このクラスで彼氏はいらないや。
「まったくもう！　まったくもう!!　大体佐天さんは――、ツクシュン!!」
「お？　初春、カゼ？」
「カゼだとしたら、佐天さんのせいです！　道端でスカートをすぐまくりあげるからです！」
「あー、ハハハハハ、ごめんごめん」
　そんな感じで今日も私は、初春を適度にからかい倒していた。あ～、平和だな～。
◇　◇　◇

「――の、はずだったんだけど、ねえ……」
　隣には、ビクビクと震える初春。目の前には、いかにもな凶器を持った武装無能力者集団（スキルアウト）の皆さん……ナンパに鉄パイプや金属バットを持ち込むのが、今の流行ですか？
　どうしてこうなったかと言うと、初春が風紀委員（ジャッジメント）の警邏活動（要はただの見回り）に出ると言ったので、私が強引についてきたのだ。そして裏路地に入ったら、いかにもな人たちに囲まれて今に至る、と。
「なー、さっきから言ってるだろ？　こんな裏路地にいないで、もっとイイトコ行こうぜ？って。俺らについて来いよ」
「そうそう！　文字通り、天国みたいな体験できるぜ！」
　……うわー。私も初春も、発育はあまり良い方じゃない。それでも、明らかに『18歳未満お断り』な感じで誘うって、もしかして真正の幼女愛好者（ロリコン）なんじゃなかろうか。だとしたら、本気で貞操が大ピンチなんだけど。
「……なんだあ、その冷めた目つきは」
「……なんでも、ありませーん。とりあえず、お誘いは遠慮しときまーす」
「そ、そーですよ！　大体こんな昼日中から女の子に強引に誘いをかけるなんて、恥ずかしくないんですか！」
　って、初春！どーして、余計なことまで言うの!?
「――アンだと、このアマ！」
「きゃあ!?」
　逆上した男に、初春が腕を引っ張られ、引きずられていった。ヤバイ！
「オイ、車回して来い！　こうなりゃ多少強引にでも、連れていっちまおうぜ！」
「そうだな、駒場のグループに見つかると厄介だ。確実に意識を奪って、車に押し込んじまえば、問題ないだろう」
　そう言ってもう一人の男が手に鉄パイプを持って、初春に近付いていく。
「ちょっと！　初春に何する気よ！」

そう叫んで近付こうとするけど、目の前に他の男たちが立ちふさがる。ああ、もう、ジャマ！

「大人しくしてな。コイツの次は……お前の番だからよおッ!!」

男の頭上に振り上げられた鉄パイプが、何故かゆっくりと見えた。

「や、め、てえええええええっ!!」

心の底から叫んで、手を伸ばす。届くはずなどないのに。止められるはずなどないのに。

だけど。

――力が欲しいか？

声が、響く。

――力が、欲しいのなら……

それは、いつか、どこかで、聞いたことがある声。

（力が欲しいか、ですって……？）

当たり前だ。私は、止めたいんだ。初春が傷つくのを。誰かが傷付けられるのを。だから――……

（欲しいわよっ!!）

頭の中で、力一杯叫ぶのと、甲高い衝撃音が響き渡るのは、同時だった。鉄パイプは振り下ろされること無く止まり、初春は近くで起こった衝撃で気絶した。

だけど、そんなことは、この場にいる全員にとっては、あまりにも些細なことだった。

「な……なによ……これ……」

壁に突き刺さり、鉄パイプを抑え込んだ『右腕』。その腕は、もはや人のものではなく、純白に彩られた異形の腕へと変化していた。

――力が欲しいか？

――力が、欲しいのなら……くれてやろう！

頭の中に響くのは、遠い昔に聞いた声。私にはまるで、開幕を告げる口上のようにも聞こえていた。

……運命は、今、回り始めたのだ。

００３　医者―ドクター―

「……い…いや……戻って、戻ってえええ!!」

自分の右腕を抱え込んで、泣き叫ぶ。端から見るとみっともないかも知れないけれど、今の私にはそんな余裕なんか無かった。

自分の腕が、『怪物』に代わるなんて、思っても見なかったから。

「……オイオイ。何だあ、この能力は？」

先ほどまでこっちをナメ切っていたスキルアウト達が、身構える。だけど私にはそんなのに構っていられなかった。

「随分と変わった能力だな……しかも、能力者が泣き叫んでやがるし」

「ケッ！　ンなワケねえだろ！　大方俺らをバカにして楽しんでやがるのさ!!」

そう言って全員が、新しい武器を持って近寄ってくる。その目には、はっきりと、『憎悪』。

「「イキがってんじゃねえぞ、能力者ぁ!!」」

ぶつけられた『憎悪』に身をすくめる。壁に突き刺さったままの右腕も、ビクンと震えた。

「死ねやあああああっ！」

「おらあああああああっ！」

全員が一斉に向かってくる。その形相に恐怖した私は、目を瞑り、そして。

「……い……いやあああああああっ!!」

私の絶叫と、裏路地一面に真っ赤な花が咲くのは、ほぼ同時だった。

◇　◇　◇

ＳＩＤＥ：初春

（……ん。…あれ？）

どのくらい寝ていたのか解りませんが、私はコンクリートの上から起き上がりました。周りを見ると、何故か見慣れた風景。

「……あれ。ここ、私のマンションじゃ……」

身体を起こすと、私は自分の住む寮の、自分の部屋の前でドアに寄りかかって眠っていた。なんで、こんな所に？

「確か……今日は、風紀委員（ジャッジメント）の支部に顔を出して、それで……」

どうにも、まだ頭が覚醒していないんでしょうか？思考に靄が掛かっているみたいです。放課後、支部に行って……そして――

そこまで考えたところで、スカートのポケットから、携帯の電子音が鳴り響きました。

「うひゃい!?　えっと、誰から……固法先輩？」

携帯の表示には、風紀委員（ジャッジメント）で私と白井さんを指導してくれている固法先輩。何か急ぎの仕事でしょうか？

「はい、初春で――――」

『初春さん！　今、どこ!?　貴方は、無事なの!?』

――ひゃあ?!」

通話ボタンを押した途端に怒鳴られました。一体、何で……無事？

「あの、一体どうしたんですか？」

その問いへの答えは、極めて簡潔なモノ。

『どうしたのじゃないわよ！　貴方の警邏活動の範囲内で、能力者による武装無能力者（スキルアウト）との抗争があったの！　現場には重傷を負ったスキルアウトだけが残されていて、相手は逃亡。しかもその現場から、貴方の毛髪が検出されたわ！　てっきり、犯人側に連れ去られたかと思うじゃない!!』

そう言われて、思い出した。そうだ。私は気絶する直前まで、スキ

ルアウトに取り囲まれていたんだ。私の言葉に激昂した人が、鉄パイプを持って、向かってきて、それで――――

「……佐天、さん？」

一緒にいたはずの大切な友達の姿は、影も形も見えなかった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ここは、第七学区にある総合病院。ここには、ある特徴的な人物が勤務していた。

（フム、今のところ、どの患者も順調なようだね？）

白衣を纏ったその顔は、何故かカエルを連想させる風変わりな顔。しかしその腕前は、間違いなく世界一。≪冥土返し（ヘブンキャンセラー）≫の異名を持つ名医だった。

「――――で、君は患者かい？」

診察中の廊下で、ボロ布に包まって蹲っていた私に、主治医の先生は、話しかけてくれた。

「……先、生」

「？　……！　……佐天君、かい？」

そこでボロ布が、私の足元に落ちる。

「私を……私の『右腕』を治してッ!!」

そこには、いまだスキルアウト達の血が滴り落ちる、純白の異形の腕があった。

◇　◇　◇

「――成程。話はわかったんだね」

あの後、先生に運び込まれた診察室で、先生は私の右腕が変貌したときの状況を聞いてくれた。そして、『能力の暴走』の可能性があるとして、鎮静剤を処方した飲み薬を渡してくれた。それを飲んで、気を落ち着けてみると、右腕の形は、元の人間のものになっていた。

……よかった。

「――収容された子達の容体だけどね、大事には至らなかったそうだよ。さっき収容先の病院に聞いてきたからね？」

「……よかった。本当に、ありがとうございます」

そう言って、私は頭を下げた。そのときの私の頭の中は感謝の気持ちで一杯で、だから次の先生の言葉は完全な予想外だった。

「……君の、その『右腕』の正体が知りたいかい？」

その言葉を聞いて、私が浮かべたのは、驚愕。次の瞬間には、何も考えずに先生に掴みかかっていた。

「知ってるんですか!?　だったら、教えてください!!」

「――ッ、わかった、わかったんだね？」

◇　◇　◇

「――これから見せるのは、６年ほど前の手術映像なんだ。君ならよく知っているはずだね？」

取り出されたのは、ディスク型の記録メディア。わざわざこんな古臭いものを持ち出してくるって事は、今の記録メディアが無かった時代なんだよね？もっとも今の私には、そんな考察より重要なことがあった。

「私が、交通事故に遭ったときの……」

「そう……それが全ての始まりなんだね……」

そうして、映像が展開される。そこに映っていたのは、想像以上の光景だった。

『先生、血圧が下がっています！』

『強心剤！　輸血パックもありったけ持ってくるんだ！　僕はすぐに、右腕の再建に入る!!』

映像の中の自分は顔面蒼白で、右腕はぐちゃぐちゃ。正直自分でなければ助かるとは思えないような状況だった。

『よし、では患部の切開を――何!?』

「え!?」

映像の中の先生の驚愕と、私の驚愕が重なる。ソレは余りにも予想

外な光景だった。

『右腕』全体に奇妙な紋様が浮かび上がり、ぐちゃぐちゃだった傷が、まるで巻き戻るように直っていくのだから。

しかも、それだけではなかった。

『これは……『吸収』しているのかい？』

映像の中の私は、『右腕』のあちこちに差し込まれていた手術器具や、チューブなんかをまるで『食べる』ようにして、取り込んでいったのだから。

「せ、先生、なんですか、これ……」

「……当時は、僕にも原因がわからなかったんだがね？　君が完全に回復したあと、色々な検査をして解ったよ」

そう言って、先生は、映像の中の私の右手、『何か』を握り締めている部分を拡大した。

「ここをよく見てほしい……君は当時、『金属製の球体』を握り締めて運び込まれていた。映像を解析したところ、この不可思議な再生現象は、この金属球を中心として起こっているとわかったんだね？」

「……あ！」

それで、私は思い出した。学園都市に来る時に握り締めていた『お守り』を。

「そして映像の中でもわかるとおり、この金属球は再生と同時に強烈で不可解な振動を起こしていた……その振動を解析し、音声ファイルに変換してみたのが、コレだ」

そう言って流されるのは、一つの音声ファイル。

『……ガガ……ピー…我…は……≪ＡＲＭＳ（アームズ）≫……ピピ……我……が名、は……≪バンダー、スナッチ≫……』

それは、明らかに私が耳にした声と同一のものだった。

「恐らく、君の右腕を治したあの金属球は、何らかの『意志』を持って

いる……それが、今日に至る僕の結論だ」
　私は、自分の右腕を見つめた……そして恐怖していた……何か得体の知れないものが、近くにいるように感じたから。
「さて、ここからが僕の本題なんだがね？」
「……え？」
　視線を上げた先にあったのは、あの日からこれまでずっと見守ってくれていた、『お医者さん』の真剣な顔。
「もしも、君が、今右腕に巣食っている『謎の金属球』を、今すぐにでも取り出したいというのなら、僕は全力を尽くそう。必要ならば完全に生身と変わらない義手だろうと、細胞を培養して作る『第二の腕』だろうと、作ってみせよう。そのために僕は君を治療し続けてきたんだからね？」
「あ……それじゃあ、私の身体測定（システムスキャン）の時に、いつも先生が来てたのって……」
「治療の経過を診るのも、医者の仕事だよ？」
　……そっか。見守ってて、くれてたんだ。
「あの時には出来なかったが、今ならば沢山の選択肢も取れる。君を完治させることが僕の仕事だからね？」
「先生……」
　私は、目頭が熱くなるのを感じた。
「君も、すぐには決められないだろう？　なにせ腕一本のことだ。今日のところは帰って、じっくり考えて、結論が出たら連絡が欲しいんだね？」
「はいッ!!」
◇　◇　◇
　佐天が去った後の、診察室。ライトの消されたそこで、備え付けの電話機の電飾だけが光っていた。
「――ひさしぶりだね？」
『おや、私だと解っていたのかい？』
　受話器から聞こえてきたのは男だか女だかわからない声。だがその声を当たり前のもののように、部屋の主は続ける。

「悪いけど、用件だけ済ませてもらうんだね？　彼女には、『手出し禁止』だ。どうせ君からすれば、『目的』に必ず必要というわけでもないんだろう？」

『――おやおや、随分ご執心だな。一人の患者にそこまで入れ込むとは、珍しい』

その言葉に、部屋の空気が僅かにきしんだようにも感じた。

「……僕はね、彼女を『治療中』なんだよ。情けない話さ。患者を必ず救うと決めてきた僕が、6年経っても彼女を完治させられないんだから」

『……』

その言葉に対する返答は、沈黙。それはそうだろう。電話の人物、彼もまた、このカエル顔の医者に救われた一人なのだから。

「アレイスター、僕は『医者』だ。そこに患者がいるなら、必ず救う。それは君もわかっているだろう？」

言外に、『彼女を救うのを邪魔するな』…そう言っているのだった。

『……いいだろう。彼女が自分から踏み入れない限り、私が彼女を巻き込むことはしないと誓おう』

「……流石に、彼女の意志までは変えられないからね？　それで、いいよ」

そこで会話は終わり、一人の『医者』の診察室は暗闇へと包まれた……。

◇　◇　◇

『――……ふふ、全く君は、少し甘いな。この街の『闇』を、甘く見すぎだ』

ある窓の一切ない不可思議なビルの中、巨大なフラスコに逆さまに浸かった男か女か、老人か青年かもわからぬ者は、一人呟く。その人物の前には街の何ヶ所かを写した、映像が展開されている。そして、その人物は、その一つを拡大し、笑みを深くする。

『ましてや、この世界の――――≪魔術≫という名の『闇』も、ね』

その映像に映っていたのは、一人の少女。路地裏から顔だけを出し、周りを窺う少女。日本では珍しい銀髪の髪と西洋人特有の白い肌を、純白に金の縁取りのある修道服に包んだ少女。

≪禁書目録（インデックス）≫と呼ばれる少女だった。

００４　友達―フレンド―

「――――ふへえええええ、疲れた～～」

学園都市の一角、風紀委員（ジャッジメント）第１７７支部。そこに設えられたテーブルの上で、私、佐天涙子はだらーっと突っ伏していた。

「……仕方ないですよ、佐天さん。あんなに沢山怪我人が出てしまった以上、風紀委員（ジャッジメント）も警備員（アンチスキル）もちゃんと調べないわけにもいかないんですから」

今日、私がここにいるのは他でもない。先日の事件に関して風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）の両方から事情聴取を受けるためだ。この場所で受けていたのは、誘拐されかけたもう一人の当事者、初春がここの所属であるためだ。

「……うん。誘拐されかけたことはともかく、流石に怪我させちゃったのは、ね。でも、そこまで重い怪我じゃなくて良かったよ」

それは、本当に幸いだった。ちなみに被害者のスキルアウト達だが、所持品から薬物の類が見つかり、退院後すぐに警備員（アンチスキル）の監視下に置かれるそうだ。私の方は、『能力の暴走』によるものとして事件性は薄いとされ、風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）両方からの各二時間のお説教のみとなった。

「それにしても――――『武器変化（ＡＲＭＳ）』、でしたっけ？　佐天さんの、新しい能力。完全な新種の能力なんて、珍しいですね」

「そんなにいいもんじゃないよー？　まだ一度しか発動してないし、その一度も完全な『暴走』だったし」

あの後、カエル顔の先生との話し合いで、私の『右腕』に関しては、『肉体変化（メタモルフォーゼ）』の一種として、書庫（バンク）に登録することになった。とはいえ、分からないことの方が多い上、事情聴取のときに、確認のため発動を求められたけど、どういうわけかあれから全く以って反応が無い。

先生もその確認に立ち会ってくれて、「まあ、当分は無能力者（レベル０）のままなんだね？」なんて言われた。……ふえーん。

「……あー、えーと。さ、佐天さん！　そんなところで落ち込んでないで、気晴らし行きましょう、気晴らし!!」

「……きばらしー？」

テーブルの上にたれながら、首だけを初春の方に向けてみた。

◇　◇　◇

「――――常盤台のオジョウサマ、ねー」

話を聞いてみると、初春はこれから、『親友』の風紀委員（ジャッジメント）が、学園都市でも有数のお嬢様学校、『常盤台中学校』の生徒だということで、そのルームメイトに会いに行くのだとか。しかもその相手は、なんと学園都市でも７人しかいないトップクラス、超能力者（レベル５）の第三位、『超電磁砲（レールガン）』の御坂美琴本人だと言う事で、テンション上がりっ放しらしい。

「そうなんですよ、そうなんですよ！　憧れますよね、佐天さん！」

「……あー、えー、ウン、ソウダネー」

正直なところ、私はあんまり興味が無い。私の能力なんて、『レベルが上がれば、ＵＶカットしなくて済むな～！』程度に思っていただけで、まさかあんなおっかない能力の副産物だったなんて夢にも思わなかった。だから先日の出来事以来、超能力者（レベル５）になることにも、あまり積極的ではなかったりする。

「でもさ、お嬢様学校の娘って、話しかけ辛くない？　なんか、肩こりそうなんだけど？」

お嬢様学校の生徒というのも、問題だ。正直そっちの友達がいるわけじゃないけど、どこかお高くとまってそうな印象なのよねえ……。

「大丈夫ですよ。白井さんも常盤台ですけど、すごく話しかけやすい人ですから」

「へ～。ちなみに普段はどんななの？」

「え？　そうですねー……っ？！」

「？　初春？」

話の途中で、初春が硬直した。??なんか、正面を向いたまま硬直してる？私が何気なくそっちに視線を向けてみると、

ファミレスの中で、物凄く蕩けきった顔で、同性に抱きつく常盤台の生徒がいた。

「……は？」

たっぷり十秒ほど硬直して、出せたのはそんな間抜けな声一つ。

だってしょうがないじゃない。抱きついてる娘、もんのすごいイイ顔で、よだれまで垂らして抱きついてるんだもん。

「……ねえ、初春。まさかとは思うけど……」

「……アレが、私の『知り合い』ですね……」

何気に初春の中でのランクが、『親友』から『知り合い』に引き下げられていた……。

◇　◇　◇

「オホホホホ、申し遅れましたわ。わたくし、風紀委員（ジャッジメント）第１７７支部で初春の同期になります、白井黒子と申します」

……いや、白井さん？そんな白々しい挨拶されても、さっきの光景はなかったことにできませんからね？乙女にあるまじき「グエヘヘヘ」とかいう笑いも見ちゃいましたし。まんまエロオヤジでしたし。

「まったく、黒子は！　……ゴメンね、待たせちゃって。私は御坂美琴。黒子の先輩で、ルームメイトよ」

おおう。こちらは、さっきと打って変わって大人の対応。『待たせちゃった』と言うが、そりゃ待ちましたよ。主に白井さんへの電撃折檻（おしおき）が終わるまで。ちなみに白井さんは、まだあちこち焦げてる。

「わ、私！　白井さんと同じ支部で柵川中学一年の、初春飾利です！よろしくお願いします！」

「あー……初春のクラスメートの佐天涙子です。よろしくお願いしまーす……」

正直さっきまでの、超能力者（レベル５）への気後れだとか、お嬢様への敬遠だとかは、もうないんだけど、今度は違う意味で、あんまり近付きたくなかった。だって、白井さんの行動からその後の妙に手馴れた電撃折檻（おしおき）まで、ファミレスのほかのお客さんに見られてるんですよ!?そのせいで、ファミレス追い出されてるし!!

「さて！　それじゃとりあえず――」

お？他のところに移動するのかな？お嬢様のいきつけって、一体どんな――――

「ゲーセン行こっか!!」

「へ？」

私達二人の間抜けな声と、白井さんのため息がシンクロした。

◇　◇　◇

そこからは、まあお嬢様の『お』の字も出てこない、極フツーの、一般的な学生の遊びだった。ゲーセンでゲームに興じ、帰りに買い食い。まあ、オマケのゲコ太が貰えなかった事で突っ伏す姿勢とかは、少し幼い感じもしたけど。

「……なんかさー、初春ー」

「はい？」

「全然、お嬢様じゃなくない？」

「……」

初春、そこで黙っちゃダメ！

「で、でも良かったじゃないですか！　思ってたよりずっと親しみやすい人で！」

「あー、まあ、そりゃねえ……」

まあ、親しみやすくはある。あるんだけど……

「さあ、お姉さま～。　わたくしのクレープ、一口味見を☆　わたくしはその後で、美味しくじっくりねっぷりと頂きますわー♪　グヘヘヘヘ……」

……白井さんには、ついていけないなー。

「――あれ？」

「ん、どうかした？　初春」

クレープを美味しく頂いていると、初春が明後日の方向を向いた。

なになに？

「いえ、あの向かいの銀行、どうして昼間なのに、シャッターが閉まってるのかなって――――」

初春の言葉は、途中で巻き起こった爆発音に遮られた。え!?一体何!?

「初春！　風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）に連絡を！　その後は、付近の市民の避難ですわ！」

混乱していた私の横を、真面目な顔をした白井さんがすり抜けた。さっきまでとまるで別人……。御坂さんも一緒に駆け出そうとしたみたいだけど、それは白井さんに止められた。

「くっ……」

「御坂さん！　私達は風紀委員（ジャッジメント）じゃないですけど、周りの人の避難だけでも手伝いましょう！　その方が初春たちだって助かりますよ!!」

「佐天さん……そうね！　手分けしてやりましょう！」

そうして私達は、それぞれ周りの野次馬を掻き分けに行った。

風紀委員（ジャッジメント）でも警備員（アンチスキル）でもない私達の言う事を聞かない人もいたけれど、それでも何とか人を下がらせていた時、目の前に大きな影が落ちた。

「――へ？　駆動鎧（パワードスーツ）？　警備員（アンチスキル）が到着したの？」

そんな疑問の声に、目の前の駆動鎧（パワードスーツ）は何故か答えず、黙って此方に手を伸ばしてきた。

「ちょ、ちょっと?!　きゃあああああ!!」

気がつくと、私は駆動鎧（パワードスーツ）に掴まれ、宙吊りにされていた。

「?!」

「佐天さん！」

「な!?」

初春や御坂さんたちの声が響くけど、正直それどころじゃない。コイツ、何て力で締め付けてんのよ！

「……は、ははははは！　どうやら形勢逆転だな、風紀委員（ジャッジメント）!!　予め逃亡用に、仲間が銀行警備用に配備されてた駆動鎧（パワードスーツ）を奪う計画だったのさ！　こんな風に役に立つとは思わなかったぜ!!」

地面に押さえつけられて、拘束されていた男がそんなことを叫んでいた。これじゃ、皆やられちゃう。私のせいで皆が！

そう考えた時、ふと、駆動鎧（パワードスーツ）のもう片方の手を見た。そこにいたのは……

「ふえっ、ふえっ……お姉ちゃん、いたいよお、こわいよお……」

駆動鎧（パワードスーツ）に掴まれながら、しゃくりあげる男の子の姿が。

瞬間的に、視界が真っ赤に染まった。辺り一面赤かった、あの日のように。

――力が、欲しいか？

（ええ、今私は……）

だから、また声に応える。

（力が、欲しい！）

――力が欲しいなら、くれてやる！

次の瞬間、辺り一面に響き渡る轟音。周りに雨のように降り注ぐ金属片。その光景の中心で、私は……

「子供を盾に逃げようとするなんて……許せるわけないじゃない！」

気絶した子供を左腕、引き裂いた駆動鎧（パワードスーツ）の腕を『右腕』に抱え、叫んでいた。

００５　雷姫―レールガン―

ＳＩＤＥ：美琴

「何よ、アレ……」

ルームメイトの黒子の紹介で会った、二人の女生徒。巻き込まれた銀行強盗事件の中で、私はそのうちの一人の能力に眼を剥いた。

（『肉体変化（メタモルフォーゼ）』？　腕だけ形を変える能力なんて、聞いたことないわよ!?）

視線の先で、駆動鎧（パワードスーツ）の右腕を握りつぶした彼女の能力は、あまりにも異質だ。その腕には幾何学的な紋様が浮かび上がり、人の肌とは程遠い純白の色へと変貌している。

そんな彼女は、近くの地面にそっと気絶した少年を横たえ、すっと腕を持ち上げると……

（攻撃？　あんな離れた位置からいったいどんな――）

後ろの柵に、右腕を打ち付けた。

「……はい？」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「あ～～、も～～！　言うこと聞いてよ、ちょっと!!」

今現在、私は右腕を柵だの地面だの振り下ろし続けている。言ってると馬鹿みたいだが、原因はこの右腕。発動したはいいが、全く言うことを聞いてくれない。今も勝手に動き回り、周り中しっちゃかめっちゃかに攻撃してるし！……しかも。

「ちょ、ちょっと?!　きゃあああ!?」

右腕が突如近くの柵の支柱を掴み、私の全身をそっちへ引き寄せた。……どうやらこの右腕、私の全身の筋力より強いみたい。

『――へ、へへ。何だよ、見たことない能力に警戒してたが、マトモに使うことも出来ねえんじゃねえか』

そんな声が、駆動鎧（パワードスーツ）のスピーカーから漏れた。うっさいわね、私

だってこんな言うこと聞かない能力、出来れば使いたくなかったわよ！

「オイ、何やってんだ！　早いとこ人質もっかい奪って、逃げる準備だ！」

『へーい、了ー解』

『オイオイ、何腕もぎ取られてんだよ？』

『全くだな。これじゃ逃げるのに邪魔じゃねえ？』

さらに路地から二体の駆動鎧（パワードスーツ）!?こいつらも強盗の仲間?!

『へっ。問題ねえさ。ガキ一人人質にとるだけだ。腕が一本残ってりゃあ十分さ』

そう言って、最初の駆動鎧（パワードスーツ）が、気絶したままの男の子にゆっくりと歩み寄る。残りの二体は発火能力者（パイロキネシスト）を取り押さえた白井さんと、近くで電撃を発生させていた御坂さんに向かっていく。……これじゃ、また。

「――っ、お願い！」

気づくと、私は自分の右腕に話しかけていた。他人から見られるとバカみたいに見えるかもしれない。けど、先生に見せてもらったあの映像の中で、あの金属球は、私のことを治してくれた。そして、何かの意思を持ってるみたいだった。だから！

「お願い！　勝手なことだけど、私の話を聞いて。何年も一緒にいたのに、今更、って思うかもしれないけど、私の身勝手につき合わせることになるけど……でも、聞いてほしい！」

そうして話す間も駆動鎧（パワードスーツ）の手は、ゆっくりと子供の方へと伸びていく。……だめ、だよ。

「私は……あの子を助けたい。もうあの時みたいに……あの日の私みたいに、見ず知らずの誰かに傷つけられる、誰かを見たくない」

――だから。だから！

「私に――――力を貸してぇえええええええぇえっ!!」

その途端――右腕の暴走は、ウソのように治まった。代わりに周り

中に響き渡るほど、高音の振動を響かせる右腕が。力が、わいてくる？これなら、これならいける！

抱え込んでいた右腕から左手を離し、私は体を思い切りひねった。正直殴り方なんか、わからない。だから、分かってるやり方で！

「でえいっ！」

大きく後ろに振りかぶった右腕の横っ腹を、思い切り相手に打ち付ける。イメージは、野球のスイング。バッティングセンターに通ってよかったわよ！

『がっ!?　こンのアマアッ！』

一度は吹っ飛んだ片腕がない駆動鎧（パワードスーツ）が、向かってくる。だけど、大丈夫。この右腕と一緒なら！

「こん、のぉーーーッ!!」

テレビで見たボクシングのパンチをイメージして、私は右腕を振りぬいた。拳の先で駆動鎧（パワードスーツ）の装甲が砕け散る感触。――だけど。

「って、とと?!　わきゃあ!?」

拳から伝わった衝撃で、こっちまで吹き飛ばされてしまった。後転を何度かした後、柵に背中をぶつけてようやく止まる。～～～っ、いったぁ～～～。

「あたたた……でも、これで」

そう呟いて視線を上げると、そこには装甲こそ砕けたものの、起き上がろうとする姿があった。何、まだやる気?!

――そう、思っていたのだが、すぐにその駆動鎧（パワードスーツ）は、横から飛んできた二体のお仲間の下に潰されることになった。……なに、これ？

「――黒子ー、コイツラ相手にするのは、私の個人的なケンカだから」

その台詞とともに、横合いからすごくバチバチいってる御坂さんの姿が。え、なに？いったい何!?

「お、お姉様？　どうか、落ち着いて下さいまし」
「……落ち着けるわけないでしょ」
何とか白井さんが諫めようとしているみたいだったが、私はその後ろの光景も気になった。アスファルトから白煙が上がって、溶け出すって、どんだけ!?
「――――子供人質にとったこともそうだけど……コイツラは私の『友達』まで人質に取った！　そんなことされて――」
そう言って彼女はコインを一度指で弾き――
「――――許せるわけないでしょうが!!」
落ちてきたコインを、目にも止まらない速さで撃ち出した！一本の光の線になったコインは積み重なった駆動鎧（パワードスーツ）三体を空中へ跳ね上げ、爆風が吹き抜けた。
「超電磁砲（レールガン）――――」
彼女の誇る、学園都市七人の超能力者（レベル5）の通り名。私は、その意味を、このとき初めて理解したんだ。
◇　◇　◇
「――ホントに、ほんとに、佐天さんは！」
「あ、いや、本当にスイマセン……」
私は今、道路の上で正座させられている。アスファルトである。屋外である。そんなことおかまいなしに、私は先程から三十分以上初春のお説教を聞かされている。あ～う～、段々足に感覚が～。
「聞いてますか、佐天さん！」
「ア、ハイ。キイテルヨ、ウン」
ちなみに、私と一緒に暴れた御坂さんは、一応は白井さんから注意はうけたものの、こういうことがしょっちゅうあるのか、数分で注意が終わった。理不尽すぎない?!
「ちゃんと、聞いて下さい、佐天さん!!」
「は～～い～～～」
結局私が解放されたのはそれからさらに一時間も後のことで、しか

もしばらく足の痺れで悶えることになった……。

ＳＩＤＥ：???

「――ふふふ、ようやくの覚醒、といったところかな？」

強盗が行われた通りを、一望できるビルの屋上。そこにあまりにも不釣り合いな少年が佇んでいた。その少年は、まるで当たり前のように、十歳前後の幼い外見には合わない、灰色のスーツを着こなしていた。年齢こそ不釣り合いだが、その落ち着きは、何年もそうした服装を着慣れていることを示す風格を漂わせていた。欧米人特有の白い肌と、染めてもいない天然のブロンドは落ち着いた色のスーツによく似合っていた。肩まで届く長い髪を頭の後ろで縛っており、それを風になびかせながら、彼は眼下の光景を楽しむ。

「……そんなに、あの少女が気になるのか？」

少年に声をかけたのは、これまた異質な少年。金髪にサングラスにアロハシャツと、見た目はどこぞのチンピラのような少年だった。

「ああ、気になるね。彼女は、僕の長年の≪プログラム≫には不可欠な人材だ――なんだい、土御門？　それとも彼女を殺して僕の≪プログラム≫を邪魔でもするのかい？」

その言葉に対する、サングラスの少年の反応は、舌打ち一つ。

「アレイスターが直々に認定した『客人（ゲスト）』を邪魔したりはしないさ……もっともアレイスター（ヤツ）から許可さえ下りれば、そのときは、オレの『もう一つの名前』をアンタに『直接』教えることになるぜ」

「ふふ、期待しているよ、『背中刺す刃』。――だがまあ、君もしばらくは彼女について注目しておくといい。これは学園都市での生活と、『実験施設』を世話してくれた『友人』への忠告だ」

その言葉にサングラスの彼もまた、眼下へと視線を移す。そこにはいまだ、頭に花を大量につけた少女に説教される少女の姿。

「……そんなに重要なのか？」

「――ああ。ことによると、これから先、世界で最も重要な人物だよ。世界は果たして、滅びるべきかどうか。すべてを決めるのは、彼女だ」

その言葉に、サングラスの少年は戦慄する。目の前にいるのは、ただすべてを睥睨する、少年の皮をかぶったナニカ。

「――……ふふ、次は魔術、か。この世界は、つくづく面白い」

そう呟き、見つめるのは端末の小さな液晶画面。そこに映し出されていた画面には、『学園都市伝説収集所』というサイトの文字が躍っていた……。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

００６　禁書―インデックス―

「厄払いが、必要だと思います！」
「「……はい？」」
　いつものファミレスで、対面に座った御坂さんと、いまだ風邪気味の初春に向かって叫んだら、疑問符を浮かべられた。ノリ悪いな～、もう！
「最近、おかしいじゃないですか！　銀行強盗にあったり、脱げ女に遭遇したり！」
「この間は、マユ毛まで大惨事になりましたからねえ……」
「それは、もういいの、初春！　というか、忘れたいんだから、思い出させないで!!」
「あはは……」
　自分の中では、あの事件が一番ショッキングだったんだよ!?油性だから、しばらく落ちなかったし！
「んー、でもさ、厄払いっていっても、何するの？　学園都市に神社なんか無いわよ？」
「そこは問題ないですよ、御坂さん！」
　そう言って、初春に頼んで探してもらっていた画面を見せる。なんと、そこに映し出されていたのは！

「「『学園都市伝説収集所』……『ラッキーアイテム特集』？」」

「そう！　このサイトに載っているアイテムを片っ端から集めれば、厄なんか消滅！　代わりに幸運が舞い降りるってわけですよ！」
　まさに、完璧な計画！――って、何で二人とも、無茶苦茶冷めた目つきで私を見ているの？
「……要は、いつもみたいにブラブラするついでに、このアイテムを探そうと」
「あ、あはははは……はぁ～」
　え、なに？何で二人して、そんなに溜息までついてるの？

「……まー、いいか。今日は黒子も風紀委員（ジャッジメント）の当番でいないし、一日佐天さんに付き合うわよ」
「そうですね。それで何から探します？」
……み、御坂さ～ん、初春～。いい友達を持ったよ、私は！
「うん、そうだね。まずは！」
『私限定』のラッキーアイテムから！
「『初春のパンツ』から！」
「へ――――わきゃあ?!」
スカートをまくって顔を突っ込み、中身を確認！お、今日はピンク色か～。
「さあ！　気合も入ったし、行こうか!!」
「そんなことで気合入れないでください！」
◇　◇　◇
それから私たちは、学園都市の中をあっちにブラブラ、こっちにフラフラ。艱難辛苦を乗り越えて、見事！５つのラッキーアイテムをゲット！
「いや～、結構集まりましたねー」
「……はあ、そうですね。本当に、集めるの大変でしたけどね」
「え、そう？　結構楽しかったじゃない♪」
疲れ切ったような初春に対して、御坂さんは上機嫌。その理由は、その手の中にあるモノが原因。
「幻の『お医者さんゲコ太』のストラップ……！　まさかゲットできる日が来るなんて……！」
そう、御坂さんに渡したストラップがその理由。実は、ゲコ太というあのキャラクターのうち、『居眠りゲコ太』という、両目を閉じて鼻提灯まで出したラッキーアイテムが存在するらしいのだ。以前に出たという路地裏の商店の前にあるガチャガチャをやってみたんだけど、出たのはアレだけでしかも最後の一つ。お目当てのラッキーアイテムでもなかったので、御坂さんにあげたのだ。
「でも、あっちこっち行って大変でしたね」
「あー、まあね。河原で『七つ葉クローバー』を探すのは、さすがにし

んどかったねー」
「その前に、佐天さんが『一つだけ逆回転している風車』を探そうとか言い出したときは、どうしようかと思ったわよ」
　えー、面白いじゃないですか。他にも『謎の文字が書かれた紙』とか、『根性が入るハチマキ』とか、『謎の黒曜石のナイフ』とか……見つからなかったけど、面白そうなものたくさんあるのに！
「まー、でもさすがにそろそろお開きですかねー。後のラッキーアイテムは、アイテムというかパーソンみたいですし」
「ん？　それって出会えたら幸運とか、そういう人のこと？」
「そうみたいですよ？　えーと、『眼鏡をかけた半透明の謎の制服少女』とか、この間の『怪奇・脱げ女』さんも載ってますね」
「……脱げ女は、ラッキーにはならなかったなあ、私」
「いやー御坂さん？　脱げ女で幸福になるのは、主に男子だけなんじゃないかなー。あはは……」
「あとは、これですね。『最高のラッキーパーソン、幸運の白いシスター！』なんでも、『学園都市にまるで高級ティーカップのような真っ白い修道女（シスター）が現れる。その娘にご飯を奢ってあげると、幸運になれる！』だそうです」
「いやー、流石にそんなのはいないんじゃない？　この学園都市じゃ宗教関係者見つけるのも難しいし、ましてや白いシスターなんて――」
　そんな馬鹿話をしながら歩いていると、不意に通りに面した路地から、何かを引きずるような音が聞こえた。
「「……ん？」」
　思わず三人とも足を止めて、その路地に注目した。すると、
「う……うう……」
　路地からは、綺麗な白地の布に、金の糸で刺繍を施した修道服の少女が現れ、バッタリと地面に横たわった。
「ちょ、ちょっと!?」

「行き倒れ？　病気？　と、とにかく初春、病院に連絡を！」
「は、はい！　て、あれ？　この娘の格好……」
慌てて駆け寄った私達に向かって、目を開けた女の子が口を開いた。
「お――――」

『お』？

あ、そういえば私、外国語得意じゃないよ!?この娘見た感じ外国人ぽいし、分からない言葉だったらどうしたら――

「――おなか減った」

「「……はい？」」

◇　◇　◇

「（パクパクモグモグムグムシャムシャツルツルゴクゴク）美味しい！　これが日本の、ファミレス！　一般大衆向けの食事処でも、これほどの味だなんて、さすが食にこだわる日本なんだよ！」
「あー、そう。良かったねー……」
まあそこまで高級でもなんでもない、ごく普通のファミレスの味なんだけど……なんなの、この娘（コ）?さっきから信じられない速さで、ものすごい量の食事が消えていくんだけど?
「私、カレーライスが『飲み物』だったなんて知らなかったわー……」
「食べないで、ゴクゴク音をたてて『飲んで』ましたからねー……」
横にいる二人は、既に現実逃避気味。本当に何なんだろう、この娘（コ）。
「ぷはー！　美味しかったー！　ようやく、人心地ついたんだよ。ありがとね、えーと……」
「ああ、そういえばまだ名乗ってなかったっけ。私は佐天涙子。で、こっちは――」
「あ、初春飾利といいます。佐天さんと同じ柵川中学の一年です」
「……御坂美琴よ。それで、そっちは？」
その言葉に、少しだけ居住まいを正した彼女は、こう告げた。

「私はね、禁書目録（インデックス）っていうんだよ」

それが、彼女との出会いだった。

◇　◇　◇

ＳＩＤＥ：？　？　？

「――やれやれ、どうするかな」

ファミレスを見下ろす、高層ビルの屋上。そこに一組の男女が佇んでいた。男の方は黒服に赤い髪、目の下にはバーコードの刺青を入れ、くわえ煙草という、出来れば近づきたくないような風貌だった。女性の方は、その女性らしい肉体をシンプルな白のシャツとジーンズに包んでいたが、シャツは片方で結ばれ腰回りを涼しくし、ジーンズは片方を大胆にカットし太腿が出ているという、何ともその肢体を際立たせるような着衣だった。

そんな二人の後ろに、新たな人影が現れる。

「――確認したぜい。どうやら学園都市の情報掲示板に、彼女のことが載ったみたいでな。彼女に食事を奢ると、幸運になれるんだそうだ」

「……成程。つまり彼女らは、何らかの意図があって近づいたわけではないというわけですね」

「そういうことだ。で、どうする？」

その言葉に赤髪の男は、ふうっと煙を一筋吐く。

「一般人を巻き込むわけにいかないだろう。離れるのを待ってから、襲撃を仕掛けるさ」

「その通りです」

「あー、まあそうだよなあ……」

その返答に、新たに現れた男――アロハシャツを着た土御門と呼ばれる少年は、歯切れ悪く答えた。

「？　どうした？」

「実は、学園都市の……『命令』ではなく、『要請』でな。もし襲撃をかけるんなら、あそこにいる髪の長い、『佐天涙子という少女も襲って

ほしい』だそうだ」
「……なに？」
その言葉に、一度視線を眼下に移す。そこにいるのは、何の変哲もない一人の少女。それをわざわざ襲えとは、どういう要請なのだ？
「何の意図があって、そんな要請を……？」
「分からん。どのみちこれは強制的な命令でもないし、ただの要請だと言っていた」
「……フン。くだらないな。僕らは学園都市（このまち）の所属でもない。そんな要請を聞く道理はないね」
そう言って踵を返す赤髪の男と女性。後には土御門だけが残され、その視線は眼下の一人の少女に向けられていた。
「あの要請も不可解だが……何より不可解なのは、あの能力。あれは本当に能力なのか……？」
その問いに、答えはいまだ得られないままだった。
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
◇　◇　◇
「本当に、大丈夫ー？」
あの後、インデックスに奢った食事代をみんなでワリカンし、学園都市の地理がよくわかっていない彼女にいろいろ教えてあげた。何でも、学園都市内にあるどこだかの教会に行く途中だったとか。ミッション系の学校の、留学生とかなのかな？
「大丈夫なんだよ！　るいこに教わった道順は、全部覚えたから！」
ついて行ってあげようかという私たちの問いは、すげなく断られた。こうも自信満々に答えられちゃねえ……？
「う～ん。じゃあ、私のケータイの番号教えてあげる！　何か困ったことあったら、かけてきなよ！」
「そうだね。私も渡しとくか」
「あ、それなら私も。一緒に風紀委員（ジャッジメント）の番号も書いておきますから、困ったらかけてきてください」
そうして計四つの番号を記したメモを渡して、インデックスとは別れることになった。

「じゃーね、るいこ、みこと、かざり！　また一緒にご飯食べるんだよー！」
「……そんときは、自分の食事代は自分持ちでねー」
「「うんうん」」
　そうして、インデックスは夕暮れの沈む方向に向かって、元気よく走っていき――――やがて、見えなくなった。
　ＳＩＤＥ：黒子
　ここは、風紀委員（ジャッジメント）第１７７支部。今日は当番の私と固法先輩の二人だけ。その先輩も、先程ゴミ箱で謎の爆発があったとのことで状況の確認に行っています。つまり私一人だけで、お留守番ですの。
「はぁ～。こんなことなら、当番を初春にでも押し付けて、私がお姉様と遊びに行きたかったですわ」
　そうして帰りには、お姉様との一晩のアバンチュールを……ぐへへ。そんなことを考えながら、食事代わりのシュークリームにかぶりつきます。すると、勢いよくドアが開きました。
「大変よ！　白井さん！」
「ムグッ?!」
　部屋に飛び込んで来たのは、風紀委員（ジャッジメント）の先輩で、この第１７７支部の取りまとめ役でもある、固法先輩。危うくシュークリームをのどに詰まらせるところでしたわ。
「ゲホッ、ケホッ……ど、どうしましたの、固法先輩。本日は例のゴミ箱で起きた謎の爆発の件で、警備員（アンチスキル）との打ち合わせのはずでは？」
「その打ち合わせ中、第二の『事件』が発生したわ！　その上調査の結果、現場では重力子の加速が検出された！　これは明らかに、能力による連続爆破事件よ!!」
「!?」
　それを聞いて席から思わず立ち上がる。能力者による、連続爆破。もしも無差別だとしたら、大変なことですわ。街全体にパニックが巻き起こる可能性だってある。
「わかりましたわ！　非番の初春も緊急招集。すぐに現場近辺の監視カメラの映像を洗わせます。私も、これから近辺に聞き込みに参りま

すわ！」
「お願いね。警備員（アンチスキル）では緊急対策会議を設置して、事件にあたるそうよ。私は入ってきた警備員（アンチスキル）側の情報の整理と、犯人像の絞り込みに入るわ」
「お任せくださいな。――それで、事件名は、何と言いますの？」
その言葉に固法先輩は、手に持っていた手帳を一瞥し、その事件名を告げました。
「――――『連続虚空爆破（グラビトン）』事件よ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

００７　鬱屈―グラビトン―

「――『連続虚空爆破（グラビトン）』事件、かぁ……」

ここは、御坂さんがよく寄る公園。で、目の前には彼女のケリの跡がついた自販機。今日は『ヤシの実サイダー』が出たようだった。

「そーなのよ。何でも『量子変速（シンクロトロン）』っていう、アルミを基点に重力子を加速させ、一気に放出する能力が――」

「よくわかんないけど、アルミを爆弾に変えてるってことですね！」

「すっごく、大まかに理解したわね……」

世の中、深く考えちゃ駄目ですよ！偉い人も言ってます！『考えるな、感じるんだ』って！

「まあ、とにかくそんなカンジ。それで今日も、黒子も初春さんもカンヅメってわけよ」

「んー、今度気晴らしに誘いますか――」

◇　◇　◇

「と、いうわけで、やってきました、『セブンスミスト』！」

「いきなり、何ですか、佐天さん？」

初春、細かいこと気にしちゃ駄目よ？こういうのは、テンプレなんだから！

「いいじゃん、いいじゃん！　今日は初春の気晴らし兼ねてるんだから！」

「その口調は、どこかの誰かを呼び寄せそうだからやめてください……」

なによー、そこまでテンション低くしなくてもいいじゃないのよー。そう思いながら、早速テンションを上げる行動に！

「じゃー、まず私の気晴らしから！」

「わきゃあああ!?」

今日はグリーンか～。

◇　◇　◇

「ううう、ひどいですよ……」

「アハハ、ゴメンゴメン。あ、だったらさ初春、今度からこういうの履

いてみたら？」
「へ…？　○×△□!?　そんなの履けるわけないじゃないですか！」
「え～、でもコレすごいよ？　布そのものは全体をガードしてるのに、全体がレースだからスケスケで。リボンを引くと何故か中央から開くように――」
「聞きたくありません聞きたくありません！　大体ソレを履くことが、何の解決になるっていうんですか!!」
「え？　堂々と見せられるじゃない」
「見られたくないんですよ！」
　まあ、初春が堂々と下着晒す娘だったら、私もここまでスカートめくりに興じてないけどね！
「御坂さんは、何買うんですか？」
「あ、うん。私はパジャマを――」
　その言葉が不意に止まり、視線が一つのパジャマで止まる。おおう、これは何とも――
「ね、ね、これカワ――」
「アハハ、見てよ、初春。この子供っぽいデザイン」
「小学生くらいまでは、こういうの着てましたけどね。さすがに今、これはちょっと……」
　そうだよねー。……ん？御坂さんが何か言いかけていたような……
「そ、そうよね！　さすがに中学生にもなってこれはないわよね!!」
「は？　はあ……」
　この反応……もしかして、気に入ってた？……それなら、悪いことしちゃったし、よし！
「それじゃ御坂さん、私達向こうで水着見てきますから。御坂さんは『気に入ったパジャマ』でもあれば、他のお客さんに買われないうちに買っちゃった方がいいですよ？　私達、しばらく向こう行ってますから」
「ッ!?　そ、そう？　じゃ、じゃあお言葉に甘えて、そうさせてもらうわ」

「え、あの、佐天さん？」
「さー行こうね、初春ー」
「え、え、え？」
　初春を押し出すように、その場を離れる。フフフ……よし！ドサクサに紛れて、初春に悩殺水着を買わせよう！絶対面白くなるし！
「よーし！　それじゃ初春、これなんて、どう？」
「は、はわわわわ!?　何で布が、前も後ろも紐だけなんですか?!　そんなの、どんな場面で着ていけっていうんですか!!」
「そりゃー、彼氏が出来たときよ！　あ、でもその時は、私にも報告してね？『娘が欲しければ、父親であるこのワシを倒して見せよ！』ってのやってみたいから☆」
「どんな格闘家の父親ですか！　ウチのお父さんは、ごく一般的なサラリーマンです！」
　んー、でも初春ってお父さんとかに溺愛されてそうだなー。反応が、一々可愛いし。嫁に出るときに、似たようなことは言われるんじゃ？
　なーんて、ことを考えてると、声が上がった。
「――あ、あああ、アンタがどうしてこんなトコにいんのよ!?」
「「ん？」」
　その大きな声が残してきた御坂さんのものだったので、私達二人ともがそっちを振り向く。すると、そこには御坂さんだけではなく、見覚えのない高校生くらいの男の子がいた。髪はあちこちツンツン飛び跳ねているが、目はなんか生活に疲れたように垂れ下がっており、なんか表情から『不幸』な感じがした。
「どうしたんですか、御坂さん？」
「この人、誰――あー！　そっか、御坂さんの彼氏ですね!?」
「なッ!?」
「はあ？　上条さんは、ビリビリ中学生の彼女をもった覚えはありません。圧倒的に年上派ですことよ――――って、アレ？」
　上条さんというらしいその人が、その台詞を言った途端、空気が変わった。ここは、もはや一般的な、平和な日本の街角じゃない。ここ

は――『死地』だ。
　バキンッ、というおよそ女子中学生の歯から鳴るとは思えない音とともに、空気がパキパキと音を立て、紫電をほとばしらせ――って！
「御坂さん、ストーーーップ！」
「ダ、ダメですよ、御坂さん！　ここお店の中ですよ?!」
「お、おお、お願いだから放して！　コイツだけは、コイツだけは！」
「うお!?　あぶなっ！　ふ、『不幸』だぁーーーっ！」
　飛んできた電撃をかわし、大急ぎで逃げ出しながら上条さんはそう叫んだ。今のは『自業自得』っていうんですよ！
◇　◇　◇
「――はあ、びっくりしたあ……」
「ホントです……」
「う……ごめん……でもさっきのはアイツがムカつくこと言うから……」
　まあ、非常にデリカシーに欠ける言動でしたねー。あれは、その癖鈍感で、周り中にフラグを立てて放置するタイプとみました。
　そんなとき、初春の携帯が鳴り響いた。
「あ、はい、白井さん？　どうかしたんですか？」
『大変ですわ、初春！　虚空爆破（グラビトン）事件の続報です！　たった今、衛星が新たな重力子の加速を確認しましたわ！』
「?!　分かりました！　観測地点は、どこですか！　私も急いでそちらに――」
『第七学区の≪セブンスミスト≫という洋服店ですわ！』
「！」
　その言葉に、初春の目が見開かれる。……今、このお店の名前言わなかった？
「ラッキーです！　私、今そのお店にいます！　すぐに避難誘導を行いますね！」
『何ですって?!　待ちなさい、ういは――』
　携帯を切り、初春がこちらに向き直る。その瞳は、いつものあわあわしてるときとはまるで別人。

「――『虚空爆破（グラビトン）』事件の次の標的は、この店です。お二人には申し訳ありませんが、避難誘導にご協力願えませんか？」

◇　◇　◇

それから、初春の指導のもと、店内の客の避難を行う。観測から避難までが早かったせいか、皆そんなに混乱もなく避難できている。これなら間に合いそうだ。

「何とか間に合いそうですね、御坂さん。けが人もいないみたいですし」

「そうね。でも油断しちゃだめよ？　実際前の事件では、９人の風紀委員（ジャッジメント）が重軽傷を負ったって話だから」

「――――え？」

その言葉に、私は思わず立ち止まる。９人の風紀委員（ジャッジメント）？

「それ……一度に、ですか？」

「ううん、全員別々らしいわよ？　何でも爆破の威力が派手になってきた９件の事件すべてで、風紀委員（ジャッジメント）が負傷してるって――」

「――――ッ!!」

それを聞いて、私は鳥肌が立った。殺傷性が高くなってから、必ずいる風紀委員（ジャッジメント）の負傷者、何故か私たちのいたところで起きた次の観測。まさか、犯人の狙いって――！

「ちょ、ちょっと、佐天さん!?」

そこまで気づいたところで、私は全力で店の中へと戻る。この事件の本当の標的は、風紀委員（ジャッジメント）だ。そして、今回観測地点に一番近かったのは！

「――あ！　おい、御坂！　ちょうど良かった、一緒にあの娘探してくれ！」

ビルの中で、さっきの上条さんと合流。一緒についてきていた女の子が、見つからないとのことだった。

セブンスミストの中、先程みんなで回っていた女性服売り場の階。そこまで戻ってきたところで、道の先に初春の無事な姿を見つけた。

……良かった。

だけど、初春は血相を変えて、近くの女の子の手からカエルのぬい

ぐるみを奪い取り、力の限り叫ぶ。

「逃げてください!!　アレが爆弾です!」

その言葉に三人が三人とも、全速力で初春に向かって走り寄った。最初にたどり着いた私が、女の子を抱き締めた初春を、その女の子ごと左腕を回して引き寄せる。右腕には、ARMS起動の前兆である幾何学紋様が浮かび上がる。

その斜め前に、御坂さんが滑り込み、ポケットから超電磁砲（レールガン）用のコインを取り出す。だけど、慌てていたせいか、コインを取り落し、地面に転がる。

さらにその前に、上条さんが回り込む。何をするつもりかなんて考える暇もなかった。

そして、右腕の封が解かれるよりも早く、視界が閃光で白く染まった。閃光、爆発、衝撃――――『赤い炎』。

「う…………………わぁぁぁあああああああああぁぁぁぁぁぁぁあぁ――――ッ!!!」

絶叫とともに伸ばした右腕の先。変化もしていなかったその『右腕』は、その一瞬、爆発の光よりも眩い光を放ったような気がした。

◇　◇　◇

爆発を起こしたセブンスミスト。そこからほど近い路地裏に、一人の少年が壁にもたれていた。

「ク、クフッ、ククク……いいぞ、段々強くなってきた。この力があれば、これだけの力があれば!」

力を振るう喜び。昏い興奮に身を浸す少年は、後ろから近づく影にも気づかない。

「僕を馬鹿にしたアイツらも、僕を助けなかった風紀委員（ジャッジメント）も!　僕が必要（いら）なかった世界（このまち）も、叩き潰して――――!」

「そんなことさせないわよ」

突然の声に、その男子生徒がこっちへと振り向く。そこにいるのは、右肩の半そでが千切れていたけど無傷の私と、同じく無傷の御坂さん。

「やっと見つけたわ」

「喜んでるとこ悪いけど、全員無傷よ。今回の爆発で、けが人一人いないわ」

「ッ!?　そんなバカな！　僕の最大出力だぞ?!」

自分からしゃべってくれた、か。おかげで証拠とか探さなくてすみそうだ。この会話は、携帯で初春に録音してもらってるし。

「へえ……」

「手間が省けたわね」

「……ッ、あ、いや。とんでもない爆発だったんで、その、とても――」

そう言いながら、手を不自然に後ろに回した。私にも分かるくらい不自然に。

「助からないんじゃないかってね――――――！」

再び前に回した手に握られていたのは、アルミのスプーン。だけど次の瞬間、そのスプーンの先を、最強無敵の電撃姫が消し飛ばした。

「ヒッ――――レ、『超電磁砲（レールガン）』……」

スプーンを消し飛ばした『超電磁砲（レールガン）』の衝撃で、その男子は尻餅をついたように地面に転がった。その顔は、一瞬武器を消し飛ばされた驚愕に染まり――――次の瞬間、『憎悪』に染まった。

「くそ……くそくそ！　いつも、こうだ！　オマエら強いチカラを持った奴らは、何をやっても『力』でねじ伏せる！　それでねじ伏せられる奴のことなんか、気にもしないでなぁ！」

「――なんですって？」

「そうだろ！　オマエらは『力』を振るえばそれでいいとでも思って、周りで痛い目にあってる奴のことなんか知ろうともしない！『力』のある奴らは、そんな奴ばかりだろうが!!」

……ああ、そうか。その言葉で理解できた。出来てしまった。

能力という名前の『力』で、優劣が決まる街。そんなトコロに住んで、しかもずっと無能力者（レベル0）と認定されてきた私だから理解できた。

『力』を持たない自分の、どうしようもない『劣等感』。どんなに明るく振る舞っても、心の中に少しずつ溜まっていた、澱。

だから、そいつをぶん殴ろうとしていた御坂さんの手を、『右手』で抑えこんだ。……これは、多分高位の能力者に至った人には、分からない感情だから。

――――けどね。

「何とか、言ったらどうなんだよ、この――――ブッ!?」

言葉の途中で、『左手』で思いっ切り頬を張ってやった。スナップを利かせてビンタした左手が、ジンジンと痛む。

「……正直に言うと、私は『無能力者（レベル0）』なのよ。だから、あんたの気持ちもわかる。……だけど」

気持ちは、理解できる。だけど、コイツが行ったこと自体は、理解したくない。その想いのままに、胸倉をつかむ。

「けど！　『力』にねじ伏せられる気持ちを分かってるアンタが！　おんなじことしてどうすんのよ!!」

それだけは、理解したくなかった。

「言っとくけど、私はアンタを許さない。アンタが傷付けようとした風紀委員（ジャッジメント）は私の親友で、能力もそこまで強くなくて、喧嘩だって強くない、ただのか弱い女の子だった。アンタがその娘（コ）に爆弾を届けさせようとした小さな女の子だって、何の『力』も持っていなかった。……それなのに、アンタは傷つけようとした」

だから、絶対に許せない。『力』に向き合って、『力』と戦おうとしなかったコイツだけは。

「アンタは！　『力』に呑まれた!!」

胸倉を捕まえたまま、『左手』を振りかぶる。何の能力も宿らない『左手』を。

「アンタは、自分自身に負けたんだ!!」

思い切り振りかぶった『左手』の拳を、顔面に叩き込む。そんなに鍛えてもいない私の拳は、固い顔面の骨に当たって、少し皮膚が裂けたけど、今は言いたかったことは言ったという思いが勝って、あまり気にならなかった。

「佐天さん……」

後ろからかかった声に、振り返る。私は今、いつも通り笑えてるだろうか？

「――帰りましょうか、御坂さん」

能力なんか気にしない、本物の友達のところへ。

◇　◇　◇

ＳＩＤＥ：黒子

セブンスミストの婦人服売り場。今回の爆破が起こった現場であり、初春やお姉様が巻き込まれたそこで、私は眉を顰めることになりましたわ。

（初春の話では、『虚空爆破（グラビトン）』の爆発を防いでくれたのは、お姉様だとのことでしたけど――）

たしかにお姉様ならば、爆発から初春たちを守ることも可能でしょう。そこは信頼できます。……けれど。

（――『電撃』をどう使えば、『霜が降りる』なんてことが起きますの？）

爆発の中心から、視線を向けた先。なぜか『不自然に』爆発での変色を免れた床と後ろの壁は、白い霜に覆われていましたわ……。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

００８　再会―リユニオン―

「『幻想御手（レベルアッパー）』、ですか……」

それは学園都市に広まる都市伝説。何でも、使えばその人の能力のレベルが大幅にアップするらしい。まあ能力の優劣で進路が決まったりする学園都市らしいというか。

「――書庫（バンク）に登録されたレベルと、実際の被害の規模が一致しない事件はここ最近多発していますわ。そんな噂が事実なら、確かに手掛かりにはなりますわね……」

私にその都市伝説の質問をしていた白井さんは、あごに手を当て、思考に没頭している。場所は、初春の寮。風邪で寝込んだ初春のお見舞いに来た時に、この質問をされたのだ。

「実際に手に入れた学生を特定して……善良なる一般市民としての協力を……強よ…いえお願いして……」

……聞こえない聞こえない。『強要』なんて単語は聞こえない。でも独り言の文面というか、『善良なる一般市民』を強調するところとか、全然穏便に聞こえないのは何故だろう……。

「――あ、ありました。白井さん、これじゃないですか？　『幻想御手（レベルアッパー）』を持ってるって人たち」

そう言って初春が、布団の中からノートパソコンの画面を見せてくる。さっきの白井さんの台詞はスルーなのかなぁ、この娘（コ）？

「助かりましたわ、初春！　早速確保してきます！　貴女は風邪が治るまで大人しくしているのですわよ!?」

「あ、ちょっと待ちなさいよ、黒子！　ゴメンね、佐天さん、初春さん！　また今度！」

そう言って、二人ともドタバタと部屋を出ていった。…慌ただしいなあ、二人とも。

「……はー。それじゃ私は片付けでもするね。初春はゴハン食べ終わったら薬飲んじゃいなよ。学園都市の風邪薬なんだから、効くよー？」

台所に向かう前に、パソコンを持って布団から出ていた初春の腕を布団の中に戻してやる。なんか、昔弟にもこんなことしたことあったなあ。

「――そう言えば、聞きましたよ、佐天さん。佐天さん、この間の犯人逮捕の時に、啖呵を切ったって。ダメですよー、風紀委員（ジャッジメント）でもない一般生徒が勝手なことしちゃ」

「あー、アハハ、ゴメンゴメン」

あの時は、初春が死ぬかもしれなかったと思ったら、後先考えずに犯人を追っちゃったんだよね。で、犯人の余りの言い分に怒って……。

「――『ちから』、か……」

……正直な話、あの日虚空爆破（グラビトン）事件の犯人に言った言葉は、自分が一番怖がっていることを伝えただけなんだよね。私の右腕には、この学園都市の進んだ技術力でも正体不明の『なにか』が住み着いている。だから、あの時も、今だって、その『なにか』に自分が乗っ取られるかもしれない。

だから、あれは、ただの強がり。

「……ッ」

私は左手で、右腕を抱え込むように抱きしめる。身体の震えが、少しでも収まるようにと。

……もし、もしも、私が『ちから』に呑まれたら。そして、今も近くにいる誰かを傷つけてしまったら。

それが、たまらなく、こわい。

◇　◇　◇

翌日私は風邪の治った初春を、街へと連れ出していた。

「全快、おめでとー！　初春！」

「あ、ありがとうございます、佐天さん……ここ公道ですよ……？」

なにさー、初春、テンション低いなー！あ、それともまだ風邪気味なのかな？

「いいからいいから！　全快祝いに、どっか喫茶店かファミレスでお茶してこーよ！　もちろんワリカンで！」
「奢ってはくれないんですね……」
　ハハハ、初春、無能力者（レベル0）の薄い財布にたかっちゃだめだよ？毎月、お母さんもビックリ！の『やり繰り』と言う名の錬金術で凌いでるんだからね！
「んー、どっかいいお・み・せ・は――――ん？　あれって白井さんと御坂さんじゃない？」
「へ？　あ、あのファミレスの中ですか？　確かにそうですね」
　相席してるのは、何か顔色悪い、研究者さん？まー、いっか！
◇　◇　◇
「何で重要そうな話をしているところに平気で割り込むんですか……」
「まーまー、気にしない！　あ、私、この新作の『ベリー山盛りパフェ』で！」
　話聞いたら例の『幻想御手（レベルアッパー）』絡みだって言うし、一応噂を教えた張本人としては気になるじゃない？
「で、白井さん。『幻想御手（レベルアッパー）』ってやっぱりホントにあったんですか？
　研究者さんまで引っ張り出すってことは、それなりに確証があるみたいですけど」
「木山先生は別件で知り合ったので、ご相談したまでですの。未だ確証は得られておりませんわ」
「私もいち研究者としては興味があるが、さすがに現物がないと、なんとも言えなくてね」
　まあ、そんな簡単に分かったら都市伝説にならないしね。
「昨日、ソレを使ったって奴らには出会ったわよ？　どいつもこいつもレベル2位の歯ごたえないのばかりだったけど」
「お姉様！　何シレッと捜査情報を一般生徒に漏らしてますの！」
「あはは…白井さん、今更じゃないですか？　御坂さんだって一般生徒ですし……」
　そーいえば、そうだよね。後で問題にならないのかな？

「と、とにかく！　現時点での目標は、『幻想御手（レベルアッパー）』の現物の確保と、その使用者の保護ですわ！　佐天さんもどこかでそれにつながる情報など知りましたら逐一教えてくださいまし！」
「はあ……まあいいですけど」
……んー、でももしかしたら、私が使えばＡＲＭＳとは違う『私本来の能力』が分かったりするのかな？
◇　◇　◇
その後、『幻想御手（レベルアッパー）』の現物が見つかったら白井さんに知らせ、木山先生に解析を頼む方向で話が決まり、解散となった。……話の途中で、店内で走り回って遊んでいた子供が、木山先生のストッキングにジュースをこぼし、いきなり木山先生が白昼堂々ストリップ始めたときはどうしようかと思ったわよ。
「今日は楽しかったよ。教師をしていた頃を、思い出して懐かしかった」
「木山先生は、教鞭をとっていたことがおありですの？」
「……昔、ね」
この先生、物憂げな表情とか、眠そうなクマの多い目元とか直せば、かなりの美人だと思うんだけどなー。『怪奇・脱げ女』という残念な壁がある。勿体ない。
「さーて、この後どうします？　カラオケとかゲーセンに繰り出します？」
「それなんですが、佐天さん。私と初春は、すぐに支部に戻り、今回の事件の洗い直しをしなければなりませんの。ですからここで抜けますわね」
「あー……白井さん。それだと自然解散ですね。いつの間にか御坂さんいませんし」
「「え？」」
初春の言葉に周りを見回すも、本当にいなくなっていた。一体どこ行ったんだろう？
「お姉様ったら……仕方ありませんわね。ここで解散いたしましょう。それでは佐天さん、ご機嫌よう」

「またメール入れますね～」
「うん、分かった！　それじゃ二人ともお仕事頑張ってねー！」
二人と別れた私は、そのままっすぐ寮には帰らず、スーパーの方へ進路を変えた。確か今日はキャベツが安かったはず……。
「～♪～～～♪～～～～……ん？」
しばらく歩いて、気づく。何時の間にか、周りに人の姿が一切見えないことに。
「……？」
耳を澄ませても、一切人の話し声とかが聞こえない。まるでここだけ世界から切り取られたような……。

考えている最中、目の前の路地からとんでもない爆風が吹き抜けた。

「ええっ!?　一体なに?!」
爆風が治まって数秒待ったけど第二波が来なかったので、おっかなびっくり路地をのぞきこんでみた。そこには、なにか鋭いものに切り裂かれたような地面と、赤く染まった白い布の塊があった。……いや、これ……布の塊じゃなくて……

――インデックスだ!!

「――ど、どうしたの、インデックス?!」
よく見たら周りを染め上げる赤は、インデックスの血。血だまりの中に沈むインデックスは、苦しげな息を上げながら、それでもこちらに視線を向けてきた。
「……？　るい、こ？　どうして、こんなところにいるの？」
「それはいいよ！　そんなことより、一体どうして――」

「――彼女から、離れなさい」

凛と響き渡った声に、思わず身を固める。今まで気付かなかった路地の先。そこに異質な人が立っていた。腰まである長い黒髪。白いTシャツを身に纏い、それを片方で縛っている。履いているジーンズは、片足を根元から切って白い太腿が見えている。だけどそんなことじゃない。この人のもっとも異質なところは――

身の丈ほどの長大なカタナを持っているところだった。

「スティルの『人払い』を突破してくるとは……どうやら一般人ではないようですね」

そう言って僅かに持ち上げられた刀。それだけで、世界が張り詰めそうなほどの緊張感に覆われる。なん、なの……このヒト……！

「るい、こ……逃…げて……」

……自分が危ないのに、私を気遣ってくれるインデックスに、私は、一度だけその手を握り締めてあげて、前へ向き直った。

「……あなたは、誰」

「――私、ですか。そういえば、名乗っていませんでしたね」

そうして紡がれた言葉は、私を日常から非日常へと誘う言葉。

「『魔術師』、神裂火織といいます」

夕暮れの中佇む、長刀を携えた女性。それが私と魔術師のファーストコンタクトだった。

◇　◇　◇

誰もいない路地。邂逅を成し遂げた場所から数メートルも離れない場所で、少年は嗤う。

「――ふふっ、受け取ってくれ、≪アリス≫……そして≪バンダースナッチ≫よ……これは僕からのささやかなプレゼントだ……」

少年は手の中を開く。そこには二枚に破り取られた、奇妙な文様の描かれた紙があった。

「すべては≪プログラム≫のため……さあ、すべてを飲み干し、さらな

る進化を遂げてくれ、≪バンダースナッチ≫」

少年は手の中の紙を破り、千切り、まるで紙吹雪のようにまく。紙が全て地面に舞い落ちる頃、少年の姿はどこにも無かった……。

００９　魔術―ウィザード―

「『魔術師』……？」

それは、初めて聞く単語。ここ学園都市では、確かに世間一般でいうところの『超能力者』はいるが、それはあくまで科学で証明できる存在。魔術なんていうオカルトそのものな存在は、聞いたこともなかった。

「……？　『人払い』を破って侵入してきたようですから、当然知っているものと思いましたが……その反応は、一般人のようですね。『人払い』が効かない『なにか』があるのかも知れませんが、まあそれはいいです。もう一度言います。彼女から、離れなさい」

そう言ってその女性は、持っていた長刀を持ち替え、柄に手を添える。ただそれだけで、緊張感が増し、冷や汗が出てくる。内心に焦りが出る。うわっ、これがもしかして、マンガとかでよくある『殺気』ってヤツ……？　マズイ、怖い、死にたくない、ここから逃げたい。そう思って、佐天はほんの一歩後退った。

「……そう、そのまま離れなさい。彼女はこちらで『保護』します。貴女は、ここから離れ、すべてを忘れなさい。それが貴女のためです」

「『保護』……？」

その単語に、頭が冷えた。今のインデックスは、重傷だ。普通に考えれば、すぐにでも病院に送り届けないと、命が危ない。だから『保護』するというのは、おかしいことじゃない。だけど……

インデックスの背中の、『刃物のようなキズ』は誰がやったんだ？

「……一つ、答えて」

「……貴女の疑問を満たしてあげる理由が、こちらにはありません。何も聞かずに日常を――」

「答えて！」

腰を、ほんのわずかに落とす。体重と衝撃を地面でしっかりと支え

るように。
「インデックスの背中の傷は――――誰がやったの？」
「……」
その質問に目の前の女性は沈黙し、そして。
「……私です」
「――――ッ!!」
激情とともに、純白の腕が女性を吹っ飛ばした。
「なッ……!!」
神裂と名乗った女性はとっさに刀の鞘を間に差し込んだが、衝撃までは殺せない。両足が空中に浮いた彼女は、そのまま路地の先まで吹き飛んでいった。
「インデックス！　しっかりして！　すぐ病院に連れて行ってあげるから！」
佐天は吹っ飛ばした相手に、もう目もくれずにインデックスに駆け寄った。背中をかなり深く広く斬られてる……！
「……だ、だいじょうぶ、だよ？　それより、私、行かなくちゃ……」
「だ、ダメよ、動いちゃ！　今救急車呼んであげるから！」
「……今、ここには、誰も入ってこれないの。あいつ等が張った『人払い』が効いてる、から…」
「『人払い』？」
そこで気が付く。今この場には、佐天とインデックス、そしてさっきの女性の三人しか人がいない。もしかして、これが『人払い』？そんなオカルトみたいなこと、本当に――――
「彼女から、離れなさい」

戸惑いは一瞬の爆風で斬り裂かれた。とっさに右腕を掲げたが、その右腕の表面にいくつもの斬撃が刻まれる。だというのに、路地の先にいた女性は鞘から刀を抜いてすらいない。これが、インデックスの背中を斬り裂いた攻撃……！
これが、『魔術』!!

「インデックス、背中におぶさって！　ここから逃げるわよ!!」
「え……？　い、いいよ……私はいいから、るいこだけでも……」
「こんな大怪我した娘、一人で放っておけるわけないでしょ！　いいからおぶさる！」
　ゴチャゴチャ言うインデックスを、強引に背中に乗せ、左腕でしっかりとつかむ。振り落とされないように。
「彼女を、置いていきなさい。彼女は重傷を負っています。こちらで『保護』しないと、手遅れに――」
「この娘の背中斬り裂いた張本人を、信用できるわけないでしょ！」
「――――っ」
　怒鳴りつけてやったら、一瞬動きが止まった。それに少し戸惑うも、佐天にとって今一番優先することは、背中の彼女だった。
「――ですが、どうやって逃げる気ですか？　貴女では私に敵うはずがない。それくらいは分かるでしょう？」
「……確かに、『戦ったら』、ね。じゃあここで、問題。私の右腕の先は、どこを掴んでいるでしょうか？」
　彼女が視線を移した先。そう、今、佐天は……十数メートル離れた、ビルの側面を掴んでいる！
「しまった!?」
「一気に、縮めぇぇぇぇぇっ!!!」
　ＡＲＭＳを戻し、その反動で一瞬で移動する。高速で長距離を移動する方法のない彼女にとって、これが最善の脱出法だった。
「もう、一回いいいいっ！」
　壁に激突する前に壁を離し、他のビルへと突き刺して、また縮める。それを何度も繰り返し、ジグザグに空中を移動する。時折掴んで崩れたビルの破片を目くらましにして。時にはそのまま屋上に上り、時には飛び降り、走って走って……ようやく後ろから追ってくる感じが無くなった。
「はあ、はあ……ここまで来れば……よーし、インデックス、待っててね。このまま病院に連れて行ってあげるから」
　今いる場所は第七学区。先生のところに運び込めば、死んでなけれ

ば治してくれる。そう思い再び走り出した彼女を、呼び止める声がした。
「だ、だめ、なんだよ、るいこ？　私、行かなきゃいけないところがあるから……」
　そう言って背中のインデックスが、もがいて下に降りようとした。
「ちょ、ダメよ、インデックス！　そんな大怪我で動いちゃ！　今、病院に連れてってあげるから！」
「でも、私、行かないと……そうじゃないと、あのひとが、しんじゃう……」
　その言葉と一緒に、背中に暖かい水滴の感触。……涙？
「……どういうこと……？」
「私……さっき私を助けてくれた人の家に、フードを残してきちゃったの……私の服は、≪歩く教会≫っていう魔術がかかった服で……あいつ等はそれを頼りに追ってきてるから、だから……」
「取りに行かないと、その人が死んじゃうって言うの……？　けど、今！　貴女自身が死にそうなんだよ、インデックス！　フードは後で私が取りに行ってあげるから！　それでいいじゃない!?」
　けれど、佐天のそんな言葉にも、インデックスはほのかに笑うだけ。
「あのひと……見ず知らずの私に、親切にしてくれたんだよ……ご飯も、食べさせて、くれたんだよ……？　私のせいで、あのひとがしんじゃうのは、とってもこわいんだよ……」
　インデックスのその言葉を聞きながら、インデックスの呼吸が荒くなってきているのに気が付いていた。……言い争ってる時間もない、か……。
「～～～、あ～～、も～～!!　わかった！　すぐにフード回収して、病院行くわよインデックス！」
「ゴメンね、るいこ……るいこだって関係ないのに……」
「もう言わない！　『友達』助けるのに、理由なんていらないんだから!!」
「ふえ……」
　絶対死なせないからね、インデックス！

そう心に誓い、佐天は路地を出来る限り揺らさないよう走り抜けた。

◇　◇　◇

「この建物ね、インデックス！」

「うん……部屋はあそこ……」

インデックスの指さした七階の部屋を見上げ、覚悟を決める。

「住居不法侵入に、器物損壊に……まあ、緊急事態だから仕方ない！」

ＡＲＭＳを伸ばして壁に突き刺す。ごめんなさい、インデックスに親切にしてくれた人！

「いっけえぇぇぇ！」

ＡＲＭＳで一気に上階に昇り、そのまま施錠も確認せずに、部屋のドアをぶち破った。

「よし！　――――これね!?」

部屋に押し入り、すぐにベッドの上に落ちていたフードを見つける。それを拾い上げて、左手にしっかりと持つ。

「それじゃあ、病院行くよ……インデックス？　インデックス！　しっかりして！」

後ろを振り向くと、インデックスは背中に伸し掛かるように脱力していた。マズイ、急がないと！

「くっ――――あ痛(た)ぁっ!?」

部屋を出たところで、誰かにぶつかった。ぶつかった相手は、高校生位の男子で、ツンツン頭の少年。上条当麻だ。

「あたた……ん？　何で俺の家に、こないだのビリビリの友達が――――って、何でウチのドア壊れてんだ!?」

……その話から、佐天はインデックスに親切にしてくれたのが、目の前の少年だと気が付く。ならしょうがない。とにかく状況説明しないと！

「上条さん、今は全部後回しです！　実はインデックスが大怪我してるんです！　早く医者につれてかないと！」

「へ……!?　インデックス?!　何でお前が、ってその前にどうしたんだ、この怪我！　誰にやられた!!」

「だから、今は説明してる場合じゃ――――」

「――ん？　僕ら『魔術師』だけど？」

瞬間、場が凍り付く。まるで油のさされていないブリキのように、ゆっくり、ゆっくりとそれを視界に収める。そこにいたのは、先程の神裂という女性と違い、神父のような丈の長い服を着た少年。外国人特有の背の高さも赤毛であることからも、もしかしたら本当に神父なのかもしれない。もっとも指や耳にいくつもくっ付けた銀の指輪やピアスだとか、目の下にバーコードの刺青（タトゥー）だとかが神父らしさを吹き飛ばしていたけど。後、明らかに未成年なのに煙草を吸ってるとこも。

「やれやれ、神裂が逃げられたというから、どんな達人なのかとも思ったが……明らかに素人じゃないか。全く、心が痛むね」

「アンタ……！」

瞬間的に右腕のＡＲＭＳを発動させる。コイツも、ヤバイ。さっきの女性とどっちが上かはともかく、佐天はその少年から物凄く危険な感じを感じ取っていた。

「お、おい、君!?　その右腕……！」

「……フム、本当に風変りな能力だ。この街の能力者というのは精々火や氷を出したりが関の山だと思っていたが、ここまで人間離れした能力もあるんだね。文字通り、『化け物』じゃないか」

「黙りなさいよ……！」

必死に否定する。私は、人間だ。決して化け物なんかにならない！

「まあ、それはいいか。さて君の後ろのソレ、僕の方で回収させてもらうから、出来れば無抵抗で引き渡してくれないか？」

「お断りよ……私は、絶対『友達』を見捨てない！」

夕暮れの男子寮、魔術師との第二ラウンドが開始した。

０１０　進化―レヴォリューション―

「――――友達を、見捨てない、か。まあ、人間としては、その理由に好感も持てるけどね」

そう言って、赤髪の少年は煙草を投げ捨てる。火の粉が、宙を舞う。

「だが、『魔術師』の前に立つには、甘すぎる」

次の瞬間、ゴウッ！という音とともに、舞った火の粉が燃え上がる。それは一気に集約し、赤髪の少年の頭上に火球を発生させた。

「……ステイル＝マグヌス。だが、この場においては『Ｆｏｒｔｉｓ９３１』と名乗っておこうか」

「……？」

その言葉に、佐天と上条の二人は首を傾げる。出てきた言葉の意味が分からないためだ。

「だから、名前だよ、名前。初対面で名を名乗るのは基本だろう？　ちなみに、後の方は、僕達魔術師が用いる『魔法名』で、その通称は――」

言葉とともに、少年、ステイルは嗤う。炎に照らされたその顔は、正しく『凶相』だった。

「――――『殺し名』だよ」

そうして、世界は炎に包まれた。

「『巨人に苦痛の贈り物を』!!」

詠唱とともに、贈られたソレ。それは地球生誕の再現か、はたまた地獄か。その場にいた三人にはどちらでも碌なことには感じなかった。

「……妙だな」

そんな地獄で声を上げたのは、地獄の体現者である、ステイル。その顔には先の炎をいぶかしむ色が浮かんでいた。

（……何故、『爆風』が来ない？　いや、そもそも『爆発』のひと

つも起こさないのは、どういうわけだ？）

彼にとって、先の攻撃は相手を炎熱で焼き殺すためのものではなかった。いや、正しくはツンツン頭の少年と、佐天という名の少女は焼け死んでもいいとは考えてはいたが、彼女は禁書目録を背負っていた。だからまずは爆炎の衝撃で二人を引き離し、確実に彼女を確保した後、彼らはゆっくりと処理すれば良いと考えていた。

だが、目の前に起こった炎は、確かに燃え上がってはいるものの、当初予定した爆発が起きていない。それを内心不審に思うも、とにかく優先である禁書目録を回収しようと歩を進めたところ、彼は有り得ない声を聞いた。

「――大丈夫か？」

「……ッ?!」

声が聞こえたのは、ステイルの前方。未だ炎が渦巻く中からだった。

「わ、私もインデックスも大丈夫です！　でも、まさか、こんな……！」

「驚くのは後だ。とにかく今は炎を消そうぜ」

悪夢の、ようだった。その言葉とともに、目の前の炎は二つに割れた。後に残ったのは、まるで虫でも払った後のように、右手を振り下ろした姿の少年と、異形の右腕を前に出し、炎から禁書目録を守っていた少女。

「……！　『灰（Ash）は、灰に（to Ash）』――『塵（Dust）は、塵に（to Dust）』!!」

ステイルの両手に種火が生まれる。それは、亡者を灼き尽くす断罪の剣。

「『吸血殺しの――紅十字』!!」

十字に交差する炎が、罪ある全て灰に帰す。それが彼にとっての予定調和。だがその未来は、簡単に覆された。

「おおおおっ！」

「なッ!?」

雄叫びとともに突っ込んできた少年が、素手で炎剣を受け止めた。大きく開かれた手の平は、まるで絶対不可侵の障壁でもあるかのように炎の侵攻を食い止める。そうしてそのまま少年は、徐々に徐々にそ

の手を握り込む。
　バキン！という、ガラスか何かが砕ける音とともに、ついにステイルは悟った。禁書目録の不可侵の防御結界『歩く教会』を破壊したのが誰だったのか。コイツラは……正しく自分の『敵』だと。
「……『世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ』」
　全てが切り替わる。『死んでも構わない』程度から、『確実に焼き殺す』ものへと。
「『それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり――それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり――その名は炎！　その役は剣！　顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！』」
　轟ッ！と空気を焼き尽くし、ソレは現れた。ドロドロとした重油が、ヒト型を取ったかのようなその姿。存在するだけで空気を灼熱地獄へと変える存在。摂氏３０００度の炎の魔人が顕現した。
「≪魔女狩りの王≫イノケンティウス。その名の通り――『必ず殺せ』」
　魔人は、待っていたかのように、その命令の通り突き進む。間にある物はその侵攻を阻むことは出来ず、すべてが溶けた。それに対し、上条当麻はただいつものようにその右手を突き出す。
「……邪魔だ」
　ただそれだけで魔人は空に解ける。異能である限り無力だと言わんばかりの行動。その一連の行動を見ても、ステイルの顔には焦燥はなく、ただ笑みだけがあった。
「――甘いよ、能力者」
「…？　っ、なッ……!?」
　振り向きざまに攻撃を防げたのは、運が良かった。突き出した右手に受け止めたのは、先程の魔人。砕け散ったのがウソのように、今度は拮抗した。
（コイツ……！　消したそばから、炎が再生してんのか……?!）
　それが答え。再生スピードの方が速く、炎を消しきれないのだ。完全に足の止まった上条に対し、その横をすり抜ける影があった。

「はあああああッ!!」
それは、インデックスを地面に横たえ、身軽になった佐天。その右腕を力任せにステイルへとたたきつけた。
「ふん……」
「きゃっ!?」
だがその攻撃は届かなかった。周囲に燃え広がった炎が、まるで生き物のように蠢き、分厚い壁へと変貌したのだ。あまりの高熱に、たまらず灼けた右腕を引き戻す。
「……彼の、正体不明の能力には少し驚いたけど。君にはまるで脅威を感じないな。文字通り力任せに殴りつけるだけか。『化け物』らしいと言えばらしいけどね」
「私は――――『化け物』なんかじゃない!!」
もう一度右腕を振るう。しかしそれは届かない。炎は変幻自在の壁であり、敵対者を滅する剣。火の粉が僅かに舞い散るだけで、赤髪の少年は飽いたように、煙草をふかした。
「……そんなに、『化け物』が嫌なら、少し手伝ってあげようじゃないか」
次の瞬間、佐天は背筋を走る悪寒に、全力で右腕を盾にした。それが功を奏したのか、瞬間的に巻き起こった炎剣の津波は、右腕で防ぐことが出来た。……代わりに。
「きゃあああああああああああッ!?」
盾にした右腕は焼け焦げ、硬質の表面は溶け出し、見るも無残な状態になった。力を込めようにも全く動かない。
「……決着のようだね。その右腕はもうダメだ。後で病院にでも言って、切断してもらうといい。何、化け物の腕を持つよりも、余程真っ当な人生が送れるだろうさ」
そう言ってステイル＝マグヌスは佐天に背を向けた。その手には再び炎剣。彼の靴の立てる一歩一歩の足音が、佐天にとって、インデックスに迫る死神のようにも思えた。
（このままじゃ、インデックスが……！）
焦燥は、彼女の四肢に力を与えた。たった今喰らったばかりの炎の

津波の恐ろしさも忘れて、ガクガクと震える足も無視して、既に数メートル先を歩くステイルを追うために、ゆっくり、本当にゆっくり、その場から『一歩を』踏み出した。

――力が、欲しいか？

その時再び聞こえてきたのはそんな声。それが聞こえた瞬間、右腕がまるでサナギを破るように、ベキベキと音を立てて、その形を変えていった。

――力が、欲しいのなら……

変化が落ち着いたとき、そこにあったのは、今までとは比べ物にならないほど逞しい右腕。外側は分厚く肥大化し、五本の爪も以前よりはるかに鋭い。

それは正しく異常にして、異形である、異能。だけど、そんなことじゃない。そんなことくらいじゃ、驚いたりしない。

一番驚いたのは、恐ろしいのは――その右腕が、まるで底なしのように、『大気を吸い込んで』いるのが分かること。そして、それが、目の前のものを滅ぼす力だと分かってしまうこと。

「みんな――、逃げてエエエエエッ!!」

彼女が叫ぶのと、ステイルと名乗る彼が、自分の前に魔女狩りの王（イノケンティウス）を移動させるのは同時だった。

音は、無かった。

「な……なにいッ!?」

一瞬後、そこにはすでに炎の巨人はいなかった。いや、そこには、胴体から上を引きちぎられた炎の塊だけがあった。

「≪魔女狩りの王（イノケンティウス）≫を、引き裂いた……？　なんだ、その腕はッ!?」

彼女は、彼の叫びを呆けた頭で聞いていた……いや、ほとんど聞いていなかった。

――力が、欲しいか!?力が欲しいなら、くれてやろう！

以前から聞こえるその声が、今はずっと近くに、それこそ耳元で話すかのように大きく聞こえてきていたから。

「私は、なんなの……？　一体、なににになるの？」

耳に聞こえる声。以前より強いソレは、破滅への足音のように聞こえた。

011　爪撃―クロウ―

その光景を見たとき、上条当麻には、なにが起きたのか分からなかった。

「触れてもいない炎を、引き裂いた……？」

それを為したのは、視線の先、更なる異形と化した右腕を持つ少女。蒼白な顔色で、地面に半ばめり込んだ右腕を抱える佐天涙子という名の少女だった。

（けど、一体どうやって……？）

先程自分が間近で感じたあの魔術師の炎は、尋常な熱量ではなかった。あの腕から爆風なり衝撃なりを起こしたとしても、消えることなどないほどに。ここは、学園都市。だからこそ、炎に干渉する能力も存在するだろうが、それでもタネは必要だ。では、そのタネは何なのか。

そこまで考えて、上条は気づく。廊下中に響き渡る轟音を立てて、空気を内側の吸気口から吸い込む『右腕』と、その爪から滴り落ち、床に『霜』を降りさせる『透明な液体』に。

「……！　空気を――いや『窒素』を取り込んで、『液体』に変えて圧力で撃ち出したのか？」

それが、答え。『液体窒素』は、様々な科学実験にも用いられる極低温の液体。それ故に、科学の最先端である学園都市の住人、上条当麻も一般的な知識までは知っていた。そして、空気はその約８割が窒素であることも。

だけど、それは答えの半分でしかない。そのことに気づいたのは、この場にいるもう一人の少年。

（液体状の窒素だと……？　それでは、今の状況が説明できない！　そんなもの、僕の≪魔女狩りの王（イノケンティウス）≫なら、近づくだけで消し飛ばすはずだ！）

液体窒素は通常、窒素が蒸散する時の気化熱で物体を冷却する。それが可能なのは、窒素が気化する温度が常温より遥かに低いためだ。表面はおろか、周辺温度すら鉄の融点に届く≪魔女狩りの王（イノケンティウス）≫の前で

は、まず確実に近づくまでに気体へと戻る。その意味で、ステイルの認識は正しかった。

二人の認識は、それぞれの科学と魔術の見地から言って、『非常に正しい』。だからこそ、気付かない。もう半分の答えは、すでに目の前にあって、彼らがその靴で踏んでいる、液体とともに飛び出した『ガラス状の粉末』だなどとは。

不意に、彼らの目の前、異形の腕の少女が動きを見せた。ゆっくり、ゆっくりとその純白の腕が上がっていき、爪がギラリと輝く。

「――悪いが、そこまでだよ」

その動きに真っ先に動いたのは、赤髪の少年、ステイル。見ると、彼の立ち位置がわずかに変わっており、佐天とインデックス、そして上条当麻を繋ぐライン上に移動していた。

「君は随分アレにご執心のようだったからね。さすがにこの位置取りならさっきのような攻撃は出来ないだろう?」

目の前の少女は答えない。ただ廊下に響くのは、彼女の腕が大気を取り込む吸気音だけだ。

「それともまさか、このまま彼女もろとも僕を――」

話を続ける赤髪の少年の背筋に、ゾクリと悪寒が走った。

次の瞬間、彼が生きていられたのは幸運だった。あるいは、長く魔術という暴力渦巻く世界で生き残った故だろうか。

なぜなら、転がるようにその場を飛びのいた瞬間、彼のいた場所が、音もなく凍てつく斬撃に引き裂かれたのだから。

「ッ?!　しまった!?」

自分がいた所より、はるか後方を振り返る。その声には焦燥が見て取れた。必死になって『彼女』の姿を探す。

自分の後ろで、攻撃にさらされたはずの少年と少女は無事だった。咄嗟に少年が彼女を抱え、横に転がったのだ。地面に叩きつけられたのも、少年のみであったことを位置から悟り、「ほっと息を吐く」。

「――い、や」

ほんのわずか、少女の小さい声が響いた。床に転がっていた二人の少年が振り返ると、そこには高々と掲げられた異形の腕と、ボロボロと大粒の涙を流す佐天の姿。

「や、め……てえええええッ!!」

『嵐』、だった。ありとあらゆる方向に斬撃が飛び、たちまち壁や床、天井に暴虐の爪痕を残す様は、まさに天災のソレ。そんな中、決して体力面で優れていないステイルと、人一人抱えた上条が生き残れたのは、ひとえにそれまで魔術と能力、二つの異能の世界で生き抜いた経験と、それともう一つ。

「止まって！　お願い、止まってえッ！　このままじゃ、皆死んじゃうじゃない……!!」

半狂乱になりながらも、左手一本で必死になってしがみつき、ギリギリのところで攻撃の方向を変えている彼女の行動があったからだ。

「――っ、≪灰は灰に≫」

詠唱とともに、ステイルの手に炎剣が生じる。逃げ回りながらも少年は解決策を模索し、一番容易なものを選び取っていた。

「無制御状態の能力か、厄介極まりないね。……悪いが、禁書目録にもしものことがあっても困るんだ。原因の君を『殺して』事態の解決とさせてもらうよ」

そう言って前へと進む。先程とは密度も圧も比べ物にならないほどの炎剣によって、自身に迫る攻撃はすべて撃ち落とすつもりだった。解決策としては最良のものだったろう。

予想外だったのは、後ろの少年のこと。後ろで人一人抱えながら避け続ける少年が、体力的に限界だったということだ。

「！　うわっ?!」

何度目かの、放たれた一撃。自分は何とか避けたが、後ろの少年は避けたときに足がもつれ、抱えていた禁書目録を――『彼女』を廊下の手すりから、放り投げてしまった。

宙を舞う『彼女』、４階建て、地面、情報が駆け巡り、地面でザクロのように爆ぜる彼女を幻視した。

「インデックス!!」

気づけば、大声で叫んでいた。『あの日』喪失い、再び呼ぶことは無いと思っていた、ずっと昔に教えてもらった彼女の名を。手すりから必死になって手を伸ばし、彼女を引き戻そうとする。その姿を、薄ぼんやりと意識を取り戻した彼女が、見た。

「――い……、や……」

彼女の返答は『拒絶』。その事実に一瞬硬直した彼の横を、全力で駆け抜ける少年がいた。

「う、おおおおおおッ!」

少年はそのままの勢いで手すりを飛び越え、空中でしっかりと彼女を腕の中に抱え込んだ。せめて少しでもクッションになるようにと。

「ッ、チィッ!」

それを見たステイルは、咄嗟に炎剣を爆発させた。爆風にあおられ、空中にいた二人の姿はすぐ近くの街路樹へと突っ込んだ。バキバキと太い枝がいくつも折れる音が聞こえ、やがて、柔らかい地面に重い物が落ちる音が聞こえた。どうやら無事に着地したことを悟り、ほっと息をついた。

「あ、ああ、あ……」

絶望した声が響く。その声に振り向くと、彼女は二人が消えた手すりを凝視し、泣きじゃくっていた。恐らく位置関係から、二人が無事軟着陸したことは分からなかったのだろう。

そして、その絶望に呼応するように、右腕が巨大化していく。何かが、浮かび上がる。

『――――クッ』

「?!!」

瞬間、ステイルはその右腕に、恐ろしい獣の顔が浮かび上がったよ

うに見えた。
だが、それを思考する暇もなく、振り下ろされた右腕は、彼らがいた４階建てのアパートを、壁も天井も床も、全て一息に引き裂いてしまった。
「い、やあああああ……――――」
崩れていく視界の中、少女の悲痛な叫びだけが木霊していた。

012　誘惑―エンティスメント―

「おい、何だよ、これ……」

『災害』に遭ったとき、人間はその事実を自分の中で受け入れるため、思考が停止してしまうことがあるという。上条当麻はそんな豆知識を、ただ漠然と思い出していた。

数時間前まで、日常を過ごしていた狭くとも愛着のある我が家が、見るも無残な瓦礫の山と化したのだ。補習で離れたのはほんの数時間前。帰ってみると魔術師という未知の存在とのバトルに発展し、高所から落ち、今ではこれである。それは思考の一つや二つ停止する。

確かに狭苦しかった。不便だとも思った。それでも我が家がこんな風になるなんて思ってもみなかった。

「まったく、やってくれたね……」

ふと、瓦礫の中心に炎が灯る。

そこには、土埃で服を汚し、額から一筋血を滴らせたステイル＝マグヌスと、彼が誇る≪魔女狩りの王（イノケンティウス）≫の姿があった。

「まさか、陣を敷いた建物ごと破壊してくるとは思いもよらなかったよ。おかげで、大した出力も出せやしない。こんなお粗末な王の姿を見せるなんて、過去最大の恥辱だよ」

見ると、確かに傍らのイノケンティウスは儚げで、姿が霞んで見えた。上条は知る由もないが、先程の倒壊で、核となるルーンの大半が使用不能となったためであった。

「だが、それも終わりだ。大人しく、彼女を――」

「……なあ、アンタ。何であの時、この娘（こ）の名前を呼んだんだ？」

場に痛いほどの沈黙が降りた。上階（うえ）から飛び降りる際、確かに目の前の魔術師は、彼女の名前を呼んだ。それも本当に、彼女のことを想い、心配と焦燥をないまぜにした声で。

指摘されたステイルは何も答えない。だが、唇を噛みしめ、必死に言葉を堪える沈黙が、何よりの答えだった。

「……アンタにも、アンタの事情があるみたいだな」

「黙れよ、能力者」

再びの沈黙。けれどその意味はまるで違う。沈黙をもたらしたのはステイルの発する夥しい殺気。空気が痛いほど緊張していく。

「――――そうだな。けど、どんな事情があっても、俺はアンタを否定するぜ。こんな娘に、大怪我させなきゃ目的も叶えられないって言うんなら……まずは、その幻想をぶち殺す」

「ふん――来なよ、能力者」

轟！という音を立てて、渦巻く炎。その手に再び宿る炎剣。それを見て取って、上条当麻は駆けた。

「う、おおおおっ！」

一歩一歩踏み出す毎に、迫る王。振りかぶられた炎剣。それに対し、掲げられたのは、何の変哲もない、ただ一つの手の平。

（こんな右手、何の役にも立たねえけど――）

空気に触れているだけで自分の幸運まで根こそぎ消しているとか考えたくないけど。それでも右手はとても便利だ。

（目の前の、間違えちまった誰かを、思いっ切りブン殴れるんだから――――！）

剣を断ち切り、王を貫き、赤髪の神父に突き刺さった拳。芯に響くその音は、何よりの決着の証だった。

◇　◇　◇

響き渡った音、振りぬかれた拳。そんな光景を、佐天は遠くから眺めていた。右腕は既に戻り、着ていた服は落下によってボロボロになっていたが、それとは関係なく、どうしても他の誰かに近づくことが出来なかったのだ。

砕け散った瓦礫、倒壊したマンション。それら全てを引き起こしたのが、ほかならぬ自分だったのだから。

（――――ダメだ、近寄れないよ……）

そう思い、その場から離れようと、思わず半歩下がった。だが、その時に崩れたわずかな石の音を、彼は聞き逃さなかった。

「佐天さん、だったか……？」

小さな疑問の声。だけれども彼女はその声から逃げられない。

「……はい」

「手伝ってくれ。インデックスは重傷だ。すぐにでも病院に連れて行かないと」

それは分かる。上条の背中で今も細い息をしている少女は、今すぐ病院に連れて行かないと、命に係わるということも。

……それでも彼女は、二の足を踏んでしまう。

「……いえ、病院へは上条さんが連れて行ってください。私は――行けません」

左手で右腕を抱え込む。先程まで暴れまわっていた異形のソレ。全く制御の効かなかった腕が――何よりも恐ろしかった。

「――分かった。なら連絡先だけでも交換しよう。何かあったらすぐ知らせるから」

半ば強制的に携帯に入れられた新しい連絡先をじっと見つめる。血の朱に染まりつつあるインデックスを抱えた上条が遠ざかり、やがて見えなくなったころ、佐天はようやく家路に着いた。

その足取りは重く、道行きは暗かった。

「――もう、やだよ……」

暗くなった歩道に、涙が落ちた。瞼の裏に、自分が紙のように引き裂いたコンクリートの建物が映り、決して離れようとはしなかった。

「私は……こんな腕じゃなくて、もっとフツーの能力（ちから）が……」

たどり着いた寮のマンション、明かりのない部屋、誰もいない室内は、まるで自分の空っぽの心みたいだった。

「う……ううう……」

寝台（ベッド）に突っ伏し、涙に濡れた。そうしてしばらくの時間が過ぎた後、彼女はふと、机の上のパソコンが、メールの着信を知らせているのに気が付いた。

のろのろと起き上がり、半ば習慣でメールソフトを立ち上げ、チェックする。メールの送り先は見たこともない相手。けれどもその中身については、見覚えがあった。その音楽ファイルの題名は。

「――……？　これ……」

『作成者：ＵＮＫＮＯＷＮ　曲名：Ｌｅｖｅｌ　Ｕｐｐｅｒ』

◇　◇　◇

佐天とインデックスの再びの邂逅から数日後、風紀委員第１７７支部。

「まったく無茶しすぎですよ、白井さん。痕が残るかもしれませんよ？」

「……仕方ありませんわ。よりにもよってスキルアウトの恐喝を目撃してしまったんですもの。しかも件の幻想御手絡み。見過ごすわけにもいきませんもの」

痛々しい包帯を巻かれながら、初春に対して気丈に返す。白井にとって、それは何物にも代え難い矜持であった。

「……レベルアッパー、どの程度広がってるんでしょうか」

使い終わった薬品を元の場所に戻しながら、何とはなしに訊く。その顔には、不安が色濃く出ていた。

「モノ自体は普通の音楽ファイル、容量はそれなりですけど、今回それは関係ありません。当初は完全な無料ソフトとして配布されていた以上、現在高値がついていても抑止力にはなりませんわね。既に数千を超えるユーザーがいるはずですわ」

「そうですね……」

顔を悲痛に歪め、医療キットをしまい終わったときだった。

ガタン！とドアの向こうが大きく鳴った。

「……うい、はる……」

「え――佐天さん?!」

入ってきたのは、佐天涙子だった。だが、その様子がおかしい。顔色は蒼白で、唇は紫色でカサカサ。具合が悪いのは明白だった。

「ど、どうしたんですか!?　病気なら寝てなきゃダメですよ！」

だが、彼女はその呼びかけには答えず、涙目で、その手に持った物を差し出した。

「ういはる……ゴメン……」

「――！　これ――……」

それは、レベルアッパーを表示した音楽プレイヤーだった。

◇　◇　◇

「佐天さんが倒れたって!?」

御坂が駆けつけた室内。そこでは白井と初春、そして彼女の診断を行ったカエル顔の医者が揃っていた。

「――結論から言うと、彼女が今すぐどうこうなるわけではないんだよね？　他の大勢の患者と違って、彼女は意識の喪失までは至っていない。レベルアッパーの使用は数日前という話だから、他の患者を見るにすでに意識を失っていてもおかしくないんだがね？」

「……つまり、いつ意識を失ったっておかしくないってことよね？」

そう言って、強く拳を握り締める。不甲斐なかった。学園都市最強の超能力者（レベル5）なんて言っても、何も出来ない自分が。

「――お姉様、今はやるべきことがありますわ」

「……ええ。そうよね。一刻も早く犯人を見つけ出して、佐天さんも皆も元に戻してあげないと」

「私、佐天さんのプレイヤーを木山先生のところに持って行きます！」

誰もが慌ただしく動く中、カエル顔の医者だけは、静かに、ベッドに横たわる佐天を見ていた。

（佐天君…こんなモノに手を出すほどに……）

もはや猶予はないかもしれない。何としても、例え腕を切り離して新しい腕を作ることになっても、彼女を治す。それが彼の意思だった。

――だが、彼は知らなかった。

猶予などとうに無くなっていたことを。なぜ、佐天一人だけが、意識を失わないのか。その理由を。そして、彼らも佐天自身も、知らなかったのだ。つい数日前、佐天が極低温の右腕の軌道を、『生身』の左腕で変えていたという事実を。それら二つの要因が、実は同じものであることなど、このときは誰も知らなかったのだ。

――運命（プログラム）は、やがて来る一つの帰結へと向けて加速していく。

013　慟哭―ウェイリング―

「木山先生が、犯人だなんて……！」

病院の一室、カエル顔の医者にその可能性を示唆された時、御坂美琴は歯噛みした。少し余人には理解しがたいところはあるが、あの先生がそんなことをする人間だとは思いもよらなかったのだ。

レベルアッパー――その目的は、特殊な音楽ファイルによる脳波の画一化。異なる人間の脳波を一定に調律（チューニング）することによって、同一の電磁波間で擬似的なネットワークを作り処理能力を上げる、いわばクラウドコンピューティングにも似た理論だ。

勿論、個々で異なる脳波を無理やり弄られたら、当人の脳に多大な影響が出る。意識が喪失したのはあくまで副次的な効果だったのだ。

「お姉様ッ！」

カエル顔の医者と現状を確認していたところに、電話をかけていた白井が駆け込んで来た。

「木山春生の研究所に向かった初春と……連絡が取れませんわ」

◇　◇　◇

「それじゃ先生、佐天さんのことくれぐれもお願いします」

「私たちは現場と風紀委員支部（ジャッジメント）に向かいますわ」

そう言って病院を飛び出した二人を見送り、カエル顔の医者は一つ溜息を洩らした。

（大人の責任を……子供たちに取らせるか）

内心忸怩たる想いを抱えていたが、それでも彼はその事実から目を逸らしはしない。彼は、医者。何があろうと、何をしようと、患者を救う。それだけが彼の出来ることであり、信念。そしてそれこそが、『この学園都市を作り上げた』一人としての自分が負うべき責務だった。

振り向き、歩き出したその歩みにはもう迷いはない。何があっても必ず救う。その想いとともに、彼は、彼女のいた病室の扉を開けた。

「――――佐天君？」

そこには空になったベッドと、窓から垂れ下がるカーテンだけが残

されていた。

◇　◇　◇

「…はあ……は……」

ずりずりと、まるで自分のものでないような身体を引きずり、佐天涙子はガードレールに捕まりながら歩いていた。

「はは……何、やってんだろうな、わたし……」

確か、病院でぼんやりと意識が戻って、皆のところに行こうとしたら、木山先生が犯人で、初春が捕まったって話が聞こえて……気が付いたら病院を抜け出していた。

「でもさ……譲れない、よね」

どんなに、倒れそうでも。どんなに、御坂さんが強くても。そう、どんなに大丈夫でも。

「だってさ……『親友』なんだもん」

初春飾利。自分にとって、一番の親友だと断言できる少女。その子に何かあったと聞き、いてもたってもいられなかった。本当にそれだけだった。

「それに……ッ痛……場所は分かるみたいだしね」

先程から彼女を襲う、頭痛。それが一定の方向に行くと、段々と強まっていくのだ。そして彼女は、何となくソレが、『原因』に近づいているせいだと気づいていた。

「はは……派手にやってるなあ、御坂さん……」

視界の先には、すでにこの事件の最終局面とも言うべき光景が広がっていた。車両用の高架は落ち、ひっきりなしに電光が光る。間違いなく、最近友人となった御坂さんのものだった。

「グッ……初春を、見つけないと……」

そう呟き、再び歩き出した途端だった。

「あぐっ!?　あ、あああああ?!　――――え?」

一際強い頭痛に、思わず叫び声を上げると、次の瞬間、彼女は見たこともない光景の中にいた。

『私が教師を、ですか?』

『ウム。君は確か教員資格を持っていたね?』

「――――木山先生？」

　場所は、どこかの部屋。そこで今よりも幾分か若い木山春生が、禿げ上がった老人と話し込んでいた。

『えー、今日から君たちに勉強を教えることになった木山春生だ。……よろしく』

（面倒なことになった……まあ、これも実験のためか。割り切って考えよう）

「これ……木山先生の、記憶」

　記憶を追うように、場面は切り替わる。途切れ途切れに。

（子供は嫌いだ……）

『木山先生さよーならー！』

『全く、廊下走るなって、何度言えば――』

（すぐ悪戯するし……）

『へへー、引っかかったー！』

『コラ、男子！』

『ああ、大丈夫。暑いし、乾かしとけば……』

『わー！　こんなところで脱がないで!!』

（デリカシーないし……）

『せんせー、彼氏いないんだろ？』

『……いないよ』

『へへ、俺が彼氏になってやろうか？』

『大きなお世話だ！』

（人の都合考えないし……）

『――ぬかるみで転んだのか？　私の家はすぐそこだが、風呂を貸そうか？』

『ホント!?』

（社交辞令だったのに……研究の時間が無くなってしまった）

『ねー、せんせー』

『何だ？』

『せんせーの実験が成功したら、私もすごい能力者になれるのかな？』

『……君は高位の能力者になりたいのか？』

『んー、なんていうかねー。私たちは学園都市に育ててもらってるから、すごい能力者になって、この街の役に立ちたいかなー、って』
『……そうか』
（子供なんて……）
『少しチクッとするぞー。……怖くないか？』
『んーん！　先生の実験だもん。怖くなんてないよ』
（子供……なんて……）
『被験体５番、７番、１２番、意識レベル低下！　ダメです、これ以上――』
『とっとと非常用の薬液を投与しろ！　このままじゃ、被験者たちが――』
『あー、いい、いい。浮足立ってないで、記録を取りなさい。……よくやってくれた、木山君。君にはこれからも期待してるよ』
（――――――――！）
「はっ！」
記憶の中の声にならない叫びとともに、佐天は現実に引き戻された。視線の先、ほんの十数メートルのところに、御坂と木山がいる。
「い、今のは……」
「……ふ、『暴走能力の法則解析用誘爆実験』。それがあの日行われた実験の名称だった。表向きの目的とは別に、被験者の能力を意図的に暴走させ、その法則を解析する、それが真の目的だったのさ。――――あの子たちを、使い捨ての実験動物（モルモット）にしてね」
「人体……実験……。で、でも、それならそれこそ、警備員（アンチスキル）に――」
「２３回。……あの子たちを目覚めさせるため、『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』の使用を申請し、却下された回数だ。統括理事会が主導していた実験なんだ。上が動くわけがないさ」
ああ、そうか。と佐天は納得していた。だから、この人は一生懸命だった。だからこの人は、こんな方法に手を染めた。あの子たちを救うために。……だけど。
「もう、やめてください!!」
叫んだ。叫ばずにはいられなかった。

「佐天さん!?」
「君は……確かファミレスのときの子か」
左手で、ガードレールを握りつぶしながら身体を起こした。知らず身体中に力が湧いていた。
「こんなことしたって、こんな手段とったって！　何人もの犠牲の上に、あの子たちが戻ったって！　あの子たちが喜ぶわけないじゃないですか！」
「――！　君に何が分かる!!」
ふらつきながら、彼女が立ち上がる。ああ、分かってる。引けないことも。自分じゃ分かってあげられないことも。
「あの子達を救うまで……負けるわけにはいかないんだ！　例えこの街の全てを敵に回しても！」
「だったら、私が『滅ぼして』あげます！　貴女と、子供達に『絶望』を与えるものを、すべて！　だからもう――」
「!?　――きみ、その顔は」
「え?」
木山先生の反応に疑問を持ち、傍らの御坂に目を向ける。彼女もまた驚愕していた。

「佐天さん……その顔の、『紋様』は」
その言葉に、近くの水溜りに顔を写す。そこには、頬に幾何学的な『紋様』が浮かび上がった顔があった。
「なに、これ……」
「……『ＡＲＭＳ』」
「え?!」
答えたのは木山春生。その顔は蒼白だった。
「そうか……君もまた、学園都市の『絶望』の中に――――――――ツグ?!!」
急に彼女が苦しみ出した。それと同時に。
「!?　こ、これ……ＡＲＭＳが発動するときの、振動……?」

「ぐ、あ、ああ！　そう、か。レベルアッパーを使用した、ＡＲＭＳ移植者の君の『共振』が、『起爆剤』に。『虚数学区（ＡＩＭ）』が……ッ、ぐ、うゞああああッ!!」

辺りに響き渡る共振の中、ソレは誕生した。

「……は？」

「……何、これ」

ソレは、胎児だった。巨大で、歪で、半透明で、存在感が希薄で、だけど確かに胎児だった。そして。

『キィィヤゞァアアアアア!!!』

ソレは、産声を上げた。

「きゃあ!?」

「無差別攻撃?!」

産声とともに、ソレは辺り一面に、電気を、炎を、氷を降らせた。たちまち辺りが、先程の比ではないほどに荒れ果てる。

「佐天さん!!」

そんなところに、バイパス上の木山の車で気絶していた初春が駆け込んできた。

「何で佐天さんがここに!?　いや、その前に何なんですか、アレ!?」

「初春！　いや、今それどころじゃ――」

そう言って胎児に振り返り、ゾッと悪寒が走り抜けた。胎児は、一点を見つめている。新たに、この場に侵入（はい）り込んできた、彼女を。

「初春！　逃げてぇ!!」

「え？」

伸ばしたその手を、特大の火球が焼き尽くした。

「う……」

爆風に押され、重度の火傷を負った腕を抱えながら、よろよろと立ち上がる。初春の安否を確かめようと、彼女がいた場所へと目を向ける。

「うい……はる……？」

そこには、ただ焼け焦げ、砕け散った地面と、めくれ上がったコンクリートがあるだけだった。

「……あ」

その声に意味はない。それは、ただ、詰めていた息が口から漏れただけ。

「……ああ……」

止まっていては、いけない。動かなければ、いけない。そんなこと、もうどうでもよかった。

「あああ……」

だって、たった今、一番の親友は、目の前で……

「ああ…あああ……」

殺された。

「あああ、あああああァあああああァッ!!」

世界に――――共振という名の『産声』が響き渡った。

これが……『喪失』。これが……『悲しみ』。これが……『絶望』。

『――――力が、欲しいか!!』

その声は、今までにない程、はっきり聞こえた。

『我が名はバンダースナッチ――』

それは、重く、呪詛のように――

『我が名は、バンダースナッチ！』

ありとあらゆる絶望を含んで――

『我が名はバンダースナッチ!!』

自分自身の喉から出ていた。

◇　◇　◇

そうして、意識は堕ちていく。

どこまでも、どこまでも。

目の前に広がるのは、茫漠たる白一色の世界。

そして、どこまでも巨大なソレが――

『力が欲しいなら――くれてやろう!!』

ニタリ、と獣の笑みを浮かべた。

014　邂逅―エンカウンター―

それが起きた時、御坂美琴はただ呆然とすることしか出来なかった。

たった今、眼前で友人を失った少女が絶叫を上げた時、辺りに響き渡る高音の振動音とともに、最高位の『電撃使い（エレクトロ・マスター）』たる彼女だけが感じた膨大な違和感に圧倒された。

（電……磁波……!?　それも、とんでもなく重く、強大な……！）

まるで、超能力者（レベル5）の自分すら足元にも及ばない、とんでもない存在感。それが、目の前の絶叫を上げ続ける少女からまき散らされていた。

変化は、突然だった。

まず、彼女の体躯が軋みとともに、肥大化した。腕は太く、背は高く、どんどんと大きくなっていった。爪も伸びた。爪は、まるで虎か熊のように鋭く、どんな動物よりも力強かった。口には乱杭歯が備わり、耳まで裂けていく様は、どんなホラーよりも恐ろしかった。

「……佐天、さん？」

変化が終わった時、あの、笑顔の似合う向日葵のような少女はどこにもいなかった。そこにいたのは、純白の獣。見る者全て、触れる者全てを、魂まで凍てつかせるような純白に彩られた獣だった。

『……我は、そんな名ではない』

獣が、不意に口を利いた。その声が、まるで佐天（かのじょ）に似つかわしくなかったことと、純粋に口を利けることの両方に、御坂は驚いていた。

『我が名は、神獣（バンダースナッチ）！　――すべてを滅ぼす、『滅びの獣』なり!!』

その言葉と同時、純白の獣は鋭い爪持つ右腕を、斜めに振り下ろしていた。

――――胎児は、５つの肉片へと別れた。

「……は？」

一瞬遅れて、胎児であった肉片は、音を立てて地面へと墜落した。

それだけではなく、その後ろにあったバイパスの破片までもが降り注いだ。
「え？　ええ⁇　た、倒したの⁉　こんなに早く⁉」
だが、その疑問に純白の獣は答えない。胎児であった肉片が落下した場所を見据えるのみだ。
「……え」
不意に、胎児の分かたれた眼球が一つ、浮かび上がった。耳が、手が、骨が、肉が、次々と浮かび上がった。それらは渦を巻き、治まったところには再び元の胎児がいた。
『ヒュ――――――オオオオオオッ‼』
空に響き渡る、咆哮。自分の攻撃が効いていないというのに、まるで意に介さず、純白の獣――バンダースナッチは、胎児から伸びる触手の一本を掴んだ。
『があああああああっ‼』
そのままバンダースナッチは、信じられないようなパワーで胎児を振り回し、バイパスから離れた場所へと放り投げた。
『我は、バンダースナッチ――――』
投げつけた胎児に向かい、背中から空気を放出して、跳びつく。そして、空中でその太い両腕を交差させた。
『我が母『アリス』の意思の元、全てを終わらせる、『滅び』なり‼』
両腕を広げた瞬間、氷雪を孕んだ暴風が顕現した。それは、天までも屹立し、ありとあらゆるものを凍てつかせる巨大な旋風だった。
「キャア！」
人が飛ばされるほどの暴風。その中で御坂は、電磁力で体勢を整え、巻き上げられていた木山春生も回収した。
「う……」
いまだ朦朧としているようだが、反応があり、彼女が生きていることにほっとした。
戦場に目を向けると、バンダースナッチと名乗った純白の獣は、その圧倒的なパワーと、身に纏う氷雪で胎児を追い詰めていた。明らかなワンサイドゲーム。胎児に再生能力が無ければ、あっという間に決

着がついていただろう。
御坂美琴は、そんな戦場に見惚れていた。だから気が付かなかった。

「――――――素晴らしいじゃないか」

自分のすぐ近くに、唐突に見知らぬ少年が生じたことに。
咄嗟に、前髪から電撃を奔らせ、少年を攻撃する。少年は実にゆったりとした動作で、後ろに飛び退さった。
「ふふ、いきなりひどいじゃないか？」
「……アンタ、誰なの？」
その余裕ぶった笑顔が、無性に御坂の癇に障った。こんな混沌の場で、落ち着き過ぎていることが、すでに異常だった。
「ホラ、眠り姫を助けてあげたのは僕だよ？」
そう言って、少年が身を逸らした先、そこにいたのは、頭にいくつもの花飾りをつけた、もう会えないと思っていた少女だった。
「初春さん!?」
状況など考えず、御坂は少女の元へと走った。軽く手に触れる。
……暖かい。脈がある。生きている！
「よかった……」
ほっとした途端、御坂は足から力が抜けた。その体勢のまま視線だけ少年を見据える。
「……初春さんを助けてくれたのは、感謝するわ。だけど分からないことがある。アンタは誰で、目的は何？」
「……その疑問に答えてあげるのはやぶさかじゃないけれど、向こうはいいのかい？　そろそろマズイよ？」
その言葉に振り向くと、胎児の方が凄まじい姿に変わっていた。もはやただの肉のカタマリのようで、氷を、炎を、電撃を、雨あられと降らせていた。だがそれも、純白の獣には一切ダメージがない。
「……どこがマズイのよ。佐天さん、あっさり勝っちゃいそうじゃない」

「まだ彼女を、『佐天涙子』と呼ぶんだね。――まあ、それはともかく、彼らの後ろの建物が見えるかい？」

戦場のほど近く。確かに金網とフェンスに覆われた施設が見えた。

「あそこは、『原子力実験施設』でね。このまま二体の戦闘が激化すると、巻き込まれる可能性が高い」

「ハア!?」

佐天涙子（バンダースナッチ）も胎児も、周りを一切考えない戦いをしている。このまま戦場が移動すれば、確かに施設に影響が出ることも考えられる。

「じゃあ、どうすんのよ！　佐天さんも、胎児も止めなきゃ……！」

「……ふふ。まあ、そのために僕が動いたんだ。君は安心して――」

「君は……なぜ、ここにいる？」

そう聞いたのは、未だに電撃のダメージが抜けないのか、危なげな足取りの木山。その表情には、目の前の人物への警戒が現れていた。

「ふふ、久しぶりですね、木山先生。木原翁のところで会った以来ですか？」

「……もう一度聞く。君は、なぜ、ここにいる？」

再びの質問。それに対しても、彼はただ笑みを深めるだけ。

「その疑問を満たしてあげてもいいんですが――今はそれどころでもないんですよ。僕の長年の≪計画（プログラム）≫が今日この時、転換期を迎えたんですから」

「……あの少女の、『怪物化』のことか。やはり、君はあの現象について何か知っているな」

「ふふふ……」

その言葉にも薄く笑みをこぼすだけ。傍で見ていた御坂の方が、先に業を煮やした。

「ちょっとアンタ！　アレは何なの?!　どうやったら止まるの！」

コインを一枚、前に突き出す。『超電磁砲（レールガン）』。彼女の代名詞であり、切り札。そんなとんでもない能力（チカラ）の前でも、彼は変わらない。変わらない。その姿は、まるで。

――まるで、目の前の少年は、更にとんでもない『怪物』であ

るようにも思えた。

「――まあ、僕としても『実験場』が無くなるのは困るからね。心配しなくてもいい。アレは、僕が止めてくる」

「ふざけないで!!　アンタに何が――」

「――それじゃあね、『超電磁砲（レールガン）』」

次の瞬間、少年は消え失せた。まるで最初からいなかったかのように。

「『空間移動能力者（テレポーター）』!?」

「そうらしいな。そんな能力を持っていたとは知らなかったが」

◇　◇　◇

同刻。幻想猛獣と神獣（AIMバースト　バンダースナッチ）が迫る、原子力実験施設内部。

「……こんなところで、どうする気だ？」

言葉を発したのは、金髪にアロハシャツの少年、土御門元春。その視線の先には、先程まで外にいたはずの少年がいた。

「なに、さっき言った通りだよ。学園都市（コ）が無くなるのは、僕にとっても困るからね。及ばずながら、協力するさ」

「よく言う――だったら何のために、バイパスから初春とか言う少女を運び、わざわざ佐天涙子の近くに寝かせた？」

土御門の示唆した事実。それはつまり、あの時の事は、一つの偶然も無かったということで。

「さっきも言っただろう？　転換期だよ、転換期。まあ、焦れてきていたのは否定しないけどね」

「……それで、結局どうやって止めるんだ？　お前もあの白いのに対抗して、変身でもするのか？」

それには答えず、懐から一つの物体を取り出す。そこにあったのは、一つの音楽プレイヤー。

「何の真似だ？」

「――土御門。突然だが、ＡＲＭＳの秘密をいくつか教えておこう」

何の脈絡もない話。そんな風に聞こえる話題を出しながら、少年はイヤホンを耳に着ける。

「ＡＲＭＳは、個体ごとに、異なる性能はあるが、いくつか共通する能力もある」
「オイ。一体何の話を……」
「その中の一つは、著しい『再生能力』。まあ『自己保存』と『恒常性の保持』とも言えるかな」
「……」
そんな話の中、少年が聴く音楽。土御門にはその内容に覚えがあった。
「……ああ。だからＡＲＭＳ移植者には『幻想御手（レベルアッパー）』は効かないんだったな。多少は体調不良になるようだが」
「それは、佐天（かのじょ）のコトだろう？　本来完全に覚醒したＡＲＭＳには、あんな物は一切効かない。脳波の調律といえども、排除するだけだよ」
少年が今も聴いているレベルアッパーを、全否定するような台詞。しかしそれを聞く土御門は、その話しぶりにどこか悪寒を覚えていた。何か、とんでもない事態（コト）が進行しているような――
「ただね――繋がれないわけじゃないんだよ？」

その言葉と同時、部屋中に共振が響き渡った。
「！　お前！」
「ＡＲＭＳ移植者は、ある一定のレベルに達すれば、自身の共振も、自己保存能力も、その性能の全てを自己の意思一つで制御出来る。『幻想御手（レベルアッパー）』に自身の共振を合わせ、そのネットワークに接続するくらいは造作もないさ」
「だけど相手は、一万人の意思を孕んだネットワークだぞ！　お前が行ったところで、呑み込まれるだけじゃ……！」
「やれやれ、まだ分かっていないんだね、土御門」
苦笑とともに、軽々と言い放つ。
「こっちは、６０兆個の体細胞――『ナノマシン』のネットワークだよ？　負けるはずがないじゃないか」
◇　◇　◇

同刻。原子力施設外縁部。御坂と木山は初春に肩を貸し、戦場から離れたフェンス部分に横たえていた。

「……さっきのヤツ、アンタの知り合いなの？」

「……例の実験施設にいた時、一度だけ会ったことがある。統括理事会に対し、ある特異な論文を発表し、『実証』したことで有名な天才少年としてな」

振り返ると、未だに胎児と純白の獣の戦いは続いていた。完全に蚊帳の外である。

「特異な論文って……？」

「……『戦闘用ナノマシンの進化可能性と人類の人工進化可能性』――そう銘打たれた論文の中で、発表されていたナノマシンこそ、彼女に移植されている『ＡＲＭＳ』だ」

「！　まさか……！」

「ああ。君の友人も、知らずに移植されたのだろうな。ヤツの研究成果ともいえるあの、ＡＲＭＳを」

その言葉に、御坂はもう一度戦場を振り返る。空に向かって高笑いをする純白の獣。それが、誰かも分からない奴のせいで……？

「……誰なの。アイツは一体誰なの?!」

「……ああ。ヤツの名は――」

『ギィ!?』

不意に、胎児が悲鳴を上げた。異変に気づき、二人が目を向けると、胎児の背中の肉が、徐々に徐々に、盛り上がってきていた。

『ギ、ギィイイ？　ｆａｅｖ苦ｄｇ羨ｒｖｗｐ!?　ａｖｆ@ｓｆ痛ｏｒｕｓｕ死ｃ殺ｕａｎｑｒｗｅａｕ死ｎ死ｃ……――』

ボコボコと音をたてて、肉が泡立ちながらせりあがる。肉はやがて、融けてくっつき、溶けてはくっつき、やがてヒトの顔らしいものを背中一面に描き始めた。

「うそ……でしょ……」

「ありえん……」

呆然と見守る先、その顔は有り得ないほどに巨大だったが、その造形は――確かに先程の少年だった。

『あ、はは、ははははは、はははははははははははははははは――――――！』

胎児の背中に浮き上がった、巨大な顔。それは、心底可笑しそうに、愛おしそうに、佐天さんが姿を変えた獣を見据えた。

『初めまして。そして、『久しぶり』だね。バンダースナッチ――――』

だけれど、遠目にも確認できた、その眼。その眼は、どこか爬虫類のような無機質さを感じさせた。

『――――僕は、『キース・グレイ（灰色）』。ＡＲＭＳ計画の提唱者、悪魔の科学者キース・ホワイトの、『最後の息子』だ』

異なる世界、異なる時間。隔たれた宿敵は、こうして再びの邂逅を果たしたのだった。

０１５　息子―サン―

――かつて、二人の天才がいた。二人は遥か昔、地球より分かたれた『兄弟』と出会い、コンタクトを試みた。だが試みは失敗し、二人は新たに『地球の兄弟』と融合出来る新人類を産み出そうとした。産まれてきた『娘』を前に、一人はその『才能』を愛し、もう一人はその『心』を愛した。だが、『娘』の死をきっかけに道は別たれ、『心』を愛した一人の天才は迷走し、やがて『娘』の『子供』をその身に宿した４人の少年少女へ希望を託した。

そして、『才能』を愛したもう一人の天才は――――数え切れぬ悲劇、哀しい子供を産み出した。

『ははははははは!!』

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に浮かび上がった顔が、笑い声を上げる。それだけで風が巻き、砂塵が舞った。たまらずそばで見ていた御坂達が腕で顔を守る。

「……ッ、一体どうやったのよ、アレ?!　まさか能力のカタマリみたいだった、あの胎児を乗っ取ったの!?」

「恐らく、そうだ！　手段は分からんが、幻想御手（レベルアッパー）のネットワークそのものにアクセスし、中枢をハッキングしたんだ！」

「そんなこと出来んの？」

「出来ないから、私はここにいるんだ！」

砂塵の騒音に負けないように、互いに声を張り上げながらの会話。そんな中別のところから、ほんのわずかな声が上がった。

『――――ス』

風に紛れ、聞こえてきた、それ。それは本当にわずかな声。

『――――ィス』

けれども、ソレは――――

『キィィィィィィス!!!』

――――ありとあらゆる感情をぶつけるかのようだった。凄まじい速さで両腕が振るわれ、たちまちキース・グレイが空中で細切

れとなる。
『ははは！　再会の快哉にしては、激しいじゃないか！』
しかし、目の前の存在はそんな攻撃、何の痛痒も感じないかのように、ただひたすら笑みを浮かべ、元通りとなる。
『我が前に現れるとは、いい度胸だ――二度とキース共（キサマら）が蘇れぬよう、完全に滅ぼしてくれる！』
『熱烈だね。だけど――出来るのかい？』
言葉とともに、空中に巨大な氷柱がいくつも浮かぶ。そして、弾丸の速さで以て射出された。
『我に、こんなトロい攻撃が通用するか!!』
バンダースナッチがとった行動は、腕の一振り。ただそれだけですべての氷柱は砕け、辺りを氷の欠片が舞った。
『ヒュ――――オオオオオッ！』
『はは、ははははははははは!!』
雪片が舞い、空気が凍てつく中、二体の異形の戦いは幕を開けた。
「うあ！」
「く……！」
その闘いを間近で見ていた二人は、これ以上巻き込まれないよう、初春を連れてその場を離れた。
「アイツら……！　パワーといい、規模といい、超能力者（レベル5）クラスはあるわよ！」
「これが、ナノマシンというただの人工物で行われるとは……つくづく規格外だな」
原子力施設のフェンスの陰でようやく人心地ついたが、覗き見る二体の戦いは苛烈で、いつ何時施設が消し飛んでもおかしくなかった。
「…ん……」
そんなとき、ようやく気絶していた初春が目を覚ました。
「あ、あれ？　御坂さん……ここは……」
「初春さん、大丈夫!?　本調子じゃないなら、無理に起き上がらなくても、いいわよ！」
寝起きでぼーっとしていた初春だが、やがて意識がはっきりすると

ともに、辺りの惨状に気が付いた。
「御坂さん……これは……」
「……」
初春の疑問に、御坂も木山も答えない。その代り、二人の遥か後ろに、巨大な顔と、それに対峙する『白い腕』の異形が見えた。
「……佐天さん？」
それは、理屈ではなく直感。初春には何故か、その白い異形が自身の親友と重なって見え――――苦しんでいるように見えた。
「御坂さん、木山先生！　どうすればあの『二人』を止められますか！」
起きてそうそう、血相を変えて迫る初春に二人は呆気にとられ、次に状況を鑑みて、言葉を濁した。
「すまん……正直、今の私たちにあの二体を止める術はない……」
「あの『キース』ってやつは、佐天さんを止めるためにさっきの胎児を乗っ取ったみたいだけど……それもどこまで本当か……」
そもそも『キース』が確実に止めてくれる保証などない。それでも二人は、為すすべなくここで見ていることしか出来ず、歯がゆかった。
「木山先生。あの巨大な顔の方は、もともと先生の身体から出てきた『胎児』なんですよね？」
「あ、ああ……その通りだが？」
「だったら、そっちを止める方法を教えてください！　佐天さんが止まった後、あの人がさらに手出しとかしないように!!」
初春にとって、キースは全く知らない人物でしかない。そんな人物に親友の命運を託せるはずもなく、むしろその後、佐天に危害を加える可能性の方が恐ろしかった。彼女の心配は、まず第一に、親友なのだ。
それを理解したからこそ、目の前の二人もまた、ここでやるべきことに気付けた。
「……わかった。鍵となるのは、君の持つ≪幻想御手（レベルアッパー）≫のワクチンプログラムだ」
◇　◇　◇
『があああああ！』

戦場では、一進一退の攻防が繰り広げられていた。キースはレベルアッパー被害者が保有していた能力を駆使し、炎を、氷を、雷を産み出し、バンダースナッチを攻め立てた。対するバンダースナッチは、その両手の爪から斬撃を繰り出し、周囲に氷雪の竜巻を産み出した。だが、そのすべてがキースには通用せず、ただ時間だけが過ぎていった。

『――――つまらないな』

そんな攻防の中、遂にキースが動いた。

『僕が見たいのは、そんな単純な能力じゃない。君が持つ、絶対的な〝滅びの力〟なんだよ』

視界の中、バンダースナッチは返答しない。その光景は、かつての姿を知る者には、余りにも予想外の光景で。

『移植者の意識がまだ残っていて、ブレーキをかけているのか？……いや、これは』

キースにとっては、結論を出すのに、充分な証明だった。

『≪アリス≫の禁則、か』

『！　黙れぇっ！』

その言葉に激昂し、バンダースナッチが宙へと浮かび上がる。その動作はあまりに無防備。

突如、ガクン、と空中でバンダースナッチの動きが止まった。

『何の変哲もない、ただの『念動能力（テレキネシス）』だよ――君が力を見せないなら、無理にでも引き出してあげようじゃないか』

そうして、髪の毛のように広がる触手を輝かせたかと思うと、触手の周囲からキラキラと光る薄片が戦場に目がけて降り注いだ。

『『空間移動（テレポート）』の派生能力の一つ、『物体移動（アポート）』だよ。能力自体はそれほどランクも高くない……ただし』

不意に、周囲に散らばった薄片に、力が溜まっていく。メキメキと、空間そのものが収束する。

『例えば――――アルミ片を呼び出して、『量子変速（シンクロトロン）』と組み合わせたらどうなるかな？』

次の瞬間、戦場全てが弾け飛んだ。

「佐天さん?!」
巻き込まれないよう、近くで見ていた御坂が絶叫を上げる。それほどに凄まじい爆発だった。――だが。
『――――いいだろう』
爆炎が晴れた時、そこには変わらず白い異形の姿があった。
『そんなに、その身に刻みたければ見せてやろう!!』
叫びとともに、バンダースナッチが肉薄する。キースはそれに対し、触手を伸ばすことで応戦する。それを見て、バンダースナッチの爪が、白く光り輝いた。
『邪魔、だあああああっ!!』
輝きを増した爪によって、触手は全て細切れとなった。周囲に飛び散る肉片。その一つをバンダースナッチが右腕で掴んだ。
『……聞こえる』
肉片は、バキバキと形を変える右腕の中へと取り込まれ、塵と化す。その中に内包された様々なものが、新たな力を産み出していく。
『〝憎悪〟の声……〝絶望〟の声……この血肉となった者たちの声が、我の中へと流れ込む!』
その右腕には新たなトゲが、爪が生み出され、すべての爪が向かい合うかのように並んでいく。
『我に〝力〟を……我に〝力〟を!!』
爪はやがて、その間に光を灯す。それは、かつて絶望の中、一人の少女が産み出した〝力〟。
『その〝力〟が我に命じる――――』
絶対の――――〝滅びの力〟。
『〝全てを滅ぼせ〟と!!』

右腕に内包した〝力〟は、時間とともに輝きを増し、まるで太陽をその手に掴んでいるかのようだった。
『はは、ははは! やればできるじゃないか!』
『キィィィス!!』

『だけど――』

発射の瞬間、キースは意識を集中させる。ただそれだけで、バンダースナッチの身体は『念動能力（テレキネシス）』で反転した。

『学園都市を消し飛ばされるのは、困るんだよ？』

そう嘯くキースをかすめ、バンダースナッチの放った光球が空へと昇っていく。――そして。

空が、爆ぜた。

「キャアアアアア!?」

「く……!!」

戦場から離れ、地面にいたはずの二人にも伝わるほどの衝撃。轟音と衝撃は、この時学園都市中を揺るがした。

「……？　なに、これ……」

「これは……ダイヤモンドダスト、だと……？」

空を凍てつかせる爆発は、上空の雲を吹き飛ばし、ありとあらゆる水分を凍結させた。

『ははははは！　そうでなくては足りないよ、バンダースナッチ！　これで僕の計画も――ん？』

キースの意識を逸らしたのは、戦場に不意に流れ出した音楽。どこか感情そのものに訴えかけてくるような不思議な音楽。

「成功したか！」

「レベルアッパーのワクチンプログラム――悪いけど、アンタは信用できないのよね！」

『へえ……まあいいさ。制限時間内に神獣（バンダースナッチ）を抑えるくらい――』

言葉は、途中で途切れた。

『グ……ウウウウ……』

空中で静止していたバンダースナッチの爪が光を増し、徐々に、徐々にその身を縛る念動力が軋みを上げ始めた。

『ガ――――アアアアアッ!!』

爪が奔り、拘束がはじけ飛んだ。

『その爪――』

バンダースナッチの爪が、白く、眩しいほどに輝いていた。その爪に注目し、次の瞬間、キースは哄笑を響かせた。

『あはははは！　そうか、そういう方向に進化したか！　やはり、君たちオリジナルは興味深いよ！　さあ、おいで、バンダースナッチ！　その爪を、僕に突き立ててみたまえ！』

『キィィィィィィス!!』

炎が、雷が、氷が、降り注ぎ、驟雨となって襲い掛かる。対して、そのすべてを爪で引き裂き、迫る触手を引き千切りながら、神獣が奔る。

『があああああっ!!』

そして、遂にキースにたどり着き――その左目に、五本の爪痕を刻み込んだ。

『――見事だよ』

何の能力によってか、千切れた触手が殺到し、次の瞬間、神獣は大爆発に巻き込まれた。爆煙の中、急速に元の姿に戻り、裸となった佐天涙子は――地面へと落ちた。

『これで、僕の計画も大幅に進む……さて、そろそろ閉幕といこうか？』

そう呟くと、額の辺りから何かの結晶体がせり出した。

『これは、≪幻想御手（レベルアッパー）≫被害者の力を束ねる、≪幻想猛獣（ＡＩＭバースト）≫のコアだ。これを砕けば被害者は全て元に戻る。その役は――君にお願いしようじゃないか』

視線の先、御坂美琴は悔しそうに唇を噛みしめ、親指の先に一枚のメダルを備えていた。彼女にも分かっていた。全て目の前の存在の掌の上で動いていたことに。

「……次は、負けない」

『――期待しているよ？　人間』

こうして、≪幻想御手（レベルアッパー）≫事件は幕を下ろした。

◇　◇　◇

「――あれで、良かったのか？」

轟音と衝撃の収まった原子力施設の中。土御門は、先程まで虚空へと意識を集中していた少年に話しかけた。

「……ああ。これで対外的には≪幻想御手（レベルアッパー）≫事件の解決者は『超電磁砲（レールガン）』になるし、また一方で学園都市の『暗部』にはＡＲＭＳの脅威が伝わることになる。後は、僕が何もしなくても彼女は進化していくだろう」

笑みを浮かべる少年の顔には、しかし深い傷があった。その傷痕は『五本』。ちょうど左目の上を走るように、血が滴っていた。

「……しかしこんなお膳立てのために、何故か消えない傷まで負ったのか？　メリットが少なすぎやしないか」

「ふふ……そんなこともないよ。ホラ」

そう言って上げた、少年の指先。そこにはライター程のわずかな『炎』が灯っていた。

「お前……」

「まあ、慣れるまでは時間がかかるだろうけど、他の能力も全ていただいたよ。僕にも、多大なメリットがあったということさ」

そう言って少年は、まるで舞台に上がった俳優のようにクルクルと回り、両手を大きく広げ、愛おしむように呟いた。

「さあ、バンダースナッチ……もっともっと力を強めておくれ。その時こそ――≪プログラム・アナザーアリス≫の幕開けだよ。ク、ククク、はは、ははははははははは――!!」

笑う、嗤う、哂う。哄笑は響き渡り、産声となる。それは、別たれた運命の歯車同士の再会。世界を巻き込む、壮大なる闘争の始まりだった。

016　親友―ベストフレンド―

――力が、欲しいか？
……イヤ、私は……
――力が、欲しいのなら……
……私は、力なんて……
――〝力〟が欲しいなら、くれてやろう！
……〝力〟なんて、いらないっ!!

◇　◇　◇

暗い路地裏、辺りに立ち込めた淀んだ空気。そして、下卑た笑みを浮かべる少年たち。そんなあまりにも場違いな場所に、現在の佐天はいた。その場にいることが場違いなら、彼女の衣服もまた場違い。なにせ身に纏っているのは病院で用いられるガウンタイプの患者衣一枚で、下着も何もつけていないのだから。
「なあなあ、お嬢ちゃん。随分寒そうな格好だな」
「……」
「なんなら今からオレらの行きつけのトコ行かね？　あったまるぜ？」
「……」
「まあ、お嬢ちゃんは食われちゃうかもしれねえけどな！　ぎゃはは！」
「……」
反応は、無い。どんな下卑た言動にも、今の彼女は反応しない。そんな彼女の様子にふといぶかしんだように、一人の少年が手を伸ばした。
「オイオイ、怖くて声も出ねえんじゃ――」
肩に置かれたその手を、少女の細い右手が、ふと掴んだ。
「――あん？」
次第に、その右手に力がこもっていく。最初は少女にしては少し強いくらいの力だったが、徐々に、徐々に肩を掴んでいた少年の顔に動揺が浮かんでいく。

「――っ――――お、おい？　一体なに――――ぎゃあああああ?!」

べきり、と乾いた音を立てて、少年の手首が砕かれた。転げまわる少年の姿を、少女はただ冷たく見下ろしている。

たちまち場が、殺気立つ。今までタダの獲物でしかなかった少女を、周りの少年全員が、その手に武器を持ち、一斉に襲い掛かった。

……それからしばらく後、辺り一面に鉄臭い匂いと、ひっひっとしゃくり上げるような僅かな呼吸音、そしてぴちゃぴちゃと滴が落ちる音だけが残っていた。

◇　◇　◇

血にまみれた患者衣に頓着せず、佐天涙子はぺたぺたと病院のスリッパで路地裏を歩いていた。

「……」

その視線がふと、自分の脇腹へと下がる。そこには衣服の下から今なお広がる、赤いシミが存在していた。先程の少年の一人に、脇腹を『刺された』のだ。

だというのに、目の前の傷口は蒸気のような煙を上げ、今まさにその痕を消そうとしていた。

「ははっ……」

不意に口から洩れるのは、空虚な笑い声。だって目の前の傷口は、あのカエル顔の医者（せんせい）の言葉を証明していて。

――君の身体には、現在ありとあらゆる場所に、ナノマシンが散らばっている

「ははは……」

――このナノマシンが、君の身に起きた数々の変身能力の根源だとは分かっている。問題はそこからだ

「あははは」

――ナノマシンは、心臓はおろか、脳の一部にも擬態して潜んでいる。そして現在の僕の技術では、すべてのナノマシンの除去は出来ない

「あはは、ははははは」
――……すまない、佐天君
「っ――」
――君を治すことが、出来ない……
「あはははははははははははははははははは！」
哄笑は、やがて、辺りに響く泣き声となった。笑いながら彼女は涙を流し、もう戻れぬ自分の身体を思った。欲しく、なかった。こんな力など、欲しくはなかった。自分が欲しかったのは、ただ……
「佐天さんッ!!」

後ろから、聞きたくなかった声が、響いた。
「佐天さん、探しましたよ！　どうして病院から抜け出したりしたんですか!!」
彼女が助かったことは、病室で目覚めた時、自分に付き添っていた御坂さんから聞いた。無事だったことは嬉しかったし、話もしたかった。でも、駄目だ。

――自分は、もう人間じゃないのだから

「こっち向いて下さい、佐天さ――」
「来ないで、初春ッ!!」
決して振り向くことなく、拒絶の言葉を口にした。
「来ないで、絶対に来ちゃ駄目……」
「何を、言ってるんですか、佐天さん？」
「私は、『化け物』なの!!」
そうだ、自分は化け物なんだ。もう彼女とは一緒にいちゃいけないんだ。
「笑っちゃうよね……私の身体、あんなにとんでもない戦いがあったのに、もう傷一つないんだよ？」
「……」

「さっきだって、路地にいた不良に刺されたのに、もう傷口もなければ、痛くもないの……それ位の化け物なの」
「……」
「こんな、こんな身体を持った……化け物、なんか、初春や、白井さんや、御坂さん、とは……」
「……」
きっと、拒絶される。化け物、と拒まれる。親友だった初春から、そんな扱いを受けるのは、今の自分には耐えられない。だからこそ、佐天は自ら離れるつもりだった。もう関わらないつもりだった。しゃくり上げる喉も、鼻を啜る音も、流れてくる涙も、隠したつもりだった。

――――けれど。

「馬鹿じゃないんですか？」
いきなりの罵倒とともに、左耳を引っ張られ、ぐるりと強制的に振り向かされた。
「い、痛っ!?」
「ほら、帰りますよ佐天さん。病院抜け出したことで、私も白井さんも、御坂さんだって、佐天さんのこと心配してたんですから」
「痛い、痛い！　ちょ、ちょっと初春！　なんで手じゃなくて、耳を引っ張ってるの!?」
そのままズルズルと、路地を引っ張られる。その間一向に耳を放してくれないので、遂には悲しみじゃなく痛みで涙が出てきた。
「ちょっと初春！　人の話聞いてた?!　私は、人間じゃないんだって!!」
その言葉にズンズンと進んでいた初春の足が、ピタリと止まった。
「――それが、どうしたって言うんですか？」
それは、とんでもなく低い、初めて聞く初春の声。
「化け物だの、人間だの……そんなどうでもいい『線引き』で、私たちが怖がるとでも思ったんですか!!?」

初めて聞く、彼女の純粋な『怒り』だった。
「レベルだとか、能力だとか！　人間だとか、化け物だとか！　そんなことで、私も皆も、友達を決めたりしません!!」
その言葉は彼女の本当の本音だと分かった。そして、だからこそ。
「佐天さんは、何があったって、私の親友です!!」
――佐天（かのじょ）が、本当に言って欲しかった言葉だった。
「……っ、う、ふ、え……」
途端にしゃくり上げる少女と、その背中をあやすように叩く少女。
路地にはしばらくの間、静かな泣き声だけが響いていた。
◇　◇　◇
病院に戻ってみると、散々だった。
初春は佐天を見つけたはいいものの、連絡を入れ忘れたらしく、運よく戻っていた御坂と、携帯で連絡を受け空間移動（テレポート）で戻ってきた白井から、こっぴどく怒られた。佐天は病院を抜け出したことについて、初春は連絡を入れ忘れたことについてである。説教の間中、二人は病院の玄関先で正座して、怒鳴り声を聞くこととなった。
「――そろそろ戻ろっか、黒子」
「そうですわね、お姉様」
一時間ほどしてようやく解放された時、二人の足の感覚は無かった。
「あ、足が～～……」
「あう、ううう……」
足をもみほぐしながら立ち上がったが、それでも足元はフラフラとおぼつかなかった。
「自業自得よ。ホントに心配したんだから……」
「佐天さんについては、これから主治医の方からも有り難いお説教がありますの」
目の前の二人に、慈悲は無かった。
重い足取りをフラフラと動かしていると、横から肩を持ち上げられ

る感覚を持った。そこにいたのは、一緒に怒られ、一緒に泣いてくれた、掛け替えのない友達。

「――――アリガトね、初春」

視線を外し、前へと向き直ったその瞳には、すでに迷いはなかった。

017　記憶―メモリー―

第七学区のとある病院。面会時間の過ぎた夜、ある病室から、そろりそろり、と出ていこうとする人影があった。病院内で用いられる患者衣ではなく、ラフな街着を纏ったその少女は、病室の扉を後ろ手に閉め、誰とはなしに呟いた。

「スイマセン、先生。全部終わったら戻ってきますから――」

「何が全部終わるんですの？」

「――うひゃい!?」

突然予想もしていなかった返答を投げかけられて、奇声を上げながら飛び上がった。少女が目を向けると、廊下のベンチに見知った顔が三人、揃っていた。

「なにか、様子がおかしいと思いましたら……」

「昨日の今日で、黙って抜け出そうなんて、いい度胸してるわね？　佐天さん」

「どこ行く気なんですか？　佐天さん」

白井黒子、御坂美琴、初春飾利。病室から抜け出そうとした、佐天涙子のかけがえのない友人がそろい踏みだった。

「あ、はは、ははは……」

◇　◇　◇

「学園都市外の『能力者』か……」

三人がかりの詰問で、数日前に起こった『魔術師』を名乗る炎使いの神父との顛末を話した佐天。三人は『魔術』なんていうオカルトは信じていなかったが、外で能力を開発した集団が使った別名だろうと解釈して、起こった事件については信じてくれた。その上で、全員でその事件の解決のため、動こうとしてくれている。

「その、佐天さんが崩壊させたという学生男子寮なら存じてますわ。初春」

「はい。確かに佐天さんが話してくれた日付で、アパートの崩壊が一時期事件として取りざたされています。……ただし、その後すぐに、

『ガス爆発』による事故と処理され、以降この事故の再調査は、禁止されています」
「やっぱり、かあ……」
　佐天にとってみれば、それは別におかしいことではなかった。本来あれだけの崩壊を引き起こした自分は、病院収容中に身柄を拘束、そのまま施設送りになっていてもおかしくなかったはずだ。それなのに、今もこうして自由であるということは。
「それで、初春、その再調査を禁止したのは、どこなの？」
「えっと、統括理事会の権限によるものですね……」
「それはまた、随分と大物ですわね」
「向こうは組織を匂わせる発言だったのよね？　てことは、学園都市の上層部とつながりでもあるのかしら」
「いや、つながりどころか、多分『取引』だと思います……」
　本来学園都市内部に、都市外から侵入者が入ってくること自体有り得ない。その上インデックスは、お世辞にもそうした裏工作に長けている感じには見えなかった。考えられるのは、あの二人は堂々とこの学園都市に入ってきた『客人』なんだろう。恐らく、あの二人に関わる『事件』を統括理事会が黙認する密約まであるのだ。
「それで結局、佐天さんは、あのインデックスの件で出かけようとしてたのよね」
「ええ……なんでもあの後、別の奴にインデックスを預かってた人が襲われたみたいで」
　昼間の内に、男子寮崩壊の時に交換していた連絡先に連絡してみたところ、本人ではなく彼の担任を名乗る女性が出た。詳しく話を聞いてみると、上条は未だ意識不明で、インデックスは何故か無事のまま彼の看病をしているという。ちなみに逃走の時に斬られた背中も今は治ったとのことだった。
「なんでさっさとインデックスを連れて行かないのかしら……？」
「そこなんですよね。なんでわざわざ時間を空けたのか、全くわからないんです」
「組織のしがらみかもしれませんわよ」

「あ、着きましたよ。ここがその小萌先生のご自宅です」
着いたのは、何と言うか貧乏な独身男性が住んでいそうなボロいアパート。少しばかり困惑しつつ、その中の一室の呼び鈴を鳴らした。
『こもえは留守なんだよ。せーるす、お断り、なんだよ?』
「インデックスね? 開けてちょうだい」
『るいこ!?』
ガチャガチャというチェーンを外す音の後、扉が開いて中から変わらない様子のインデックスが出てきた。
「インデックス……元気になってホント良かった……」
「るいここそ大丈夫?! あの時るいこは戦ってくれたけど、魔術師相手に素人が戦ったりなんかしちゃ本当はダメなんだよ!」
「佐天さんか? よくここが――――」
インデックスの後ろから、上条さんが顔を出した途端、後ろで待っていた御坂さんが硬直した。
「あー! アンタは!」
「ん? ってビリビリ!? 何でお前がここに!」
「ビリビリって、言うなあぁぁぁぁっ!!」
……そこで初めて、インデックスを保護していたのが上条さんだと伝えていなかったことに気が付いた。
◇ ◇ ◇
意識を取り戻していた上条さんによれば、インデックスは完全記憶能力を持っており、その記憶の中に十万三千冊の『魔道書』を保有しており、その負担で一年おきに記憶を消さなければならないと言う。
『魔術師』たちが退いたのは、最後の別れをさせるためだと言うのだ。
そして、その期限は、『今夜』らしい。
「……」
話を全部聞いて、佐天はやりきれなかった。インデックスが脳の85%をそんな本に圧迫されているなんてことも、そのせいで記憶を消さなきゃならないなんてことも、全部。
インデックスも、これらの事情は『忘れていた』のか初めて聞いたようで、ずっと俯いていた。動いているのは、何処かに連絡している

白井さんと、何か調べている御坂さんと初春だけだった。
「――そろそろ別れの挨拶はすんだかい？」
佐天とインデックスが動けない中、遂に時間が来たのか、以前出会った二人の魔術師が現れた。赤髪の神父はステイル・マグヌス、黒髪の方は神裂火織というらしく、どちらも過去にインデックスの友人だったことがあるらしかった。
インデックスは何も語らず、ただ二人の魔術師の後に従おうと――
「アンタたちね？　１年ごとに記憶を消さなきゃいけないなんて、ホラ話信じてた奴らって」
御坂の言葉が全てを切り裂いた。
「なにを――私たちがどんな思いで！」
「人間の脳味噌は、高々本の内容を十万も二十万も詰め込んだくらいでパンクなんてしないわよ。それがどんなに分厚くて内容が濃い書物だってね」
「そもそも人間の脳は生涯全ての出来事を記憶したとしても、丸々１４０年分の記憶が可能ですわ。その上最新の脳医学では、『知識』と『経験』の記憶は入れ物そのものが異なるとされています。『知識』の書物で、『経験』の記憶が圧迫されることなんて有り得ませんわ。完全記憶能力者の症例も、医学界にはちゃんと存在しますの。初春、出せますわね？」
「はい、同一の症例に関する医学論文と、後は『高齢』の完全記憶能力者の管理するブログです。中には７０代の人もいるみたいですね。もちろんこれらの人達は、一度も記憶を消す処置なんて受けてません」
全ての前提が、覆った瞬間だった。
「……そんな、ハズはない。現にインデックスは前の時も１年の期限が来るにつれ、頭痛をこらえ、苦しんでいた！　あの症状が幻だったとでも言うつもりか!?」
確かに、ステイルが言うそれは事実なのだろう。けど、それが記憶のせいだとは限らない。
「……もしかして、『魔術』？」

「学園都市にも精神系能力者がいるし、その最高峰が常盤台にいるけど、そいつはやろうと思えば、予め仕込んでおいたタネを、特定のタイミングや時間差で発動させることが出来たわ。その類だと思えば、別に珍しくもない能力よ」

つまり1年の期限は、魔術で設定されたもの。彼女はイギリス清教の所属で、魔道書は爆弾や兵器のようなものという話だったから、保有しているソレを逃がさないようにするのが教会の判断だったのだろう。記憶消去の処置は教会の人間が行うらしいから、必ず1年ごとに教会に戻させるための足かせだったのだ。

……そこまで論破され、二人の魔術師が呆然とする中、インデックスが突如青白い顔をして倒れた。

「インデックス?!　くそっ、しっかりしろ！」

「……！　どけ、能力者！　彼女はもう限界だ。今記憶を消しておけば、とりあえず命は助けることが出来る」

インデックスを抱き留めた上条に、ステイルが詰め寄る。その言葉を聞いたとき、遂に彼が吼えた。

「とりあえず……？　いい加減にしやがれ、魔術師！　お前はインデックスを助けたかったんじゃねえのかよ！」

その言葉に、動こうとしていたステイルの動きが止まる。動けない。動けるはずは無かった。彼自身、かつてはそうだったのだから。

「俺達はインデックスを助ける！　その気が無いなら、黙ってみてろ！」

そう言って、彼女を地面に横たえ、右手で髪をかき上げる。髪は冷や汗で額に張り付いていた。

「御坂！　お前が言ってた、時限式の能力だか魔術だかってどこに仕掛けられてるんだ!?」

「え？　うーん、精神系の能力者なら、脳ね。そうでなくても、これだけ頭痛を訴えてるんだから、多分頭のどっかだと――」

「さっきから頭をあちこち触ってるけど何の反応も無いんだ。頭に仕掛けられてるなら、これで壊せるはずなんだけど」

「は？　壊せるってなに？　もしかして、アンタのその変な右手のこ

と？」

その言葉に、上条は頷き、右手を前に差し出した。

「俺の生まれつきの能力なんだ。この右手で触れさえすれば、『神様の奇跡』ですら打ち消せる。能力だろうが、魔術だろうが、所詮ただの異能だからな」

「「「……」」」

それを聞いた学園都市の住人は、全員が絶句した。この少年の能力は、学園都市中の能力者にとって、完全なる上位にある。レベル判定など意味なく打ち消せるというのであれば、切り札（ジョーカー）とでも言うべき能力。

「とうま……」

上条が魔術の痕跡を探す中、朦朧とした意識の中で、インデックスがうっすらと目を開け、呟いた。

「忘れたく、ないんだよ……とうまの事も、るいこの事も……もう一回会えたみことも、かざりも、それに……」

言葉の途中で、二人の魔術師を見る。

「わたしが、忘れちゃって……すごく悲しませちゃった、二人の事も……二度も忘れたく、ないんだよ……」

その言葉に、神裂は、持っていた日本刀をバキリと音が鳴るほど握り締め、ステイルは口元の火のついた煙草を握りつぶした。そんな中、インデックスを離れた位置から見ていた初春が叫んだ。

「上条さん！　今インデックスの口の中に、何か光るものが見えました！」

その言葉に、全員がインデックスを振り返る。そうか、『口』。確かにそこも脳に近い。普段隠す目的なら、確かに理にかなった場所だ。

「インデックス。少し口を開けてくれる？」

「ん……あー……」

開かれた口の中。上あご、喉の辺り。確かにそこに、文字とも紋様ともつかない模様が浮かんでいた。少し我慢してくれ、と断って、上条がそこへと指先を伸ばす。

バギン、と言う音は、戦いの号砲だった。

風が捲き、力が唸る。禍々しい光がインデックスへとまとわりつき、空中に浮かび上がらせた。

「――警告、第三章第二節。Ｉｎｄｅｘ（禁）―Ｌｉｂｒｏｒｕｍ（書）―Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ（目録）の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認」

少女の瞳は、得体の知れない何かに縛られ、その声は無機質で機械的。それは明らかな異常の顕現。

「再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能。現状、十万三千冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

記憶に縛られた一人の少女を救う戦いが、始まった。

018　少女―ガール―

『自動書記（ヨハネのペン）』。インデックスの持つ魔導書を脅かす敵対勢力を、自動で排除する防御機構。それこそが彼女に『首輪』とともに仕掛けられた魔術であり、彼女を縛る鎖だった。

それが発動した彼女にはもはや意思と呼べるものは存在しない。ただただ敵対勢力を排除するための機能だけが働いていた。その無機質な瞳に、彼女と食事を共にした三者と上条は、驚愕と戸惑いを浮かべていた。

「これより特定魔術――『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

瞳から魔方陣が浮かび上がり、世界を浸食していく。空間が歪み、この世ならざる『なにか』が顕現する。その場にいたすべての人間が、その存在を感じとり、背筋を凍らせた。

「ド、『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』だと……なぜ魔力のない彼女が、そんなふざけた魔術を！」

「いけません！　あれは、人の身で防ぐのを考えることすら馬鹿らしい、伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です！　逃げて下さい！」

その存在をよく知るがゆえに動けないでいる魔術師二人に対し、咄嗟に前に出る存在はいた。上条当麻。神の奇跡すら打ち消せる少年。その光線状の必殺の一撃に対し、彼はただ『いつものように』その右手を突き出した。

「く……おぉおおおおおおおおおお!!?」

突き出した右手から、バキバキととんでもない音が伝わってくる。衝撃に膝を屈しそうになる。

「やめろ、退がれ！」

「そうです！　聖ジョージのドラゴンの一撃を人の身で凌ごうなど――！」

その攻撃の恐ろしさを知るがゆえ、魔術師はその少年を退がらせよ

うとする。だけど、退かない。退くわけにはいかない。
「ゴチャゴチャ言ってんじゃねェ！　テメェら、ずっと待ってたんだろ？　誰もが望む幸福な結末（ハッピーエンド）ってヤツを！」
きっと誰もが望んでいた。インデックスの記憶を奪わなくてもすむ方法を。誰もが笑える幸福な結末を。皆が主人公（ヒーロー）になりたかった。皆が絵本みたいに映画みたいに、たった一人の女の子を守る魔術師になりたかった。
――それは、終わっても、始まってもいなかった。長い長い序章（プロローグ）に過ぎなかった。
「――手を伸ばせば届くんだ。いい加減に始めようぜ、魔術師!!」
後少し。ほんの少し。手を伸ばせば届くから。どうしようもないと思っていた、インデックスの運命に、後少しで届くから。ギシギシと腕を軋ませ、それでも押し切ろうとしたが、圧力に耐え切れず、突き出す指がバキリと鳴った。
「Ｓａｌｖａｒｅ０００！」
神裂の鞘から何本ものワイヤーが伸び、インデックスの足場を見事に斬り飛ばし、光線を上空へと逸らす。砕けた屋根の破片が幾片もの光の羽根へと変わった。
「あの羽根は『竜王の殺息』と同種のものです。当たればただでは――」
「任せなさい！」
数え切れないほどの羽根に対し、御坂が前へと進み出て、無数の電撃で全て薙ぎ払う。その間に再びインデックスは体勢を整えようとし、真上から降ってきた『畳』にわずかに身体が傾いだ。
「……まったく、あくまで武装解除しか出来ないラスボスとは……難解さ、ここに極まれり、ですわね」
畳を送ったのは白井。直接攻撃が憚られたため、あくまで牽制目的の攻撃だった。もっともわずかに時間を稼いだだけで、インデックスは再び光線の照準をこちらへと向けた。
「Ｆｏｒｔｉｓ９３１！」
その必殺の光線を受け止めたのは、≪魔女狩りの王≫イノケンティ

ウス。ステイルが作り上げた、彼女（インデックス）を守るための魔術だった。
「行け、能力者！」
ステイルの叫びに、上条は走った。そして、その横に同じように走る存在がいた。
「行ってください、上条さん！」
佐天がその右腕のＡＲＭＳを発動し、液体窒素の斬撃を叩き込む。空間が歪んでいるせいか直撃はしなかったが、周りに冷たい煙が立ち込め、インデックスの視界を覆い尽くす。
（これで――――！）
上条が佐天の生み出した煙の中へ突き進む姿に、その場にいた人々はわずかに勝利を確信した。だがその確信は、最悪の形で覆されることになる。
上条がインデックスの元にたどり着くわずかに前、『竜王の殺息』が突如として姿を消した。
「――敵対勢力の、増大を確認」
その声が届いたのは、僅かに前に出ていた佐天と上条だけだった。
「――右（ＴＴＲ）を、向きなさい」
その言葉が発せられた瞬間、つい先ほどまで『竜王の殺息』を受け止めていた≪魔女狩りの王≫が、突如として向きを変えた。
「は――――」
「な――――」
その行動は、その場の全員にとって完全な予想外だった。イノケンティウスが守ってくれると思った上条にとっても、それを先程まで制御していたステイルにとっても。イノケンティウスがその右腕を上条へと振りかぶっても、誰一人対処することが出来なかった。
「駄目ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
すぐ近くにいた、佐天以外は。隣にいた上条を押しのけ、ＡＲＭＳで炎の魔人の右腕を受け止める。その瞬間、佐天の身体も炎に包まれた。
「きゃぁぁぁぁぁあ゛あ゛あああぁぁぁぁぁぁ!?!!」
髪も衣服も、そのすべてが魔人が発する業火に焼かれ、呼吸も妨げ

られて、佐天は激しく咳き込んだ。

「佐天さん!?　いやあッ!」

「『強制詠唱（スペルインターセプト）』で、僕のイノケンティウスを乗っ取っただと?!　そんなバカなことが……!」

炎に包まれる佐天を見ながら、その場にいる誰も動くことが出来ない。それほどに炎の魔人の熱は圧倒的で、それが敵に回ったのは、確かに絶望的な出来事だった。

――しかし、本当の絶望は――

――力が欲しいか?

――これからだった。

『グゥッ……』

火炎の中から声が響いた。今も炎に包まれる少女とは全く似つかない声。その事実に事情を知らない魔術師二人と上条が、怪訝な顔になるが、彼女の友人三人は別だった。

『グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――ッ!!』

炎は、内部から顕現した極寒の竜巻に吹き消された。そして、中から純白の獣が、その姿を現した。

『我は滅びの獣、バンダースナッチ――』

姿を現したその異形に、誰も声を出せない。その姿を知る三人の少女も、その獣を初めて見る魔術師二名と上条も。誰もが息を飲む中、獣の咆哮だけが響き渡った。

『――我を覚醒（めざ）めさせた愚か者よ。その存在、欠片も残さず滅ぼしてくれる!』

獣の標的は、攻撃を加えたインデックス。その正面に、吹雪で形状を崩されたイノケンティウスが、再び生じる。

「――敵対勢力の最大戦力を確認。これより排除に移ります」

滅びの神獣と、炎の魔人。そのあまりにも規格外の光景に、初春は地面にへたり込んでいた。その内心には、どうしようもない絶望が渦

巻く。
（こんな状態で、どうやってインデックスを救うって言うんですか……？）
自分たちは、インデックスを救いたいのだ。だけど、佐天が姿を変えた純白の獣は、そう言った事情を斟酌してくれるとは到底思えない。例え今のインデックスを止められたとしても、その代償は、インデックスの命かもしれなかった。
（もう……）
初春はついに、この先の惨劇を見たくなくて、両手で顔を覆った。
もう、止められない。もう、救えない。
（もう……ダメ……）
絶望と、〝諦観（あきらめ）〟という名の闇が立ち込めた。

――諦めないで!!

闇の中を、一つの光（こえ）が斬り裂いた。
――どんなに絶望的でも……
その光（こえ）は、聞いたことも無い少女のものであり――
――〝意志〟を捨てちゃいけない!!
青いドレスを纏った、見たことも無い少女の姿で、初春の前へと降り立った。

019　青―ブルー―

それは、さながら神話の戦いのようでした。
『うぉおおおおおおおお！』
『――――――――――！』
獣の咆哮を上げるバンダースナッチと、それを受け止めるイノケンティウス。冷気と熱気を纏う両者は激しくぶつかり合い、たちまち広くはない部屋は砂のように崩れ去った。
「うわぁあ!?」
その部屋の瓦礫によって押しつぶされそうになった上条が目を瞑った瞬間、瓦礫は空中で破片となって斬り裂かれ、日本刀を手にした神裂が目の前に降り立った。
「一度、離れます！　皆さん、私の後に！」
「っ、待ちなさい！　あの状態のインデックスと佐天さんを置いていくの!?」
神裂の言葉に、御坂が噛み付く。彼女にとってはインデックスもほうっておけないが、佐天だって大事な友人だ。その両方を放置するなど出来ない。
「気持ちはわかりますが、あの状態の両者の間に入るなど自殺行為です！　こうなっては戦況を見守ることしか出来ません」
「僕も、神裂に賛成だ。ここまで来て、インデックス（あの子）から離れるなんて歯がゆくはあるがね」
二人の言葉に、御坂も上条も俯く。確かにあんな激しい戦闘に介入すれば確実に命は無い。二人とも絶え間なく続く戦闘音からそれは分かっていた。
「あ、あの……」
不意に新たに聞こえてきた声に振り向く。そこには震える足で立ち上がろうとする初春と、それに肩を貸す白井。そして、その目の前に青い服を着た一人の少女がいた。
『――――皆さん、力を貸してください』

近くからのような、遠くからのような不思議な少女の声が全員の頭に響いた。耳ではなく、直接頭に響く声に驚いたのは魔術師二名。対して、自身に備わる『電撃使い（エレクトロマスター）』の能力との干渉を感じ取り、不快な顔をする御坂と、全く何も聞こえないため、怪訝な顔をする上条がいた。

「お、おいどうしたんだ、お前ら？　急に黙って？」

「ハア!?　今目の前のコが話しかけてきてるじゃない！　少し静かに――」

『いえ、恐らく彼の持つ力と私の『声』が干渉しているのでしょう。そうですね――』

少女が見つめると、上条の頭で光の粉がわずかに瞬いた。

『これでいかがですか？　頭の中でＶＴＲのように流れるはずです。頭を触らないで下さいね』

「お、おう。って、これは……」

そのまま上条が黙り込む。それを確認し、改めて少女はその場にいる全員に語り掛けた。

『皆さん、インデックスと呼ばれる少女と、『佐天涙子』を助けるために、私の作戦に協力して下さい！』

◇　◇　◇

彼女らが少女と邂逅している間、バンダースナッチとイノケンティウスの攻防は激しさを増していた。

『ぐおおおおお！』

バンダースナッチは爪から液体窒素の斬撃をいくつも生み出し周囲を斬り刻むが、そのすべてがイノケンティウスの持つ燃え盛る十字架によって防がれていた。そしてその隙をつき、インデックスが『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』を放ち、バンダースナッチが避ける。さっきからその繰り返しとなっていた。

『――フン、こちらの攻撃を防ぎ、脅威に対して反撃するしか能のないプログラムか……』

そんな単調な状態を、バンダースナッチが嘲笑する。そして、圧縮空気を噴出し、一気に空中へと舞い踊った。

『見縊るな！　我は滅びの神獣、バンダースナッチ！　そのような人形で、我は倒せん!!』

空中から急襲したバンダースナッチが爪に光を灯し、一気にイノケンティウスを引き裂いた。

『くくっ……がぁあああ！』

そしてインデックスの眼前に着地すると、その口から冷気を吐き出し、インデックスへと吐きかけた。その脅威を感じ取ったのか、インデックスは『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』ではなく、周囲に結界状の力場を発生させる。

『ククク、無駄だ。そんな薄皮、すぐにこの爪で引き裂いて――』

爪をギチリと鳴らした時、横から割入ってくる者がいた。

「吸血殺しの紅十字!!」

「七閃!!」

炎と鋼線が周囲を引き裂き、バンダースナッチに襲い掛かった。それをもろに喰らいながらも、バンダースナッチが攻撃してきた者たちを睥睨する。

『脆弱な力で、一体何の真似――』

「こういう、真似です！」

火炎に紛れて数本のワイヤーがバンダースナッチの手足に巻き付き、壁に向かって引っ張った。

『ぐ……おおおおおお！』

さすがに不意を突かれたのか、壁にぶつかり瓦礫の下敷きになり、バンダースナッチの姿が見えなくなる。

「今です！」

神裂の呼びかけに、後ろから御坂が飛び出し、テレビや時計、アパートのドアなど様々な金属製品をインデックスへと殺到させた。そのほとんどがインデックスの結界に弾かれ、唯一アパートのドアだけは、見当違いの上空高くに飛んでいった。

「ステイル！」

「分かってる！」

ステイルが炎をばら撒き、インデックスの視界が真っ赤に染まった。

「――警告、第五章第一節。侵入者に――――」

「悪いが、終わりだよ」

ステイルのその言葉とともに、インデックスの上に影が差す。それは、上空のアパートのドアの影から、飛び降りた者の影。

「おおおおおおおおおおおお!!」

幻想殺し（イマジンブレイカー）、上条当麻。

魔術の炎も、結界も何もかも突き破って、彼は進む。

――神様。この物語が神様の作った奇蹟（システム）の通りに動いてるってんなら。

「まずは、その幻想をぶち殺す――――!!」

交錯。後に残ったのは、地面へと転がり、打ち付けた背中に呼吸を詰まらせる少年と、まるで硝子（ガラス）のように砕け散った、瞳から生じていた魔法陣を呆然と見つめる少女だけだった。

「――けい、こく……『首輪』……の、致命的な、破壊……再生、不、可……」

その最後の言葉とともに、彼女は糸が切れたように地面へと横たわった。息を詰まらせながらも少女へと這いずり、その穏やかな呼吸に上条も安堵する。

『――――キサマらぁぁあああっ!!』

そんな情景をかき消すように、瓦礫を跳ね除け、再びバンダースナッチが飛び上がる。標的は先程まで戦っていたインデックスだった。

「させん!!」

「いい加減目を覚ましなさいよ！」

ステイルが再びイノケンティウスの制御を取り戻し、バンダースナッチの迎撃に乗り出す。御坂が周囲へ電撃を降らす。対して、バンダースナッチは――――ただ、その『爪』を輝かせた。

『馬鹿め!!』

その声とともに、縦に振り下ろされた『爪』。その『爪』は、空中へ

と『爪痕』を残し、周囲に散らばっていた電撃も、魔人の姿を取り戻していた炎も、何もかも根こそぎ消滅させた。

「え……？」

「!?」

その事実に呆然とする御坂の横で、ステイルは魔術師としての感覚で、周囲の大きすぎる異変に気づき、驚愕とともに今の攻撃の正体を看破した。

「周辺の魔力も、能力も……『爪』が触れたすべてを引き裂いた!?」

それが、今の攻撃の正体。そして、幻想猛獣（AIMバースト）に『爪痕』を刻み込んだ『力』の正体。『異能滅し（アンチイマジン）』。それが『バンダースナッチの爪』に、新たに宿った能力だった。

『我を何者だと思っていた！　我は滅びの神獣、バンダースナッチ！　我に歯向かう愚者よ！　その愚かさ、その身をもって思い知れ!!』

そして、まさにその爪でその場にいる全てを引き裂こうとした時、目の前に少女が降り立った。

『――いけません!!』

『?!』

その少女の姿に驚愕し、バンダースナッチの動きが止まる。その一瞬を、神裂は見逃さなかった。

「はぁあああああ!!」

空中に浮かぶバンダースナッチの脚を捕まえ、ただ純粋な『膂力』で引きずり倒す。あまりにも単純な拘束に、動きが止まっていたバンダースナッチは一溜まりも無かった。

『が……あぁあああああああ!!』

能力でも何でもない、ただの『膂力（パワー）』。それでわずかに上回っていた神裂は、何とか地面にバンダースナッチを縛り付けることに成功していた。

『ぐぅっ……！　キサマ、何のつもりだ！』

バンダースナッチは、自分を拘束する神裂ではなく、あくまで先程自分を制止した少女を憎憎しげに睨みつける。今にも呪詛をあげん

ばかりに。
『その姿は、一体何のつもりだ！』
『――――貴方を、止めるためです』
『フザけるな！　来るな！　キサマなどに――――』
少女がなおも暴れるバンダースナッチに近づき、その手をかざした途端、獣の姿、メタモルフォーゼが溶け崩れていった。
『――――ふう。これで大丈夫です。意識を取り戻せば、元の彼女が戻ってきますよ』
完全に元の姿に戻った佐天に微笑み、再び少女が向き直った。その少女を見つめる全員が、詳しい事情を聞きたい、と目で語っていた。
「助かったが、詳しい話を――」
『残念ですが、時間切れです』
機先を制し、情報を得ようとするステイルの言葉を少女が遮る。見ると、彼女の身体は足元から少しずつ薄れていた。
「待ちなさいよ！」
『ごめんなさい。私は、元々彼女と共に有ったもの。長く〝外〟に出ていることは出来ないんです』
「……っ、ああ、もう！　それなら、名前くらい教えていきなさいよ！　今度会ったら、必ずお礼するから！」
そんな御坂の言葉に、一瞬少女は驚いたような表情をすると、再び微笑み、その名前を告げた。
『――――私は、〝青〟のアリス』
空中に溶けるように消えた、少女が残した名前。それは、ＡＲＭＳにとって余りにも深い因縁の名前。かつて、ＡＲＭＳを産み落とした宿縁の名前は、今こうして異世界の地へと降り立った。

０２０　謝肉祭―カーニバル―

学園都市に存在するカエル顔の医者が運営する病院。そこに、今は真っ白になった少年が入院していた。

「とうま……覚えてない……？」

「……『とうま』って誰の名前？」

「とうま……ほ・ん・と・う・に、覚えてない……？」

「すいません間違えましたごめんなさい！　わたくし上条当麻は天地神明に誓って、此度の事件を一切合財覚えておりません！　だから中学生の裸とか記憶に一切残しておりませんからガジガジと空中で何かを噛む準備をしないでああああああああっ!?」

インデックスが真っ白になった少年に噛み付いているところ、彼の入院する病室の片隅では真っ赤な顔で地面に蹲っている花のヘアピンを付けた少女がいた。

「……見られるなんて見られるなんて……」

「……えぇっと、佐天さん？」

「まあ、ショックですよね。年頃の乙女としては」

「犬に噛まれたと思って、忘れるのが一番ですわ」

周囲で何とか慰めようとしている友人たちの呼びかけも、あまり意味がなかった。

こうなった原因として、インデックスを乗っ取った自動書記（ヨハネのペン）と、暴走したバンダースナッチを鎮圧したすぐ後まで話は遡る。あの時、どちらも大きな怪我人もなく、抑え込めたのは良かったが、バンダースナッチに変化していた佐天の方に問題があった。

彼女の着ていたのは、学園都市で一般に販売されている街着……特別な機能も無ければ、魔術もかかっていない正真正銘の衣料品だったのである。そんなものを着て、全長２～３ｍのバンダースナッチへ変化などすればどうなるか。

当然、『全部』脱げた。

そして、次の瞬間にはパニックになったのだ。何せその場には、上条当麻とステイル・マグヌスというれっきとした『男』が存在したの

だから。幸い二人が一瞬その姿を網膜に焼き付けただけで、次の瞬間には白井が部屋に落ちていた毛布を瞬間移動（テレポート）。不埒者二名には、アイアンクローからの零距離電撃（ビリビリ）と、七天七刀の鞘を使い意識と記憶を失うまで聖人の膂力（チカラ）で殴るという制裁を加えることで事なきを得た。

現在、上条当麻は零距離電撃により、真っ白な灰になりかけたところで病院へと運ばれ、精密検査中。ちなみに翌日一応は見舞いに来たステイルの顔は、ボコボコに腫れ上がっていた。その腫れ上がった顔で、病院だということを斟酌せずに煙草を指で弄びながら、ステイルは言う。

「じゃれ合っているところを悪いが、インデックスのこれからの処遇について、話がある」

ステイル曰く、インデックスは記憶を消去される必要こそ無くなったものの、その記憶に保有する１０万３０００冊の魔道書により、魔術サイドの人間からは常に狙われる心配がある。そのため、魔術サイドからは敬遠される学園都市にこのまま預けたいというのだ。

「問題は、預ける先なんだが」

今ここにいるメンバー以外に、魔術の存在が拡散するのも防ぎたい。そのため何とか誰かの家で預かって欲しい、と申し出たのだ。

「……って、言われてもね」

「私とお姉様は、常盤台の女子寮ですわ。寮監も厳しい方ですし、外部の人間を泊めるのを認めないでしょう」

「私の所は、二人部屋の女子寮で、今度新しい人が入って来るらしいんですよ」

「初春さんはともかく、その新しい同居人まで巻き込めないか……」

この時点で御坂、白井、初春の所は消えた。残るのは、二名。

「なんだ、インデックスの預け先探してるのか？　だったら、俺のところでいいじゃねえか」

「こんな時に、冗談はやめてください」

「そうだね。君みたいな飢えた狼のところに彼女を預けるなんて、そんなことが出来るわけないだろう？」

上条の提案は、聖人と神父のコンビに却下された。しかもその言葉

を受け、インデックスが余計なことまで言う。
「とうまが、飢えた狼……そうかも。はだか見られたし」
「ハァ!?　アンタ、それどういう事よ！」
「痴漢の常習者でしたか、類人猿さん。初春、固法先輩に頼んで警備員（アンチスキル）へ連絡を」
「はい。大丈夫ですよ、上条さん。多分一日いっぱい反省文を書かされて、独房でしばらく過ごすだけですから」
「……やはり、記憶を消さなければならないようですね」
「いや、神裂。記憶だけと言わず、その存在も消し飛ばしてあげよう」
病室内に電撃と火炎が舞い踊り始めた辺りで、上条がベッドの上で土下座をし、誠心誠意謝罪と説明をして、何とか命だけは助けてもらった。そこで再びインデックスの預け先の問題となったが、全員の目が今も蹲って動かない一人の少女へと向かう。
「佐天さん、佐天さん。ちょっと、戻ってきて下さい」
「……うう、初春～。事故だって思っても、やっぱりショックだよ」
「はいはい。後で上条さんを記憶が飛ぶまで殴っていいですから、とりあえず話に参加しましょう」
「は～い……」
確認したところ、佐天は一人部屋であり、今後同居人が来る予定もないため、預け先としてはベストと言えた。もっともこの選択には魔術サイドの二名が難色を示し、佐天に向かい改めて言う。
「……正直な話、君が変化したあの怪物は、僕らに危機感を抱かせるに充分な代物だった。出来ればそんなところに、彼女を預けたくはない」
「私は……ステイルほど、貴女を疑ってはいませんし、あの怪物になるのは瀕死の時か感情が爆発的に高まった時だけだと、貴女の主治医からも聞かされています。それでも、危険があるのではないか、と思ってしまうのです」
その危惧は、当たり前だった。目の前の人物が突然怪物に変わって、見境なく人を襲う。それを知ってしまったら、誰も自分の大事な人をそんな人物と一緒にはいさせたくないだろう。佐天にもそれは

分かっていた。彼女も今回の事を断ろうとしたが――。
「大丈夫だよ？　もしるいこがまた変わっても、今度は私がなんとかして見せるんだよ！」
なんの根拠も無い台詞だったが、当事者であるインデックスのこの一言が決め手となり、インデックスは佐天の自宅に匿われることになった。一応の偽装として、イギリス清教系列の神学校に通う留学生という扱いにし、月々の生活費も支給を受けられることとなった。これについて、魔術師二名に最後まで要求していたのは、インデックスの食べっぷりを知っている御坂、佐天、初春の三者であった。
後、上条の右手は魔術サイドにとって極めて脅威であることから、一応上条はインデックスの学園都市内での後見人に任命された。
「――まあ、こんなところか。それじゃあ僕達は、もう街を出ることにするよ。上層部を問い詰める必要もあるからね」
「そうですね。皆さん、今回は本当にありがとうございました」
そう言って病室を出ていく二人の背中に、最後に声がかかった。
「ステイル、かおり！　ありがとうなんだよ！」
その、いつかと変わらない無邪気なお礼に、二人は顔をほんの少しだけ緩ませると、静かにその場から去っていった。
「……」
そして、そんな二人の去った扉をしばらく見つめていた佐天は、ふとその視線を自身の右手へと落とした。
（アンタが、なんなのか分からないけど……！）
自分は彼ら二人から、大切なインデックスを託された。だったら、もう二度と暴走しちゃ駄目だ。もし暴走すれば、巻き込まれるのは彼女だけじゃなく、初春や御坂さんや白井さんだって巻き込んでしまうから。
（人間（わたし）は、ＡＲＭＳ（アンタ）なんかに負けない！）

決意を、新たにする佐天。だがその一方で、学園都市の『闇』は静かに動き出そうとしていた。

◇　◇　◇

「博士から、面白い映像が来たとは聞いてたけど、本当にコレ機械？」

ある機械とモニターに囲まれた部屋で、小太りの高校生は目の前に映し出される純白の獣と巨大な胎児が戦う映像を眺めていた。映像はどうやって撮ったのか非常に鮮明ではあったが、時折入る不規則なノイズに顔をしかめる。

「こっちの観測機器に影響を及ぼす、強力な電磁波か。対策を張らないと機械には致命的かもね」

そう愚痴りながらも、一度映像を止め、画面の中の獣を見定める。

「――ま、凡夫にも劣るバケモノなんて、この天才である僕にかかれば、簡単に捕まえられるけど」

そうほくそ笑む少年。学園都市の『暗部』に身を置く少年の名は、馬場といった。

◇　◇　◇

「……オイオイ、何だよこりゃぁ」

学園都市に存在するレンタル式の一室。広めのカラオケボックスのようなそこで、茶髪のホスト風の少年が映像の中のバンダースナッチに見入っていた。

「これがナノマシンで出来てるっていうの？　学園都市も随分なもの作るのね」

『今回の依頼は、コレを決められたタイミングで襲ってほしいというものだ』

「ちっ……メンドくせぇ」

横で興味深げに映像を見る赤いドレスの少女と違い、あくまで面倒がる少年。少年こそ、学園都市に七人しかいない頂点。レベル５第二位の者、「未元物質（ダークマター）」垣根帝督。

◇　◇　◇

「ハッハーーーッ！　おい、お前ら見てみろよ！　どうなってんだ、コイツ！　さっぱり原理が分からねーぞ！」

また、同じ映像を見て、狂喜乱舞する者もいた。周りに控えるパワード・スーツを纏った部下たちは、上司の狂態に恐れ戸惑う。
「コイツを襲って捕まえりゃいいんだな?!　面白(おもしれ)え、バラバラに解剖した後でもいいって条件もいい！　いいぜ、引き受けてやる」
顔の左半分に刺青のある男、木原一族の一人、木原数多は、久々の『未知』に心躍らせていた。
◇　◇　◇
「ンだよ、コイツは」
「うわ、超すごいパワーですね。私と互角くらいでしょうか?」
「うひゃー、でも結局麦野に比べれば、大したことないってわけよ」
「……北北東から信号が来てる」
同じ映像を見ながら、些か姦しくなっているところもあった。溜息を吐きつつも、映像を送った女性は言う。
『今回の依頼は、コイツに関してで――』
「あ？　コイツ、どこにいるかも分からないんでしょ？　しかも滝壺の能力にも引っかからない可能性が、極めて高いとか。まず身元とか調べてから、仕事持ってきなさいよ」
『コイツときたら！　それを調べるのもアンタ達の仕事でしょうが！』
「強制とかじゃない仕事で、ンなメンドイこと出来るか。却下」
仕事を面倒だからと断った彼女たちは、『アイテム』。彼女たちもまた学園都市の『暗部』に息づく者たちだ。
◇　◇　◇
そして、同じ映像は学園都市の強力な能力者にも送られていた。彼ら、彼女らもまた、その映像に違った反応を見せた。
「あらぁー……御坂さんも、まぁたトラブル力(りょく)発生させてるわぁ☆」
映像の中に僅かに映った同級生に、少しだけ興味を示す者。
「……」
まったく、何の興味も抱かない者。
「スッゲェパワーと根性だ！　気合入れて、一回手合せしてみてーな！」

闘争心に火をつける者。本当に様々だった。彼らの元に送られてきた映像は、映像の信憑性を引き上げ、映像の怪物の詳細を知ることのできる、様々なデータや資料とともに送られてきた。映像を見た全員がその出所を探ったが、どういうわけかその出所を突き止めることは出来なかった。唯一の手がかりとしては、差出人の欄に書かれた一言の単語のみ。

『灰（gray）』

その単語のみが、その欄に書かれていた。

第二部　進化編
０２１　夏季―サマー―

　ミーンミーンという蝉の鳴き声を、外で聞くのではなく、テレビから流れてくるニュースで聞くようになってしばらく。佐天もインデックスも、夏の風物詩とも言えるその鳴き声をテレビから受けながら、部屋の中で余りの暑さに溶けかけていた。
「るいこ～、暑すぎるんだよ～～」
「ごめんね～～、エアコン壊れたみたいで……」
　元々この女子寮にはエアコンが完備されていたが、数日前に起きた謎の停電と家電製品全滅という怪現象により、常時コンセントが繋がっていたエアコンと冷蔵庫は真っ先に壊れた。テレビが無事なのは、待機電力が勿体ないと佐天がコンセントを抜いていたからだ。冷蔵庫は生活に真っ先に必要な代物なので先に修理を頼んだが、エアコンまでは手が回らなかったのだ。
「それで、お昼なに～～？」
「そうめんだよ」
「……昨日のお昼もそうめんで、朝はにゅうめんだった気がするんだよ」
「あれ、そうだっけ？　覚えてないなー」
　その言葉に、インデックスが肩を怒らせて立ち上がる。
「私は、イギリス清教の敬虔なシスターです。そのシスターの前で偽証は、とんでもなく重い罪になるんだよ？」
　語尾は疑問形だが、とんでもない怒気に塗れた通告だった。内心冷や汗を流しつつ、昼食をテーブルに置く。
「ほらご飯出来たよ。食べ終わったら、出掛けに初春たちのところまで送っていくから」
「むー、るいこは今日『特別こーしゅー』でいないんだったよね。確かにこの部屋よりかざりのところの方が涼しいかも……」
　そう言うとインデックスは凄まじい勢いで器二つ分のそうめんを

たいらげ、出かける準備を始めた。

◇　◇　◇

「じゃあ、佐天さん。特別講習頑張ってくださいね」

「は～～い～～」

学校の正門前で初春に会い、インデックスを預ける間、佐天はコンクリートからの熱に焙られ、嫌になりながら返事をした。

「それじゃあね、るいこー。おつとめ、ご苦労さまです？」

「何処で覚えたのよ、インデックス……」

風紀委員第１７７支部の前で別れ、指定された学校へとバスで向かう。彼女が向かっているのは『幻想御手（レベルアッパー）』事件で昏睡状態に陥った使用者各位に義務付けられた特別講習だ。佐天自身はそこまで深刻な昏睡に至っていないのだが、一応は使用者ということで参加することとなった。

そして講習の内容だが、延々と能力の成り立ちからレベル認定から、様々な講義と検査を受けるといったもの。……正直あの時は、ＡＲＭＳへの恐怖とかで色々追い詰められてたし、こんなに膨大な講習を受けることになるのであれば、もう二度と使用しないと心に誓った。

（にしても……）

講習中に、ふと自分の手を眺める。『幻想御手（レベルアッパー）』を使用してすぐは、意識が遠くなることも無かったため、一応自分の本来の能力は把握してみたのだ。自分が本来持っていた能力は、『空力使い（エアロハンド）』。『幻想御手（レベルアッパー）』を使用してようやく手の平につむじ風を起こす程度ではあったが、あの時確かにそれが分かった。

「あの……『空力使い（エアロハンド）』の鍛え方って、どうすればいいんでしょうか？」

だから彼女は講習の休み時間中に、詳細は隠して自分の能力を伸ばす手がかりを得ようとした。もっとも大したことも分からず、一般的な能力のイメージ方法と、演算の仕方だけしか分からなかった。

『空力使い（エアロハンド）』は通常触れた物体に空気の噴射点を作る能力で、その噴射の仕方も様々となる。触れた箇所が座標演算の基点となるわけだが、そこから単に直射型の爆風を生じさせる能力もあれば、物体その

ものを覆い尽くす『膜』を作る能力もいるそうだ。基点を中心にどんな風をどんな動きで吹かせるかは、個々の才能によるのだそうだ。

佐天の場合、自分の手の平を基点として、つむじ風を発生させていたから、本来は指定した基点から円を描いて風を吹かせる能力なのだろう。

あの事故が無ければ、自分に本来宿っていたかも知れない能力を、佐天は思う。

（罰とかじゃなく……いつか来るかも知れない、未来の自分のためにか……）

講習中に一悶着あり、その場にいた警備員（アンチスキル）の言葉を反芻する。罰則とかじゃない。将来目覚めるかも知れない、もしくは将来もっともっと上がっているかもしれない自分と自分の能力のために。特別講習を受ける意味を考え、自分に本来宿っていたであろう能力へと、目を向ける。

今は、無理かもしれない。けれど、いつか必ず。きっと、いつか。

自分の能力に思いを馳せ、少しだけソレを上げる努力をしようと決意した佐天は、講習の総まとめの時間に少し試してみた。手の平の上に乗せたシャープペンシルを、風だけで回せるのかどうか。結果は失敗。ペンは少しも動かなかった。

「――で、こっちはどうしようかなぁ……」

彼女の憂鬱さをより強めるだけの一枚の紙片。それは特別講習の最後に行われた身体検査（システムスキャン）の結果。半ば予想していたことではあったが、とてつもなく気を重くする内容だった。

佐天涙子、能力名『武器変化（ＡＲＭＳ）』、推定『大能力者（レベル４）』。

……正直、主治医の先生からの診断によれば、身体に散らばったナノマシンが能力として認定されているだけなので、ズルをしたような後ろめたさがある。

（多分……一生このＡＲＭＳと付き合っていくんだろうな……）

帰路のバスの中、彼女は自分の右腕を見つめ、はあ、と息を吐き出していた。

◇　◇　◇

そして、そんな彼女を遠く離れた場所から見つめる少年がいた。
「ふふふ……やはり情報を制する者こそが勝者だね」
彼が見つめるのは、学園都市の要所要所に設置された監視カメラの映像。本来警備員（アンチスキル）位しか確認出来ないそれを、ハッキングして確認しているのだ。
「それにしても、まさか能力扱いで登録しているなんて、つくづく凡夫だね」
そう嘯く少年の名は馬場。先日の謎の映像提供から、該当する兵器・能力を検索し、佐天までたどり着いた少年だ。
「準備は万端――後は仕上げを御覧じろ、ってところか」
そして、彼の支配する猟犬と毒虫が、都市の中へと放たれる。
「行け、『T：GD（タイプ：グレートデーン）』、『T：MQ（タイプ：モスキート）』！　あの女を捕らえ、僕のところまで連れてこい!!」
佐天にとって、初めてとなる学園都市の『暗部』との戦いが始まった。

022　微風―ウインド―

佐天が異変を感じたのは、しばらく経ってのことだった。走行中のバスから何気なく外の景色を見ていたら、歩道側を走る変わったロボットを見つけたのだ。

（――犬型の、ロボット……？）

学園都市に配備されている様々なロボットは、ほとんどがバケツのような円柱型をしている。警備や清掃など用途は別れているが、形状は似ているのだ。動物型のロボットはあまり見たことが無かった。しかも何故かゾウのように鼻が長い。

「何かの実験かな？」

特に危険とも思うことなくそれを眺めていたが、不意に自動運転のバスの目の前に、道を塞ぐ形で無人自動操縦の乗用車が急停止した。

「きゃ!?」

バスに内蔵された緊急停止装置で事なきを得たが、佐天は急な挙動に耐えられず座っていた座席から転げ落ちてしまった。

「あ、痛たたた……」

床にぶつけてしまった膝を摩りながら、何とか立ち上がる。バスも目の前の乗用車も衝突自体はしていないようで、その事実にほっとした佐天だったが、昔交通事故で死にかけた身の上としては、停止したバスの中に閉じ込められている現状は余り好ましくもなかった。どこか不安を感じ、左手で自分の身体を抱き締めるように、ぎゅっと右腕をつかむ。

異変を感じたのは、それからだ。

停止したバスの扉がひとりでに開き、さっきの犬型のロボットが数匹、入って来た。

「え？」

警備員（アンチスキル）でも来ない限り、自動操縦のバスの扉が開くわけがない。そう考えていたのに扉は開き、その上、侵入してきたロボット犬は、何故か自分ににじり寄ってきていた。

「……」

その雰囲気に良くないものを感じ、座席から立ち上がってバスの後部へと後退る。先頭の犬は、四匹。二体が通路に陣取り、もう二体は座席のヘッドレストの上。アンバランスな足場を苦にせず、ひょいひょいとあまりに気軽に近寄って来る。

「……はあ」

ここ最近、どうにも殺伐としたことばかり起こる。やっぱりＡＲＭＳのせいなんだろうか?と内心愚痴ってから、ちらりと左手側から近寄るロボット犬に狙いを定めた。

「下手に壊して、後で請求されたくないのよね……!」

ＡＲＭＳを一気に起動させ、左手側の犬の胴体を右手で掴む。そのまま左側のガラス窓へと投げつけた。バシャン!と大きな音を立てて砕けた窓へ、身体を滑り込ませた。

「修理代は、犬の飼い主にツケといてね!」

バスの中に、そんな捨て台詞を残した。後で風紀委員（ジャッジメント）の「読心能力者（サイコメトラー）」とか出てきた時に、言い逃れするために。この辺り、彼女も怒られ慣れてきたのかもしれない。

「っと、やっぱり追って来るんだ……」

目の前には窓から放り投げられた犬が一匹。さらにバスから三匹。外で待機していたのが三匹。計七匹が佐天を中心に円を描くように取り囲んでいた。

「私を狙ったのか、それとも御坂さんとか、インデックスが狙いなのか。全然分からないけど、大人しくやられたりなんかしないわよ!!」

威勢よく啖呵を切り、解放した右腕を盾のように構える。油断なく構えているようで、実は彼女は内心焦りを抱えていた。

（ヤバイなあ……。多数の相手となんて、戦ったことないのに）

元々彼女は数週間前まで、一般の学生として暮らしてきたのだ。かなりおてんばだったこともあって運動神経は良いが、戦闘の経験など無い。これだけの複数と戦った経験など、路地で屯するスキルアウトが精々で、本職とは戦ったことなどないのだ。

今回は、それが仇となった。

「……ッ、今逃げるんなら、私は追わな、あ痛?!」

未経験の多数との戦闘についつい弱気な発言をしようとしたところで、後頭部に衝撃を受けた。慌てて振り返ると、ロボット犬が空中でトンボを切って着地するところだった。

「っ、この――あた！　痛た!?」

怒りに任せて向かおうとしたところで、今度は側面、次は下と、あちこちから攻撃を受けた。この犬はどうも攻撃力は低かったみたいだが、ロボットの鼻が、脚が、容赦なく身体のあちこちを打ち据えた。

◇　◇　◇

「――なんだ、こいつ。『T：GD（タイプ：グレートデーン）』だけで決着ついちゃいそうじゃないか」

佐天が襲われた現場から遠い工業地帯。そこに停車された大型トレーラーの中で、馬場というその少年は嘆息していた。彼がいるトレーラーはただの車ではない。内部のありとあらゆる場所に学園都市の技術を集めた電子機器が設置されており、彼が誇るロボットたちの『移動指揮車』となっていた。そのトレーラーのモニターの前に座り、彼は佐天の歯ごたえの無さに溜息を吐いていた。

「こんな平凡な女一人に本気出すまでもなかったかもな……まあ、いいや。やれ、『T：MQ（タイプ：モスキート）』！　その女が気を取られている隙に、眠らせて俺の前まで連れてこい！」

◇　◇　◇

「っ、う〜っ、っ……」

その頃、戦闘は一方的な姿を見せ始めた。フットワークが軽い犬の形をしたロボットと、どちらかといえばパワー重視の佐天。しかも複数での『狩り』も考慮した、効果的な連携。佐天が反撃に出ようとすると、側面や後方から攻撃を受け、反撃が当たらない。戦闘を開始してからずっとそれが続いていた。

（ああ、もう！　私は御坂さんみたいに、後ろに『目』が付いてるわけじゃないっての!!）

自分の死角からの攻撃に苛ついて、思わず内心で愚痴る。現状に辟易しながら思い出したのは、あの雷の頂点を極めた友人の姿。

以前、出会い頭に初春のスカートをめくり、そのままのテンション

で御坂さんにもセクハラをしようとしたことがあった。初春との会話中に、死角を突いたにも関わらず、結果は惨敗。それに納得いかずどうして防げたのか聞いてみた。

「ああ、私は常に微弱な電磁波を周囲に放出しているの。その電磁波の反射波を感知することで周囲の空間を把握してるのよ。その気になれば磁力線だって目で見えるしね」

多分、彼女だったら、こんな状況当たり前みたいに越えていくだろう。目で見なくても、彼女自身の『電撃使い（エレクトロマスター）』の能力で。

何度も何度も身体に攻撃を受け、次第に脳裏に宿ったある『思いつき』に、色がつき、形がつき始めた。

（ぐっ……こんな時に、御坂さんみたいに――――）

――――周囲が分かる『目』があれば

その『思いつき』に応えるように、佐天の頬にＡＲＭＳの紋様が浮かび上がった。

思考から浮かび上がった意識が捉えたのは、右前方に飛び上がった犬の姿。そして、それとは正反対、左下になぜかいると感じた存在。

咄嗟に右前方の犬をＡＲＭＳで払いのけ、右に二歩動く。開いた空間を後ろから一匹の犬が駆け抜けていった。

「――――え？」

信じられなかったのは、佐天自身。今、何故か全く目を向けていない方向からの攻撃を、躱せた。どうやったのか自分でも分からない。だけど視線を上げた彼女は、どういうわけか周りが全部見える気がした。

（わかる……）

周囲にいるのは七体の犬。正面の奴は、首を高く上げこちらの意識を引いている。それとは逆に側面や『後ろ』の奴は、地面に伏せるように体勢を低くし、こちらの隙を伺っている。そして、他の『何か』も見えていた。

（？　なんだろう、コレ……。虫か何か？　でも、この動きは……）

さっきから、周囲を小さな『何か』が飛び回っているのだ。それだけなら、蚊とか蠅だろうと気にも留めないが、動きがすごく不自然なのだ。

試しに佐天は身体ごと大げさに振り向いてみた。周囲の犬は、それに合わせて意識を引く係と、隙を伺う係が交替したが、飛び回る『何か』は、常に死角を押さえるように動いている。上を向いたら下に逃げ、下を向いたら上に逃げ、後ろを向いたら回り込む。明らかにこっちの視界を把握した動きだ。

（とにかく小さな『何か』も触らない方がいいよね。それにこれだけわかるなら……）

当面の方針を決め、思考に没頭していると、後方で隙を伺っていたロボット犬が頭上へと飛び上がった。落下の力で威力を底上げするために。

しかし、周囲に響いたのは肉を打つ打撃音ではなく、硬い装甲を引き裂く破壊音だった。

「――――カウンターも、簡単よね」

◇　◇　◇

「っ、な、なんなんだ。何なんだよ、これぇぇぇっ！」

モニターに囲まれたトレーラーの中、馬場は一つのモニターに映る戦闘に、金切り声を上げた。映っていたのは、一人の少女。先程まで彼の誇る『T：GD（タイプ：グレートデーン）』に、翻弄されていたはずの少女だ。

明らかに勝ちだった。どう転んでも、逆の結果など有り得ないと確信した。だというのに、目の前の状況はなんだ？

画面の中、少女は右腕を横に振り切る。振り終わって硬直した少女の頭に、死角から一体の『T：GD（タイプ：グレートデーン）』が襲い掛かる。それに対し、一度も視線を向けなかった少女は、わずかに首を傾げるだけで躱し、未だ空中にいた『T：GD（タイプ：グレートデーン）』の胴体に爪を埋め込んだ。

さらに、その攻撃を見た他の一体が地面から音もなく忍び寄り、さらには『T：MQ（タイプ：モスキート）』も二体、足元に忍び寄って

いた。完全な死角。彼女はそこで負け、地面に倒れる。それこそが馬場が望む未来予想図だった。

そんな予想図は、爪を埋め込まれたまま横薙ぎの鈍器にされた『T：GD（タイプ：グレートデーン）』に阻まれた。

「なッ……！」

送り込んだ機械端末計四体との通信が途絶した。これで『T：GD（タイプ：グレートデーン）』と『T：MQ（タイプ：モスキート）』それぞれ二体ずつが破壊された。画面の中ではさらに他の機体も数を減らしていく。

「なんだよ、この女はッ!?」

今のは明らかに、『T：MQ（タイプ：モスキート）』を一緒に狙った動きだった。普通の人間なら気にも留めない昆虫大のロボットを、どうやって認識したと言うのか。それも視線を向けることなく。

「くそ、くそッ！　天才の俺に……こんな女が……！」

モニターに映る、最後のロボットが破壊された。それを視界に納め、悪態と共にキーボードを殴りつけた。

「くそ、低能の凡俗の分際で……！　待ってろ、あんなメスガキじゃ敵わないような機体で今――」

「いやー、そいつはやめてくれねえかなあ？」

汚らしい罵倒は、不意に響いた声に切り裂かれた。その声に背筋を凍らせると、首筋に冷たく硬い感触がゴリ、と押し当てられた。

銃口だ。

「あのガキな、今度は俺の方で浚ってこいって、指示出てんだわ。日時も指定されてる。統括理事長（アレイスター）直々の命令でな」

ゴリゴリと、まるで話を脳みそにねじ込もうとするかのように、銃口を押し込まれる。首を縮こまらせた馬場は、生きた心地がしなかった。

「お前さんについては、『佐天涙子』という標的（ターゲット）も見つけてくれたことだし、上からも役に立つから生かしておけって言われてんだわ。だから今後あの女に関わってこないなら、見逃すぜ。どうだ？」

「は、はい……」

ようやくそれだけ喉から絞り出すと、ゆっくりと銃口が首筋から離された。
「よーし！　これで余計な死体の始末もしなくてすむな。今から俺はここから去るが、お前さんは今から5分、目を瞑って開けないこと。俺の姿を追わないこと。もし一瞬でもこっちを見たら、その頭を吹き飛ばす。いいな？」
「……！」
必死になって両目を瞑り、更に両手でその瞼を押さえる。後ろの気配がいなくなっても、足音が聞こえなくなっても、しばらくの間、馬場はその体勢のまま、動くことが出来なかった。
◇　◇　◇
「――んー、終わったのかな？」
最後のロボット犬と、小さな『虫』を叩き潰した後、しばらくそのままＡＲＭＳを起動させて身構えていたが、何事もなかった。相手も諦めたかと考え、ふうっと詰めていた息を吐く。
「って、うわ、こんな時間。早く帰らないと、インデックスが飢え死にしちゃうじゃない」
腕時計を見ながら、その場から走り去る佐天。彼女は時間と前しか見ずに、その場を去った。だから、全く気付かなかった。
――地面で今も渦巻く、ほんのわずかな『つむじ風』に。

023　不良―スキルアウト―

「なーんで、こんなことになったかな……」
うらぶれた広場で佐天が呟く。その周りには夥しい量の瓦礫と、腹や顔を押さえ蹲る者たちが多くいた。
「なんなんだ、コイツは!?」
「何で効かねえんだ！」
周囲を取り囲む武装無能力者集団（スキルアウト）は、完全に殺気立ってしまって、話が出来そうもない。平和的な解決は望めそうもなかった。
こうなった原因は数日前に遡る。
「婚后さんが襲われた!?」
とある喫茶店でいつものメンバーでお茶をしていると、白井が出した話に御坂が喰い付いた。何でも先日能力者を狙った暴行事件があり、その被害者が彼女らと同じ常盤台の生徒だったというのだ。
「大の男が大勢で女の子一人を囲むなんて最低じゃない！」
「モグモグムシャムシャ」
「ええ、幸い大事には至りませんでしたが」
「ガツガツゴクゴク」
「実は似たような事件がここ最近増えてきてまして――」
「ズルズルムグムグ」
「「……」」
そこまで話したところで全員が黙った。視線が自然に一人に向く。その人物は頼んだ大量のスパゲッティやらピザやらの皿に埋もれていた。
「あー……あのさ、インデックス？　私たち今、真面目な話してさ……」
「えっと、少しの間、食べる音を小さくするとか、手を休めるとか……」
「少し食べるのを、やめていただけませんか？」
御坂、初春の言葉には反応も見せなかったが、白井の言葉にインデックスがギヌロと剣呑な視線を上げた。

「食べるのをやめる?!　迷える子羊にとって、食事は主に与えられた祝福なんだよ!?　冷めないうちに、残さず美味しく頂かないと失礼にあたるんだよ!!『いただきます』はこの国の美徳じゃなかったの!?」

「え、いや、あの、はい。すいませんですの……」

インデックスの余りの剣幕に、白井がタジタジとなる実に珍しい光景が展開された。結局全員、インデックスの食事は努めて意識の外に置くようにして会話を続ける。

「それで続きなんですけど、最近そういう事件が増えてるんです。武装無能力者集団（スキルアウト）が徒党を組んで能力者を襲う事件が相次いでいて、風紀委員（ジャッジメント）でも対応に追われているんです」

無能力者による能力者狩り。能力の高低だけで評価されるこの学園都市ならではの事件と言えた。

「それにしても、ムカつく奴らだわ……！」

「御坂さん、テンション高いですね」

「ん？　いや、私はただ、自分の出来ることをやろうともしないで、現実から逃げてるだけの奴が許せないって言うか――」

その御坂の答えに、佐天の手がピクリと止まった。

「違うと、思います」

手元を見ながら、言葉を選びながら、それでも佐天はつぶやいていた。

「多分、スキルアウトの人達も、出来る限り頑張ったんだと思います。でも、現実にはどんなに頑張っても出来ないことって言うのは、やっぱりあって……頑張って頑張って、その結果として『出来ない』って現実があって。だから頑張った分、反動も大きかったんだと思います」

「……佐天、さん……」

「私もＡＲＭＳ以外は、無能力者ですから。なんか分かるんですよ、その人たちの気持ち」

でも、関係ない人たちを傷つけるのはダメですよね、と佐天は締めくくる。その言葉にばつが悪そうに、御坂は俯いた。頑張って頑張って超能力者（レベル5）に至った人間と、頑張っても無能力者（レベル0）だった人間。そこに

は確かに考えの隔たりがあった。
「――ともかく、根底にある原因が無能力者（レベル0）に鬱積した無力感だったとしても、それで能力者を傷つけてもいい理由にはなりませんわ。早急にやめさせないといけません」
「実行犯も少しずつ捕まってはいますし、じきに事件の全貌が明らかになりますよ」
そんな白井と初春のやり取りを余所に、御坂はどこか決意したような瞳をしていた。その瞳の輝きを見て、佐天は近い未来に何が起きるのか、手に取るようにわかった。
◇　◇　◇
喫茶店で御坂たちと話した翌日、佐天は外出の準備を進めていた。
「それじゃあインデックス、ご飯は冷蔵庫に入れてあるから出して食べてね」
「……るいこー、ちなみにメニューは」
「冷や麦」
「……地獄のそうめん週間が終わったと思ったら、また同じ麺類なんだよ」
「文句言わない！　そいじゃねー」
インデックスの文句を封殺し、佐天は外へと出た。衣服は丈夫なジーンズと、肩から先が出る安物の上着と言う組み合わせだ。
なにせ彼女は、これから戦いに行くのだから。
（あの様子じゃあ、御坂さんは絶対能力者狩りの奴らに喧嘩売りそうなんだよねー……）
仮にも学園都市七人のレベル５の一人だから万に一つも問題は無いとは思うが、それでも一点だけ気になることがあったのだ。
「常盤台に入れる人は、最低でもレベル３以上の能力者のはず。それを倒せる武器があるんだとしたら、御坂さんでも危ないもんね」
理由は婚后という常盤台の生徒が襲われ、倒されたこと。御坂は確かに能力の規模が大きく、余程のことでもなければ負けたりしないが、彼女はその力が大きすぎて人間相手では本気になれないところもある。それを心配しての行動だった。

「さて、行こっか！」
　それから彼女は、様々な調査を行った。学園都市の様々な情報掲示板を確認し、怪しい場所にも自ら赴いた。そして、先日の特別講習で知り合った無能力者（レベル0）の人達に、少しでもいいから噂を聞いたことがないか確認していった。
　その甲斐あってか、ある一つの有力な情報を得ることが出来た。
（第十学区、『ストレンジ』かー……）
　第十学区は全体的に寂れた学区で、スキルアウトがよくたまり場にしているところでもある。いわばスラムのような場所だ。そのスラムの一角に『ビッグスパイダー』の根城があると言うのだ。
「さて、『ビッグスパイダー』はどこに……」
「おいおい、お嬢ちゃん。ここは普通の学生には、少しばかり危険すぎるぜ？」
「ん？」
　きょろきょろと周りを探っていたところ、後ろから声を掛けられ振り返る。そこにいたのは黒の革ジャンを着たガタイのいい一人の男。顔は目つきが鋭く、髪にウェーブがかかっていて、ちょい悪系と言うやつだろうか。
　……ただ、その手に『ムサシノ牛乳』と書かれた牛乳をパックで持っているのが意味不明だった。
「あー、大丈夫ですよ。私少し強いので」
「そうかい？　まあ、何にしてもここは今、どいつもこいつも殺気立ってな。悪いことは言わねえから、引き返したほうがいい」
「だったら、余計に引き返せないですね。もしかしたら友達が先に来てるかもしれないので」
「ん、どういうこった？」
　後ろからわざわざ話しかけて、親切にも帰宅を薦めてくれた相手なら大丈夫だろうと経緯を話す。白井が風紀委員（ジャッジメント）であることは隠して、『ビッグスパイダー』の根城に来ているかもしれないことだけを告げた。
「……そいつは心配だな。わかった、その根城までは俺が案内してや

る。その代わり、影から確認して、友達連中が来ていないことが分かったら大人しく帰れよ」
「はーい」
かくして奇妙な革ジャン男の案内で『ビッグスパイダー』のアジトへと赴くことになった。
「そういえば、革ジャンのお兄さんはこの辺り詳しいんですか？」
「いや、俺は色々あって、この学区から二年間離れててな。結構変わっちまって驚いたもんさ。人も街も、な……」
その言葉に含まれたどこか寂し気な雰囲気が気になったが、追及せずに歩を進める。すると目的地まで後少しと言ったところで、耳に響く甲高い音が聞こえてきた。
「っ、な、なにこれ？　頭と耳が痛ッ！」
「そうか？　確かに耳には響くが」
隣の革ジャン男は何も感じていないようだったが、音が聞こえてきたのは目的地の方だったため、物陰から様子をうかがう。するとこの音を聞かされて、頭を押さえて蹲る常盤台の制服の二人が見えた。
「御坂さん、白井さん！」
物陰から慌てて飛び出す。どう見ても二人は本調子ではなく、多人数の男相手に対抗出来るとは思えない。
「こんのーッ！」
右腕のＡＲＭＳが起動し、大きさが数倍に跳ね上がる。そのまま右腕を横に向かって薙ぎ払い、二人の周りのスキルアウトをなぎ倒した。
「ああ、もう、ホント、なんでこんなことになったかな！」
ＡＲＭＳを構え、佐天は戦闘態勢に入った。
そして、そんな佐天を、さらに真っ暗な影から見張る男がいた。
「標的（ターゲット）、超電磁砲（レールガン）と接触、周囲のスキルアウトと交戦に入りました。引き続き監視を続けます」
『おーう、しっかり見張っとけ。第十学区は、こっちにも色々都合がいいからな。隙があれば『確保』に移るぞ』
『暗部』は都市の暗闇で、静かに獲物を狙っていた。

024　黒犬―グリム―

大量の武装無能力者集団（スキルアウト）と対峙した佐天は、すぐさま蹲る御坂と白井のために反撃を開始した。肥大化した右腕ですぐさま周囲の人間を殴り飛ばす。

「な、何なんだ……テメェはなんなんだよォォ、バケモン！」

黒の革ジャンにリーゼントの男がやけになったように叫ぶ。その声に佐天は歯噛みしたが、後ろで今も立ち上がれない二人の友人のためにあえて顔には出さない。

そんな中、リーゼントの男に近づく人間がいた。

「――久しぶりだなあ、蛇谷」

その男は佐天をここまで案内してくれた牛乳パックの男。彼の顔を見たリーゼントは幽霊でも見たかのように怯え、這う這うの体で逃げ出した。

「お嬢ちゃんたちを具合悪くさせてるのは、こいつだな。――よっと！」

牛乳パックの男が横の車のステレオからコードを抜くと、蹲っていた二人も頭を押さえながら何とか起き上がった。未だ調子が悪そうではあったものの、白井はそれでも風紀委員（ジャッジメント）の職業意識から、目の前の男へと質問、いや詰問を開始する。

「助けてくれたことにはお礼を言いますわ。けれど、貴方は先程の黒妻と何らかの関係がありますのね？　申し訳ありませんが、支部でお話を――」

「必要ないわ、白井さん。報告は私の方からあげるから」

突然割り込んできた声に、白井が目を見開く。視線を巡らせると、そこにいたのは、固法先輩。何時もと同じ制服に風紀委員（ジャッジメント）の腕章をつけた姿で、ただ一人の男を見つめている。

「――久しぶりだな、美偉（みい）」

「――黒妻先輩」

◇　◇　◇

因縁を感じさせる本物の黒妻綿流と固法先輩の邂逅。その場で問

い詰めた三人ではあったが、当の黒妻は今回捜査協力者であり、しかも目の前から去っているため詳しい話は聞けなかった。その上固法先輩までも口を噤み、そしてしばらくの間彼女は風紀委員（ジャッジメント）177支部に姿を見せなくなった。

「――で、皆で聞きに行こうってことですか？」

佐天とインデックスは、ある日初春や御坂に呼び出され、固法先輩の学生寮の前にいた。話を聞くとここに来たのは、主に二人の好奇心によるもので、白井は我関せずの姿勢を保っているようだ。

「だって気になるでしょ!?　二人だって固法先輩のこと！」

「気になりますよね、佐天さん！　インデックスも！」

成程、この二人が燃え上がっているのは事実らしい。もっともそんな二人の様子を見ても、佐天はあまり気が乗らない。

「……あの、やめた方がいいと思いますよ。何となく、先輩が出てこないのって、先輩にとって気持ちの整理が必要なことがあるんだと思いますし」

「……そうだね。懺悔を聞くのはシスターの役割だけど、立ち直るのは結局本人の問題だから、シスターには祈りと赦しを以って接するしか出来ないんだよ」

そんな反対意見をもってしても、二人は止まらず、結局固法先輩の自宅を訪ねてしまい、そして先輩の真実を知ることとなってしまった。

◇　◇　◇

「はあ……」

固法先輩の自宅を訪ねて数日後、佐天は第十学区『ストレンジ』を一人で歩いていた。あの日、先輩が以前スキルアウトに属していたという事実を知ったとき確かにショックではあったが、それと同時に帰路での御坂の発言に同じくらい衝撃を受けた。

『――今の先輩は風紀委員（ジャッジメント）なんだから――――』

「多分……そうやって割り切れないから、人間なんですよ……」

そうやって、過去と現在、切り離して考えられたらどんなにいいか。先輩の黒妻へと抱いていた想いは、恋愛感情だったのか、憧憬だった

のか、今となっては分からない。分からないけれど、かつては宝物であったはずの過去の想いを、割り切れるほど人間は強くない。少なくとも、佐天はそんな経験は無いが、自分に割り切れるとは到底思えない。

（私だって……過去を忘れたいって、思うことが無い訳じゃないしね……）

左手で、右腕を抱き締める。この腕を失くしたあの日、一面に広がる朱に絶望したあの日は、今でも佐天を蝕んでいた。焔は今でも彼女にとって、忌むべき存在なのだから。

「けど……もし、先輩が立ち上がるんなら……」

過去に決着（ケリ）をつけて前を向けるのなら。自分も少しだけ力を貸したい。そう思ったからこそ、佐天は今ここにいる。

今日は警備員（アンチスキル）が定めた、第十学区の一斉摘発の日。この日、『ビッグスパイダー』を含めたスキルアウトは街を追われることになるが、固法先輩が決着をつけるのならこの日しかないだろう。だからこそ、彼女もまたここを訪れたのだ。

「――ん。そろそろかな」

距離はあるものの、微かに聞こえるエンジンと走行音。大型の車両のように聞こえるし、多分警備員（アンチスキル）だろう。

「よし。それじゃ――」

プン、という風を斬り裂く音が聞こえたのは、その瞬間だった。歩き始めようとした両脚がかくん、と落ちた。

身体に力が入らないのに、何か、身体の重さが減ったような気がした。何となく、音が聞こえた自分の右側を見ると――。

――そこにあるはずの右腕が、そこになかった。

「う――――あぁあああああああああ?!」

思わず喉から振り絞るように声が漏れると、頭を鷲掴みにされ、手足をひねり上げられ、地面へと組み伏せられた。

「ん――――？　オイオイ、拍子抜けだな、バケモノ女？」

地面に顔をこすりつけているせいで狭まった視界を必死になって巡らせると、自分とかなり離れた場所、路地の出口に一人の男が立っていた。その男は顔の左半分に派手な刺青があり、人を見下したような嘲笑を顔に貼り付けた男だった。その周りにいるのは、艶消しの黒い装甲のスーツを全身に纏った者たち。全員同規格のスーツを身に着けているせいで、男女の区別もつかない。

佐天は知らないが、この目の前の男の名は、『木原数多』。学園都市の暗部において、一部隊を率いている男だった。

「なんだよ、オイ？　せっかくバケモノの退治と解剖なんつう、科学者冥利に尽きる依頼が来たってのに、もう終わりか？　もうちっとバケモノらしく暴れてくんねえか？」

「っ、うる、さいなぁ……そんなに暴れて欲しけりゃ――――」

「お？」

木原の疑問の声。それは、地面に無造作に転がった少女の右腕が紋様を浮かび上がらせ、震えだしたことによるものだった。キイイイ、という特徴ある高音が鳴り響く。

「――――やってやるわよ!!」

佐天の叫びに切り離されたＡＲＭＳが呼応する。右腕は即座にＡＲＭＳ本来の姿へと変貌し、切断面へとくっついた。その拳に満身の力が宿る。

振り下ろされた拳にアスファルトは砕け散り、佐天はその爆発のような衝撃で拘束から脱出した。

「よくもおッ!!」

いまだふらつく足でよろめきながらも、体勢を変え目についた装甲スーツへ攻撃する。しかしその攻撃を、装甲スーツの全員が難なく避けていった。

「え?!」

佐天は急いで振り向くも、既に装甲スーツの者たちを追う事が出来ない。視界の中、足場にされたコンクリートが砕ける音が響くだけだ。

「ヒュ――――、惜しかったなぁ、バケモノ女。コイツ等は俺の抱える

部隊の一つなんだが、少しばかり特殊な奴らなんだわ」
　聞こえてくるのは、木原の軽々しい声。けれども、佐天にその声を気にする余裕は無かった。
「コイツ等は元々出身は警備員（アンチスキル）や傭兵なんだが、身体にガタが来て引退した奴らでな。ほとんど動けなくなったコイツ等にある『処置』を施した」
　背中を斬り裂かれた。腕を斬り裂かれた。腿を斬り裂かれた。
「それが『全身機械化（サイボーグ）処置』――――『高速戦闘用サイボーグ』への人体改造だ」
　肩を、腹を、斬り裂かれた。周囲に飛び散った血飛沫が舞っていた。
「学園都市、統括理事会直属の暗部組織、通称『黒犬部隊（グリム）』。中々の威力だろ？」
　赤い、朱い、紅い滴が舞い落ちる時、佐天の意識も消失していた。
　べちゃべちゃ、と粘性の高い血の池を何の感慨も抱かずに歩き、木原は佐天を見下ろす。自己治癒能力が高いＡＲＭＳでも、これだけやれば動けないだろうと確信していた。
「バケモノのお前さんには悪いがよ、統括理事会からのお達しでな。『グレイ』の小僧に渡す前に、何としてもお前の身柄を押さえろってことなんだわ。運悪かったな？」
　わざと煽るように声を掛ける。何の反応もないことで、彼女の意識は確実に喪失したと、木原はほくそ笑んだ。
「……よし。そんじゃ回収だ。お前ら、手分けして――――」

「――――ふん」

　幽かに聞こえた極寒の冷気を感じさせる声に、木原の背筋が凍り付いた。木原が咄嗟に飛び退るのとほぼ同時に、極寒の旋風が目の前に顕現した。
「学園都市？　統括理事会？　そんなもの、私が知るわけがないでしょう？」
　旋風の中から聞こえてくるその言葉には、さっきの少女の面影など

少しもありはしなかった。そこにあったのは、人間では考えられない程凍てつき、冷え切った極寒の声。

「どうしても、連れて行きたいと言うのなら――――」

やがて、現れたその姿に、『黒犬部隊（グリム）』の面々が息を呑む。なぜなら、そこにいたのは、もはや『少女』ではなかったから。

そこにいたのは、『女王』。その純白の髪を風に靡かせ、その白く染まった肌を降り注ぐ太陽から雪氷で覆い隠す、雪と氷の女王。今、彼らの目の前にいたのは、正しく『絶対者』。そして彼女の周りで、物言わぬ氷像と化した犠牲者は、その猛威を物語る語り部へと成り果てた。

「貴方たちの行先ごと、この世界を滅ぼしてあげるわ!!」

『彼女』こそ、かつて一人の少女が産み落とした世界への呪い。アリスの果てなき『絶望』は、今まさに世界へと降りかかろうとしていた。

０２５　白雪―スノーホワイト―

『それ』が現れたことは、確実に学園都市へと波紋を投げかけた。第十学区の掃討作戦についていた警備員（アンチスキル）も同様である。

「おい、何だあれ……」

一人の隊員が気が付いたのは偶然だった。突然発生した轟々たる風の音に、ふと視線を投げてみると、今いる地点とそこまで離れていない路地に突如竜巻が発生したのだ。しかもその竜巻は、見る見るうちに辺りの物を巻き上げ、成長していく。

「スキルアウトの回収を急ぐじゃん！　このままじゃ、あの竜巻の巻き添えになる！」

「で、でも有り得ませんよ!?　さっきまで強風も一切吹いてなかったのに！」

その呟きに全隊員が反応する。自然の竜巻ではない。ならばこの学園都市で有り得るのは……。

「……発生地点に何人か向かわせろ。能力者による無差別攻撃の可能性もある」

「了解。もし能力者なら、少しキツイお仕置きが必要じゃんよ」

そうして慌ただしく動き始める現場。その横で先程まで『ビッグスパイダー』の者たちの顛末を最後まで見届けた御坂は、天衝くほどに大きくなった竜巻を見つめ、呆然とした声を上げた。

「佐天さん……？」

竜巻と共に、成長し続ける『磁気嵐』。彼女だけに感じ取れるそれが、何よりも彼女の友人の存在を証明していた。

◇　◇　◇

「やべえな、オイ……」

一方そのころ、竜巻の根元ではその原因となった存在を見て、歯噛みする木原の姿があった。

（てっきり、あの『冷気発生』は変身してる時だけのもんだと思ってたが。こりゃあ、『情報源』が事前に情報を隠してやがったな……）

今回の襲撃にしても、統括理事会にある一定の情報が開示された為、その情報を元に編成したものだ。前提となる情報に齟齬があれば、襲撃自体おぼつかなくなる。

そのことは周囲の部下も良く分かっているのだろう。先程まで彼女を拘束していた『黒犬部隊（グリム）』の面々は、今現在遠巻きに彼女を眺めるだけで突っ込もうともしていない。学園都市の暗部たる『黒犬部隊（グリム）』は、もはや改造の段階でそうした人間性も『削除』したにも関わらず、だ。

「――よーし、お前ら。ちぃと予定は狂ったが、再度攻撃だ。今度こそ確実に女を捕らえろ」

上司のその命令に、部下たちが一斉に振り返る。そして、部下の一人が目の前の白髪の少女を指して言う。

「隊長！　見えていないんですか!?　俺達の同僚が簡単に凍らされたんですよ！　俺達で彼女を一時拘束しても、もう一度凍結させられたら終わりだ！　こんなの自殺するようなもんじゃないですか!!」

その部下の瞳は、一瞬で氷像と化し、地面に倒れて粉々に砕けた同僚の死体にくぎ付けだった。その光景に削り取られた感情が刺激されたのだろう。他の部下もそいつのヒステリックな声に、一斉に同調する。

しかし木原はそんな空気を鼻で笑い飛ばす。分かっていないのは、お前らの方だと。

「んー、わかってねえな。ここで突っ込まなかったら、後でお前らは電源永久に切られてお陀仏だ。後で確実に死ぬのと、今攻撃して生きる可能性残すのと、どっちがいいんだ、つー話だ」

その言葉に、全員が一瞬立ち尽くす。彼らは一度死んだ人間だ。手足が1ミリも動かない身体でベッドの上で腐っていたか、戦場で、事故現場で日光を浴びて腐っていたかの違いはあるが。

再度訪れようとしている『死』の恐怖に、全員が覚悟を決めた。回収すべき少女のデータは、全員が全てを読んだ。あの『能力』じみたものは、極めて特殊な『ナノマシン』によるものだ。ならばやり様はある。

『レトリバーより秘匿通信で、全員へ伝達。上層部から支給された『超振動ナイフ』は、先程対象にも有効だった。そのナイフを軸に攻撃を組み立てることを上申する』

『こちらハスキー。それだけでは、現在発生している竜巻で被害が拡大することが予想される。確実に意識を奪い、ナノマシンの停止を促すため、高電圧の『電撃銃（テイザーガン）』の使用を提案』

『狙撃班所属、プードルより各員へ。狙撃班は竜巻の影響を考え、距離を詰めて配置に着いたわ。万一を考え、手足を撃ち抜いて捕獲しましょう』

各部隊員の通信はそれで済んだ。その後の連絡も全て、脳内に直接インプラントされた通信用端末で行い、目配せも合図もなく再度の攻撃は始まった。

「おーし！　ホラ、いけえ！」

後ろからかかるそんな声を無視して、全員が四方八方に散らばり、頭上から、地面すれすれから、背後から、まるで一つの生き物のように一斉に襲い掛かった。

「――――くす」

ほんの少し漏れた微笑とともに、『超振動ナイフ』で襲い掛かった二名が顔面を砕かれた。その傷口からは、急速に凍らされたために一滴の血も出ない。科学の粋を集めた襲撃者への反撃は、なんてことの無いただの『平手打ち』。ただそれだけで、触れた箇所が凍り付き、ガラスのように砕けたのだ。

「――ッ！　撃て、撃てぇっ!!」

この光景に『黒犬部隊（グリム）』の面々は当初方針を変更。中距離からの『電撃銃（テイザーガン）』と、遠距離からの狙撃で仕留めることにし、一斉に引き金を引いた。

「無駄よ」

切り捨てるような言葉と共に、白い少女はただ一歩前へと踏み出す。それだけですべての弾丸は、まるで彼女を避けるかのように外れ

た。

「は……？」

『黒犬部隊（グリム）』の隊員は、理解できない。今、何が起きたのか。どうしてあんな一歩で全部の弾丸が外れるのか。一切理解出来なかった。

もっとも、予想していた者もいた。

「あー……やっぱ、そうか」

木原は部下に聞こえないよう、小さく嘆息する。目の前の少女について、彼が一つだけ抱いていた懸念が現実となったからだ。

そもそもの疑念は、自分たちの前に馬場と言う少年がロボットを使って彼女を襲った時だった。あの時、襲ったロボットは猟犬型と昆虫型の二種類。猟犬型の大きなロボットならば避けるのも可能だろうが、昆虫型の小型ロボットとなると、避けるためにはそれを認識しなければ無理だ。だと言うのに、あの時この少女は後ろからの攻撃も確実に避けていた。

答えは、一つ。彼女はあの時、周囲に広がる『目』を持っていたという事。あの時と、現在の共通点はただ一つ。あの時は足元で僅かに渦巻くにとどめ、今は『竜巻』にまで成長した『つむじ風』だ。

閲覧出来た、彼女の個人データ。そして現在の状況。学園都市で、『一方通行（アクセラレータ）』を始めとする様々な能力開発を手掛けた科学者は、苦も無く答えを出した。

「面白え答えを出しやがったな、バケモン……差し詰め『空力探査（エアロソナー）』ってとこか」

今目の前で起こっている現象は、彼女の中で眠り続けていた『空力使い（エアロハンド）』によるものだ。『空力使い（エアロハンド）』は非常に応用力の高い能力で、学園都市が行った『暗闇の五月計画』では、『攻撃』と『防御』の頂点とも言える能力が開発されている。

そして彼女の能力は、『感知』の頂点。恐らく『空力使い（エアロハンド）』の制御範囲を限界まで薄く広く広げ、内部の気流に接触する全てを感知する能力だろう。風をレーダー波の代わりにしたようなものだ。レベル換

算でも『大能力者（レベル4）』に確実に数えられる。
まあ、だから、仮説が正しければ、周囲３６０。どこから攻撃されても、迎撃さえ間に合えば攻撃は通じないということだろう。今もなお彼女へ通じない攻撃を繰り返しては、身体の一部や胴体を砕かれ悲鳴を上げる部下を見ながら、木原は溜息を吐いていた。
（駄目だな、こりゃあ……）
現場の警備員（アンチスキル）の通信でも、さっきから何人かこちらへ向かっているようだし、退き時だろう。嘆息しつつ、自分の飼い主である統括理事会に端末からの暗号通信で撤退の伺いを立てる。一分もせず回答があり、端末に表示された指示は『是』。『ただし隠滅は行うこと』とあった。
唇を歪ませながら、部下へと『最後』の指示を出した。
「――――全員、一斉に突っ込め」
その指示に、一瞬部下は躊躇した。今なお攻撃が通じないのに、なぜそんな指示なのか。もっとも躊躇は一瞬のことで、生命を握られた愚かな黒犬は、指示の通りに一斉攻撃を仕掛けた。
「なんのつもりかしら？」
捨て身の特攻も、通じなければ意味も無い。そう言わんばかりに、白い少女は襲撃者全員を一瞬で凍り付かせた。そして、視線を指示を出した木原に向け、少しだけ目を瞠った。そいつの手に、押し込み式のボタンが付いた端末が握られていたから。
「まあ、こういうつもりだ」
ボタンとともに、少女の周りの襲撃者が一度に『起爆』した。さらに周囲のビルからも、同様の爆発音が響く。潜んでいた狙撃班も、区別なく爆破されたのだ。
「じゃあな、バケモン。その『空力探査（エアロソナー）』の能力、中々楽しめたぜ」
「！　待ちなさい!!」
周囲の爆風を氷雪の竜巻が引き裂く。中からは爆炎に焙られたと言うのに、全くの無傷な少女が出てきた。もっともその白磁のような皮膚には全体に『霜』が降りており、まるで雪の中から生まれ落ちたかのようだった。

既にいない人影を探して周囲を見回し、溜息を吐いた。咄嗟に空気を凍てつかせて『防御膜』にしたは良いが、全くの失敗だった。爆炎は防げたが、その後動きが固くて追うことが出来なかったのだから。

近づいてくる警備員（アンチスキル）の車両の音を聞き、白い少女もまたその場から飛び上がる。そして、現場を一望できるビルの屋上で、今もなお彼女の中で泣き続ける佐天涙子に一つだけ言い残した。

「泣いても、叫んでも……ＡＲＭＳを宿す貴方は、その時点でいくつもの屍の上に立っているのよ。現在（いま）も過去（むかし）も。そして未来（これから）もね」

風が一つ、彼女の髪を撫でる。その風が吹くに任せ、空を見上げた。

「――――――――――……変えられる、『人間』なんて、いるわけないじゃない。『母（アリス）さん』」

白い雪が一片、空へと舞い上がっていった。

026　贈与―プレゼント―

――夢を、見ていた。

地面は真っ赤に染まっていた。リノリウムの床は、踏み場もない程、『赤い液体』で染まっていた。

――夢を、見ていた。

手や足が、明後日の方向に向いた、奇妙な『人形』が置かれていた。それらは全てしとどに濡れ、虚ろな眼窩を晒していた。

――夢を、見ていた。

ふと、傍らの『人形』に視線を合わせた。手足が機械で出来た夥しい数の『人形』の上に、ちょこんと置かれた、華奢な『人形』は――。

――夢を、見ていた。

――『初春飾利』の、『死体』だった。

「ああ〝ぁあああぁぁあああああああああああああああああああ――――――――――ッ!?」

自らの叫びの中、佐天涙子は現実へと帰っていった。

◇　◇　◇

事件の後の佐天の生活には、なんら変わったところは見られなかった。いつものように、初春やインデックスたちと街へ繰り出し、遊ぶ日々。

ある日訪れたゲームセンターで、御坂はついにその話題に触れた。

「――あのさ、佐天さん。結局あの日、第十学区で起きたのは何だったの？」

その話に、ビクリと佐天の肩が震えた。結局御坂は、あの日第十学区で何が起きたのかは分からなかったのだ。彼女が見たのは、ビッグスパイダーの顛末のみであり、あの日『竜巻』の根元に行っても、辺り一面に響いた爆発音と、何かが激しく燃えたと思しき痕跡があるだ

けだった。
　一体何が起きたのか、その詳細を知るであろう目の前の少女はずっと口を閉ざしたままであり、今日直接聞いてみることにしたのだ。
「……えっと、ちょっとしたトラブルですよ。ビッグスパイダーとは別口の、ありふれたトラブルです」
　佐天はそれしか言わない。けれど御坂にはその笑顔が、どう見ても作り物のように見えた。ただのトラブルであんな痕跡が残るわけがない。ただのトラブルで、警備員（アンチスキル）に統括理事会から圧力がかかって、捜査が中止になるわけがないのだ。
　だから彼女は、一度開いたその口を止めることが出来なかった。
「そんなわけないじゃない。ちゃんと本当の理由を――――」
「ストップなんだよ、みこと」
　その追及を止めたのは、横で聞いていたインデックスだった。
「今回のこと……るいこは話したくなくて話さないわけじゃないんだよ。ただ、るいこは『今は話せない』。だから、そっとしておいてあげて……」
「う……でも、気になるじゃない。一体何があったのか」
「私は、るいこを信じてるんだよ！」
　インデックスの言葉に、御坂が一歩下がる。佐天への信頼に置いて、目の前の幼い少女に、負けたような気分になったのだ。
「……そうですね。私も佐天さんを信じます。話せるようになったら、話して下さいね」
「まあ、仕方ありませんわ。本来、風紀委員（ジャッジメント）としてはこんなことを言ってはいけないんですけど。統括理事会絡みとなると厄介ごとの匂いしかしませんし、しばらく待ってあげます」
　初春も白井も、インデックスの言葉に譲歩し、佐天が何時か話してくれるまで事件の真相を追及しないと決めた。御坂もまた二人に続いて、少しばかり渋々であったが頷いた。
　その後、ゲームセンターからの帰り道、御坂たちとは別れ佐天とインデックスは第七学区への道を二人で歩いていた。
　しばらく歩き、ある交差点でインデックスが呟いた。

「――それじゃ、私はとうまの新しい寮に帰るね？」
　今インデックスの住んでいるのは、佐天の寮ではない。あの第十学区での事件の後、佐天は寮へと帰り着き、部屋にいたインデックスに縋るように泣いた。そして泣き止んだ後、この寮からしばらく離れるように言われ、インデックスはそれを了承したのだ。
「ゴメンね、インデックス……」
「うーん、大丈夫だよ。とうまはゴハン作るのあまり上手くないけど、それでも前に野宿してた時に比べれば」
「そうじゃなくて、さ……あの事件のこと、何も話さないでくれたでしょ？」
　インデックスには、事件の概要だけは話したのだ。正体不明の集団に襲われ、戦闘中に自分がＡＲＭＳに乗っ取られたこと。そして、その戦闘の結果――容易には口に出来ない『罪』を負ったこと。
「気にしなくてもいいんだよ。懺悔を聞くのは、聖職者の務めだもん。それを他人に告げたりしたら、天罰が下るんだよ」
「……ありがとう」
　佐天の口から素直に感謝の言葉が漏れ、事件以来久しぶりに心からの微笑が漏れた。
「にしても、またるいこの意思を乗っ取ったのかー……その時、あーむずは何か言ってなかった？」
「え？　えっと……」
　その言葉に佐天があの時の記憶を引っ張り出す。人格が入れ替わった影響なのか、外の事は少し夢うつつだったが、確かに言われた言葉があった。ＡＲＭＳを宿す者は、いくつもの屍の上に立っていると。
（あれって……前にもＡＲＭＳ絡みで沢山の人が死んだ、ってこと？　でも、やっぱりこれだけはインデックスにも言えないし……）
　佐天が言い淀んでいると、再びインデックスが目を瞑って語りだした。
「私は、ステイルやかおり達から聞いただけなんだけど、私の時に出てきたあーむずって、まるで全てを滅ぼしてやる、ってくらいの剣幕

だったんだよね？」
「うん……そうみたい……」
「ん～～……」
その返事にインデックスは腕を組み、考え込み、やがて告げた。
「――――たぶん、あーむずは、たくさんたくさん、哀しい出来事に出会ってきたんだね」
その予想外の言葉に、佐天は数秒動きを止めた。
「……え？」
「だって、そうでしょ？　私はまだ見たこともない、美味しいご飯がたくさんあるこの世界が滅ぶことなんて望んでないんだよ。他の人だって、そう。ちょっとシスターとしては駄目だけど、お金とか権力とか、恋人とか、家族とか……楽しいものや嬉しいものが、この世界ではちょっとの努力で手に入るんだから、普通は誰も滅ぶことなんか望まないんだよ」
「まぁ……そう、よね……」
その言葉に佐天も頷く。普通は『滅び』なんか望まない。じゃあ、なんでだ。
「それでも『滅び』を望む人がいたとしたら……それはきっと、とっても哀しい出来事に遭って、全てに『絶望』してる人しかいないんだよ」
その言葉に、佐天は深く考え込む。今まではＡＲＭＳの心情なんて、考えることも無かった。けれど今は、どうしてもインデックスの言ったことが気になった。
（あの娘（コ）――――何があったんだろう？）
思い浮かぶのは、自分の身体を乗っ取った白い髪の少女。彼女の過去に思いを馳せるが、答えが出ることは無かった――――今は、まだ。
◇　◇　◇
「――ああ、お前から贈られた品物は、さっき私の手元に届いたよ」
無機質な機器で埋め尽くされた研究室の中、一人の女性が電話口に

固い口調で答える。彼女の名前は、テレスティーナ＝木原＝ライフライン。悪名高い『木原』の一族の一人であり、かつて木山春生に絶望を抱かせた木山幻生の孫娘だ。

『それは良かった。テレスティーナ女史の計画次第だが、件の彼女が関わって来る可能性がある。万が一に備えて、彼女への対抗手段は必要だろう？』

「佐天涙子、か……」

それはテレスティーナにとって、予測不可能の異常存在（イレギュラー）。彼女の手元には学園都市の能力者を残らず無力化する『キャパシティダウン』があるが、彼女だけはそのシステムが効かない。だと言うのに、彼女は回収対象である『春上衿衣』のクラスメートで、親友は回収対象のルームメートだ。関わってこないと思う方がおかしい。

しかし、それとは別に、テレスティーナには一つ腑に落ちないことがあった。

「……なんで、私にこんな物を？　確かに対抗策は必要でしたが、元々佐天涙子はそっちの被験体だったと聞いていますが？」

『まあね。本来はもう少し様子を見るつもりだったけど、彼女の進化のスピードから予定が変わった。その結果が、そちらに渡した『弾頭』ということさ』

「けっ、お前の言う『人工進化』とやらが手に負えなくなったから、始末を他人に任せようってか？　こっちは、とんだただ働きだな」

『素が出てるよ、テレスティーナ女史』

「ちっ……」

一応罠の可能性も考えて、『弾頭』の中身は確認している。これを撃ちこみさえすれば、佐天涙子はその体内のＡＲＭＳごと、チリとなって消えるだろう。彼女の科学者として優秀な頭脳は、その確信を確かに導き出していた。

『まあ、そのトランクの中身は、労働を強いるこちらからのせめてもの贈り物（プレゼント）だ。遠慮なく受け取ってくれないかな、テレスティーナ女史』

「貰うモンは貰っとくさ、キース・グレイ」

そこで会話は終わり、電話は切れた。

「ふん……」

受話器を電話に戻し、傍らの無人のデスクへと向き直る。その天板に置かれたジュラルミンのトランクに触れ、暗証番号の入力とともに、一気に蓋を開いた。

テレスティーナが開いたトランクの中。そこには分解された巨大なフレームのライフルと、数発の鈍色に光る弾丸が収納されていた。

027　新顔―ニューフェイス―

夏休みのある日、初春は担任の大圄先生から学校に呼び出されていた。
「転校生ですか？」
「そうなんだ。実際の転入は二学期からなんだけどね」
呼び出しの用件は、二学期から転入してくる生徒がいるとのことだった。その生徒は初春が暮らす女子寮に入ることになっているので、現在二人部屋を一人で使っている初春の部屋に彼女を住まわせ、慣れない彼女の力になってやってほしいと言うのだ。
「わかりました。そういうことでしたら、引き受けます」
「頼むよ。それじゃあ紹介しようか。入っておいで」
大圄先生の合図と共に、一人の少女が部屋へと入って来た。その少女は色素の薄い茶髪を短く揃え、左側で一房まとめた髪型をしていた。全体的にのんびりとしていながら、どこか虚空を見ているような不思議な雰囲気の少女だった。
「『春上衿衣』さんだ。二人とも仲良くな」
「は、はい！　任せて下さい！」
自己紹介の前に、若干食い気味に了承した初春の様子に、少しばかり苦笑し、胸の前で右手をほんの少し握り締め、その少女は自分の名前を告げた。
「――春上衿衣なの。よろしくなの」
◇　◇　◇
「第十九学区からの転入生かー。でも、この時期に珍しくない？」
「普通は、新学期のはじまりに合わせそうなものですのにね」
「そうなの？　私は学校行ったことないから、分からないんだよ」
第七学区、学生寮が並び建つ通りを御坂、白井、インデックス、佐天の四人は歩いていた。初春の住む女子寮に、新学期からのクラスメート兼ルームメートが引っ越してくると言うので、今日は全員でその娘との顔合わせと引っ越しの手伝いだ。

「あー、それじゃインデックスは新学期から初の学校かー。確か、教会系神学校の留学特待生扱いなんだっけ。授業はどうなるの？」
「通常はどんな特待生でも高レベル能力者でも、一部分までは授業やカリキュラムを受ける必要がありますが……そのあたりの取り扱いについては、魔術師連中はなんと言ってましたの？」
「ステイルとかおりは、学園都市のカリキュラムで私に万が一でも能力が宿ると、身体的に不具合が出るかも知れないからくれぐれも出ないように、って言ってたんだよ」
「てことは、授業完全免除かー……ちょっと残念だったわね。新しいクラスメートと友達になれたかもしれないのに」
「大丈夫なんだよ。今はるいこやかざりに、みこともくろこもいるから寂しくないんだよ！　それにとうまも、この間みこと達の学校で会ったまいかも友達なんだよ」
　インデックスのその言葉に、御坂も白井も自然と頬を緩ませる。終始和やかな空気で一同は歩いていた。いつもならここで、佐天が明るく場を賑わすのだが……。
「……えっと、佐天さん？　さっきからどうしたの？」
「少しばかり……いえ、ものすごく挙動不審ですわよ」
「るいこ……また悩み事？」
　問われた佐天が何をしているかと言うと、何故か両手の拳を身体の前で軽く握り、所謂ファイティング・ポーズを取ったまま、あっちへ振り向き、こっちをにらみ、ババッっと音が出そうな勢いで周囲を警戒しているのだ。これを見れば、十人中十人何かあったと悟るくらいに。
（この間の奴ら……ずっと何もしてこないなんて、どういう事なの!?）
　彼女がこうも挙動不審なのには、理由（ワケ）がある。先日佐天は黒犬部隊（グリム）を名乗る集団から襲撃を受けたわけだが、その際首謀者と思しき相手を逃がしてしまった。そのため、再度戦力を揃えて襲ってくると彼女は考えていたが、その後一度も襲ってこなかったのである。
　もちろん彼女もそれに対し、何もしなかったわけではない。予め同居していたインデックスを上条の家に避難させた上で、再度の襲撃に

備えていた。ネットで得た半端な知識で、寝込みを襲われないよう、ダミーを仕込んでベッドの下に眠ったり、釣り糸を買ってきて下手なりに罠を仕掛けたりもした。向こうからの襲撃を誘発させるため、一斉摘発が入って住人を極端に見かけなくなった第十学区まで行って、しばらく待ち伏せしたりもした。

それでも、何も起きなかったのだ。とは言え、油断させて襲ってくるかもしれないと思うと、佐天は一切気が抜けない。現状、彼女の精神は色々と限界だった。

「……はあ。まあ、いいわ。ちゃんと話してくれるまで、待つって決めたもんね」

「それでもこの不審な動きだけは、止めてほしいのですが……」

「まあ、るいこもその内飽きて止めるんだよ。それより早く、かざりの家に行こう！」

三人揃って、佐天のことは放っておくことになったようだ。そのまま歩くことしばし、やがて初春の住む女子寮が見え始めた。

「――あ！　佐天さーん！」

「……ん？」

女子寮の前でこちらへ呼びかける初春の声に、ようやく佐天は現実へと回帰した。

◇　◇　◇

初春の暮らすアパートの玄関前。そこでとりあえず互いの自己紹介が行われることになった。

「――えっと、春上衿衣さんです。で、こっちが常盤台中学の白井黒子さんと、その先輩の御坂美琴さん。それから私たちと同じクラスになる佐天涙子さんと、そのルームメートのインデックスさん」

「よろしく！　て、それはいいんだけど――どうしてこういう事になってるワケ？」

佐天が困惑したように、初春の部屋の玄関先で鎮座する物を見つめる。そこには大小さまざまな大きさの段ボール箱が山積みされていた。

「えぇと、その……春上さんを駅まで迎えに行っている時に、引っ越し

屋さんが到着したって連絡が来て……」
　玄関の鍵が閉まっていたので、やむなくその場に置いて行ったということだった。
「つーか、引っ越し屋も少しは考えればいいのにね」
「とにかく、どうにかしないと……」
「私はあんまり重い物は持てないんだよ」
　とは言え、これを一つ一つ部屋に入れていくのは、さすがに骨だった。佐天自身は、ＡＲＭＳもあるので力仕事はお手の物だが、割れ物もあるだろうし、何度も往復することになるだろう。
「――ハア。仕方ありませんわね」
　一度嘆息し、白井が山積みされた箱へと手を伸ばす。ヒュパッと、軽い音がしてそこにあった段ボール箱がいくつか姿を消した。そのまま次々と白井が手を触れた箱が空間を飛び越え、室内へと転移する。
「――すごいの。『空間移動（テレポート）』って初めて見たの……」
　一連の出来事を見ていた春上が呆然としたように声を上げる。それを聞き、白井が若干誇らしげに胸を張った。
「そりゃそうでしょうとも。私ほどのチカラを持った『空間移動能力者（テレポーター）』は、学園都市内でもそうそうおりませんのよ」
「ほー……」
「前も思ったけど、これって道教の縮地法かな？　確か記述が……」
　自慢げにしている白井に春上とインデックスは感心しているが、作業をしなければいつまでも片付かない。その後全員で部屋へと入り、引っ越し荷物を次々と開け、家具のあちこちへと収納していった。全ての作業が終わったのは、それからしばらくの後だった。
「――ふぅ、こんなところかね」
　佐天が最後の段ボール箱を畳んで一か所にまとめたところで、春上が改めてお礼を言った。
「皆さん、ありがとうございましたなの」
「気にしない、気にしない。それより、思ったより早く終わったし、どっか遊びに行こっか！」

御坂が言ったその一言に、佐天の表情が一瞬曇る。先日も警戒しながらとは言え遊びに行ったが、本当に大丈夫なのか。もう襲われたりしないのか。そして、なにより――――。

皆とは違って血に汚れた自分が、遊びに行ったりして、日常を楽しんでもいいのか。

そんな拘泥が彼女の中で渦巻き、咄嗟に御坂の言葉に答えることが出来なかった。だけど、本当に一瞬のこと。佐天が顔を上げると、佐天の反応より先に答えていた初春を、風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）の合同会議があると言い出した白井が首根っこを捕まえてズルズルと引きずっていくところだった。

「かざり、くろこ、後で合流するんだよー」

「あうううう……」

「しょぼくれてないで行きますわよ」

ぶんぶんと手を振るインデックスと、ショボンと落ち込んだ初春とそれを引きずる白井。その様子を見ていた春上がくすりと微笑んだ。それは本当に、平和な日常。

「ホラ、行きましょ」

ぽん、と叩かれた肩を見ると、いつの間にか後ろに回っていた御坂が佐天に笑いかけていた。きっちり待っているから、気にするなと言わんばかりに。

「――――ハイ！」

佐天が浮かべた笑み。それは事件後久しぶりの、向日葵のような笑みだった。

０２８　乱雑開放―ポルターガイスト―

「それにしても、初春達って何の合同会議なんですかね？」
　引っ越し作業を手伝った後、会議があると言う初春・白井と別れ、佐天・御坂・インデックスの三人は、新たな初春のルームメートとなった春上衿衣を連れてクレープ屋さんに来ていた。ちなみにインデックスは既に一個を消化し、二個目に入っている。
「何でも最近頻繁に起きてる地震についてだって言ってたわよ？　でもなんで事件でもないのに、合同会議なんてするんだろ？」
「あ。ひょっとすると……」
　御坂の疑問に、佐天は一つ気になることがあった。最近学園都市のサイトで話題となっている一つのホットな噂が。
◇　◇　◇
「今回の会議の議題は、最近学園都市のあちこちで頻発している地震についてじゃん。――最初に言っておく。これは、『地震』ではない」
　初春・白井が出向いた風紀委員（ジャッジメント）・警備員（アンチスキル）合同会議。その壇上では、警備員（アンチスキル）の一人黄泉川愛穂が大前提を覆すような報告を上げていた。
「原因は、『ＲＳＰＫ症候群の同時多発』じゃん。詳細について、『先進状況救助隊』のテレスティーナ氏から説明してもらうじゃん」
　壇上へと上がって来た女性。長い茶髪を背中にふわりと流した彼女は、見た目からしてやり手のキャリアウーマンと言った印象だった。
「ただいまご紹介に預かりました『先進状況救助隊』のテレスティーナです。――皆さんは今回の地震について、既に一部のネットで根も葉もない『噂』が流れているのはご存知でしょうか？」
◇　◇　◇
「『乱雑開放（ポルターガイスト）』？」
　佐天が語ったホットな噂。それは、現在学園都市の各地で頻発する地震が、『乱雑開放（ポルターガイスト）』なる怪現象だと言うものだった。
「そうなんですよ！　今起きてるのはただの地震なんかじゃなくて、

別次元からの波動だとか、はたまた統括理事会が地下施設で行っている秘密実験だとか！　ネット上では、いくつもの有力な説が浮かんでるんです！」

「いや、有力って、そこまで有力なら統括理事会から正式に発表があるんじゃ――」

「ですからそこは、学園都市上層部の陰謀が関わって発表されてないらしいです！」

「ああ、そう……」

　佐天の主張を一通り聞いた御坂が、辟易した表情を浮かべる。直ぐに悪ノリする黒子や、引っ込み思案な初春と違い、話しやすくノリもいい佐天（かのじょ）なのだが、こういったネットの噂を頭から信じる辺りはついて行けない。なお、今日初めての春上については、佐天のノリに目を白黒させていた。

「そういえば、春上さんのいた十九学区って、『乱雑開放（ポルターガイスト）』が多発してたんでしょ？　どうだったの？」

「うーん……」

「ホラ、そういうことを面白半分に騒いじゃダメでしょ？　でもまあ、別次元がどうだとか、霊的現象だとかのオカルトなら、インデックスの方が専門分野か。どうなの、インデックス？　魔術（あっち）側で、都市に何度も地震起こせたりする？」

　そう言って振り返ると、インデックスの手元には既に二個目のクレープは無く、代わりに御坂の手元のクレープへと視線がぴたりと固定されていた。その様子に苦笑しながら、残りを少し千切って渡すと、目をキラキラさせながらかぶりついた。

「う～～ん……風水の系統なら可能かもしれないんだよ。けど街一つに頻繁に地震を起こすってなると、周囲の山を削ったり、川の流れを変えたり、とんでもなく大規模にしかもお金をかけないと出来ないんだよ」

「うわあ……」

「……ちなみに、どのくらいの予算があればいい？」

「学園都市にだけ地震を頻発させて、他に被害を出さない精度を持た

せるとなると……ちょっとした国の国家予算くらいあると足りるんだよ。近代以前の風水は、そもそも国家事業だからね」

「「……」」

どう考えても、コストパフォーマンスが合わなかった。国家予算規模のお金でやったとしても、今まで学園都市には人的被害は大して出ていないのだ。これが戦争とか国家間の紛争ならまだ分かるが、その場合でも多分ＩＣＢＭ（大陸間弾道ミサイル）を撃った方がはるかに安上がりだろう。

しかし、ここでインデックスの事情を知らない春上が首を傾げる。

「なんでオカルトだと、インデックスさんが専門分野なの？」

この言葉に、佐天も御坂も慌てた。実はこの二人、ステイル達と別れる時に言われたことがあるのだ。

『本来ならキミらのような一般人に魔術の存在を知られたら、良くて『記憶封印』か悪くて『始末』しないといけないんだが、まあインデックスの件もあるし、今はその生命預けておくよ』

なお、その後ろで神裂が「そんなことはありませんよ。まあ、余り公言してほしくないので、やたらと触れ回らないように、と注意しておきますが」と説明していたのだが、その言葉は冷静に聞いていた白井以外には届いていなかった。

ともかくそういう訳で、この二人は魔術の存在を知られると口封じされるかも、と恐れていた。

「え、え～っと……あ、アレなのよ！　インデックスって、神学校に通ってるから!!」

「そ、そうなのよ！　インデックスは英国出身の本職シスターさんで、オカルト関係っていうと、宗教系でしょ?!」

二人ともあまりに慌て過ぎて逆に怪しかったが、その話を聞いた春上は一応納得してくれたようだった。

しかし、そこで話は予想外の方向へと流れ始めた。

「そうなの……だったら、インデックスさんって、『占い』とかも出来るの？」

春上が続けたその言葉に、二人とも首を傾げる。彼女の様子が、日

常のちょっとした出来事を占ってもらおうとするものではなく、どこか必死さを滲ませた色になったからだ。

インデックスもそれを感じ取り、申し訳なさそうに答える。

「えっと……私は卜占の専門家じゃないから、難しいんだよ。えりいは何か、心配事があるの？」

インデックスの質問に、春上が少しだけ俯く。そして握り締めたその右手は、胸元のペンダントを握っていた。

「人を、ね……探してるの……。ずっとずっと前に別れちゃった、大事な大事な友達なの……」

◇　◇　◇

「――現在、今回の地震については『ＲＳＰＫ症候群の同時多発』ではなく、霊的現象や陰謀などと言うまことしやかな噂が流れています。今回風紀委員（ジャッジメント）の皆さんに集まってもらったのは、一般生徒がこのような噂に踊らされないよう、注意を促してもらいたいからです」

その言葉と共に会議は終わり、風紀委員（ジャッジメント）はネット上の噂への火消しと、パニックを未然に防ぐ注意喚起を割り当てられた。警備員（アンチスキル）については、『ＲＳＰＫ症候群の同時多発』が『人為的』に誘発されたものだった場合に備え、原因の割り出しと容疑者の確保を命じられ、さらなる会議を行うことになった。

会議場から出てきた初春・白井・固法の三人は、長時間席に着いたことで固まった身体をほぐしつつ、首を傾げていた。

固法が口元に手を当てながら、難しい顔をして呟く。

「それにしても、ＲＳＰＫ症候群の同時多発だなんて……今まで聞いたこともない現象よ？」

ＲＳＰＫ症候群は、一般的な能力者が能力の制御を誤り、不安定に発現させた時に発生する。つまりそれが同時多発するとなると、極めて近い場所で同時期に、何人もの能力者が能力の制御を手放さない限り発生したりしないのだ。

（もし、あのテレスティーナさんの言う通りだとしたら……何者かが、多数の能力者を一つ所で同時に『暴走』させてでもいる？　でも、一体何のために？　――それに、今回の対応）

思考に没入していた彼女だが、すぐそこで友人に連絡を取った後輩二人の呼びかけで顔を上げた。
「あ、あの固法先輩。私たちこれから、御坂さん達と合流しようかと……」
「ん？　ああ、いいから行ってあげなさい。私は少し、支部でやることあるから。今回の件についても、近隣の学校への注意喚起、計画草案立てておくわ」
「申し訳ありません、固法先輩。私もお姉様がお待ちでなければ、お手伝いするのですが……」
「これくらい大した手間じゃないから、気にしなくてもいいわよ。その代り、ネットの火消しと各学校への注意文の配布では働いてもらうわよ？」
「は、はい！」
ニヤリと笑いながら言った言葉に縮こまりながら返事をし、去っていく二人の後輩の背中を見送った固法は、ふと先程頭の中に抱いた疑問がなんであったか悟り、思わずそれを口にした。
「そういえば、今回の対応もそうだけど……なんであのテレスティーナさんは、最初から『ＲＳＰＫ症候群の同時多発』が原因だって、決めつけてたのかしら？」
それは、本当に小さな違和感。しかしそれこそが核心なのだと、この時固法は知る由も無かった。

０２９　呼声―コール―

「案外早く合流出来て良かったわね、初春さん」
　外の日差しを避けて入ったゲームセンターの中、佐天、御坂、インデックス、春上の四人のそばに、会議が終わってようやく合流出来た初春と白井が集まっていた。
「で、今回はどんな事件なの？　やっぱ最近話題の『乱雑開放（ポルターガイスト）』について？」
「もう、佐天さん……なんでそんなに嬉しそうなんですか……」
「いや、学園都市の都市伝説サイトで今一番ホットな話題は、『乱雑開放（ポルターガイスト）』の真相がなんなのかってことなのよ！　ちなみに私は、『別次元からの波動』派ね！」
「そんなわけありませんでしょうに……大体風紀委員（ジャッジメント）としては、そう会議の内容は漏らせませんわ」
「ほほう……？」
　佐天としては、「会議で実際に話し合ったかどうか」を否定するのではなく、「会議の内容は漏らせない」と躱したことで、何となく今回の会議の議題がなんであったか察するが、あえてそこには触れないことにした。こんな軽口で、大事な友人二人の職務に迷惑をかけるのは本意ではない。
「それより早くゲームするんだよ！　るいこから聞いたけど、ここってお菓子を好きなだけ取っていいゲームもあるんだよね?!」
　インデックスの瞳は、フロアの奥にあるアクリルケースで囲われたゲーム機のコーナーにくぎ付けだった。彼女の言っているのは多分チ○ルチョコみたいな小袋に入ったお菓子をメダルで取るゲームだろうが、この店にあるかは一同誰も知らなかった。
「じゃあ、私はインデックスについて行こっかな。クレーンゲームとか久しぶりにやってみたいし」
「お姉様……まーた、低年齢向けの怪しげな両生類狙いですの？」
「ハ、ハア?!　そんなわけないじゃない！」

「んー、じゃあ私はカーレースでもやろうかな。初春はどうする？」
「あ、私は……」
　初春の視線が、チラリと先程からモグラ叩きの前で佇む春上へと向く。実は彼女、初春が来る少し前に、物は試しとモグラ叩きを始めたはいいが、未だに一度も叩かず、ただ台の前に佇んでいた。
「可愛いの……」
　どうやら彼女の興味は、得点ではなく、そのデフォルメされたモグラそのものだったらしい。初春と共に苦笑しあい、佐天は店の右手にあったレースゲームの一角へと向かう。
「おー、新台が出てる。なんか、この主人公のキャラクター格好いいなあ……」
　佐天が見つけたのは、カーチェイスも交えたレースゲーム。高校生ながら国際的人材派遣会社に所属する主人公が、行く先々で事件に巻き込まれながら任務達成となるゴールを目指すゲームだ。
「よーし、やってみよっか！」
『行くぞ、カリオン！　お前に生命（いのち）を吹き込んでやる!!』
　コイン投入とともに流れる主人公の台詞とともに、佐天はハンドルを強く握り締めた。
◇　◇　◇
「ふー、遊んだ遊んだ」
「佐天さん、レースゲームとかパンチングマシンとかばっかりでしたねえ……」
「そう言えばお姉様？　結局、その脇に置いたメダルは使いませんでしたの？」
「え！　いや、コレは、その!?」
「あんまり取れなかったんだよ……これだけじゃ、余計にお腹が空くんだよ……」
「だ、大丈夫なの！　もうすぐ、ご飯の時間なの！」
　一通りゲームを楽しんだ後、佐天たち6人はゲームセンターの自動販売機コーナーのベンチに腰掛け休んでいた。ちなみに、インデックスは空腹を紛らわすためか、適当なジュースを５００ｍｌペットボト

ルで二本も飲んでいたが、新顔の春上以外誰も構わない。彼女らもインデックスの果て無き食欲には、すっかり慣れていた。
「それじゃ休憩終わったら、次どうしよっか？」
「そうですね、春上さんとの記念も撮れましたしね」
そう言って、彼女が見るのは携帯の待ち受け画面。そこに写っていたのは、先程6人全員で撮ったプリクラ写真。携帯に写真データを送れるタイプのもので、彼女は撮ってすぐ待ち受け画面を切り替えたのだ。
異常は、そんな時に訪れた。
『――――エ――――――――タ――――』
「ん？」
不意に佐天の耳に、妙な音声が聞こえた気がした。それはまるでノイズ混じりのラジオのようで、何を言っているのか、誰が言っているのか一切判然としなかった。
「あ、あれ？　春上さん、どうかしたんですか？」
「へ？」
佐天が意識を周囲に戻すと、春上が急に立ち上がりふらふらと歩きだしていた。どこか夢心地の印象で、やがて自動販売機コーナーを囲むガラス扉にぶつかった。
「大丈夫ですか、春上さん!?」
「……うん」
「なになに？　そっちのガラスに何かあった？」
「あら、これ……」
春上に駆け寄る初春とそれに追従した御坂と白井が、ガラス扉の向こうの壁に貼り付けられたポスターを見つける。それは、今夜開催される花火大会のお知らせだった。
◇　◇　◇
「――――で、初春は張り切って浴衣に挑戦したけれど、着付けが出来ず今に至る、と……」
「うう……見てないで、助けて下さい、佐天さん！」
「ちょ、ちょっと、苦しいの……」

あの後、ポスターを見た全員で、花火大会に行くことになった。そこで、ＴＰＯに合った浴衣着用となり、それぞれでレンタルの浴衣を着ることになった所までは良かった。ところが浴衣の着付けが出来るのは、お嬢様学校で和服の着付けも習った御坂と白井の他は、学園都市外部のお祭りで弟に着付けをした佐天ぐらいのもので、初春はネットの知識で挑戦。見事撃沈して、巻き添えの春上とともに、身体中に帯が巻き付いていた。

とりあえず巻き付いた帯を一度ほどいてから、改めて春上に浴衣を合わせ、てきぱきと佐天が帯を捲き直す。

「――はい、一丁あがり！」

「ありがとうなの」

「スゴイです、佐天さん！　あっという間に、こんなにキレイに!!」

「るいこは、本当にすごいんだよ！　私もこの日本の伝統衣装の着心地に大満足なんだよ！」

初春に同意するインデックスも、普段とは異なり浴衣を身に着けていた。紺色の生地に大輪の花火が描かれた浴衣は、彼女の可愛らしさを良く引き立てていた。

「さ、次は初春だよ」

「こんなことなら、初めから佐天さんに頼めば良かったです……」

「でも、初春頑張ってんじゃん」

浴衣をきちんと合わせながら、佐天が微笑む。その笑みに笑い返しながら、初春は続けた。

「今度は、私の番だな、って思いましたから」

「ん？」

「私が風紀委員（ジャッジメント）の試験に中々受からなかった頃、佐天さんたちは、励ましてくれたり相談に乗ってくれてたじゃないですか」

それは、随分と前の話。初春が風紀委員（ジャッジメント）を志望し、その適正試験に臨んでいたころ、佐天やクラスの皆が少しでも初春に協力しようと、気晴らしに付きあったり、一緒に色々調べたりしていたのだ。面白半分ではあったものの、初春にとってそれは強い原動力となった。

「だから、今度は私が春上さんの力になりたいんです。あの時、皆が力

を貸してくれたみたいに……」
「まったくぅ、いつの間にか立派になっちゃって、姉さん嬉しい！
こっちのお子様パンツは成長しないみたいだけど」
「裾をめくらないでください!!」
　騒がしくも暖かな日常。笑いが絶えないその空気に、佐天もまた癒されるのだった。
◇　◇　◇
「たーまやーー!」
「かーぎやー!」
「お腹にどーんと来るの……」
「確かに、ここって穴場よね」
「あ、ホラ！　また上がりますわよ！」
「花火に、タコ焼きに、イカ焼きに、綿菓子に、リンゴ飴に……日本の夏は最高なんだよ!!」
　着付けも無事終わり、御坂達とも合流した一行は、河原にほど近い斜面に設けられた踊り場のようなスペースへと来ていた。佐天の浴衣は水色の地に黄色い水仙の花と、竹とんぼをあしらった柄。初春は、桃色の生地に朝顔が彩られており、春上の浴衣は、白地に紫陽花が映える柄だった。合流した御坂は橙色に綿毛のタンポポが描かれたものであり、白井は紫に薔薇が裾に描かれたものだった。
「たーまやー!!」
　再び上がった夜空の大輪の花に、佐天と初春が示し合わせて叫ぶと、それを見ていた春上がふっと微笑んだ。
「？　どうかしましたか、春上さん？」
「あ……ううん、思い出してたの」
　空に咲く花火に、御坂と白井が微笑み、インデックスがはしゃぎながら夜店の食べ物を掻き込む。それは、本当に何処にも不安などないような風景。
　けれど、それが永遠に続くことなどない。
『――――ル――』
「ん？」

不意に、何かが聞こえたような気がした。
「あのね……昔私にも、初春さんと佐天さんみたいな――――あ……」
「？　春上さん？」
突然、フラフラと土手の上へと歩き出してしまった春上を、初春が追いかける。二人を急いで追いかける佐天は、妙な胸騒ぎに襲われていた。
（これ……やっぱり、気のせいじゃない……？）
昼間も聞いた気がした、妙な声。ノイズ交じりで、どこで誰が喋っているのか分からなかったが、今佐天は自分だけが聞こえる原因をはっきりと確信した。
『――――エ――――リイ――――』
「この声……ＡＲＭＳから……！」
さっきから右腕が小刻みに震え、そこから声ならぬ声が、情報として頭の中に直接響いてくる。そしてその声は、春上を追いかける内に徐々に強く、はっきりと聞こえるようになった。春上の視線が、虚空を彷徨う。
「まさか――――」
『――――た…すけ…――――』
「どこなの……？　何がそんなに苦しいの……？」
「――春上さんにも、この声が聞こえてる？」
ズシン、ととてつもない衝撃に襲われたのは、その時だった。
「キャア！」
「『乱雑開放（ポルターガイスト）』!?」
足元から来た激しい揺れにとても立っていられず、近くの鉄柵へと捕まる。虚空を見つめていた春上も、地面に投げ出された。
「春上さん！」
初春が春上を庇うように覆いかぶさった。揺れから顔を上げた佐天は、二人の近くの電灯が土台から崩れ、二人に倒れ掛かるのに気付いた。
「初春ーーーッ!!」
右腕のＡＲＭＳを起動させ、佐天は二人の元へと駆け寄った。

０３０　災害―テンペスト―

「……！」

初春と春上の上に電灯が倒れてきたまさにその時、佐天は裾がめくれ上がるのも気にせず、全力で駆け寄った。その甲斐あってか、本当にギリギリで電灯と二人の間に入ることに成功した。もはや反射のレベルで右腕が肥大化して三人を覆い隠す堅固な盾となり、佐天自身は来るべき衝撃に耐えるべく奥歯を硬く噛み締めた。

「ッ、……？　ん？」

衝撃が、来ない。結構大きな電灯だったから、相当な衝撃が来ると思ったが。不審に思い、ＡＲＭＳの陰からそろそろと様子を窺ってみた。

「無事みたいね」

そこにいたのは、奇抜な紫色をした駆動鎧（パワードスーツ）を着込んだ一人の女性。『先進状況救助隊』隊長、テレスティーナ。それが彼女との初対面だった。

◇　◇　◇

その後、死者や重傷者こそ出なかったものの、地震の起こった場所が悪く、多数に上った怪我人を病院に収容するため、かなりの時間がかかった。佐天自身は初春と共に、地震のショックで気絶してしまった春上の病院へと付き添い。白井と御坂もそれについて行きたがったが、常盤台の女子寮から無断で出歩いているため、急いで帰ることとなった。

「……春上さん、大丈夫でしょうか」

収容された春上の処置を廊下で待っている間、不意に初春が呟いた。よく見ると、その瞳には不安な気持ちが揺れ動いており、その気持ちがつい口をついて出たのだろう。

「んー、大丈夫だって！　地震のショックで気を失ってるだけだって、あの救助隊の人も言ってたし！」

その言葉は確かに、現場で彼女を診たテレスティーナのもの。多数

の怪我人を診ていた彼女がトリアージを行い、意識が無い以外外傷も無さそうだと診断はしてくれていた。もっとも、救助隊の現場判断だけでは、初春の不安は募る一方ではあった。

「――終わりましたよ」

春上の入った診療室から、看護師の方が出てくる。それを見て初春が息せき切って部屋に入り、主治医の先生に春上の状態を聞いた。

「あの！　春上さんの容態は――」

「大丈夫です。地震に遭って、精神的に過度のストレスに見舞われたのでしょう。外傷もありませんし、一般病棟に移れますよ」

それを聞いて、一瞬初春は動きを止め、次にへなへなとへたり込んだ。

「ちょ、ちょっと、初春?!」

「あ、あはは、佐天さん……安心したら、腰が抜けちゃいました……」

「……まあ、良かったじゃない」

少しばかり情けない初春に苦笑しながら、他の患者の治療の邪魔にならないよう、初春に肩を貸しながら佐天は診療室を後にした。

◇　◇　◇

明けて翌日。風紀委員（ジャッジメント）１７７支部へと遊びに来た佐天は、机の上でぶー垂れていた。

「初春も自然公園に遊びに行くなら、誘ってくれてもいいのに～……」

花火大会のこともあって、初春の様子を見に来てみたら本人は非番で、春上と一緒に遊びに行ったというのだ。春上の様子も聞きたかっただけに、来た意味が無かった。

「ん～～～～……んん？」

椅子の背を反らし、思いっ切り伸びをすると、部屋の隅で隠れるようにパソコンで調べものをしている白井と御坂の姿が映った。椅子から静かに立ち上がり、自然な感じで部屋を横切り、背後から忍び寄る。

「なーに、してるんですか、二人とも？」

「うえっ!?」

年頃の女子中学生として少しばかりどうかと思える奇声を上げ、二人が一斉に振り向く。その二人の間から、パソコンの画面が盗み見れた。

「……？　これって、春上さんの能力評価？」

そこに書かれていた能力は、レベル２の『精神感応（テレパス）』。但し特記事項に書かれた、『特定波長下では例外的にレベル以上の能力を発揮する』という記載が、少しばかり不安を煽った。

出かけていた初春と春上が、二度目の『乱雑開放（ポルターガイスト）』に見舞われたのは、それから間もなくのことだった。

◇　◇　◇

「――どういうことですか、白井さん」

場所は、初春が搬送された病院。今回の『乱雑開放（ポルターガイスト）』に遭った当時、春上に変わった様子が無かったか聞いた白井に、初春が食って掛かったのだ。その様子に、白井は一度躊躇したものの、自身の見解を述べた。

「……あの花火大会の日、『乱雑開放（ポルターガイスト）』が起こる少し前に、彼女の様子が変わりましたでしょう？　今回の地震は、能力者のＡＩＭ拡散力場への人為的干渉によって、ＲＳＰＫ症候群の同時多発が引き起こされている可能性があります。もしかしたら、彼女が――」

「春上さんが、犯人だとでも言いたいんですか!?　彼女がそんなことするはずありません！」

初春の剣幕に、白井が少しばかりたじろぐ。佐天自身、こんな初春の様子は初めて見た。

「たとえ彼女に自覚が無かったとしても、彼女はレベル２の『精神感応（テレパス）』の中でも、少し変わった能力ですの。無意識下で何らかの干渉をしている可能性だって」

「『精神感応（テレパス）』が『乱雑開放（ポルターガイスト）』の引き金になる可能性はあるわ」

そこに飛び込んで来たのは、その場の誰のものでもない声。佐天が視線を巡らせると、そこには先日花火大会の時に出会ったテレスティーナという女性が立っていた。

「……でも、『乱雑開放（ポルターガイスト）』ほどの規模でＲＳＰＫ症候群の同時多発を引

き起こすとなると、それこそレベル4以上の能力が必要になる。レベル2ならほとんどその可能性は無いと思うけど」

その言葉に初春がほっと息を吐く。その横で佐天は、どこか納得いかない視線をテレスティーナに送っていた。

「念のため、ちゃんと調べた方がいいかも知れないわね」

「え?!」

そう言うとテレスティーナは懐から携帯を取り出し、どこかへ連絡を取り出した。

「私だ。被災者を一名、本部の研究所へ送る。表に車を一台回すように。――――潔白を証明するためだと思いなさい。大丈夫、ウチには専門のスタッフが揃っているから。悪いようにはしないわ」

納得いかない初春に、そう言って諭す。それは、どこを取っても疑念など抱かない光景のはず。

「……それで、そっちの黒髪の子は、どうして私をにらんでいるのかしら?」

その言葉に御坂・白井・初春の三人が振り向き、ぎょっとなった。初春の腕を抑え落ち着かせようとしていた筈の佐天が、何故かテレスティーナの事をじっと睨んでいるのだ。

「……お詳しいん、ですね」

「? なにかしら?」

「RSPK症候群の同時多発だとか、AIM拡散力場の関係だとか……それに『精神感応(テレパス)』との関係ですか? こんなに詳しいなんて、もしかしてそっちが専門分野だとか?」

佐天の疑問は、何故テレスティーナがここまで事情に詳しいのか、ということだった。『先進状況救助隊』は、白井に聞いたところによると、『警備員(アンチスキル)』の中の一組織でしかない。『警備員(アンチスキル)』の構成員は、全員が現役の教職員であり、彼女の専門がそっち関係だと言うのならそこまでおかしなことでもないかも知れない。

けれど現場に一番に到着出来て調査や計測も自由にできる立場の彼女が、『都合よく』その専門家であり、その上彼女の率いる救助隊本部には、『救助』に直接関係しない専門のスタッフが揃っているだなん

て展開は、やはり違和感があった。
そう思い、佐天が変わらず睨んでいると、やがてテレスティーナが苦笑し、マーブルチョコを差し出してきた。
「おひとつ試してみる？　今日のラッキーカラー」
◇　◇　◇
「でも、良かったわよね。何でも無くて」
あの後、『先進状況救助隊』で調べてもらったところ、結果はシロ。春上の能力は通常レベル2相当であり、ある特定の誰かからの『受信』に限って距離も障害物も関係なくなるというものだった。『発信』出来ない以上、ＡＩＭへの干渉など不可能だ。
「ほら、だから言ったじゃないですか」
「わたくしはただ……」
春上の疑いも張れて初春は上機嫌だが、疑う形になってしまった白井としては居心地が悪い。そんな二人の様子に内心溜息を吐いていたが、佐天にはまだ気がかりなことがあった。
（春上さんは受信専門で、あの時私と同じ『声』が聞こえていた。だったら『乱雑開放（ポルターガイスト）』を引き起こしているのは……！）
自分と春上だけに聞こえた『声』こそが、原因だろうという確信が佐天にはあった。だけど、彼女の耳に残る苦し気な助けを求める『声』が、そのことを皆に告げることを躊躇わせた。
（あの『声』が、本当に助けを求めているんだとしたら……誰かが、声の主に無理に働きかけて、この状況を作り出していることも考えられるんだよね）
だとしたら、声の主は犯人じゃないことになる。むしろ助けなければいけない相手だ。そう考えると、誰が直接の犯人か吊し上げるようなこの場では言いたくなかった。
そして、春上の意識が戻ったのは、その日の夕方になってのことだった。
「ごめんなの、初春さん。私また……」
「大丈夫。大丈夫ですよ、何も心配いりませんから」
意識の戻った春上を初春が気遣う。やがてぼうっとしていた春上

が胸元に手をやり、途端に慌てた顔になった。
「あ、ペンダントならここにありますよ」
そう言って初春が懐から預かっていた彼女のペンダントを差し出す。象嵌の綺麗な古風なペンダントだった。
「大事な、ものなんですよね」
「うん……友達との思い出なの……」
そう言って春上がロケット・ペンダントの蓋を開く。そこには少し古びた一枚の顔写真が入っていた。
「「――――え!?」」
その写真を見た佐天と一緒に、ペンダントを後ろから覗き込んでいた御坂が叫ぶ。彼女の驚愕の表情に、佐天はこの写真の人物が誰なのか確信した。
「――――『枝先絆理(えださきばんり)』ちゃんって言うの」
枝先絆理。かつて見た木山春生の記憶の中で、人体実験に利用された少女だった。

031　嫌悪―ヘイトレッド―

――枝先絆理（えだざきばんり）。学園都市に幼い子供を預けた後、親権を持つ者が行方をくらました場合に生まれる身寄りのない子供、『置き去り（チャイルドエラー）』の一人。そして、木山春生の教え子であり、木原幻生の行った『暴走能力の法則解析用誘爆実験』の被験者となった少女だ。

春上が皆に告げた時折彼女の『声』が聞こえるという事実。そして、彼女の能力が受信専門の『精神感応（テレパス）』だったことから、話を聞いたテレスティーナや白井などは枝先が『乱雑開放（ポルターガイスト）』の原因ではないかと疑った。そのため、帰りのモノレールの中でも初春は白井と冷戦状態となっていた。

「……」

「……あ、あのさー、初春？　そろそろ機嫌治しなよ、ね？」

「だって！　白井さんは、春上さんの次に、その友達まで犯人扱いして！　こんなの、とても納得できるわけ無いじゃないですか！」

何とか初春の怒りを鎮火しようと佐天も頑張っているが、余り効果が無い。理屈は分かっても、心情的に納得できないようだ。

「別に私は、風紀委員（ジャッジメント）として、間違ったことを言った覚えはありませんわ。初春に理解されなかったとしても」

「……ッ！」

「ちょ、ちょっと！　白井さんまで火に油注ぐような発言、やめてください！」

そりゃ風紀委員（ジャッジメント）としては、間違っていないのかも知れないが、わざわざ言ったら余計に感情的になると分かっている筈だ。このあたり、白井も少しばかり感情的になっているのかと、佐天は溜息の出る思いだった。

「佐天さんはどうなんですか！　佐天さんだって、枝先さんがそんなことするわけないって思いますよね?!」

「え？　えーと……」

佐天は少しばかり言葉に詰まる。果たしてここで、自分の推論を述

べるべきか。というのも、佐天は春上と違い精神感応（テレパス）の能力者ではない。それなのに、何故か『声』が聞こえているという事実を話すべきかどうか。少しだけ迷うように答えに窮したが。

「……枝先さんが、今回の『乱雑開放（ポルターガイスト）』の『原因』なのは、間違いないと思う。だけど、『犯人』じゃない」

結局は全てを話すことにした。その言葉からそう思う根拠として、一連の『乱雑開放（ポルターガイスト）』事件の前兆として聞こえる『声』についてを説明する。その『声』の内容と、そこから推測される事柄を全て。そうして一連の話を終えたところ……何故かジト目でこちらをにらむ三人がいた。

「「「……」」」

「……え？　な、なに？」

「……佐天さん」

「は、はい！」

とんでもない迫力を伴って投げられた御坂の言葉に、思わず背筋が伸びる。何というか有無を言わせぬ迫力があった。

「……つまり、佐天さんは、最初の『乱雑開放（ポルターガイスト）』の辺りから、その『声』が原因かもとは思っていたわけよね？」

「え？　い、いやー、あの時は、正直何かの聞き間違いかなー、と……」

「しかし、その時点で『声』との何らかの因果関係は察してしかるべきでしょうに」

「は、はあ……」

「しかも『声』が助けを求めるものだって言うんなら、その『声』の主に何か異変が起こっているとも考えられたわけですよね……」

「……」

御坂、白井、初春と、ここまで話を聞いて佐天は察する。目の前の三人は、自分が秘密にしていたことに対して、かなりご立腹であると。

それを裏付けるように、次の瞬間三人は同時に爆発した。

「なぁんで、それを早く言いませんのッ!!　初春、今の話が本当なら、枝先さんはあくまでＳＯＳを求める要救助者の可能性が高いですわ。『乱雑開放（ポルターガイスト）』との因果関係はひとまず置いておいて、支部に戻り次第、

彼女と他の被験者の収容先を確認。警備員（アンチスキル）にも応援要請を出し、至急身柄を確保ですわ」

「いえ、支部に戻る時間も惜しいです！　今このモノレール内から、辿れるだけの情報を辿ってみます！　助けを求めてたって言うんなら、急いで枝先さんを助けないといけませんから！」

「枝先さん達の収容先が分かったら、あの木山春生の所在も確認してくれない？　ＡＩＭ拡散力場との関係といい、今回の事件といい何かひっかかるのよ」

忙しく動き出した三人の横で、佐天は少しだけ手持ち無沙汰な感じだった。とは言え、佐天自身もこのことに確証を持ったのはつい数時間前だったし、何よりテレスティーナという女性の前で、この推測を口にしたくなかったのだ。

（……あの女にあった時から、ＡＲＭＳがほんの少しだけ震えてる。これは……『嫌悪』？）

そう。ＡＲＭＳが、あの女性の何かに反応し続けている。何故かはわからないが、あのどこか無機質で爬虫類じみた瞳を見た瞬間から、ＡＲＭＳはずっと一人の女性に最大限の警戒をしている。あの瞳は、まるで。

飼育檻（ケージ）の中の、実験動物（モルモット）を見るような。

（……まさかね）

自分の飛躍した考えに自嘲しても、不安は消えない。佐天の心の中に、漠然とした黒雲は残ったままだった。

◇　◇　◇

後日、風紀委員（ジャッジメント）１７７支部にて。初春の調査によれば、既に枝先を始めとするかつて人体実験の被験者となった少年少女は、搬送予定の各施設から他の施設に運ばれており、その後の足取りが不明。それどころか警備員（アンチスキル）に捕らわれたはずの木山もまた、既に保釈が成立して行方が分からなくなっていた。

このあたりで、何故かテレスティーナと『先進状況救助隊』が出張って来て、木山の確保と被験者たちの発見も自分たちがやると言ってきた。初春経由でそれを知った佐天は、余計にテレスティーナへの警戒

を強めたが、以前の『声』よりも確証の無い話なので、それを口にするのも憚られた。
　結局その日は177支部でも大した成果を上げられず、その場はお開きとなったわけだが。
「――――で？　なーんで、お前さんは私の前にいるじゃんよ？」
「いやー、警備員（アンチスキル）の知り合いって、黄泉川先生しかいなくて……」
　ある高校の職員室。警備員（アンチスキル）の支部が併設されたその場所に、佐天は特別講習で知り合った黄泉川愛穂という警備員（アンチスキル）に会いに来ていた。
　黄泉川は一つ溜息を吐いた後、眼鏡をかけてオドオドしている同僚からお茶を受け取り、一口啜った後本題を口にする。
「……捜査情報はあまり口に出来ないが、あのテレスティーナは確かに怪しい。それでも現段階で実際の犯罪に手を染めているという確証も無い以上、手を出すわけにもいかないじゃんよ」
「それなら……木山先生の方については？」
「木山春生の保釈の件についてだな？　そっちは確かに私らも掴んでいるが、それを部外者のお前さんに言う訳にもいかないじゃん」
　黄泉川の正論に、思わず歯噛みする。風紀委員（ジャッジメント）ならば分かるが、佐天は所詮一般の学生でしかない。完全な部外者であると言われても反論出来なかった。
「でも……今回の事件、木山先生も関わっているかも知れないんです。木山先生を保釈した人間が真犯人かも知れないですし。せめて木山先生を保釈した人が、何を目的として彼女の保釈金を支払ったのかとか分かりませんか？」
「……そこまで心配する必要は無いと思うじゃんよ。保釈金を支払った人間は言えないが、あくまで人体実験の被験者を救うため、当時の研究内容についての意見聴取が目的らしい。人物的にも信頼できるし、純然たる医療目的じゃんよ」
「医療……」
　そこまで聞いて佐天は思考を開始する。黄泉川先生からこれ以上詳しい情報を聞くのは不可能だろう。そうなると別ルートで木山先生の所在を調べる必要がある。医療と聞いて彼女の脳裏に、次に接触

すべきカエル顔の医者の顔が浮かんだ。
「さ、そろそろ私も仕事に戻らなきゃな。被験者の子供たちが心配なのは私も分かったから、無事が確認できたら連絡してやるじゃんよ」
「――はい。わかりました」
少しだけ生返事で返して、部屋を後にする。その足で向かうのは、第七学区のとある病院。いつも彼女が利用する主治医の元だった。
（……でも、どうやって聞き出せばいいんだろ？）
病院に向かう道すがら、佐天はいつも世話になっている主治医の顔を思い浮かべる。あの先生は何より『医者』であるという事を本分としている以上、患者の情報などそうそう簡単に教えてくれないだろう。
「やっぱ、正面きって頼むしか――――ん？」
そんな風に頭を悩ませていたところ、視界の奥に気になるものを見つけた。病院横の駐車場の角に差し掛かった時、駐車場の入り口を通った青いスポーツカーの助手席に、友人の姿が見えたのだ。
「御坂さん？　それに……」
運転席側は影になって良く見えなかったが、何となく妙な雰囲気を感じ、駐車場の塀へと身を隠す。しばらく様子を窺うと、出てきた人物に驚愕することとなった。
「……木山先生ッ!?」
まさに探していた当人が目の前に現れ動揺したが、すぐにもう一度塀の影に身を潜めた。幸い見つかってはいないのか、車から降りた二人は、そのままカエル顔の先生の病院へと入っていった。
（……まさか、ここだったのかー。――――それに）
塀の影から再度様子を窺う。木山先生が乗って来たスポーツカーのさらに奥。駐車場の入り口が見える角に、まるで隠れるように駐車した一台の車が目に入ったのだ。その車に刻印されたのは、『ＭＡＲ』。『先進状況救助隊』の車だった。
（この分だと、御坂さん達を尾行してきたのかな？　やっぱりきな臭いか……）
救助隊なのに明らかな越権行為。佐天の視線はこれ以上ない程細

められ、その右腕はわずかに『共振』してすらいた。
これから起こる『戦い』を、予見するかのように。

032　猛毒―ヴェノム―

佐天や上条の件で何度も世話になった病院の一室。薄暗い病室の中、ガラスで仕切られた別室からの光だけが部屋を照らしていた。木山に従ってここまでついて来た御坂は、奥の別室を覗き込み自分の隣の木山へと尋ねた。

「――この子たちが」

「ああ。私の教え子たちだ」

そもそもどうして二人が一緒に行動しているのか。元々は行方の知れない子供たちを見つけるため、御坂が以前木山の記憶で見た研究所に忍び込んだのが原因だった。何か手がかりでもないかと侵入してみたものの、研究所は既に廃棄された後。機材の類も運び出されて何も残っていなかったのだが、たまたま同じような理由で研究所に忍び込んでいた木山に出くわし、ここまで付いて来たという訳だ。

そして、ここにはもう一人立ち会う人物がいた。

「でも、さっきの話は本当なの？　この子たちを起こそうとすると――」

「ああ。『乱雑開放（ポルターガイスト）』が起きるんだね？」

御坂の言葉に答えたのは木山ではなく、彼女にこの施設を提供した人物。この病院の院長でもあるカエル顔の医者その人だった。

彼がこの件に関わった理由は、余りに単純。『幻想御手（レベルアッパー）』事件の契機となった木原幻生の行った『暴走能力の法則解析用誘爆実験』の被験者すべてを救うこと。子供たちの事を聞いた彼は、『医者』の本分として子供たちを救うことを決意し、全員を一つところに集め、病状の詳細を知る木山の保釈金を払いもした。すべては、子供たちを救うために。

「だが、子供たちを救う段階に至って問題が発生した。この子たちの意識が覚醒に向かうと、ＲＳＰＫ症候群の同時多発が引き起こされ、地震に極めて似た震動が起きてしまう……そうならないようにするには、現在私が研究開発中の特別なプログラムを使って覚醒させるわ

けだが、完成にはあと一つ、『ファーストサンプル』と呼ばれるものが必要なんだ」

「『ファーストサンプル』……？」

「……木原幻生の行った『暴走能力の法則解析用誘爆実験』で使用された、暴走能力者の脳内の分泌物質を採取して凝縮・精製した結晶体、だ。その中でも、最初の被験者から抽出された結晶体は、その後に作られた結晶体の大元と言えるものであり、それさえあればすぐにでも皆を起こすためのプログラムを完成させることが出来る」

その後に数多作られた劣化コピーではない、唯一の原典（オリジナル）。子供たちの暴走能力を通常状態に移行するために、どうしても必要なサンプル。それが決定的に欠けていた。

「もし見つからなかったら、どうするの？」

「……例え『乱雑開放（ポルターガイスト）』が起こるとしても、この子たちの意識を――」

「大丈夫、ですよ」

会話の途中、病室の外から響いた声に驚き三人全員が入口の方へと振り向く。そこから入って来たのは三人にとって良く知る人物だった。

「佐天さん？」

「あ、御坂さん、スイマセン。実は、駐車場の入り口で二人を見かけたもんで」

「……君まで来ていたのか。いや、それより、さっきの言葉はどういう意味だ？」

木山の表情は険しいものだった。その視線に臆することなく、佐天は言う。

「さっきの話からすると『ファーストサンプル』さえ見つかれば、『乱雑開放（ポルターガイスト）』を起こさなくてもこの子達を目覚めさせることが出来るんですよね？　だったら簡単です。私も御坂さんも、それを探すのを手伝います。御坂さんは学園都市最高の『電撃使い（エレクトロマスター）』ですし、情報処理なら他の誰にも負けない初春っていう友達がいます。あの子も風紀委員（ジャッジメント）ですから、昏睡状態の子供たちのためだって聞いたら喜んで

協力してくれますよ」
「……これ以上無関係な人間を巻き込むというのか？　正直、関心しないが」
「大丈夫です。元々初春の所に引っ越してきた春上さんの友達が、枝先さんって言う今回の被害者の一人だったんです。初春自身今回の事件を解決するんだって張り切ってますから、事情を話せば自分から力を貸してくれますよ」
「い、いや、しかし……」
それでも木山の表情は優れない。それはそうだろう。彼女にとって子供たちを目覚めさせることは、自らに課せられた罰のようにも感じていたのだから。
そこに声を掛けたのは、彼女と相対した御坂美琴だった。
「――アンタさ、子供たちを取り戻すためなら、『手段を選ばない』んじゃなかったの？」
「！」
「『ファーストサンプル』さえ見つかれば、より安全に、しかも確実に子供たちを起こすことが出来るんでしょ。誰かの手を借りたくない、って言うのはやっぱりアンタの我が儘よ」
「……」
御坂の言葉にしばし木山が俯いて考え込む。やがて決意したのか顔を上げ、歩み寄って握手するために、御坂と佐天へと手を伸ばし――
「残念だけど、そういう訳にはいかないわね？」
突然の闖入者によって、その手は握られることなく宙を彷徨った。
全員が部屋の入り口へと振り向く。そこには紫色の駆動鎧（パワードスーツ）を着込んだテレスティーナ率いる『先進状況救助隊』の一団が姿を現していた。
「……誰だ。君たちは？」
「『先進状況救助隊』隊長、テレスティーナです。申し訳ありませんが、

この子達は我々が預からせていただきます」
「なに?!」
「心配はいりません。我々『先進状況救助隊』には専門の研究機関が併設されています。子供たちは我々の元で覚醒へと導けるでしょう」
「一体何の権限あってそんなことを……!」
「既に統括理事会の許可も得ています。――連れていけ」
テレスティーナの命令とともに、『先進状況救助隊』の駆動鎧（パワードスーツ）が部屋へと入り込み、子供たちのいる別室へと迫る。その前へと木山春生が立ち塞がった。
「またお前たちは……私の元から子供たちを奪うのか!?」
「何度も申し上げますが、これは既に決定したことですので、貴女一人が抵抗したところで被験者は全てこちらで保護させていただきます」
「いえ、一人じゃないですよ?」
木山とテレスティーナの会話に割り込んできたのは、佐天。その腕のＡＲＭＳは既に開放され、鋭い爪を駆動鎧（パワードスーツ）に向けて威嚇するように見せつける。
「ちょ、佐天さん!?」
「キミは……いいのか？　ここで私に味方するとなると、学園都市の上層部を敵に回す可能性も……」
「いいんです。さっきの話でどうしても納得できないことがありますし」
「あら、何かしら?」
そう言って佐天はテレスティーナを見据える。その瞳は鋭く、まさしく『敵』を射抜くような眼だった。
「私たちの会話、どこから聞いてたのか知りませんけど……聞いてたなら分かるはずですよ。既に覚醒させるためのプログラムまで出来ているって言うんなら、現状もっとも安全に子供たちを起こせる可能性が高いのは木山先生のはずです。それを無視して貴方方に預ける根拠がないじゃないですか」
「あら、そのプログラムにしても未完成だと聞いたけれど?」
「それでも子供たちの安全を考えたら、ここに収容したままでもいい

はずです。研究員がいるって言うんなら、派遣すれば済む話ですし。子供たちをわざわざ研究所なんかに搬送する根拠を教えて下さい」

「うーん、そうねえ……」

そうしてテレスティーナはやや考え込むかのように、片手を顔の前へと翳した。佐天は油断なく、その挙動に注目していた。

「やれ」

ごく短い命令。それと共に、周囲の駆動鎧（パワードスーツ）が四人全員に捕縛銃（ネットランチャー）を発射した。テレスティーナに注目していた四人は、避けることがかなわず網の中へと捕らえられた。

「な!?　ちょ！」

「え?!」

「何!!」

「むぅ……」

四人を捕らえた網は、化学繊維によって作られた強靭なもの。すぐさまＡＲＭＳや電撃で脱出を試みたが、一度や二度の攻撃ではビクともしない。

「バァアアアアアカ！　調子乗ってんじゃねえぞ、ガキどもがよおッ!!」

四人を捕らえた瞬間、テレスティーナの様子が豹変した。余りの様子に全員が声を失う。

「ま、こんな状態でも『超電磁砲（レールガン）』と『ＡＲＭＳ』は油断できねえからなぁ。黒髪には電撃、第三位には『アレ』を流せ。おら、とっととやれよグズども」

テレスティーナの指示に従い、佐天の身体は駆動鎧（パワードスーツ）用の大型電磁警棒（スタンロッド）に抑え込まれ、高電圧の電流が流された。佐天の声にならない悲鳴が響く中、部屋の中に特徴的な高音を出すスピーカーが持ち込まれ、隣の御坂も頭痛を訴えた。

「あ、、あぁあああああああああああああああ!?」

「ッ、痛、ァッ!?」

「どおだあッ？　特製電磁警棒（スタンロッド）と、私が作った『キャパシティダウン』の味はよおッ！　スキルアウトに流したモンからさらに改良を加えた代物だが、『ＡＲＭＳ』も『超電磁砲（レールガン）』もこうなっちまったら、ただのクソガキだなぁ、オイッ！　ぎゃはははは！」

笑いながらテレスティーナは、駆動鎧（パワードスーツ）の脚で御坂を蹴りつける。衝撃に地面を転がり、御坂は痛みで動けなくなった。少し遅れて佐天の四肢からも力が抜ける。

そこに、先に別室を確認していた隊員が戻って来た。

「『木原』隊長、収容準備整いました。いつでも搬送可能です」

「あー？　よーし、お前らは奥にいるガキどもを順次搬送。そっちが終わり次第、こっちのガキどもも収容だ。精々貴重～な実験動物（モルモット）になってもらうさ」

「……!!　待て！　『木原』だと!?」

初めて聞いたテレスティーナの苗字に、木山が反応する。その苗字は、かつて。

「そ～よぉ？　私の名前、『テレスティーナ＝木原＝ライフライン』。お前の恩師の『木原幻生の孫娘』よ～？　ぷっ、ぎゃははははは！」

「……ッ！」

目の前の女の正体を知り、ようやく木山にもすべてが見えた。子供たちが、自分の大事な生徒たちが、今また『木原』に狙われているのだと。必死になって網から逃れようとするが、テレスティーナはそれをあざ笑うかのように目の前を横切り、佐天の前で止まる。

「……ぁ……ぐ……」

「チッ。やっぱ聞いてた通りか。『ＡＲＭＳ』は一度でも喰らった攻撃なら、『進化』して対応出来る。次にもう一度取り押さえようにも、今度は電撃も大して効かなくなるらしいしな。――――実験に使えねえんじゃ、いらねえや」

そう言って腰の後ろにマウントされていた銀色のアサルトライフルを取り出す。ＡＲＭＳのつけ根、右肩の骨に狙いを定めると――

ぱん、と引き金を引いた。

放たれた弾丸は、佐天の右肩で止まり、肉の中に食い込んだ。

「ウ――グッ?!」

その途端、佐天の苦しみ方が変わる。まるで身体中に流れる異常を、吐き出そうとするように。全身を巡る焔を、掻き毟るように。

「私の研究テーマではないけれど……有史以来、最も人類の生命を奪い取ってきた代物だそうよ?」

「が、あ、あああ!?」

「そう、それは――――」

熱から逃れるように、異常を吐き出すように、佐天の服が引き千切られ、白い獣の姿へと変わっていく。顕れた獣の表情もまた、苦悶に満ちていた。

「――――『毒』よ!!!」

ひび割れた獣の苦悶。部屋に響き渡る咆哮を聞き、テレスティーナは邪悪に口角を吊り上げた。

０３３　薔薇―ローズ―

絶叫が、響き渡った。その絶叫を放つのは、白き滅びの獣、バンダースナッチ。だがその姿には常にある威圧感などどこにもなく、全身を駆け巡る苦しみに叫喚を上げる様は、余りに哀れなものだった。

そんな姿を目にして、テレスティーナは予想以上の結末にほくそ笑む。

「は、ハハ、アーッハハハッ、ハハハハハ!!　どうだよ、私が独自に入手した特殊弾頭『ヴェノム』の味は？」

嘲笑を浮かべながら、駆動鎧（パワードスーツ）の脚を動かし、バンダースナッチの胴体を蹴り飛ばし、踏みつけにした。たったそれだけの衝撃で、バンダースナッチの強靭だった左腕がぼろりと崩れ、その断面から佐天の顔が浮かび上がった。

「アンタ……一体何したのよ……！」

「んー？　おーおー、知りてえのか？　頭の足りねえ馬鹿な化け物でも、一丁前に知りてえのか？　いいぜぇ、教えてやる。さっき撃ち込んだ弾頭は、ナノマシンで作られた特殊弾頭『ヴェノム』だ」

地面に転がった薬莢を拾い上げ、佐天の顔面近くまで持って行く。佐天は何とか目の前の女に反撃しようと試みるが、身体全体に入った罅と猛烈な激痛で、顔を顰め身悶えるのが精一杯だった。

「コイツは他のナノマシンに撃ち込まれると一気に増殖し、浸食を始めごく小さなプログラムを発信する。そしてＡＲＭＳを統括するコアチップに侵入し、人工知能プログラムを徹底的に破壊しちまうのさ。ＡＲＭＳ研究の第一人者が生み出した、ＡＲＭＳを殺すコンピューターウイルス、それがこの『ヴェノム』よ」

勝ち誇った笑みと共に薬莢を投げ捨て、佐天の顔面に蹴りを一発入れてから上からどく。視線の先には既に運搬用のカーゴを持ってきた駆動鎧（パワードスーツ）が控えていた。

「よし、撤収だ。別室のガキども収容したら、そこのＡＲＭＳと超電磁砲（レールガン）も回収だ。ＡＲＭＳの方は数時間もしないでくたばるだろ

うが、それまでにデータを少しは採取しないといけないからな。とっとと積み込め」

『了解』

部下に指示を出し、部屋の壁側へと移動する。圧倒的な勝利。絶対的な優越感。胸を満たす心地よい感触に身を浸し、さらにはまもなくやって来る悲願達成の瞬間を思い浮かべて、振り向いた。床に這いつくばり、呪うように睨んでくるＡＲＭＳと超電磁砲（レールガン）を視界に収めると、敗北を刻み付けるようにもう一度笑みを浮かべた。

不意に、何の前触れもなく、ふ、と四人の姿が消えた。

「――――――――あ？」

状況が理解できず、テレスティーナの口からそんな声が出た。視界をずらすと、彼らを回収する予定だった部下二人も固まっている。特に崩れかけたＡＲＭＳの肩を掴んだところだった部下の一人は、その手の中にいたはずの標的を求めて虚空を両手で掻き分けている。光学迷彩のような透明化でもないようだ。

（幻覚系の能力でも、科学技術でも無えな……第一）

視界を再び後ろに戻すと、そこにはスピーカーを持たせた部下の一人が、相変わらず大音量で耳障りな高音を流している。キャパシティダウンに異常は見られない。とは言え、目の前からいきなり標的が消えるなど、能力以外考えられない現象だった。

（そういや、超電磁砲（レールガン）とコンビ組んでる奴は空間移動能力者（テレポーター）だったか。現場の状況を察して音に影響を受けない一瞬で全員を回収したとかか？　……だとすると、面倒くせえな）

既に全員が回収されたのであれば、ここでモタモタしているメリットはない。その上、万が一警備員（アンチスキル）に連絡が行くと、ここに出張って来る可能性はあった。最終的に統括理事会から圧力をかければ問題ないとはいえ、手続きが煩雑になることは充分考えられた。

「……チッ。いないモンはしょうがねえ。残りの奴らでガキどもの収容・搬送を速やかに終わらせろ。回収に失敗したそこの二人は、どっ

かその辺で死んでろ。オラ、急げ!!」
テレスティーナの怒声に従い、部下たちの駆動鎧（パワードスーツ）が忙しなく動き回り、次々と子供たちを収めたカプセル型ベッドを運び出していく。その扱い方は、およそ人間に対してのものではなく、正しく『物』として扱うやり方だった。
そうして、その光景を、御坂と木山は、その部屋の壁際で歯を食いしばりながら見ていた。
「――――ッ」
「ぐ、くそおっ！」
思わず木山が罵声を出すも、どういう訳か、目の前のテレスティーナ達はこちらに気付かない。彼らはまるでこちらに気付かない。
『――――少しの間、静かにしていて下さい』
木山を止めたのは、青い服を纏った小さな少女。彼女こそが、この不可思議な現象を引き起こした張本人。
「……アンタ、〝青〟のアリスって言ったかしら？　この現象って……」
『ええ。空間移動（テレポート）でも、光学迷彩でもありません。私たちがいないように見せかけ、彼ら全員の認識をずらしました。その後は私たちを踏みつぶさないよう思考を少しだけ誘導して、網から抜け出したお医者さんの先生に、全員を壁まで移動してもらっただけです』
つまり、彼女たち四人は、最初から一切動いてはいなかった。テレスティーナ達が御坂達を見失っただけで、変わらず佐天は肩を掴まれたままだったし、御坂も目の前に駆動鎧（パワードスーツ）が佇んだままだった。だと言うのに、目の前の少女はあそこにいる全員の認識をいとも簡単にずらし、こうして四人全員テレスティーナ達に収容される未来を事前に防いだ。並大抵の手腕ではない。
「……どうにかできないの？　このまま黙って、あの子たちが連れ去られるのを見ているだけなんて――――！」
『駄目です。バンダースナッチは撃ち込まれたナノマシンで完全に機能不全に陥っていますし、それにあの音はまだ鳴っています』
視線を向けると、確かにキャパシティダウンは相変わらずスピー

カーから流れっぱなしだ。オマケに用心したのか、護衛役に新たに駆動鎧（パワードスーツ）が二体付いている。

『能力なしにあのスピーカーを破壊するのは危険すぎますし、第一やった途端に向こうも私たちの存在に気づきます。虚空に向かって機銃の一斉掃射でもされたら、一溜まりもありませんよ』

例え見えなくても存在さえ分かれば、向こうも攻撃に移るだろう。そう言われれば御坂にも返す言葉は無かった。

……約一時間後、子供たちがいなくなった部屋を見つめ、木山はただただ呆然と立ち尽くしていた。

「……また、なのか」

彼女のその呟きは、とても微かで、感情が抜けきったかのように空虚なものだった。

「また、学園都市は、あの子たちを奪っていくのか……？　あの子たちが、なにをしたって言うんだ……！」

ガラスに這わせていた手を拳の形に変え、力のまま叩きつけた。それも次第にやみ、やがて力が抜けたように膝を床につけた。後ろから見た彼女の肩は、震えているかのようだった。

『――まだ、終わりじゃありません』

そう言い放ったのは、〝青〟のアリス。その視線の先、何も無かった部屋の中心に、突然二人の人物が現れた。言うまでもなく、風紀委員（ジャッジメント）１７７支部所属の空間移動能力者（テレポーター）、白井黒子と初春飾利。

「黒子ッ?!」

「お姉様、アリスさんから連絡を受けて応援に参りましたわ。まずは状況の確認から始めましょう！」

「佐天さん?!　しっかりしてください、佐天さん!!」

黒子が御坂へと駆け寄り、無事を確かめていると、その横を通り抜けて初春が佐天の傍へと駆け寄った。その佐天はバンダースナッチの姿のままで、今も苦し気に蠢き、地面に無数の爪痕を残していた。その叫び声も以前とは比べ物にならない程に、か細いものだった。

『白井さん達には、前もってある程度説明しておきました。至急子供たちの足取りを追って下さい。あのキャパシティダウンは脅威です

が、能力者ではない警備員（アンチスキル）と連絡を取り合えば対処自体は可能と思います。どうか皆さんで、あの子たちを取り返してください』

そう言って、彼女はこの場にいる二人の『医者』と『教師』の方へと振り向いた。その顔には状況への焦燥も怒りも見受けられず、ただ己が意思を貫く強い瞳だけがあった。

『……先生には、佐天涙子のとりあえずの保護を。そして、木山先生には、御坂さん達について行ってもらいます』

その言葉に木山春生は、ゆっくりと顔を上げる。その顔には困惑するような、意図を問うかのような色が浮かんでいた。

『木山先生、私には貴女がどれほど苦しいのか……よく、分かります。だけど、だからこそ言います。貴女が子供たちを、諦めないでください。足を止めなければ――〝意志〟を、捨てなければ。未来は何時だって、〝前〟に進んだ先にあるものですから』

アリスのその言葉に、木山は一度だけ顔を伏せ、肩を震わせた後、涙を振り切って立ち上がった。強い瞳。確かな〝意志〟を感じさせる瞳に、アリスは口元を緩ませた。

『……佐天涙子（かのじょ）のことは任せてください。私が必ず助けて見せますから――』

そう言ってアリスは佐天のちょうど頭の近くでその存在を霞ませ、やがて空気に溶けるようにいなくなった。

「……彼女は、何者なんだ？」

「詳細は分かりませんが、悪い方ではありませんわ。以前も助けて下さいましたし、よくわからない能力をお持ちのようですし」

「……いや、黒子？　少なくともあの子の能力は、私たちにも分かる能力よ」

そう言うのは、御坂。彼女はこれまで見た〝青〟のアリスの能力で、思い当たるものがあった。認識の誤認、距離が離れた相手への意思の伝達、そして木山春生の気持ちがわかると言った彼女の能力は――

――

「――『精神感応（テレパス）』。それも相当高レベルの能力者よ」

そう言う彼女の頭の中にあるのは、同じ常盤台に所属する精神系能

力の最高峰。アリスは、彼女と比肩しうる存在ではないかという考えが、頭から離れなかった。

◇　◇　◇

その頃、崩壊しかけたバンダースナッチの内面においては。一面の『猛吹雪』と『暴風』の中を佐天涙子が必死になって走っていた。

「あ～、もう！　早いとこウイルスとかって言うのを見つけないといけないのに！　なんでこんな走りにくいのよーッ!!」

彼女はずっと、バンダースナッチの内部を走り回っていた。体内に入り込んだというコンピューターウイルスを探すために。そして何とかそれを倒すために。そのためにあっちこっちに走り回ったのだが、視界は一面白一色。どっちが前なのかもわからない状態だった。

『――そっちじゃありませんよ』

そんな彼女の目の前に、ほんのりと輝く一人の少女が舞い降りた。

「うわっ！　えっと……？」

『私は〝青〟のアリスと言います。恐らく御坂さんたちから聞いているはずですが』

「あ！　インデックスの時に助けてくれた子!?　あの時は本当にありがとうね！」

吹雪の中で声を届かせるために、半ば怒鳴るような声だったが、それでも彼女の感謝の気持ちを受け取り、アリスも口元を綻ばせる。

『今はそれよりも、こちらに。この先に、バンダースナッチの本当の真実があります』

「本当の、真実？」

『はい……彼女が抱えてきた絶望が、悲嘆が。全てはこの先にあるのです』

「……」

指し示された先にあるのは、本当にわずかな光。その光こそがアリスの言う『本当の真実』なのだろう。

『……貴女には、進む以外の選択肢は無いのかも知れない。けれど、忘れないで。どんなに選択肢が乏しくても、道は一つしか無くても、最後に「進む」という選択をするのは、貴女自身の〝意志〟なのだとい

う事を。だから、最後に尋ねます――――――――――進みますか？』

その問いに、佐天は一度瞑目し、しばらくそのままの姿勢で考え……やがて頷いた。その返答を受け取り、〝青〟のアリスは佐天の手を取り、光に向かって走り出した。

「う――――――――――ツ！――――――――――わぁあああぁあああぁ?!」

進んで行く途中で何か落ちるような感覚と、人間の脳神経に似た光景を見た気がしたが、それらは本当に一瞬だった。やがて佐天は、両脚が柔らかい地面を踏みしめる感触を感じ、知らず閉じていた瞼を精一杯こじ開けた。

「――――――――――え？」

佐天と〝青〟のアリスは、見たことも無い鮮やかな『青い薔薇』の園の中にいた。

０３４　誓言―プレッジ―

その光景は、佐天に〝青空〟を思い起こさせた。まるで雲一つない青空。それを思い出させる蒼く青い薔薇が、見渡す限り一面を覆っていた。一方でそれは、澄んだ水を湛える大海原のようでもあった。全ての生命の母、〝青海〟。

空の青（スカイブルー）であり、海の青（オーシャンブルー）でもある。鮮やかな『青い薔薇』の園は、その双方を思い出させる光景だった。

「この薔薇って、一体……？」

佐天の記憶が正しければ、学園都市にも確かに長年不可能とされた青い薔薇は存在する。ただそれは、どちらかと言えば紫や黒に近いくすんだ青だったはずだ。こんなにも鮮やかな青い薔薇は、寡聞にして聞いたことが無かった。

『これは、アリスが生み出した薔薇です』

「え？」

疑問に答えたのは、傍らにいた〝青〟のアリス。しかしその言い方に佐天は疑問を抱く。今の言い方は、まるで自分ではない誰かを指すような言い方ではなかったか。

『その薔薇の名前は、『青い希望（ブルーウイッシュ）』――――アリスがこの世界にあって欲しいと、心から願った〝希望〟なんです』

「それって……？」

〝青〟のアリスが疑問に答える前に、遠くから幼い歓声が響いた。振り向くとそこには、薔薇園を見てはしゃぐ幼い子供の一団があった。しかし近づくにつれ、その子供たちの様子を見て取り、佐天は息を呑んだ。

「なに、これ……何かの、病気？」

その子供の一人は、両手が無かった。一人は足が無く、車いすに座っていた。一人は、大型の呼吸器に顔の下半分を覆われていた。そして、鎧のような機械部品と、ヘッドギアを付けた子供は、頬に紋様のようなものが浮かんで――――

「……っ」

『そう……貴女が思った通り、これはＡＲＭＳ――正しくはまだＡＲＭＳになる前の、珪素（シリコン）系金属生命を移植された実験体の子供たちです』

「なんで……！」

なんで、こんな酷いことを。なんで、こんな惨いことを。そう言って当たり散らしたい気持ちは、子供たちの中に一人の少女を見つけた瞬間、急速にしぼんでいった。

「あれって……」

隣にいる少女とうり二つの少女がいた。緩くウェーブのかかったセミロングの髪、幼いながらも整った顔立ち、そして透き通った青い瞳までそっくりだった。違うところがあるとすれば、隣の〝青〟のアリスはフリルの付いた青いワンピースを纏っているのに対し、子供たちと一緒にいるアリスは、白い白衣を纏っているところか。

「……ねえ、どういうことなの？　一体ここは何なの？」

『……言ったじゃないですか』

振り向いた〝青〟のアリスの瞳は、深い深い悲しみに満ちていた。

『バンダースナッチが抱える〝絶望〟ですよ』

タン、と余りにも軽い音が響いたのはそんな時だった。視界を戻すと、一団の中の子供が一人、薔薇の中にその身を横たえていた。身体の下から漏れ出た液体が、周囲の薔薇を、〝紅く〟染める。

身体ごと勢いよく振り返り、自分たちの後ろにかなりの大集団がいることにようやく気が付く。白衣を纏った者たちと、軍服を纏った者たち。その手にあるのは、引き金一つで容易に人の生命を奪い取る〝銃〟と言う名の凶器。

「やっ――――――」

焦燥のままに射線へと飛び出そうとした。けれども間に合わず、無機質な表情を浮かべた大人たちは、傍らの兵士に攻撃開始の合図を出した。

放たれた銃弾は、ただただ無感情に、薔薇園の子供たちを虐殺した。タタタタン、と一定のリズムを立てて子供たちの生命を奪い去り、青

かった薔薇園が、赤く朱く染まるほどに……。
佐天の膝が折れた。
「こん、な、こんなのって……」
『――佐天さん、眼を逸らさないで』
蹲る佐天に〝青〟のアリスが呼びかける。その言葉を受けても、佐天は視線を上げられない。だって、こんなの。こんなの、あんまりじゃないか！
――わかったでしょう？
極寒の声音が、周囲を引き裂いた。その声に、その重圧に余りに覚えがあって顔を上げると、薔薇園の中に未だに佇む一人の少女がいた。アリス。純白だった白衣を、血の赤に染め上げた少女が、さっきまで子供たちと共にいた時とは違う極寒の重圧を纏ってそこにいた。
――彼らは、〝母〟の『家族』を奪った。〝母〟を余りにも悲しませたのよ。
「……〝母〟？」
その言葉に疑問を持つ間もなく、周囲の景色が変わる。辺り一面鏡のように透明度の高い氷で覆われ、その表面にそれぞれ違う光景が見えた。
そこに見えたのは、アリスが『家族』と呼んだ者たち。金属生命を移植され、リミッターで抑えながらもその幼い生命を散らせていった者たちの、死に顔の光景だった。
――『家族』を何度も何度も……何度も、何度も！奪われ続けた〝母〟は、あの日地獄から抜け出そうとして、最後に残った『家族』まで奪われた!!悲しかった、苦しかった、絶望した！
氷に写る光景は何度も変わり、アリスの『家族』を映し出す。何度も、何度も。そして、辺りの景色は、再び血に染まった薔薇園へと戻っていた。
――そうして、〝我〟は生まれた。
その言葉と共に、アリスの姿が変わっていく。顔に紋様が浮かび、肩が、胸が、足が、いや身体全体が肥大化していく。
――〝母〟に、アリスに、孤独を味あわせた者たちを許すなと！『人

類の進化』などというお題目のために、『家族』を奪い取られたことを忘れるなと!!その強き思いが、我を生み出した!!

現れたのは、白き獣。あの日アリスが纏っていた白衣のように純白の躯体をした、滅びの獣だった。

――我は、アリスの悲嘆、アリスの苦痛――――アリスの、『絶望』!!

咆哮が響き渡り、周囲の薔薇園が凍っていく。まるで赤く染まった薔薇を、白い霜で染め直すように。

だが、そんな生命の停止したような氷原の世界の中で、周囲の薔薇園から滲むように現れたものがあった。キチキチと顎を鳴らす奇怪な蟲。握り拳くらいある蟲の群れが四方をぐるりと取り囲んでいたのだ。

――来るがよい、愚かな蟲ども!我はただ人類を滅ぼすべくして生まれたもの!こんなところで貴様ら相手に滅びは――

バンダースナッチのその言葉は途中で途切れた。蟲の群れの向こう、既に黒く染まった薔薇園の中に、もう一人アリスが生じたのだ。

「――もういいのよ、バンダースナッチ」

アリスの言葉は、甘い毒を秘めて辺りに響いた。

――何の、真似だ。

「もういいのよ、バンダースナッチ。もう人類を滅ぼす必要はないの」

――こんな映像で、我を揺さぶれると思ったか、醜悪な蟲ども!その傲慢、その身を以って……!

「あら、あなたは本当は分かっているはずでしょ?」

今にも迫ろうとしていたバンダースナッチの鋭い爪が、壁にでもぶつかったかのように空中でピタリと止まった。

――……なに?

「あなたには、分かっているはずよ?〝アリス〟には、もう自分は必要ないってことを」

――そんなことは……!

「分かっているのよね?〝アリス〟はもう、人類が滅ぶことなんて望んじゃいない。もうすでに分かり切ったことじゃない。……

だからね？」

アリスの形をした何者かが、唇に三日月の笑みを浮かべる。佐天は、何故だかその一言を止めなければならない気がして、必死になって両者の間に割り込もうとしたが、周囲の蟲が邪魔をするように立ち塞がっていた。

――……やめよ

「〝私〟にとって――――あなた、もういらないの」

――やめよ!!

アリスの形をした何者かは、バンダースナッチの爪に千々に引き裂かれた。その断面から、細かな蟲が飛び去る。蟲が作り上げた偽物、贋作。だが。それでも。

「それでも――――言葉は偽りじゃないわよね？」

気が付くと、周囲を全く同じアリスの形をした何かに囲まれていた。みんな、同じ顔、同じ笑み。同じ言葉がバンダースナッチへと突き刺さった。

「あなたは」「もういらないの」「わかってるでしょ？」「どうしてまだいるの？」「どうしてまだ滅ぼすの？」「どうして？」「「どうして？」」

――黙れ、だまれぇっ!!

爪を闇雲に振るい、目につくものを引き裂く。それでもなお数が減らない。どんどん、どんどん多くなる。

――分かって、いる、だと……？

やがて、一向に数が減らない蟲の前に力尽きたのか、バンダースナッチがガクリと膝をついた。

――……ああ。分かって、いるとも。〝母〟が、もう人類を滅ぼすことなど望んでいないことも。最後に望んだことが、本当はなんだったのかも。

バンダースナッチの身体が急速にしぼみ、やがて、一人の小さな少女の姿が見えてきた。

「……分かったところで、どうしようも、ないじゃない。私は、アリスの『絶望』――アリスが捨てようとした負の感情、そのものなんだもの……今さら、変わることなんて、出来ないんだもの……」

背中を丸め、地面に蹲る少女。その様子を抵抗する力も尽きたと見たのか、周囲の蟲たちが地面を這いずり、彼女の肌を、服を埋め尽くした。

「ほら……やっぱり、無理じゃない……かあさ……」

ヴェノムによって生み出された蟲たちは、少女の言葉も思いも、一切汲み取りはしない。ただただ群がり、少女のか細い声は、徐々に徐々に、蟲の群れの中に埋まっていく。そうして末期の声も、飲み込まれようとしていた時だった。

がさり、と顔の周りに群がっていた蟲が取り払われ、外の光が見えた。

蟲を取り払ったのは、佐天涙子だった。

「……あなた、何してるの？」

「……」

彼女の問いには答えず、佐天は次々に群がった蟲を取り払い遠くへと投げ捨てた。もちろん蟲は無抵抗という訳ではなく、佐天の両手には、蟲に噛み付かれたであろう血の跡が余すところなくついていた。

「なにしてるの、って言ってるじゃない！　あなたにとって、私なんか助ける理由はないはずでしょ!?　むしろ、私がこのまま消えたほうがあなただって都合がいいはずじゃ――！」

「うるさい!!」

一喝。バンダースナッチの言葉を一言で切り捨て、佐天は再び蟲の除去に取り掛かった。視界が明るくなり、周りの状況が目に入ってくると、バンダースナッチは、佐天もまた蟲に膝下まで埋まっていることに気が付いた。

「もういいから、行きなさい！　このままだと、あなただって蟲に喰い尽くされる！　そんなことになれば、例え外の医者があなたの身体を一部でも救えていても、あなたの魂が戻ることは永遠に無くなるのよ!?」

「うるさいって、言ってるでしょ！　分かってるわよ、そんなこと！けどねえっ！」

ガサガサと、ザクザクと、蟲を掻き分け、掘り進めて、佐天はよう

やく蟲に覆われていたバンダースナッチの余りにも細い手首を捕まえた。
「泣いてる子を！　放っておけないじゃない!!」
ぐい、と力一杯に引っ張り、蟲の中から引きずり出す。未だに身体にくっ付いた蟲を手当たり次第に引っ張って放り捨てる。そんな彼女らを周囲の蟲が警戒するかのように、二人の間を十重二十重に取り囲んだ。
「……どうするのよ。助けてもらったって、私にはもう存在意義が無い。〝母（アリス）〟にだって見放された私は……」
もう、存在している意味がない。変わることが出来ない自分は、このまま蟲の中で滅ぼされた方が良かったはずだ。そんな思いがバンダースナッチの胸を満たしていた。
無理だよ、変わることなんて――――
「――――だったら、これからは、私が『家族』になるわ」
バンダースナッチの心情を、傍らの少女の一言が引き裂いた。
「……え？」
「よくよく考えればあの交通事故の時からだから、６年は一緒だったわけでしょ？　だったらもう半分『家族』みたいなものなのかなってね」
「……無理よ」
なれるわけがない。ＡＲＭＳと人類が、『家族』になんかなれるわけがない。そんなバンダースナッチの想いを、佐天涙子は否定する。
「なれるかどうかなんて、やってみなくちゃ分からないじゃない？　あなたがこれからも生きていくために、『家族』が、存在意義が必要だって言うんなら、私が立候補するわよ」
「なんで、そこまで……」
自分（バンダースナッチ）は、佐天に酷いことをした。以前襲い掛かって来た者たちを、佐天の身体を使って皆殺しの目に合わせた。そんな存在、決して許されることは無いと思っていた。

「まあ、これから先は暴れるんでも、最低限人死にが出ないように心がけて欲しいけど。それ以外は、特に思うところとかは無いよ。それに、理由なら言ったでしょ？」

そう言って、佐天は屈んでバンダースナッチに目線を合わせ、いつものように満面の笑みを浮かべた。

「独りぼっちで泣いている子を、放ってなんておけない、って」

「――――――――！」

変われないと、思っていた。変わることなんて、出来ないと思っていた。

「さて！　でも、どうしよっか。流石にこの蟲の大群掻き分けるのは、キツイしね」

「……」

でも、そんな思いも、葛藤も、さっきの笑みは粉々に消し飛ばしてくれた。

だったら。だとしたら。

おずおずとバンダースナッチは、その手を伸ばし、未だに血の滴る佐天の手を緩く握った。

「ん？」

「……ここは、デジタルの信号で形作られた世界だけれど、同時に精神体の世界でもある。だったら、強い〝意志〟があれば、ウイルスも吹き飛ばせる」

「……そっか。わかった！」

否も応もなく、握られた手が強く強く握り締められる。ただそれだけで、長い長い孤独が、埋められていくような気がした。指先から伝わる体温が、凍てついた心すらも溶かしていくようだった。

「――――ここに、誓うわ。佐天涙子」

バンダースナッチは、今になってようやく悟った。なぜ魔獣（ジャバウォック）は変われたのか。騎士（ナイト）は、白兎（ホワイトラビット）は、女王（クイーン・オブ・ハート）は、どうして変わることが出来たのか。

「私は、あなたと共に歩み、あなたと共に滅ぶ!!」

その叫びが響いた時、世界を共振が満たした。

「私は……あなたの『家族』となる!!　もう二度と『絶望』に囚われないように!!」

それは、かつて魔獣（ジャバウォック）が為した誓いに似た思い。けれど少しだけ違う、神獣（バンダースナッチ）だけの〝意志〟。

強く固い意志は世界を揺るがし、視界を埋め尽くしていた醜悪な蟲たちは、世界から満ち溢れる光の輝きによって、一片たりとも残すことなく焼き尽くされていった。

◇　◇　◇

『やっぱり、眩しいなあ……』

二人の織りなす輝きを、〝青〟のアリスと名乗った少女は、空中から嬉しそうに眺めていた。

『本当に危なくなったら、手を貸そうとも思ってましたけど……心配いらなかったですね』

空中で笑みを浮かべながら佇む少女。そのドレスが、肌が、まるで泡のように崩れていった。中から現れたのは、一人の女性。ごく普通のシャツとスカートを身に着けた、ストレートのセミロングの髪を流した女性だった。

女性の名は、『ユーゴー・ギルバート』。かつてオリジナルと呼ばれるＡＲＭＳを移植された四人の少年少女と共に、戦い続けた女性だった。

『……昔、言っていましたね。自分たちは『同じ運命を背負わされた兄弟』みたいなものなんだって』

閉じた瞼に浮かぶのは、決して彼女が忘れることのない一人の少年。エグリゴリという巨大な組織が次々と繰り出す絶望を、地獄を、強い意志と共に乗り越えていった真っ直ぐな少年。精神感応（テレパス）の力を持って生まれた自分が、初めて心から愛した少年。

そして、少年と同じ運命を背負い、共に戦い続けた三人の仲間たち。

『恵さん、隼人君、武士君。そして――――――高槻、君……みんなの〝いもうと〟は、守りましたよ……』

輝きに全てが塗りつぶされる世界の中、最後に見えた彼女の口元は、確かな笑みを浮かべていた。

035　水晶―クリスタル―

「急いで下さい、木山先生！」
「これが精一杯だ!!」
　ハイウェイを超高速で走りながら、交わされる会話。初春飾利と木山春生は、現在テレスティーナに収容された子供たちを追いかけ、移送先の施設へと向かっていた。その後ろをバイクにまたがった固法美偉と、警備員（アンチスキル）の車両に乗った御坂美琴、白井黒子、そして彼女らと同じ常盤台の婚后光子の合計三人が追いかけていた。
　何故ここに、風紀委員（ジャッジメント）である固法はともかく、無関係であるはずの婚后がいるのかというと、彼女が偶然にも春上と同じテレスティーナの息のかかった病院に入院していたことが原因だった。
「婚后さん！　確かに、春上さんが移送されるところを見たのよね!?」
「あら、御坂さん、わたくしのこの眼を疑いますの？　この、婚后光子！　このような事態に、他所様をかつぐような真似は致しませんわ」
「貴女は、いちいち偉そうですわね……」
　御坂からの問い掛けに扇子をパンと開く婚后に、白井が辟易したように呟く。退屈していた彼女が院内を散歩していた折、御坂たちがお見舞いに来ていた春上というらしい少女が、カプセルに入れられて駆動鎧（パワードスーツ）を着込んだ者たちに運び出されるところを偶然にも目撃したのだ。その後、直接『先進状況救助隊』とその付属施設に強制捜査に入った警備員（アンチスキル）と御坂らに合流し、今に至っている。
「婚后さんの証言の通りなら、春上さんが移送された時間は私たちの到着よりも三十分以上前……学園都市内の監視カメラの映像を見ても、問題の車両は第二十三学区の目的地に着いてしまっています。もしもそこからさらに移送されるようなことになれば、追いかけることは出来なくなります……」
「……ッ！」
　初春の呟きを聞いて、木山もまた焦っていた。これを逃せば、子供たちは、自分の生徒たちは手の届かないところに行ってしまう。それ

だけは何としても防ぎたかった。そんな風に焦る彼女に、連絡用に通話中にしておいた携帯から、声が入る。

『――今は焦ったって、仕方ないじゃん。アンタは子供たちを確実に取り返して、安全に起こすことに全力を尽くすじゃん』

「っ、分かっては、いる……それにしても、意外だな。警備員（アンチスキル）は今回の件で、動いてはくれないと思っていたが」

『まー、その認識で間違ってないじゃんよ。実際、上層部からは圧力がかかっているからな』

かつて、木山が木原幻生の元で行ってしまった『暴走能力の法則解析用誘爆実験』の時、警備員（アンチスキル）は動いてはくれなかった。今回の事件にしても、統括理事会の息がかかっている以上、警備員（アンチスキル）は動かないと思っていた。

それでも、黄泉川や鉄装ら、一部の者たちは動いてくれた。

『……佐天の奴が、テレスティーナに撃たれて危篤状態って聞いたら、な。生徒（こども）に銃弾ブチ込む奴を、庇うような上層部なんて気にする必要ないじゃん』

「そうか……」

彼女らは、個人の心情を優先して動いてくれた。上層部からの叱責も覚悟の上での彼女らの行動に感謝しつつ、木山はより一層アクセルを踏みしめる。

そんな彼女らの前に、ハイウェイの合流から上がって来た『先進状況救助隊』のロゴを刻印した大型の車両が、何台も立ちはだかった。

「これは?!」

『恐らく敵の妨害じゃん！　鉄装、警備員（アンチスキル）全員に、フル装備で出撃を連絡！　何としても、木山たちを先に進ませるじゃんよ！』

『は、はいぃ！』

全員が慌ただしく動く中、後方からも同様の大型車両が何台もやって来て道を塞ぎ、荷台からは駆動鎧（パワードスーツ）も出撃してきた。対する警備員（アンチスキル）側は、対能力者用のショック弾や盾など持ち出せるだけの武装しか持ってきていない。

「私たちも出るわよ、黒子！」

「はい、お姉様！」
「乗り掛かった舟です。この、婚后光子も力をお貸ししますわ！」
そうして、戦闘が始まった。雷撃や銃弾が飛び交い、空間を飛び越えた金属針（ニードル）が突き刺さり、噴射点を設定された駆動鎧（パワードスーツ）が宙を舞う。数では先進状況救助隊が勝るが、高レベルの能力者を擁する警備員（アンチスキル）側が優勢で、後少しで突破できると言う時に、ソレは起きた。
閃光が奔り、警備員（アンチスキル）の車両が宙高く跳ね飛ばされ、遅れて音が襲ってきた。そのよく見慣れた威力・光景に、御坂と白井が絶句した。
「な?!」
「今のは、お姉様の！」
空を舞っていた車両が再びハイウェイに落下した辺りで、全員が我を取り戻す。閃光の大元を視線でたどると、そこには他の駆動鎧（パワードスーツ）と比べて、数倍は大きい機体があった。全体が直線的な造形で形作られており、その胴体の中心、人間でいえば首から胸にかけての辺りに、以前御坂たちが見た、けばけばしい紫の駆動鎧（パワードスーツ）が組み込まれていた。
「ったく、役にも立たねえカスどもだなぁ？　こんなクソガキどもなんざ、とっとと縛り上げて飼育檻（ケージ）にぶち込むだけなのによお！」
紫の駆動鎧（パワードスーツ）から響くのは、今回の首謀者、テレスティーナ＝木原＝ライフラインの声。全員が視線を鋭くする中、テレスティーナは巨大駆動鎧（パワードスーツ）の上から、その変型して開いた傘の骨のようになった左腕を見せびらかす。
「どうだぁ、『超電磁砲（レールガン）』？　コイツは書庫（バンク）に載ってるお前のデータを参考にして作成した、テメエの能力の完全コピー。中々の威力で、チビっちまったんじゃねえか？　ぎゃはははは！」
もはや隠す必要などないと言わんばかりに、テレスティーナは本性を全開にして悦に入る。その様子に曲がりなりにも面識があった黄泉川らは絶句するが、構わず彼女は続けた。
「にしても、お前らには感謝しなきゃいけねえよなぁ……お前らのおかげで、あのクソジジイが残した実験動物（モルモット）どもが手に入った。おまけに、あの春上とか言う、私の長年研究してきたテーマにぴったりな能力者まで見つけてくれたんだからよぉ！」

「春上さんをどうするつもりなんですか！」

春上の名前が出たことで、車の陰で戦闘を避けていた初春が飛び出す。慌てて隣にいた木山が彼女の肩を掴み押し留めた。

そんな二人を見ながら、優越感に浸るテレスティーナは懐から、一つの物体を取り出した。ガラス容器の中に保管されたソレは、赤い結晶のように見えた。

「あのガキの『精神感応（テレパス）』能力を使って、コイツと共振させるのさ――あの幻生（ジジイ）が私から抽出した、『最初の暴走能力者の脳内分泌物質』、通称『ファーストサンプル』とな」

「！　それが、『ファーストサンプル』だと!?」

ファーストサンプル。それは木山が作ろうとしていた枝先たちを安全に起こすワクチンプログラムに必要不可欠なもの。どうしても行方の知れなかったそれが目の前に現れ、木山もまた動揺した。

「コイツとあのガキの能力を組み合わせることで、あのガキは私の長年の研究テーマそのものとして生まれ変わる。ようやく私の理論が正しいことが立証されるってわけさ」

「……なんなのよ。アンタ、何がしたいってのよ！」

御坂は、目の前の女が許せなかった。訳の分からない実験のために、春上も枝先も連れ去られ、佐天は今も生死の境をさまよっている。この女が、何のためにあんなことをしたのか、どうしても知りたかった。

それに対し、テレスティーナは終始口元を歪ませながら告げた。

「決まってんだろうが。『レベル6』の作成だよ」

その言葉に全員が息を呑む。レベル6。それは学園都市の設立にかかわる永遠のテーマ。研究者にとっては、確かに求めるべき先なのかも知れない。しかし、そうして息を呑んでいた全員が次に信じられない言葉を聞いた。

「そう、レベル6。『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』！　あの春上とか言うガキは、今回の実験であのガキどもの頭の中の現実（パーソナルリアリティ）を使って、生まれ変わるのさ！　――まあ、その過程でガキどもが暴走状態のまま覚醒すりゃぁ、この用済みの街も消し飛ぶがな」

その言葉に、警備員（アンチスキル）は即座に行動を決定。ありったけの弾丸をテレスティーナの乗る巨大駆動鎧（パワードスーツ）へと撃ち込む。

「全員総攻撃!!　何としてもあのクソッたれな女を止めるじゃんよ！」

そんな黄泉川の言葉に、全員が攻撃の手を強める。ここにいる警備員（アンチスキル）は、黄泉川と同様、子供たちの身を案じて上の命令を無視した者。これから多くの子供が住む街を消し飛ばすと聞いて、許せるわけが無かった。

「バァアアカ！　テメェらゴミどもが、これから栄光を手にする私の邪魔しようなんて、百万年早えんだよぉ!!」

言葉と共に、テレスティーナは部下どもに総攻撃を命令する。そうして自身もまた左腕の複製品の超電磁砲（レールガン）を、今度は密集する警備員（アンチスキル）のど真ん中に撃ち込んでやろうとした。

そんな時、戦場に一片の雪が舞い降りた。

ゴォキィイッ!!という豪音と共に、テレスティーナや御坂達全員を囲うように、巨大な氷が壁となって現れた。何の前触れもなく、気温が急激に下がることも無く、突如出現した氷塊に全員が絶句する中、戦場全体に咆哮が轟いた。

『オォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――ッ!!!』

その姿を見た御坂らは、それがなんなのか、一瞬分からなかった。

それは、以前に知っていた姿から、余りにも様変わりしていたから。

身体の造形に、ほとんど変化は無い。だがその全身は、半透明の水晶状の結晶体へと変化しており、まるで純粋な氷を削り出したかのような芸術品めいた肢体へと変わっていた。またそれだけでなく、結晶体の内部に神秘的な青い光を湛えており、幻想的な印象を抱かせた。

そして何より、空中を突き進んでいく傍から、すれ違った水蒸気が空

中で凍り付き、あたかもダイヤモンドダストを身に纏っているようなそんな光景が広がっていた。

だが、わかる。少なくとも初春だけは、真っ先に彼女が誰か分かった。

「佐天さん……？」

初春が早くも涙ぐむ中、敵方であるテレスティーナは、ここに来てようやく焦燥を露わにした。

「なんで、あのバケモンが……！」

テレスティーナが言葉を失う中、氷水晶（アイスクリスタル）の化身へと変化した神獣（バンダースナッチ）は、彼女と対峙するように、御坂達の目の前に背を向けて降り立った。

「たっだいまー、みんな！　佐天涙子、完全復活して戻りました!!」

生死の境から戦場へと舞い戻った佐天。その以前と変わらぬ明るい声に、初春達は歓声を上げるのだった。

036　雪光―スノーライト―

戦場に突如として現れたバンダースナッチ。その口から響いた些か以上に軽い声に、半ば呆然としていたテレスティーナだったが、やがて気を取り直し、激昂したように喚き散らした。

「なんで、テメエが生きてやがる！　テメエはヴェノムを喰らって、くたばったはずだろぉがよ！」

「いや、まずかったのは本当だけど、何とか持ち直して力を合わせて体内のウイルスをまとめて除去したのよ。流石にもう駄目かと思ったけどね」

テレスティーナはその言葉に歯噛みし、あの弾頭を渡してきた人物について訝しい思いを抱いた。

（アイツは確かにＡＲＭＳを殺せる兵器だと言っていたし、実証データはこっちでも確認した！　それでも蘇ることが出来るとすれば、そもそもの前提だったＡＲＭＳの自己保存能力がこっちの予測値をはるかに超えている場合くらい……！）

その場合に限り、実証データなど役に立たないものに成り下がる。もしそうだとしたら、あの弾頭の提供者であるキース・グレイが、そんな甘い予測値を出すとは考えにくい。

――だとしたら。

「……体のいい当て馬にされたってことか？　あンのクソ野郎オオオオ！」

木原の一族として生まれ持った頭脳で、キース・グレイの意図を感じ取り、天に吼える。その間も、周囲の部下はいきなり激昂した上司の狂態に戸惑うばかりだ。

「今じゃん、全員斉射!!」

敵方の混乱に乗じて黄泉川の指示の元、警備員（アンチスキル）が一気に攻勢に出た。制圧用のゴム弾や爆発の衝撃を受けて、駆動鎧（パワードスーツ）がたたらを踏む。

「私たちも行くわよ！」

「はい、お姉様！」

「何故御坂さんが仕切りますの!?」
常盤台三人組も、この機に攻撃に転じる。空中を奔る紫電が、転移した金属針が、暴風で吹き飛ぶ瓦礫が、たちまちテレスティーナの配下を打ち据え、戦闘不能にしていく。
うろたえていた部下たちもここに来てようやく対処のために反撃に移るが、それでも攻撃に対して逃げ腰で反撃しても効果は上がらない。そんな部下たちへと後ろから檄が飛んだ。
「この、役っ立たずのクソどもがあああああっ！　調子乗ってやがるガキどもなんざ、とっとと撃ち殺しやがれえええええッ!!」
その怒鳴り声に押されて、駆動鎧（パワードスーツ）の銃口が一斉に御坂達を向いた。はっとして周囲の鉄筋入りの瓦礫でバリケードを作ろうとする御坂に向け、引き金に指がかけられた瞬間だった。
駆動鎧（パワードスーツ）全員の手足と銃器が、１ｍ四方の氷塊にいきなり閉じ込められた。
「う――――うあああああああッ?!」
「手、手が、手があ!?」
「あ、有り得ねえ!!」
テレスティーナの部下たちのうめき声が響き渡る中、警備員（アンチスキル）や御坂達の視線が突き刺さるのは、それを行った張本人。
「てめえ……なんだよ、その周囲に舞ってるのはよ?」
テレスティーナの視線の先には、水晶（クリスタル）の神獣、バンダースナッチ。その周りには、乳白色の暖かな光を灯す、綿毛のような『雪』が舞っていた。
「いや、私も詳しくは知らないんだけど……バンダースナッチ、これって何?」
『――佐天涙子よ。これこそが、我と汝の『絆』が生み出した新たな力だ』
バンダースナッチが語る間も、光り輝く雪は絶えず降り続ける。それは本当に綿毛か何かであるかのように、ふわりと軽やかに周囲を舞い踊った。
『かつて、母（アリス）はすべてを滅ぼしたいと望んだ。その結果が、かつて我

に宿った『滅び』の力だったのだ』
「うん……」
『だが、我は変わった。変わることが、出来た！　かつてのようにすべてを滅ぼすのではなく、滅ぶべき『絶望』を見極め、それだけを滅ぼす力を求めたのだ。その結果、我の力はかつてとは異なる進化を遂げた』
「……えっと、具体的には？」
『かつての我は、空気中の窒素を液体化することによって、冷気を生み出していたが、今の我にそんな制限は無い。宙を舞う我の分身（ナノマシン）である『雪』が、周囲に存在する物質の三態を自由に変化させることが出来る――この『雪』が降る範囲（セカイ）において、我に敵う者など存在しない！　我は無敵だ！』
　佐天とバンダースナッチの会話を聞いていたテレスティーナは、絶句した。今現在も『雪』は降り続けており、半径５００ｍ程は絶えず『雪』が舞っているのだ。さっきの部下たちへの手並みを考えても、この範囲から出ない限り、反撃も逃走もままならない。――いや、反撃など考えられない。一刻も早くここから離れるべく、ありとあらゆる手段を模索していると、ある一つの方法が浮かんだ。
「……へっ。本当に無敵かしらねえ？」
　テレスティーナがあからさまな笑みを浮かべる。するとそれを合図にするかのように、地面を激震が走った。
「これって！」
「乱雑開放（ポルターガイスト）?!」
　初春と木山が地面に蹲り震動に耐える中、テレスティーナの勝ち誇ったような哄笑が響き渡った。
「ぎゃはははは！　私の施設に近づいてたのが不運だったなあ！　これだけ近けりゃここだって効果範囲だ！　バケモンには効かないだろうが、このハイウェイを震動で崩せば周りの奴らは全滅だろぉ！　私はそのうちに逃げさせて――」
　そんなテレスティーナの極めて儚い希望を最後まで聞くことなく、バンダースナッチが前へと進み出てきた。そのまま一瞬沈黙すると、

まるで呆れ返ったように肩を竦めた。

『――――愚かな』

たった、一言。その言葉と共に、彼らを襲っていた震度6以上の乱雑開放（ポルターガイスト）の震動は鳴りを潜め、周囲にはただ痛いほどの沈黙が流れた。

「……は？」

呆然。驚愕。自失。そんな表現が当てはまるテレスティーナは、実に一分近く硬直したと思ったが、やがてわなわなと肩を震わせ出した。

「――なんで、なんで、なんでなんで消えんだよぉ！　ガキどもはまだ暴走しかけてるはずじゃ……！」

『だから愚かだというのだ、女。振動を打ち消すには、全く同じ波長の振動を用いればいいにすぎん』

「……なに？」

言われ、施設を遠隔監視しているモニターを見る。そこには未だ子供たちは乱雑開放（ポルターガイスト）を起こしていると表示されている。つまり今も、震動そのものは起こっているのだ。それを感じないとすれば。

（――同じ規模の『地震』を起こして、無理矢理打ち消してやがるのか!?　だが、そんなエネルギーどっから……、……!?）

そこまで考えて、ようやくテレスティーナは気付いた。物質の強制的な相転移。そして、地震への干渉。どちらも膨大なエネルギーが必要であり、『人類』が扱える規模のエネルギーではおよそ不可能。ならば、残るは一つしかない。

「――――あ、あぁ、あぁぁあああああああああああああああああああああ!!?」

自身が至った結論に戦慄し、自身が対峙する相手に恐怖し、テレスティーナは恥も外聞も投げ出し、全力で逃げ出した。やがて周囲を覆っていた氷の壁に突き当たると、まるでバンダースナッチを否定す

るかのように、本体の左腕に装着された超電磁砲（レールガン）の照準を合わせた。
「ヤバイ、逃げるわよ！」
御坂達が一斉に避難する中引き金は引かれ、来るであろう衝撃に備え全員が地面に伏せる。
……超電磁砲（レールガン）は、間に割り込んだバンダースナッチの右手で完全に静止していた。焔は貪るように喰われ、神獣を形作る水晶は、青く輝く。
「……バンダースナッチ、お願い」
『――ああ。我は、神獣バンダースナッチ。佐天涙子との誓いのもと、立ちはだかる絶望を滅ぼさん！』
輝きは加速度的に増していき、周囲の『雪』もまたその右手へと宿る。焔をかき消して現れたのは、掌に握られた巨大な光球だった。時間経過とともに膨張する『滅び』を前に、テレスティーナが自棄のように呟いた。
「ひ、ひひひ……なによぉ、本物のバケモノじゃない……」
それには答えず、神獣（バンダースナッチ）は乱杭歯の見える口元を不敵に歪ませた。
『終わりだ！』
瞬きの後、放たれる光球。そして眼を焼く閃光の後、瞼を開いた御坂達の目の前にあったのは、胴体下半分を根こそぎ消滅させた巨大駆動鎧（パワードスーツ）と、３０ｍ級の氷塊に閉じ込められて恐怖の表情を浮かべるテレスティーナの姿だった。

０３７　夜明―デイブレイク―

未だ戦闘の余韻が残るハイウェイの上。手足を凍らされて身動きが取れなくなった駆動鎧（パワードスーツ）が順々に運ばれる中、騒乱とする現場の中心部に奇妙な物体が鎮座していた。

大体５ｍ前後の範囲に駆動鎧（パワードスーツ）から剥ぎ取った金属部品が乱雑に組み合い、ちょうど円筒状の壁を形成していたのだ。

「……佐天さん、どう？」

そんな奇妙な壁のすぐ横で、それらの金属部品を電磁力でくっ付けている御坂美琴は、中にいる自身の友人へと話しかけていた。

「――え～と、もう少しですね。ここをこうして……よし、終わりました！」

中からのそんな元気の良い声に苦笑しつつ、御坂は壁をくっ付けていた電磁力を一気に弱めた。硬質な音を立てて、部品がぼろぼろと落ちていく。

金属部品の中から出てきた佐天は、大変に奇妙な格好をしていた。『先進状況救助隊』の車両から回収した毛布（ブランケット）を首元に巻き付け、まるでマントかローブのように全身を隠していた。どれだけ時代を先取りしたとしても些かエキセントリックすぎるほどに。

「……いやあ、やっぱり無いわね」

「全くですわね。状況的にしょうがないとはいえ、余りに年頃の少女がする格好とは言えませんわ」

「まあ、庶民としては仕方がありませんわ。なんでしたら、この、婚后光子が！　直々にファッションというものを教授して差し上げますわ！」

「み、皆さん、ヒドイですよ……」

好き勝手言う友人の面々に、顔を俯けていた佐天は、朱に染まった顔を一気に上げると、ハイウェイの中心で、声高々に叫んだ。

「仕方ないじゃないですかー！　この下、『裸』なんですからーーーッ!!」

……そもそも、何故佐天がこんな格好をしているのか。それはテレスティーナ達との戦闘が終わった直後の話になる。巨大駆動鎧（パワードスーツ）に搭乗するテレスティーナを倒したまでは良かったのだが、その直後に戦場のど真ん中でバンダースナッチへの変身が解けそうになり思い切り慌てたのだ。なにせ以前の幻想猛獣やAIMバースト（インデックス）禁書目録の事件の際、変身が解けるや否や佐天の姿は全裸に戻ってしまったのだ。二つの事件の時は変身解除後は意識を失っていて防げなかったとはいえ、それでも佐天の精神的ダメージは限りなく大きかった。

そのため、変身が解けそうになるとすぐに、佐天は慌てた声で近くにいた御坂に応援を頼んだ。

『み、御坂さーーーん！　近くの瓦礫でバリケードお願いしまーすッ!!』

今の佐天なら氷で壁を作ることも可能だっただろうが、空気中の水分で作られた氷は、透明もしくは半透明である。下手すると、直接見られるよりもさらに劣情を煽ることになる。もっとも佐天が自分で壁を作らなかったのは、単に慌て過ぎてそこに思い至らなかったせいでもあった。

「でも、大丈夫？　下手すりゃ風邪ひくんじゃない？」

「それより何より、公然猥褻罪ですわ。初春、１７７支部に連絡して取り調べの準備を」

「あー……今回のこれは事故みたいなものとしても、普段の佐天さんは充分その罪に値するような気がしますね……」

佐天と親交の深い三人がここぞとばかり悪乗りして言い募る。普段からかう側に回ることの多い佐天はこういった集中砲火には慣れていなかった。

「なんで、捕まえようとしてくんですかー……こんな素肌に毛布なんて、変態ちっくな格好、私だってしたくありませんよぉ……」

――それは、ちょっと言いすぎかもー！って、ミサカはミサカは憤慨してみる!!

「……ん？」

「どうしたの、佐天さん？」

「いや……今、時間軸とか出番とか、色々なものを無視した電波が入ったような……？」

時間軸をすっ飛ばしたメタな電波はさておき、ようやく何とか人前に出られる格好になった佐天が後方へと振り返る。そこにはいまだに、３０ｍ程の氷に丸ごと閉じ込められたテレスティーナの姿があった。その手前には、黄泉川と木山の姿があり、周辺の調査と事情聴取を終え、こちらに手招きしている。

「……全く派手にやってくれたじゃん。もっともテレスティーナについては、このまま氷漬け状態で『冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）』のところに送り届ければ、蘇生措置は問題なく行ってくれるそうじゃんよ。ただ、な……」

黄泉川がそこで言葉を切り、隣の木山の顔を見る。その顔には、苦悩がまざまざと現れていた。

「……正直、この女がどうなるかは私も知ったことではない。ただ、彼女が今も氷の中で保持している『ファーストサンプル』、あれだけは何としても早い内に確保しておきたい。アレがあれば子供たちを早く目覚めさせることが出来るし、さっきも乱雑開放（ポルターガイスト）を引き起こされたばかりだしな……」

テレスティーナが文字通り完全に凍結した時点で警備員（アンチスキル）は『先進状況救助隊』の研究施設に突入し、子供たちの身柄も押さえてある。乱雑開放（ポルターガイスト）を引き起こしていた子供たちの暴走も深刻な事態に陥る前に沈静化し、今は静かな眠りについている。だからこそ、木山はこれ以上事態がおかしくなる前に、子供たちを起こしてやりたいのだろう。その気持ちは佐天にも、その家族にもよくわかった。

だから。

「わかりました。それじゃ、この氷溶かしますね」

『うむ』

佐天の声に重なって、低く重々しい声が響き、その右手を氷に向けた途端、突如としてテレスティーナを閉じ込めていた氷は水煙となって姿を消した。

「……ッ！」

「……あー、もうなんでもありじゃん」

二人が息を呑む中、ガランガランと大きな音を立てて駆動鎧（パワードスーツ）の残骸が地面へと落下し、体温が下がって紫になった唇から、けふっ、と息を漏らす声がした。

「……どうやら、息を吹き返したみたいじゃん。ちなみに佐天、今なにしたか聞いていいか？」

「あ、はい。まあ簡単なんですけどね。私がＡＲＭＳの一部で出来てるので、爆発の時に氷の中に巻き込まれてたんですよ。その一部に働きかけて、氷の蒸発と蘇生措置を同時にやっただけです。もちろん、人体やさっき言ってた『ファーストサンプル』に、急激な温度変化で影響を及ぼさないように細心の注意を払ってます」

「止めるも戻すも、自由自在か……学園都市内でも、そこまでの凍結系能力者はめったにいないぞ」

あくまでＡＲＭＳは『肉体変化（メタモルフォーゼ）』の亜種とされているため、ナノマシン云々は隠したまま説明する佐天。実際にやったこと自体は、佐天の説明で間違っていない。ＡＲＭＳが能力で無いという事以外。

佐天は言わないが、今の彼女は標的を『凍結』させるだけではない。巨大駆動鎧（パワードスーツ）の下半分を消滅させたように、『蒸発』させることさえ可能なのだ。テレスティーナの放った超電磁砲（レールガン）のような、吸収可能なエネルギー源さえあれば。学園都市で言えば、凍結系と発火系の能力のハイブリッドに近かった。

その後、現場の後始末に動いていた警備員（アンチスキル）の中から精鋭がテレスティーナの身柄確保に動き、見事彼女の逮捕と、『ファーストサンプル』の確保に成功した。

……それから二時間後、先進状況救助隊の附属研究所内にて。警備員（アンチスキル）が保護した子供たちは透明なカプセル状のベッドに寝かされ、そのベッドへと繋がる端末では、一心不乱にキーボードを叩く木山春生の姿があった。

長年研究したワクチンプログラムをスティック状のデータ端末から引き出し、そこに『ファーストサンプル』から得られたデータを元に、修正を行う。全ての入力が終了し、後は実行を残すのみとなった

時、木山の手がそのキーの手前でふと止まった。
彼女の顔に浮かんでいるのは、不安。子供たちを、本当にこのプログラムで取り返すことが出来るのかと言う不安。それと同時に、彼女は子供たちが自分を受け入れてくれるのか、という不安も感じていた。
元々、子供たちが長い間昏睡状態に陥ったのは、自分が関わっていた実験によるものだ。あんなバカな実験、自分が止めるべきだったと何度も何度も後悔した。そして、目覚めた子供たちに、拒絶されるのではないか、と言う恐怖もまた感じていた。自分はこの子達の時間を何年も奪った張本人の一人だ。罵倒されるのが、当然。軽蔑されるのが、自然。こんな自分が数年費やした程度のプログラムじゃ、子供たちは戻ってくれないんじゃないか……。
そんな風に考え、思考の堂々巡りに落ちていた木山に傍らから、一つの声が届いた。

「――――大丈夫、なの」

その声に顔を上げる。初春に肩を貸されながら声を出したのは、春上衿衣。今も眠り続ける枝先絆理と『精神感応（テレパス）』で繋がっている少女。

「枝先ちゃんがね、言ってるの……木山先生のこと、信じてる、って」

その言葉に、しばし呆然とし、そして最後の勇気を自分の『生徒』に貰った『先生』は、プログラムの実行を、端末へと命令した。
……やたらと眩しく感じる光の中、随分久しぶりに感じる目覚めの中、枝先の視界に入って来たのは、自分にとっての『先生』の顔だった。
「……木山先生、目の下、真っ黒」
そんな言葉に隈を浮かせた『先生』は、涙をこぼしながらゆっくりとほほ笑んだ。

「……ああ、随分、忙しくてね」

あの日『生徒』を失った『先生』は、今度こそ自分の手で、『生徒』を取り戻したのだった。

038　茶会―マッドティーパーティー―

『乱雑開放（ポルターガイスト）』に関する一連の事件が終わり、長く昏睡していた生徒たちも目覚め、事件は一応のハッピーエンドを迎えた。もっとも主犯のテレスティーナは未だに警備員（アンチスキル）が手配した病院に意識不明のまま収容中であるし、全容解明にはもう少し時間がかかりそうではあった。

ともあれ事件解決から数日経った8月7日、佐天はいつものメンバーと一緒にいつものファミレスでお茶をしに行くことになった。いつも通りの席に着く4人の中学生女子と一人のシスター。そしてそんな少女たちの輪の中に、本日は少々異質な人物が『二名』混ざっていた。

一人は、柔らかな雰囲気を全体に纏わせた女性。二十代前半くらいの容姿に、一般的なブラウスにスカート。西欧人特有の白い肌と彫りの深い顔立ち、セミロングのブロンドを後ろで一度縛った髪型。全体的な雰囲気といい、その整った顔立ちといい、御坂や初春からすれば『大人の女性』のイメージそのままの人物と言えた。

もう一人は、明らかにローティーンの少女。ギャザーやフリルの多いドレス姿ではあったが、色は『白』。髪は全体にウェーブがかかっており、顔立ちそのものは以前にも見た西洋人形のような整ったものだったが、雰囲気は全く違っていた。以前はもっと穏やかな印象だったにも関わらず、今現在目の前にいる少女は、どこか刺々しい印象を受けるのだ。

そんな二人を連れてきた張本人であり、ここまで強引に質問を断ち切っていた佐天は、全員に飲み物が回って来たのを見ると、徐に口を開いた。

「……えっと、それじゃあ、何か質問がある人？」

「いや、質問っていうか、疑問しかないわよ」

「お姉様の言う通りですわ」

「アリスさん、今日は機嫌悪いんですか？」

「なんかこの二人、妙な違和感があるんだよ」

途端に全員の言葉が佐天に集中した。まあ、断りも何もなく、いきなりお茶に見ず知らずの人間を連れてきたらこうなりそうなものだが。

全員の追及に目を回す佐天に、白井が代表して、最初の疑問を解決することにした。

「そもそもこのお二人の紹介がまだですの。まずは自己紹介からではありませんこと？」

それを聞いて佐天も「そうですね！」と元気よく返し、まずは、と女性の方から自己紹介することとなった。

『――以前皆さんには、お会いしてますね。改めて自己紹介します。私の名前は『ユーゴー・ギルバート』。以前出てきた時は、『〝青〟のアリス』を名乗っていました』

「「「……は？」」」

その言葉に、全員が頭の中を疑問符で一杯にする中、続いて傍らの少女が自己紹介を始めた。

『……私は、『バンダースナッチ』よ。よろしくはしなくていいわ』

二人そろって予想外の自己紹介。両方に一応面識があった御坂・白井・初春の三人は、ファミレスの窓がビリビリと震えるほどの大声で叫びを上げるのだった。

一通り混乱が収まると、脱力してテーブルに突っ伏す御坂たち三人と、その横で何か考えているインデックスの姿があった。

「……はは、ははは……」

「驚きすぎて、疲れましたの……」

「アリスさんがユーゴーさんで、バンダースナッチさんがアリスさんで……？」

「アリスにバンダースナッチ……やっぱりルイス・キャロルの創作物の概念を核としてるんだね。伝承をモチーフにする魔術に通ずるところがあるんだよ」

四人がそれぞれの感想を口にする中、佐天が二人について一応の説明をした。朝になっていつものファミレスへ向かおうと身支度を整えていると、二人が佐天に話しかけてきた。ユーゴーの自己紹介には

佐天も驚いたものの、以前の事件で関わった四人の友人には、一度ちゃんと顔を合わせて挨拶しておきたいという話を聞き、ここに連れてきたという訳だ。ちなみに二人の身体は、『精神感応（テレパス）』で形作った幻影である。

「でも、私だって意外でしたよ。〝青〟のアリスが実はこんな美人なおねーさんだったなんて」

『あ、ありがとうございます……』

『私を止めるためにアリスの外見を使っていたから、意外なのも無理はないわ』

バンダースナッチはそんなことを言いながら、目の前に置かれた紅茶のティーカップの縁を軽く撫でる。もちろん実際には触れることも飲むことも出来ないから、そういう仕草をしているだけだ。

『まあ、貴女達は佐天涙子の事を心配してくれていたし……挨拶の一つもしておくのが礼儀かと思っただけよ。別に仲良くなるつもりもないわ』

バンダースナッチの物言いに、思わずムッとする四人。中でも少々短気な御坂が口を開こうとした刹那、横合いから思わぬ攻撃が入った。

『そんなこと言って……本当は、佐天さんの友人に嫌われっぱなしなのも嫌だからって、出てきたんですよね』

ユーゴーのそんな言葉に、バンダースナッチが思わず固まる。そして、必死になって反論した。

『ユーゴー・ギルバート、貴女なに出鱈目言ってるの?!　わ、私は別にこんな奴らに嫌われたって――』

『え、でもどんな風に挨拶するか悩んでたじゃないですか。それに今だって、不器用にしか接することが出来なくて後悔していますよね。よく分かります』

『すぐに表層の思考を読むのをやめなさい！　だから違うって！』

真っ赤になって否定するバンダースナッチ。そんな様子に御坂たちは呆気にとられ、佐天は苦笑しながらも仲裁に乗り出した。

「まあまあ。ユーゴーさんも、バンちゃんもそこまでにしなって」

『待ちなさい、佐天涙子。その『バンちゃん』って言うのは、何かしら？』

ぴたりと口論をやめ、佐天の方に向き直るバンダースナッチ。その視線を正面から受け止め、あっけらかんと言い募った。

「いやー、バンダースナッチって名前、やっぱり長いでしょ？　それに人前で呼ぶと、ルイス・キャロルの小説そのままだし、ここは一つニックネームで呼ぼうかな！って」

『だからって、どんなネーミングセンスよ。即刻改めなさい。この私に相応しい威厳と畏怖を呼び起こさせる名前に！』

「えー、でもな～。良いの他に思いつかないし。デザイン的にもかわいい名前の方が合いそうだし。あの姿になってる時は本来の名前で呼ぶからいいでしょ？」

『これは、外で動くのにちょうどいい外見が無かっただけよ！　大体ちゃん付けって、私を『妹』かなにかと勘違いしてない?!　私が『姉』で、貴女が『妹』よ！』

『あれ？　でもバンダースナッチって、約十年前に生み出されてますから、年齢的には『妹』ですよね？』

『ユーゴー・ギルバート！　貴女はまず、そのいらない所を追及する性格を改めなさい！』

そのままぎゃーぎゃーと口論を続ける三者を見て、バンダースナッチに対しどこか緊張した気持ちだった御坂達は、肩から力が抜けていくのを感じるのだった。

◇　◇　◇

その日、外が一切見えない科学機具の魔城において。『窓のないビル』と揶揄されるその場所において、学園都市の主たる統括理事長は、無機質なガラスの中から目の前の赤髪の神父に同じく無機質な視線を投げかけていた。

「――――では、『吸血殺し（ディープブラッド）』の件は、そのような形で？」

『ああ。その条件で頼みたい』

赤髪の神父――ステイル＝マグヌスは、目の前の人物から先程出された『条件』を訝しんだ。まさか人間的な心情でこのような条件が出

されたとも考えにくいし、どんな意図があるのか理解しがたい条件だったのだ。

「上条当麻をホスト役に――そして、『佐天涙子』を今回の件に関わらせるな、という事ですね」

『そうだ。くれぐれも佐天涙子を巻き込まないように気を付けてくれ』

「……わかりました。では、失礼します」

一応は了承の言葉を告げて神父が立ち去った後の、静謐な空間。突如として統括理事長は虚空へと呟いた。

『――これで良かったかね？　キース・グレイ』

「……ああ。充分だよ」

突如として暗闇から返事が返り、誰もいなかったはずのその場所から一人の少年が現れる。灰色のスーツを着こなし、天然のブロンドをひとくくりにする者。アレイスターの『客人（ゲスト）』、キース・グレイという少年だった。

『しかし、あのような条件を出したのはどんな意味があるのかな？私にも内緒となると好奇心をそそられるね』

「いや何、彼女は先日大変な経験をしたばかりだからね。少しばかり休みを与えてあげようというだけだよ」

『ほお……』

逆さまな視界の中で、アレイスターは考える。そんなわけはない、と。目の前のこの少年は、自分と同じ『実験』を粛々と遂行する『研究者』だ。ならばその行動に、意図が隠れていない訳がないのだ。

『それでは、今回の『吸血殺し（ディープブラッド）』の件……もしも稀少な能力者に損失の危機が迫った場合は、君がフォローに入ると言う話は、一体どんな意図があるのかな？』

そう言いながらも、アレイスターはある程度の確信を得ていた。恐らく佐天涙子を関わらせないのは、おまけに過ぎない。どちらかと言えば、自分が関わる形を作ることがこの少年の望みだと。

もっとも目の前の少年は、答えることはなく、曖昧な笑みを浮かべるだけでもあった。

『……まあ、それはいいだろう。こちらとしても稀少なサンプルが失われるのは損失だ。君の条件を呑むことに否は無い。その代わり、一つ私の疑問に答えてくれないか？』

「へえ……なんです？」

お互いに、笑みを浮かべる者同士。だが、違う。この二人の笑みは違う。この二人の笑みは、互いに己が目的のため、いかなる犠牲をも許容した酷薄な笑み。その穏やかな顔の下には、獰猛かつ冷酷な牙が隠されている。

その牙を今は出すことも無く、柔和とも言える笑みを浮かべたアレイスターは、この少年と出会ってから、ずっと抱いていたただ一つの疑問を口にした。

◇　◇　◇

場面は戻り、佐天たちのいるファミレスにて。口論の影響か少しくたびれた様子のバンダースナッチがテーブルに突っ伏していた。流石に弄りすぎたかとちょっぴり悪く思った佐天が慰めようと手を伸ばすと、バンダースナッチがぐりんと首だけを動かし、ゆっくりと姿勢を直した。

『まったくこんなことしてる場合じゃないのよ……こっちは大事な用事があったんだから』

「ん？　バンちゃんの大事な用事って？」

『……その呼び方を変えさせることも重要になったけど。それより急いで警告しておきたいことがあったのよ。ここにいる中では、御坂や初春が顔を合わせたことがある『キース・グレイ』という人物について』

キース・グレイ。それは『幻想御手（レベルアッパー）』事件で関わって来た謎の人物。そしてＡＲＭＳの詳細な情報を知っていると思しき唯一の人物。そこまでは佐天も知っていた。

しかし、『アリス』の絶望の一端を知った今、可能性として考えられることがあった。

「……もしかして、『アリス』の記憶にあった科学者とかに関わってるとか？」

『……』

佐天の推測通りなら、色々なことのつじつまが合う。そう考えればバンダースナッチが警戒するのも当然と言えた。

しかし、だからこそ、沈黙の後に告げられたバンダースナッチの言葉は予想だにしない言葉だった。

『――――存在しないわ』

「え？」

『貴女の言う科学者の集団――エグリゴリの中に、『キースシリーズ』と呼ばれる者たちがいたけど、その中に『灰色（グレイ）』なんて名前（カラーネーム）、存在しない』

その言葉にただただ場の空気が凍り付く。いないはずの人間。だけど彼は、確かにいた。

『キース・グレイ――――君は、『誰』だ？』

『キース（ア）・グレイ（レ）は――――一体、『誰』なの？』

違う場所、違う時間に呟かれた一つの疑問。その疑問を受けた一人の少年は、ただただ暗闇の中、口元に微笑みを浮かべるだけだった。

０３９　差異―ディファレンス―

――それは、今から４５億年は昔の話。かつて地球と分かたれた星の〝兄弟〟が、再び地球に帰り着き、地球で生まれた『人類』の〝意志〟に惹かれる物語――。

『そんな〝兄弟〟を研究する目的で生まれたのが、『エグリゴリ』――巨大な軍産複合体を背景とする秘密結社で、様々な非人道的な実験を行ってきた最悪の組織よ』

バンダースナッチから明かされたそもそもの始まりに、その場に集まった皆が思わず溜息を漏らす。第二次世界大戦時には既に存在していた秘密結社。そこで研究されていた珪素系地球外生命体の話に、既にグロッキーになりかけていた。

「ウチの親が生まれるよりもはるか前に、そんな組織があったとか……」

「未だに学園都市でも地球外生命体の確認はされておりませんのよ？　それを……」

「ＳＦ小説を読んでる気分です……」

「にしても、変わった名前の組織じゃない？」

「旧約聖書エノク書に出てくる堕天使の名前だよ。人間に禁断の知識と技術を授けた堕ちた天使」

なお、彼女らに説明するにあたりバンダースナッチは、かつてエグリゴリが存在した世界と、この学園都市が存在する世界が異なっていることは明かしていない。『言わなかった』だけではあるが、頭がパンクしかけている彼女らに一度に言っても混乱するだけだと考えていた。

『……皆さん、信じられないかも知れませんが、全て事実です』

『まあ、混乱は当然だと思うけど、まだ序の口よ。そんな組織の中で、ある日珪素系生命体を形成するナノマシンと人類を融合させた存在を生み出すと言う計画が持ち上がった。それこそが……』

ユーゴーの言葉を受け、再び語りだしたバンダースナッチが、一度

言葉を切り、少しだけ息を整え、その言葉を呟いた。
『……プロジェクト・ＡＲＭＳ』
◇　◇　◇
「当初は、そんな言葉も無かったけどね。単純に人類の次なる進化とか、その可能性の模索として行われていたわけだ」
『成程……』
窓のないビルの中。ただモニターの明かりだけが周囲を照らす中、同じ内容をキース・グレイも語り続ける。彼の幼い外見も手伝って、それはまるでお気に入りの玩具を見せびらかすようにも見えた。
『そんな研究と実験の中で、珪素系生命である『アザゼル』の移植に成功した者がいたのだな。最初の成功者であり、特殊な投薬で脳細胞を肥大化させた人工的な天才児。当時の研究成果の結晶にして、後に続くすべての者たちの『母』と言えるわけだ』
「ふふ……上の兄弟たちにとっては、『呪い』かも知れないけどね」
キース・グレイはそう嘯く。其は、全てのＡＲＭＳにとって、『母』であり運命を決定する『呪い』。後に続くすべてのＡＲＭＳを産み落とした偉大な母――――『アリス』。
エグリゴリによって生み出された彼女は、同胞を喪う深い悲しみの中、アザゼルとの完全な融合を果たした。そしてすべてのＡＲＭＳの前身となる『オリジナルＡＲＭＳ』を産み落としたのだ。そして、四つのオリジナルＡＲＭＳは、アリスの子であると同時にアリスの一部でもあった。
魔獣（ジャバウォック）は『破壊者』であり、アリスの『憎悪』。アリスが抱いた人類への深い絶望と憎悪を体現し、全てを破壊する圧倒的な破壊の王。
騎士（ナイト）は『守護者』であり、アリスの『仁愛』。人類を守ろうとするアリスの一部であり、魔獣（ジャバウォック）の破壊に抗する戦士。
白兎（ホワイトラビット）は『導く者』であり、アリスの『勇気』。どんなに絶望しようと、歩みを止めない者を運び導く希望の〝意志〟。
女王（クイーン・オブ・ハート）は『審判者』であり、アリスの『親愛』。自責に悩むアリスの象徴であり、自身を滅ぼし得る自殺因子（アポトーシス）。
互いに矛盾しきった四体のＡＲＭＳと、それを移植された四人の少

年少女。『日常』に戻るために、叩き込まれた『非日常』から這い上がって抜け出すために、エグリゴリという巨大組織と戦い続けた数か月。ただの伝聞として聞くアレイスター＝クロウリーにとっても、壮大かつ圧巻の冒険譚と言えた。

そんな話の中、余りに軽く触れられた情報こそが、最も重要と言えた。

「――彼らオリジナルの四人の行く手を阻んだ者たちこそ、僕の兄弟たち。プロジェクト・ＡＲＭＳの提唱者であり、全ての悲劇を生み出した父が、自らの遺伝子情報で生み出した忌み子……『キースシリーズ』だよ」

◇　◇　◇

「同一人物の体細胞クローンって……！」

キースシリーズの『正体』に、御坂が思わず立ち上がる。秘密結社がかつて行ったこととは言え、それは余りに人道的にも倫理的にも逸脱した行い。彼女が嫌悪感を抱くのは無理も無かった。

『……少なくとも、エグリゴリではそうした実験も当たり前のように行っていたんですよ。私もかつてエグリゴリによって生み出された遺伝子改造人間（デザイナーズチャイルド）でしたから』

御坂をなだめつつ、ユーゴーが告げる。サイボーグ、遺伝子改造、薬物強化。ありとあらゆる手段を使って、エグリゴリは人間という存在そのものをズタズタに斬り刻んだ。決して許してはならない組織、それがエグリゴリ。

『……話を続けるわ。エグリゴリの生み出した最高傑作であり、最高意思決定機関を兼務していたのが、さっき述べた『キースシリーズ』。長兄のキース・ブラックを筆頭に、シルバー、バイオレット、グリーンの四人が所属していたわ。他には移植には成功したけど幹部になれなかったレッドとか、組織を抜けて反エグリゴリ組織『ブルーメン』を立ち上げたブルーがいた。移植に耐えられず死亡した者もいたけど、シリーズに数えられるのはこの６人ね』

たったの６人。バンダースナッチが明かした情報によれば、キースシリーズはＡＲＭＳの移植に成功しなければカラーネームを与えら

れない。つまり名前を得られないまま、番号で呼ばれたまま死んでいった子供たちは無数にいる。キースシリーズだけでこれなのだから、サイボーグや他の実験で死んでいった人々は本当に夥しい数に上るだろう。それだけの犠牲者を出して、出た結果がたった6人を生み出すこと。魔術が時に陰惨であることを知るインデックス以外の四人は、やり切れない思いを抱いていた。

『生みの親であるキース・ホワイトを含めると、カラーネームを持つ者は7人しかいないのよ。だからこそ、分からない。キース・グレイ（レ）（ア）は一体、『誰』なの？』

その問いに、答える者はいなかった。

◇　◇　◇

沈黙が場を支配する中、やはりキース・グレイは答えない。あくまで問いを受け流すだけだ。

『……そもそも、君が私に接触してきたのは数年前のことだったな。ＡＲＭＳの研究について当たり障りのないところまでを公開し、私に学園都市内での活動の自由を認めさせた』

「必要となる施設の手配や研究資金の提供、各地から資料を集めたりと言った細々したことまで世話になったからね。本当に感謝しているよ」

実際彼の研究は、学園都市に多大な利益を生み出してもいる。かつてエグリゴリで得られた人体への薬物投与の詳細な実験データや、神経系と機械部品の直接電気的接続など、人倫に反する覚悟が無ければ絶対に得られぬ技術が無数に与えられた。

その一方で、彼が行うＡＲＭＳの研究についてだけは、アレイスターも詳細を知ることが出来なかったのだ。

『こちらに知られても構わぬ技術は湯水のように渡し、その一方で研究所内は完全にシャットアウトされ研究の仔細はおろか断片すらもつかめない。そうなると、君に直接尋ねるしかなくなるという訳だ』

アレイスターがキース・グレイの研究を知ろうとしたのは今に始まったことではない。空中に散布した『滞空回線』で内部を探ろうともしたが、研究所内に侵入した瞬間に反応が完全に消失した。だから

こそ彼は、この状況に一石を投じる目的でこんな問いを投げかけているのだ。

「……まあ、僕の計画も最後の準備が整えば、いよいよ最終段階だからね。これまで世話になったアレイスターになら、正体くらいは明かしてもいいよ」

そう言いつつも、グレイはその場で椅子にしていた器具から立ち上がる。それがいつものように彼がこの部屋から退出する仕草だと、アレイスターには分かった。

「ただ、まあ今この場では何も言わないでおこうかな。それよりも、これから起こる錬金術師の牙城での戦いを、よく見ておくようおすすめするよ。もしも介入するのならば、そこで少しだけ明かすつもりでいるから」

そう言ってキース・グレイは踵を返した。その背に、アレイスターはこの場における最後の問いを投げかけた。

『――最後に一つ、私が常々疑問に思っていたことについて、君の見解を教えてくれ。君の話したかつてエグリゴリの存在した世界とこの学園都市の存在する世界は、時代こそ十年前後のずれはあったが、歩んだ歴史が非常に似通っていた。並行世界だと言ってしまえばそれまでだが……それならば、両者の差異はどこにあると思うかね？』

その問いは、キース・グレイの興を刺激したのか、歩んでいた足を止めさせた。そうして彼は口元に笑みを浮かべながら、最後の問いに答えた。

「愚問だね――――――――――――――――――――『出会えたか、出会えなかったか』。違いなど、それだけだよ」

その答えは、存在など跡形もなく消失した空間に、残響のように漂っていた。

０４０　開幕―オープニング―

『はじまり』は、いつだっただろう？

この世のすべての物事には、必ず始点が存在する。それはどんな事柄であれ、物事であれ、欠かすことの出来ない要素だ。

「――そういう意味で言えば、君の『はじまり』は、禁書目録（インデックス）に出会い、そして『人間として助ける』ことを諦めた時点で、間違いのはじまりだったのかも知れないね？」

「っ、が、ぐ、ぁあ……ああ……」

時間は８月８日の深夜。いや、既に翌日の９日に日付が変わった後。場所は学園都市でも珍しいマンモス予備校、三沢塾の最上階。その中で最も豪華な塾長の執務室。通常であれば何事もない塾の運営が話し合われる程度の部屋は、今現在明らかな異常事態に見舞われていた。

まず、この塾を占拠していたアウレオルス＝イザードと言う名の錬金術師が、塾そのものを魔術的な要塞と化し、外部からの攻撃を一切遮断する結界としてしまったこと。

次に、件の錬金術師を確保すべく、イギリス清教第零聖堂区必要悪の教会（ネセサリウス）の魔術師であるステイル＝マグヌスと、その案内役である上条当麻が潜入してきていたこと。

最後に、アウレオルスの協力者であり、ここ三沢塾に長い間軟禁されていた『吸血殺し（ディープブラッド）』姫神秋沙が、先程逆上したアウレオルスに殺されかけ、上条の右手『幻想殺し（イマジンブレイカー）』で一命を取り留めたこと。

どれもこれも異常を形作る要素ではあったが、今この時、現在進行形で起こっている異常事態にはどの事柄も及びもつかなかった。

なにせ、姫神に攻撃したはずの錬金術師が、パラケルススの再来ともいえる天才アウレオルス＝イザードが、百舌の早贄のように後ろから腹を突き破られているのだから。

「が、ぐ、おのれぇぇぇ、侵入者ぁぁぁぁぁぁ!!」

激昂と共に、懐からまさぐった鍼を自分の首筋に突き刺す。その途端アウレオルスの腹を突き刺していた鋭利な刃は粉々になり、砂のように空気に散った。さらにアウレオルスは二本目の鍼を突き刺し、自身の腹の傷を再生させる。

「おや。僕もまだまだ甘いね。今の一撃ですべて終わらせるべきだったと言うのに」

たった今、アウレオルスの腹を貫いた少年はこともなげに言う。異常な少年だった。顔立ちは西欧系。鮮やかなブロンドを持ち、それを後ろで束ねている。そして、何より異常なのは、その『左腕』。その腕は全体の色が鉛色に変わり、先程腹を突き刺した剣のような刃に変わっていたのだ。しかもそれが半ば折れたというのに、まるで意に介していない。眼前の少年、キース・グレイは、ただただ得体の知れない笑みを浮かべるだけだ。

(必然。目の前の容姿になどとらわれん。この少年こそが最大の敵性戦力だ!)

もはやアウレオルスに、後ろのステイル達のことなど頭にない。目の前の少年は、『黄金錬成(アルス＝マグナ)』によって魔城と化した三沢塾に難なく侵入し、気付く間もなく背中から貫いたのだ。誰が危険かなど一目瞭然だろう。

「――銃をこの手に。弾丸は魔弾。人間の反応を超える速度にて射出せよ!」

アウレオルスが放ったのは、回避・防御不能の魔弾。彼が信頼を置く攻撃の一つ。侵入者の少年は、全く反応する事も、避けることも出来ず――。

「な――――」

――――ただ、その身体をすり抜けるように、弾丸が後ろのガラスに突き刺さる、という結果に終わった。

なにが、起きたのか。分からない。理解できない。一瞬呆然としたアウレオルスは、巻き戻る窓ガラスを背に、笑みを深める少年の表情で我に返った。

「――！　直前の工程を再生！　数は一度で十二弾！　工程を再生し続け連続して射出せよ!!」

前よりもはるかに超える魔弾の飽和射撃。これならば、大丈夫。確実に仕留められるであろう攻撃。さらに。

「圧死せよ！　焼死せよ！　凍死せよ！　轢死、感電死、斬首！　ありとあらゆる死を以てその生命を停止させよ！」

考え得る限りの死の宣告。避けようがない、防ぎようがない。目の前の少年には、死という絶対の結末が待っている。

だと言うのに。

キース・グレイは、静かに笑っていた。

◇　◇　◇

『はじまり』は、いつだっただろう？

『――まもなく、全ては終わり、全ては始まる』

キース・グレイの『はじまり』は、そんな言葉だった。それは、本来彼が知るはずもない言葉だった。何故ならその言葉は、自分のＡＲＭＳに刻まれていただけで、自分が生まれてくるより以前の言葉だったから。

『見給え、この美しい光景を。雪と氷に閉ざされた、滅びゆく人類の文明の最期を。間もなくバンダースナッチはここに至り、この大樹と――『アザゼル―Ω』と一体となり、世界にはびこる人類という旧世代の種族を一掃するだろう。そしてその後にこそ真に進化した新たな種族、ＡＲＭＳの歴史が始まる。素晴らしいとは思わないかね？』

聴衆がいない中、その男の声は朗々と響き渡る。聞こえるのは、男の声。そして、轟々と吹き付ける極寒の吹雪のみ。

『――だが、その新たな世界において。バンダースナッチの中に巣食っているアリスの、あの愚かな娘の残滓は、正直不要なのだよ』

そうして、その男の手が伸びる。自分に。生まれる前から共にあったＡＲＭＳに。

『聞こえているか――――私の最後の息子よ』

男がつかんだのは、円盤状の金属製器具。ＡＲＭＳの研究の中で、いくつも試行錯誤され、進化していったもの――リミッター。

『お前は私が最後に生み出した、完全なる体細胞クローン。私自身だ。
そして、その横で眠っているコアもまた、『アザゼル―Ω』と我がＡＲＭＳによって生み出された私自身だ。『受精卵』と『ＡＲＭＳコア』、ＡＲＭＳ移植者に必要な最低限の条件を満たしている』
そこまで呟き男は、受精卵とＡＲＭＳコアを内包するその特殊なリミッターを、解放の時を待つ『アザゼル―Ω』の根元へと取り付けた。
『バンダースナッチが融合し、アザゼルが変貌すれば封は自然と解けるだろう。お前はアザゼルによって肉体を形成し、内部からアリスの意志を引き裂き、バンダースナッチの主導権を握るのだ』
そう言って、その男は――『進化』という妄執に取り憑かれたキース・ホワイトという愚かな男は、戦場へと旅立って行った。
『最後に……息子よ、お前のカラーネームは――――』
◇　◇　◇
死んだ。
目の前の少年は、間違いなく死んだ。魔弾に四肢を引き裂かれ、押しつぶされ、焼けただれ、凍てつき、轢き潰され、雷に打たれ、首を討たれた。どれ一つとっても致命的であるはずだった。
だと言うのに。
キース・グレイは、静かに笑っていた。ただただ、静かに笑っていた。
がくんと、アウレオルスの膝が落ちた。何を見ている？自分は一体何を見ている？目の前の存在は、一体なんだ？
その心を表すように、罅が、広がっていく。何をしても死なない、悪夢のような少年の顔に、首に、腕に。
「――まちがい続きだったとは言え、中々の攻撃だったよ。素晴らしい〝意志〟が籠っていた」
広がる。広がる。分からないもの、正体不明なもの。悪夢が。絶望が。
「だから――――これは、ご褒美だよ」
目の前に現れたのは、何も見えない、何も分からない代物。ただただ〝闇〟が凝ったもの。辛うじてヒトのような輪郭を得ているもの。

あってはならない、覗き込んではいけない、『深淵』そのもの。
（ああ――そうか）
だからか、アウレオルスは最後にすんなりと納得した。してしまえた。
（私は……やり方を間違えたのだな――……）
『深淵』に沈み込む前。最期に彼が想ったのは、救いたかった真っ白な少女の笑顔だった。
誰も、動けなかった。誰も、分からなかった。目の前の存在は、なんなのか。どうして、アウレオルスが、目の前の暗闇のような輪郭に呑み込まれるように消えたのか。一切合切なんにも分からなかったのだ。

「アウレオルス＝イザード、君のその意志とチカラ。キース・グレイと――我がＡＲＭＳ≪ハンプティ・ダンプティ≫が、確かに頂いた」

パチンと、指を鳴らす音がした。その途端、三沢塾を取り巻いていた違和感が雲散霧消した。アウレオルスが消えても、残り続けていた違和感が。目の前のヒト形の輪郭の軽い合図で。それはつまり、この場の主導権が誰に移ったか如実に示していた。
「――さて、上条当麻」
だからか、上条は、目の前の存在に話しかけられた時、思わず肩を強張らせていた。背中に冷や汗を滴らせ、唾を飲み込んで。
「この場にいない佐天涙子に、伝言をお願いしたい。――都市伝説『レベル５クローン計画』を追え、と」
上条が呑んでいた息を再び吐き出せたのは、その言葉を最後にキース・グレイが去ってからしばらくしてのことだった。
◇　◇　◇
『はじまり』は、いつだっただろう？
金属製のリノリウムを歩きながら、キース・グレイは自らに問う。
この世界に意図せず来てしまって以来、キース・グレイは力を求め

続けていた。妄執に囚われて生涯を終えた父が、自らに遺したアドバンストＡＲＭＳ≪ハンプティ・ダンプティ≫は、所詮父のＡＲＭＳをアザゼルの断片に写し取った、コアのコピーに過ぎない。

父から与えられた命令は、バンダースナッチと融合したアザゼルの乗っ取りであったが、事態がそんな風に遷移しなかった以上、守る道理も無い。

だから。彼はこの世界で、父とは全く違う、自分の〝道〟を自分の〝意志〟で歩こうとしたのだ。そのために彼は、学園都市にやって来た。

「――けれど、まさか君まで来ているとは思いもしなかったんだよ？　バンダースナッチ」

話しながら進めていた足を、不意に止める。そこは彼の保有する研究施設の奥の奥。彼以外誰一人立ち入れない場所の扉を、懐からだしたデータスティックで開いた。

そこには、何も無かった。机の一つ、椅子の一つも無い場所で、キース・グレイはただ笑みを深める。そして、次の瞬間には、その場所から消失した。

彼が次に現れたのは、先程の場所の数百メートル下。通路などなく、通風孔の一つも繋がっていない、ただ地底にあるだけの虚ろな空間。金属板に鋳込まれた電源によって、供給される電力だけが、この空間に繋がるもの。彼もまた、先程の部屋の座標から位置を計測しなければ正確に中に飛ぶことも出来ない場所。

彼は、この日、この部屋での作業時以外、一度として点けたことのない電灯を点けた。

その部屋には、いくつものケーブルに繋がれた、大小さまざまな『石』があった。

「――『はじまり』は、いつだっただろう？　僕の『はじまり』は、あの日だ。愚かな父によって生み出され、アザゼルと共に世界を渡ったあの日」

カツカツと、硬質な音を立てて、彼は歩く。『石』の横を。全ての『はじまり』の近くを。

「では、ＡＲＭＳの『はじまり』とは？　二つの世界で、なにが違ったのか？　簡単だよ、アレイスター。１９４６年、アリゾナ州で発掘された最初の『彼』に、サミュエル・ティリングハーストが、キース・ホワイトが、出会えたか、出会えなかったかだ」

不意に、足を止める。そして彼は、周囲に語り掛ける。言葉はいらない。合図もいらない。響くは、『共振』。それのみが部屋いっぱいに、全ての『石』に伝わり、膨れ上がって、際限なく高まっていく。

「誰にも出会えず、この世界の各地で眠り続けた『彼』ら――――『アザゼル・アナザー』。『彼』らと、科学と魔術を取り込んだ僕。そして、佐天涙子とバンダースナッチ。そのすべてを、一つと成す。さあ、佐天涙子！　≪プログラム・新たなる母（アナザーアリス）≫、その本当の幕開けだよ。は、はは、ははははははは――――……!!」

はじまる。『共振』は、『産声』に。『哄笑』は、『祝福』に。全ては、ここから始まるのだ。

第三部　再誕編

０４１　糸口―マネーカード―

ピピッ、と特徴的な音を立てて、施設を区切る近代的な電子施錠（ロック）が解除されていく。完全に開錠され、シュッと空気が抜けるような音がすると、開いたドアの隙間からボディアーマーを着込んだ金属の四肢を持つ兵隊が飛び込んだ。

施設中央、部屋の中心部で煙を出し続ける閃光弾の名残を横目に、彼ら『黒犬部隊（グリム）』の面々は、どこにも人気のない研究施設の完全制圧に成功していた。

「……とはいえ、一足遅かったみたいだな。奴（やっこ）さん、既に消えた後だ」

『――構わんよ。私もとうに想定していた事態だ』

部屋の入り口付近でこの部隊の指揮官である木原数多が連絡を取る人物は、アレイスター＝クロウリー。この学園都市を統べる権力の頂点にして、科学勢力の首魁と言える人物だ。

『それで、その研究施設に運び込まれていた謎の試料（サンプル）群の確保も芳しくないのかね？　都市内への搬入時には、『鉱物試料とするための隕石』であると記されていたが』

「地下に存在していた外部と隔絶した地下空間にも、既に部下が潜入済みだ。もっともサンプルの保管だけならあそこまで大げさな機器を取りそろえる訳がねえな」

『既に挙がっている見解からすると、まるで爆発寸前の火薬庫を保管するためであるかのような、制御・抑止用の機器が主だったようだな――』

アレイスターが『黒犬部隊（グリム）』に潜入させ制圧した施設、それは今日の未明までキース・グレイに与えていた研究施設だった。キース・グレイは現在、元ローマ正教所属の錬金術師アウレオルス＝イザードを殺害し、行方をくらましている。その為、アレイスターはそれを口実

にキース・グレイの研究内容を手中に収めるべく行動へと移したのだ。もっとも、こうなることも半ば想定してはいたが。

『……まあ、彼の残したサンプルを得られないのは少々残念だが。大局としてはほぼ変化が無い。君らにはその施設から引き出せるだけのデータを引き出してもらった後、例の実験の監視に移ってもらいたい』

「……監視だけで、いいのかい？　例の実験には奴さんも顔を出してるって話だし、その場なら確保できるんじゃねえか？」

　木原が懸念したのは、アレイスターから示唆された『例の実験』の監視任務。実のところ、この研究施設の主を捕らえるのならば、その実験中を強襲するのが一番手っ取り早い。こともあろうにキース・グレイは行方をくらましておきながら、その実験には当初からかかわっており、頻繁に実験にも顔を出していると言うのだ。施設を引き払っておきながら、午前中の実験も一時見学していったらしいので、今後もそうする公算が高い。

『強襲したところで、彼自身が空間系能力者である以上、逃走される可能性は高い。それにこちらが興味があるのは、彼の身柄でも能力でもなく、あくまで彼の研究テーマだ』

「ＡＲＭＳ――だったか。どこをどうすりゃ、炭素系有機生命と珪素系金属生命のハイブリッドなんて生み出せるんだか。確かに面白えテーマではあるな」

　アレイスターも学園都市も、未だにＡＲＭＳを生み出すノウハウについては知り得ない。アザゼルと呼ばれる隕石から生み出すことは知っているが、そのアザゼルと思しき隕石をキース・グレイが片端から確保し続け、仮に横流しで奪っても、『空間移動（テレポート）』で奪い返されている。ＡＲＭＳを生み出す過程は電子戦でのハッキングでも、滞空回線によるミクロ単位の監視でも得られていないと言うのだから徹底的だ。

　……それでも、アレイスターにとって、これしきの事態ではまだまだ大局は揺らがないと確信する。

『……彼がこの先どう動くのか、静かに見せてもらうとしようじゃな

いか』
　フラスコに浮かぶ学園都市の頂点は、変わらず艶然と笑みを浮かべた。
◇　◇　◇
「……駄目ですね」
　キース・グレイの施設への強襲があったちょうど同じ時刻、昼前の風紀委員（ジャッジメント）１７７支部にて。頭を花で彩った少女は、お手上げといった感じで画面に向けていた顔を上げた。
「上条さんの情報にあった都市伝説『レベル５クローン計画』は、ネット上ではそこそこ有名な話みたいですけど、それにつながる手がかりなんて見つかりませんよ」
「そうか……なにかある感じはしたんだけどな……」
　パソコンに向かっていた少女、初春の言葉を受けて、件の伝言を伝えた上条が嘆息する。彼が此処にいる理由は、本日の未明に起きた錬金術師の事件の際、正体不明の人物からの伝言を佐天に伝えに来た所、ここを待ち合わせの場所に指定された為。なお、インデックスまで付いて来た為、現在１７７支部のお茶請け用クッキーは絶滅の危機にあった。
「そもそもいきなり目の前でヒト一人殺害するような人物が、そんな怪しげな都市伝説をほのめかすと言う時点でおかしいですわね。聞き間違いの類ではありませんの？」
「いや、はっきりと言われた。それになんていうか、場の雰囲気がな……」
「嘘やデマの類とも思えなかった、か……」
　白井も御坂も、上条が聞き間違えたとは思っていない。だがそれにしても突拍子の無い話でもある。そのため多少懐疑的になるのも無理はないことだ。
「にしても、固法先輩がいない時で良かったよね。流石に殺人事件にかかわるような話、先輩まで巻き込みたくないし」
　佐天がそう嘯き、空の席を見やる。現在固法は支部の月間報告をまとめて本部に提出中。おかげで内緒話が出来るという訳だ。

「明らかに事件どころではありませんが……統括理事会と魔術師側の裏取引が考えられる以上、歯痒いですが、私たちに手出しできる範囲を超えてしまいますわ。誠に、歯痒いですが」

「あー……白井さん？　だからって、個人で捕まえようとしないでくださいね？　組織性がみられ、オマケに規模が大きいことも加味すると、とてもじゃありませんが太刀打ちできませんよ」

初春が諫めるが、正義感の強い白井にどこまで効果が見込めるか、非常に危ういところでもあった。そこまで話をしたところで、上条やインデックスに同行し、この支部に来たはいいが、それまで一度も口を開かなかった少女が、不意に口を開いた。

「……あの。」

少女の名は、姫神秋沙。三沢塾にて起きた事件で、中心であった少女だ。

「あの人を。殺した人って。捕まえられるんでしょうか。」

「……正直、かなり難しいです。魔術勢力の事件に介入出来るほど、風紀委員（ジャッジメント）は――」

「初春！　何を言いますの！」

彼女の疑問に弱気に答えた初春の言葉を、同じ風紀委員（ジャッジメント）である白井が遮った。そして、そのまま胸を張って言う。

「確かに組織として手を出すのは難しいかもしれませんの！　それでも善悪を明らかにし、罪責を問うのも私たち風紀委員（ジャッジメント）の仕事ですわ！　今すぐには無理でも、何時かは必ず白日の下に晒して見せますの!!」

それは、ある意味根拠の無い言葉だ。それでも、真実に立ち向かおうとする人はいる。その事実が、何より姫神には嬉しかった。

「……よろしく。お願いします。」

彼女にとって、アウレオルスは確かに生命を奪おうとした相手だ。だけど、それと同時に自分を軟禁していた三沢塾を壊してくれた人間でもある。結局のところ、彼女にはアウレオルスを憎み切ることが出来なかった。だからこそ、彼を殺した人物が白日の下で裁かれることを望んでいた。

「モグモグ、大丈夫だよ、あいさ！　かざりもくろこも、バクバクゴクン、皆すごく頼りになるから!!」
「その賞賛は素直に受け取っておきますが、まずは口の中の食べ物を飲み込んでからにしてほしいですの」
「あああああ……貰い物の高級クッキーが……」
テーブルの上に散乱する、ゼリーのカップ、ケーキの包み紙、そして、クッキーの食べかす。ついに１７７支部のお茶請けは、インデックスの胃袋の前に全滅した。
「とにかくキース・グレイの居場所や、伝言の都市伝説のことは、こっちでも調べておきますね。何か意味があるんだろうし」
「そうね……その都市伝説については、私も少し気になるし」
佐天の言葉に続けて、顔を曇らせたのは、御坂。レベル５。クローン。都市伝説。そこまで聞いたところで、彼女の心に蘇ったのは、まだ幼い日の掠れた記憶。
『――君の遺伝子情報があれば、筋ジストロフィに苦しむ子供たちが――』
（……まさか、ね）
軽く首を振り、澱のような暗い懸念を振り払った。
「さて。ともあれ、私たちも午後には春上さんや枝先さんの収容先の病院へお見舞いに行かなければなりません。そろそろ片付けて撤収しますわよ」
「あ、そうですね、白井さん」
そうしてそれぞれに食べかすや包み紙などを手分けして片付けだす。初春も立ち上げていた端末を落とし、席を立ちあがったところで、備え付けの電話が鳴り響いた。
「はい。風紀委員（ジャッジメント）１７７支部です。――――え？」
この電話が、最初の糸口だった。時に事件は、思わぬ方向から動くこともある。
「――マネーカードの、落とし物？」

０４２　遭遇―クリティカル―

道場の中心で、佐天涙子は熱を持った息を吐いた。先程からの激しい運動に、身体はとっくに音を上げ、肩で息をしていた。右手で保持しているクッション材を捲いた訓練用の盾も、今にも地面に下ろしてしまいたかった。

「……ッ！」

それでもわずかに残った意地で盾を持ち上げ、一矢報いるために正面から突進（チャージ）を試みて。

「はい、今日の所は終了じゃん♪」

制圧術の師匠である黄泉川愛穂に真っ向から叩き潰された。

◇　◇　◇

「……だ、大丈夫ですか……？」

先日の都市伝説調査から数日、風紀委員（ジャッジメント）１７７支部には初春と佐天、そしてインデックスの姿があった。その中で佐天一人、顔や手足のいたるところに絆創膏を貼り付けた状態で、机に突っ伏していた。

「あ～～～……ダイジョブ、ダイジョブ……これくらいしばらくすれば、バンちゃんが治してくれるから……」

「いや、だからって無茶していいってことにはならないんですよ？　黄泉川先生にお願いして、警備員（アンチスキル）の逮捕術と制圧術を習おうなんて……」

「ＡＲＭＳは身体が資本だからね～……格闘術も習っておかないと、いざって時に動けないでしょ～……」

「私はよみかわの学校のご飯も美味しいから、また遊びに行きたいんだよ」

「あ、あの、インデックス？　佐天さんは遊びに行ってるわけじゃ……」

現在この部屋には彼女ら三人以外の姿はない。先輩の固法は巡回の最中であり、白井や御坂は未だ現れてはいない。

あれから都市伝説『レベル５クローン計画』については何の成果も

上がっておらず、そんな事実が存在する確証も無かった。そのため、今度は視点を変えて調査してみようと決まり、今日はその方法を話し合う予定だった。ちなみに上条も参加する予定ではあったが、担任の小萌先生直々に「上条ちゃん、馬鹿だから補習です♥」と死刑宣告（ラブコール）。少し遅れそうだとの連絡があった。

佐天が突然格闘術を習い出したのも、こうした現状を少しでも打破するため。何かあった時に、今度は全力で動けるようにするためだった。

しばらく三人で他愛のない会話を続け、佐天は机に突っ伏し続けていると、やがて白井と御坂がやって来た。

「来たわよー、インデックス、初春さ――うわ?!　佐天さん、今日は一段と死んでるわね」

「案外もう少しで新たな扉が開くかも知れませんわよ？　私（わたくし）もお姉様の電撃（あいじょう）を頂くと……私、私、もう！」

入って来て早々の馬鹿（いつもの）な発言に、白井ご要望の電撃（おしおき）が炸裂した。床でビクビクと痙攣していた白井が、やがてゾンビのように起き上がり、咄嗟に電撃から避難させて机の上に投げた茶封筒を拾い上げる。

「あ、ううぅ……と、ところで初春？　ここに来るまでの路地で、こんなものを拾ったのですが？」

初春に手渡した封筒の中から取り出したのは、一枚のマネーカード。中身はそこまで高額でもないが、落とし物は落とし物として持ち主へと届けるつもりだった。

「あ、白井さんも拾ったんですね」

「……も？」

◇　◇　◇

詳しい話を聞いてみると、現在学園都市のあちこちで封筒入りのマネーカードが見つかっており、噂好きの一部の学生にそれを探すのが流行っているのだそうだ。金額は小額から1万円を超える高額までと様々だが、何故か決まって学園都市の路地など人目に付きにくい場所に放置されている。そのため、宝探し感覚でマネーカードを探していた学生がスキルアウトの縄張りに入ってしまう事件や、拾ったマ

ネーカードを恐喝される事件まで出始めているのだ。
　もっとも、そんなことは、現在進行形で貧乏学生をしている側には関係ないわけで。
「くっ……どうして俺は、そんなホットな噂をチェックしていなかったんだ……！」
　後から来て話を聞いた上条は、本気で悔しがっていた。無能力者（レベル0）の上、ここ数週間インデックスを自宅に泊めていた上条の銀行口座は、食費の増大でガリガリと削られていたのだ。
「……あー、上条さん？　さすがにマネーカードは遺失物ですので、この話を聞いた後は、ちゃんと警備員（アンチスキル）か風紀委員（ジャッジメント）に届けてくださいね？」
　ネコババは駄目ですよ」
「ぐぅっ……!!」
「あちゃぁ、それなら私も？　残念だなー、そういうの探すの、結構得意なのに」
　口ではそう言うが、実のところ、佐天はあまりお金に困ってはいない。幻想御手（レベルアッパー）事件の後、特別講習での能力測定で、ＡＲＭＳのレベル換算が４に上がっており、翌月からは支給される奨学金も増額した。上条の所から再び佐天の寮に戻って来たインデックスの食費含めて、佐天一人で賄えるくらいなのだ。
「しかしそのマネーカードのせいで犯罪に巻き込まれる学生がいるのであれば、放ってもおけませんわね。初春、私の方でも独自に調査してみますわ。貴女はここで、通報にあった場所から配布者の行きそうな場所の洗い出しをお願いしますわ」
「あ、だったら私もそれ手伝いますよ。私もそういう宝探し関係得意ですから」
「あー、なら俺もそれ行っていいか？　よく考えたら拾得物だし、もしかしたら、一割……！」
「……どんだけ余裕ないのよ」
　そう言って動き出したのは、白井、佐天、上条、御坂の四人。初春は発見場所から、配布者の行動パターンの分析。ちなみにインデックスは特に役目もないが、冷房の効いた室内から炎天下の外に出る気は

端から無かった。
「いってらっしゃい！　私はここで冷たいジュースとお菓子を食べながら、待ってるんだよ！」
「まあ、大人しくしてくれるんなら構いませんけど……でも、そうなると、今日はこの間の調査の続きは出来そうにありませんね」
そう締めくくる初春に、佐天が少しだけ待ったをかけた。
「だったらさ、バンちゃんとユーゴーさんに頼まれてたことがあるから、少しだけ調べてみてくれない？」
「ん。私も。手伝おうか？」
「ひゃあ！　姫神さん、何時からいたんですか!?」
◇　◇　◇
その後、１７７支部から出発した白井、上条、佐天、御坂の四人は、学園都市の路地と言う路地を見て回った。時間をかけて入念に調べ、時には危険地帯に行こうとする他の学生に注意もした。そうして、夕方５時ごろ。
「よっしゃぁ!!　８枚目のマネーカード、ＧＥＴ!!」
『佐天さん……嗅覚とか第六感とかどうなってるんですか……白井さんは3枚で、御坂さんは2枚だけですよ』
初春が電話口でそう告げてくるが、上条の戦績についてはあえて触れない。路地で「不幸だ」と嘆く男子高校生の為にも、触れないのが優しさだと理解しているから。
「ホント、有り得ないわね……」
「あ、御坂さん♪　近くだったんですね。それじゃ白井さんや上条さんと合流して、一回支部に戻りますか」
大分日も暮れてきたため、今日の巡回は終了。支部に戻ってマネーカードを届けた後、家路に着くつもりだった。
「――――オイ、本当なのか？　例のマネーカードばら撒いてる女見つけたってのは？」
「「ん？」」
聞こえてきた呟きに、二人で路地を覗き込むと、そこには数人のスキルアウトが屯していた。顔には下卑た笑みを浮かべ、どう見てもこ

れから恐喝などの犯罪を犯しますと言っている感じだった。
「あー……御坂さん？」
「……とりあえず、後をつけましょ。マネーカードを本当にばら撒いている奴なのか確認したいし」
気付かれないように一定の距離を空け後をつけると、スキルアウト達が入っていったのは、路地の先にある一つの廃ビル。その廃ビルの前までいくと、４階にほんのわずかに灯りが点くのが分かった。
「（……御坂さん、いきなり電撃はやめてくださいね。せっかく気付かれてないんですから）」
「（分かってるわよ。それより――――！）」
慎重に階段を昇っていくと、上階で金属製の何かを壁か床にぶつけるような音がした。慌てて階段を昇り、灯りのある部屋を静かに覗き込む。
そこにいたのは、白衣を纏ったギョロ目気味の少女。白衣の中に纏っているのは、学園都市でも有数の名門校、長点上機学園の制服。静かな語り口で少女は相手の恐怖を煽り、偽りの能力の情報、暗闇と紙鉄砲の音だけで相手をパニックに陥らせ、スキルアウトを制圧してみせた。
思わずその見事な手管に、隣の御坂と共に拍手を贈った。
「いやー、中々見事なモン見たわ」
「そうですね。私たちなら、殴るか電撃かになっちゃいますし」
不意の拍手にも、目の前の少女は一切表情を変えない。そのまま一通り二人を観察するようにねめ上げたあと、一言だけ告げた。
「――――……あなた達、『オリジナル』と『バンダースナッチ』ね」

０４３　潜入―スニ―キング―

「――――……あなた達、『オリジナル』と『バンダースナッチ』ね」
「「え？」」
スキルアウトを追って入った廃ビルの中で出会った、白衣の少女はそう言った。二人には目の前の少女に、面識など一切ない。それでも言われた単語が、些か聞き捨てならない代物だった。
（……なんで『バンダースナッチ』の名前を？）
佐天の中に宿るＡＲＭＳの名前を知る相手は、それほど多くは無い。学園都市の書庫（バンク）にも『武器変化（ＡＲＭＳ）』という名称で登録してあるし、そちらから調べるのは不可能だ。それに一緒にいる御坂の方を見て呟いた単語も単語だ。
「……『オリジナル』？」
自分に向けて投げかけられた単語を、御坂が反芻する。都市伝説であったはずの『レベル５クローン計画』。それを調べていた矢先のこの邂逅。そして、御坂を指した『オリジナル』の単語。彼女の中で疑念が一本に繋がろうとしていた。
「アンタ、あの噂について知ってんの!?」
そう叫んで詰め寄っていく御坂の脳天に――――カバンが縦に落とされた。
「はぐッ!!?」
いきなりの衝撃に蹲る御坂の頭上から、白衣の少女の言葉が響く。
「……貴女たちは、中学生。私、高校生。長幼の序は守りなさい。Ｉｎｂｒｉｅｆ，タメ口禁止」
そう言って胸を張る少女に、横から見ていた佐天は何となく悟った。目の前の人は、こっちが退かないと、延々と話が通じないヒトだと。そう結論付けたため、隣の御坂がこれ以上目の前の少女の機嫌を損ねない内に割って入ることにした。
「今それどころじゃ――」
「まー、まー、御坂さん！　とりあえず抑えて抑えて！」

「っ、なんでよ、佐天さん！　コイツ、今明らかに何か知ってる風だったじゃない!!」
「確かに気になりますけど、この先輩の言うことも一理あるんだし、ここはこっちが退きましょうよ！　話が先に進みませんし！」
そう言って何とかかんとか御坂を抑えるのに成功すると、改めて白衣の少女に向き直った。
「お願いします、先輩。さっき御坂さんに向けて言った『オリジナル』って言葉の意味、教えて貰えないでしょうか！」
そう言って頭を下げる。それをじっと見ていた少女は、少しだけ間を空け、やがて口を開いた。
「……貴女を『バンダースナッチ』と呼んだことについては、いいのかしら？」
「えっと……正直知りたくないって言ったら嘘になります。けど、急がなきゃいけないのは、御坂さんの方なんじゃないかって思うんです。お願いです、教えてください！」
ただひたすら頭を下げる佐天の姿に、やがて隣にいた御坂も黙って頭を下げた。しばらくの間、沈黙だけが部屋の中を支配した。
やがて、白衣の少女の口から、は、とわずかに溜息が漏れた。
「……今の私の権限じゃ全容を把握しているわけでもないわ。私が関わっていた頃と比べれば、研究の目的も内容も変わってしまっている。でも、一つ教えてあげられるとすれば、私が過去に研究協力を行ったとある製薬会社が関わっているということだけよ。……そこから辿れば、まだ『糸』は切れていないかも知れない」
そうして教えられた製薬会社の名前を記憶し、御坂と共に佐天はその部屋を後にすることにした。すぐさま今聞いた製薬会社について初春に調べてもらわなければならないからだ。
二人が去ったビルの一室で、白衣の少女――布束砥信は、そっと部屋に置かれていた机の引き出しから一束の書類を取り出した。
（……本当は、ここでこの書類を彼女らに見せてしまえば、彼女たちは全てを知ったかもしれない。けど、それも無理ね）
布束は『オリジナル』と『バンダースナッチ』の性能（スペック）を、データ上

では知っていた。けれど、駄目だ。あの性能（スペック）シートのデータからは、とても『計画』を潰せるとは思えなかった。

なぜならこの『計画』に今もっとも深くかかわり、中心となっている人物は、学園都市の頂点なのだから。

「（あのコたちが不用意に『計画』を追いかけ、結果として無関係の警備員（アンチスキル）や風紀委員（ジャッジメント）の耳目を集めれば、『計画』を間接的に潰せる可能性が高まる。これは、一種の賭けね）……せめて、最後まで『第一位』に捕まらないことを祈ってあげるわ」

そう言って持っていた書類の端に火を点け、部屋から退散する。金属製のデスクの上で、端から燃え落ち、この世から消えていく書類の一番上。最後の最後に燃え落ちた書類の表題（タイトル）は――――『量産型能力者計画』と銘打たれていた。

◇　◇　◇

『えっと、つまりは『樋口製薬』という会社の過去の研究を洗えばいいんですね？』

「うん、初春お願い！」

先程のビルから少し離れたネット接続可能な公衆電話の中。佐天は自分の携帯で１７７支部に残っていた初春に連絡を取っていた。布束から聞いた製薬会社を調べるためだ。

「ゴメンね、佐天さん、初春さん。それで黒子はちゃんと寮に戻ってくれた？」

『はい、最後まで渋りましたけど。『寮監への誤魔化しはやっておきますので、お姉様はどうかご自分のなさりたいように』だそうです』

「白井さんには悪いことしちゃいましたね。それで、インデックスは？」

『姫神さんが、下宿先の先生にお願いするって言ってましたよ。今晩は佐天さんが戻れるかどうか分からないので、そちらに泊まるそうです。上条さんはそっちに合流したかったみたいですが、もし研究所に潜入するってなったら人数を絞った方がいいので、今日のところは帰ってもらいました』

「……姫神さんにも、お礼言わないとなー」

そうして待つこと数分、電話の間も調べ続けていた御坂と初春がついに目的の情報にヒットした。

「――あった！　さっきのアイツの名前は、布束砥信。長点上機学園の3年生！　幼少期から生物学的精神医学の分野で頭角を現し、その関係で『山下大学附属病院』や『樋口製薬・第7薬学研究センター』での研究機関を経て、本校に復学、ってなってる」

『こっちも見つかりました。確かに樋口製薬では一時期外部から年少の研究員を二名招聘しています。その招聘先が、今御坂さんが言っていた『第7薬学研究センター』ですね』

御坂が探っていたのは、長点上機学園の教師用の学生名簿。ネット端末セキュリティはBとそれなりに高いものだが、『電撃使い（エレクトロマスター）』の頂点に位置する御坂には大した障害でも無い。そして、初春が探っていたのは製薬会社内の研究テーマと人員の出入り。布束が製薬会社の専任研究員であろうと、外部研究員であろうと、データ上にはきちんと残っている可能性があったのだ。もちろん製薬会社の重要機密情報に当たるため、外部の人間が気軽に見られるものでも無い。

「そっかー……でも、二人？　布束先輩の他に誰か招かれてたの？」

『あっ……はい』

佐天の言葉に、初春は一度言葉を詰まらせた。やがて彼女の中で決心がついたのか、その名前を告げた。

『研究センターのデータに記載された名前は――――キース・グレイです』

◇　◇　◇

それからしばらく後。佐天と御坂の姿は、件の『樋口製薬・第7薬学研究センター』の内部にあった。

「（ったく、セキュリティのオンパレードじゃない）」

「（それは仕方ないですよ、御坂さん。ここって一応、企業の中でも機密性の高い研究を行う研究所みたいですから）」

「（分かってはいるけどねー……）」

監視カメラや警備ロボットに注意しつつ、廊下の片隅の暗がりで小声でやり取りを交わす。御坂によるハッキングの結果、怪しいのは電

源が来ているのに、他部署とネットワークでつながっていない研究スペースであると判明した。
「（なら、行きましょうか、御坂さん。ユーゴーさんや、バンちゃんが調べて欲しいって言ってた内容から言っても、ここは黒の可能性高いですし）」
「（……私まだ、その内容聞いても半信半疑なんだけど……二人が頼んだのって、研究所で取引されるブドウ糖やらカルシウムやら特定物質の出納記録よね？　なんでそれで、この研究所が怪しいってことになるのよ？）」
　佐天が初春に頼んだのは、カルシウムやナトリウム、アンモニアなど特定物質の取引記録だった。中でもブドウ糖などは医療用の薬液の形が多かったが、それでもあくまで『表』に出てきているもの。企業の裏帳簿などではないために、はるかにセキュリティレベルも低いものだった。
「（二人曰く、『人間は霞（かすみ）で出来てるわけじゃない』だそうですよ）」
　人間とは、多種多様な元素の集合体だ。一般的な男性の構成成分は、水３５リットル、炭素２０ｋｇ……などと列挙することが可能である。しかしそれらの元素は決して元素そのままの姿で存在しているわけではなく、何らかのイオンや化合物として、肉体に留まるにふさわしい形で存在している。これが『栄養素』であるわけだ。
『人間を人工的に形成しようと思ったらね、必ずクローン元の細胞を、大量の栄養素で培養する必要が出てくるわ。たとえ乳幼児までで培養促進をやめて、そこからは栄養素の経口摂取に切り替えたとしても、初期は同じよ』
『乳幼児であっても、身体を形成する栄養素は膨大で、誤魔化すことは難しいんです。エグリゴリでも、表向きの研究内容をつけた上で、表側の企業取引で堂々と入手していました。もっともエグリゴリ自体が異業種企業の複合企業体（コングロマリット）で、ほとんど内部取引でしたから、外部から調べるのは難しかったですが』
　エグリゴリで生み出された天才児を母体とするＡＲＭＳと、同じくエグリゴリの無菌室で生まれ育った超能力者。だからこそ、二人は企

業が取引する栄養素の『材料』に目を付けた。企業内で精製しようが薬液同士を混合しようが、企業が必要とした栄養素の量だけは誤魔化せない。

「（初春の調べによれば、布束先輩の招聘と前後して、一般的な女子中学生なら数人分の『栄養素』がこの研究センターに納品されています。それが多分……）」

「（成程ね……）」

納得し、二人そろって暗がりから身を起こす。セキュリティは電子機器によるもの。後は内部の警備員だけ何とかやり過ごそう、と考えていた時だった。

突如として、施設内に警報が鳴り響いた。

「ッ、なに!?　私たちなんかヘマした!?」

「マズッ、御坂さん、行きましょう！」

警報が鳴り響いたことで二人揃って動揺したが、見つかるようなことをした覚えもないので、この混乱に乗じる方向で切り替える。警備員がこの警報の大元を探るために、人員を割く必要が出るからだ。

そうして御坂の能力で監視カメラを無効化しつつ、問題の研究スペースへとたどり着いた。

「……ネットワークが繋がってないのに、研究機器は全部生きてるわね」

「床に埃も積もってないですし、機器も同様……清掃も行き届いてますよ」

研究機器の奥に備え付けられたガラス窓から内部を覗く。今いる場所は中二階に設けられた研究機器の設置場所のようなところで、ガラス窓から見える天井の高い一室には、人間が入れるほどの培養器が置かれていた。

「……」

培養器を見てわずかに歯噛みした後、御坂は近くの機器からデータをさらって行く。やがて、消去されていたデータの復元が終わり、この研究スペースで行われた研究計画が、メインモニターに映し出された。

計画名は、『超電磁砲量産計画（レディオノイズ）』――『妹達（シスターズ）』といった。

０４４　報告―リポート―

――『超電磁砲量産計画（レディオノイズ）』――『妹達（シスターズ）』最終報告書――

――本計画は、超能力者（レベル5）を生み出す遺伝子配列パターンを解明し、偶発的に誕生する超能力者（レベル5）を、１００％確実に誕生させることをその目的とする。なお、本計画の素体は、『超電磁砲（レールガン）』御坂美琴とする――

無機質なモニターに映し出されたその文字列を読んだ御坂の脚から、かくんと力が抜けた。その様子に慌てて佐天が駆け寄り、脇に手を添え支えとなる。

「御坂さん!?」

「……ほん、とうに、本当にいた……私のクローンが……」

その様子に佐天もまた歯噛みしながら、報告書を少しずつ読み進める。そこに記されていた報告書の内容は、余りにも非情な現実だった。

――御坂美琴のクローンを作るのに使用されるのは、彼女の毛髪から摘出された体細胞を注入した受精卵。そのために必要となる遺伝子配列パターンは、幼い彼女から獲得したサンプルを使用。このサンプルの獲得は、交渉人（ネゴシエーター）が――

「……昔、ね、本当に昔。まだ子供だった頃、大学病院で筋ジストロフィーの治療の為だって言われて、ＤＮＡマップを提供したことがあるの……」

うわごとのように呟く御坂。つまりはその提供を受けた科学者が、こうして悪用していることになるのだろう。さらに報告書の中では、その提供されたＤＮＡマップが学園都市の書庫（バンク）に登録済みであることも書かれていた。

――実験体の確保に要する時間を短縮するためには、人体と人格、双方の成長過程を短縮する必要がある。前者については投薬によって、およそ１４日で『超電磁砲（レールガン）』と同様の人体を形成することに成功。後者については、外部スタッフである『布束砥信』の監修のもと、

学習装置（テスタメント）を用いて、基本的な脳内情報をインストールすることで対処した。準備は整い、後は成果を確認の後、計画は次の段階に移行。『妹達（シスターズ）』の量産体制を構築する予定であった――

夕方出会った布束の名前も、報告書の中で確認。彼女が『妹達（シスターズ）』の人格形成に大きく関わる研究員であったことも判明した。

そこまでの事実を確認し、御坂は握り締めた拳を画面の手前のキーボードに叩きつけた。その拳を横からそっと包み込んだ佐天は、更に報告書を読み進める。そして、その先の内容を見て、ふと眼を止めた。

「……あれ？　御坂さん、ココ読んで下さい、ココ」

佐天の示した先を訝し気に眺めた御坂は、その内容に眼を瞠った。

――しかし、『妹達（シスターズ）』の試作型として作成された第一ロットは、度重なる問題点が浮上。まず第一に、投薬によって成長過程を短縮された個体は、遺伝子内のテロメアが非常に短くなり、免疫機能も非常に脆弱であることが判明。早くて数時間、長くとも数日で絶命することが判明した――

一日も保たずに死滅するのでは、商品価値など出るはずもない。実験目的か兵器利用かはこの文面からは分からないが、ひと月も保たないのでは利用価値がぐんと低くなる。

――この問題点の改善のため、『布束砥信』とともに遺伝子工学面での外部スタッフとして招聘された『キース・グレイ』の監修の元、放射線と細菌による遺伝子操作で『超電磁砲（レールガン）』の遺伝子情報の一部を書き換え。これにより『妹達（シスターズ）』の遺伝情報は、オリジナルの『超電磁砲（レールガン）』とは一部異なるものとなったが、書き換えが行われたのは能力に深く関わる脳神経系ではなく、あくまで『テロメア形成に関わる部分』と『免疫系の極々一部』であった。またそれによって、特定の病原菌への抵抗力を弱めたり、特定物質へのアレルギー反応が起こることも危惧されたが、パッチテストの結果免疫力は以前よりはるかに向上していることが――

先に続く文面で、キース・グレイが招聘された理由を理解する。何十年と遺伝子工学分野の研究を行ってきたエグリゴリのノウハウは、学園都市に比べても多大なもの。体細胞クローンなんて非道な研究

をしている者たちからすれば、喉から手が出る人材だろう。
キース・グレイの協力により、一度は問題点を乗り越えた。しかしそこまでしても、『超電磁砲量産計画（レディオノイズ）』は、再び暗礁に乗り上げたようだった。
――計画の最終段階において、『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』による演算を行った結果、予想外の事態が判明。『妹達（シスターズ）』の性能（スペック）は、素体である『超電磁砲（レールガン）』の1%にも満たない。その性能（スペック）は平均して異能力者（レベル2）程度であり、強力な個体でも強能力者（レベル3）を超えることはない――
人体を人工的に作り上げた弊害か、それとも人格形成を機械任せにしたことに問題があるのか、ともかく『妹達（シスターズ）』は御坂とは比べ物にならない程弱い能力しか持ち得なかった。利用価値も商品価値もほとんどない個体を大量に生み出し、多額の負債を抱える未来を予測した研究チームの結論は、余りに簡潔なものだった。
――以上、ツリーダイアグラムの演算結果を受け、本計画により被る損害を最小限に留めるため、委員会は進行中の全ての研究の即時停止を命令。『超電磁砲量産計画（レールガン）』――『妹達（シスターズ）』を中止し、永久凍結する――
「――――……っ、はぁぁぁぁ～～」
最後の文面を見て、御坂の脚から完全に力が抜けた。極度の緊張が解けたせいか、地面にへたり込み、起き上がれない。
「なによ……やっぱりいないんじゃない、私のクローンなんて……あンのギョロ目、驚かしてくれちゃって」
安堵の余り、ここにはいない布束への恨み言も少し出た。そこで顔を上げると、変わらずモニターの前に立ち、キーを操作する佐天の姿が目に入った。
「？　佐天さん、何してるの？」
「あ、御坂さん。少し手を貸してくれますか。これに内容入れて、持って帰りたいんで」
そう言って佐天が見せるのは、研究所などで使用されるクリスタル状の記憶媒体。目を向けると、同様のメモリースティックが乱雑に入れられた引き出しが開いている。あそこから取り出したのだろう。

「内容って……この報告書とかのこと？　こんなのもう凍結された計画なんじゃ――」
「いや、そうですけど。さっきの内容で少し気になったことがあるんですよ」
　佐天自身も報告書の結論から、計画が今も進行しているとは思っていない。気になったのは、もっと別の事。
「この『超電磁砲量産計画（レディオノイズ）』は、確かに途中の段階で中止されていますけど……だったら、それまでに生み出されたハズの、『妹達（シスターズ）』はどこに消えたんでしょう？」
「!!」
　佐天が危惧したのは、量産に先立って生み出されたであろう『妹達（シスターズ）』のことだった。あくまでこの計画が量産計画である以上、その量産体制構築のための『試作品』が生み出されていたはずだ。何より報告書の中で、計画初期においては形成された人体そのものが脆弱だった為、遺伝子操作で強靭な個体に作り替えたともあったのだ。寿命が短い最初期の個体はともかく、テロメアや免疫力を調べるために作られたその後の個体が、生き残っている可能性は高い。
「もしいるって言うなら、そのコたちも助けてあげたいし、追いかけるにはここのデータが必要なんです。御坂さん、お願いします！」
「よし、分かった！　任せといて！」
　モニターに駆け寄り、御坂の能力で機器を電子的に操作。削除されていたデータも含めて全て復元して記憶媒体に入れ、痕跡を消去する。その部屋から撤収するまでに要した時間はおおよそ５分程度だった。
　そして、彼女らがいなくなった部屋の中心に、空間からにじみ出るように、一人の少年が現れた。彼女らがつい先ほどまで操作していたモニターを見て、一人ほくそ笑む。
「……最初のチェックポイントはクリア。さて、次の障害は切り抜けられるかな？」
　その言葉が薄暗い部屋に溶けた頃、不意に部屋の入り口の扉が開き、無骨なゴーグルを頭にかけ、御坂美琴とうり二つの少女が入って

来た。静謐が支配し、人影もない部屋の様子を、彼女の無機質な瞳が見つめていた。

０４５　女王蜂―クィーンビー―

　カチャカチャと、硬質な音が部屋の中に響き渡っていた。傍らでそれを眺める少女たちは緊張した面持ちで、一様に固唾を呑んで見守っていた。それを一歩離れたところから見守っていたツンツン頭の高校生もまた、場の空気を乱さないよう努めて静かにしていた。

「……出ました！」

「「ホントッ!?」」

　端末を操作していた花飾りで頭を彩った少女の言葉に、周囲の少女は一斉に声を上げた。

「初春っ、いいいい一体、おおお姉様の妹様は、どこにいるんですのおおおおおッ!!」

「ちょ、ちょっと落ち着いて下さい、白井さん！　なんでそんなに焦ってるんですか!?」

「これが落ち着いていられますか!!　お姉様のクローンですのよ、妹様ですのよ!?　つまりは何も知らない純粋無垢で白一色のミニマムなお姉様をわたくし色に染め上げる絶好の機会が――――!!　ゲヘヘヘヘ」

「フザけんな、こらぁぁぁぁぁぁ!?　なんなのよ、そのエロオヤジみたいな笑いは!!」

「……あー、初春?　とりあえず話進めてくんない?」

　背景で巻き起こる何時もの電撃（おしおき）を盛大にスルーして、佐天が話の続きを願う。そして佐天に問いかけられながら、背後で巻き起こる空前絶後の電撃処刑（スペクタクル）に目を白黒させる初春。

　一歩離れた視点でそんな一切を眺めていた上条は、隣に座っていたインデックスと共に机に置かれたお茶を一啜り。

「……最近、この光景に慣れてきた自分がいる」

「……全くなんだよ」

「……うん。まったく」

「?!　いや、いつからいたんだよ（の）!?」

いきなり聞こえてきた姫神の声に、二人同時に飛び退った。
結局白井がいい感じに焦げ、飛び交っていた電撃も収まって事態が収拾したのはそれから十分後のことだった。
「……それで話を続けますけど。御坂さんのクローンを生み出す計画は、確かに途中で頓挫しています。しかしその一方で、計画の前段階として生み出された個体が存在するようです」
報告書の中に示された御坂のクローン、『量産能力者（レディオノイズ）』にはいくつか必要とされた性能（スペック）が存在した。御坂から受け継いだ『電撃使い（エレクトロマスター）』の能力、兵士として運用できる程度の身体能力、銃火器の扱い方の習熟、各種言語と一般常識の獲得、そして軍事転用した際に戦争継続中は死なないくらいの寿命、とおおよそ倫理的でもなければ人道的でもない性能を要求された。当然最初は失敗続きで、生み出された個体はデータを取るだけ取ったら『処分』されると言う結末を迎えていた。
他人（ひと）の勝手な都合によって生み出され、また生命を絶たれた自分のクローンたちを想い、御坂が自身の腕を抱き締め強く歯噛みする。そんな御坂を、この場に繋ぎ止めるように、白井がその腕をほんの少しだけ握り締めた。
「現時点で生存が期待出来る個体は、それほど多くありません。候補は後でまとめますが――中でも生きている可能性が高いのは、作成個体間で脳波が同一であることを利用した『情報共有化システム』の実験個体です」
通称『ミサカネットワーク』。クローニングした個体は全て同一の脳波を持ち、『電撃使い（エレクトロマスター）』で電気信号に変換して送受信することも出来る。それによって例えばAという個体が見聞きしたものを、Bという個体にも認知させることが出来る。学習や経験をフィードバックすることが出来るため、個体ごとに再度の学習・経験を行わせる手間が省けるという訳だ。
「でも、なんでそのコたちは生き残ってる可能性が高いのよ？」
「あー、それはですね……報告書内でもこのネットワーク構築は『最重要案件』として定義されていたらしくて……他の個体に比べても寿命は長めに調整されてましたし、どの程度の記憶や学習が蓄積されて共

有化されるのか長期に渡って調べるとされていましたので、生存の可能性は極めて高いと思います！」

御坂の質問に、初春が報告書の内容から読み解いた事柄を聞かせる。正直な話をすれば、生きている可能性自体は低いかもしれない。この実験を主導した者からすれば、証拠になり得る存在を残しておくメリットは少ないのだ。でも、もしかしたら間に合うかも知れない。助けられるかも知れない。そう考えたら、御坂も、初春も、白井も、佐天も、そして上条たちも、止まるつもりは無かった。

「初春、アリガトね。それで、場所は!?」

「はい、佐天さん！　第二学区にある『才人工房（クローンドリー）』と呼ばれる研究所です!!」

◇　◇　◇

『才人工房（クローンドリー）』。それはかつて世界に存在した偉人や天才を現代に蘇らせるという馬鹿げた研究を行っていた研究所。一時は学園都市の都市伝説サイトにも登場した、存在すらあやふやだった研究所。

「そんなモンが、爆発物実験場や騒音対策設備のオンパレードな第二学区にあったとはな……」

「ある意味お似合いじゃない？　ここなら年中エンジン音や爆発音の嵐だから、騒ぎが起きても気にもされないわよ」

上条のぼやきに御坂が答えるが、言ってる傍から聞こえてきた飛行機用のジェットエンジンの音が半分くらいかき消していた。第二学区はエンジンや爆発物など騒音が出る研究対象を研究するための学区だ。隣の学区まで音が響かないように消音設備もあちこちに存在するし、ここに好んでくるのは各研究所に勤める研究員くらいだろう。年中いたら、耳がおかしくなりそうだった。

やがて乗って来たタクシーがある路地の入口で止まる。全員そこで下りて道の先を見上げると、周囲の建物と比べても一際大きく無骨なビルが存在した。

『皆さん、聞こえますかー？』

「お。聞こえた聞こえた。感度は良好みたいだな」

片耳に取り付けたレシーバーから聞こえてきた初春の声に、上条が

返す。ここに来たのは、当事者である御坂、戦闘能力の高い佐天、移動・輸送に強みのある白井、そして防衛役の能力者がいた場合の対策として上条、の計四人だ。残りの初春、インデックス、姫神の三人は指揮監督役。もっとも初春以外の二人は、お茶を飲みお菓子を食べ、『休憩係』とでも言うべき状態だ。

『警備員（アンチスキル）のデータベースやその研究所から直接引き抜いたデータでナビしますから、皆さんは安心して研究所に忍び込んで下さーい。あ、データ参照とハッキングの手間を省きたいので、内部のセキュリティは御坂さんお願いします』

「りょーかい。あんまり中で研究員倒したり、派手にやるなってことね」

「いや、本当にお願いしますよ、御坂さん。御坂さんの電撃が一番派手なんですから」

「そういや俺も初対面で雷落とされたっけなあ……」

「それは、類人猿さんが不埒な真似でもしたのではありませんこと？　女性の胸にダイブしたり、女性の入浴に乱入したりしそうないかがわしさが、顔からにじみ出ていますわ」

潜入前の軽いミーティング、そんな感じで談笑を繰り広げていたところ、それは起こった。

「不法侵入は、駄目なんダゾ☆」

余りにも軽い言葉と共に、佐天、白井、上条の手足がまるで石になったかのようにピタリと止まった。ただ一人御坂だけは、持ち前の電撃で無効化し、その衝撃にわずかにのけぞる。

「ッ!?　この、能力は……！」

「ハァイ、御坂さん☆」

現れたのは、御坂や白井と同じ常盤台の制服を身に着けた少女。長い金髪を風になびかせ、白いレース入りのニーソックスとローファーを纏った靴音が路地にカツンと鳴る。少女は同じレース入りの手袋を纏った手で、無骨なリモコンを弄びながら妖艶に微笑んでいた。

「食蜂操祈（しょくほうみさき）……！」

「そうよぉ☆　一体この研究所に、何の用なのかしらぁ？」

学園都市第５位の超能力者（レベル５）。最強の精神系能力者、『心理掌握（メンタルアウト）』。常盤台の誇る二人の超能力者が君臨していた。

そして、そんな研究所の路地の片隅で。

「――――あー……改めて見ても、とんでもないメンバーなんですケド？」

『まあ、正面切って戦う必要はないよ。主要な何人かに致命傷を負わせてくれるだけでいいからね』

そこにいたのは御坂たちと変わらない年恰好の一人の少女。特徴的なのは黒に色を統一した改造制服と、肌に直接纏うタイツ状の衣服。頭の両側で結わえたツインテールと、まるで泥濘を練り固めたような光の見えない瞳を持った少女だった。

『キース君の情報があったとは言え、関係施設の撤収作業には少しばかり時間がかかる。それまで頼むよ、警策（こうざく）君』

「……はぁい」

通信機へと返事を返す少女の足元。マンホールの蓋が銀色の液体に押し上げられ、ゴポリと重たげな音を立てていた。

０４６　激怒―アンガー―

「それでぇ、御坂さん達は、本当に何をしに来たのかしらぁ？」
あくまで優雅に、少女は語る。食蜂操祈（しょくほうみさき）。常盤台では御坂と並ぶ学園都市第５位の超能力者（レベル５）であり、常盤台最大の派閥を支配する女王。あくまで個人主義の御坂に対し、そういうところも互いに気に喰わない相手であった。
しかし、たった今、食蜂の目の前に立っている御坂の怒りはそれだけではなかった。
「……アンタがなんでこんなところにいるのか知らないけど、あの研究所に近づいた途端に出てきたってことは、『才人工房（クローンドリー）』の関係者ってことでいいのかしら？」
バチリ、と空中に放電しながら尋ねる。それ自体が御坂の感情を表しているような気がした。
「――そうよぉ。むしろ私は、御坂さんがなんであそこを知っているのか聞きたいんだけど？」
その返事を聞いた途端、御坂からいくつもの電撃が奔り、周囲の電灯を破壊した。ガラス片が降る中、御坂はバキリと歯を鳴らす。
「アンタ――――!!」
「ストップ！　御坂さん、一旦ストップです!!」
更なる電撃を浴びせようとした御坂の手を、佐天が握る。そちらに視線を向けると、宙に漂うようにユーゴーが出現しており、彼女の精神感応能力で精神拘束を解いたとわかった。
「なんで止めんのよ、佐天さん！　コイツ、よりにもよって……！」
「いや、まだそうと決まったわけじゃないでしょう！　詳しい話、聞いてみないと！」
佐天に止まるよう懇願され、ようやく御坂が電撃を収める。もっともその眼は相変わらず食蜂を鋭く睨んだままだった。そんな視線を向けられる食蜂はと言うと、今まさに上条と白井の精神拘束を解いたユーゴーを興味深げに眺めていた。
「――実物と見紛うばかりの幻影と、それを構成する精神系能力ぅ？

学園都市にこんな高レベルの能力者がいたなんて、聞いたコトないんだけどぉ？」

「ユーゴーさんのことはひとまず置いときなさいよ。それよりアンタに聞きたいことがあるんだけど」

「あらぁ☆　御坂さんが私にお願いなんて、槍でも降るのかしらぁ☆」

その口調と余裕に、またもや御坂の怒りが募るが、それをあえて呑み込んで聞きたかった問いを投げかけた。

「――数年前に、あの研究所に収容されていた『ドリー』と呼ばれるコはどこ？」

「……」

投げかけられた問いに、食蜂の雰囲気が一変する。余裕の色を絶やさなかった瞳は細められ、今はまるで溢れそうになる敵意を押し留めようとするかのようだった。

「……どこで知ったのか知らないけど、ドリーは随分前に研究所で死亡が確認されてるわぁ。こっちも聞きたいんだけど？　一体どういう経緯で、あの娘のこと知ったのかしらぁ？」

最後の問いは、もはや詰問だった。隠そうとしていた敵意も、今は隠そうともしていない。いや、『敵意』よりも一段上の『殺意』へと変わろうとしていた。

そんな食蜂の『殺意』を受けた御坂は一瞬言い淀んだが、やがて素直に経緯を話すことにした。

「……私のＤＮＡマップを手に入れた奴らが、体細胞クローンを生み出してたってことを最近知ったのよ。それで――」

「ああ――それでドリーと御坂さんがそっくりなのねぇ。それで？『今さらになって』止めに来たってワケぇ？　あの娘が死んでから？　いくらなんでも遅すぎるんじゃないかしらぁ？」

「……ッ！」

その通りだ。時間は巻き戻せない。死んだ人間は生き返らない。それが当たり前の摂理。だけど。だけど、今は。

「……遅すぎた、って分かってる。今さらだ、ってことも分かってる」

「……ふぅん？」

「けど！　間に合うコが、いるかも知れないの！　だから私は――――」

御坂と食蜂の議論が続く中、上条がソレに気付けたのは偶然だった。感情をあらわにする御坂を見て、ふと伏せた目が、偶然にも食蜂の後ろの路地の影を捉えた。そこは一見何の変哲もないようにも見えた。だけどただ一つ、違う点があった。建物の影が長く伸びる側、パッと見では目立たない日陰側、まるで暗がりに溶け込むように銀色の水溜りが存在していた。

「っ、あぶねえッ!!」

咄嗟に飛び出し、水溜りに近かった食蜂を左手で抱きかかえる。まるでそれを合図にしたかのように、水溜りが変化し、いくつものトゲへと変化した。

「う、おおおおおおおおっ!!」

迫りくるトゲに対して、握り締めた右手の拳を叩きつける。バキン！と甲高い音を立てて、銀色のトゲは液体へと戻り、いくつもの飛沫となって飛び散った。

「なによ、今の!?」

「研究所側の刺客でしょうか？」

「いや、でもさ、今の攻撃食蜂にも当てるつもりだったみたいじゃないか？　俺が助けなかったらどうなってたか」

「そうですね。食蜂さん、でしたっけ？　さっきの奴がなんなのか、とか――――……食蜂さん？」

いきなりの攻撃に全員が戦闘態勢に移行するものの、肝心の食蜂からの反応がない。怪訝に思って佐天が覗き込んでみると、彼女は上条に横抱きにされた体勢のまま、耳まで真っ赤になって胸板に顔を埋めていた。呼びかけられても反応を示さない。

「……えっと。食蜂、さん？」

「……はっ!!　なななななな何かしらぁ?!」

ようやく顔を上げても相変わらず耳も赤く、なにより顔の赤みが引いていない。その反応で、なんとなーく佐天が『色々』悟った。

「あ～、また今度じっっくりとお話しましょう。それでどうなんです

？　さっき襲ってきた相手に心当たりは？」
「そ、そんなのないわよぉ。そもそもあの研究所はドリーの死後、研究員全員洗脳して、私の個人研究所として使ってるわぁ。所内の研究内容を狙ってる相手だったら、ごまんといるしぃ」
「アンタ、相変わらずやり方がえげつないわね。要は、多すぎて特定できないってことか」
　そうこうするうちに、飛び散った銀色の飛沫が寄り集まり、やがて一つのヒトガタを為す。ソレはまるで小柄な少女を象ったかのようなのっぺりとした塊だった。その両手を、頭の横から生えたおさげのような部分を、それぞれ刃の形状へと変えてぐっと力を溜めるように腰を屈めた。
　その体勢を見て、全員が再び戦闘態勢を整える中、ヒトガタの後ろ、路地の向こうから進み出た人影があった。
　奇妙な出で立ちだった。素肌に直接タイツ状の衣服をまとい、その上に黒一色に統一した改造制服を身に着けていた。頭の両側で結わえた長いツインテール、銀色のヒトガタと共通する輪郭から、彼女こそが銀色の液体を操る能力者本人だと悟る。
　しかし、どうにも様子がおかしかった。遠隔操作型の能力を持っているにも関わらず、なぜ能力者本体が姿を見せたのか。なぜ攻撃態勢を整えながら攻撃してこないのか。全員が疑問を持っていると、目の前の少女が不意に声を出した。
「――――なんなのよ、アンタ」
　無機質な、艶消しな、感情を抑えるような声音が響いた。路地の暗がりで顔を俯けているため、表情は見えない。しかし、なによりもその声音が、全てを語っているような気がした。
「今になって？　今更になって？　止めに来た？　助けに来た？　あの娘が死んで？　遅すぎたってわかって？」
　路地に響く、御坂への罵倒。それが何よりも、なによりも、目の前の彼女の心情を表した。
「――――――――フザけんな」
　――――激情。ソレを表すかのように、銀色のヒトガタが形を変

え、身体のありとあらゆるところから、刃を、トゲを、ありとあらゆる『殺意』を生やした。より鋭く、より凶悪に、獲物を刻む存在へと変貌したヒトガタは、下半身の形だけを流動化させると、水面をまるで泳ぐかのように地面の上を俊敏に蠢いた。

「死ぃ、ねえええええええぇぇぇっ!!」

ヒトガタは他には目もくれず、一直線に御坂の方へと突進した。とっさに電撃を飛ばすも、機敏に動くヒトガタに一発も当たらない。

「や、ば……!」

思わず身構えるも、その前に滑り込むように立ちはだかった影があった。

「お姉様に、手出しはさせませんわ!」

白井が近場の車のドアをテレポートさせ、御坂の前にバリケードとして置く。あまりに突然に生じた障壁に、方向転換の出来なかったヒトガタがドアにぶつかり、再びその形状を崩れさせる。そこにさらに襲い掛かる者がいた。

「でぇいっ!!」

空中から躍りかかった佐天が、開放したＡＲＭＳで液体窒素の斬撃を叩き込む。いくら能力に操られていても、所詮は『液体』。絶対零度に近い極低温ではたちまち凝固し、その動きを停止させた。

「っ、ぐ! この……!! ――――ッ?!」

懐からナイフを取り出し、戦闘を継続しようとしていた少女の動きが、一瞬で止まる。目を向けると、上条に抱き留められたままの食蜂が、懐のリモコンで彼女を指していた。心理掌握（メンタルアウト）。学園都市最強の精神系能力で動きを封じられた。唯一動く瞳を巡らせ、恨みと激情を乗せて御坂を睨んだ。

「……なんだか、アンタもドリーに関係あるみたいね」

「……っ!」

「……だったらさ、お願いだから、アンタも、食蜂もさ……」

彼女の睨みを受けながら御坂は歩み寄り――――その頭を下げた。

「……ドリーの『妹』を助けるのに、力貸してくれない?」

◇　◇　◇

「あー……やっぱり警策君じゃ勝てなかったね……」

画面の中、高空から撮られた彼女らの映像を見ながら老人が呟く。その後ろでは、多くの研究員が施設内のめぼしい資料を運び出すため慌ただしく動き続けていた。

「ま、ここの資料も順調に運び出せそうだし、彼女らが来るなら最後に興味深い実験が出来そうだし……これならワシらにとって十分にプラスになりそうだね」

そう呟く老人。禿げ上がった頭に、悪魔のような頭脳を収めた男。古くは木山春生を、テレスティーナ＝木原＝ライフラインを、地獄へと叩き落した張本人。

「キース君の提唱した――『ＡＲＭＳによる能力者の人工進化』。たっぷり見せてもらうとしようか。ひょひょひょ」

老人の名は、木原幻生。学園都市で『最悪』をぶっちぎる、屈指のマッドサイエンティストだった。

０４７　変貌―トランスフォーム―

――最初は、ただメンドくさくて、バカな子って印象だった。

幼少期、警策看取（こうざくみとり）は才人工房（クローンドリー）で能力開発に勤しむただの少女だった。親の顔もまともに覚えておらず、顔を合わせるのは自分の能力をのみ評価する大人たち。自然と幼い警策は、大人たちの前で表面上の笑顔を浮かべて日々を過ごす子供になって行った。

そんな時、実験の一環で引き合わされたのが、同じ施設にいたドリー。小学校高学年から中学生くらいの容姿なのに、全然それっぽくなくて、むしろ小さな子供を見ているようだった。日々の様々な出来事に、大げさに一喜一憂するおバカな子。そんな第一印象だった。

けど、次第にその子の存在が、自分の中で大きくなっていった。周囲の大人の印象を良くするために、作り笑いを浮かべる日々。そんな中で無邪気で裏表のないドリーと過ごした日々。いつしかあの子の前でだけは、本当に心の底から笑っているような気がしていた。

そんな日々も、あの日、全てが変わってしまった。きっかけは、少しだけ早く終わった一日一度の能力開発と測定。いつもより少しだけ早く到着したドリーの部屋で、警策は見てしまった。ドリーの身体に埋め込まれた、無骨な『金属製の器具』の存在を。

そのことがきっかけでドリーの存在と実験の内容に疑問を抱き、独自に調べたところわかったのは、あまりにも残酷な真実。ドリーが『ある人物』のクローンで、余り長くは生きられないこと。そしてただでさえ短い寿命を、度重なる実験ですり減らされていることだった。

すぐに上にかけあったものの、取り合ってもらえず殴り倒されて監禁された。どんな幸運が働いたのか、施設が放棄され解放された後は、実験を指示した統括理事会への憎悪のみで動いて来た。大体一年ほど前に、テロ未遂を起こすも失敗。送られた施設で死亡したことにされて、今は学園都市の『暗部』に身を置いている――。

自分の半生を頭の中で振り返り、警策は何度目かになる溜息を吐いた。今、彼女がいるのは食蜂が実質支配する研究所の室内。仮にも敵だった自分を入れるような場所ではないと考えるのだが、勝利者側で

ある食蜂・御坂一行は現在警策に一切の注意を払っていない。精々申し訳程度の手錠をはめているだけ。さっきから一心不乱に、御坂美琴の『電撃使い（エレクトロマスター）』の能力で、過去の研究所のデータベースをさらっている。話に出てきた『ドリーの妹』を探すために。……ここまで警戒されないのは、やっぱり不用心すぎるだろう。

だから、少しだけかき混ぜてやるつもりだった。

「――チョット。アンタら私が暴れたらどうしようとか、考えないワケ？　御坂美琴や噂のＡＲＭＳ相手はともかく、そっちの食蜂操祈なら肉弾戦に持ち込めば一矢報いるくらい出来るわよ？」

その言葉に視線を向け、溜息を漏らしたのは食蜂のみ。他は今も凄まじい速度でデータを漁る御坂にくぎ付けだ。

「大丈夫よぉ。そっちの彼女のお墨付きだものぉ」

食蜂が水を向けたのは、部屋の片隅で佇む服や手足の先がほんの少し透けた妙な女性だった。

「ユーゴーって言ったかしらぁ？『精神感応（テレパス）』の能力者で、私と同格かそれ以上の『力』の持ち主。私が常に自分に張っている防壁力も察知してるみたいだしぃ。多分貴女の能力じゃあ、もうとっくに表層の思考も深層の記憶も覗かれてるわよぉ」

その言葉を聞いて、警策の顔に嫌悪が浮かぶ。目の前の金髪の女は、他人の心という不可侵領域を侵す最悪の能力者だ。自分の憎悪も、ドリーとの記憶も何もかも覗かれたなど嫌悪感しか感じない。だというのに、この女はこちらの嫌悪の表情を真っ向から受け止め、なお柔らかく笑む。

『……やっぱり、こんな能力、他人から見たら嫌ですよね……』

「当たり前でしょ。最悪の覗き魔（ピーピング・トム）じゃない」

『そうですね……けれど』

柔らかく微笑んでいた彼女の瞳に、強い光が宿る。その光に、姿に、一瞬警策も食蜂も気圧され後退った。

『私は、もうこの能力を使う事を躊躇ったりしません。私と共にバンダースナッチを宿した、佐天さんが前に進むために必要なら。この学園都市（まち）が、かつてのエグリゴリと同じ『闇』を抱えているというの

なら。それこそが、私がここに至る道程で倒れていった多くの仲間と、共に戦い抜いたかけがえのない友人たちのために、私が出来る精一杯の事ですから』

言葉の意味は半分も分からない。けれど、確かに警策は目の前の女性に否定できない何かを感じた。問い詰めようか迷っていると、部屋の中に御坂美琴の歓喜に満ちた声が響いた。

「見つけた!!」

◇　◇　◇

『才人工房（クローンドリー）』からほど近いとある研究施設。表向きは薬学・理化学の研究施設となっているそこが、現在ドリーの妹が眠る場所だった。

元々ドリーは、クローンの短すぎる寿命の改善だけではなく、同一脳波・同一能力を持つ個体同士で形成される情報共有化ネットワークの試験体でもあった。日常生活を送り、外的要因から記憶を増やしていくのがドリー。その情報を蓄積し、共有化できるか試すのがその妹。ドリーの死亡後、妹の方は長期に渡って記憶を確認するため、この研究所に運び込まれ培養カプセルの中で眠り続けている。

当然施設側の警備も万全で、相当の抵抗が予想されたのだが……。

「……なぁんで、誰もいないのよぉ？」

「妙ですね……」

食蜂のぼやきに、佐天も同意する。研究施設に入ったと言うのに、未だに人っ子一人見当たらない。そもそも施設の入り口に見張り一人いなかったのも奇妙だった。

「……もしや、既に放棄された後では？」

「いや、それは無いわね。施設の管制システムでも電力供給でも地下の培養カプセルは変わらず稼働中になってるわ。一番重要な研究対象を放棄はしないでしょ？」

白井の言葉が、いいようのない不安を煽る。御坂の精査はあくまで電力とシステムから確認したもの。どうなっているのかは、やはり直接行くしかない。

全員が地下へのエレベーターに乗り込む直前、ほんのわずか、食蜂

が乗り込むのを躊躇った。御坂が訝し気な視線を向けるが、それより早く、ユーゴーが彼女へと話しかけた。
『大丈夫ですよ……ドリーさんは、きっと貴女のことも、受け入れてくれます』
「……」
ユーゴーの言葉には答えず、食蜂は足音高くエレベーターへと乗り込んだ。……ここに来るまでの間に、警策は自分の身の上を噛み砕いて話した。もちろん触れたくないことは飛ばしたけれど、ドリーと過ごした日々については、正直に。しかし、食蜂だけは、一向にドリーとどんなかかわりがあったのか話そうとはしなかった。御坂達はそんな彼女の様子に何度も問い詰めていたけれど、彼女自身に話す意志はなさそうだった。彼女の真意を理解している者がいるとすれば、先程からいるユーゴーという女性だけだろう。
なんとも微妙な空気の中、エレベーターはやがて地下の最深部で止まり、全員がそこから駆け出す。薄暗い廊下を駆け抜け、突き当たりのドアを開き、器具に埋め尽くされた部屋を横切った。
彼女は――ドリーの妹は、其処にいた。
すぐに備え付けの機器で確認するが、彼女自身に特に問題は無さそうだった。そのことに安堵しながら、すぐに彼女を出す為、機械を確認していく。しかし、何故かどのスイッチも変化が無い。疑問に思っていると、部屋に備え付けられていたスピーカーから声が響いた。
『――あー、やれやれ困るねえ、警策クン。君にはワシの研究施設に来ないよう、そいつらの足止めを命じたはずだけどね』
聞こえてきたのは、かなりの年配の男性の声。その声に聞き覚えがあったのは、この中では警策一人だった。
「木原、幻生……ッ！」
『うん、その通り。いやー、今まで黙っていたけれど、ドリーの妹君は、ワシの方で随分前から『保護』していたんだよ、忘れてた忘れてた』
怒りを発する警策に対し、声の主はあくまで自然体。声にはむしろ軽々しい響きがあった。その声に、むしろ寒気が走る。
「ちょっと！　木原幻生ってまさか……！」

「学園都市の能力開発部門の重鎮、絶対能力者の存在やＳＹＳＴＥＭ研究分野の元老、結構色々呼び名のあるジジイよぉ……ああ、御坂さん相手なら、こう言えば一番分かりやすいかしらぁ？」

御坂の問いに答える食蜂の声にも隠し切れない嫌悪が見える。それだけこの声の主は学園都市でも有名なのだ。研究の為なら悪魔に魂を売るどころか、平然と悪魔以上の所業もやるマッドサイエンティストとして。

「かつて木山春生の生徒を昏睡状態に陥らせた、『暴走能力の法則解析用誘爆実験』の主催者よぉ」

食蜂の言葉と共に、部屋の中央に備え付けられたドリーの妹を包み込んだカプセルが、突如として動き出す。ゴウンゴウンという音と共に、内部の液体が排出され、内部に空気が満たされていく。そして、プシッと空気が抜ける音と共に、前側のハッチがゆっくりと開き出した。

ハッチが完全に開いた時、支えを失くした彼女の身体が倒れ掛かり、すぐ横で控えていた警策が支える。その一歩後ろで、食蜂は踏み出すか留まるか、迷うように立ち尽くしていた。やがて、ゆっくりと彼女の瞼が上がった。

「……みー、ちゃん？　それに、みさき、ちゃん、なの……？」

その言葉に、声に、どうしようもなく二人の顔が歪む。そして彼女が手を伸ばし、警策が彼女に巻き付かせたタオルがはらりと落ちた。

それを見た瞬間に、周囲の人間は全員が息を呑んだ。上条と御坂と白井は、その埋め込まれた器具の痛々しさに。かつてドリーにも埋め込まれていた器具を知る警策と食蜂は、そのやりきれなさに。

それに対して、全く違う感想を抱いたのは三人。佐天は知っていた。アリスの記憶の中で、その器具を知っていた。ユーゴーも知っていた。かつてエグリゴリで見て、知っていた。そして、最後の一人、バンダースナッチが虚空にその姿を生じさせ、その器具の名称を呼んだ。

『なんでこの子に――――『リミッター』なんか仕掛けられている

のよ？』

バンダースナッチが確認した、ドリーの妹の胸に取り付けられた金属板。その中央には同心円状に配置されたコアチップが取り付けられており、間違いなくＡＲＭＳを制御・抑制するための信号が発信されている。これが取り付けられている以上、答えは一つしか無い。

『ひょひょひょ……それでは≪プログラム――トゥイードルダム・トゥイードルディ≫を開幕しようか』

幻生の声がスピーカーより響き、部屋の中央でボン、と何かが破裂するような音を立てた。音の源は、全員の視線の中心、ドリーの妹。信じられなかった。信じたくなかった。全員の視線が集中する中、彼女の胸に取り付けられた金属板は、圧縮された空気の破裂で粉々に吹き飛び、癒着した傷口から鮮血が迸ったのだから。

「ドリー!!」

彼女を抱きかかえていた警策が、必死になって傷口を押さえる。だが、その手をドリーの妹が優しく押さえた。

「みーちゃん……だいじょぶ、だから……」

「大丈夫なわけないでしょ！　いいから、わかったから！　今、病院に連れて行ってあげるから――」

「ちが……うよ……？　……みー、ちゃん……みさ、きちゃん……」

ハンカチで傷口を押さえていた警策の両手をドリーの妹がどかす。そこにあったのは、傷口などどこにもない、きれいな肌。代わりに、その腕に、手に、幾何学的な紋様が浮かび上がる。

「あの『紋様』……ドリーが死んだ時にも、確か……」

食蜂のうわ言のような声が聞こえる。その頃には、部屋の中は高音の『共振』で満たされていた。既に一度経験した上条と白井が、未だに動こうとしない警策の腕を引っ張って連れていく。必死になって伸ばした手の先、彼女は確かにその言葉を聞いた。

「……にげ、て……」

解放され、変貌していく彼女の姿。ドリーの名を呼び、泣き叫ぶ警策。幻生の悪意に彩られたＡＲＭＳは、こうして産声をあげた。

０４８　鏡像―ミラー―

――最初は、ただメンドくさいって、印象だったのよねぇ。

幼少期、才人工房（クローンドリー）で能力開発に勤しんだ食蜂は、ある日、同じ施設にいる少女に引き合わされた。その子の名前は、ドリー。研究員たちは先天的な症例を抱えていて、特殊な器具を身体に取り付けないと生きられないとか言っていた。その時の食蜂は、その子に別段興味も抱かなかったために、その話を素直に信じていた。

食蜂が彼女と話すとき、触れ合う時、食蜂はドリーの友達を演じていた。『みーちゃん』と言う名前のドリーの友人は、ずっと前にドリーの身体の器具を見て、会いに来なくなったと訊いた。その話も研究員の話を鵜呑みにしたのだから、やがて真実を知った食蜂は当時の自分を殴り飛ばしてやりたい気分だった。

研究員の話を信じ、『みーちゃん』を装いドリーを騙す日々。そんな毎日だと言うのに、何時しか食蜂は、余りに無邪気で裏表のないドリーに本当の意味で心を許せるようになっていった。

そんな毎日が終わってしまったのは、突然のこと。いつものようにドリーの個室に遊びに行った日の事。話をしながらゴミ箱にゴミを投げ込んで遊んでいたら、突然ドリーが倒れてしまった。苦し気に歪められたドリーの顔、身体中に掻いた冷たい汗――そして、患者衣の襟口から垣間見えた金属器具と、その周りに浮かぶ幾何学紋様。

必死に呼びかけ、周囲に助けを呼ぶ。彼女の半生で、あの時程慌て取り乱した時は無かった。そんな彼女に対し、ドリーはなだめるように優しく微笑んで、耳元にそっと囁いた。

「――ね、ほんとの名前、おしえて？」

自分の偽装が気付かれていたことに驚愕するが、ドリーが変わらず浮かべる優しい笑みに、胸を締め付けられた。そうして食蜂は、わずかな間でも共に時間を過ごした大切な『ともだち』にその名前を告げた。

「……食蜂――食蜂、操祈（みさき）よぉ……」

告げられた名前を受け取り、ドリーは一度、は、と短く息を漏らし、

そして、笑った。
「そっか……じゃあね、みさきちゃん」
……ドリーとは、二度と会うことは無かった。
その後、ドリーが収容先で亡くなったと聞かされた。食蜂は研究員がこれまで語ってきた内容、研究自体の目的、その全てに疑問を抱き、予め用意しておいた『仕込み』を使い、研究員全員を洗脳下においた。自身の能力を悪用されない環境は作ることが出来たが、それでもかつて出来たような大切な『ともだち』は、もう二度と出来ることは無かった。……ドリーは、自分の小賢しい能力など打ち破ってくれた、最初で最後の本当の『ともだち』だったから。
◇　◇　◇
紫電が、舞う。
リミッターを外されたことによるＡＲＭＳの強制解放。たちまちドリーの妹の小さな身体は、増大するＡＲＭＳの金属質の肌に覆われていく。全てが渦を巻くように広がり、またその表面から電撃が迸っていた。
全ての変化が終わった後、目の前にある物体に、その場にいる全員が息を呑んだ。
「銀白色の……液体金属？」
彼女が変貌したのは、水銀のような流体を保つ金属。その表面に細かな幾何学模様が浮かんでいるが、それ以外はどこか見覚えがあった。つい数時間前、襲われたとある能力に、余りにもそっくりだったから。その能力者が、警策がふらりとドリーの妹だった液体金属に語り掛けた。
「……ドリー？」
次の瞬間、その声に反応したかのように液体の表面がぷくぷくと泡立った。そうして弾けた泡沫から湧きたつように、全く別の形状へと変化していく。
現れたのは、巨大な銀色のイルカ。表面に電撃を帯電させたそれが、もっとも近かった警策に襲い掛かる。
「あぶなっ！」

無防備だった警策を、横から佐天が掻っ攫う。寸でのところで躱されたイルカは地面に衝突した瞬間、まるで海中に沈んだように形を崩し、再び銀白色の水溜りへと変化した。

「どうなってんだ?!」

「分かるわけないでしょ！　なんで私のクローンのはずの彼女がＡＲＭＳなんて使えるのよ!!」

突然の状況の変化に動揺する上条や御坂が叫ぶが、この場にいる者たちには答えなど出せない。その答えの持ち合わせがあるのは、これを仕込んだ人間だけだった。

『ふーむ、ふむふむ。やはりドリー君の『記憶』と『意識』に引っ張られたか。いやー、非常に興味深い結果だねぇ』

場違いなほど呑気に響いた幻生の声に、全員の敵意が向かう。とは言え、先程まではこちらの声も聞こえていたようなので、全員が現状把握のために声を荒げた。

「アンタ、あの子に一体何したのよ!?」

『最初の待機状態は不定形の液体、そこからイルカ、クマノミ、クリオネ……おお、今度は蝶か？　通常時の素体形成と形状変化は、すべて彼女が体験した『記憶』から行われていると考えるべきか……』

「ちゃんと答えて頂けます?!　お姉様の妹様に一体なにをしたんですの!!」

『んん？　おお、すまんすまん。どうも研究に没頭すると、意識が近視眼的になってしまってのー』

全員がそんな幻生の声に苛立ちを募らせるが、そんな場合でもない。会話の途中でも銀白色の液体金属は絶えず形を変えて襲い掛かってきているのだから。

『君らも大体は分かっておるのではないかね？　その子は超能力者（レベル5）第三位御坂美琴の体細胞クローンであり、同時にＡＲＭＳの移植者でもある。そうなるように『ＡＲＭＳ適正因子』を組み込んであるからね』

「アンタ……！」

『で、そうした理由なんだが……以前キース・グレイ君から、ＡＲＭＳ移植によって本人の持つ能力や資質を引き上げられると聞いていた

もんでな。御坂君の劣化コピーに過ぎない彼女の商品価値を高めるために、彼から提供された新型のＡＲＭＳを移植した』

兵器利用か、実験台か。どちらにせよろくでもない理由で為された実験の結果が、今目の前にある現状という訳だ。

「だったら！　だったら、なんでこの形に……！」

そこで叫びを上げたのは、警策。その声は悲痛な色を湛えていた。それはそうだろう。イルカも、クリオネも、蝶も、彼女には覚えがあったのだから。全部、子供の頃に自分が能力で遊ぶ時、好んで作り出していた対象だった。

ドリーの前で、作って見せていた対象だった。

『ふーむ、この形状になった理由……キース君に聞いた話だと、今回は素体形成に余計な手を加えずに様子を見たいと言っておったし、新型のＡＲＭＳは中の人間の影響が多分に現れると言う話が一番の原因かな』

『……待ちなさい。あなた達、まさか……』

『おお、君がバンダースナッチ君か？　流石に気付いたかね？』

そこで、一息。

『彼女のＡＲＭＳのコアに、ドリー君本人の人格と記憶を焼き付けただけだよ』

幻生がなにを言っているのか、その場の人間はすぐには理解できなかった。理解できたのは、かつてのエグリゴリをよく知るバンダースナッチとユーゴー、そして１０年前に起こった戦いの顛末を二人から詳細に聞かされていた佐天だけ。

『本来、量産化を考えたＡＲＭＳには人工的に調整したＡＩが仕込まれるそうだが、その子のＡＲＭＳはまったく逆の発想で生み出されたものでな……。簡単に言えばあらかじめドリー君に中身が空っぽのＡＲＭＳを移植しておいて、彼女の臨終の際にその人格も記憶もコアへと呑み込むように出来ておったとか。だがそうなると今度は、コアと移植者の間で意思の齟齬が生まれてくる。ソレを極力減らすため

に、ネットワークで記憶を共有しておった妹に移植する運びとなったのだよ』

　オリジナルと呼ばれた四体のＡＲＭＳ。それらにはアリスの欠片とも言うべき意志が宿っており、そのために制御も困難な代物だった。それを克服するため、後に続くアドバンストやモデュレイテッドと呼ばれる種類は、戦闘用に調整したＡＩが組み込んであった。

　しかし最後期に発生したモデュレイテッドＡＲＭＳは、通常の状態ならば高い再生力と戦闘能力を誇るものの、一度完全体に至ってしまえば二度と戻れぬ欠陥品。ただ大規模破壊に使う兵器としてならば問題にもならないだろうが、人間社会で使うには余りに使い勝手の悪い代物となってしまった。その上、性能面で比べても百体近くいてオリジナル一体に勝てない劣化品。性能面から言ってもアドバンストの方がまだ優れているという有様だった。

　キース・グレイは、恐らくモデュレイテッドの余りの性能の悪さに、逆転の発想に至ったのだ。すなわちＡＩではなく人格を、人間（ヒト）の『意志』をＡＲＭＳに組み込もうと。その上でＡＲＭＳと移植者が同調しやすいように、ドリー姉妹を実験台に選んだのだ。記憶も経験も共有する双子。恐らくこれ以上の実験台は、いなかったに違いない。

　ドリー姉妹の現状は分かった。だが、まだ目の前の暴走を止める手段が分からない。歯噛みしつつ攻撃を避け、幻生との会話を引き延ばす。

『これが新型のＡＲＭＳという事は分かったわ！　でもそれならなんで私たちに襲ってくるの！　完全体に覚醒したところで、中身がドリーなら襲う理由なんてないでしょう!?』

『あー、バンダースナッチ君、それは通常の状態ならばと言うのが前提だね。彼女は今現在、コアに強制的に叩き込まれたプログラムで、ワシの管理下にある』

「プログラム……？　って、なんのですか」

『『幻想御手（レベルアッパー）』。君らもよく知っているんじゃないのかね？』

　ようやく合点がいった。つまり目の前の暴走ＡＲＭＳを実質操っているのは、木原幻生本人。ならば彼を探し出すのが現状の打開につ

ながるという事だ。
「御坂さん、どう分担します?!」
「このＡＲＭＳのパワーに対応できるのは佐天さんだけでしょ！　後は同じ能力持ちの警策さんね！　私は、向こう！」
「私もここに残るわぁ。どこにいるかも分からないジジイを探してられないしぃ」
「向こうは以前の木山先生と同じ多才能力（マルチスキル）の可能性がありますわ！　もっともお姉様と私の黄金コンビならば負けるはずもありません！」
「能力相手だっつうんなら、俺も向こうだな。移動は走りになるけど、こんな状況だし急いで見つけねえと」
　簡単にチームを分け、互いに頷く。佐天が飛ばした液体窒素の斬撃に、御坂が電撃を当て、部屋の中心を冷気の煙で覆う。監視カメラからも見えなくなった一瞬で、上条・御坂・白井の三者が部屋から飛び出す。
「それじゃあ、向こうが見つけるまで粘りますか……」
「……まあ、その子の中にドリーがいるっていうんなら、仕方ないか」
「……本当にねぇ」
　佐天・警策・食蜂。それぞれがそれぞれの想いを秘め、目の前のＡＲＭＳへと立ちはだかった。

０４９　策謀―ストラテジー―

　紫電が舞い、銀光が走る。帯電させた電撃を身に纏った銀白色の金属は、ありとあらゆる形をとって襲い掛かった。水溜りからイルカが跳ね、宙を蝶が舞い、足元をクマノミが走り抜ける。そのすべてが常人を昏倒させるか命すら危ぶむ電撃を孕んでいるのだ。彼女をこの場に抑える役割を持った者たちは、完全に防戦一方だった。

「あー、もう！　ちょっと容赦なさすぎじゃない!?　流石に避けるのが疲れてきたー!!」

「ホラ、余計なこと言ってないで、避けなさいよ！　次、来るわよ！」

　主にトゥイードルダム・トゥイードルディの攻撃に晒されているのは、右腕にＡＲＭＳを展開した佐天と警策。『液化人影（リキッドシャドウ）』で生み出した不定形の金属人形まで使って何とか避けている状態だった。ちなみに、同じくこちらに参戦した食蜂はと言うと。

「ハァ――――……ハァ――――……」

　戦闘が始まって三分と保たずに体力が切れ、壁際にもたれて死にかけていた。

「いくらなんでも体力なさすぎよ?!　アナタ何のために残ったのよ!?」

「ま、まあまあ、警策さん。食蜂さんもあの有名なレベル５の一人ですし、私たちには考えもつかないような考えとか狙いがあるんですよ……きっと」

「ハァ――――……余計、な……ハァ――――……フォロー、はぁ……嫌、いよぉ……」

　そんなことを言い合う間にも、攻撃は苛烈さを増す。それでも彼らには反撃することは出来ない。目の前にいるのは、ドリーの妹なのだ。その想いが、戦いたくないと言う意識が、攻撃の手を鈍らせていた。

　その上、佐天はそれだけではない。

（まさか、私の爪で攻撃したら、治らない可能性がある、なんてね……）

先日現れたユーゴー・ギルバートとバンダースナッチの思念体。彼女らと御坂達を引き合わせて仲を取り持った後、自宅に帰った佐天は二人に気になっていた事柄を聞いていた。

自身に移植されたＡＲＭＳのことと、十年前に起こったという四人のオリジナル移植者、つまりは『先輩』たちの事を。

その質問を向けられた二人は、佐天の意識をバンダースナッチに記録されたかつての景色へと誘った。バンダースナッチによって作り出された擬似的なアリスの世界、『不思議の国』の中で佐天は四人の少年の記憶を追体験した。

『魔獣（ジャバウォック）』の移植者、高槻涼。『騎士（ナイト）』の移植者、新宮隼人。『白兎（ホワイトラビット）』の移植者、巴武士。『女王（クイーン・オブ・ハート）』の移植者、久留間恵。四人の少年少女が立ち向かった戦い、そして絶望的な運命を、佐天は全て知った。最後に自分の一代前のバンダースナッチの移植者だった赤木カツミの事も。

そうして得た情報の中で、佐天が恐れたのは、かつて魔獣がその爪に宿していた『ＡＲＭＳ殺し』のこと。バンダースナッチと表裏のように存在する魔獣に宿っていたその力は、ＡＲＭＳですら殺傷しうるものだった。自分の爪にもそんな恐ろしい力が宿っていたらと思うと、怖くて爪で攻撃することが出来なかったのだ。

「（使えるのは、外殻を使った防御と、拳での打撃技のみ、か……）……ホント、縛りプレイにも、程がある、よねッ!!」

振り回した右腕で、向かってきた巨大なシャチを弾き飛ばす。壁に衝突した流体金属はそのまま形を崩して壁に貼り付き、床に滴ってそこからまた機敏に蠢いていた。

「……いやー、こりゃ打つ手なしですねー」

「ホントね。食蜂があの状態じゃ『心理掌握（メンタルアウト）』で動き止めることも出来ないし。さっさとあの妖怪ジジイを倒してくれることを祈るしかないわ」

『液化人影（リキッドシャドウ）』による牽制と、ＡＲＭＳによる打撃。出口の見えない戦いで、それでも二人は自分の『意志』で希望を見出そうとし続けていた。

◇　◇　◇

一方そのころ、佐天たちが戦う実験室の遥か上層では。

「う～～～ん、素晴らしい!!　計測機器に問題が無ければ、あの実験体は常にレベル４前後の電撃を纏っている！　移植前は他の個体に比べても能力が余りに弱く、レベル１が精々だったと言うのに！　ひょひょひょひょひょ！　これはもう、キース君に頼んで更なる追加発注を……!」

一人の科学者が狂喜乱舞していた。彼がいるのは、地下実験室で行われる様々な実験を観測できる『観測室』。全ての元凶である木原幻生は逃げるでもなく、身を隠すでもなく、この一室で送られてくるデータに喜び奇声を上げ続けていた。

木原幻生の戦闘能力は、それほど高くはない。むしろ低いほうだし、この場合敵に見つかれば生死はともかく実験自体中断されるのだから、本来身を隠すのが常識だ。だと言うのに、彼が未だにここにいるのは、単に実験室から送られてくる未知のデータに、彼の科学者としての『好奇心』が抗えなかったと言うだけだった。観測される未知に、未踏の領域に、彼はよだれを垂れ流しながら一つも逃すまいとのめり込んでいた。

……そのため、部屋のすぐ近くに迫っていた二人の少女には、終ぞ気付いていなかった。

「……どうですの、お姉様」

「……確かに、あの部屋に地下の実験室の各種データが送られてる。しかも現在進行形で、観測機器を操作するフィードバックがある。あの部屋に誰かいるのは、間違いないわ」

白井にそう答えて、御坂は廊下の隅に設置されていたＬＡＮのコネクタからケーブルを引き抜いた。二人がここにたどり着いたのは、先程部屋を出る前に聞こえてきた木原幻生の声が、彼女らの様子を正確につかんでいるように感じたため、あの部屋を監視できる部屋を施設の設計図から探し出したのだ。そうしたところ、今廊下の先にある観測室が、最もその条件に適していたので急行することになった。ちなみに御坂はここまで白井のテレポートで飛んできたが、上条は徒歩な

ので少し遅れていた。
「……それじゃ、行くわよ！」
「はいですの、お姉様！」
　互いに油断なく頷きあい、部屋へと迫る。多才能力（マルチスキル）の可能性が高かったので罠を疑い、テレポートを使わずに慎重に歩いて近づく。じり、じり、と廊下を歩き、部屋に近づき、そうしていよいよ扉へと手をかけようとしたところで――
　――二人の身体が、地面へと倒れ込んだ。
「「……ッ!!?!」」
　慌てて起き上がろうとするが、手足に力が入らない。身体が起こせない。頭が回らない。景色が歪み、猛烈なめまいがした。朦朧とする意識の中、突然原因に気付く。
（……息ッ……『呼吸』、がッ……!?）
　肺まで空気を吸い込んだと言うのに、一向に気分が戻らない。むしろ悪化していく景色の歪みに、『空気』こそが原因だと気付いた。リノリウムの床を爪で引っ掻き、何とか体勢を変えようとしていたところ、唐突に部屋の扉が開いた。
「んー、君らはどうも能力ありきで考えるせいか、策謀とか駆け引きとかには疎いところがあるねー。この部屋の入り口と周辺の廊下は、『空力使い（エアロハンド）』の能力で酸素濃度を変えてあったんだよ。ああ、電撃もやめてくれんか。火花一つで全員仲良くお陀仏だから」
　シュコー、と特徴的な呼吸音を立てて酸素マスクごしに会話する幻生を、御坂達は親の仇のように睨みつけた。酸素とは、本来生物にも有害な猛毒である。純度１００％の酸素を吸ってしまえば、どんな生物であろうと身体を形作る細胞がやられて死に絶える。この廊下は、そんな有毒ガスが充満していたのだ。
（ぐ、こ、の……！）
（お、お姉、様……）
　激しい頭痛とめまいに、複雑な演算を必要とするテレポートなどは不可能だし、その上、電撃を飛ばせば激しく燃焼する恐れもある。完全な八方ふさがりだった。

そして、二人の後ろで重いものが倒れるような大きな音が聞こえてきた。朦朧とする視界をなんとか後ろへと巡らせると、右手を前に突き出したまま廊下に倒れ込むツンツン頭の少年の姿があった。

（なん、で……）

「お、『幻想殺し（イマジンブレイカー）』上条当麻君か。君の右手は確かに脅威なんだけどねー、その影響は直接的に存在する異能現象に限定されるだろう？それなら間接的に結果を生じさせればいいだけだ。例えば周囲の気圧や気流だけを操って、間接的に発生させた酸素溜まりには君は干渉できない。君の唯一ともいえる弱点だ。覚えておくといい」

そう気軽に話す幻生は、やがてコツコツと硬質な足音を立てて近づいてくる。何をする気なのか。このまま逃げるつもりなのか。立ち上がりたいのに、三人の身体は棒になったように動かない。

やがて、御坂のすぐ隣にたどり着いた幻生がしゃがみ込み、彼女へと手を伸ばし――。

横合いから割り込んだ、『衝撃波』に吹き飛ばされた。

「ひょーーーーーっ!!?」

間抜けな叫び声を上げて吹き飛んでいく幻生を視界に収めながら、全員がそれを成した人物を注視する。

「『レプリカントＡＲＭＳ』の順調な実験、ご苦労様です。木原博士」

ＡＲＭＳ計画の主導者、キース・グレイがそこにいた。

０５０　魔剣―ソード―

「……っ、ぷはぁっ！」
「はぁ、は……」
「クソ……なんなんだ、一体」
　地面に横たわっていた全員が正常な空気を口にし、何とか人心地ついていた頃、窮地を救ったスーツ姿の少年は、変わらず吹き飛んでいった老人を見据えていた。
　現在のＡＲＭＳ計画を推し進める主導者、キース・グレイ。学園都市にＡＲＭＳ関係の論文を発表していたことといい、この研究所にＡＲＭＳの一つを提供していたことといい、どうにも信用できない人物だ。特にバンダースナッチが宿る佐天と親しい御坂・白井は、目の前の人物を油断なく睨みつけていた。
　もっともグレイはそんな敵意にまみれた視線などどこ吹く風で、やがて聞こえてきたコツコツという硬質な足音に、相好を崩していた。
「あたたた……全く、年寄りは労わらねばイカンと教わらなかったのかね？　いきなり吹き飛ばすことはないだろうに」
「まあ、普通の老人であれば、僕も敬老の精神は持ち合わせていますけどね……脳みそだけ若い肉体に移し替えたどこぞの兵隊や、貴方のように身体中機械尽くめの老人は、老人と扱わないことにしていますので」
「やれやれ……それでここに来たのは、一体どういうつもりかな？」
　話し言葉は気安くとても敵対しているようには見えない。しかし、互いに油断なく一挙手一投足に注視する様は、何よりも雄弁に二人の関係を示していた。
「僕が提供した『レプリカントＡＲＭＳ』が、遂に解放されたでしょう？　何分あれは試作品だったこともあって、その実情を確認しに来たのですよ」
「……『共振』で察知したか。しかしそれだけなら、ワシを吹き飛ばす必要は全くないのではないかね？　他にも何か、意図があるじゃろ

う」

「そうですね……後は、ここの観測機器で観測・収集したレプリカントＡＲＭＳのマスターデータと、施設の廃棄を」

「……」

お互いの間で渦巻いていた不信感が、敵意と殺意にすり替わり始めていた。今、グレイは余りにも軽くこの施設を廃棄すると言ってのけた。それは当然、この施設の所有者であり、実験を執り行ってきた幻生には受け入れがたいことで。

「……そう簡単に、証拠隠滅のために殺されては敵わんなぁ……と」

幻生が呟き軽く右手を上げた途端、指先から光線が奔り、グレイの両脚を凍り付かせた。身動きの取れなくなったのを確認した幻生は薄く笑むと、次はグレイの周辺の空間に意識を集中。虚空に生じさせた形容不能の渦によって、グレイの脇腹を抉り取っていった。

「ひょひょひょひょ。少しばかり油断し過ぎではないかね？　ワシはこんなところで死ぬような人間では――」

「ええ。ゴキブリのようにしぶといのは承知していますよ、もちろん」

「――――！」

抉られた脇腹など頓着せずに返事を返してくる相手に驚愕し、離れようとした幻生を再度の衝撃が襲った。ただの衝撃波では有り得ない、義体技術の結晶である幻生の大脳を直接揺るがすような振動の波に、彼は容易く意識が奪い取られていった。

足元の氷をたやすく砕き、意識の無い幻生に歩み寄ろうとするグレイ。しかし、その袖口にいきなり生じた金属針に、下げていた視界を持ち上げた。

「動かないで下さいまし！　その男は数々の違法研究に関わった疑いがありますわ。あなた共々、身柄は風紀委員（ジャッジメント）で押さえます！」

風紀委員（ジャッジメント）の腕章を掲げ、そう宣言するのは黒子。しかしそれに対し、グレイは少しだけ嘆息するだけだった。

「……はぁ。君ね、幻生を逮捕なんて出来ると思ってる？　これだけ大掛かりの違法研究を行っていて、捕まっていないんだ。上層部に黙認している人間がいるに決まってるじゃないか」

「それでもかまいません。それならそれで、根元まで含めて逮捕し続けるのみです。それが与えられたものじゃない、私（わたくし）の曲げることの出来ない信念ですから」

「……」

グレイは沈黙したまま、ゆっくりと立ち上がった。そうして袖口に刺さったままの金属針を掴み取り、床へと投げ捨てる。その投げ捨てた腕を持ち上げ、白井に向けて突き出した。

「……それならそれで、まずはその能力での戦い方を身に付け給え。空間系能力で戦う時は――」

攻撃を察知し、空間移動（テレポート）で回避しようとする。しかしグレイの攻撃は、その程度で回避できるものではなかった。

「――こうやるんだ」

「がッ……?!」

衝撃の瞬間、白井の身体が異空間から虚空に無理矢理戻され、振動の波で壁際まで吹き飛ばされた。それを見て即座に御坂は電撃を、上条は鉄拳を繰り出す。しかし御坂の電撃は空中をすり抜けて後ろの壁にぶつかっただけであり、目標を失った上条もその場で右往左往するだけだった。

「!?　ああ、もう……！」

「どこいったんだ、アイツ！」

いきなり姿を消したグレイを探し、二人が周囲を見回す。どういう訳か周囲に彼の気配は既に無い。

「以前に会った時もそうだったけど、やっぱり空間系能力者ね、アイツ……でもそれならさっきの衝撃波に説明がつかないけど」

「いえ……説明できますわ、お姉様……」

「白井！　大丈夫なのか!?」

壁を支えに起き上がる白井の姿に、御坂と上条が駆け寄る。ぶんぶんと頭を振り意識をはっきりさせようとしているようだが、大きな怪我もないようだった。

「今の攻撃……空間移動（テレポート）で異空間に移動していた私に問答無用で衝撃を与えましたわ。恐らく空間操作で、周囲の空間そのものに振動を与

え衝撃波を生み出していますの」

「――――そういう事。これなら例えどんな相手でも、防御不能の攻撃が可能になる。武装解除が主な風紀委員（ジャッジメント）で居続けるなら、覚えておくと良い」

白井の言葉を肯定する形で、グレイが再び姿を現す。出てきたのは幻生がさっきまでいた観測室。手にデータスティックを持っているところを見ると、マスターデータの回収は終わったという事だろう。

「……さて、最後にもう一つ、空間系能力者の恐ろしい攻撃を見せてあげよう。先程と同じく空間干渉を使うが、もし先程までとは違い、空間を『振動』させるだけではなく、『断裂』を作り出してぶつけてしまえばどうなるか……」

そう話すグレイの右手に、ＡＲＭＳ特有の紋様が浮かび上がる。同時に共振特有の高音が、廊下の中を満たしていく。

「――――技の名は、『魔剣アンサラー』」

音も光もない斬撃が、施設を縦横無尽に斬り裂いた。足元から響く地響きに最大級の不吉を感じ、破壊の中心点から全速力で離れた。それでも追いつかず、走り抜ける傍から周囲の壁が天井が床がただの瓦礫と化していく。

「う、おぉおおおおおおおおおっ!?」

「マ、ズ……！」

「なんて規模の破壊ですの！」

廊下の端までたどり着く暇もなく、三人と気絶した幻生が支えの無い空中へと投げ出される。咄嗟に御坂が鉄骨を含んだ瓦礫を電磁力でつなぎ合わせ、ワイヤーやケーブルを操って四人の身体を引き寄せた。

「これにて、施設の破棄は完了……だけど覚えておきたまえ、御坂美琴。計画は、いまだ終わってはいない」

「え……」

「『超電磁砲量産計画（レディオノイズ）』から引き継がれた計画名は――――『絶対能力（レベル6）

進化計画（シフト）』。君の新たなる『妹達（シスターズ）』は、今もなおその絶望的な運命の中にいる」

何の支えも無い空中にその身を任せながら、まるで意に介さず薄笑いすら浮かべてそう宣うグレイ。彼の意図はどこにあるのか、その笑みからは依然知ることが出来ない。

「嘘だと思うのなら、これから指定する日時と場所に来るといい。何よりも決定的な『証拠』と会せよう」

そうして、最後に日時と場所を伝え、今度こそキース・グレイは虚空へと去っていった。

０５１　四重奏―カルテット―

ピピッ、と特徴的な電子音が部屋の内部に響いていた。音の発信源は部屋の中央、カプセル型の培養層に入れられたドリーの妹であり、彼女の肢体にはいくつものコードやセンサーがくっ付いていた。

ここは第七学区のカエル顔の先生がいる病院。カプセルに入れられた彼女の容態を確認するために、あの施設の崩壊後ここに身を寄せたのだ。

「――まずは、結論から言おうか」

そう言って顔を上げたのは、木山春生。彼女はあの『幻想御手（レベルアッパー）』事件の責任や、テレスティーナとの一件もあって、情状酌量の余地ありとされ釈放はされたものの、学園都市内で統括理事会から指定された機関で研究に勤しむこととなった。もっとも彼女自身非人道的な実験や統括理事会に関わるつもりは無かった為、カエル顔の医者が身元引受人となって、この病院で医療分野の研究に従事する運びとなった。

……どうして一介の医者の我が儘とも言える要望が、統括理事会にほぼ無条件で受け入れられたのかは疑問が尽きなかったが。

「こちらの機器で確認したところ、彼女の容態は一般的な健康体へと変化している。お前たちが研究所から持ってきたデータを信じるなら、テロメアが極端に短く、何時死んでもおかしくなかったにも関わらず、だ。これは明らかに、移植されていたＡＲＭＳによるものだろうな」

「ソレ、本当？」

「ああ。今後も定期的に健康状態の検査は必要になるものの、問題はないよ。彼女はお前たちと、同じ時間を生きていける」

木山のそんな言葉に問いかけた警策は、心底から安堵した表情を見せた。

あの時、キース・グレイの『魔剣アンサラー』によって倒壊した施設によって、地下にいた佐天・警策・食蜂の三人は圧倒的な質量のコ

ンクリートに押しつぶされるところだった。それを助けたのはＡＲＭＳ解放状態だったドリーの妹で、自分の液状の身体を変化させて、三人全員を覆い尽くす銀色のドームへと変化したのだ。その後、御坂達が上の瓦礫を吹き飛ばして全員を掘り起こしたあと、彼女はまるで糸が切れるかのように意識を失った。

それを見て一番慌て、彼女のそばをひと時も離れなかったのは警策であり、彼女とドリーの間に確かに存在する絆が窺えた。

……そして、もう一人、ドリーとの間に絆を感じる食蜂はと言うと。

「……そろそろこれ、解いてくれないかしらぁ？」

ドリーを見守る検査室の壁際に、両手を後ろ手に縛られ、能力の媒介となるリモコンを取り上げられた状態で転がされていた。

「そう言われても、ね。アンタがいきなり能力を使おうとしなきゃこんなことにはならなかったのよ」

「……ふぅん」

御坂からの指摘にそっぽを向く彼女は、皆を庇って目の前で倒れたドリーの妹に、なんとリモコンを向けて『心理掌握（メンタルアウト）』を行使しようとしたのだ。すんでのところで周り皆が止めに入り事なきを得たが、もう一度同じことをされてはたまらない為、現在能力を使わないよう拘束しているという訳だ。

「で、なんであんなことしたのよ」

「……」

沈黙。彼女はここに至るまで、何度も理由を聞かれているが、一向に答えようとはしない。ずっと視線を逸らし、口を開こうとしないのだ。

痺れを切らした御坂が、更に追及を強めようとしたところ、横合いから違う声が響いた。

『……話してみては、いかがですか？』

食蜂に話しかけたのは、ユーゴー。思えば彼女だけは、食蜂がこんな行動に出た理由を知っていてもおかしくはない。だと言うのに、彼女もまたこの病院に着くまで一言も発せず、まるで食蜂が自ら話すことを待っているかのようだった。

そんな彼女の、全てを見透かし、身体の強張りを溶かすような笑みに、食蜂は一度舌打ちし、ばつが悪そうに語りだした。

「……全部、私が悪いのよぉ」

かつて、食蜂は能力開発のために所属していた施設の中で、ドリーに出会った。最初は自分の能力の向上に努めている研究員からの打診だった。自身の向上に特に寄与しないドリーとの関わりは、当初こそわずらわしさを感じる程度のものであり、特に思うことも無かった。

だから、研究員に指定された『やり方』で、彼女と接することに何の疑問も抱かなかった。

「ドリー（あのコ）に取り付けられた器具を見て、彼女の元を去って行ったっていう『みーちゃん』に成りすましたのよぉ……」

その行いにも、特に思う事は無かった。ドリーの事を見捨てたと言う『みーちゃん』に少し憤りを覚えていたくらいだった。『みーちゃん』に成りきって、食蜂はドリーと接し、まるで以前からの友人であるかのように振る舞った。

けれど、その行動自体が間違いだったとは、最後のそのときまで気付かなかった。

彼女の臨終の時まで、食蜂はドリーと自分自身として向き合う事が出来なかった。他の誰かが築き上げたドリーとの友情に縋って、心地よい嘘に酔った。だからこそ、彼女との別れの時、ドリーが本当は自分が『みーちゃん』ではないことに気付いていたと知った時、どうしようもない程に打ちのめされた。

ドリーと過ごす時間に、誰よりも救われていたのは、食蜂自身だったのだから。

「ごめんなさい……」

救われてしまったから。ドリーと過ごした時間は、何にも代えられない時間だったから。彼女は自分の罪を吐露する。

「心地よい嘘に酔って、ごめんなさい……二人の間に割り込んで、ごめんなさい……そんな資格なんてないのに友達面してて、ごめんなさい……ぜんぶ、全部私が悪いの！　だから、そんな記憶、これからのド

リーにはいらないって、そう思って――――！」

だからこそ、彼女はドリー姉妹から記憶を奪おうとした。ドリー姉妹は優しいと、臨終の時ですら、長年友人のふりをした見知らぬ誰かを許してしまえるほどに優しいと知っていたからこそ、自分のことなど消してしまおうと考えた。

彼女の慟哭を、彼女の懺悔を、その場の全員はただ黙って聞いていた。誰も言葉を発し得なかった。だからそれを止めたのは、この場で唯一彼女を裁く権利のある者だけだった。

『――――――だめだよ、みさきちゃん』

その響いた声に全員が振り向く。部屋の中央、カプセルの中で先程まで意識を失っていたドリーの妹が薄目を開けていた。そのカプセルの周りに食蜂を除く全員が駆け寄る。中でも未だに不安を露わにした警策の青い顔に、ほんの少し彼女が苦笑していた。

「……大丈夫なの？」

『うん、もうだいじょうぶ』

「バカ……心配させて……」

彼女の答えに、警策が思わず潤んだ瞳を拳でゴシゴシ擦った。それを少し微笑みながら見ていた彼女は、今度は食蜂へと向き直った。

『あのね、みさきちゃん……』

「……」

『私達にとって……私とドリーにとって、みーちゃんとみさきちゃんと一緒に過ごした時間だけが、全部だったんだよ』

「……っ！」

『二人と一緒に過ごして、うれしくて、たのしくって……私達二人の、一番大切な思い出（たからもの）。だから、消してほしくないんだ』

「でも……！」

『だから、さ。みさきちゃん。その代わり――』

彼女はカプセルの中で、子供の頃にしか出来ない本当に透明な笑みを浮かべた。

『――うみに、連れてって』

御坂たちがいる検査室の外。少女の治療のため、廊下のベンチで上条当麻はただ待ち続けていた。その耳にわずかに届いた嗚咽の声と、周囲の安堵するような声。

その声たちを聞いて彼は、どこかホッとして缶コーヒーを煽っていた。

０５２　幻像―ドッペルゲンガー―

本日の天気、快晴。体調、極めて良好。されどコンクリートを炙る熱気により、極めて不快。メチャクチャ、不快。

「……あっっづ～～～～……」

燦々と降り注ぐ日光と、コンクリートの輻射熱で、佐天は溶けかけていた。どこか適当な喫茶店にでも入って、ノドごし爽やかなコーラかもしくはメロンフロート、さらに言えばかき氷でも食べたい気分だった。

先日の騒動から数日、本日の日付は８月１５日。佐天は、先日の騒動で得た情報の場所へと向かうべく街を歩いていた。

あれから、各種精密検査のためにカエル顔の先生の病院に収容されたドリーの妹は、身柄の安全が正式に決まるまであの病院で引き取ることとなった。もちろん自身の元で彼女を保護したい食蜂などは反対もしたが、彼女自身統括理事会などの上層部に影響力のあるコネクションを確保しているわけではなく、その辺りもカエル顔の先生が行ってくれることとなった。そのため、反対した食蜂自身はしばらくの間あの病院に頻繁に出入りし、彼女の安全を守ることとなった。

同じく彼女の身柄を心配していた警策については、さらに複雑なことになっていた。何せ彼女、先日の事件よりも以前に学園都市に向けてテロを仕掛けようとした罪で逮捕され、オマケに書類上は収容先の少年院で『病死』している。元犯罪者兼死者という状況で、現在は存在しない人間ということだ。その能力や資質を見込んで幻生にスカウトされた訳だが、その幻生も敗北後捕縛され、今は食蜂保有の施設の中である。

そのため、警策についてもカエル顔の先生が身元引受人になって、病院預かりの『保護観察処分』に出来ないか掛け合うとのことだった。白井が元犯罪者という事でごねるかとも思われたが、「残念ながら、死人を捕まえる規則の類はありませんの」と言って目を瞑ってくれた。

そうそう、ドリー妹の正式な名前も先日ようやく決まった。当初、

御坂美琴の妹であることから、その名前のもじりがたくさん出されたが、それら全てに食蜂が強硬に反対。何でも「ドリーの妹にぃ、御坂さんに似た名前付けるなんてお断りよぉ」だそうだ。

ではどうするかとなった訳だが、意外なことに、採用案を出したのは当の本人だった。自分はドリーの妹だから、それにちなんだ名前が良いというリクエストが出された。そこで、『ドリー（Ｄｏｌｌｙ）』の妹だから、アルファベット順でＤの次のＥを付けて、『エリー（Ｅｌｌｙ）』というのが彼女の名前となった。ちなみに、苗字はまだ決まっていない。『御坂エリー』、『食蜂エリー』、『警策エリー』の三つが出そろった辺りで、病室だけではなく建物そのものが空前絶後の能力バトルで崩壊仕掛けた為、保留と相成った。『エリー』の退院後、病院から遠く離れたどっかの学区で続きが行われることになっている。

そんなわけで先日の騒動については、一部保留もあるものの一応の決着を見たわけだが、新たに持ち上がったのは、キース・グレイが騒動の間に示唆した『御坂美琴のクローン計画が未だに存在し、製造され続けている可能性』である。

（何よりも決定的な『証拠』、か……）

何はともあれ、確認しないことには動きようもない。そのため今回、キース・グレイの真意を確かめるべく動くのは、佐天の他に御坂、上条の三人である。本当は白井も来たがったが、風紀委員（ジャッジメント）１７７支部の方で外せない用事が入っており、指定された日時に赴くのが難しかったのだ。そのため、何かあれば初春経由で連絡を入れ、応援に駆け付ける流れとなっていた。

ところで、確認のために指定場所に行くことになっている佐天たちであるが、どうして佐天だけ一人で現場に向かっているかと言うと――

――単純に、佐天の老婆心のせいだった。

「むふふふふ……それに、し・て・も～♪　向こうは色っぽい展開になってたりするのかな～」

『（……少しばかり悪趣味じゃない？）』

『（あ、あははは……）』

本当は午前中に近くのファミレスに集合して、三人全員で向かうこ

とになっていたのだが、当日になって佐天だけすっぽかした。当然理由は、上条と御坂を二人っきりにするためである。ついでに今日の様子を詳しく聞いて、食蜂にも面白おかしく伝えるつもりであった。上条争奪戦の傍観者だから出来るおせっかいだが、被害を被るであろう上条の事を思うと、バンダースナッチもユーゴーも、苦笑いしか出てこなかった。

「いやいや、これも友人を心配する純粋な親切心だって。あ、二人とも？　合流した時にお互いが気恥ずかしそうにしてても、下手に突っついちゃ駄目だよ？　男女間はデリケートだし、まずは私が言葉巧みに聞き出すから☆」

『（……最悪ね）』

『（……頑張ってください、上条さん、御坂さん……）』

そんな風に脳内会議を展開していると、件の男女の声が通りの反対側から大きく響いて来た。

「――だぁあああああっ!?　また出なかったー!!」

「おい、もうやめとけよ。出ないもんは出ないって」

「……ん？」

やたらと大きな声で――しかも一向に佐天が望んだような色っぽい展開になどなっていないと分かる声で、二人の居場所を察した佐天は、道路を挟んだ反対側に目を凝らしてみた。些か売れなさそうな小売店の目の前に、昔懐かしいガチャガチャの筐体が置いてあった。その筐体の前で、小さな子供たちに混じって一心不乱にガチャガチャを回し続ける某名門お嬢様中学の二年生と、それを諫めようとする少しばかり情けない高校生の姿が。

「……なにやってんですか」

二人の視認から、状況の把握までしばらくかかった。ついでに状況を把握してから、向こう側に近づこうとする足にやたらと重い倦怠感も伴ったが、とにもかくにも事態の収拾のため、道路を横断して二人に近づく。その辺りで先にこちらを視認した上条に、期待されるような視線を向けられたが、おかげで肩まで重くなった。

はぁ、と一度嘆息して、意を決して声をかけようとすると、先んじ

て御坂の声が辺りに響いた。
「当たったぁぁぁあああああああぁぁぁ!!」
御坂が天に掲げたのは、緑色の缶バッジ。翼が生えたカエルのデフォルメキャラ――御坂御用達の『ゲコ太』によく似たキャラが描かれた缶バッジだった。
「やった、やったぁぁぁ……あ」
感涙に咽び泣いていた彼女がふと顔を上げると、そこには待ち合わせをしていた友人の姿。途端に御坂の顔が、鮮やかな朱に染まる。
「ち、ちがっ、違うのよ?! これは、そう！ これは、子供たちに出してあげてただけで!!」
その後御坂は終始慌てふためいていたが、たくさん出してしまった缶バッジを周りの子供たちに分け与えてその場はお開きとなった。もちろんカエルの缶バッジだけは、御坂のポケットの中である。
「全くいい大人が、あんなムキになってどうすんだよ」
「だから違うって言ってんでしょ!? ホラ！ いいから向かうわよ!!」
「はは、そうですね。向かいましょう御坂さん」
未だに真っ赤な御坂をなだめつつ、指定された場所へと向かう。時間としては、もうそろそろ。場所はこの先の何の変哲もない道路の真ん中だ。
「それにしても……こんな普通の道路で?」
「まあ指定されたのは確かにそこだ。けど、証拠っていったい何なんだろうな」
「馬鹿ねぇ、アンタ。グレイ(アイツ)は証拠に『会わせる』って言ったのよ。だから、もしかしたら――――」
そこで、不意に御坂の言葉が途切れた。不審に思って佐天と上条が彼女へと振り返ると、彼女は驚愕の表情で固まっていた。そのまま視線を真っ直ぐに前方へと向け、突然走り出した。
「え!? 御坂さん！」
「おい、どうした!?」
驚いて二人もまた御坂を追いかける。狭い路地を一本抜け、夕暮れ

時、太陽の中に立ち尽くす御坂の背中に追いついた。その肩に手をかけ、話しかけようとした時、前方にいるそれに気付いた。

夕暮れの傾いた太陽の中、街路樹の横にその少女は立っていた。その少女は、仕立ての良いサマーカーディガンと、茶色のミニスカートを組み合わせた制服を身に纏っていた。その少女は、およそ少女に似つかわしくない機能的でごついフォルムのゴーグルを付けていた。その少女は、普段彼らが目にしている少女と同じ顔で、しかし一度も見たことが無い機械的で静謐な表情を浮かべていた。

その少女は、御坂美琴とまるで同じ顔かたちをしているのだった。

時刻は、薄暮。『逢魔が時』。古来より『魔が差す』と伝わる時刻に、学園都市の闇の結実は、こうして佐天たちの前に姿を現したのだ。

０５３　命名―ネーミング―

その場に集う誰一人、声が出なかった。目の前にいる少女は、確かに御坂美琴のクローンの一人なのだろう。その容姿、その体格、どこを取っても同一人物と見紛うほどだったのだ。

沈黙を破り、重苦しい空気を払拭すべく、ごくりと喉を鳴らした上条が口を開いた。

「……間違いないな。コイツもビリビリのクローンか。なんか本人より美人な感じもするけど」

「待ちなさい。アンタ、待ちなさいよ、コラ？　どこをどう見たら、私よりこのコの方が美人とか見える訳？　どっからどう見ても同じ容姿でしょうが。違いなんかないでしょうが。それともアンタには妹キャラが問答無用で姉より美人に見える補正でもかかってるのか、オラ？」

「ちょ、待て、御坂！　ビリビリいってる、ビリビリいってる！　いや、そういう意味じゃなくて、なんか見た感じ本人と違って清楚な感じがして、がさつな印象がないなぁ、とかぁぁぁぁぁぁあああああああああぁぁぁぁぁ?!」

真横で繰り広げられる御坂（トム）と上条（ジェリー）のいつもの電撃追いかけっこを無視して、佐天は目の前の少女を注視する。確かに見た目は横にいる御坂とうり二つだ。しかし、それ以上に、エリーよりも完成されたクローンなのであろうと、佐天に確信させる要素があった。

（確かに、この娘から、御坂さんと同じ電気の感じがするんだよね……）

そう、彼女は御坂と同じ『電撃使い（エレクトロマスター）』の能力を秘めている。それも御坂が普段無意識に発している『電波』と極めて近いものを纏って。エリーもその能力は持ってはいたが、目の前の彼女はより御坂のソレに近づいた印象があるのだ。

ふと、彼女がその小さな口を開いた。思わずその場にいた三人が身構える。エリーと違って正面からの遭遇だし、この後どう接すればい

いのか、全員が全員こんな経験値など積んではいない。だからこそ、彼女の言葉に思わず身構えてしまったのだが――。

「ミャ――――――」

第一声は、日本語ですらなかった。

全員彼女の言動に面食らいながらも接触を試みる。詳しく聞けば、子猫が木に登ったまま降りられなくなったとのこと。とにかく降ろすために助力を、と言われたのだが。

「って、今、そういう状況じゃないでしょうが！　アンタ、ホラ、アレでしょ。私のクローンなんでしょ!?」

「――お姉様は、あの生物が地面に叩きつけられても構わないと？　その結果生命活動に甚大な傷害が発生しても構わないと仰るのですね」

（うわあ……）

上条の言う通り、妹に突っかかるがさつな姉と、清楚で落ち着きのある妹の図が出来上がっていた。その辺りには深く触れないことにして、いよいよ枝からずり落ち始めた子猫救出のために動くことになった。街路樹にもそれなりの高さがあるので、最初は誰かが台になって手を伸ばすことも考えたが、ここにいるのは一名を除いて年頃の中学女子。そうそうスカートの中が見えることはしたくない。そのため、結論は一つだった。

「……まさか、この年齢になって、木登りとは」

「うっさいわね、そんなことより早く登んなさいよ」

「ファイトです、上条さん」

「ミャーと鳴く生物、先程よりさらに５ｍｍ程傾きました。このままでは地面に叩きつけられるまで間が無いものと思われます」

唯一の男子だった上条が街路樹によじ登り、枝から子猫を確保。その後地面に降りることにした。

「っ、よっ、と……ん、届かねえな……っと、お――――……」

しかし、彼女らは間違えていた。今木に登っているのは、自他とも

に認める不幸な少年で。
「ん――――と――――――――――おわっ?!」
そのくせ、女性関係の運勢だけは、振り切れていそうな少年だった。
子猫を支えていた細い枝は、新たに体重をかけた上条を支え切ることは無く、中途でポキリと折れた。とっさに伸ばしていた右手で子猫の小さな体躯を抱え、地面に叩きつけられることが無いように身体の上になるように抱え込む。
……結果として、真下にいた御坂との激突は避け得ない状態となった。
「ぐぁッ！　むぐっ!?」
「――――!?――――――!!」
「お姉様と男性の血圧・体温上昇。果たして生物は大丈夫なのでしょうか。とミサカは問いかけます」
「うわぁぁぁ……」
佐天はその状態を見て、思わず目を覆った。枝が折れてしまったことで、激突までは、まあ予想が出来た。しかし、目の前の状況は、どうすればこうなるのか、一切予想が出来ないことだった。二人で激突する際に、片方が暴れたのか両方かは知らないが、とにかく手足がもつれた状態となっていた。しかもどんな落ち方をしたのか、上条の顔は御坂のスカートの中にあって、猫を抱えていない左手は、しっかり御坂のささやかな胸部を鷲掴みにしている。御坂の太腿は上条の顔を挟んで逃がさないようにしているようにも見えるし、上条はアゴを使って巧みに御坂がスカート内に履いていた短パンをずり下げているようにも見えるし、もうどうなってこうなったのか、てんで分からない。
とりあえず、今は。さっと上条の手から黒い毛色の子猫を奪い去り、クローンの子と一緒に一気に距離を取る。
「――――――!!!」
「あんぎゃぁぁあああぁぁぁ!!?」
極大の雷撃から逃げるのが、何より最優先だった。
「ハァ――――ハァ――――、それでアンタは、私のクローンってこと

でいいのよね？」
「（ガフガフガジガジ）はい、その通りです、お姉様」
「……アイス、食べ終わってからでいいわよ」
　足元で右手以外黒焦げのカタマリと化した男子高校生を無視しつつ、御坂が尋ねる。その間中彼女は、佐天が奢ったアイスに懸命に齧り付いていた。とりあえずコーンはともかく、アイス本体は齧るのではなく舐めるものだと教えるべきだろうか？あっという間に食べ終わり、今はアイスに含まれるミルクがどうの、コーンがどうのと論評をぶち上げる彼女を見ると、次第に佐天も御坂も毒気が抜かれていった。
　その内、なおも追及する御坂に対して、長ったらしいアルファベットと数字を認証コードとして聞いてきたが、佐天にはとても覚えきれなかった。なので、先程から気になっていたことを聞いてみる。
「そーいえば、さ。御坂さんの妹さんの名前はなんていうの？」
「私の認識名称、という意味でしょうかとミサカは聞き返します。このミサカの認証は個体番号（ナンバー）で行われており、ミサカの番号は９９８２号ですとミサカは返答します」
「!!」
「……」
　９９８２号。それはつまり彼女と同じクローンが少なくとも９００人以上いるということだ。もう彼女こそがキース・グレイの告げた確たる証拠で間違いなかった。だけどその内心の動揺を、目の前の彼女には悟られたくない。そのため表情を見るからに歪めている御坂を横目に、全く別のことを口にした。
「んー、でも番号そのままっていうのは、なんかなー。よし！　ここはひとつ、私が付けてあげるよ!!」
「……え。いえ、ミサカには必要ありませんとミサカは――」
「遠慮しないの!!　ん～～、そうだな～～、御坂さんの妹だから……」
　少しばかり大仰に悩み、ぽんと手を打って彼女に名前を贈った。
「よーし！　君の名前は、今日から『ミコ』ちゃんだ!!　はい、決定！」

御坂の妹、御坂ミコとの、これが本当の初めての出会いだった。

◇　◇　◇

「はぁ～～～、お姉様は今頃大丈夫でしょうか……」

風紀委員（ジャッジメント）１７７支部で、白井は報告書作成のために座っていた端末の前に突っ伏していた。

「大丈夫ですか、白井さん？」

「あんまり大丈夫じゃありませんの……大体、なんでこんなに未確認情報が多いんですの？　裏取りから報告書の作成まで、一苦労ですの」

初春が持ってきたカフェオレに口をつけ、今までまとめた報告書を見返す。そこに記されていたのは、最近第七学区を中心に起こる謎の騒音や閃光についての通報の報告書だった。中には爆発音や銃声らしきものも混じっているとのことで、現場検証にも行ってみたが、全て空振り。何一つ痕跡は見つかっていなかった。

「ん～～、でも最近人目につかない路地が騒がしいのは事実かも。私も外に出た時に、爆発音くらいなら聞いたことがあるんだよ」

「私も。ある」

１７７支部備え付けの茶菓子をつまんでいた、インデックスと姫神もまた頷く。当たり前のようにいて茶菓子を消費していく二人に白井が頭痛を堪えていたところ、端末からメールの受信を知らせる電子音が鳴った。

「あら？　差出人は――――――『灰（gray）』？」

０５４　感想―インプレッション―

「――よし、こんなもんね」

それまで目の前の彼女に跪いていた御坂が、体勢を起こした。そうして改めて先程までとは様変わりした『妹』を見つめる。

佐天によって名付けられた御坂ミコは、御坂本人との見分けを付けるため、とりあえず手元にあった小物で差異を付けることになった。その頭には変わらず軍用のゴツいゴーグルが付けられているが、それとは別に佐天が持っていた予備のヘアピンをこめかみのすぐ横に差している。雪の結晶を象ったソレは、彼女の静謐な表情も相まって程よいアクセントとなっていた。またそれとは別に、御坂が先程ガチャガチャで獲得した羽根付きのカエルの缶バッジも腰のところに付けたため、遠目でも御坂と見分けがつくようになった。

……ただ。

「いやいや、ねーだろ。と、ミサカはお姉様（オリジナル）の幼稚趣味に戦慄を露わにします」

「な、なんだとう!!」

姉妹仲は、著しく悪くなった気がするが。

「しっかし、どうすんだ、これから？　本当に一万人単位で姉妹がいるんなら、一日二日じゃ終わらないぜ？」

「どうしましょうかね……」

姉妹で仲良く喧嘩している御坂とミコを視界に収めつつ、上条が佐天へと話しかける。ミコが言っていた個体番号は『９９８２号』。単純に姉だけでも９０００人はいるという事だ。全員保護しようにも当てなどありはしない。

「仮にアイツに、『生まれ故郷を潰すから、施設に案内してくれ』なんて話したとしても素直に案内してくれるか分からねえし……それに首謀者が誰なのかすら分からないしな」

もし仮に、彼女を作った『計画者』がいるのなら、突き止めて叩き潰せば済む話だ。けれど一万人単位で人間のクローンを作り上げる

となると、大規模な組織が関わっていることが考えられる。一人二人潰しても、焼け石に水だろう。

戦うべきだと分かっているのに、戦うべき『敵』が見えない。此処にいる三人の間には、言いようのない不安がこみ上げていた。

不安を紛らわせるためか、それとも本気で妹相手にムキになっていたのか不明な御坂は、地べたに寝転がって呼吸を整えていた。

「ハァ――ハァ――……話、変わるんだけど。アンタ今から、私たちをアンタが生み出された研究機関に連れていきなさいよ。勝手にヒトの妹を大量生産するなんて、叩き潰してやるから」

「……」

御坂の急な要求に、ミコは答えずに御坂の表情を無感情に見つめ続けた。御坂はあえてその視線を避けずに、真っ向から受け止める。

「……申し訳ありませんが、それは出来ない相談です。と、ミサカは謝意を表します」

「ッ、なんでよ！」

「先程ミサカが提示したコードについても、お姉様は反応を示されませんでした。そのためお姉様は、『計画』に無関係な状況にあると判断いたします。『計画』に無関係な人員を巻き込むことは許されておりません。と、ミサカは状況を説明します」

「『計画』とかどんなモンだか知らないけど、関係ないって言ってんのよ！　私がその『計画』も叩き潰して、アンタ達を自由にしてやるんだから!!」

その御坂の言葉を聞いても、ミコの表情に変化はない。ただ、ほんの少しだけ、その瞳が揺れたようにも見えた。

「……お姉様もそうですが、そちらの長髪の御友人の方も、どうして私に名前を与え、ヘアピンや缶バッジを与えてくれるのでしょう？」

と、ミサカは疑問を口にします」

本気で分からない、とミコは首を傾げていた。その邪気のない言動に、思わず御坂は溜息を漏らす。佐天の表情にも苦笑が浮かんでいた。

「……妹だからに、決まってんでしょうが」

「ミコちゃんは御坂さんの妹で、私の親友候補だからね！」
二人の返答に、それでもミコは首を傾げる。いや、むしろさらに困惑したようだった。
「ですがミサカは、お姉様のクローンであり、ボタン一つでその身を形作ることが――」
「あー、もー、生まれがどうとか関係ないでしょ？　ミコちゃんは、今この場で私が名付けて、御坂さんが缶バッジをあげた、目の前にいる一人しかいないんだから。姉妹が何万人いたってそれは変わらないって」
そう言ってニコッとした笑みを浮かべてくる佐天に、ミコの困惑は極まったようだった。怪訝に眉を顰めつつ、再び佐天にその心中を尋ねようとして。
「――そこまでだ」
突如として現れた、背広姿の十歳前後の少年によって、その疑問は永遠に失われた。
「これは……」
突然切り替わった風景に、ミコは空間系能力の行使を察した。そして、その能力者が目の前の少年であろうとも。
「……先程の邂逅は、実験に支障をきたす可能性ありと上層部が判断。急きょ君を引き離すようにと、天井研究員からの命令だ。まあ、協力者であるところの僕も、その判断には従わざるを得なくてね」
「……」
「僕の目的からすれば、もう少し彼らと一緒にいてくれても問題はないんだが。上の判断だ。予定を変更して、君はここから実験場所に向かってくれ」
「……了解しました」
キース・グレイが手に持っていた大型のキャリーケースを受け取る。一見すると楽器のケースにも見えるが、その実その中身は、それとは似ても似つかない凶悪な兵器だ。

ケースを手に取り、キース・グレイから歩いて離れてしばらく、彼から挙動が見えない角を曲がったところで、ミコが不意に立ち止まった。そうして上げた視線、顔を向けたのは、多数のビルに阻まれて見えはしない更にその先。自分と同じ電磁波を発生させるお姉様（オリジナル）と、御友人（さてん）がいた方角。

「――――アイス、美味しかったです。と、ミサ――――……いえ、『ミコ』は聞こえないと知りつつ、感想を呟きます」

◇　◇　◇

「……は？」

突然ミコがかき消えた空間を見つめ、上条は間抜けた声を上げた。

「今のって……？！」

「キース・グレイ!?」

御坂も佐天も、状況が全く分からない。今回、ミコとの邂逅を果たせたのは、キース・グレイの情報によるものだ。だと言うのにそのキースが、どうしてミコを連れ去るのか。

思わず止まっていた彼らを動かしたのは、御坂の携帯から鳴り響いた着信音だった。慌てて御坂がそれを手に取り、着信が風紀委員（ジャッジメント）の後輩からだと知る。

「黒子、どうしたの？　そっちの仕事は終わ――」

『それどころじゃありませんの、お姉様!!　妹様の一大事ですわ!!』

御坂の問いを、白井の大声が遮った。思わず端末から耳を放しつつ、その場の全員が白井の声音から尋常ならざる事態を察する。端末の通話をハンズフリーにしつつ、三人全員でその端末を囲むように近づいた。

「落ち着いて、黒子。とりあえず皆もいるから、そっちで分かったことを順を追って説明して」

『先程風紀委員（ジャッジメント）177支部あてに、『灰（gray）』を名乗る人物から、一通のメールが届きましたの！　そこに添付されていた資料によれば――』

続いた白井の言葉に、その場にいた三人全員は一様に絶句した。

『妹様は――――……たった一人を『絶対能力（レベル6）』に進化させるために、二万人を虐殺するという、悪魔の計画を実行するためだけに作り出さ

れた実験体ですわ』

０５５　喪失―ロスト―

カツ、コツ、と硬質な音を立てて、少女は路地を歩いていた。表通りとは違い、建物と建物の隙間を縫うように存在する路地には何者も近づけない。空高くから人々を柔らかく照らす月明かりも、最先端の科学の街で未だ息づく人々の良心でさえも。

カツ、と不意に足音が止まる。足音の主であった少女が、路地の先に目的の人物を見つけたからだ。

「――これより、第９９８２号実験を開始します。準備はよろしいですか、とミサカは確認を取ります」

少女の呼びかけには答えず、薄暗く闇が凝った路地の中にあって、なお病的な純白を保った少年は、口元を三日月の形に引き裂いた。

◇　◇　◇

『送られてきた資料が正しければ、そもそもの発端は、学園都市に存在する『超能力者（レベル５）』が『絶対能力（レベル６）』に届きうるか、『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』で演算を行ったことですわ』

その場にいた全員が、足を早め先程まで一緒にいたミコの行方を追う。その間にも音量を大きくした携帯端末から流れる白井の言葉を聞き逃さないよう注意していた。

『演算の結果、『絶対能力（レベル６）』に届きうるのはたった一名のみであると判明。通常の実験では能力の向上まで２５０年はかかるその人物に、超能力者（レベル５）第三位、御坂美琴お姉様との戦闘を１２８回用意。用意された戦場に１２８回投入して……お姉様を１２８回、殺害すれば進化（シフト）するという演算が出たそうですわ』

端末ごしの白井の口調に苦渋が混じる。それだけ彼女は御坂を慕い、想っているという証拠だろう。しかし、白井が知ってしまった真実には、未だ続きがあった。

『……ですが、お姉様と同様の『超能力者（レベル５）』を１２８人も用意するのは、ほぼ不可能です。そこで演算を行った科学者たちは、凍結予定だった『量産型能力者計画（レディオノイズ）』に目を付けたのですわ』

再演算の結果、『超電磁砲（レールガン）』の劣化コピーと言える彼女らでも、想定

された異なる戦場で、『二万回』の戦闘を行えば『超能力者（レベル5）』に届かせ得ると判明。そのためこれらの演算を行った科学者たちは、直ちにその狂った計画を実行に移したのだ――。

『現在に至るまで、実に……９９８１回の実験が繰り返されていますわ。それら実験の敵役として製造された妹様は、その実験の回数だけ、『処分』されたものと……』

走り続ける御坂の口元から、バキリと固い音が鳴った。噛み締めすぎた奥歯が軋り、口の中に鉄臭い味が広がる。これは、自分がしたこと。かつて自分が提供してしまった遺伝子情報によって、産み落とされた妹達が、地獄のような実験のただ中にいる。許せるものではなかった。

そんな彼女の横で、奇妙に静かな少女がいた。佐天涙子。明るく天真爛漫で、情に厚い彼女にしては意外なほど冷静に、白井へと問いかけた。

「――白井さん、それで次の実験場所は、この先で合ってるんですね」

尋ねる彼女らの行く先に見えてきたのは、周辺の区画に比べれば少しばかりくたびれたビル群。開発計画の狭間にあって、再建が遅れているビルの間に位置する路地が彼女らの目的地だ。

『え、ええ。メールが正しければ、その位置だと――』

「わかりました」

短く告げられた佐天の言葉と共に、周辺に特徴的な高音が鳴り響く。途端に隣を走っていた御坂が、突如として現れた電磁波に顔をしかめる。上条が驚きに目を瞠ると、そこには頬に幾何学的な紋様を浮かび上がらせた佐天の姿があった。

「ふッ！」

気合と共に、一気にスピードを上げ、並走していた二人を置き去りにする。目的地は言うまでもなく、実験場所の路地。

「おい?!」

「佐天さん！」

二人の制止も一切聞かず、佐天は一足先に路地へとたどり着いた。しかしそこは静まり返っており、とても戦闘を伴う実験が行われてい

るようには見えない。
「……」
訝しみながらも、今度は慎重に周囲の異常を逃さないようゆっくりと進んでいく。やがて路地を曲がった先で、そのつま先にコツ、と固い物が当たった。視線を下げた先、彼女が見つけたのは、先程までミコが頭に付けていた筈の砕けたバイザーだった。
「……!!」
予感が全身に奔り、右腕を瞬時に変形させ、真上のビルの壁面を掴む。伸長させた腕を急速に元に戻し、彼女は一気にビルの屋上へと躍り上がった。そのまま周囲の風景に目を凝らす。
「ちょっと、佐天さん、急ぎ過ぎよ！」
電磁力で屋上まで登って来た御坂が追従する。それには反応せず、変わらず周囲の風景にのみ注視する。
――そうして、遠くで上がる爆炎に気が付いた。
◇　◇　◇
――これで……。
ミコは、爆発の中へと消えた実験対象に、僅かに安堵した。実験対象の能力は妹達（シスターズ）には知らされていないが、これまでの戦闘経験から周囲にバリアのような特定の力場を作り出すものと判断した。そのため、地雷を仕掛けた貨物置場へと誘いこみ、逆転の一手としたのだ。大地に足をついて移動している以上、足の裏までは能力が発動していない。それで対象は沈黙する。
――そのはずだったのだ。
「――残念（ざんねん）」
煙の中から現れた実験対象に足を掴まれ、容易く組み伏せられた。そのまま握り締められた太ももから、ブチブチと筋繊維が千切れる音が聞こえてくる。
「手前ェの推測は、何から何まで的外れなんだよォ！」
「――――――!!」
太ももの中間で無造作に引き千切られた左足が、まるでマネキンの手足のように放り捨てられた。痛みに歪む視界を必死になって対象

に合わせ、渾身の電撃を飛ばす。
「?!　――――!!」
　電撃が自分の身体へと帰り、視界も意識も一瞬飛びそうになる。明滅する意識の中、目の前を安っぽい金属で出来た丸い缶バッジが横切った。
「――――あ、――――――――――――う――――」
　まるで力の入らない身体を地面に投げ出し、ミコは身体中の痛みで辛うじて意識を保っていた。もはや焼けるようだという表現でも足りない、圧倒的な痛みと喪失感に支配された左足。電撃で焼かれた全身の痛み。それでも彼女はわずかに残る力を振り絞って、緩慢な視界を手繰り必死になってソレを探した。
　ずり、ずり、とミコは血の跡を残しながら地面を這いずっていく。やがて地面に落ちていたソレを掴むと、ゆっくりと自分の髪に刺さっていたもう一つのものも抜き出した。
　御坂からもらった缶バッジは、地面に転がったことで僅かにへこみが見られた。佐天からもらったヘアピンは、雪の結晶を象った装飾が僅かに焦げ臭かった。それでもミコは、その二つの贈り物を、大切そうに、大事そうに、ぎゅっと胸の前に抱え込んだ。
（――ああ、そうか。と、ミコは確信を持ちます……）
　次第に彼女の周りには、影が濃くなっていく。それはまるで彼女の運命を象徴するかのようだった。
「これが、『愛おしい』という感情なのですね、と、ミコは――――」
　彼女の呟きは、轟音と共に降り注いだ巨大な貨物車両によって遮られた。その音に何の感慨も抱かなかった実験対象であって『純白』の能力者は、自身が産み出した惨劇には目もくれず明後日の方向へと歩いていく。
「今日の実験、終了オ――――。こんなんで本当に『絶対能力（レベル6）』に成れンのかね……あ？」
　歩き出した彼の足を止めたのは、目の前に大量に降り注いだ電撃と、突然貨物をいくつも斬り飛ばした凍てつく斬撃の雨だった。視線を攻撃の元へと向けると、其処には先程の対戦相手と同じ顔で雄叫び

を上げて突っ込んでくる少女と、もう一人誰かいた。
見たこともない少女だった。長い黒髪を風に任せ、降り注ぐ月の光の中を、一直線に突っ込んでくる。その少女の頬には見たことも無い幾何学的な紋様が浮き出ており、口からは乱杭歯も見て取れた。
（――力が……！）
その少女、佐天は内なる声に今こそ声を大にして応えた。
（力が、欲しい!!）

０５６　無敵―インビンシブル―

「う――――あぁあああああああああああ!!」

雄叫びを上げ、二人の少女が色素を抜いたような少年に襲い掛かった。辺りはたちまち、紫電が舞い斬撃が飛び交う戦場と化したが、それでもその中心の少年はまるで他人事のように呟いた。

「何だァ？　抜き打ちで早速、次の実験かァ？」

あまりにも軽く言いながら、たん、と軽くステップをつく。それだけで彼の身体は不自然なほど高く浮き上がり、人間の身長以上の高さがあるコンテナの上へと飛び乗った。

「逃げるなぁ！」

白抜きの少年を囲うように、周囲がたちまち帯電し、四方八方から電撃が突き刺さった。だと言うのに、少年には変化が見られない。その衣服は相変わらず焦げ跡一つ無い新品同様のままだ。

「オイオイ。電撃の類は、今までの実験で見飽きてンぜェ？」

あくまでも小馬鹿にしたような口調。それを見て御坂の頭に血が昇る。その軽い口調が、仕草が、何もかもが。たった今、目の前で生命を断たれた『あの娘』の全てを、否定しているように感じた。

そして、全く同じ思いを、もう一人の少女も抱いていた。

「お前ぇぇえええぇぇぇ！」

「お？」

白抜きの少年がふと顔を上げると、空から四条の斬撃が降って来た。まるで瀑布のような攻撃。どんな能力者であったとしても、回避も防御も不可能なはずの一撃だった。

それでも、所詮は圧縮した液体窒素でしか無く、ただの『物理現象』の攻撃では、目の前の少年には届かない。

「な――――」

確実に相手を捉えていた筈の斬撃が、いきなり四散した。相手が撃ち落としたのではなく、少年に当たった瞬間に、嘘のようにその方向を変え、辺りに飛び散ったのだ。飛散した斬撃によって足元のコンテ

ナが細切れになり、少年は重力に従って地面へと降りた。
「離れてて、佐天さん!!」
少年が地面に降りると同時に、御坂が自らの足元から真っ黒な竜巻を発生させる。自身の電磁力で土中の砂跌を操り、高速振動であらゆるものを斬り裂く竜巻だ。その凶器の塊のような竜巻を、御坂は迷うことなく白抜きの少年へと向かわせる。少年は何をすることもなく、黒い竜巻に呑み込まれた。
「――――!!」
竜巻に覆い尽くされた空間に、更なる追い打ちを仕掛ける。近くにあった金属製のレールを引き寄せ、電磁力で砲弾として飛来させた。
申し分のない攻撃。この攻撃ならば相手がどんな能力者であれ、無傷では済まないだろう、と二人は希望を抱いた。
「――――面白ェ使い方すンなァ」
希望は、竜巻の中の白いヒトガタの絶望が打ち砕いた。声を聞いた瞬間、佐天の背筋に言いようのない悪寒が奔る。とっさに、御坂のすぐ前に着地し、御坂を立っていた場所から押し出した。
ごん、と重い音を立てて、飛ばしたレールの鉄骨が弾かれた。鉄骨はそれを飛ばした御坂の方へと集中的に飛来し、地面に倒れた御坂の頭上をかすめていく。
「ぐ――――!!」
飛んできた鉄骨の一本が、容赦なく佐天の脇腹を抉り、突き刺さった。如何にＡＲＭＳを持つ佐天といえど不意の衝撃には耐えられず、まるで車に轢かれたように後ろへと吹き飛んだ。
「佐天さん!」
吹き飛んでいった彼女を見て、地面から起き上がり、咄嗟に追いかけようとする。白抜きの少年に、背を向け。そんなことを、少年は決して許さなかった。
「――――オイ、何処行く気なンだ?」
暴風のように吹き荒れた重圧が、御坂の足を強制的に縫い留める。ぎしり、とぎこちない動きしかしなくなった関節が、どうしようもなく彼女を苛んだ。

「何か、おかしいと思ってたらよォ……オマエ、オリジナルかァ」
ぎし、ぎし、と動かなくなった首をブリキ人形のように回し、少年の方を振り向く。重圧で狭まる視界の中、御坂は少年の口元に引き裂くような三日月の笑みを見た。
「いいねェ、クローン（アイツラ）どもは、所詮テメェの代用品だって話だし……よくわからねェ能力者のツレもいるみてェだし……テメェをこの場でブッ殺せば、この退屈な実験も少しは早く終わンじゃねェかァ?!」
哄笑を浮かべ、足元に大規模なひび割れを生じさせる。それだけで大地から、とんでもない規模の飛礫の津波が発生した。間違いない。ここに至って御坂は確信した。目の前の少年は、学園都市の第一位だと。自分と同じ超能力者（レベル5）の位階にして、頂点に君臨する少年だ。
その能力名は、『一方通行（アクセラレータ）』。誰もその名を知らない、最強の能力者の呼び名。物理現象を、事象を操る能力の頂点。
迫りくる飛礫の津波に、御坂は動かない足を引きずるように後退った。勝てない。噂が真実なら目の前の相手は、核爆弾でも生存可能と言われる慮外の化け物だ。その事実が、怒りを超えてしまった『恐怖』が、何より彼女の足を縛り付けていた。

『――――『絶望』するには早いぞ、御坂美琴』

突如として目の前に半透明の巨体が降り立ち、飛礫の津波をその獰猛な爪で一息に引き裂いた。
「へェ……見た事ねェが、ますます面白そうじゃねェか……」
『一方通行（アクセラレータ）』の顔に、興味の色が浮かぶ。御坂の前に降り立ったのは、バンダースナッチ、その本来の姿。先程の佐天の負傷によって、強制的に覚醒した『滅び』そのもの。
『……』
バンダースナッチは、その視界の中に白い少年を収め、何も語らない。しかし、その内心は他人には計り知れない激情が渦巻いていた。網膜に焼き付くのは、重い車体に押しつぶされる寸前の少女の姿。足をもがれ理不尽に生命を奪われる、一人の子供の姿。その姿が、その

死に様が――。

アリスの『きょうだい』を、思い起こさせた。

『……愚かなる能力者よ。全能を気取る憐れな小人よ！　耳あらば聞け、目あらば見よ！　我こそは真の最強、無敵の存在！　我は滅びの体現にして、絶望より生まれし神獣！　我が名は、バンダースナッチなり!!』

バンダースナッチの咆哮が、大気を震わせる。それを受けてなお、一方通行（アクセラレータ）は笑みを崩さなかった。

「……面白ェ。テメェが『無敵』だって言うンならよォ！　テメェを倒して、俺が新たな『無敵』になってやンよォ!!」

地面に更なるひび割れを発生させ、一方通行（アクセラレータ）が砲弾と化した。地面に衝撃を発生させたと言うのに、まるで物理法則を無視して、一直線にバンダースナッチへと突っ込んでくる。空中で、無造作に、槍のように、何者も抗えぬ凶器と化した両手を伸ばしてくる。

それを視界に収めながら、バンダースナッチもまた笑んだ。

『バカめ!!』

突如としてバンダースナッチの爪が、一方通行（アクセラレータ）のほんのわずかに上、何もない空中を引き裂いた。何もないはずの空間。虚空。そのはずなのに、何故か横で見ていた御坂には、空間を引き裂いた爪痕が、はっきりと見えていた。

ビキリ、と大きな音を立てて、何か巨大な気配が霧散した。

「……あン？」

空中を突き進んでいた筈の一方通行（アクセラレータ）が、どういう訳か何事もなく地面に着地していた。攻撃が終わったのではなく、まるで突進の力そのものを破壊されたように。少しだけ呆然とする彼の右手を、バンダースナッチの左手が『直に』掴んだ。

『これで――』

空に高々と掲げたバンダースナッチの右腕から、バキバキと音が鳴り響く。爪はさらに長大化し、腕にもありとあらゆる所にも、宿る絶大な『力』が感じ取れた。

『――終わりだ!!』

その終焉の『爪』は、天高くから無慈悲に振り下ろされ――――

「そういうわけには、いかないな？」

横合いから割り込んだブロンドの長髪を束ねた少年によって、中断された。

０５７　暗雲―ダーククラウド―

その瞬間を、後ろから見ていた御坂美琴には正しく認識出来なかった。彼女が感じたのは、自身が常に周囲に張り巡らせている電波の探知網が、突如としてまるで空間ごと捻じ曲げられたように歪んだこと。そして次の瞬間には、人よりも一回りは大きい『何か』が、その空間の捻じ曲がりに跳ね飛ばされるように自分の頭上を高速で通過していったことだけを感じ取った。

『ガァアアアアアアアアッ?!』

衝撃による咆哮、コンテナにぶつかったことによる轟音、衝突で発生した土煙が、全て遅れてやって来た。ことここに至って、御坂が正気を取り戻した。振り返るとコンテナの中に純白の躯体が見える。あと一歩のところまで迫ったバンダースナッチが、突然の横槍によって吹き飛ばされたのだと理解した。

「――――まだ実験は継続中だよ。こんな中途半端なところで終了させられないな」

その静かな声に再び振り向く。すると一方通行の手前に、金髪の少年が姿を現していた。金の長髪を後ろで束ねた少年、現在のＡＲＭＳ計画の主導者、キース・グレイ。

「……何ンだ、テメェ？」

戦いに水を差された一方通行が、警戒心をむき出しにして尋ねる。そんな問いをキース・グレイはあくまで柔らかく笑みを浮かべて受け流した。

「本実験の協力者で、空間移動能力者でもあるキース・グレイだ。次の実験場所と時刻に少し変更が出たため、君に直接伝えるように言われている」

そう言って、懐から端末を取り出し、絶対座標と新たな時間を表示させる。それを確認し、一方通行は一度溜息を吐いた後、再び目の前の少年を見据えた。

「ソイツはご苦労なこったな……けどな、今はあの訳のわからねェ敵

と戦ってた最中なンだよ。そっちの邪魔しやがったことは、どうしてくれンだ？」

敵意を全開に、一方通行（アクセラレータ）は少年へと話す。あるいは突如として自分の知覚範囲に現れた目の前の少年とも戦いたかったのかも知れない。それでもあくまでキース・グレイは、そんな敵意すらも受け流した。

「……ここで『超電磁砲（レールガン）』と戦うのは、実験の演算結果に多大な影響を与えかねない。それはあの白い怪物も同様だ。まさか君が負けるとは思わないが、再演算ということになってしまえば『絶対能力（レベル6）』に届かない可能性も出てくる。それは君も我々も望まないだろう？」

そう柔らかく笑みを浮かべる少年を、しばらく睨みつけていたが、やがて興を削がれたのか、一度舌打ちをして少年に背を向けた。

「……後始末は、任せンぜ」

「了解した。彼女らに任せよう」

不意にキース・グレイが御坂へと視線を向ける。いや、正確にはその後方へと。それに気づき、御坂が振り向くとそこには、何人、いや何十人もの御坂のクローンが出現していた。

「――――――」

御坂の喉から、音にもならない叫びが這い上がって来た。目の前の少女たちは、かつて自分の犯したただ一度の間違いによって生まれてしまった現実（つみ）。形を持った自身の罪業を、突き付けられた思いだった。

一方通行（アクセラレータ）がふわりと余りにも不自然な挙動で浮かび上がる。遠ざかる彼の背中をしばらく眺めた後、不意にキース・グレイが御坂へと振り向き、情報端末を投げ渡した。

「……消し去れると思うなら、やってみると良い。君自身がかつて犯した罪だ。好きにしたまえ」

「……！」

言葉を最後に、キース・グレイも去る。辺りにはしばらく片付け作業を行う、妹達（シスターズ）の作業音だけが響いていた。

そして、そんな現場に、ようやく白井と上条がたどり着いた。

「こりゃ……！」

「何があったんですの!?」

彼らの目の前に広がるのは、著しい破壊の跡。ひしゃげた車両とその下に広がる夥しい血痕。瓦礫と化したコンテナ群の中で気を失った佐天。それらを片付けようと黙々と作業を進める御坂美琴と同じ顔の少女たち。

……そして、そんな喧騒の中に、御坂美琴本人の姿だけは、終ぞ確認することが出来なかった。

◇　◇　◇

現場から去ったキース・グレイは、その肩に遺体収容袋（ボディバッグ）を抱え、空間移動をこまめに繰り返していた。今も空中に漂うであろう学園都市の滞空回線（アンダーライン）の監視網から逃れるためだ。

いくつもの空間を飛び越え、キース・グレイはとある廃棄された研究施設を訪れていた。その施設は元々大きな製薬会社が利用していた施設ではあったが、現在は施設自体を破棄されており、一部を除いてアンチスキルのたまり場となっていた。

キース・グレイは、アンチスキルがその施設を違法に利用するだけでなく、ご丁寧に水や電気などのインフラも整えてくれていたところに目をつけ、そこに便乗することにしていた。かつての研究施設の中でもとりわけ厳重に隔離された場所、空中に漂うナノマシンすらも遮断できる場所を探し、現在は使用されていない生物災害（バイオハザード）用の地下研究施設を当面のアジトとしていた。

稼働していないエレベーターシャフトを一瞥し、空間座標を演算して直接地下へと降りていく。空間移動（テレポート）から元の次元に復帰した時、そこには先客がいた。

「……遅かったわね」

そこにいたのは、高校のブレザーの上に白衣を纏ったギョロ目の少女。彼女の名は、布束砥信。長点上機学園の生徒にして、学習装置（テスタメント）の研究者。かつて『超電磁砲量産計画（レディオノイズ）』に関わっていた少女だ。

「……それで首尾は？」

「ああ。この通りさ」

そう言ってキース・グレイが肩に担いだ遺体収容袋（ボディバッグ）を床に置き、その口を開ける。そこにいたのは、陶磁器のように白く土気色の肌をした御坂ミコの『遺体』。それを見て中から漂う血臭に一瞬顔をしかめた布束だったが、すぐに表情を戻し、彼女の口元へと手をやり――――

――――弱弱しくはあるが、確かに未だ続く御坂ミコの呼吸を確認した。

「……Ｓｏｏｎ，奥の培養カプセルに入れてちょうだい。両脚が太腿から完全に消失してるし、治療するにもこれ以上血液などの内容物が漏れ出したら助けられるものも助けられないわ」

「わかった。両脚喪失に関する彼女の精神的ケアは任せていいかな？」

「ええ」

キース・グレイの問いに布束は短く答え、そのまま御坂ミコの身体を培養カプセルに運び入れるのを手伝う。最後に飛び散った血で汚れてしまった彼女の頬を一撫でし、カプセルの蓋を閉じた。

「それにしても……どういうつもりであんな行動を？」

「？　どういうつもり、というのは？」

「Ｓｏ……　私が貴方と共に行動しているのは、『妹達（シスターズ）』を助けるためよ。それなのに、盗聴器で聞いていた範囲ではあるけれど、貴方全く逆の行動をしたじゃない」

布束は元々、妹達（シスターズ）の皆を一個の人間として見てしまったがゆえに実験を離れた人間だ。何とか自身に出来る範囲で実験を妨害しようと私財を投げうち、マネーカードをばら撒いてもみた。それでも止められずどうしようかと迷っているうちに、キース・グレイが接触を図って来たのだ。

彼が提示したのは、対等の取引。すなわち彼に協力する代わりに、実験を途中で中止させるというもの。だと言うのに、彼は今回中止の

絶好の機会を棒に振った。あろうことか実験を行う一方通行（アクセラレータ）側に協力したのだ。

「大体、ここを出発する時点では、御坂美琴（オリジナル）達に実験へ介入させ、そのまま中止に追い込むって言っていたじゃない。一体どういうつもりか、説明を――――」

そこまで述べたところで、布束は言葉を切った。目の前のキース・グレイがこれまで見たことも無い表情をしていたからだ。それはまるで、自分の言動の矛盾に初めて気が付いて驚愕しているかのようだった。

「……あー、いや……そうだ。現時点で実験を中止するのは、それなりにリスクを伴う。それはあまり、得策ではない。なに、いずれ必ず実験は中止させるし、その間に可能な限り妹達（シスターズ）も救う。実験終了後の彼女らのケアも当然行う。この施設を見てもらえれば分かるだろう？」

そう言って少し大げさに手を振り回す彼の周りへと、視線を移す。そこにはたった今御坂ミコを収容したカプセルと同じものがいくつも置かれ、その中に彼女と同じ容姿を持つ少女たちが一様に眠り続けていた。

「……そうね。これまでの実験で処分されるはずだった一桁から９００番台の妹達（シスターズ）約１００人。あくまで蘇生処置が間に合ったコたちだけだけど。これだけ救っているところを見なければ、信じられなかったわね」

「いや、君の懸念はもっともだ。だけどこちらも実験の中止と並行して、僕が生涯をかけて取り組んできた『計画』の完成がかかっている。そのあたりの調整もあるんだ。察してほしい」

そう言ってキース・グレイは、布束から視線を外す。しかし、布束はそんな彼を見て、不安を消すことが出来なかった。それは果たして、彼が矛盾した行動をとったが故か。これまで散々学園都市の底すら知れない闇に触れてきたが故か。それとも――。

「……なぜ、僕は……泣いているんだ……」

――それとも、キース・グレイ（かれ）のそんな呟きと、その眼から流

れ続ける涙を見たが故か。

０５８　半分―ハーフ―

あの夜、コンテナ置き場で起きた事件について、風紀委員（ジャッジメント）１７７支部に翌日集合した面々は、その場に居合わせた佐天に詳しい状況を訊くことが出来た。けれど、その面々の中に、御坂の姿はどこにも無かった。

「……御坂さん、どこに行ったんでしょう」

「携帯にも、出ませんわ」

「それ以前に電源自体入れてないみたいなんですよね。携帯の現在位置を探れないかと、警備員（アンチスキル）のネットと警備システムに少し入ってみたんですけど、ぜんぜん追えなくって」

「いやそれ『少し』なんてレベルの話じゃねえだろ」

「むー、科学側の言葉は色々難しすぎなんだよ」

「……。打つ手なし」

全員が額を寄せ合い、意見を出し合うが、現状御坂を探す方法は皆無と言っても良い。しかも連れ去られたというのではなく、本人が自ら痕跡を消しているのだから、追う方法は一切無いと言っても良かった。

「……仕方ありません。私が警ら活動の傍ら、街中で聞き込みを進めますわ。お姉様の行方が分かりましたらすぐに」

「大変よ、白井さん！　初春さん！」

白井がとにかく動こうと席を立つと同時、風紀委員（ジャッジメント）の同僚である固法先輩が部屋へと駈け込んで来た。周囲にこの支部の所属で無い者がたくさんいると言うのに、今日は咎めるそぶりも無い。

「どうしたんですの？　固法先輩」

「そんなに慌てて……何かあったんですか？」

「慌てもするわよ！　隣の学区の製薬会社が運営する研究施設で、大規模な爆発があったの。詳細は分からないけど、事故の類ではなく能力者の襲撃によるものではないかと言われているわ。その上――」

そこで固法は一度、言葉を切った。口ごもったまま周囲を見渡し、言葉を整理するように視線を彷徨わせる。そして、一度大きく息をつ

くと、その言葉を述べた。
「その上……目撃者の証言によれば、襲撃者は『少女』。電気系統が最もひどく損傷していることから、大能力者（レベル4）以上の電撃使い（エレクトロマスター）が犯人なんじゃないか、って言われているわ……」
固法の言葉に、その場の全員が絶句した。
◇　◇　◇
固法の報せから、事態は一変した。そこから相次いで様々な研究施設や会社建屋への襲撃事件が起こるようになり、一連の容疑者は高位の電撃使い（エレクトロマスター）であるとされるようになった。当然、風紀委員（ジャッジメント）としても事態を静観するわけにもいかず、容疑者確保に向けて目撃者への聞き込みや証拠の採取・調査に動こうとした。
ところが、どの事件現場に行っても現場は完全封鎖されて満足な調査が出来ず、また研究員など目撃者への聞き込みも全て断られるという徹底ぶりだった。おまけに佐天が知り合いの黄泉川の方に連絡を取り、警備員（アンチスキル）側の捜査状況を確認しようともしたが、そちらも統括理事会からの物言いがつき、捜査出来ていないとのことだった。まもなく風紀委員（ジャッジメント）本部にも同様の連絡が入り、捜査は完全に打ち切りとなってしまった。
「……間違いないわね。今回の襲撃犯は、御坂さん。そして襲われている研究施設は、国際法違反の人間のクローンなんてものを製造していた最悪の施設群ということよ」
「……やはり、固法先輩もそう思われますか」
机の上に組んだ両手の上に、固法の額がぶつかる。彼女としても頭の痛い事態だろう。ことここに至って、白井たちも事態の全てを同じ支部の先輩である固法に隠し通すことは出来なくなった。そのため今回の経緯について、以前グレイが送り付けてきた資料の内容で捕捉しつつ説明することとなったのだ。
「でも、今のままだと解決策はほとんどないわ。肝心の御坂さんは見つからないし、その違法な研究施設を先に押さえようにも、上層部からの圧力でそれも不可能。今回の圧力を誰がかけたのか、と言う線から追って行く方法もあるけど……」

「恐らくそれが分かる頃には、お姉様が全ての研究施設を廃墟に変えていることでしょうね」

そうなのだ。一連の事件に納得がいっても、解決はまるでしていない。御坂は今回の計画に関与した全ての研究施設を破壊するまで止まらないだろうし、止めてしまえば妹達（シスターズ）は皆殺しの目に遭う。そんな残酷な運命は、佐天たちにとっても一切許容できない事柄だった。

八方ふさがりの現状。それを打ち破るように、初春が普段使う端末から、メールの受信を知らせる電子音が鳴り響いた。塞ぎこんだ気分を紛らわすように初春が立ち上がり、何の気なしにその内容を確認する。途端に、目の前に光明が差し込んだ。

「白井さん！　このメール見てください!!」

送られてきたメールに記されていたのは、今まで襲撃された研究施設同様、今回の計画に関係した研究施設の所在。施設の内部構造や、警備の人員・機械の配備状況。詳細な情報を彼らに提供した差出人は、やはり暗躍しているであろう『灰（gray）』の文字。

「どうする……？」

上条が問いかけるのは、仕方のないことでもあった。恐らく差出人の意図としては、佐天たちまでもが施設の破壊に動くであろうことを見越してのものだ。かと言ってここで学園都市内の施設を大規模に破壊してしまえば、今度は自分たちが追われる側の犯罪者だ。まだ中学生の彼女たちにそれは、余りに過酷な現実だろう。

もっとも上条としては、ここで尻込みしてくれた方が非常に有り難いのも事実だった。この施設群に向かって御坂だけでも連れ戻せば、その後自分一人で施設をどうにか破壊したとしても、彼女らに責任が問われることは無いのだから。

ただ、彼女らにとって上条の問い掛けは、『愚問』以外の何物でも無かった。

「当然！　お姉様の確保と、違法な研究施設での証拠保全と、施設の排除に向かいますわ」

「いや、保全は難しそうですよ？　ここは一つ、こんなふざけた計画を考えた奴らに対し、上層部含めて可能な限り損害を負わせる方向で

！」

「初春も結構黒いよね……まあ、二度と再利用できないようにしつつ証拠も保全するってことなら、氷漬けにすれば何とかなるかな？」

「えー、佐天なら全部瓦礫にしちゃう方が早いんだよ」

「うん。それは。言える」

全員が全員、友人との再会と、決して許せない相手に対して全力で抗うために動いている。これでは止まらないだろうと思い、上条は少しだけ溜息を漏らした。気炎を上げる彼女らを目にし、同じく年長者の立場で彼女らを見ていた固法は不意に立ち上がった。

「悪いけど、私はそういう訳にはいかないわね。一連の襲撃犯を追うのは風紀委員（ジャッジメント）の職務だし、これから圧力をかけた上層部を調査しなきゃならないもの。――ああ、そうそう。私が上層部の調査に当たっている間、この支部には監督する人間は誰もいなくなる訳だけど、端末とか資料とか勝手に使っちゃ駄目よ？」

固法はそれだけ言い置くと、そのまま振り返らずに支部を出ていった。事実上の黙認。その場に残った全員が、止めないでいてくれた固法に深く感謝した。

「では！　そうなると、やることは多いですわ。今回の施設への『立ち入り調査』には、何よりもスピードが要求されます。『調査』に赴くのは空間移動（テレポート）で一気に移動できる私と、研究員と施設の保全に高い適性を持つ佐天さんが良いでしょう」

「分かりました。潜入と撤退は白井さんですね？」

「それなら、情報処理とバックアップは任せてください。二人に危ないものなんて、一切近づけさせません！」

「おい、俺だって行くぞ。中学生の女子に全部頼るなんて、高校生男子としては情けなくなりますことよ？」

「殿方がいると空間移動（テレポート）出来なくなりますから、却下ですわ。それに私が運べるのは、せいぜい二人が限度です。お姉様を万一見つけたとして、連れ帰れなくなる可能性は極力避けたいんですの」

そう言われると、上条はぐうの音も出ない。その右手の効果のせいで空間移動（テレポート）出来ない上条は、今回は完全に足手纏いだ。

「上条さんたちは、今回の事件の発端となった『絶対能力進化計画（レベル6シフト）』の資料や各研究施設の内情などを全て読み込んでおいてください。完全記憶能力持ちのインデックスがいれば見落としが避けられますし、今後この計画を根絶するには施設の破壊の他にも手段が必要になってくるかも知れません。お願いできますか？」

初春の申し出に、上条、インデックス、そして姫神が首肯する。御坂を見つけられたとしても、計画そのものを止める代案が無ければ、恐らく彼女は止まらない。三人もまた今できる最大で、事件に協力するのだった。

◇　◇　◇

場所は移り、学園都市内に存在する高級ホテルのスイートルーム。高級感漂う内装の一室にて、ベッドの上にTシャツに短パンのまま寝転がった御坂が目を開けた。

あのコンテナ置き場での事件の後、彼女は寮にも帰らず、グレイにもたらされた情報の施設を片っ端から破壊して回っていた。白井たちが知ったのはあくまで氷山の一角に過ぎない。そうして限界まで能力を使い、動けなくなる直前にとりあえずの拠点に選んだホテルに帰り着き、仮眠をとったのだ。

「……体力、能力とも何とか回復……もうすぐ夜だから、ここからが本番……」

本当は彼女も仮眠など取りたくはなかった。一刻も早く自分の妹達をこんな馬鹿げた計画から解放してやりたかった。しかし昼間に動き過ぎたのか、どの施設も警備が厳重になり始めており、やむなく人目に付かない夜まで仮眠をとることにしたのだ。

そうして、床に投げ捨ててあった野球帽で簡単に変装すると、すぐさまホテルを駆け出し次の標的（ターゲット）へと向かうことにした。

（……私、馬鹿なこと、してるかな）

これだけやってしまえば、自分は今後学園都市からは完全に追われる身だろう。常盤台に戻ることも、みんなの所に戻ることも出来なくなるだろう。それは、分かっていた。分かっていて、それでも御坂は、こんな残酷な計画（うんめい）を許せなかったのだ。

「（全部終わった後、黒子にでも捕まるなら私は――）――……ぅん？」

全力で走っていた彼女は、不意に違和感を感じた。自分の進行方向で、いきなり街の一角の街灯が一斉に消えたのだ。それもちょうど、自分が向かっていた施設がある辺りを中心にして。不審に思い、そこからは見つかる可能性を出来る限り排除して、監視カメラや警備ロボを一つ一つ混乱させながら進んでいった。

目的の施設を目の前に収め、ようやく彼女は何が起きたのかを悟った。

「これ……」

眼前の施設は、真っ白な霜に覆われていた。真夏だというのに、全く溶ける様子もなく、完全に凍り付いている。それだけでもおかしいと言うのに、施設の壁はなにかの『獣』に引き裂かれたような巨大な『爪痕』がいくつも残っていた。それほどの惨事だと言うのに、内部の研究員と思しき者たちは大した怪我もなく、身一つで車両に乗り込んで逃げ始めていた。

「……」

ここに至って、彼女は襲撃を始めてから一切顧みなかったゲコ太形の携帯の電源を入れた。着信の留守番電話は確認せず、直近のメールを確認する。最新のメールは三件。差出人は、白井、初春、佐天の三人。

送られてきたメールに記されていたのは、皆のそれぞれの言葉で、簡素だけれど確かに気持ちを届ける文章。

『私たちも協力しますわ!!』

『水臭いですよ、御坂さん』

『一人で抱え込まないでください。みんなで半分こです』

「……黒子。初春さん。佐天さん。みんな……」

路地の暗がりの中、御坂は携帯の画面を覗き込み、蹲る。しばらくの間、彼女の携帯には、ぽつ、ぽつ、と温かい雨が降り注いでいた。

◇　◇　◇

しかし、施設と計画の破壊を目論む彼女らを、学園都市の『闇』は決して許そうとはしない。

「研究施設の連続襲撃犯の迎撃ねぇ……」
刃のように鋭い視線の少女に率いられた、四人の少女たちが。
「まぁ、ブッ潰せばいいってことだな？」
ホスト風の茶髪の少年に率いられた少年少女が。
「こんな短期間に、あちこちで喧嘩するとはスゲェ気合だな！　どんだけ気合入った奴なのか、会ってみてえな！」
日章旗みたいな服装の少年が。間もなく彼女らの前に現れる。

０５９　降臨―アドヴェント―

「――んー、結局待ちぼうけするしかないってわけよねー」

一人天井を見上げ、呆としていた少女が何の前置き無しに呟いた。

その少女の外見は、黄色人種には決して有り得ない白い肌と、見事なブロンドの髪から日本人ではないと一目で分かる。その服装も非常にフェミニンなもので、紅いベレー帽にブレザー、美脚をこれでもかと際立たせるミニのスカートと、彼女の魅力を一際高める代物だった。

そんな彼女がいるのは、どういうわけかぬいぐるみが降り積もった小山の上。そのぬいぐるみもすべて目と口をボタンと縫い目で表現された少女の姿で、なぜここまで同じぬいぐるみを揃えたのか、初めて見た者には理解が出来ないだろう。それらのぬいぐるみが、初見の相手を確実にあの世に送る『爆弾』だとは、悟ることも出来ないように。

彼女の名は、フレンダ＝セイヴェルン。学園都市の裏組織、『暗部』の一つである『アイテム』に所属する構成員の一人だった。

『……まあ、超暇を持て余しているのは、こちらも同じですが。もう少し真面目にしてはどうです？　今回はこちらも、戦力半減せざるを得ない訳ですから』

「それよ、それ！　何で私らが襲われるって分かってる施設を同時に二つも防衛しなきゃならないワケ?!　片方他の『暗部』にやらせろっつーの！」

彼女が傍らの通信機で話している少女の名は、絹旗最愛（きぬはたさいあい）。彼女と同じ『アイテム』に所属する構成員の一人だ。手筈通りならば、彼女もまた襲撃予測地点のもう一つの研究施設で待機中である。

彼女ら二人が、今回別れて行動している理由は、今回彼女らが受けた任務の内容による。その任務とは、『次の襲撃予測地点と考えられる二か所の研究施設を防衛せよ』というもの。襲撃は同時に起こる可能性が高く、その上どちらも研究内容の重要度はほぼ同じという話から、こうして戦力を分散する羽目になったのだ。

それと言うのも、今回の襲撃犯は分からないことが多すぎるせいだった。最初の方の連続襲撃犯は、高位の電撃使い（エレクトロマスター）の少年だという話だった。当初通報時は少女という話も出たが、後に解析された施設付近の監視カメラの映像から、『少女にしては胸がペッタンコである』という理由から、少年に改められた。

ところがどういう訳か、途中から襲撃犯がもう一組増えたのだ。目撃者の話からすると、こちらは中学生くらいの少女の二人組。片方は空間移動能力者（テレポーター）。そしてもう一人は、腕が有り得ないほど肥大化し、建物一つ凍結できるほどの優れた氷結系の能力者とのことだった。

この二組の襲撃犯にどんなつながりがあるのかは知らないが、まず間違いなく情報を共有しているのは確実であり、まるで手分けするかのように、決して重複することなく手際よく襲撃しているのだ。そのため、今回襲撃予測地点の二か所を同時に分散して防衛することになってしまった。

フレンダにしてみれば、面倒くさいことこの上もない。『アイテム』は基本、一つの仕事を共同で行うことを想定されたチームだ。それをわざわざ分散するなんて、仕事持ってきた奴は何も考えてないんじゃないか、と真剣に思う。そんな戦力の逐次投入みたいなことするなら、片方は他の『暗部』にでも回せと愚痴をこぼしたくなった。

もちろん彼女も、自身の戦闘能力は『暗部』でも上位であると自負しているし、この程度の任務なら自分一人でも充分だとは思っている。それでも待機任務は、暇である。こんなことならどこぞのファミレスでお茶していたかった。こんな『ぬいぐるみを詰め込んだだけの機械室』なんてカビ臭いところには一秒だっていたくない。そんな愚痴をぐだぐだと連ね始めたところで――。

バツン、と外部供給の電源が何の前触れもなく落ちた。

「――！　結局日頃の行いが良い奴が、勝つってワケよ!!」

『む？　あー、電撃使い（エレクトロマスター）がそっち行きましたか。二人組の方なら、フレンダは超逃げ回るしかなかった訳ですが』

「氷結持ちとか、爆弾使いには無理！　電子回路も火薬も雷管も、皆一緒くたに凍らせる奴にどうやって戦えっての！」

『まあ、おかげでフレンダでも対応可能な相手ですが……フレンダ。貴女、麦野が言い出した『撃墜ボーナス』超狙ってますね』

「あったり、前でしょ！　結局世の中お金なワケよ！　お金があればファミレスのパフェも、缶詰のサバの水煮も食べ放題なワケよ！」

『そこで市販のサバ缶が出てくる辺り、フレンダの超貧相な食生活に涙が出そうですが。いずれにせよ倒すんなら、手早くですよ。麦野も電撃使い（エレクトロマスター）の方と戦いたがってましたし』

「りょーかい！　まあでも、噂の『第三位』じゃないんだし、大丈夫でしょ！」

……数十分後、彼女（フレンダ）はこの時の自分の思考を思い切り後悔する羽目になる。

◇　◇　◇

時間は少し遡り、場所はフレンダが待ち受けていた施設とは別の場所。

「えー、時刻はフタマルサンマル。こちらチャーリー。ブラボー応答願いまーす」

『いや、なんなのいきなり……』

『佐天さん、この間洋画の特殊工作員もの見たって言ってましたっけ……』

「そもそも暗号名（コードネーム）を決めた覚えすらありませんわ」

路地の暗がりで息を潜めるのは、佐天と白井。携帯越しに御坂や初春とも連絡を取りながら、今夜襲撃する予定の研究施設の様子を窺っていた。

「いや、場を和ますウィットに富んだジョークじゃない？　ずっと肩肘張ってたら疲れちゃいますって。ほら笑顔笑顔！」

『……』

そんなある意味場にそぐわない佐天の軽い口調に、眉を顰める者はいない。この場にいる白井も、携帯の向こうの御坂も初春たちも内心分かっていた。佐天が無理をして笑っていることくらい。ミコと名付けた妹達（シスターズ）を目の前で奪われたことで、彼女が心底から悲しんでいたことくらい。けれど、この会話には御坂も参加している。佐天と同

じくらい、あるいはそれ以上悲しんだ人間がいる。だからこそ、佐天（かのじょ）は必要以上にお道化て見せているのだ。

「ほーら！　これが終われば、自由になった妹達（シスターズ）も誘ってＢＢＱパーティーする予定なんですから！　もう少しですよ、ファイト！」

『それって、『この戦争が終わったら、俺結婚するんだ……』って奴ですか？』

「思い切り死亡フラグですわね。縁起でもない」

『……』

いつも通りの風景。佐天がふざけ、初春がツッコミ、白井がたしなめる。あえていつもと同じ雰囲気を出している彼女らに、御坂は心が温かくなるのを感じた。

『……ありがとう』

御坂のそんな小さなお礼。その言葉に佐天と白井も一度口元を緩ませると、再び研究施設を見据え唇をきつく噛み締めた。

「それじゃ、そろそろ……」

『うん……』

「ええ……初春！」

『はい、白井さん！　第十三次突入作戦開始です！』

数百メートル離れた場所で、研究施設の照明と監視カメラの電源が一斉に落ちた頃、こちらでも二人の突入作戦が開始した。

視界が一瞬で切り替わり、再び目に入ったのは清潔感溢れる白色のリノリウム。白井の空間移動（テレポート）で一気に施設内へと移動したのだ。

二人の姿に気付いた研究員たちが、途端に騒ぎ出す。

「おい、あの野球帽被った奴らは……！」

「噂の襲撃犯か!?」

「ッ、全員重要資料の回収急げ！　資料の纏めが終わったらすぐにも――」

騒ぎ立てる周囲に構わず、揃いの黒い野球帽で変装した佐天が右腕のＡＲＭＳを解放。そのまま研究員の頭上数センチに、斬撃をぶち込んだ。

「ヒィッ……！」

斬撃が起こした轟風と、壁が砕ける衝撃音が響き渡り、重要資料を回収しようとしていた研究員たちは、皆金縛りにあったように動かなくなった。そんな彼らの様子を見て、二人がニッコリと笑い語り掛ける。

「お前たち資料持たない。置いたまま逃げる。オーケイ?」

「なんでカタコトですの。まあいいですわ。どうしても資料を持ったまま逃げたいと仰るのでしたら、この研究施設ごと氷漬けにして警備員(アンチスキル)に引き渡しますわよ。お分かり?」

凶暴な笑みを見せる二人に、元々戦闘員でも無い彼らは絶望的な顔で首を縦に振る。そのまま取るものもとりあえず、全員が彼女らの侵入した正面玄関ではなく裏手の通用口から逃走し始めた。研究員たちがある程度逃げるのを数分待って、行動を開始する。

「さて、これで施設を凍らせながら進むだけですね」

「ええ。こちらは問題なさそうですが、未だ今回の計画主導者が何もしてこないのが気になります。お姉様が心配ですし、早々に施設の凍結と破棄を終わらせて、向こうに――」

そう二人で、会話している時だった。

「オイ、遊びに来たのにもう帰るのかよ?」

聞いたことのない男の声が周囲に響いた。次の瞬間、佐天が斬撃を叩き込んでも罅が入るだけだったコンクリート製の壁が、粉々に砕けた。辺り一面に重量感あるコンクリートの破片が飛び散る中、一緒に吹き飛んできた十二歳前後の少女が床へと四肢を投げ出す。

「~~~ッ!　ああ、もう!　超聞いてないですよ!!」

痛みに顔をしかめるも、額から滴る赤い滴に目もくれず、少女は吹き飛んできた壁の方を睨みつける。少女の視線を追って佐天たちも壁の方を向いた。

そこにいたのは、何の変哲もない茶髪の一人の少年だった。どこかホストのような遊び慣れた印象を受ける少年だが、夜の街やファッションが多様な街にでもいればそこまで違和感を覚えないだろうそ

んな少年。むしろ顔立ちについては、イケメンの部類に入るだろうそんな少年。

異様だったのは、少年の背中だった。そこには人間が決して持ちえない器官があった。『空へと羽搏く』ためにかつての人々が追い求めた器官。科学万能の現代ですら、宗教画や空想の世界で必ず目にする機会のある器官。

そこには、いくつも折り重なった白い『翼』があった。

「……学園都市の頂点、超能力者（レベル5）第二位、垣根帝督（かきねていとく）だ。観念しな、白塗りのバケモン」

七人の超能力者（レベル5）の第二位に座する者、『未元物質（ダークマター）』の垣根帝督は、さながら天の御使いのように戦場へと降り立った

……そして、今まさに激突が迫ろうとしている、研究施設群があるビル街の屋上では。

「さっ、てと。襲撃犯は二組……どっち行くか」

長袖の前開き服を肩にかけるという独特のファッションセンスを持つ、もう一人の超能力者（レベル5）が戦場を俯瞰していた。

０６０　激突―クラッシュ―

「――フレンダの方に、電撃使い（エレクトロマスター）が行ったみたいねぇ」

夜間の車中にて学園都市の暗部組織、『アイテム』のリーダー、麦野は独り言ちた。今回の作戦（ミッション）は、二箇所同時防衛。戦力の分散は否めないが、フレンダが対応出来ない氷結持ちで無かっただけマシか、と嘆息する。もっともフレンダが得意とするリモコン爆弾が使えない上、相手のレベル次第では普通に負けるだろうが。

（もう片方には絹旗の奴が行ってるし、アイツならこっちが電撃使い（エレクトロマスター）をボコるまで充分耐えられるだろ。イマイチピリッとしねえフレンダより、よっぽど信用できる仕事するからな）

内心では普段の取り繕った口調ではなく、高慢な本性が見え隠れする口調ではあったが、その内容には長時間応援なしの状態で耐えることが決定した絹旗の能力への信用が窺えた。それだけ彼女の能力も実力も評価しているということだ。

そう言う意味では、彼女の傍らでぼーっと虚空を眺めながら身体を休めている滝壺も同様だった。こっちについては性格はどうも馬が合わないが、能力に関しては破格。自身の能力との連携（コンボ）ならば、いかなる相手も打倒できると考えていた。

だからこそ、彼女のそんな自信が、降って湧いた『天災』に狂わされるとは、全くちっとも思ってもいなかった。

『麦野！　応答願います、麦野！』

「――ん？　絹旗？　どうしたのかしら、何か問題でも？」

端末から聞こえた絹旗の切羽詰まった声に訝しみながらも、表面上は上品に返答する。内心と外面を完璧に切り離せる辺り、大した役者と言えるだろう。

『こちらはもう、超駄目です！　施設の防衛は失敗です！　完全な不測の事態が起きました！』

「……あ〝ぁ？」

まだフレンダの方で襲撃者（インベーダー）の確認をしてから、十分と経っていな

い。最近の襲撃の手際を見ても、襲撃者は時間を合わせて襲ってくるはずだ。そんな短時間で絹旗が負けるとは考えにくい。そうなると完全なイレギュラーだろう。施設の電気系統がイカレて、火災でも起きたか？それとも崩落か。そこまで思考を進めて、改めて端末越しに絹旗に確認した。

「落ち着きなさい。詳しい状況を教えてくれるかしら？　一体何が――」

『第二位です!!』

絹旗の言ったことが、すぐには理解できなかった。

「……」

何だって？」

『ですから、麦野と同じ超能力者（レベル5）の一人、第二位の垣根帝督（かきねていとく）が！　『未元物質（ダークマター）』が超横槍を入れてきたんですよ！　施設の崩壊おかまいなしに!!』

続いて端末の向こう側から、重い瓦礫が一気に崩れるような音が聞こえてくる。そこで通信は切れた。車中に響くのは、ツーッ、ツーッという特徴的な音のみ。

しばらくの間、そのままの体勢で顔を俯けていた麦野は、やがて再起動すると同時、一気に吼えた。

「……あンの、クソ野郎ぉおおおーーーーーーーーーッ!!」

◇　◇　◇

一方、連絡を取っていた絹旗の眼前では。おおよそ信じられない光景が展開されていた。

「……まずは、小手調べでもいっとくか？」

口元に笑みを浮かべた垣根がそう呟くと、背中の翼の羽根が一斉に外側に広がった。そして、肉眼では決して見えぬ速度で天井ごと上層部のコンクリートを根こそぎ粉砕する。やがて重力に従い落下した巨大なコンクリート塊を、白い翼がふわりと支える。

「受けてみろよ、バケモン」

言葉と共に、重さ数tを超えるであろう塊が射出される。翼を器用に操り、まるでメジャーリーガーの剛速球のように投げつけたのだ。

向かう先は、佐天と白井。回避が不可能と悟ると、佐天は白井よりも前に出てその変化した右腕を振りかぶった。
「お断りっ！」
特大の斬撃を作り出し、コンクリートを両断する。細かな破片を防ぐため、更に右腕を盾状に変化させ、白井と共にその影に身を寄せ合った。バチバチ、ガガガと硬質な音が右腕全体に響き渡った。やがて石飛礫の雨がやみ、横合いから顔を出す。
「おー、やるじゃないか、オマエ。あの『真っ白なバケモンの姿』もまんざら伊達じゃねえってトコか？」
（……やっぱい。バンちゃんのこと、全部ばれてる……！）
垣根がさっきから匂わせて来る会話の内容に、佐天は思わず戦慄する。目の前の相手は明らかに以前佐天が暴れた時の完全体の姿を、現在の右腕しか解放していない佐天を結び付けている。つまり『連続襲撃犯』＝『純白の獣（イコール）』という図式だ。もしもこの上名前や学校までバレれば、佐天は二度と表を歩けなくなるだろう。それだけは何としても阻止したかった。
突然の事態に佐天が何とか考えをまとめようとあれこれ考えていると、先に垣根の方に動きがあった。
「……まあ、こっちはオマエの素性とかはどうでも良くてな――俺様に下された仕事は、オマエをこの場でバラバラに解体して、研究機関行きの特別便に詰め込むことだけだ」
その幻想的な外見とは裏腹に、背中の白い翼の周囲の大気が歪む。まるでその凶暴な内面を覆い隠すように。瞬間的に、佐天は判断した。
「……白井さん、コイツは私が押さえます。白井さんは、この施設内の研究員たちを少しでも遠くに逃がしてください」
「っ、正気ですの、佐天さん！　第二位といえば、お姉様より上ですのよ!?」
小声でのやり取りに、白井が噛み付く。先程目の前の少年が言ったことが真実であるならば、佐天に敵う道理はない。自身の敬愛するお姉様より上の実力者に対し、友人一人を放り投げることなど、白井に

は到底受け入れられなかった。
「大丈夫ですよ。白井さんが研究員たちを素早く遠くに逃がしてくれれば、私だって本気が出せます。それまでは時間稼ぎに徹しますから」
「……！」
実は彼女たちは、今回の研究施設襲撃に当たっていくつか取り決めをしていた。その一つが、施設の研究員たちの『人的被害の抑制』である。彼らは胸糞悪くなる研究を行っていた張本人ではあるが、それでも人命であり、佐天たちも彼らと同じ外道にまで堕ちるつもりはない。そのため、御坂は能力の代名詞である『超電磁砲（レールガン）』を、佐天はその身に秘めたＡＲＭＳの『完全体の解放』を、それぞれ封印していた。どちらも能力の規模が大きすぎて、施設の破壊や崩壊に研究員を巻き込む恐れが非常に高いせいだった。そのため今回のように、それだけで対処できない相手が出てきてしまうと、途端に窮地に陥るのだ。
しかし、研究員の避難が完了してしまえばその限りではない。佐天（かのじょ）の人知を超えた本領であれば、少なくとも逃走は可能となるだろう。そこまで考えを進めて、ようやく白井は口を開いた。
「……はぁ。わかりましたわ。出来る限り急いで周囲を無人にいたしますから、それまでやられないで下さいまし」
「はい！」
返事と共に、視界から白井の姿が消える。空間移動（テレポート）。彼女に距離の隔たりなど無いに等しく、そう時間をかけずにこの施設は無人となるだろう。
「それまで一人で何とかしのぐ、かぁ……こりゃ、結構ハードだよねぇ……」
愚痴りながら、顔には不敵な笑みを浮かべる。それでも、負けてやらない。そんな彼女の内面が漏れ出たような表情だった。
「……来な」
「先手っ、必勝おっぉおぉお!!」
白く強靭な豪腕から降り注ぐ冷気の斬撃と、それを振り払う純白の翼。かくして白を纏う二人の戦士の戦いが始まった。

◇　◇　◇

場所が変わって、研究施設上層階。爆心地近くの研究員を順番に外へと避難させた白井は、現在崩壊した上層部で逃げ遅れた人員の確認を行っていた。

（大分崩壊が進んでますわね。急がないと手遅れになりかねませんわ）

チラリと崩れたコンクリートに押しつぶされた元機械室らしき部屋を一瞥し、要救助者の有無を確認する。内部の監視カメラは初春が完全に掌握していたが、ケーブルが物理的に切れては使えない。そのため彼女は、こうして直接人力での確認を強いられていた。実際これは彼女にとって能力の度重なる連続使用となり、消耗もまた著しかった。

そして、そんな事情は、敵方には一切関係ない。

「なッ?!」

轟音と共に、彼女が踏みしめていた床が粉微塵にはじけ飛んだ。咄嗟の事に能力で逃れることも出来ず、後ろに大きく跳躍して逃れる。しかし、飛び散ったコンクリート片は、容赦なく彼女の手足を打ち据えて無視できない損傷を加えていく。

「ぐ……一体何が……」

「――――やぁーーっと、見つけました」

彼女の苦鳴に、床下から聞こえる場違いに呑気な声が重なった。その事実に身を固めていると、床下から白井と比べても余り変わらない小柄な背格好の人影が飛び上がった。とん、と非常に軽やかに降り立った彼女の名は、絹旗最愛。『アイテム』の構成員であり、この施設の防衛を任された者だ。

「第二位が介入してきた以上、施設の破棄は超確定ですが……襲撃者（インベーダー）の一人も捕まえないまま、逃げ帰る訳には超いきません。貴女だけでも拘束させてもらいます」

「……！　……そう上手くいくとは、思わないで下さいまし!!」

交錯する二人の少女。空間と大気を操る少女たちは、無人の研究棟で激突した。

◇　◇　◇

再び場面は移って、研究棟一階。異なる白を纏う二人の戦士の戦いは混迷を極めていた。

「っ、の！　でぇい！」

「……」

攻め続けているのは、佐天の方。しかし、先程から、ソレが効果を上げている様子が一切見られない。通常であれば、一撃でも致命の斬撃。それを何度も何度も、ただ翼で払いのけているだけだ。業を煮やして何度か突撃も試みたが、そのたびに彼女は翼の打撃によって遠くまで押しのけられた。

「ふーっ、ふーっ……」

「……はぁ」

斬撃の合間、ほんの僅かな間隙に、垣根のそんな吐息が漏れた。怒涛の攻撃を繰り広げていた佐天は、しかし様子が変わった相手を警戒し、後ろへと素早く飛び退った。右腕を構え、如何なる攻撃にも対処できる防御態勢をとる。

「――――――少し、飽きたな」

それはまるで、ビデオのコマ送りのようだった。突如として、何の脈絡もなく、佐天の右腕が宙を舞った。

０６１　隕石―ミーティア―

「……！」

突如として消失した右腕に歯噛みし、佐天は肘の辺りの傷口を押さえ付けた。激痛が彼女の思考を苛むが、それでも顔を上げ、前を見据える。

（痛い！　想像なんて及ばないぐらい、凄く、痛い……！　けど、痛みは忘れなきゃ……。今は、『戦闘』なんだから……！）

今までの彼女には、決して存在しなかった思考。良くも悪くも年相応の女子中学生に過ぎなかった彼女だが、『不思議の国』でかつての四人の先輩たちの戦いの記憶を目にしたことで、彼女は変わった。ＡＲＭＳと共に歩むことの意味を考え、どんな運命にも負けないように自らを鍛えるようにもなった。そのため黄泉川先生には生兵法と分かっていても体術を教わったし、精神修養についても取り組むようになった。

だから、彼女はこれくらいではへこたれない。冷静に、迅速に、今喰らった攻撃の正体を分析し始める。

（攻撃の瞬間……ほんのわずかだけど、アイツの方から風が吹いた感じがした。屋内で、空調も止まってるのに。風そのものが蛇みたいに曲がりくねっていたから、多分風を何らかの方法で操って腕を引き裂いた……！）

佐天のその推測は、概ね正解だった。正確には、風は垣根の背中の翼の間から発生しており、その風自体が彼の能力という訳ではない。現在彼の背中に翻る翼の内、一対を形作っているのは、『接触した気体・気流を変質させ操作する』未元物質（ダークマター）である。それを使って、周囲の気流を操作して断層を作り出し、曲射して右腕を吹き飛ばしたというのが事の真相だった。

「……狙い通り、命中ー。どうだ？　これでお前は戦う手段を失った。このまま捕まるか、それとも抵抗してダルマになるか好きな方を選べ」

幸先よく右腕を吹き飛ばしたことで、機嫌を良くした垣根が少しばかり優越感に浸って語り始める。勝利を確信し、一歩、また一歩と距離を詰める。

佐天は、距離が詰まるのを待っていた。

「っ、バンちゃん！　お願い!!」

「ぁん？」

佐天の叫びに眉を顰めた垣根の斜め前、足元に転がっていた右腕の先が、急速に佐天の元へと飛来した。肘の辺りからまるで触手のように伸び、そのまま互いに絡み合うように再生していく。

「こんのぉおおおおおおおおおっ！」

「おお?!」

そのまま横に薙ぎ払うように繰り出された攻撃を、垣根は大きく上に跳躍して躱す。そのまま背中の翼を羽搏かせ、天井近くに静止した。

「あれでも再生出来んのかよっ！」

そのままの位置を維持しながら、垣根の翼から、再び気流の断層が形成される。今度の攻撃は、四つ。再生が右腕のみなのか、全身なのか確認するため、四肢を完全に胴体から斬り飛ばすつもりだ。

「おんなじ攻撃を、喰らうもんかぁあああああッ！」

佐天は咄嗟に、右腕の爪先から発生する斬撃を数発、空中に連続して発射する。出力を調整され、速度に差が出た液体窒素の斬撃同士がぶつかり合い、猛烈な冷気によって正面に大量の水煙を発生させる。煙の中、見えぬはずの気流の軌跡が、はっきりと見えた。

「いくよ――――！」

「?!」

断層の間をすり抜け、佐天が垣根と同じ高さまで飛び上がる。その時には右腕は弩を引き絞るかのように、大きく後ろに振りかぶられていた。咄嗟に、『気流操作』の翼で後ろへと下がろうとするが、その分その翼が逃げ遅れた。

「ぐ――――！」

佐天の爪が、垣根の『気流操作』の翼を捕らえ、引き千切っていく。

途端にバランスを崩した垣根は、そのまま地面へと墜ちていった。
「ハ――――、ハ――――……」
引き千切った翼を握りしめたまま、佐天もまた地面へと降り立った。ほとんど隙間ない攻撃を無理矢理に避けたため、張り詰めていた緊張が解け、肩で息をしていた。それでも何とか呼吸を整え、再び前を見据えた。
落下の衝撃によって漂う土埃から現れた垣根帝督は、能面のような無表情だった。その背中の翼は一部引き千切られ、出てきた当初のどこか神聖な様子は見る影もない。彼は一切表情を変えることなく、淡々と言葉を紡ぎ出す。
「……コイツはよ、ただの暇つぶしを兼ねた任務だったんだよな」
淡々と。朗々と。何の温かみも無く、只々のっぺりとした言葉が周囲に響き渡る。
「ただ、仲介屋から面白い標的がいるからって告げられて……、ちょうど良く『第四位』とも競合してたから、ちょっかいをかける意味も込めて……、オマエの確保自体は物のついでみたいな物だったんだがよぉ……」
佐天が口内の唾をごくりと嚥下する。口の中がからからに乾いていた。それはきっと彼女が、周囲で増し始めた緊張感を感じ始めているから。目の前の言葉の羅列が何を意味するのか知っているから。
『嵐の前の、静けさ』だと。
「もう、いい。オマエは、ひき肉にして送り付けてやる」
垣根の背中に、純白の徒花（あだばな）が咲き誇った。敵を消滅せずにはいられない暴虐の化身を目にし、佐天もまた、右手の中の千切れた翼を硬く固く握りつぶす。ＡＲＭＳが翼の破片を取り込み、『未元物質（ダークマター）』の要素まで内包し、生まれ変わる。その表面にわずかに、翼のように折り重なった波状の紋様が浮かび上がる。
佐天の右腕が、接触した気流に干渉し、自在に掌握し始めた。
「――――だから、なんだよ？」
今度は、前兆は何もなかった。佐天の身体を撃ち貫いたのは、垣根の翼から突如として伸びた『電撃』。それも御坂の電撃とは程遠い、ど

こか赤黒い有り得ないような色をした電撃だった。
「あ、んた……『気流、操作』の能力じゃ……！」
「あ？　あー、勘違いしてたのか。いいぜ、教えてやる」
垣根の背中に、翼が広がる。その翼の全て、その羽根の全てが、それぞれ異なるチカラを帯び始める。
「この俺様の能力名は、『未元物質（ダークマター）』。その本質は、何かを操作することじゃなく、有り得ない物質を生成すること。力の続く限り、思いつく限り、異なる性質・能力を持った物質を永遠に生成できる。つーまーりー……」
純白の翼を広げながら、垣根が悪魔のようにニタリと笑った。
「俺様の能力は、無限の多様性を持っているのさ」
電撃が奔った。火炎が迸った。氷柱が貫いた。閃光が閃いた。酸毒が蝕んだ。およそ考え得る限りの攻撃が、驟雨のように降り注いだ。数えるのも馬鹿らしい、圧倒的な暴力の海が、佐天を飲み込もうと空間を埋め尽くしていく。
「くっ！」
無論、佐天もやられるばかりではない。攻撃のいくつかを右手で受け止め、引き裂き、少しづつ、少しづつ攻撃の耐性を付けていく。
だが、所詮は焼け石に水。バンダースナッチだけではなく、ＡＲＭＳの全ては、一度経験した攻撃には対応し、自ら取り込んで力に変えるという圧倒的な『無限の進化性』を保持している。しかしながら、ＡＲＭＳの持つその性質は、あくまで生物が本来持つ『環境適応性』の延長でしかなく、一度は経験しないと『進化』出来ないという弱点もまた持っているのだ。
『無限の多様性』によって、常に攻撃の先手を取れる『未元物質（ダークマター）』の垣根帝督。『無限の進化性』によって、適応できるが常に後手に回る『ＡＲＭＳ』の佐天涙子。どちらが有利かなど、言うまでも無かった。
やがて、攻撃によって断続的に起こっていた轟音は、ピタリと治まった。音が聞こえなくなったわけでも、場所が移ったわけでもない。単に、攻撃の必要が無くなったから、音が治まっただけだ。
「……あ……」

瓦礫の中に半ば埋まりながら、佐天がわずかに声を漏らした。圧倒的な暴力の前に、遂に対処しきれなくなり、佐天は膝をつくことになった。今、彼女が認識出来るのは、額から滴る血液で赤く濁った視界と、己の心中に響く家族の『声』だけだった。

『(佐天涙子！　佐天涙子！　しっかりしなさい！　ホラ、ちゃんと意識を保って！)』

「(あー、うん……大丈夫、だよ……まだ)」

本当は意識がすぐにも吹き飛びそうだったが、少しだけ強がる。もっとも、身体ごと共有しているバンダースナッチにはモロバレだったが。

紅く染まった視界の中に、悠然と歩きながらこちらへと近寄って来る少年の姿が映る。恐らくこのまま半死半生の彼女を、どこかの研究施設へ送り届けるつもりだろう。それだけは、佐天も、バンダースナッチも避けたかった。

『(……こうなったら、仕方ないわね。『切り札』を使いましょう)』

「(あー……『アレ』？　でも、練習でも一度も成功してないよ？)」

『(それでも、可能なはずよ。成功させた二人は、確かにいたんですもの。ここから逆転するには、もうそれしかないわ)』

佐天も、頭では分かっていた。ＡＲＭＳの『完全体』以外では、練習中の『切り札』は本当に最後の手段だ。それが通じなければ、現状目の前の相手に通用するものは無くなるだろう。発動の為、何か機会でもあれば――そう考え、心の準備を整えるうち、垣根が佐天の足元へとたどり着いた。

「……一応、足くらいはもいでおくか」

再び翼が広がり、佐天の両足へと狙いを付ける。迎撃のため、右腕が僅かに強張った瞬間、佐天は確かに声を聞いた。

「――――――――――――――――――――『すごい、パーンチ』！」

とてつもなく、場違い且つ緊張感に欠ける名称と共に、目の前が天井ごと一気に崩壊した。得体の知れない衝撃に巻き込まれるのを恐

れ、垣根が大きく飛び退った場所に、上空から衝撃と共にその少年が降り立った。

「倒れた女に追い打ちかけようったぁ、根性が足んねぇな！」

その少年は、まるで時代遅れの暴走族のような出で立ちだった。日章旗のような模様が入ったTシャツを身に着け、白の特攻服を肩にかけていた。額に白のハチマキを巻き付け、その短い黒の髪を翻していた。彼の名は、削板軍覇。学園都市七人の超能力者（レベル5）の第七位。世界最高の『原石』とも呼ばれる少年だった。

その登場は、その場の誰に対しても完全な予想外であり、同時に、二人にとっての最大の好機でもあった。

（（――今!!））

心を合わせた佐天とバンダースナッチが、全身のＡＲＭＳを励起させ、室内を高音の共振が満たしていく。次第に彼女の両頬に、ＡＲＭＳ特有の紋様が浮かび上がり始める。

「（このまま同調を続けていけば、完全体には至れる……！　けど、今必要なのは！）」

『（バンダースナッチの力じゃなく、佐天涙子自身の力！　だから、必要なのは！）』

「（全てを飲み込むほどの、私自身の器……！）」

かつて、オリジナルＡＲＭＳを移植した四人の少年少女がいた。その四人は過酷な運命の中、時に絶望し、時に抗い、運命と言う名のプログラムに打ち勝っていった。そして、その四人は、遂にはプログラムでも想定していない更なる進化を遂げていった。ある者は、ＡＲＭＳの皮膚も神経も全て受け取り、『剣の主』となった。ある者は、ＡＲＭＳの『審判』を拒絶し、己が矜持に従い、最後まで自分自身の『目』で見届けようとした。ある者は、閉じ込められていた白いアリスを救い、外の世界へと誘った。

そして、魔獣（ジャバウォック）を移植された少年は、魔獣（ジャバウォック）の全てを飲み込み、人間のままで完全にその力を制御するまでに至った。

今、彼女たちが求めているのは、かつてその少年――『高槻涼』が至った場所。佐天涙子のままで、神獣（バンダースナッチ）の力を完全に制御する境

地。けれど、『飲み込む』のではない。彼とは全く違う道程で、同じ場所まで至ろうとしている。

『（私の、すべて！　貴女に、託す！）』

「（うん！　飲み込むんじゃない――――託されたもの、全部受け止めるんだ！）」

それが、二人の絆の形。『友』ではなく、『家族』として歩むと決めた二人だから、『全てを託し、そして受け止める』という答えとなった。

高音の共振は、やがて人間の耳の可聴域すら超越した。キィ――――……ンと、もはや耳が痛くなりそうな静謐な音の中、ゆっくりと彼女が起き上がる。

「……こっから、反撃よ。さっきの分、万倍にして返すから!!」

暗闇の中、彼女の純白の髪が翻った。

062　風神―アイオロス―

その少女が立ち上がった時、空間の全てが変わった。圧倒的な存在感を放つ垣根と、何処か清々しさを感じさせる削板の二人のせいで、落ち着きがなく忙しなかった周囲の空気が完全に切り替わった。彼女の純白の髪を通り抜けるたび、空気が愛おし気に頬を撫で、その場にいる全ての存在を祝福していく。その変化は、階層を隔てた他の者たちにも届いていた。

「これは……」

研究施設上層、白井との交戦中だった絹旗は、周囲の急激な変化に顔を上げた。

「研究施設内の空気を、誰かが『空力使い（エアロハンド）』で操作？　いえ、超違いますね。これは……、いえ、間違いない。超有り得ませんけど……」

不意に彼女の目の前で、崩れた瓦礫の小山が動き出した。その中から、彼方此方服が破れ、ボロボロの姿となった黒子が現れる。

「佐天さん……ですわね。根拠など何もありませんのに、この『風』に包まれていると、不思議と力が湧いてきますわ」

そして、施設から遠く離れた場所、『窓のないビル』と呼ばれる場所でも。

『――およそ有り得ん話だな。彼女には、ここまで圧倒的な能力の素養など無かったはずだが』

その眼に映るのは、一つの映像データ。今現在戦いの続く研究施設を俯瞰して捉えた映像。そこに映し出されていたのは、余りに巨大なもの。ゆっくりと、悠然と、施設を中心としてまるで球体を描くように循環する大気の『渦』だった。それを能力で、映像で、捉えることの出来た二人が、同時に答えへと至った。

『超絶的な大気への支配力で――施設内どころか、周辺数百ｍすべての大気を支配下に置いた。これは、およそ『空力使い（エアロハンド）』の枠内に無い。間違いなく超能力者（レベル5）級の能力だ』

そしてその答えに至った絹旗は、自身の身を包む窒素装甲（オフェンスアーマー）を更に強めた。この施設内の大気は、明らかに未知の『空力使い（エアロハンド）』能力者に

よって支配下に置かれつつある。そして自身の能力も、大別すれば『空力使い（エアロハンド）』によるもの。もしも、絹旗の身を守り敵を打ち倒す窒素装甲（オフェンスアーマー）が崩れてしまえば、もはや彼女にはどうすることも出来なくなってしまうのだ。

絹旗にとっては幸いにも、件の『空力使い（エアロハンド）』能力者が支配力を広域に散布しているせいか、強制力は大能力者（レベル4）の彼女でも対抗できる範囲だった。集中して密度を高めることで、揺らいでいた装甲の制御は程なく彼女の支配下へと下った。

「それにしても……八人目の超能力者（レベル5）が同じ場所で生まれるとか、今日の私、超厄日じゃないですか？」

舞台は再び、研究施設下層へと移る。

彼女の変化は、その場にいる二人が直に肌で感じていた。彼女は見た目においては、あまり変わってはいない。精々その髪が純白へと変化しただけで、その不敵な笑みを見ても、人が変わったわけでもないのは見ればわかる。

だが、違う。その雰囲気が、存在感が、先程までとは余りにも違う。垣根も、削板も、無意識に悟っているのだ。目の前にいる相手が、間違いなく『同格』だと。

その本能に蓋をし、あくまで傲然とした態度を崩さない者がいた。

「オイオイ、オマエはさっきボロ負けしたろうが。まだやる気なのかよ？」

垣根のそんな分かり切った問いに、佐天はほんの少し微笑み、肥大化していた右腕の変化を解くと――――

――――次の瞬間には、垣根の懐にいた。

「!!!?!!　が――――!!」

問答無用で、殴られた。垣根の腹に、佐天の華奢な左拳が容赦なくめり込んでいく。次の瞬間には、打撃の衝撃によって、きりもみ状態で吹き飛んでいく。

「ぐ……！」

衝撃で肺から根こそぎ空気を吐き出し、混乱する頭の中、どうにか背中の翼で態勢を立て直す。空中で静止し、攻撃してきたターゲット

を探す。いない。元の場所にいない。敵を探して目まぐるしく動く両目が、左の視界の端に、尾のように流れる純白の髪の影を捉えた。

「……！」

翼を左側にありったけ展開して、全力で防御する。伝わって来た衝撃と感触に、空中で回し蹴りを決められたことを認識した。大体の位置を定め、余った右の翼をターゲットがいると思しき場所へと殺到させる。

しかし、いない。視界が開けた時、もうそこには彼女の姿は無くなっていた。再び所在を探すも、そこに声が響いた。

「すっげえ根性入った拳だな！　お前、やるじゃねえか!!」

「あー、はい？　いや、どうも？　あの、ところで、貴方はどちら様で……」

「そんなことはどうでもいいんだ！　いや、それよりよ、アイツは俺が相手するとこだったんだ。悪いが譲ってくれねえか？」

「え。あー、でも悪いんだけど、私もアイツにしこたま殴られた後だから、きっちりお返ししないと――」

声の方に視線を向けると、さっきの男の横に、ターゲットが降り立ち、普通に談笑していた。まるで日常のように。まるで、垣根など眼中にない様に。

瞬間、意識が沸騰した。

ふざけるな。目の前にいる相手は、誰だと思っている。この学園都市にいる２７０万人の能力者の頂点、七人しかいない超能力者（レベル５）の第二位なんだぞ。そんな思いが垣根の中に充満し、矢の様に彼を駆り立てた。

殺す。先鋭化した意識は、最も単純な思考へと至る。その余りに短絡的な未来を実行に移すため、翼をさらに展開し、一瞬で彼女に近寄り、その華奢な身体を翼で引き裂き蹂躙せんとした。

その時の垣根帝督は、ある意味幸運だったのかも知れない。迅速かつ一瞬で攻撃に移るため、気流操作の翼と、気流感知に長けた翼を同時に展開していたのだから。

周囲を探る気流感知が、突如として自分の目の前に発生した大気の

空隙を察知した。何の前触れもなく、突然現れた大気のトンネル。それはまるで、『道』のように彼女へと繋がっていた。

振り向いた彼女が、口元に笑みを浮かべる。そして、たん、と余りにも軽々と空中へと跳び上がった。

『道』の中を、彼女が突き進んでくる。発生した真空の空間によって、空気抵抗が完全にゼロとなったトンネルをまるで弾丸のように進んでくる。引き延ばされた意識の中で、垣根は彼女の背中に大気が集っているのも感じた。まるで彼女が前に進むのを手助けするように、大気は背中で弾け飛び、『槍』のような爆風を形成して彼女を押し出していた。

「……！」

瞬間、背中に奔った悪寒に従い、再び翼を前面に多重展開する。それは垣根の信じる鉄壁の防御であった。まるで繭のようになった翼の塊に、佐天の左手がそっと触れた。

ブヂリ、と軽く音を立てて、翼が引き千切られた。見た目にも余りに華奢な腕が、手が、指が、無造作に翼の防壁を掻き分けたのだ。だが、それは見かけだけ。垣根の気流感知が、彼女の肢体の異変を最大級の警戒と共に感知する。

（大気そのものを、身に纏って……！　鎧のように……!!）

それこそが、彼女の膂力の正体。彼女は今、大気の密度の違いで屈折率が変わり、背景が歪む程の暴虐な大気を自分の表面に『膜』のように纏っていた。垣根の翼も、その膜越しに触り、掻き分けただけだ。

彼女は、知らない。彼女が今身に纏う鎧と、よく似た能力を使う少女の事を。彼女は、知らない。自身を押し出す『爆風の槍』によく似た能力の少女の事を。本来有り得ない能力を、空力使い（エアロハンド）でも最高峰の双璧を、彼女はこともなげに使う。

ＡＲＭＳの最大限の能力強化によって本来の彼女のレベルを超越した能力は、今再び彼女の手の中へと戻った。更なる飛躍を遂げて。大気の全てを掌握し、大気中のあらゆる現象を感知し、変幻自在の力を振るう更に強力な牙となって。『空力使い（エアロハンド）』の頂点、八人目の超能力者（レベル5）、学園都市から後に『空力探査（エアロソナー）』の呼び名で呼ばれることに

なる少女は、今ここに生まれた。

そして、彼女が振るうことのできる力は、それだけではない。

佐天の右腕が、再び固く硬く握り締められる。その表面に幾何学紋様が浮かび、質量が肥大化していく。佐天が託された力。バンダースナッチが託してくれた力。それは彼女が強化した空力使い（エアロハンド）だけではなく、彼女の全身に散らばるＡＲＭＳもだ。

全身のＡＲＭＳが、一斉に励起する。佐天の意志に従って、全身のＡＲＭＳが連動し、その右腕に爆発的なまでの膂力を与えようとする。引き絞る筋肉は、まるで弓の弦のように、強靭な発条（バネ）のように、力を蓄え解放の時を待つ。それを支える骨格は、鋼をも超える強度へと変化し、その力を余すところなく支えている。そして、それらに命令を告げる神経は、力の解放の瞬間を、雷光の如き迅さで彼女の全身に駆け巡らせた。

音は、無かった。

佐天の意志を余すことなく伝えたＡＲＭＳの一撃は、音すら置き去りにして、垣根の身体へと突き刺さった。垣根が展開した『未元物質（ダークマター）』の翼は、佐天のＡＲＭＳの周りに渦巻く大気の鎧に砕け散った。垣根は口から強制的に肺の中の空気を吐き戻させられ、血と胃液の混じった反吐も出しながら、施設の壁へと一直線に突っ込んでいく。やがて衝撃と共に轟音が響き渡り、壁面の瓦礫が崩れ、その姿は埋もれて見えなくなった。

学園都市第二位、垣根帝督との戦いは、こうして幕を閉じたのだった。

063　珠玉―リア・ファル―

佐天と垣根の激突に決着が着いた頃、同じ施設の上層部では。血だまりの中に突っ伏す白井黒子と、それを静かに見下ろす絹旗最愛の姿があった。

瓦礫まみれの床の上に、口から吐き出した血だまりに沈んでいる彼女は、ピクリとも動かない。初見でこの現場を見た人間がいたら、それは殺人事件の現場と勘違いされかねないほど。しかしそんな中でも、対峙した絹旗は一切の気の緩みを許さない。

やがて、血だまりの中で、力なく投げ出されていた細い指先が、ほんの僅か、ピクリと動いた。

「……超しぶといですね」

絹旗がそんな呆れた声を投げかける中、その顔や頭に血を滴らせた白井がゆらりと立ち上がる。その眼は、まだ死んでいない。鍛えてはいるのだろうが、同年代に比べれば小柄で華奢な体躯をしながら、未だしぶとく食い下がる少女に、絹旗の内心にほんの僅か賞賛の気持ちが湧き上がる。

かといって、仕事に私情は挟まない。

「悪いんですけど、私の任務は本来襲撃者（インベーダー）の撃退なんですよ。だからまあ殺害までは、超任務外、ですので。そのまま大人しく捕まってくれれば、その怪我も治療できると思うんですが」

もっとも後の身柄は保障しかねる、とは思ったがそこまでは口にしない。これで終わるのであれば労力の無駄を省けるし、何より倒しても倒しても起き上がるゾンビとの戦いはさすがに疲れた。大好きなB級ホラーのヒロインたちのうんざり感を、実感した気分だった。

「……申し訳ありませんが、そう言う訳には参りませんわ」

胸部を左手で押さえながら、右手で口元の血を拭う。白井の怪我は決して浅くはない。流石に下腹部への攻撃だけは空間移動（テレポート）で避けてはいたが、胃や食道など他の内臓には満遍なくダメージが徹っている。オマケにまともに入った胸部の一撃は、彼女の肋骨をいくつかへし折るだけの威力だった。

（さっさと終わらせて、彼女だけでも確保。その後、明らかに超能力者（レベル5）級の『空力使い（エアロハンド）』能力者がこっちに来る前に離脱……超無理ゲーですね、これ）

すぐにでも白井を倒すべく絹旗が腰を落とし、両膝に力を溜める。彼女がこうも急いでいるのは、施設全体に先程展開された『空力使い（エアロハンド）』の制御空間が原因だ。彼女を明らかにしのぐような制御範囲とその強度。同系能力の持ち主だからこそ、対峙せずとも自分をはるかに超すレベルの持ち主だと肌で感じ取れてしまった。麦野のような違う系統の能力ならまだしも、自分の窒素装甲（オフェンスアーマー）では壊滅的に相性が悪いと理解してしまった。

だから彼女は、『襲撃者二名両方の撃退』を早々に諦めて、襲撃者一名を確実に『捕縛』。もう片方の確保については、メンバー全員合流の後、善後策を考えることに切り替えた。すぐさま次善の策に移れるのは、暗部を渡り歩いてきた彼女の経験ゆえだろう。

開始の合図など無く、どん、と絹旗の足元で衝撃が爆ぜた。見る間に縮まる距離に、白井は空中へと金属針を転移させて応戦する。

「無駄ですよ」

そんな一言と腕の一振りで、全ての針は弾かれて地に落ちた。頭上にいくつも転移させてきたコンクリート塊は、絹旗の窒素装甲（オフェンスアーマー）を突破できずに砕かれる。

さっきから、こんな攻防の繰り返しだ。本来空間移動能力者（テレポーター）は、相手の防御力など完全に無視した攻撃が出来る。絹旗にしても、体内にさっきの金属針やコンクリートを転移されては無事では済まなかっただろう。それなのに、彼女は未だに無傷。

すべては、白井の意図によるものだった。白井は、絹旗が直撃を避けられない場合でも、意図的に、攻撃を末端部に限って行っているのだ。どんな状況であろうと、誤って致命傷にならないよう、計算し尽くして攻撃を行っている。最初の対峙から、絹旗はそのことに気付けた。白井の攻撃箇所が手に取るように分かった。だから彼女は無傷で済んだのだ。

そして白井のそれは、絹旗にとって、どうしようもない甘さと映る。

「……そんな超甘えた根性で、こんなクソッたれの戦場まで来てんじゃねえですよ」

言葉と共に繰り出される、渾身の右。テレフォンパンチもいいところだが、目の前の相手は既に避けるだけの体力もない。だからこれで充分だと、繰り出された止めの一撃は――

――フラフラの棒立ちから、突如として寝そべるように体勢を変えた白井に避けられた。

「――は？」

予想外の事態に、一瞬思考が停止する。白井はその一瞬を逃さず、伸ばされた右腕にかぶりつき、身体を反転させながら関節を取ろうとしてきた。

「っ、どうやって?!」

「空間移動能力者（テレポーター）は、別の場所に飛ぶだけが能じゃありませんわ！同一座標で身体の方向を変えるくらいお手の物です！」

右手を振り回し、白井を引きはがそうとする絹旗の声に、白井が応える。つまり彼女はあの瞬間、直立の身体が地面と平行になるように同じ地点に空間移動（テレポート）したのだ。下手をすれば至近距離にいる絹旗の身体に混ざり込んでしまいかねないが、それでも彼女は躊躇なくそれを行い、そして賭けに勝った。

そのまま白井は右腕を振り回す動きに任せ、風紀委員（ジャッジメント）で培った制圧術を応用し、右へ左へと振るわれる腕の力に逆らわずに受け流し、身体を腕へと巻き付けていく。

「ああもう！　超厄介ですね！」

ついにたまりかねたのか、絹旗が左腕まで使って白井を引きはがそうとする。白井の背中側の衣服を掴み、ぐいと引っ張り下ろす。しかし、そうすることは、白井にとって完全に『計算通り』だった。

引っ張り下ろされる力に逆らわず、白井の両足がついに地面に降り立つ。そこは、絹旗の懐。絹旗までの距離は、数十センチも無い距離。白井の唇に、笑みがこぼれる。そしてその右の掌に、光も音もない、空間系能力者以外には一切探知も出来ない、球状の『力』が発生した。

その瞬間、絹旗の背筋に悪寒が走った。白井の『力』を感知したわ

けではなく、暗部を潜り抜けてきた者特有の『勘』のようなものだったが、それでも彼女は最大の危険度を感じ、全力でその場から後退しようとした。しかし、そうするにはすべてが遅すぎた。

「ガッ――――――!!?」

衝突の瞬間、絹旗の身体全体を振動と衝撃が貫いた。纏っていた筈の窒素装甲（オフェンスアーマー）を見事に突き抜け、身体の芯へとダメージを与えた。自身を覆い尽くす窒素の殻が無ければ、彼女は年齢相応の少女でしかない。肺の中の空気を全て吐き出し、彼女の意識は白く染まっていく。

床にその身を横たえた絹旗を見下ろし、白井は自らの右手へと視線を移す。

「……あれだけ訓練したというのに、今出来るのはたったこれだけ……。我ながら、少しばかり無様ですわね」

彼女が使ったのは、掌の内側だけの『空間振動』。かつて彼女がキース・グレイの空間操作を目の当たりにして、犯人制圧用にアレンジして作り上げた技だった。普段自分を基準点として空間座標を決定し演算している為に、どうしても広範囲に広げることが出来ず、未だに限定的にしか使えない代物だが、空間系能力者以外は当たれば漏れなく昏倒する威力。遠距離攻撃として飛ばすことも出来ないため、どうしても近づく必要があったのだ。

「けれど、『不殺』は私の甘えではなく、覚悟そのものですわ。勘違いしないでいただきたいですわね。まあ、聞こえていないかも知れませんが」

反応が返ってこないのを確認し、白井の膝から力が抜ける。壁に背をつき、そのままズルズルと腰を下ろした。

「……お姉様は大丈夫でしょうか」

視線を上げ、虚空を見つめる。視界の中の壁の向こうに、白井は御坂がいるであろうもう一つの施設を透かして見ているようだった。

◇　◇　◇

「ちょちょい、っと！　本当に大丈夫なワケ？」

白井が心配している、御坂が突入した施設裏の駐車場。そこで一人の金髪の少女が、傍らのもう一人の少女を気遣っていた。金髪の少女

の名前は、フレンダ＝セイヴェルン。そして彼女に抱えられるように支えられている少女の名は、滝壺理后。

彼女らは先程まで、目の前の施設内部に侵入してきた御坂美琴と交戦状態にあった。当初は爆弾を使ったブービートラップで優勢に立っていたフレンダだったが、トラップをことごとく潰されて敗北。危ういところをちょうど駆けつけてきた滝壺と、チームのリーダーである麦野沈利にバトンタッチし、窮地を脱したのだ。その後しばらくは滝壺の能力である『能力追跡（AIMストーカー）』と、麦野の持つ学園都市第四位の能力、『原子崩し（メルトダウナー）』のコンボで終始優勢に立っていた。だと言うのに、リーダーの麦野が一方的に、フレンダと滝壺に撤退を命じたのだ。

（見るからに具合悪そーな滝壺を気遣ったとか……イヤイヤイヤ、結局そんなワケないっての！）

滝壺は額に脂汗を浮かべ、唇は渇ききり、目に見えて体調が悪そうだった。しかしながらそんな理由で、麦野が仲間を気遣う訳がない。あの女はそんなタマじゃない、とフレンダは確信していた。

「……ま、結局命令された以上、ここから一刻も早く撤収が一番なワケよ。ホラ、さっさとクルマ回して。誰か滝壺を運び入れるのに手を――」

そこまで、言って。彼女は自分の周りが、妙に静かになっているのに気が付いた。

「!?」

プシュ、と空気が抜けるような音と共に、彼女の両足に穴が空いた。力の抜けた足が二人分の体重を支え切れずに揃って地面に転がる。横倒しになった視界に、赤いピンヒールの靴と、軍が使いそうな無骨なブーツ、それと男物のスニーカーが映った。

「――あなた達が、『アイテム』の構成員ね？」

詰問を投げかけたのは、ピンヒールと同じ赤いナイトドレスを纏った少女。彼女の通称にして能力名は、『心理定規（メジャーハート）』。学園都市の暗部組織『スクール』の構成員であり、垣根の仲間である少女だ。

「あなた達に、このままもう一つの襲撃場所に向かわれるのは、非常に困るのよ。向こうに邪魔が入らないようにしておけって言うのがウ

チのリーダーの命令だし……それに、将来敵性戦力になり兼ねない相手となると、この場で放置と言う訳にもいかないの。ごめんなさいね？」

そんなことを言いながら、赤いドレスの少女は警戒も気負いも特になく、無造作に近寄って来る。その横を固める土星の輪のようなゴーグルの少年も、髪を頭の両後ろで短めに縛った少女も全く恐れが無い。分かっているのだ。フレンダにも、滝壺にも、もう身動き一つする力が残っていないと。戦闘の疲れと、両脚の出血。薄れゆく意識の中で、近づいてくる少女の掌に、フレンダがギュッと目を閉じた。

「――――――――少し、待って貰えるかな？」

フレンダと滝壺の窮地を救ったのは、その場の誰でもない声だった。少女の手が遠ざかるのを感じ、フレンダは瞼を薄く開いて、声のした方向を盗み見た。

そこにいたのは、奇妙な服装をした二人組だった。片方は、全身黒一色。西欧人特有の高い身長を、真っ黒なゆったりとした服装で包んでおり、その間から見える手には大きな指輪をいくつもつけていた。髪型は真っ赤な長髪で、突き出る耳には大量のピアス。右目の下にはバーコードの刺青を刻んでおり、皮肉気に歪められた口元には煙草をくわえていた。

もう片方の人物も、また奇妙。服装そのものは一般的なTシャツにジーンズだが、Tシャツは片側で大きな結び目を作られており、ヘソが丸出しになっていた。オマケにジーンズも太腿のかなり際どい位置で切断されており、もはや彼女のプロポーションを際立たせる用途にしか役立っていないという代物。そのくせ靴はウエスタンブーツを履き、腰にはウエスタンベルトで日本刀を差し、顔立ちは凛とした日本美人という本当に良く分からない女性だった。

「ここ最近この街に、妙に殺気と死臭が満ちている件で、そこの二人にはいくつか聞きたいことがあるんだ。まあもちろん、キミ達にもだけどね？」

そう言って赤髪の男が、懐から奇妙な図形と記号が書かれたカードを取り出す。すると彼の目の前、虚空に炎が迸った。

「また首を突っ込んでいるかもしれない、彼女のために――――詳しい事情を聞かせて貰おうか？」

イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会（ネセサリウス）』所属、『魔術師』ステイル＝マグヌスと『聖人』神裂火織が、暗部組織『スクール』の面々と対峙した。

０６４　炎人―スルト―

突如として戦場に現れた正体不明の二人組。そんな闖入者に対して最も早く行動を開始したのは、『スクール』の構成員の少女だった。その長袖の袖口に隠した銃口が、赤髪の少年の眉間へと向き直り、プシュ、とわずかな音を立てて発射された。

常人ならば、確実に致命の一撃。しかし、彼女の目の前にいる人物は、尋常の少年ではなかった。

「――――『灰は灰に（Ash to Ash）』」

言葉と共に、少年の手に焔が燈る。その焔は、少年の顔のすぐ前で揺らめき、飛来した凶弾を苦も無く焼き尽くした。

そして、もう一つの種火が宿る。

「『塵は塵に（Dust to Dust）』――――『吸血殺しの紅十字』！」

そうして顕現するのは、焔の波濤。十文字に交差する炎の津波が、『スクール』の三人へと迫って来る。

「……っ!!」

それを防いだのは、円形ゴーグルの少年。すんでのところで彼の能力、大能力者（レベル4）の『念動能力（テレキネシス）』によって炎の侵攻を防ぐことが出来た。そのまま彼は周囲の小石を操作し、炎を迂回させて攻撃を加えてくる。

「――――『七閃』」

小石は決して相手に届くことなく、その全てが斬り裂かれて地に落ちた。パラパラと音を立てて落ちていく小石の前に立ちはだかったのは、大太刀を携えた少女。神裂の鋼線（ワイヤー）攻撃『七閃』が、何よりも強固な城壁として攻撃を許さなかったのだ。

「……これはこれは。とんでもなく厄介ねえ……」

先の二人の攻撃とその結果を見て、前に進み出る少女。『心理定規（メジャーハート）』。そう呼ばれる少女が口元に笑みを浮かべながら、スティルと神裂へと平然と近寄った。

「……？　これは……？」

最初に異変を感じ取ったのは、神裂。目の前の少女は、敵方だ。そ

のはずだ。だと言うのに、様子がおかしい。どういうわけか、目の前の少女を攻撃する気が萎えていく。まるで目の前にいるのは敵ではなく、天草式のかつての仲間や、あの白い少女がいるかのように。

そんな神裂の様子を見て、少女はほくそ笑む。これこそが彼女の能力、『心理定規（メジャーハート）』。相手との心理的な距離感を自在に操る能力。『敵対』だったはずの距離を、神裂やステイルが『親愛』を向ける相手と同じくらいの距離へと変えた。通常ならば、それだけで打つ手なし。目的の為なら、愛する相手だろうと殺せる人間でも無ければ対抗手段などありはしない。

しかし。

「……『世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ』」

戦場に、朗々たる詠唱が響き渡る。その詠唱に合わせ、まるで舞い散る花弁のように、何かの記号を書かれたカードが周囲へと散らばり、地面と言わず壁と言わず貼り付いていく。その詠唱は、学園都市の住人たる『スクール』の面々には、まるで意味が分からない。それでも彼女らは、裏世界で曲がりなりにも生きてきた直感が、最大の警鐘を鳴らすのを感じた。

「『顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！――――≪魔女狩りの王（イノケンティウス）≫!!』」

顕れたのは、炎の巨人。近づくだけで肌を焼かれそうな圧倒的な存在が、倒れ込んだフレンダと滝壺のすぐ後ろに発生した。

「……よく勘違いされるんだけど、僕が最も得意とするのは、炎を前面に押し出した『攻勢』ではなく、『守勢』……つまりは『防衛戦』なんだよね」

そう嘯き、次に『心理定規（メジャーハート）』へと視線を向ける。

「成程、僕にとって君はかけがえのない大切な人であるように感じてしまっているよ。ただまあ、問題は無い。僕らの目的は、情報源となる人物の確実な確保。そして、この≪魔女狩りの王（イノケンティウス）≫は、実は『自動制御』が出来る代物でね……」

その言葉に呼応するように、炎の番兵は空へと吼えた。

「『情報源であるその二人に、近づく人間を焼き殺せ』と命じた――さ

て。君の妙な能力は、自律して行動する、人間以外の存在にも効くのかな？」

　ステイルの言葉を聞き、彼女も歯噛みする。精神干渉に過ぎない彼女の能力は、当然機械やただの物理現象には弱い。今の話が本当なら、この炎の巨人には彼女の能力が一切効かないことになる。一応今の話がブラフという可能性もあるが、それを確かめるためには、自分で巨人へと近づく以外に方法が無く、もし駄目なら焼き殺されることになる。そんな危ない橋を渡る訳にはいかなかった。

（潮時か……）

　引き時を考え、アイコンタクトで仲間に合図を送る。傍らの少女がスモークグレネードを投げつけ、円形ゴーグルの少年がその煙を急速に拡散させた。

「……フン」

　ステイルが炎で発生させた上昇気流で煙を散らせると、そこには『スクール』の面々の姿はなく、イノケンティウスに守られるフレンダと滝壺だけが残されていた。

「神裂、そこの二人の応急処置を頼めるかい？」

「ええ、分かりました」

　今も足から出血するフレンダと、何らかの体調不良を抱えているらしい滝壺の手当てを同僚へと任せ、ステイルは周囲に警戒しつつ、紫煙を吐き出した。

「……ん？」

　紫煙の向こう、聳え立つビル群の上空に、奇妙な物体が見えた。それはビルの屋上から屋上へと、ピョンピョンと跳び移るかのように近づいてくる黒い影だ。誰かを抱えているらしいその影が近づくにつれ、正体を察してステイルは苦笑した。

「――さて。彼女らは、どんな説明をしてくれるのかな？」

◇　◇　◇

　翌日。風紀委員（ジャッジメント）第１７７支部にて。

　そこには前日までとは大きくかけ離れた人物が集合し、人口密度が上がっていた。その面々を見て、本来この支部の先輩であり責任者で

ある固法美偉は、額を押さえ、はあぁ、と重苦しい溜息をついて外の空気を吸いに行った。
「さて、そろそろ今回の一件について話を始めようじゃないか」
「そうですね」
「イヤ待て。その前に、何でお前らがこの街にいるんだよ？」
上条が問いかけた人物であり、この妙な空気を作り出している元凶、ステイル＝マグヌスと神裂火織は軽く肩を竦めた。
「先日のアウレオルスの一件で、彼が学園都市の住人と思しき何者かに殺されただろう？　あれは本来は非常に不味い状況なのさ」
現在魔術勢力と科学勢力は、可能な限り明確な住み分けを行うことで微妙な緊張関係を保っている。すなわち科学側は科学側で、魔術側は魔術側で、独自の秩序体系を築くことで、相互不干渉に近い状態にしてあるのだ。
だと言うのに、あの日、元『ローマ正教』の錬金術師であるアウレオルス＝イザードは、科学側である学園都市の住人に殺された。自分たちで粛清を行いたかったであろう魔術側最大勢力『ローマ正教』からすれば、とても受け入れがたい事態であるはずだ。アウレオルスが生きて魔術側の勢力に引き渡されるか、あるいは魔術側の誰かが止めを刺したのならばここまでの事態にはならないのだ。
「幸い、目撃したのは僕一人だったからね。対外的には彼は、ウチの重要人物である禁書目録（インデックス）の誘拐を目論み、あまつさえ実行したため、僕が灰も残さず焼き殺したことになっている。とは言え、ローマ正教（むこう）も馬鹿じゃない。いずれは気付くだろうさ」
「……そうなった際に下手人（うえ）を押さえておき、全面戦争に至らないようにすると言うのが、上層部の意向です。相手は『黄金錬成（アルス＝マグナ）』に至っていた錬金術師を、正面から打倒しうる存在。ステイル一人では戦力に不安があるという事で、私が派遣されました」
そのため二人で街の様子を探っていたところ、あちこちで血生臭い戦闘の跡が発見された。科学的には感知できないレベルであろうが、魔術的な処置が行われず、彼ら二人には容易に分かった。
「……そうして色々と探っていったところ、インデックスのお目付け

役であるはずの君たちが、次々と施設を襲っていると分かったわけさ」

目当ての人物であるキース・グレイこそ見つからなかったものの、目と鼻の先で現在進行形で騒動に首を突っ込んでいる知人。放っておけるものではなかった。

「まあ、そう言う訳で……」

「一体この街で何が起こっているのか、聞かせて貰えますか？」

そうして語られる互いの事情。ステイルと神裂もまた、学園都市の闇の一端を垣間見るのだった。

０６５　咖？―カレー―

「……ん……ぐ……」

学園都市第七学区。大通りから外れ路地をいくつも外れたところに存在する、ボロボロになったビル。先日、長点上機学園の布束が、マネーカードをばら撒く拠点に使っていたビルだ。今現在、一部の不良（アンチスキル）しか使用しないようなビルから、女の子の声が漏れていた。それも、複数。

「……んむ……ん……」

「ふ……ん……」

そうして、その声の一つが、遂に堪えかねたように叫んだ。

「サバカレー、美味（ウマ）ア～～～～ッ!!」

目の前で、提供された食事にがっつく三人の少女。そしてその横の壁際では、これまた同じように食事に飛びつく、特攻服みたいな変な格好の少年がいた。

言うまでもなく、昨日捕縛された絹旗、滝壺、フレンダという少女たちと、何故か勝手に付いて来た削板という少年だった。

そんな彼女らを見て、後ろから様子を窺っていたステイル、神裂、白井らは苦笑しており、全員分の食料を提供した佐天は、彼女らの横で試食の時も含めて四杯目のカレーを平らげているインデックスを見て、天を仰いだ。

「なんでこんな事に……」

昨晩、襲撃した施設での戦闘が終わり、施設から撤収する段階になって、まず最初の問題が発生した。施設に防衛を目的とする能力者がいたことから、御坂が向かった施設にも仲間がいる可能性が高まったのだ。そのため、怪我で能力の行使が上手くいかない白井を、佐天が背負い急いで向かうことになったのだが、予想外の事態が起こった。

それまで事態を静観していた削板が、こんなことを言い出したのだ。

『色々細かい事情がありそうだし、俺もついてくぜ!!』

そう言うと、気絶していた絹旗を背負い、佐天の後に追従。ステイルたちとの合流後、翌日彼女らが目覚め尋問するまでの間、見張り役まで引き受けてくれたのだ。ちなみに、翌日までの食料を手渡した後、建物にはステイルと神裂が張り巡らせた脱走防止と破壊検知の結界が張られていたが、翌日佐天らが到着するまで脱走の様子は一切無かった。

そして、今まで見張ってくれていた削板への感謝と、昨晩から碌に食べていないであろう三人への差し入れの意味も込めて、食事を提供したのだ。安くて量が買える『水煮のサバ缶』と、庶民の味方『カレーライス』の合わせ技一本、『サバカレー』を。レベル0ゆえに、月末のヤバイ時期に、もう何度もお世話になった『サバカレー』を!

そうしたら、御覧の通りの大好評である。

すっかり調子を狂わされたが、それでも何とか気持ちを奮い起こして、彼女らへの質問をすることにした。

「えっ……と……お腹が満たされたら、そろそろこっちの質問に答えてくれないかなぁ……なんて」

その言葉に一心不乱に食事にかぶりついていた三人の少女は、ピタリとその動きを止め、残りを一気に食べ切り、その食器を地面に置いた。

「超黙秘します」

「……北北東から信号が来てる」

「結局話すことなんて無いってワケよ」

半ば予想通りに黙秘を始めた彼女らを見て、佐天は一つ嘆息した。いや、一人については、黙秘なのかどうかも分からないが。現在進行形であらぬ方向を見てぼーっとしてるし。

そんな佐天の後ろで眉をしかめた白井が、彼女らの尋問を変わった。

「黙秘と言いますが……そもそも貴女方は、一体何処の何方ですの?

あの施設を運営する企業の人間なのか、それとも外部からの人間なのか――そういったことくらいは教えてくれてもいいんじゃありませんか？」

そんな白井の質問にも、彼女らは黙秘のまま。つーんとそっぽを向いて、一切を答えようとしない。そんな彼女らを見て、佐天はアプローチを変えた。

「ん～～……あっ！　それなら、少しでも話してくれた人に、残りのカレーをプレゼントします！　一番最初に話してくれるなら――」

そう言って持ってきた大鍋を振り返り――

――鍋に直接スプーンを突っ込んで、残りの全てをさらって食べているインデックスを目にした。

「……」

「……」

「……」

その場の全員に、沈黙が降りた。

「……えっと、じゃあ他の賞品を「ちょちょちょちょちょっとちょっと?!　なに、なんでこの娘（コ）、私らの食料奪って食べてるワケ!!?」

……」

気を取り直そうと思った佐天の言葉は、激昂したフレンダの言葉に遮られた。

「えー、でも神様からのお恵みである食事は、余したらいけないんだよ。ウチの宗派でも、食事の際には主への感謝を述べてから、余さず残さず食べ尽くしなさいって教えてるし」

「結局宗派とか知らないっての！　私ら昨夜から、そこの黒髪ロングが置いてったカップ麺しか食べてないってワケよ！　す・ご・く・お・腹・空・い・て・た・の!!　なんで食べてるの、なんで!?」

「フレンダ、超落ち着いてください。話が進みません」

「これが落ち着いてられるかっての！　もう倍プッシュくらい報酬の

上乗せがあれば、全部ゲロってカレーも報酬も総取りしようとか思ってた私の計画が水の泡なワケよ!!　わかる!?　この悔しさ!」

「……今のは、聞かなかったことにします」

「……今度の信号は東北東から」

目の前で繰り広げられるコントのようなやり取りに、佐天は頭の横が少し痛くなる思いだった。

とりあえず話を戻すため、一度溜息を吐いてから一言。

「――分かりました。そちらの事情が話せないなら、こちらの事情を話せる範囲まで話します。そちらが話すかは、その後決めてください」

そうして佐天から語られたのは、フレンダたちが防衛していた施設群で行われていた実験の詳細。国際法違反である人間のクローンの製造と、その虐殺。そしてそれを利用した『絶対能力（レベル6）進化計画（シフト）』のこと。それをどうして佐天たちが止めようとしているか、御坂近辺の事情だけは隠したまま、他は包み隠さずに微に入り細に穿って説明した。

先程、第177支部で同じ説明をされたステイルと神裂の眉間にしわが寄る。御坂達から聞いて知ることが出来た事情は、彼女らの想像を絶するおぞましさだったからだ。魔術側である彼らに出来ることは少ないが、それでも可能な限り力も貸そうと決意させるほどだった。

どうやら彼女らはあの施設の研究は知らされていなかったのか、佐天の説明にわずかに驚いた様子が窺えた。もっともそんな様子が見えたのはフレンダだけで、絹旗はポーカーフェイス、滝壺は相変わらず虚空を見つめていたが。

そして、削板は。

「分ぁかっっったぁぁぁっ!!　そんな根性の足りねえ悪党は、俺が全部ぶっ潰してやるっっ!!」

と、大声で息巻いていたが。信じられないことだが、彼はこれでも学園都市が誇る超能力者（レベル5）の第七位らしい。昨晩のホストも第二位らしく、思い切り敵に回っていたが。削板は短い間でも真っ直ぐな心根

が窺えて、佐天にとっても大分心強いものがあった。
そして叫ぶ削板から、改めてフレンダら三人の方へと向き直り、再度尋ねてみた。
「……とにかくそう言う訳で、あの施設は違法な研究をしていた企業の手先なんです。防衛に回っていた皆さんなら、詳しい内情ですとか、私たちの知らないことも知っているかもしれないので、協力してほしいんですが……」
そう言って頭を下げる佐天に、黙りこくっていたフレンダが、はぁ、と一息。
「――悪いけど、色々な事情を知っても情報提供とか出来ないってワケよ。そもそも私らの所までは、そんな詳しい情報なんてカケラも降りてきてないし」
絹旗が一瞬フレンダへと鋭く視線を向け、口を閉じさせようとするが、それを手で制し、フレンダは語り続ける。
「結局アンタらも隠してることは有りそうだし、こっちも詳しい話はしないケド。私らは上の詳しい事情とかは一切聞かず、単純に『仕事』としてあの施設の防衛を請け負った。それ以上でも以下でも無いワケ。そっちが知りたがる向こうの内情とかは一切知らないしー、あえて聞かないのが長生きの秘訣なワケよ」
そこで話を切り、再び部屋を静寂が包む。そのまま何分か白井やステイルらは彼女らに鋭い視線を向けていたが、やがてふっと肩から力を抜いた。
「……事情をあまり知らされていないと言うのも想定の範囲内でしたが、全く何も知らされていませんでしたか」
「まあ、組織という物はそういうものだよ。上に行けば行くほど隠し事が増え、下に行けば行くほど碌に事情も知らされずに使い潰される。僕達も、つい先日痛感したばかりだからね」
そうなると、彼女らに聞くことは既に無い。この場で彼女らに危害を加えるつもりも更々無いため、このままお帰りいただくことになった。
見張りを頼んでいた削板を連れ、佐天たち全員が白井の空間転移（テレポート）で

次々に外に出ていく。最後に残った佐天が彼女らに声を掛けた。
「情報は得られませんでしたが、これ以上皆さんに危害は加えません。私が去った後は、皆さん元の場所に戻って貰っても結構ですので！それじゃ！」
再び戻った白井と共に、佐天の姿が虚空に消える。それを見届けた後、張り詰めていた緊張を解すようにフレンダや絹旗は、そっと息を吐いた。
彼女らがいたビルからほど近い雑居ビルの屋上。そこに白井や佐天と共に、一人の半透明の少女が降り立った。
「――それで、ユーゴーさん。彼女らの言っていたことは事実ですの？」
白井が話しかけたのは、ユーゴー・ギルバート。世界最高峰の『精神感応（テレパス）』能力者。実は尋問の間中ずっと、ユーゴーが彼女らの思考や心理状態をスキャンしていたのだ。その結果に、彼女は首を振る。
『事実ですね。彼女らは仕事先である研究所のことは、一切知らされていません』
つまり、ただの雇われの警備員のようなもの。大した情報が得られなかったことに一同が落胆していると、不意に、白井の携帯端末が振動した。
「初春？　どうかしましたの？」
『大変です、白井さん！』
画面を見て不審に思い、電話をかけてきた初春へと尋ねた白井の言葉を、周りにも聞こえる大声が打ち消した。
『御坂さんが、いなくなりました!!』

０６６　迷走―アベレイション―

少し時を遡り、佐天たちが捕縛したアイテムの三人の様子を見に行っていた頃。

「――変ね」

御坂の姿は、昨晩襲撃し残していた一つの研究施設にあった。

「研究員の出入りが見えないし、内部の明かりも点いているように見えない……本当にここであってるの？」

『はい、そのはずです。当初の資料に記載された研究施設としては、ここが最後になります』

「そう……」

キース・グレイから提供された計画関係者の資料。それに従うのは業腹だが、御坂自身と初春できちんと裏は取ってあるし、何より一番の手がかりでもあった。もう一度施設の内部を双眼鏡で覗き見て気を引き締める。

「……でも、ここまで誰もいないと……やっぱり罠の可能性が高いわね」

「もしそうなら、俺の出番ってことだな？」

「いや、必ずしもそういうわけじゃ――あー、もう！　なんで付いて来たのよ!!」

双眼鏡を覗き込んでいた御坂が、視線を横へと向ける。そこには同じように施設を覗き見る上条の姿があった。

「いや、何でって言ってもなあ……昨夜あんなことがあったばかりだし、また能力者が施設の防衛についている可能性もあるから、白井からも是が非でも付いて行けって話だったろ？」

「確かに、アンタの右手は能力に対しては反則みたいなもんだけど……それにしたって！」

「それにさ」

御坂の言葉を途中で切り、上条が微かに呟く。

「お前の妹が何人も犠牲になってるなんて聞いて、放っておけるわけ

ないだろ？」
「……！」
上条のその言葉に、思わず御坂が赤面する。顔を俯かせ、ゆっくりと深呼吸して動悸が治まるのを待ち、それからようやく施設へと突入した。
「――で、結果がこれか」
「データの最後は、施設の管理会社の破産宣告で終わってる……つまり施設は完全に破棄されたってこと？」
施設の内部は、拍子抜けするほどに何も無かった。警戒していた施設防衛の能力者はおろか、人っ子一人見当たらず、内部のデータを探ってみたらそれである。破産した会社に研究を維持できる余力がある訳はなく、常識的に考えれば研究は道半ばで頓挫し、ストップしたと言えるだろう。
データを一通り漁ってそこまで理解すると、御坂の膝から力が抜けた。
「……はーーーーっ」
終わった。研究は止まったのだ。未だ計画の中で作り上げられた妹達（シスターズ）の消息は分からないけれど、計画の通りに無為に生命を絶たれる事態は去ったと考えていいだろう。
――勝ったのだ。
「よかったぁ……」
そんな安堵しきった御坂を見て、上条もまたほっとしていた。最近の彼女は気を張り詰め過ぎなところもあった。佐天たちと合流してから、少しはそれも薄れたが、それでもいつかぷつりと切れてしまうのではないかと危惧していたこともあったのだ。
「……さて、いつまでもここにこうしているわけにもいかねえな。つぶれた会社に不法侵入したなんて理由で警備員（アンチスキル）に捕まりたくねえし」
「あー、そうよねー……妹達（シスターズ）のコたちも見つけてあげなきゃいけないし」
『あ、そっちは私がやっておきますよ。破産会社の資産や研究資料が何処に移ったのか、追跡調査は任せてください』

その後、初春に妹達（シスターズ）の追跡調査を依頼し、御坂と上条は施設から退去、近くにあった公園でやっと一息ついた。

御坂がベンチにどかりと座り、およそ乙女にあるまじき声を上げた。

「あ〜〜……」

「いや、気ぃ抜きすぎだろ……ジュースでも奢るから、気合入れ直せって」

「じゃー、『ヤシの実サイダー』をお願い……」

御坂の注文を受け付け、財布から紙幣を取り出して差し込む……が。

「ん？　あ、あれ!?　反応しない!?　しかも、札も飲み込んだまま出てこない!?」

「んー……？」

不幸だー！と叫ぶ少年の後頭部をぼんやりと見つめ、御坂がのろのろとベンチから起き上がった。

「あー……ここ紙幣飲み込んでも、出てこないことあるのよね。センサーが壊れてるみたいでさ」

「知ってたんなら、教えてくれよ！　何、何だ、何ですか！　俺のなけなしの二千円はこのまま戻ってこないという事なんですか!?」

「は……？」

にせんえん？二千円。何故目の前の少年は、そんな半端な金額を自動販売機に入れているのだろう。そんな中途半端な金額にするには、千円札を二枚入れるか、もしくは……あ。

「え、なに、何何！　もしかしてもしかすると、あの絶滅危惧種の二千円札!?　もはやＵＭＡか都市伝説並みに存在が危ぶまれてる、あの二千円札!!」

さっきまでの物憂げな様子はどこへやら、完全に復活し目を輝かせた御坂の姿がそこにはあった。

「ぐあー！　そうです、そうですよ！　コンビニに持って行っても嫌な顔されるし、ＡＴＭでも受け付けてくれないし、古そうなここでなら受け付けてくれるかと思ったんだよ！」

「あはははは！　そりゃ機械もバグるわよ、あはははははは!!」
　己が不幸を嘆き続ける少年を、腹を抱えて大笑いしながら眺める、学園都市有数のお嬢様学校常盤台中学の模範的生徒、御坂美琴の姿があった。
「よっし！　それじゃあアンタの二千円札、私が取り返してあげましょう!!」
　そうして、その数分後。
「不幸だ……」
　膝一杯に大量のジュースを乗せて、頭を抱える高校生の姿があった。なんの事は無い。御坂が二千円札を取り戻そうとして行った行動は、自動販売機に高電圧の電流をブチ込むというものだったのだ。そして、出てくる大量のジュース。高校生にして、器物破損と窃盗の現行犯である。なお、魔術師との戦闘で学生寮を粉砕したり、違法な研究施設への不法侵入を行ったことについては、頭の隅に追いやっている。どちらも緊急避難的行動だったと、考えるようにしているのだ。
「アンタねえ、女に荷物持たせて一人だけ逃げてんじゃないわよ」
「いや、あれは単に共犯にされたくなかっただけと言うか……」
「元々アンタがお金飲み込まれたのが原因でしょうが。あ、それじゃあ『主犯さん』、ヤシの実サイダー貰うわよ」
「なんで俺が主犯になってんだ!?」
　ベンチに並んで座り、ギャアギャアと言い合う男女。傍から見れば付き合っているように見えなくもないそんな二人に、不意に声をかけた存在がいた。
「――お姉様？」

◇　◇　◇

「……で、彼女に出会ってすぐに、止める間もなくお姉様が飛び出して行ってしまった、と」
　時間は戻り、場所は風紀委員（ジャッジメント）１７７支部。御坂がいなくなったこと

を知り、とにかく全員一度集まって状況を確認することにしたのだ。
「無理もありませんわね……終わったと思った矢先に、出会ってしまったんですもの」
そう言って白井が視線を向ける先。部屋の隅に備え付けられたパイプ椅子に座っているのは、小さな黒猫を抱えた、御坂美琴と同じ容姿を持つ少女。ミサカ１００３２号を名乗る少女だった。あの後立ち去ろうとする彼女を、上条が止め、そのままここへと連れ込んだのだ。抱えている黒猫は、道すがら拾った。
彼女の言によれば、今も変わらず実験は継続されており、昼前にも実験の一つが終了したとのこと。
「計画を主導していた会社が破産したはずなのに、計画が変わらず実行される……どういう事なのか。初春、調べは付いていますわね？」
「あ、はい、白井さん」
そうして初春が出してきたデータ。それによれば、破産会社の抱えていた利権は昨夜のうちに大量の企業へと分散・移譲されており、実験についても同様。学園都市に点在する様々な企業がこの計画を遂行しようと協力関係を結んでいる状態だというのだ。
『昔のエグリゴリと一緒ね。利権があるところに群がった企業が、血生臭い実験を実行する複合企業体（コングロマリット）を形成する。全く同じ流れだわ』
現在の状態を聞き、虚空に姿を生じさせたバンダースナッチがそう嘯く。アリスの記憶を体感し、酸いも甘いも噛み分けた彼女が一番状況への順応が早かった。
「いや、でもさ、バンちゃん。いくらなんでも早すぎない？　施設をいくつも潰していったのは、ここ数日のうちなのに、こんなに早く大量に、なんて……」
『別に、何も不思議じゃないわよ』
佐天の疑問にも、バンダースナッチに動揺は見られない。企業群が表示された端末の画面の向こうに、『真の敵』を見つけたように睨みつけた。
『破産会社も、この企業群も、表に出ているだけの生贄（スケープゴート）の羊よ。こんな短期間に、これだけの手を回せる存在なんて――――この学園都市（まち）

そのものしか考えられないわ』

その言葉に、その場にいた全員が絶句する。学園都市、ひいてはそれを統治する統括理事会。この実験は一部の上層部の暴走などではなく、上層部全体が主導して行っている実験だと言うのだ。もはや一学生で止められる範囲を完全に超えていた。

『それだけの存在が行っている実験を、力ずくでも止める……生半可な覚悟では出来ないわ』

バンダースナッチの言葉が、静かになった部屋へと響く。後にはただ、重苦しい空気だけが残っていた。

０６７　運命―フェイト―

「――結局、御坂さんはどこに行ってしまったんでしょう？」
バンダースナッチからの衝撃的な推測の後、衝撃を受けて沈黙する皆の中で、初春が話題を変えるように呟いた。
『さてね。けど、彼女もこの事実に気付いてるはずよ。そして、学園都市全体が敵なんだとして、それでも彼女がこの実験を止めるつもりなんだとすれば――――取り得る手段は、そう多くない』
◇　◇　◇
すっかり暗くなった街並み。完全下校時刻を迎え静けさを増す街の一角で、彼女もまた同じ結論に至っていた。
「……敵は、学園都市、かぁ……たった一日で、よくもこれだけ集めたモンよ……」
データ参照のために入り込んだアクセスポイントで、御坂美琴はまるで力が抜けたようにずりずりと壁によりかかり、へたり込んだ。新たな実験参加企業は、数百にも上っている。これを自分たちだけで全て潰して回るなど、事実上不可能だ。
「――いや、潰しても無駄なのか」
この手回しの速さといい、恐らく潰してもまた増やすだけなのだろう。最初から気付くべきだった。学園都市は、常に衛星軌道上の監視衛星で見張られており、警備員（アンチスキル）は犯罪者の追跡のためにそのデータを参照することすらある。佐天に名付けられたあの娘のように、密閉されていない操車場や屋外で行われていた実験が、衛星に見つからないわけが――
――そこまで考えて、気付いた。
「――――あ」
思いついたのは、本当にわずかな光明。この実験を止められるかもしれない最後の可能性。……けれど。
「……」
それをしてしまったら、もう後戻りが出来ないのは確実で。それに

関わってしまったら、みんなまとめて捕まるしかないと分かった。これが最後のターニングポイントだと分かった。

だから、彼女は。

「――――」

無言のまま、彼女は決してみんなの元に帰ることは無く、闇の中へと歩いて行った。

◇　◇　◇

『この実験を確実に止める方法は、いくつかあるわ』

バンダースナッチが、その場にいる全員の前に、半透明の指を差し出す。まず人差し指を一本立てた。

『一つは、実験を行っている施設を残らず破壊すること。当初私たちはこれを行っていたわけだけど、この方法はもう却下ね』

今ある施設を破壊しても、すぐに増やされるのでは意味が無い。もうこの実験はそんなやり方では止まらない。ゆえに、二本目の指を立てる。

『次の方法としては、実験を行う『意味』そのものを破壊する事。意義を失わせると言ってもいいわ』

「意義、ですか？」

『ええ。目的を消失させるのよ』

そもそもこの計画は、学園都市第一位と第三位を何百回と戦わせるという有り得ない『仮定』で、第一位が絶対能力（レベル6）に至るという『結論』が得られてしまったことから始まっている。ならば、その『結論』が間違っているという純然たる事実が得られてしまったなら――。

「計画は白紙に戻される、とそういうことですか」

「魔術側なら、それでも個人の感傷を優先して暴走する馬鹿も出るものだけどね。そこらへんドライなのは、科学側ゆえか」

この場では少数派に属する神裂とステイルが、そう嘯く。ステイルの言葉は、そうした暴走した『馬鹿』も何人か見てきたために漏れた実体験だろう。

「で？　その『仮定』と『結論』を出したのは、何処のどいつなんだい？」

当然、何者かがそれらを生み出して、計画の進行も主導しているものと思い、ステイルが尋ねる。しかし、送られてきたデータから計画の内容を把握した初春と白井は、その言葉を否定した。

「計画の前提となる結論は、人間によってもたらされたものではありません」

「今回の計画は、有り得ない前提条件を可能な限り正確に導き出すために、とある研究機関を予測演算に利用していますわ。それこそが――」

◇　◇　◇

「――『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』」

既に明かりが落ち物音ひとつしない施設の中、御坂は一人周囲を探りながらコントロールルームへと急いでいた。彼女がいるのは、衛星軌道上に存在する『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』とデータをやり取りしている研究棟。学園都市にとっての最高頭脳と、唯一間口が開いている施設に彼女は侵入していた。

（ここから『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』にアクセスして、以前のデータに重要なバグが発生したと送信できれば！）

実験を継続する意味を、無意味に出来れば。そうすれば、もう妹達は、死なずにすんで。もう誰もこんな実験なんかで、遺伝子情報を与えた自分のせいなんかで、死ぬことも傷つくことも無くなって。

そんな世界を夢見て、御坂はコントロールルームにたどり着き。――そして、絶望する。

◇　◇　◇

『――確かに『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』が、今からでも実験に重大な瑕疵があると弾き出せば、計画全体は止まるかもしれない』

その点は、バンダースナッチも認めた。しかし彼女と、計画に関する情報を得るため、電子の海に潜っていた初春の表情は優れない。二人は、既に知ってしまったから。

『……こんなガラクタに、まだ演算が出来ればだけどね』

差し出された一枚の衛星写真。そこにはかつて『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』を搭載していた人工衛星、「おりひめⅠ号」の無残な残骸が写し出され

ていた。『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』は、7月28日未明、学園都市から突如として撃ち上がった『謎の閃光』によって撃墜されていたのだ。

「……あの時の『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』ですか」

あの日。インデックスに仕掛けられた、『首輪』との戦いの日。彼らは、空高く撃ち上がる閃光を確かに見た。人のいない場所へと放たれたとばかり思っていた一撃は、巡り巡って彼らへと報いを返したのだ。

『……こうなると、もう実験を止めるのは誰かの犠牲無しには無理かも知れない』

「……当時者を、『殺す』ってこと？」

実験の主導者である学園都市の最高権力者、すなわち統括理事会。彼ら全員を殺すか、もしくは。

「第一位を、殺す、か……」

レベル6に至る予定の者。代わりの効かない当事者。彼がいなくなれば、確かに実験は止まる。だけど。

「大量の犠牲を防ぐために、少数の犠牲を許容するのかい？」

そう皮肉気に聞くステイルは、内心では彼女らのことを気遣っていた。自分ならば、良い。自分ならば目的のために手を汚す覚悟も、少数の犠牲も許容してきた。だが、彼女らは。

やがて重苦しい空気が場を満たす中、今まで一言も喋らず、考えに没頭していた上条が顔を上げ、全員を見据えた。

「――そんな覚悟も、許容も、する必要ないぜ」

その言葉に全員が彼を見返す。そこにいたのは、一切揺れていない、彼の姿。

「わかったんだ。実験を、計画を止める方法が」

あの日、インデックスのために、絶望的な戦場で最後まで諦めず、戦いに赴いた彼の姿。

「――――俺が、戦う」

◇　◇　◇

同じ頃、ある移動車両の中では。

「クソがッ、クソがぁぁぁっ!!」

歯をむき出しにして激昂する女性と、その眼前で縮こまる三人の少女の姿があった。

「あ〝あ?!　せっかく捕まえたお前らを、ろくな尋問もしねぇで、すぐに放り出しただぁっ!?　ンだよ、そりゃぁ！　余裕か、余裕なのかよ、ああッ!?」

ガンガンと周囲の機材を殴る麦野を見て、より一層身を縮めるフレンダと絹旗。滝壺だけはいつも通りで、二人は心底彼女が羨ましかった。

「面白そうな実験だから、放っとくつもりだったがよぉッ！　このまま舐められたままじゃ、すませねえなぁッ!!」

◇　◇　◇

同刻、ある雑居ビルにて。

「……」

「……」

「……」

重苦しい沈黙が、部屋中を満たしていた。スクールのメンバーが集うその部屋を包む、その沈黙の発生源は。

「……殺す」

濃密な殺気を放ち、窓の外の景色をぼうっと眺める垣根帝督だった。

◇　◇　◇

そして。

「……予想では、明日には決着が付くのよね？」

ある廃棄施設の中で、布束は同じく作業に没頭していた少年へと声をかけた。その少年は、手近な端末に向け、一心不乱に何か入力していたが、やがて手を止めると。

「――ああ」

彼女の問いに遅すぎる返答を為し、ゆっくりと顔を上げた。

「ようやく――――この時が来た」

その面に浮かんでいたのは、どこか狂喜じみた笑み。その瞳の先、透明なカプセルの中では、傷一つない四肢を晒し、瞳を閉じてゆった

りと眠る御坂ミコの姿があった。

◇　◇　◇

そして、翌日８月２１日。

この星に息づくすべての人類にとって、運命の日が訪れる。

０６８　英雄―ヒーロー―

８月２１日、午後。ゆっくりと水平線へと沈んでいく夕日を、御坂美琴はぼんやりと眺めていた。何も考えが起きない。何のやる気も浮かばない。本当にただぼんやりと眺めていた。

万策尽きた。もう御坂には、実験を止めるアイデアは浮かばない。それこそ計画の当事者である一方通行（アクセラレータ）を、排除でもしない限りは計画を止めることなど出来ない。――あの第一位を？

「――――は、ははは……」

無理だ。どう考えても無理だ。アイツの能力は、そんな次元じゃない。どんな雷撃も、磁力で操った鉄骨や砂鉄も、理不尽すぎるチカラの前に簡単に打ち破られた。あの最初の交戦で、自分ではまるで敵わないと悟ってしまった。自分では、逆立ちしたってアイツには勝てない。

（……だったら、後は……私が計画の『敵役』としての価値も無いって証明するくらい、か……）

もうそれくらいしか方法がない。計画当初の演算では、自分が第一位と交戦した場合、善戦するも最終的に敗北すると書かれていた。いったい何手で敗北するかも克明に。

彼女が思いついたのは、第一位と彼女自身が交戦し、初手で無様に負けること。演算に誤りがあったと、計画が間違いだと気づかせる、本当に最後の手段。本当に、それしか思いつかなかった。

「……あれ？」

気づくと、彼女の両手は震えていた。かたかたと始めは小さく、やがては全身を包むように大きく。震えが、止まらない。歯の根が合わない。

――ああ、そうか。ここに来て、彼女はようやく悟った。彼女は怖いのだ。恐ろしくて仕方がないのだ。これから、死ぬことが。そうして、自分が死んでも実験が止まらないかも知れない可能性が、怖くて仕方ないのだ。

「……」

ぎゅっと、寄り掛かっていた橋の欄干を握り締める。この街に来る前、自分にはどうしようもない出来事があると、彼女は母親に頼った。千切れてしまったぬいぐるみの腕や、破けてしまったお気に入りの洋服は、一晩眠るとまるで魔法のように元通りになっていた。あの頃、彼女にとってのヒーローは、母だった。

「……」

今、この街に、彼女のヒーローはいない。

「……」

たすけてよ」

彼女が、ほんの少しだけ呟いたその言葉を、拾い上げてくれるヒーローなんて――――

「――なにやってんだよ、お前」

その言葉に、御坂が顔を上げた。視線を向けると、そこにツンツン頭の少年がいた。その後ろには、佐天が、白井が、初春が、そこにいた。それだけではない。さらにその周りには、インデックス、姫神、ステイルや神裂と魔術側のはずだった者たちまで勢ぞろいしていた。

「……なんでもないわよ。次はどこの施設を襲って、計画の妨害するか考えてただけ」

「……」

嘘だ。もうそんな方法じゃ止まらないと身に染みていた。それでも、御坂は自分の内心を知られるわけにはいかなかった。知れば、絶対に止めると分かっていたから。しかし。

「……そっちは後回しだ。計画を止めにいくぞ」

「――――え？」

上条は御坂の態度には何も言わず、ただ計画を止めに行くと言った。どうやって？そんな方法があるわけないのに。

「この間俺達とあったいちま――いや、御坂妹から、この実験の前提条件をもう一度詳しく聞いたんだ。どうすればこの実験を止められる

のか調べるために」

「……」

佐天たち、集団の後ろからひょっこりと顔を出す、両手首を拘束された自分と瓜二つの少女を見て、御坂もぼんやりと思い出した。彼女に出会って実験が終わっていないと気づき、皆の所を飛び出してしまったことを。そうか。皆はその後、彼女から詳しい情報を得て、止める方法を探していたのか。

だとしても。仮にそうだとしても、この実験は止められない。実験の結論は既に『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』で出されてしまっていて、今更覆せない。『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』にハッキングして違う結果を出させようにも、すでに本体はガラクタになり下がっている。その上計画の主導者は、この学園都市そのものだ。今さら言葉を尽くしたところで、止まる訳が無い。こんな状況でどうやって？

そんな疑問が口をついて出そうになった時、上条は言った。

「――――俺が戦えばいい」

その言葉を聞いた当初、御坂には意味が解らなかった。

「……え？」

「この一連の計画ってのは、『超能力者（レベル5）第一位、一方通行（アクセラレータ）が最強だ』って前提の上に成り立ってんだろ。だったら、その前提を崩してやればいい」

「……」

「例　え　ば　―　―　―　―　『無能力者に負けるくらい、第一位は大したことねえ』って気づかせればいいんだ」

「――――！　ダメよ!!」

確かにそれなら、実験は止まるかもしれない。目の前の少年は、無能力者（レベル0）。本来なら、天地がひっくり返っても勝てる訳が無い。けれど彼の右手には、異能に対して問答無用の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』がある。可能性が無いわけじゃない。

だけど、それはつまり、右手以外は完全に生身の人間が、あの第一

位に挑むということ。
「そんなことしなくていい！　私がなんとかしてこの計画を止めるから、アンタは――」
「どうやってだ？」
その言葉に、わずかに詰まる。彼女にも分かっている。確率の問題で言えば、上条の案の方が実験が止まる可能性が高いことを。自分の案では、止まらない可能性が高いことも。それでも。
「……計画は、私が第一位に善戦することも前提にしてるわ。だったら、私に、そんな価値なんてないってことを示せば……」
御坂は、精一杯虚勢を張る。目の前の少年を、決して死地に行かせないために。たとえ自分が死ぬとしても、もうこの計画のために、自分以外の誰かが傷つかないように。
けれど。
「――お前、死ぬ気なんだな」
虚勢にもならなかった。なんで隠せないんだろう。なんで見透かしてしまうんだろう。そんなことを思いながら、ふらふらと欄干から身体を起こす。
少年は、両手を広げて立ち塞がっていた。
「……どいて」
「……どかない」
「……どきなさい」
「……どかない」
「――!!」
激昂し、迸った紫電が周囲のアスファルトを焦がした。
「退きなさいよ！　私一人が死ねば、そのコたちは助かるの！　たった一人の犠牲で、何千人もの人間が助かるの！　それは、この上ないくらい素晴らしいことでしょ!?　だから、そこを退きなさい!!」
「……」
変わらず、少年は両手を広げていた。ほんのわずか視線を後ろの御坂妹に向け、呟く。
「……お前一人が全部背負って、犠牲になることで、アイツらは本当に

幸せになるのか？　笑ってられるのか？　感謝でもしてくれるってのか？　……そんな訳ねえだろ」

「……！」

わかってる。そんなことは分かってる。けどそのために、目の前の少年を犠牲にしたくない。もう自分のために、誰かに傷ついて欲しくない。

だというのに、そんな彼女の内心を知ってか知らずか、目の前の少年は、僅かに微笑みながら呟いた。

「それに、さ。お前が犠牲になっちまったら、俺は明日からどんな風に笑えばいいかわかんねえよ」

「……え？」

その言葉に、胸の奥にほんのりと火が灯った。

「俺だけじゃない。白井も、初春も、佐天も、インデックスも、姫神も、お前がいなくなっちまったら、皆笑えなくなっちまう。そんな明日になっちまう」

その言葉に、揺らぐ。決意が揺れる。だめだ。けど、だめだ。……止めないと。

「……無理よ。アイツには……」

勝てるわけない。敵うわけがない。

「そうかもしれねえな。けど、やってみなくちゃ、何も始まらねえだろ？」

そうじゃない。そうじゃないんだ。ここは、学園都市なんだ。ぬくぬくと丸まっていられた幼いころのぬくもりの中じゃないんだ。ここには優しく見守ってくれるママも、温かい家庭も、どこにも無いんだ。あるのは冷たい計画という名の現実と、無機質で非情な実験場の街並みが横たわっているだけなんだ。

――だから。

「だから、さ」

（待ってればなんでも解決してくれる、ヒーローなんて――――）

「待ってろよ。必ずお前も、御坂妹も、みんなが笑える明日にする――

――約束する」

ヒーローは、いた。

◇　◇　◇

「……あン？」

そうして、それから数時間後。コンテナ群のただ中で、全ての元凶たる白い少年と、ツンツン頭の彼女のヒーローは対峙した。

０６９　決戦―バトル―

８月２１日、夜半。次なる実験予定場所で相手を待っていた一方通行（アクセラレータ）は、やって来た予想外の相手に怪訝な顔をした。

集団の先頭に立つのは、ツンツン頭の男子高校生。見た目は平凡。強いと言われる高レベル能力者の中にはいなかったタイプの人間だ。その後ろにいるのは、それぞれ違った印象を受ける中学生くらいの女子が五人と、高校生位の奴が一人。その中に先日襲い掛かって来た二人の少女を見つけ、さらに集団の後ろにいる、今回の実験相手と見られる今までの相手と全く同じ顔をした少女を見て、はぁと溜息を漏らした。

「なンだなンだァ、なンですかァ？　てめェ等は人払いもまともに出来ねェのかよ？」

大方、前回襲ってきたオリジナルが、安っぽい正義感でも発揮して、おまけに徒党を組めば勝てるとでも勘違いしてやって来たんだろうと当たりをつける。自分の居場所を探るために、今回の実験相手も捕縛されたであろうことも。

「……全く、だりいなァ。コイツはアレかァ？　目撃者は皆殺しってお決まりのパターンかァ？　参るぜ、量産品の人形じゃねェ一般人殺すってェのは――「黙れよ」――あァ？」

先頭の高校生の声に、言葉を切る。その時になってようやく目の前の少年と視線を合わせる。少し、驚いた。瞳に怯えの色が全く見られない。そのことに、少し興味を抱く。

「……お前わかってンのかァ？　この俺は、超能力者（レベル５）の第一位。つまりは、学園都市の抱える２３０万人の能力者の頂点に立つって意味で――」

「――ぐだぐだ抜かさねえで、テメェはもう黙れって言ってんだ!!」

激昂した少年の言葉に、一方通行の言葉が途切れる。面白い。目の前の少年は、第一位という彼の実力にビビッてはいないらしい。もっとも、今までにいたそんな数少ない相手でも、自分がほんの少しチカラを使ってやれば、その瞳を恐怖に染めてきた。目の前の少年がどん

な風に表情を歪めるのか、一方通行の中で嗜虐心が頭をもたげる。
「……お前、面白ェわ」
たん、と軽く踏み出した足の裏、地面一帯に縦横に罅が入る。それに対しても少年は、恐れを見せない。決意に満ちた表情を見せるだけだ。
「どれだけ、そのやせ我慢が続くか見せてみろよォ、三下ァ!!」
物理法則を超越し、地面と平行に高速で移動する。対する少年は、ただその右手を拳の形に強く強く握り締める。
「テメェらがこんな血生臭い方法でしか、目的を遂げられねえって言うんなら――」
相手を見据え、その拳を強く大きく振りかぶる。
「まずは、その幻想をぶち壊す!!」
◇　◇　◇
「……始まったわね」
眼前で繰り広げられる無能力者（レベル0）と超能力者（レベル5）の戦いに、御坂が呟く。本当は、上条一人で挑ませたくはなかった。しかし、ここにいるのは初春や姫神を除けば、レベル4～レベル5の高位能力者。その一人でも彼らの戦いに手を出せば、第一位の打倒が叶っても計画が頓挫しない可能性がある。そして、そもそも魔術側であるインデックスは、絶対に手を出すわけにはいかない。科学サイドとの抗争に発展する事態だけは避けねばならなかった。
「るいこ……とうまは、勝てるよね？」
「……」
不安そうにするインデックスの言葉に、咄嗟に返すことができない。あそこにいるのは、学園都市の頂点だ。先日不意をついて倒せた第二位とは格が違うと分かるからだ。
それでも、一人魔術サイドの人間であるために、どんな事態に陥ろうとも手が出せない彼女の不安を少しでも拭うため、佐天は空元気でも明るい声を出した。
「だーいじょうぶだって！　上条さんならあんな白モヤシ、すぐにケチョンケチョンにして戻って来るって！」

「そうですわね。何だかんだであの類人猿さんはしぶといですから、相手が第一位でもゴキブリ並みの生命力で生き残れますわ」
「し、白井さん、酷いです……」
「でも。事実」
皆が口々にインデックスを励ます中、ちらりと御坂の方へと視線を向ける。その拳はきつく握り締められ、口元も固く引き絞られている。今、この場で一番辛いのは彼女だろう。それが分かったからこそ、佐天も白井も初春も、直接御坂に声をかけはしなかった。
上条の奮戦をただ見つめて数分が経った頃、ふと佐天が顔を上げた。
「……ごめん、みんな。今度は私にお客みたい」
言いながら彼女は、戦場とは異なる明後日の方向へと向く。いる。確実に自分を呼んでいる相手がいると分かる。そんな佐天に、ふぅと白井が溜息を漏らした。
「ここは大丈夫ですわ。ですから佐天さんも、来客の対応に出向いて結構ですわよ」
「そ、そうですね。あの、佐天さん！　他の皆さんにも言いましたけど、くれぐれも気を付けてください！」
初春のその言葉に一つ頷いた佐天が、呼ばれている方向へと駆け出す中、コンテナ群の向こう側、二箇所の異なる方角から、爆音が響き渡った。
◇　◇　◇
「あー、くそ！　邪魔してんじゃねえぞ、第七位!!」
茶髪のホスト風の少年が憤り、その背中の翼で空中へと舞い上がる。超能力者（レベル5）第二位垣根帝督のその姿を、大地で仁王立ちしながら眺めるのは、日章旗のような服装の少年。超能力者（レベル5）第七位、削板軍覇。
「いーや、邪魔する。お前みたいに根性の足りない奴は、この先には進ませねえ!!」
拳を振り、蹴りを繰り出すたびに、物理法則とか無視した感じで巻き起こる爆発を眺め、煙草をくわえた赤髪の少年は、溜息を漏らした。
「なんでこの僕が、あんな暑苦しい奴と一緒に行動しなきゃならない

んだ……まあ、この先には『彼女』もいる。元より誰一人通しはしないけどね？」

言いながらステイルは、その背に炎の魔人を従える。目標は、垣根と共に現れた彼の仲間、スクールのメンバー。

「この場で火葬されたくなければ、早々に退くことをお薦めするよ」

◇　◇

「なん、なんだ、テメェはあああああああっ!!?」

超能力者（レベル5）第四位、麦野沈利の激昂が響き渡る。その激情を表すように、虚空に極太のレーザーが発生する――

――が。

「――――≪唯閃≫」

そのレーザーを、長大な日本刀で両断する、超能力者以上の理不尽が降臨していた。

「なんでそんなポン刀で斬れんだよッ?!　こっちの熱量もエネルギーもどんだけあると思ってんだ!!」

「その辺りは知りませんが、別に種が無いわけでもありません。名刀の一つである『雷切』伝承を術式で再現しているだけですよ」

そんなことを言いながら、神裂は油断なく対峙した四人を見据える。一人も逃がせない。ここを通せば、彼女らの努力が水の泡なのだから。

「月並みな言葉ですが、ここを通りたければ私を倒して通りなさい」

「いいぜぇっ、焼き殺して黒焦げにした死体の上を通ってやらぁっ!!」

五人の少女の戦場は、その激しさを増していく。

◇　◇

そして、それらの戦場から離れた場所では。

「どうしたの、エリー!?」

「ちょ、ちょっとぉ、しっかりしなさいよぉ！」

ベッドの上で自らの身体を抱き締めるように蹲る少女の様子に、彼女を看護していた二人の少女が慌てふためいていた。

そんな二人の様子を尻目に、この場にいる唯一の医療従事者であるカエル顔の医者は、静かな口調でエリーへと話しかける。

「……何が起こっているんだね？」

その問いに、ただただエリーは、怯えた目で答えを返した。

「……

すべての終わりが始まる」

はじまる。

０７０　俯瞰―オーバールック―

点在するコンテナ群を、飛び越えた先。コンテナ運搬用のクレーンの先に、その少年は佇んでいた。眼下にはついに戦闘状態へと移行した三か所の戦場が余すところなく見て取れる。

用意された、極上の観覧席。繰り広げられる一大決戦に頬を緩め、その少年は待ち人がやって来るのをただ待っていた。やがて、彼の座るアーム部分を地上に繋ぐクレーンの基部へと、カンカンと金属製の階段を走り上がる音が聞こえてきた。振り返っていないために未だ顔は見えない。しかし、後ろから伝わってくる『共振』に少年はほくそ笑み、アームの上で勢いよく立ち上がると、そのまま満員の舞台を仰ぐかのように両手を広げて振り返った。

「やあ、佐天涙子。『招待状』に応えてくれたこと、心から感謝するよ」

「――――キース・グレイ」

かくして、この世界における二人のＡＲＭＳ適合者は、再び対峙した。

佐天の背筋に、嫌な汗が流れる。自分に向けて放たれた『共振』に従ってここまで来たものの、ここからどうすればいいのか。結局今まで、目の前の人物がどうしてこんな実験に協力しているのか、その『動機』が分からなかったのだ。『未知』のものは、『不安』の要因になる。ここに彼女が来たのも、そんな不確定要素によって、実験を止めようと奮闘している上条を邪魔されたくないため。この相手に対抗出来るのが自分だけだったからに過ぎない。他の誰であっても、少年のＡＲＭＳをただ進化させるだけに終わる可能性があるのだから。

そのまま険しい表情で拳を握り締めている佐天に、やがてキースはふぅと息を吐いた。

「そんなに決死の表情を浮かべなくても、今のところ僕にはあの戦闘を止めるつもりはないよ。むしろ上条当麻（カレ）が止めてくれるなら大歓迎さ」

「……信じられると思う？」

「いや、無理だろうね。けれど、見てごらん」
そう言ってあっさりとキースは佐天に背中を向けて眼下の戦場へと注目した。不意打ちを仕掛けるなら、絶好の好機ではある。しかしどうにも卑怯な気がしたし、それにどんな攻撃を仕掛けても、今この状況なら容易く反撃に移られそうな気がしたので、佐天もまた戦場の方へと視線を移した。
そこでは、上条当麻の渾身の右拳が、一方通行（アクセラレータ）の顔面へと突き刺さっていた。
◇　◇　◇
「おー♪　さっすがカミヤン。さしもの第一位様も、一発でグロッキーだぜい」
そんな軽薄な声が積み上がったコンテナの上部から聞こえてくる。果たしてそこには、アロハシャツにサングラスをかけた金髪という、どこからどう見ても色々チャラ過ぎる格好をした少年がいた。サングラスをかけたままなのに何故か双眼鏡を覗いていて、口に当てたハンカチ越しに傍らの無線機に話しかけている。
『――やはり幻想殺し（イマジンブレイカー）は、実験中止のために動いていたか。まあ、ここで潰されるようならそれもまた良い。以降は隠蔽と、事態の収拾に動いてくれたまえ』
「よく言うな、アレイスター？　どうせここで実験が潰れることすら、アンタの計画（プラン）通りなんだろうに」
その少年――土御門元春が会話をしているのは、学園都市の頂点にして統括理事長を務める人物、アレイスター＝クロウリー。当然今回の実験についても知っており、最終的なゴーサインを出した人物でもある。
『さて、どうだろうな。それより、君から連絡があったということは――』
「ああ、案の定だぜい」
そう返しながら、土御門が視線を移していく。双眼鏡を向けていた先ではなく、自分の腹の下。足場としているコンテナの下側へと。
「――予想通り、本実験の監視のために派遣されていた『猟犬部隊（ハウンドドッグ）』は、

全員が殺されていた。死因は鋭利な刃物による斬殺だが、生きてるうちにバラバラのブロック状に刻まれたのか、血だまりが凄いことになってるぜい」

彼が乗っているコンテナは、下半分が真っ赤に染まっていた。そして周辺にはもはや人の形をしていないものがゴロゴロと転がっている。土御門が口元にハンカチを当てているのも、ここでは血臭が強すぎて、喋るだけでも臭いがきついためだ。

『……同様に、キース・グレイの足取りを追っていた部隊も、惨殺死体が見つかった。やはり、これは――』

「ああ、アイツもこの戦場のどこかにいるぜい」

アレイスターにとって、キース・グレイは何をしでかすのか分からない存在だ。全く異なる世界の概念・科学力を持っているので重宝してきたが、こと計画（プラン）に悪影響を及ぼすというのであればその限りではない。即座に排除すべしとして、部隊も差し向けたのだ。

土御門にしてみても、それは同様。この学園都市に来た当初の彼とは繋がりがそれなりにあるが、キースの行い次第でこの都市全体が危ぶまれるのだ。愛すべき義妹（まいか）の安全と比較すれば、考えるまでもなかった。アレイスターから彼の離反を聞いて、土御門もまたキース・グレイを排除すべく動いていた。

しかし、結果は失敗。アレイスターの送り込んだ部隊は空振りに終わるか、物言わぬ死体となって帰還し、土御門は彼に接触することすら出来なかった。キース・グレイは今や彼らにとって共通の敵である。

『土御門。幻想殺し（イマジンブレイカー）と第一位の戦いは、捨て置いて構わない。君にはキース・グレイの暗殺を依頼したい』

「……了解だぜい」

無線はそこで切れ、少年はコンテナの上でゆっくりと起き上がった。サングラスの中、少年の刃のような瞳が、周囲を鋭く射抜いていった。

◇　◇　◇

「……素晴らしいじゃないか」

眼下の戦場を見下ろす特等席で、キース・グレイは嘯く。その視線の先では、上条がその右の拳一つで、あらゆるベクトルを操る最強の能力者を相手に果敢に攻め立てていた。

「誰かが決めた『計画』という名の実験場（ケージ）の中で、人間の〝意志〟を貫き徹し、決められたレールを破壊するために只々足掻き続ける――まさに彼のあの姿は、君の『先輩たち』を彷彿とさせるよ」

「……」

キース・グレイの言葉に、佐天はただ沈黙をもって返す。本来の意味からすれば、彼の語る『先輩たち』は、キースシリーズにとっても仇敵のはずだ。それなのに、出てくるのは賞賛の言葉。胡散臭いにも程がある。

そうして佐天が沈黙する中でも、事態は進む。上条は一方通行（アクセラレータ）が伸ばす魔手を右手一本で捌き、その拳を真っ直ぐに顔面に打ち付けるという一方的な展開を繰り広げていた。

『――ザッ、が、あ――ザザ――……』

不意に、クレーンに設えられた無線機から、人の声が聞こえ始めた。雑音が酷いが、どうやら眼下の戦場の音声を拾っているようだ。

「おや、ようやく盗聴器で拾える範囲に入ったか。少し、彼らの声を聞いてみようじゃないか」

キース・グレイは、相変わらず読めない笑みを浮かべている。決して彼から意識を逸らすことなく、佐天も無線機から聞こえる声に注目した。

肉を打つ鈍い音、砂利を蹴り立てる耳障りな音、そして、上条当麻の言葉が響いた。

『――アイツらだってな、一生懸命生きてたんだぞ――……』

バチン、と恐らくは相手の腕をはたきおとす音。そのままジャリッと大きく踏み込むような音が聞こえてきた。

『なんでテメエみてえな奴の、食い物にされなきゃいけねえんだ!!』

ガゴン！と、もはや打撃の音には聞こえないような衝撃音が響き渡った。会心の一撃。それが無線機越しであろうと伝わって来て、佐天もまたぐっとガッツポーズをとった。

そこへ、パチパチ、と空々しい拍手の音が聞こえてきた。
「……全くもって素晴らしい。例え作られた生命だろうと、生きる権利は平等に存在する――上条当麻が出した結論は、まさに僕が望み描いた答えだ」
「……」
相変わらず、キース・グレイの内心は分からない。何を目的としているのか、何をしようとしているのかも。けれど佐天は、今この場で言っている彼の言葉に、嘘偽りを感じなかった。少なくとも、さっきの言葉は、本心からの賞賛であるように感じられた。
だから、彼女はこう尋ねてみた。
「……貴方は、何がしたいの」
その質問に、僅かに笑みを深くした少年は応える。彼の目的、その終着点を。
「――僕達キースシリーズの目的は、いつだって同じ。愚かな『父』の作り上げた試験管から飛び出して、自らの生を謳歌すること。そのために――全ての人類に僕という存在を認めさせる、絶大な『力』を手に入れることさ」
暗闇の中、誇らしげに笑みを浮かべる少年。けれどもその少年の瞳の奥、彼ではない何かが嘲るように蠢いていた。

０７１　祈願―プレイ―

　頭の中が、まだガンガンと唸っていた。意識は朦朧とし、明滅する視界には、横倒しになった砂利の地面が映っていた。

　――自分(オレ)は何ンで、こんなトコで倒れてンだ？

　そんな素朴な疑問が、一方通行(アクセラレータ)の頭の中にぽつりと浮かび上がった。口の中は、血の味がする。鼻は、鉄臭い臭いで充満して、使い物にならねエ。顔や腹が、今まで感じたこともねエくらいに痛エ。何でだ。何でだ。

　――アイツらだってな、一生懸命生きてたんだぞ！

　そう叫んで、自分の目の前に立っているこの男は、自分に殴りかかって来た。――生きてた？

　なんだ、そりゃア。だって、誰も言わなかったじゃねェか。どいつもこいつも、みんなアイツらは『ただのクローンだ』『出来損ないの量産品だ』『ボタン一つで作り出せるタンパク質の塊だ』とか、そンなことしか言わなかったじゃねェか。ふざけンな。今更、ンなこと言うな。今更、アイツらがちゃんと『生きてる人間』だって認めちまったら、オレは――

「――く――か――……」

　喉から出た声は、言葉の意味を為していなかった。ただただ、肺に押し出された空気が、喉を通り、口を通り、声のように空気を裂いて聞こえるだけだった。音は続く。声は続く。それはさながら彼の中で渦巻いた苛立ちと衝動を吐き出すかのようで。

「く、か、きき、くかきけかかきくけかこかくけきこ――――――――!!!」

　圧倒的な暴力として、君臨した。

「くっ……！」

「あうっ！」

「うひゃ！」

「きゃ?!」

「おー…。」

近くでその戦いを見ていた少女たちが、突如として巻き起こった暴風に髪を押さえる。しかし、一方通行が起こした『暴力』はそんなものでは済まなかった。やがて、その風は一つ所に集まり、人類がとても届かないと名付けた神獣にも似た姿となった。

『竜巻』。東洋に伝わる龍のような長大な姿をくねらせ、ありとあらゆるものを吸い上げ上空へとばら撒く、災厄そのもの。人の手に余るとされた災害が、人の手によって形作られた瞬間だった。

「ぐ――――?! う、わ、あぁあああああああああああああ!?」

当然、一番近くにいた上条もただでは済まない。あっという間に両脚を風に刈られ、その全身を上空高くへと巻き上げられてしまった。

「ヤバイ!」

「殿方が!」

「とーま!」

「助けに。」

「でも、こっちも動けませんよ!?」

近場の鉄骨やワイヤーを電磁力で繋ぎ、必死になって地面にしがみつく少女たちが叫ぶ。そのころには、上条は地上から大きく離され、その姿はすでに豆粒ほどの大きさになりつつあった。

(……なンだよ。あるじゃねェか。こんなすぐ近くに、周りのクソどもを黙らせる絶対的な力が!)

これさえあれば。この力さえあれば。たとえ絶対能力(レベル6)に届かなくったって、無敵になることが――!

ようやく手にした圧倒的な力。その力を完全に掌握せんと、自らのベクトル操作能力を最大限に活用し、周辺の大気を全てその手に収めようとしたまさにその時。

プシュゥゥ……、とまるで風船から空気が抜けるような音を立てて、竜巻は小さくなり、つむじ風になり、そよ風になり――、最後には跡形もなく世界から消え去った。

「……

あ？」

長い沈黙のあと、一方通行（アクセラレータ）は呆然と空を見上げた。

◇　◇　◇

そんな彼の様子を、高所から見つめる少女がいた。

「ふぅ――――……」

少女は、純白の髪を風になびかせ、静かに眼を閉じ集中していた。その額には球の汗が浮かび、彼女の極度の緊張が見て取れた。少女の名は、佐天涙子。能力名は、空力探査（エアロソナー）。

彼女は今、必死になって、周辺の大気を制御下に置こうとしている。上条を助けるために。もうこんな実験を終わらせるために。そのために、上条が対抗し得ない大気の操作にのみ絞って、支援を行うことに決めた。無論、明らかに高レベルである彼女が直接手を出せば、実験継続のリスクはそれだけ高まることになる。だから彼女は迂遠に、あくまで間接的に上条を支援するに留めている。

そんな彼女の苦悩を、最も近くで見つめるキースは、あくまで口元を緩めるだけだった。

◇　◇　◇

そして、再び地上では。

「――――みつけた！」

竜巻が止んだことで、空に目を凝らしていたインデックスが、上空高くから落ちてくる点のような人影を発見した。

「黒子！」

「はい、お姉様！」

すぐさま、常盤台コンビが空中目掛けて飛び出す。白井が上条の所まで連続で空間転移（テレポート）し、落ちてくる上条の身体を御坂がワイヤーを操って確保し、そのまま金属製の足場まで電磁力で貼り付く。上手く落下の勢いを殺した二人は、ふぅと大きく息を漏らした。

「ワリィな。助かった」

余りに気軽に、そう返してくる上条。別に大きな怪我もしてなさそうな様子に、ほっと安堵しそうになって、御坂は慌てて取り繕った。

「――――フン！　なによ、アンタ結構危なかったじゃないの」

「全くですわね。お姉様相手にあんな偉そうな啖呵を切っておきながら、簡単にやられそうになるとは。もし負けでもしたら、貴方の身ぐるみを剥ぎ取って、通っている高校の校門前に全裸で晒して差し上げますわ」

御坂の指摘に、白井までもが乗ってくる。上条は「悪かった悪かった」と言いながら立ち上がったが、生憎前しか向いていなかったせいで、御坂がやたらと頬を赤らめているのには一向に気付かなかった。

そうして再び起ち上がり、対峙した上条に、一方通行（アクセラレータ）は心底歯噛みした。

（――なンでだ。なンでコイツは折れねェ？　今の攻撃だって、運よく助かっただけだ。次やれば今度こそ死ぬかもしれねェんだ。それが分かってるはずなのに、なンでコイツは退かねェ？　そうまでする価値が、こンな戦いにあンのか？　あの人形どもに、そこまでする意味が本当にあンのか？　なンで、なンで――――……）

「……なンで、そこまですンだよ」

ぼそりと呟かれた言葉は、上条までは届かなかった。ぎり、と歯を軋らせ、目の前の相手に、世界に吼える。

「面白ェ！　最っ高に面白ェよ、オマエ！　なンだァ、オレに攻撃出来るからってもう勝てる気かァ!?　笑わせンな！　オレは、一方通行（アクセラレータ）！　学園都市が誇る超能力者（レベル5）の頂点だ!!　オマエみたいな三下が、百回生まれ変わっても勝てねェ相手なンだよォ!!」

叫びは戦場全体に響き、はあ、はあ、と肩で息を吐く一方通行は、それでも一向に視線をそらさない上条当麻を見据えた。ぶれない。曲がらない。決して退かない。そんな決意が瞳に浮かんでいるようだった。

ジャリ、と不意に足元で鳴った音に、驚愕する。知らず、一方通行の足の方が、わずかに下がっていた。退こうとした？　第一位が？　三下（あンなヤツ）に？

一方通行の苛立ちが、頂点に達した。

「……っ、ク、ソがぁあああああああああああああああああああ!!」

ベクトル操作をフルに使っての高速平行移動。その中空で、一方通行はその両腕を槍のように突き出した。最短距離を進む、最速の攻撃。たとえどんな能力を持っていようが、敵うはずのない自身の最高の一撃。

ペキ、と音を立てて、最高のはずの一撃は、少年の右の拳に払いのけられた。勢いのまま、身体が空中で泳ぐ。動けない。拳に触れた途端に、自分を移動させていたベクトルまで、まるで殺されたように消え去った。

拳が、弓のように絞られる。次の瞬間には、渾身の拳が自身に突き刺さっているだろう。なンでだ。なンでこうなったンだ。そもそも、なンでオレはこんなに必死になって実験をやろうとしてンだ？

「歯を食いしばれよ最強（さいじゃく）――」

――ああ、そうか。思い出した。

最初は、怖かった。向かってくる相手より、自分が。どんな攻撃が来ようと、無傷で立っていられる自分の能力が。この能力（チカラ）はいつか、世界そのものを敵に回し、本当にすべてを壊してしまいそうで。

だから、『最強』でいたくなかった。だから、『無敵』になりたかった。誰も戦う気が起きない程の絶対的な存在になりたかった。そうすれば――

「――俺の最弱（さいきょう）はちっとばっか響くぞ」

――もう誰も、とか……ホント……何やってンだ、オレ……

０７２　神樹―ユグドラシル―

全てが終わった時、誰も発し得る言葉を持ち得なかった。結果としては単純、拳を振り抜いた男が勝者となり、それを受けた男が敗者となった。だけど、その勝者となったのが学園都市の能力者の中で最弱のはずの無能力者（レベル０）で、敗者が超能力者（レベル５）の頂点、第一位だったと聞いたならばどんな印象を受けるだろう。ここ学園都市に住む者ならば、有り得ない、幻かなにかだ、とそんな印象を受けるだろう。

しかし、全ては現実。たとえこの場に集った学園都市の住人にとって、信じられない事柄だったとしても、目の前でそれは実際に起こった。有り得ないはずの『奇跡』は起きたのだ。

「～～～～～～、やったー!!」

「おわっ?!」

その奇跡に、真っ先に喜び、殊勲者であるツンツン頭の少年へと跳びついたのは、御坂だった。首根っこに抱き着いた彼女に慌てて、その腕を叩き、少し引っ張って気道を確保する。危なく仲間のはずの彼女に殺されかけるところだった。

「やった!!　やった!　やった。やった、やったぁ……」

最初は喜びに満ちていた声が次第にしぼみ、最後には顔を上条のワイシャツへと埋め、鼻を啜る音へと変わった。ようやく救うことが出来た。一万人以上殺されてしまったけれど、自分には無理だったけど。やっと実験を止めることが出来た。奇跡が起きた喜びに、それでも死んでしまった妹達への申し訳なさに、そして自分の不甲斐なさに、彼女は泣いた。

そして、その場に一人の少女が降り立った。

「佐天さん!　そっちは大丈夫でしたか?」

「あー、うん。まあ……」

初春から声をかけられたその少女、佐天は極めて微妙な表情を浮かべる。その妙な反応に首を傾げていると、その場に場違いな拍手の音が響いてきた。

「――素晴らしかったよ、上条当麻」

拍手の主は、キース・グレイ。どうして彼が此処にいるのか。また計画進行を助長していたはずの彼が、なぜ上条を賞賛するのか。その場にいた全員が、なんとも怪訝な表情となった。

周囲の奇妙な沈黙などどこ吹く風で、キース・グレイはあくまでマイペースに言葉を続けた。

「例えどんな困難が目の前に立ちはだかろうと、拳を握り、その壁へと立ち向かう――君の姿は、僕が尊敬するとある知己の姿を彷彿とさせるものだった。純粋に尊敬に値するよ」

「……」

彼の手放しの賞賛に、上条は答えない。目の前の少年に会ったのは数回だが、それでも彼がとんでもない危険人物であることは理解している。目的の為ならば人命を奪うのも躊躇しないことも、またただの人間からすればあまりにも隔絶した実力を持っていることも。そんな人間から褒められたところで、まず不気味さが先に立って素直に受け止められようはずもなかった。

同様の印象は、未だに胸の中にいた御坂も抱えていたようだ。ほんの少しだけ顔を上げて、視線だけは油断なくキース・グレイを名乗る少年へと向けたままだ。その警戒心最大の対応に、思わず目の前の少年は苦笑した。

「君らの警戒はもっともだけどね……。まあ、それはひとまず置いておいて、ここまで頑張った君や御坂美琴に些少ではあるが、褒賞を用意したんだ。出来れば受け取ってくれないかな？」

そう言って、手を上向けて奥まった一点を指し示す。するとレールのつながったその先から、何やら連結したコンテナを引っ張った特殊車両が現れた。それは御坂たちや初春らが全員見える位置へと移動すると、その車体を止めた。

「では、ハッチを開けてくれ」

その言葉と共に、コンテナの側面が上下に開いていく。そして、その中には、培養槽のようなカプセルに入れられた妹達（シスターズ）の一団と、その手前に、カエル柄の缶バッジと雪の結晶を模したヘアピンをつける少女がいた。

「……ミコちゃん？」

佐天の驚愕しきった言葉が漏れた。目の前にいるのは、あの日死んだはずの少女だった。もう会えないはずの少女だった。そのはずの彼女がどうしてここにいるのか？

その場にいた全員が絶句する中、コンテナを引っ張って来た特殊車両からも少女が一人降りてきた。ギョロ目で白衣を纏った彼女の名は、布束砥信。予想外の人物の度重なる登場にもはや誰一人動けずにいた。

「彼女らは、実験進行中に、重傷を負い敗北したが、こちらで治療を施した結果、何とか一命を取り留めた妹達（シスターズ）だ。合計１０６人いる。そして布束さんは彼女らの保護に際して協力してくれた協力員だよ」

その言葉に、御坂らは驚く。まさかキース・グレイがこんな形で妹達（シスターズ）を保護してくれているとは思いもしなかった。実験前で命拾いをしたコたちを除けば、全員の生命が絶望的だったために、その点だけは嬉しかった。

しかし、だからこそ彼女らの冷静な部分は、目の前の少年の意図が分からず、不気味さを感じてもいた。彼女らを保護した――『メリット』はなんだろう？

周囲の疑念を感じ取りながらも、少年は笑みを崩さない。まるで渾身のマジックを、周囲に披露する時を待ち望んでいる手品師のように。にこにことした笑みを浮かべながら、ゆっくりとコンテナの方へと歩み寄る。

「彼女らは、これから君らの元へと帰すわけなんだが――」

そして、ゆっくり、ゆっくりと。

「――その前に、僕の生涯を懸けた計画（プログラム）に、付き合ってもらう」

御坂ミコの額へと、その手を触れた。

瞬間、世界に衝撃が奔った。

「きゃあ!?」

「ぐ!!」

「なんですの、この『声』は！」

その場にいた全員が、その場に突如鳴り響いた音に耳を押さえた。

いや、音と表現するのは正しくはない。白井が指摘したように、それは確かに『声』だった。しかし、尋常な声ではない。可聴域のギリギリか、もしくは大きく外れるような超高音が人間の喉から発せられているのだ。音源となっているのは、御坂ミコ、そして、カプセルに入った妹達（シスターズ）だった。

「耳が痛ぁい!!」

「こんな声が……！　あれ、でもこの声って――？」

「っ。拍子？　音程？　――『歌』？」

全員が動けずにいる中、やがて聞こえる声に規則性があることに気付いた。一定の拍子、節回し。明らかに『歌』ととれる現象だった。

そして、段々と音が高まっていく中、上条達が連れてきた御坂妹と呼ばれた彼女も、喉を震わせ始めた。同じ高音。同じ拍子。この分だと、街中にいる他の妹達（シスターズ）もまたこの『歌』を歌っているだろう。

「……！　ダメ……！」

その『歌』の正体に、唯一気付けたのは、この中で魔術側の知識に最も長けたインデックス。その耳に響く『歌』が、一体何なのか、彼女の膨大な知識が警鐘を鳴らしていた。

「やめさせて、とうま！　今すぐ、この『歌』を！」

「っ！　どうしたんだ、インデックス！　お前、この『歌』なんだか知ってるのか!?」

互いに聞き取り辛い環境の中、叫ぶように行われる言葉の応酬。そんな中で、インデックスが漏らしたその答えだけは不思議とその場に響き渡った。

「『グレゴリオの聖歌隊』だよ!!」

それはかつてこの都市を訪れたローマ正教が用いた、大規模儀式の名称だった。

「本来膨大な時間がかかる大規模魔術の中核を１０６人に分割して、更に間奏・伴奏として一万人近い人数を動員してる……！　これなら、以前に街で用いられた時よりも、早く儀式が終わってしまうかも！」

「――――その通り」

インデックスの言葉に、響いたキース・グレイの声。それを合図とするかのように、周囲に満ちていた『歌』が、余韻のような声を残して完全に消え去った。そうして、声を一際響かせていたミコと、カプセルの中の妹達（シスターズ）が身体をガクンと折り、完全に意識を失う。

「これにて術式は完成した――だが、やはり魔術の行使によって、能力者たる彼女らはダメージを負ったか」

「あんた……！」

何を行っていたかは分からないが、今またミコたちを傷つけたキース・グレイに怒りが募る。そのまま激情のままに飛びかかろうとして、向けられた掌に止められた。

「勘違いしないでくれ。僕だって折角保護した彼女らに、みすみす命を落としてもらいたくない。万全の措置は施してあるさ」

その言葉に足を止め、再び視線をカプセルの中へと戻す。見るとカプセル内の彼女らは、確かに口元や目元から出血しており意識もないが、それでも血色は悪くはない。いやむしろ、その身体にわずかに『紋様』が浮かぶたびに良くなっていくような――。

「……ＡＲＭＳ？」

そう、その紋様は、自身の身体で何度も見た現象。それが彼女らに浮かんでいるという事は、彼女らにはＡＲＭＳが移植されており、現在体内を治療中ということだ。

「正確には、カプセルの中の彼女らは違うよ。彼女らに移植されているのは、『レプリカントＡＲＭＳ』の研究過程で生まれた、完全治療用ＡＲＭＳ、『メディカライズＡＲＭＳ』と呼ばれるナノマシン群だ」

キース・グレイにとって、かつてのモデュレイテッドＡＲＭＳは完全な失敗作という認識だった。たった一度の完全解放にすら耐えられず、またその進化も極めて限られたものでしかなかった。その原因がＡＲＭＳの『意志』の有無にあると悟った為、彼はオリジナルＡＲＭＳのソレを研究していった訳なのだが、その中で、彼はオリジナルがかつて行ったある一つの現象を再現できないかと試みた。

その現象とは、ＡＲＭＳの『休眠』である。かつてオリジナルは戦いの日々の終焉を悟り、自らその機能を休眠させたことがあった。そ

んな現象はオリジナルに近いアドバンストＡＲＭＳにすら不可能であり、オリジナルの機能の再現を目指す中で取り組むべきテーマの一つでもあった。

研究の結果として、休眠の再現は出来たものの、戦闘用には完全に使えないものが出来上がった。移植から２４時間の間、その身体に存在したありとあらゆる障害を再生するものの、きっかり２４時間で休眠状態に移行し、やがては体内の老廃物と一緒に体外に排出されるという代物。戦闘には耐えられない、完全治療用ナノマシンといっていい物が出来上がった。

「妹達（シスターズ）に負担をかけることは、協力者である布束さんが了承しなかったしね。両脚を喪っており、さらに全員に『聖歌』を行き渡らせるために、僕のＡＲＭＳと高い交信を必要とする御坂ミコ君だけはレプリカントＡＲＭＳを移植させてもらったが……それ以外の彼女らは、２４時間後には、移植されたＡＲＭＳすら排出される。むしろクローニングで短くなっていたテロメアまで再生されているから、体調は良くなるはずだよ」

では、そんな措置が施されていない他の妹達（シスターズ）はどうなるのか。そう考えて初春達の後ろで倒れた御坂妹と呼ばれた彼女の様子を窺うが、意識はないものの出血もない。そこまで深刻な状態ではない様子に、ほっと安堵する。

「保護していなかった彼女らにもそこまで大きく負担がかからないように、あくまで間接的に術式に関わらせるに絞った。これにて布束さんとの契約も終了だ――では、始めようか」

そう呟き、虚空に指を鳴らす。それを合図にするかのように、何処からともなく新しいコンテナが降って来た。指を鳴らすたび、コンテナの数が増え、やがてそれは一つの塔のように積み重なった。

「『黄金錬成（アルス＝マグナ）』発動――――――――覚醒（めざ）めよ、アザゼルたち」

その言葉と共に、数瞬、耳の痛くなるほどの静寂が訪れた。そして、ビキ、とどこかで小さく何かが鳴る音が響き。バキ、と何かを壊す音

が響き。そして。

積み重なったコンテナから、鈍色の根を張り、枝を張り、無数のアザゼルたちが芽吹き、やがて彼女らの目の前に、一本の天衝く巨樹が顕現するのだった。

０７３　帝王―カイザー―

それが現れた時、周辺で戦いを繰り広げていた者たちが、まず真っ先に異変に気付いた。
「……なんだい、アレは？」
「でけぇな……」
垣根ら暗部組織『スクール』の足止めに終始していたステイルと削板は、突如として自分たちの後方に現れた樹木のようにも見える巨大な構造物に眼を奪われていた。それは垣根らも同様だ。前回自分らを退けた佐天たちへの復讐に出向いたものの、現在彼らの視線の先にあるのは明らかな異常事態。正直判断に迷う状況だった。
「さて、後ろでも異常事態なようだし、出来れば休戦できないかな？こちらとしては、一刻も早く戻りたいところなんだが」
ステイルが、口元の煙草をくゆらせながら言う。実際、彼の目的は目の前の集団の足止めと撃退だけなのだ。ここで彼らを皆殺しにするというのも、少しばかり気が進まない。必要とあらばやる覚悟はあるが、ここに彼らがやって来た理由が、「先日負けたから」というだけの相手だ。そこまでする必要もないというのが、ステイルの判断だった。
戦闘中に生じた、一時的な休息。その空気を切り裂くように、心理定規（メジャーハート）の端末が着信を告げた。
◇　◇　◇
「――麦野。統括理事会から、超緊急の仕事です」
同じころ、神裂と戦っていたアイテムの面々。こちらでも絹旗が連絡員からの着信を受け、その依頼内容をチェックしていた。
「ア〝ァ?!　こっちは、忙しいんだ!!　急ぎじゃなきゃ仕事はキャンセルしとけ！」
「いえ、超急ぎだそうです。しかも、手すきの暗部構成員全員に。強制任務の形だそうです」
「は？　結局、何をしろって言うワケ？」

このやり取りの間、神裂もまた油断なく彼女らの一挙手一投足に目を配らせていたが、その内心は揺れ動いていた。後方に見える巨樹は明らかな異常事態。出来ればすぐにでも、インデックス達がいるあそこへと行きたい。そんな気持ちで一杯だった。

奇しくも、端末からもたらされた任務は、そんな神裂の要望すらも汲んだ形となっていた。

「学園都市内すべての勢力は――『あの巨樹の破壊、及び首謀者の捕縛・殲滅を第一目標とせよ』だそうです」

◇　◇　◇

「あ……ああッ……!!」

そして、ステイルや神裂とは離れた一角でも、また。巨樹を目の当たりにし、異変をその身に感じたエリーが、質量すら伴いそうなほど圧倒的な共振に、その身をかき抱いていた。

「……あの、巨大な樹が、あなたの体調不良の原因みたいねぇ？」

エリーに寄り添い、彼女を心配する警策とは違い、食蜂は親の仇を睨むかのように、突如として現れた樹を射殺さんばかりに睨みつけている。

しかし、彼女はそんな食蜂の言葉を、喘ぎながらも否定した。

「――はぁ――――はぁ――――、ち、がう……！」

その視線を向ける先は巨樹のある方角。しかし彼女は、全く別のものを見ていた。

「あそ、こに……！　絶望が、いる……！」

◇　◇　◇

「素晴らしいだろう……」

天を衝くかのように屹立した樹木を背に、キース・グレイが嘯く。その顔は愉悦に満ち、自身が待ち望んだ瞬間が、目の前まで来ているとよく表していた。

「かつて……僕の父、キース・ホワイトは、このアザゼルの集合体を以て、『神』になるつもりだった。もっともその企みは、失敗したんだけどね」

その言葉に、学園都市の住民である上条や御坂らは、困惑する。

『神』。それは科学優位の街において、あくまで概念的・思想的な存在でしかなかったからだ。ゆえに、白井が口にしたのは、当然の疑問だった。

「……こんな御大層な仕掛けまで施して、一体何を以て『神』になるなどとほざきますの？　寝言は寝てから行うべきですの」

そんな彼女の罵倒にも、グレイはあくまで笑みを以て応じた。そして、ＡＲＭＳを理解する上での、大前提から懇切丁寧に説明をしだす。

「まあ、通常の反応はその通りだろうね。ところで、君たちは、『ガイア仮説』というものをご存知かな？　この『地球』という惑星そのものが、『生物』と同じような恒常性を持つ、一個の生物であるとみなす考え方なのだが」

本来大学などで語られる学説なのだろうが、学園都市屈指の進学校である常盤台の生徒である御坂は、その学説について聞き覚えがあった。行き過ぎた環境保護思想の産物か、惑星科学に関わる人間にしか関係ない理論だろうと思っていたが。

「――まあガイア仮説自体には賛否もあるだろうが、問題は地球を一個の生物と捉える考え方でね。かつて僕の父は、ＡＲＭＳの起源たる金属生命アザゼルが、惑星誕生の時代に分化した鉱石の一部――つまりは『地球の兄弟』であったと知った時は、狂喜したそうだよ」

そう呟きつつ、いささか大仰な身振りで、両手を広げた。

「もしも、『地球の兄弟』たるアザゼルを――そして、その子供にして、人類との融合種であるＡＲＭＳを完全に制御下におき、さらに大量のアザゼルでその力を極大化したならば！　惑星そのものになることも可能ではないか？とね」

その言葉の意味を知り、御坂と白井が絶句した。他のみんなは、未だその内容について来れないようだった。

「これは、アザゼルと地球が、完全に起源を同じくする金属生命であるがゆえに考え出された仮説でね。実際、ＡＲＭＳの中には、地球とシューマン共振を使うことで、影響を及ぼせる個体がある。実に有望な仮説ではあったんだけど――」

はぁ、と溜息を漏らすように肩を落とす。

「――現実には、『地球になる』ことは失敗に終わった。もしも地球になれていたならば、まさしく人類というミクロの単位では扱う事の出来ない、マクロの現象すら自らの意志一つで自由にできる、文字通りの『神』が誕生していたことだろうけど」

そんなことになっていれば、断言できる。そんな存在に対して、人類は為す術なく滅びる。誰かの意志のままに、全ての生殺与奪を自由に出来る世界なんて、碌なものじゃないのは明白だった。

と、ここで、ポンとキース・グレイが気の抜ける動作で手を叩いた。

「あちゃ、話をするのが楽し過ぎて、大分脱線してしまったよ。君たちが知りたいのは、僕がこんなことをした動機だろう？　かつて失敗したと分かっていながら、アザゼルをわざわざ集合させた意味は、何か、だね？」

そう告げながら、後ろの巨樹を一度見上げる。そこには、何処か危うい光が灯っていた。

「まあ、単純なことだよ。神になれぬと悟った人類が、その歴史において、何度も何度も欲してきたもの。そして、民衆が永い歴史の中、何時の時代も須らく求めてきたものだ」

ゆっくり、ゆっくりと、その両腕が上がっていく。その様は、まるで翼を大空に広げるかのようだった。

「『神』と『人』の狭間にあるもの――――僕は、『王』になりたい」

その言葉と共に、アザゼルから伸びた触手が、いくつもキース・グレイの身体へと巻き付いた。それだけでなく、そのうちいくつかは、彼の肌と一体化し、ドク、ドクと鼓動のようなものを響かせ始めた。

「本当は、直接アザゼルと同化出来ていれば、こんな苦労もなかったんだけどね……金属生命アザゼルと完全な適合を見せたのは、『アリス』と呼ばれる少女だけだ。ＡＲＭＳの適合者でしかない僕は、『黄金錬成（アルス＝マグナ）』を発動させ、アザゼル達の全てを思考の中で掌握して、初めて同化が可能となる。おかげで随分と遠回りをしてしまった」

次第に、キース・グレイの姿が、触手に覆われて見えなくなってい

く。それと共に、巨樹と化していたアザゼルから、高音の共振が聞こえ始めた。

「……っ！　くっ……！」

自身のＡＲＭＳに伝わる共振に、必死になって耐える佐天。周囲の御坂らも、地震すら伴い出した地鳴りに、必死になって地面に伏せて耐える。

やがて。唐突に地鳴りは鳴りやみ、辺りには不自然なほどの静寂が生まれた。

「――――さあ、誕生の時だ」

蹲っていた全員に、巨大な影が差した。全員が空を見上げると、さっきまで地面を明るく照らしていた満月との間に、とんでもなく大きなヒトガタの何かがいた。その輪郭は、まるで布に垂らしたインクのように滲み、正確につかむことが出来ない。まるで底の知れない深淵が、人のような輪郭を得て、そこに屹立しているかのようだった。光を通さぬ暗闇の中、その両眼だけが、鬼火のように燃え盛っていた。

「この世界に存在するアザゼルの集合体を取り込んだ、巨大≪ハンプティ・ダンプティ≫。地球そのものには及ばずとも、人類には考えられないほどの圧倒的なチカラを行使できる存在……真に『王』に相応しい存在……」

闇の中、その巨大なヒトガタの額に、少年の貌が浮かび上がった。そのまま、首、肩、胸、腕と少年の細い肢体が、まるで滲むようにせり出してきた。

「これで……これで、やっと……！　作られた生命である僕が、世界中の全ての人類から、認められる『自分』になることが……!!」

自身の体内を巡るチカラに酔いしれ、熱に浮かされたようなグレイの言葉。それは、確固たる基盤となる『自分自身』すら、不確かなものとして生まれた彼が、本当に心から望んだ希望に溢れた未来だった。

しかし。

『――――――残念だが、そんな未来は、訪れない』

不意に響いた言葉と共に、グレイの細い腰は、横から飛び出した『光輝く騎乗槍（ランス）』によって斬り落とされた。

「……」

え？」

心底意外そうな声とともに、斬り落とされたグレイは、ゆっくりと地面へと落ちていく。そして、グレイがいた場所から、新たに人の顔が浮かび上がった。

「――まったく、孝行者の息子を持って、私は幸せだよ。よもや我が生涯を懸けた『計画』が破れた後、こんな形で次善の回答が得られるとは」

浮かび上がった顔は、十分に成熟した男性のもの。あくまで少年に過ぎなかったグレイとは違い、まったくの別人とも言える人物がハンプティ・ダンプティの漆黒の輪郭の中に現れたのだ。

「自身のアイデンティティの確立とは、ひどく矮小な息子だったが……感謝もしているよ。こうして異なる世界のアザゼルを無数に取り込まなければ、私は『神の卵』の外に出ることは難しかっただろうからな！」

落ちていくグレイを嘲弄する男。それだけで佐天は、目の前の男が一体誰なのか悟ることが出来た。

「アンタ、まさか――――！」

けれど。それを彼女が誰かに伝えることは出来なかった。

ビスッ、と余りにも軽い音をたてて、佐天の左胸を閃光が貫いていった。

「――――――あ？」

かくり、と膝から力が抜ける。ぺたんと地面に座り込んでしまう頃には、焦げた服からは白煙が上がり、着ていた衣服には血痕が飛び散っていた。

「悪いが、君に今暴れられると非常に困る。かと言って、私が取り込む前に死んでもらっても困るのでね……。そこでコアに罅を入れたま

ま、しばらく横たわっていてくれたまえ」
その言葉の通り、佐天は暗くなっていく意識にどうしても堪え切れず、固い砂利の上にその頬をくっ付ける。後ろの方で、初春らしき声が叫んでいるのが聞こえるが、どうしても身体に力が入らない。逆にどんどんと意識が遠ざかっていく。
「では――はじめようか」
その言葉と共に、≪ハンプティ・ダンプティ≫の背中が広がる。まるで植物の成長を早送りで見ているかのように、背中からいくつもの枝が生え、異形の果実が生っていく。

「――――――――私は、ＡＲＭＳ計画の提唱者にして、全ての父、キース・ホワイト」

ハンプティ・ダンプティから生まれ落ちる異形の子らは、かつての世界でモデュレイテッドＡＲＭＳと呼ばれた者たち。かつてはヒトの内面を吸い、その闇に相応しい獣の姿となった者たち。
しかし、今目の前にいる彼らには、あの時確かに存在した人間の意志は感じ取れない。姿かたちを似せているだけの、文字通り『人形』だった。

「――私こそが、世界の『王』。人類よ、神が作り上げた失敗作どもよ。我が分身にして、次代を担う新人類、ＡＲＭＳの前にひれ伏すがいい!!」

その場に集う、すべての人間を睥睨するキース・ホワイト。樹木のごとく枝分かれし、星空の天蓋を覆い尽くす≪ハンプティ・ダンプティ≫。そこからまるで、御使い（エンジェル）のごとく降りてくる、魂なきＡＲＭＳたち。世界崩壊の危機は、こうして訪れたのだった。

０７４　熱戦―ヒート―

――沈んでいく……只々、沈んでいく。

気づくと、佐天は真っ白な世界にいた。何も見えない、何も聞こえない、ただ白一色で形作られた世界に。そんな世界の中を、まるで水の中のように、ゆっくり、ゆっくりと只々沈んでいった。

（……からだ、動かないや……）

指一本、ぴくりとも動かすことが出来ない。いや、身体のどこにも力が一切入らない。辺りを見渡そうとしても首を巡らせることも出来ず、もがこうとしても手足が全く動かない。ただ水のように重苦しい抵抗の中を、揺蕩うだけでしかなかった。

と。そんな佐天の傍らに、遥か上方からゆっくりと降りてくる存在がいた。

（……？　……あれって）

それは、可憐な少女の姿。同じ姿の他の誰かを以前に見たことがあるが、今では決して見間違うことなど無い、自分にとって掛け替えのない『家族』になった少女。

（バンちゃん……？）

◇　◇　◇

「なん、なのよ、アレ……！」

上空高くから降り注ぐ、ＡＲＭＳの完全体たち。そのチカラもタフさも十分知っている御坂たちにとって、目の前の光景は悪夢でしかない。オマケにそれに唯一対抗出来る佐天が、真っ先に倒された。

現状に軽く絶望しながら、御坂らは必死になって、横たわる佐天の身体を抱え、布束がいるコンテナ車の近くへと身を寄せた。

「あれ、全部がＡＲＭＳだっての!?　どうやって倒すのよ！」

「いえ、さらに問題がありますわ、お姉様。アレらが全て佐天さんと同じなら、人間が本体となっているはずです。迂闊に攻撃すれば、彼らの生命が……！」

『いえ。その点は心配なさそうです』

そんな『精神感応（テレパス）』と共に出てきたのは、ユーゴー・ギルバートだった。以前見たブラウスとスカートをはためかせ、彼女らの傍らへと降り立つ。

『バンダースナッチは、意識を失った佐天（かのじょ）さんに呼びかけに行きましたので、詳しい説明は私が。目の前にいるＡＲＭＳは、全て外側だけ模しただけの、ただの抜け殻です』

「抜け殻……ですか？」

初春がユーゴーの言葉を受けて、周囲を取り囲み始めたＡＲＭＳを見回す。どれ一つとして同じ姿の無い異形。だが、その動きには、何故か意志のようなものが見出せない。

『恐らく、かつて生み出されたモデュレイテッドＡＲＭＳの完全体たちを模倣する形で生み出しているのだと思います。そうなると、移植者たる人間の人格まで模倣し切ると大きな負担になる。あそこにいるのは、ただキース・ホワイトに操られるだけの『人形』と考えるべきです』

つまり、目の前の大群には、生命を見出す要素は一切ないという事。意志もなく、また人の姿をしているわけでもない。後ろに控える巨人が織り成した人形遊びに過ぎないという事だ。

「――――だったら……！」

一人の少女の額から紫電が舞う。それは彼女の頭上で僅かに帯電し、力を溜め、上空から意志無きＡＲＭＳ軍団を撃ち払った。

「遠慮すること、ないってことね！」

普段人間相手に最大限弱めている威力を、一気に解き放つ。彼女の司る雷は、本来それだけで人間を殺傷するには十分なもの。それがゆえに常に出せなかった本気を、目の前の相手に対し、一切遠慮なしに放つことを決めた。

「来てみなさいよ、アンタら！　私の友達に、あんなコトした落とし前はつけてやるわ!!」

◇　◇　◇

「初春！　佐天さんたちは、コンテナ車の中に！」

ＡＲＭＳ達へとレールの鉄骨やコンテナの外板を飛ばしていた白

井が、佐天に肩を貸していた初春へと指示を飛ばす。白井の能力は直接相手にダメージを負わせるものではない。攻撃しようとすればどうしても間接的な攻撃となるが、周囲に十分な資材があれば、防衛用の簡易バリケードを築くことくらいは出来た。

その間に、初春が何とかコンテナ車へとたどり着き、左胸を貫かれた佐天を横たえた。通常であれば生死に関わる致命傷。それでも彼女が生きているのは、ＡＲＭＳが持つ規格外の再生能力ゆえだろう。だけど、何時までもつのか。ホワイトの言葉が正しければ、ＡＲＭＳの中核を成すと聞いているコアに罅が入っているならどうすればいいのか。佐天やバンダースナッチからの又聞きの知識しか持たない初春には、祈ることしか出来なかった。

「――――どうしてだ？」

そんな彼女に声をかける人間がいた。現在このコンテナ車にいるのは、戦線離脱した佐天と、ＡＲＭＳ相手に戦闘能力を持たない、初春、姫神、インデックス、御坂妹と、上条。そして。

「どうして、僕たちをここに連れてきた？」

そして。腰から下を切り取られたキース・グレイと、未だに意識を失っている一方通行（アクセラレータ）だけだった。

「どうしてって……その状態じゃ二人とも戦えないじゃないですか。だからここに」

「そんなことは、どうでもいい。僕らを助ける理由がないって言ってるんだ」

少なくとも、横で寝ている一方通行（アクセラレータ）には同情の余地はないだろう。なにせ一万人近い人間を無残にも殺した少年だ。この場で殺し返されたとしてもおかしくはなかったはずだ。

そういう意味では、自分だって同罪だ。今回の実験も、自分の計画（プログラム）に都合の良いように利用した。助けられる範囲の生命は救ったつもりだが、自分が助けられず見殺しにした生命だって、相当に多いはずだ。彼女らに助けられる謂れがない。それがキース・グレイの正直な感想だった。

そう考えたグレイだったが、返って来た答えは、拍子抜けなほど

素っ気なかった。
「……知りません」
短くそれだけ告げ、初春がポケットから出したハンカチを佐天の傷口に当てる。すぐに溢れてくる出血で、その布地が赤く染まった。
「……何？」
「だから、知りませんって。理由だとか、何だとか。そういうの考えて、人を助けたことってないですから」
そう言って、佐天の応急処置を再開する。しばらくその作業に没頭していたが、あ、でも、と短く初春は先程の言葉に続けた。
「そういう事を考えずに、誰かの手助けをしたくって、私は風紀委員（ジャッジメント）になったのかもしれません」
振り返らず、投げられた言葉。キース・グレイは、チカラよりも何よりも、その言葉に打ちのめされたような気がした。
◇　◇　◇
「参ったな、これは……」
次々と湧き出る異形の軍団。それらをすべて見渡せるコンテナの上で、二人の魔術師は溜息を漏らした。
「一体、なにがどうしてこうなったのか。疑問は尽きないが、コレ等が街中に出歩いたらどうなると思うかな、神裂？」
「……おおよそ、良い予感はしませんね。今も彼女らを包囲し、襲い続けていますから」
意志を感じさせない異形の軍団。今は最も近くにいる御坂達に襲い掛かっているが、このままにしておけばどうなるのか。もしも異形に与えられている指示の類が『近くの人間を襲え』であれば、相当な被害が出るだろう。迷う暇はなかった。
「……すぐに、事情を知っていそうな彼女らと合流する。状況を把握して危険があるなら各個撃破だ。そこまでの道筋、斬り拓いて貰えるかな？」
「分かり、ました……！」
そうして二人もまた、戦場へとその身を躍らせた。
◇　◇　◇

「スッゲェな！　巨人か!?」
「……」
「……」
やたらテンションが高い削板に対し、その後ろにいる垣根と麦野はそのノリに些かついていけていなかった。元々彼ら三人とそのチームメンバーが、奇しくもここで一同に会しているのは、緊急で受けた仕事の目的地が同じで、そこに向かっている途中で出会ってしまい、膠着状態に陥ったからだ。削板の方は、元々垣根が妙なことをしないか見張りだったらしいが、その目的を満たしているとは到底思えない。イレギュラーに引っ掻き回されないように、置いていった可能性もあると麦野は思っていた。
そんなわけで、寄りにもよって超能力者（レベル5）が三人も集まる奇妙な集団が構成されていたが、唐突にこの状態は終わりを告げた。巨人が屹立する方から、奇妙な集団が現れたのだ。
「……お？」
「……ん？」
「……あぁ？」
そいつらは、本当に奇妙な集団だった。どれ一つとして同じ姿をしていない。だが、あえて言うならば、以前に見た純白の怪物にも似通った姿をしていた。そいつらは、カチャカチャと硬質な音を立てて、最も近くにいた麦野へと近寄ると――
――唐突に、その鉤爪のついた腕を振り下ろした。
「……」
攻撃を受けた麦野は、しかし微動だにしなかった。やがて、攻撃をした昆虫のようにも見える個体が、その右の鉤爪を戻してみると。
どろりと、高熱で溶かされた断面が見えた。
「上等だ、テメェェェェッ!!」
麦野、垣根、削板もまた、ＡＲＭＳと戦うこの戦場へと参戦した。
◇　◇　◇
そして、初春たちが逃げ込んだコンテナ車の運転席では。
「……っ、……！」

一心不乱に、治療用カプセルにアクセスするコンソールを操作し続ける布束の姿があった。カプセルの中で意識が無い妹達（シスターズ）を、目覚めさせようとしているのだ。

このままでは。このままにしておけば、今も意識を失った妹達（シスターズ）は為す術もなくＡＲＭＳに殺されてしまうだろう。それだけは、防がなければならない。彼女らは、人間だ。ほとんど感情を表に出さない自分なんかよりよっぽど人間なんだ。だから、殺させない。そんな思いのままに、彼女は作業に没頭していた。

その時、彼女のすぐ横の運転席のドアが、ガチャリと開いた。そうして、入って来たのは、気怠そうに頭を振る、御坂ミコの姿だった。

彼女の静謐な瞳が、しばしの間、布束を見つめる。やがて突然視線を切ると、彼女はゆっくりと力強くその場で立ち上がった。

「……こんなにたくさんの姉のために、尽力してくれてありがとうございます。とミコはお礼を申し上げます」

そんな言葉と共に、彼女から高音の共振が鳴り響く。それは多くの姉妹の中で、彼女だけが宿したチカラ。

「ここからは、御坂ミコと――――レプリカントＡＲＭＳ≪ユニコーン≫が、姉たちを守ります。と、ミコは宣言いたします」

戦場に、希望は未だ潰えない。

０７５　駿足―マッハ―

「どういう事じゃん、これは！」

学園都市第七学区。コンテナ置き場からほど近いハイウェイの上では、到着した警備員（アンチスキル）たちが、事態の把握に苦慮していた。なにせ目に見える範囲に、あからさまに巨人が存在している状況なのだ。詳細を知ることなど容易には出来ない。その上、更に異常事態は続いた。

「撃っても撃っても倒れない、ゾンビみたいな怪物（モンスター）の集団とか！　一体、学園都市のどこにあんなのがいたんだ!?」

周辺の調査を行っていた彼らに、突如として謎の異形集団が現れ、襲い掛かったのだ。たちまちその場は戦場真っ只中と化していった。

「ぜ、全然数が減りませんよ?!　私たちＢ級パニック映画の、やられ役みたいなんじゃ――」

「ゴチャゴチャ言うな！　コイツ等に子供たちを襲わせるわけにいかないじゃん！　ここで食い止めるのが、私たちの仕事だ！」

子供たちを守る。ただその信念のため、彼女たち警備員（アンチスキル）もまた防衛戦へと加わるのだった。

◇　◇　◇

「周辺の交通管制システムにアクセスして！　異常が起こっている地域に、一般市民が立ち入らないよう封鎖するわよ！」

警備員（アンチスキル）が奮戦する中、固法ら風紀委員（ジャッジメント）もまた戦場を大きく囲むように展開し、彼女らに出来ることを行っていた。

本来風紀委員（ジャッジメント）はあくまで学生自治の精神で活動するものであり、事故や災害の現場ならともかく、『戦場』にまで直行する必要性はないのだ。そうした鉄火場に出るのは、あくまで警備員（アンチスキル）の職務であり、彼女らが行うのはそのサポート。現場での活動が円滑に行われるよう支援する活動である。

（……ほんの少し、情けないわね）

本当の現場を、大人達に任せなければならない不甲斐なさ。現場にいることすらできない苛立ち。固法の胸には、そうしたものが常に渦巻いていた。

だから、彼女はある意味羨ましかったのだ。事件とあらば、すぐに現場に突撃することが出来る白井が。現場の管轄など飛び越えて、電脳戦なら八面六臂の活躍が出来る初春が。そして、風紀委員（ジャッジメント）ですらないのに、警備員（アンチスキル）を遥かに超える実力を示す、御坂と佐天が。自分には、出来ない。彼女らのように、現場に直接飛び込むことなんて出来ない。

けれど。

（――それでも。今もどこかで戦っているかも知れないあのコ達の背中くらい支えてあげなきゃ、『先輩』の立つ瀬がないじゃない!!　そうですよね、黒妻先輩！）

どこか、佐天の変貌にも似た姿を持つ異形の軍団。それらの根源とも言える漆黒の巨人。それらを真っ直ぐに見据え、固法は自らの戦場で後輩（かのじょ）たちの日常を守るため、戦い続けるのだった。

◇　◇　◇

そして、戦場の中心で。高音の共振を辺りに響かせながら、御坂ミコのＡＲＭＳが解放された。

それは、少女の脚には似つかわしくない、脚甲（グリーブ）型のＡＲＭＳだった。太腿部分から幾何学紋様が現れ、膝の部分からは完全に別個のシルエットへと変わっていた。膝から足首にかけて優美でなめらかな曲線を描きつつ、その硬さを感じさせる白色の金属光沢に覆われていた。特徴的だったのは、両方の膝から空を刺すように突き出た角状の突起。そして、彼女のローファーの側面、ちょうど踝の辺りから飛び出た翼状の突起だった。

御坂ミコは、一、二歩、その場で足の具合を確かめるように足踏みし、次いで足首を屈伸させた。そして最後に、ジャリッと音を立てて地面を踏みしめ、下半身を柔らかく曲げると――

――次の瞬間には、先頭にいたモデュレイテッドの一体に、その硬いローファーを突き刺していた。

「――――な」

一部始終を見ていた布束の口から、そんな呆けたような声が漏れた。そして、ミコの姿は、既に彼女の視界から消え去っている。ただ

周囲に響く、空気を切り裂く轟音と、モデュレイテッドどもが漏らす衝突音と破砕音、そして周辺の空気を焼く雷撃の弾ける音だけが響き渡っていた。

断続的な破壊の光景を、布束は目の当たりにしていた。普通なら、驚愕のあまり手を止めていたかも知れない。それでも妹達（シスターズ）の容態を考えて、作業の手は止めずに、残った冷静な思考でわずかに目の前の光景について考察した。

（グレイは彼女のＡＲＭＳがどんな能力になるのか、詳しくは分からないと言っていた。一方で、移植者の影響を受けやすいとも。Ｓｏ…この能力は、彼女自身の資質と、本人の欲求や心情が表面化した結果ともいえる）

御坂ミコの心情については、今現在彼女がどんな風に成長しているのか、学習装置（テスタメント）に監修した布束にも分からないので、そこは置いておく。問題は、彼女の資質についてだ。

彼女の能力は、電撃使い（エレクトロマスター）。ＡＲＭＳ移植前は低能力者（レベル２）相当の能力でしかなかったが、移植後に行った簡易検査では、大能力者（レベル４）相当にまで上がっていた。これが影響を及ぼしたと考えたら、どうだろうか？電撃で、今彼女が行っているような、超高速機動戦闘は可能だろうか？

そこまで布束が考えを進めた、ちょうどその時。ミコが何十体目かの敵を足裏で砕き、くるりと反転し、地面を削りながら着地した。その足に、正確には踝から覗く翼状の突起に、バチバチと音を立てる雷が帯電しているのを見て、布束は答えに至った。

「Ｏｈ…周囲の電磁波や地磁気に、帯電させた翼で干渉して、自分自身を『電磁加速』させているの……？」

つまり、ミコが行っているのは、彼女の姉である御坂美琴と同じなのだ。御坂は、ゲーセンのメダルを電磁加速させて超高速の弾丸と化している。ミコは、『自分自身』をその弾丸へと変えているに過ぎないのだ。もっとも、ミコよりも優れた能力を持つ御坂であれば、彼女以上の出力も速度も容易に出すことは出来ただろう。

それでも、この『自身の電磁加速』という戦闘方法は、姉である御

坂にすら決して不可能な、御坂ミコにしか出来ない戦闘手段と言えた。何故なら、結局は生身でしかない御坂では、加速の際の衝撃や反動、それに摩擦熱など、様々な要素を防ぐことが出来ないのだから。ＡＲＭＳを移植し、コア以外の再生すら可能となった御坂ミコだからこそ、可能となった戦闘方法だった。

今もなお、ＡＲＭＳによって生まれ変わったミコが、まさに目にも止まらぬ戦闘を繰り広げている。レベルが上がり、自分の周りに電波の擬似レーダーまで張れるようになった彼女に、死角は無い。どれだけの高速戦闘中であろうと、狙い定めた獲物へと、空を舞う翼を生やした靴先を届かせる。

「――まるで、神話に出てくる『タラリアの靴』ね……」

大いなる翼を持ち、履く者をその道先へと届ける伝説の靴。黄金の電撃を纏わせた両脚は、確かにそのように見えた。

と、ここで、ミコの足が一時止まった。

「……ダメですね、減りません。とミコは、己の不甲斐なさを嘆きます」

目の前に未だに山と積まれたモデュレイテッドどもを見据える。その四肢や顔面を砕かれ、襤褸雑巾のようになっていた個体も、ゆっくりと首をもたげ、徐々に再生しつつある。例え意志がなくとも、モノは完全体のＡＲＭＳそのもの。異常なほどの耐久力と、再生能力は健在だ。この集団を打破するには、全個体のコアを砕きまわるか、圧倒的な攻撃力で欠片も残さず消し飛ばすか、そのどちらかしかない、と悟り。

彼女は、実にあっさりと、それを為すことの出来る存在へと至った。

「――レプリカントＡＲＭＳ≪ユニコーン≫、完全解放。と、ミコは絶対の切り札を切ります」

戦場に、貞潔を司る優美なる幻獣が顕れる。

076　幻獣―ユニコーン―

それが顕れた時、大地から天へと遡る蒼雷が奔り抜けた。その余りに巨大な雷は、周囲を圧する圧倒的な存在感は、彼女とは離れた場所で戦っていた御坂たちにも感じ取れた。

「なによ、あれ……！」

「……あちらは、ミコ様が戦っていた方では？」

彼女らが感じるのは、断続的に弾けて肌を焼く、細かな静電気。もはやあまりの高音に、鼓膜が痛くなるほどの共振の音波。それらが大気に満ち、雷の向こうにいる存在の秘めたるチカラを感じさせるようだった。やがて、雷は収まり、周囲に散った土埃を引き裂いて、その向こうにいた存在が姿を現す。

それは、余りにも優美な異形だった。全体は甲冑のような甲殻に包まれ、重厚な存在感を醸し出していた。しかしそれが胴体の部分に及ぶと、女性らしい得も言われぬ曲線を描き、艶やかな魅力を内に秘めていた。外殻に覆われているというのに、胸元は豊かな母性を感じさせ、腰はきゅっとすぼまり、姉をも超える女性らしさを感じさせた。もっとも特徴的だったのは腰から下で、腰のベルトを思わせる部分から前垂れのような三枚の外殻が垂れ下がり、そのスリットから滑らかな太腿が覗いていた。そして本来臀部があるべき場所には、力強い甲殻に覆われた胴体が繋がっており、その後部にもう一組の両脚が生えていた。その余りにも特徴的な異形、両腕の他に更に四つ足を生やした姿は、神話に語られた森の賢者にして狩人、半人半馬の異形、『人馬（ケンタウルス）』の姿を取っていた。

そうして、完全体への変形が終わり、その瞳に光が灯った。その顔もまた変形を果たしており、顔の上半分は巨大な面覆（バイザー）いで隠され、その額からは捩じれて尖った『角』が生えていた。唯一見えるのは口元だけで、ぷっくりとした唇が女性であることを感じさせた。頭部の後ろから覗く茶髪を風に靡かせ、面覆（バイザー）いに並行に並んだ縦のスリットから、赤光を放つ瞳が覗いていた。

女性らしさと力強さを同時に感じさせる、馬体が入り混じった異形。そんな相反する姿へと変貌した御坂ミコは、徐に口を開いた。
「――これが≪ユニコーン≫の、真の姿です。と、ミコはお姉様に完全勝利した胸を張ります」
「がっ……!?」
それを聞いた途端、視界の隅の方で駆けつけてきた御坂が突っ伏した。何らかの異常事態かと周囲の敵を押しのけてきたようだったが、思わぬ方向からのカウンターで、メンタルにクリティカルダメージを喰らったようだ。
「おや、どうしましたか、お姉様。と、ミコは殊更に胸を強調するように、腕を組みます」
「ぐっ……！　フザケんな！　そんなの偽物の胸でしょ！　無効よ、無効!!」
「ふむ、そうですね。確かにこの姿は、私やユニコーンに刻まれた意志によって左右されますから、偽物と言えば偽物ですが。とミコは、お姉様よりも大きく成長してしまった胸部を持ち上げます」
「……!!」
外殻に覆われているはずなのに、その内側の弾力とか柔軟性はそのままなのか、と御坂の背筋を驚愕が走り回る。外側は形状を保っているのに、その内側の果実はまろやかに形を変える。敢えて言うなら、マンガやゲームに出てくるビキニアーマー着用の女戦士のように、今のユニコーンの胸部は、凶器だった。
「……大丈夫ですよ。お姉様もきっとこれから、成長期が来ますから。とミコは精一杯の気休めを言ってみます」
「がはッ!!」
「お姉様?!」
ついに、御坂の口から何かが出て動かなくなり、白井に支えられることになった。慰めは、トドメとなった。なお、御坂は知らないが、ＡＲＭＳ移植者は高度な再生能力と恒常性によって、遺伝子に刻まれた『理想体型』へと近づく傾向があったりする。そのため、遺伝子的な母親として抜群のプロポーションを持つ御坂御鈴が存在するミコは、今

後の成長でも姉の御坂に完勝する可能性が非常に高いのだが、そのことを知らないのは御坂にとって幸福だったかもしれない。

――と、そんな掛け合いをやっている間に、周囲をモデュレイテッドが取り囲んだ。相変わらずその姿に意志は見えないが、身体の一部に電撃や炎を纏わせ、応戦するつもりが見え隠れしていた。そんな周囲の様子を受けて、慌てて御坂らも臨戦態勢を整えるが、そんな彼女らをミコが抑えた。

「……この場は、ミコにお任せください。とミコは自信のほどを窺わせます」

その言葉と共に、二対四本に増えた『タラリアの靴』に紫電が迸る。その雷は周囲の大気を焼き、力を徐々に蓄えていく。完全体となり、更に出力を増した電撃が、幻獣（ユニコーン）に更なる〝力〟を与えようとしていた。

そうして、十分な電撃をその身に蓄えたその時――

「――いきます」

――彼女の姿は、一瞬で視界から消え去った。

「えっ?!」

「な……！」

後には轟音だけが鳴り響き、『幻獣』は『彗星』へと変化した。

◇　◇　◇

そして、遠い戦場の彼女の猛りは、同じ血を分けた姉妹へも伝わっていた。

「んぅっ……！」

「エリー、大丈夫?」

急に蹲ったエリーの体調を、警策が気遣う。御坂ミコと同じレプリカントＡＲＭＳを移植されたエリーが、完全体と化した彼女の共振に身を竦ませている。彼女は、感じ取っていた。自分たちが向かうその先に、たった今自分と同じ存在が生まれたことを。そのチカラが、自分と比べても格段に高いことも。しかし、それでも。

「あそこに、いかなきゃ……！」

彼女の胸中に燻る、不安の芽は消えていない。この先に待つであろ

う強大な敵と、周囲の脅威から大切な『ともだち』を守るため、彼女もまたレプリカントＡＲＭＳ≪トゥイードルダム・トゥイードルディ≫の封を開け放つのだった。

◇　◇　◇

大気が、縦横に引き裂かれる。衝撃が、辺りの敵を手当たり次第に破壊し、跡形もなく粉砕していく。そうして、それら一切に幻獣（ユニコーン）は一瞥もくれず、ただ一筋の彗星となって奔り抜ける。

「すごい……！」

御坂が、自身の妹の勇姿に思わずつぶやく。

戦場は、一気に一方的な展開となっていた。幻獣（ユニコーン）の加速は、周囲の地磁気と電磁波へ干渉することで行う『電磁加速』。そのため、大気との摩擦の一切を考えなければ、『理論上どこまでも加速し続ける』ことが可能なのだ。彼女の姉の代名詞である超電磁砲（レールガン）も、弾体の維持さえ可能なら、音速を遥かに超える速度が出るとされている。一度加速した幻獣（ユニコーン）に、追いつける者はこの戦場にはいなかった。

「いける！　いけるわよ、これなら！」

「そうですわね。あの大量にいた量産型のＡＲＭＳたちも徐々に数を減らしていますし、後はあの巨大な靄のようなＡＲＭＳを何とか出来れば……」

御坂や白井の顔にも、たちまち希望が浮かぶ。実のところ、二人は先程まで戦い続きで、少しだけ疲弊していたのだ。それも、無理からぬことだろう。何せさっきまで彼女らが対峙していたのは、数を数えるのも億劫になるほど大量にいる完全体のＡＲＭＳたち。さらに奥には、それらを際限なく生み出し続けている天衝く巨体がいるのだ。むしろそれらを前にして未だモチベーションを維持しているのは脅威的なことであるし、決して兵士や戦士ではない一介の女子中学生としては驚嘆すべき胆力だ。

そこに降って湧いた、幻獣（ユニコーン）の勇姿。圧倒的な戦闘能力。それに希望を抱きたくなるのは、人間として当然の感情と言えた。

――しかし。かつての世界でホワイトに取り込まれた唯一の息子

は、以前こんな風に口にしていたことがある。

「『希望』こそが、人間にとって一番の災厄――――まさにその通りだな、我が息子(ブラック)よ」

圧倒的な幻獣(ユニコーン)の戦闘能力を目の当たりにして、それでもホワイトはひるまない。天高くから戦場を睥睨するその口元には、一向に消えることの無い笑みが浮かんでいた。

「――――！」

何度目かも分からぬ幻獣(ユニコーン)の突進(チャージ)。その直線軌道上にある、全てをなぎ倒す圧倒的な暴威。邪魔をするモデュレイテッドを根こそぎ粉砕し、駆け抜けたその先で――

「ッ?! これは、なんですか!? とミコは、困惑を露わにします！」

周囲の景色が、一変しているのに気が付いた。今、彼女がいるのは先程までの屋外ではない。夥しい機械が設置された、どこかの施設の中。金属とコンクリートに覆われた、人工的な空間。おおよそ有り得ないとは思ったが、空間系能力者によって運ばれてしまったかと様子を窺っていると、周囲の機械の陰から、人影が歩み寄って来た。

「――素晴らしい性能だったよ、レプリカントＡＲＭＳ≪ユニコーン≫」

そう言って近づいてくる沢山の人物は、全てが同じ顔。金髪に眼鏡をかけ、白衣を纏った研究者然とした姿。ミコは、知らない。その人物こそ、かつてのホワイトの姿だと。全ての絶望を生み出した、忌むべき元凶なのだと。

だからこそ、彼女の反応は、どうしようもなく遅れた。

「だがこれ以上――――『王』に逆らうのは、不敬だろう?」

その言葉と共に、周囲の空間から生じた幾筋もの閃光が、幻獣(ユニコーン)の肢体を一瞬のうちに引き裂いた。

０７７　魔眼―バロール―

「……ッ！」

周囲３６０度から飛来した閃光に身体を幾度も貫かれ、それまで傷一つなかった幻獣（ユニコーン）の眩い肢体がガクリと膝をついた。

「ふむ、いくら君が早かろうと、全方位から迫る光学兵器からは逃れられまい？　この空間に飛び込んだ瞬間に、君の命運は尽きていたのだよ」

「っ、グッ！」

いまや周囲を取り囲むように存在する白衣の人物。その足元では彼らの像がわずかに歪み、元の通りの砂利の地面が見えていた。しかしそれらが見えるのも、ほんの一瞬。たった一度瞬きした次の瞬間には、リノリウムの硬質の床が重なって見えていた。

「周辺の光を屈折させ……視覚から入る映像を捻じ曲げた幻影、ですね。とミコは、偉そうな金髪男の『安い手品』を看破します」

「正解だ。しかし……安い手品、か」

ミコの酷評を受けても、白衣の男、キース・ホワイトの余裕じみた笑みは崩せない。むしろより一層笑みが深まったような気さえする。

「確かにこれは、『安い手品』だ。所詮は自然に存在する光を捻じ曲げて、立体映像を作り出しているに過ぎんからな」

「……」

「しかし、ここでもし――――全ての光の位相を揃え、増幅して撃ち出すことが出来たとしたら？」

「ッ!?」

ホワイトの言葉の意味を悟り、すぐさまその場から飛び退る。電磁加速を最大限で使い、最高速度でそこからの離脱を試みた。

「無駄なことだ。この『瞳』に一度魅入られた以上、何人も逃れることは決して出来ん」

不意に、彼女の周囲の景色が歪む。それはほんのわずかだった筈の光を束ね、揃え、強め。

「この――――『バロールの魔眼』からは、な」

ホワイトの言葉と共に、再度ミコの身体を閃光が撃ち抜いていった。

「……っ、こんのぉっ!!」

自身の妹が閃光に貫かれたのを目の当たりにした御坂が、周辺に散らばる陰険そうな金髪眼鏡に電撃を飛ばす。しかし、それも暖簾に腕押し。ただの映像に過ぎないホワイトたちは、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべるだけだ。

「おやおや。映像だと分かっている私を攻撃するとは、些か知性が足りないんじゃぁないかい？　それでも学園都市屈指の実力者なのかな？」

「黙りなさいよ！」

「それに、君の相手は後ろの彼らだったはずだ。先約は守り給え」

「?!」

ホワイトの言葉に息を呑み、その場から全力で飛び退く。丁度自分の心臓があった位置を、鋭い触手が通り過ぎ、どっと汗が出る。改めて周囲を見ると、ミコや御坂によって倒されたはずのモデュレイテッドたちが復活しつつあった。

「なんで……！　コイツ等、倒したはずなのに！」

「ＡＲＭＳの最たる特徴は、再生に等しい回復力だ。あれだけ時間を置けば、動けるようになるのは道理さ」

ホワイトのそんな言葉を余所に、御坂は懸命に周囲に電撃をぶつけていく。生命の無い人形のような敵、一切遠慮はいらないとばかり、普段人間相手には使うことも無い高電圧を手当たり次第に放って行くが、それでも数が減らない。全壊した個体は流石に回復しないようだが、半壊に留まる個体は、再生が済み次第戦線に復帰してくる。

（これじゃ、イタチごっこじゃない！　何とか切り抜ける方法を――）

周囲の敵に痛打を与えつつ、突破口を模索している時、彼女の耳に声が聞こえた。

『お姉様、全力でコンテナ車へダッシュしてください。と、ミサカは要請します』

「――――、ッ!?!!」

耳に届いた艶消しの声に、反射的に従う。次の瞬間、彼女の頭上スレスレを幾百もの雷撃が駆け巡った。

「きゃあ?!」

普段電撃に慣れている彼女にしてはらしくない悲鳴をあげつつ、転がるようにコンテナ車へとたどり着く。そこには、自分に無機質な視線を投げかけてくる複数の瞳があった。

「……Ｇｏｏｄ．何とか、間に合ったようね」

そう言ってくるのは、コンソール近くに脱力して腰かける布束。どうやら治療用カプセルで眠っていた妹達（シスターズ）の覚醒に成功したようで、さっきの雷撃は彼女らの攻撃だったらしい。グレイの計画で重傷を負っていた彼女らの無事な姿に、御坂もほっと胸をなでおろす。

「……しかも、ただ目覚めただけじゃないわ。彼女らに投与されている『メディカライズＡＲＭＳ』は確かに他のＡＲＭＳのように変形も出来ないし、完全体になることも出来ないものだけど……どうやら、休眠状態へと移行する２４時間後までは、本人があらかじめ持つ『能力の増幅効果』だけは保有しているらしいわね」

本来、妹達（シスターズ）の能力は異能力者（レベル２）から強能力者（レベル３）の間程度の電撃使い（エレクトロマスター）、『欠陥電気（レディオノイズ）』。その能力の分類はどれだけ調整を施そうとも超能力者（レベル５）には届かないものであったが、ＡＲＭＳが保有する『能力の増幅効果』はこの前提を覆す。概算ではあるが、今の妹達（シスターズ）は大能力者（レベル４）相当の力量を持つだろう。それほどの実力を感じさせる規模の雷撃だった。

しかし、今回ばかりは相手が悪かった。

ガシャ、という硬質音に、御坂が後ろを振り向く。そこに広がっていた光景に、思わず息を呑む。そこには身体のあちこちが崩れ、焦げ付いてはいたものの、五体満足なまま彼女らを取り囲むモデュレイテッドたちの姿があったのだ。

「ククク……、いや、実に惜しかった。君らの雷撃にもう少し威力があれば、彼らはコアを砕かれ戦闘不能に陥っていただろう。いや、実に見事な雷撃だった」

そう言いながらも、ホワイトの口が三日月の形の笑みを浮かべていく。まるで『悪魔』が、人間にさらなる『絶望』を与えようとするかのように。

「しかしながら、君らは実に愚かな行いをしてしまった。私を含め、ＡＲＭＳは一度味わった攻撃には『耐性』が生まれ、次は同じ轍を踏まぬよう『進化』する性質がある。さて、ここで問題だ。先程から君らの姉は、『モデュレイテッドどもに何度電撃を浴びせていたかな』？」

それは、彼女らに絶望を生み出す種子（タネ）。電撃を一番の武器とし拠り所とする彼女らから、その武器自体を奪う行為。さらに絶望を煽るかのように、意志を見せないモデュレイテッドどもが徐々に徐々に、輪を狭めていく。

「お姉様！」

白井が、空間移動（テレポート）で再びバリケードを作る。しかし、それも気休め程度。迫る大群は、無造作にバリケードとなった鉄板や鉄骨を引き倒し始めた。

――と。いよいよ迫って来たモデュレイテッド達に、全員が身体を硬くする中、不意に後ろで、ゴン、と金属を叩く音が聞こえた。

次の瞬間、モデュレイテッドの足元の砂利が爆発し、接近して来ていた個体を全員後退らせた。

「……ッ、チィッ、クソが……！」

それを見て悪態をついたのは、意識がようやく戻った一方通行（アクセラレータ）。未だふらつくのか、頭を振って意識をはっきりさせようとしていた。

さらに、輪の一方で爆炎と電撃が舞い上がる。そこからモデュレイテッドたちを、文字通りの意味で切り抜けてきたのは、ステイル＝マグヌスと神裂火織。未だあちこちから白煙を上げつつも、モデュレイテッドを轢き潰してきた幻獣（ユニコーン）。全ての戦力が、御坂達がいるコンテナ車周辺に集結した。

「……ここが正念場ね。全員気合入れなさい！！」

御坂の号令に、集ったすべての者たちの瞳に力が籠る。あまりにか弱く、それでいて中々折れぬ『意志』に、ホワイトは口角を吊り上げるのだった。

０７８　死闘―デスマッチ―

紫電が舞い、火の粉が飛ぶ。周囲をぐるりと取り囲んだ異形の軍団に対し、御坂は、ステイルは、奮戦していた。神裂に至っては、その長刀から繰り出すワイヤーを使った斬撃で二人に匹敵する数を倒していた。それ以外の者たちも、各々自分たちに出来ることで、空間移動（テレポート）で、拳で、そこらにあった瓦礫の破片で、打ち払い、殴りつけて少しでも包囲を崩そうとした。

しかし崩れない。たまに、当たり所が良かったのか、再生しなくなる個体も出始めているのだが、それに倍する数が補充され、包囲網は確実に狭まりつつあった。天に向かって屹立する暗闇の巨人と、そこから舞い降りる異形の兵。それはまさに、絶望的ともいえる光景だった。

そんな中、目覚めたばかりの一方通行（アクセラレータ）は、一つ舌打ちを漏らし、改めて周囲を睨みつけていた。正直、夢うつつとは言え、話は半分くらい理解している。今自分たちを包囲している相手は、こちらを逃がす気などさらさらなく、自分も含めて全員を皆殺しにするつもりだ。――そう、皆殺しである。この自分を。学園都市七人の超能力者（レベル5）の頂点、第一位を。一方通行（アクセラレータ）を。もののついでのように、殺すつもりなのだ。その舐め切った態度が、彼には決して我慢ならなかった。

今現在、自分の周りにいる奴らは、先程まで必死になって実験を止めようと、自分に向かって挑んで来た者たちだ。コイツ等があそこまで必死に実験を止めようとした理由も、正直現在の自分には理解できない。いや、今すぐに理解したくないのかも知れない。だから、今のところ、コイツ等も変わらずに自分の『敵』だ。『敵』の、はずなのだ。

――なのに。

「……オイ、三下ども」

気づけば、一方通行（アクセラレータ）はそんな彼らに話しかけていた。

「っ、はぁっ！　何っ!?」

電撃で、無理矢理敵の攻撃に合間を作った御坂が振り向く。その顔にはっきりと浮かんでいたのは、嫌悪と憎悪。当然だ。『敵』なんだ。

お互い、そんな顔を向けられるのが当たり前の関係なんだ。そんなことは一方通行（アクセラレータ）にもよくわかっていた。

「今から……オレがあのデカブツに、消し飛ぶだけの攻撃をする。テメェ等は、少しの間オレを守って、時間を稼げ」

それでも、彼の口は止まらなかった。

「っ、……！　なん、で、アンタなんかのために！」

納得できない、承服できない、という感情のままに、御坂が叫ぶ。当然だ。それだけのことを一方通行（アクセラレータ）はしてきた。だというのに、文字通り襲い来る異形から、少しの間でも盾となれ、と言われて、そうか、と返せる人間などいない。当たり前だ。

だから、これで納得できるのは、相当の馬鹿だけだろう。

「――――よし、分かった。少しの間でいいんだな」

返したのは、上条当麻。さっきまで拳一つで第一位と戦っていた、本物の馬鹿。

「ちょっと、なんでよ?!　コイツがどれだけのことしたと思ってんの!?」

「いや、そう言ったって、このままじゃジリ貧だろ。打開策があるって言うんなら、賭けてみようぜ」

「僕は上条当麻に賛成かな。このまま持久戦を続けると、さすがに僕らのスタミナが先に尽きる」

「未成年の癖に、煙草なんて吸ってるからではありませんの？　何でしたらこの後風紀委員（ジャッジメント）で、煙草が未成年者に与える多大な影響について、滾々と説明してもよろしいんですのよ？」

「……それは勘弁して貰えますか。彼の場合のアレは、火種や霊装を兼ねると言う意味合いもありますので……」

戦闘中だと言うのに、談笑のような口論のような何かが始まった。なんだ、コイツ等。事態が把握できていないのか。それとも能天気なだけなのか。目の前の彼らのことは、一方通行（アクセラレータ）にはまるで理解できない。――けれど。

ほんの少しだけ、そこに自分は入れないだろうことに、本当に少しだけ、寂しくなった。

上空で、キュゴッ！という、大気そのものを呑み込むかのような轟音が鳴り響く。まるで、たった今少しだけ抱いてしまった感情を、振り切るように音が、空気が鳴き喚く。生じさせたのは、空気の圧縮。極限まで圧縮させ、空気を急激にプラズマへと変えていく。

「――くだらねェこと言ってねエで、キッチリ守りやがれ。なンなら、一緒に吹き飛ばしてやっても良いンだぜ？」

「なんですって?!　ホラ、見なさい！　コイツ、全然反省とか、良心の呵責とか一切感じてないのよ！　守る必要なんてないわ！」

「いや、それだと俺達だってただじゃすまないだろ。こんな時にそんなこと追及してもしょうがないだろ。全部終わらせてからにしようぜ」

言い合いながら、全員がその攻撃を通らせるために奮闘する。飛来した金属弾を、空間移動（テレポート）した鉄板が弾き飛ばす。バリケードを超えて襲ってきた異形を、電撃が打ち据える。炎が寄り集まり、巨人となって異形どもへと咆哮する。鋼線（ワイヤー）と刀で戦う時代錯誤な女が、嘘のように巨体を吹き飛ばしていく。そして、彼らの防衛線を越えて飛来した、視認も感知も出来ない『空間そのものの断裂』は――。

――ツンツン頭の少年の、ただの『右拳』で砕かれた。

「――やっちまえ、第一位（さいきょう）」

「巻き込まれたくなきゃ下がってな、三下ア（さいじゃく）」

そうして墜落した光球は、暗闇そのものとしか見えない巨人へと突き刺さり、辺りを真昼のような光の中へと染め上げた。

……そんな彼らの、すぐ後方で。

キース・グレイは、只々その身を包む無力感から、遥か天空を見つめ。初春とユーゴーは、血を吐き続ける佐天の手を、決して冷めることがないように、温もりが伝わるように、両手で柔らかく包み込んでいた。

（（――――――――お願い））

彼女を一番近くで見続けていた二人は、ただ祈りを捧げ続ける。

０７９　奇跡―ミラクル―

（……ここで、終わりか……）

キース・グレイの中には、粘着き纏わりつく泥のような諦観（あきらめ）が満ち満ちていた。元は、ただ自分を勝手な都合で生み出した父の手から逃れたいだけだった。父が用意した試験管の中ではなく、自ら作り出した自我（アイデンティティ）の下に自由に生きたかっただけだった。そのために、色々なものを犠牲にし、自由になろうともがいた。だが結果として、自由になどなれていなかった。自分で考えているつもりだったのに、散々干渉されて、挙句の果てには父に利用され使い捨てられただけだった。道化という言葉があるなら、自分にこそ相応しい言葉だろう。

（……）

視線を巡らせ、傍らの少女らを見つめる。ユーゴー・ギルバート。かつて、オリジナルＡＲＭＳと共に戦い続けた女性。初春飾利。風紀委員（ジャッジメント）の一人で、本来ならこんな鉄火場に出てくるはずは無かった少女。

そして、彼女らがその手を握り続ける少女。佐天涙子。神獣（バンダースナッチ）をその身に宿し、自分が計画の中心に据えたせいで、どうしようも無い程巻き込んでしまった少女。

（……そう、だな。せめて、彼女を日常に帰す手助けくらいはしなくてはな……）

動かなかったはずの両手に、有りっ丈の力を籠めてただ這って行く。それは余りにも遅い速度でしかなかったけれど。彼にとって生まれて初めて、心の底から自らの意志で動いていると断言できる歩みだった。

◇　◇　◇

「……おい、どういうことだよ」

とんでもない爆音と衝撃に、閉じていた瞼を開けた時、上条は絶望という言葉の意味を知った。

「……これは、流石に厳しいな」

理屈が分からなくても、威力は分かる。魔術師であるステイルは、冷静に彼我の実力差を悟り、最善策を練り始めた。

「……クソが」

そして、何より今の攻撃を形成した一方通行（アクセラレータ）は。生まれて初めて、『勝てない』と思える相手に出会った。

「……良い、攻撃だったよ」

プラズマが落ちた、墜落点。そこで舞い上がった土煙を裂いて、暗闇の巨人、≪ハンプティ・ダンプティ≫は、彼ら人類を天高くから睥睨していた。変わらず。傷一つなく。むしろ先程までよりも、一回り大きくなって。

「――だが。残念ながら、≪ハンプティ・ダンプティ≫にはあらゆる攻撃が通用しない。≪ハンプティ・ダンプティ≫は受けた攻撃の〝力〟を全て吸収し、自らの〝力〟へと変えてしまう――これこそが、『神の卵』！『大いなる器』だ！」

プラズマを吸収し、一回り大きくなった右腕を、ただ無造作に横薙ぎする。たった、それだけで。たったそれだけの、衝撃で。岩盤がめくれ上がり、防衛に回っていた上条達、御坂達は、木の葉のように吹き飛ばされた。

◇　◇　◇

爆風が、髪を弄る。衝撃に、逃げ出したくなる。けれど、二人とも動かなかった。二人とも、一心不乱に祈っていた。

（佐天さん……）

初春は、一番の親友を想って。この元気印の親友は、どんな窮地からでも必ず戻って来て、またいつものように元気に笑顔で、「ただいま」を言ってくれると信じて。

（佐天さん……）

ユーゴーは、ずっと見続けてきた少女のことを想って。声はかけられなかった。話も出来なかった。それでも彼女の中からずっと見続けて、何時しか『妹』のように想っていた少女を信じて。

（（佐天さん!!））

目覚めてくれると信じて、二人はただ祈り続けた。

……そんな、二人の間に。子供特有の華奢な腕が、ぬっと差し出された。その握り締めた拳から、はたまたその腕から、ポタポタと鮮やかな赤い血が滴り落ちている。

「……僕の、血を使え」

告げたのは、グレイ。見るとその後ろには、一面に引きずったような跡の残る血だまりが広がっていた。

「僕の血には今、ＡＲＭＳだけじゃなく、この世界のアザゼルも無数に混じり合っている。アザゼルは全てのＡＲＭＳの祖先にあたる存在だ。コアの傷も、もしかしたら修復出来るかも知れない」

そう告げるグレイの腕に、わずかに陶器のような罅が走った。それだけではない。腰から下が消失した胴体も、少しずつ少しずつ、灰になって崩れていっている。

長くは、ない。その事実を、初春もユーゴーも、グレイすらも悟っていた。ぽたり、ぽたりと、グレイの生命の滴が、佐天の胸の傷口へと滴り落ちていく。差し出された体勢のままのグレイの拳を、初春とユーゴーは両側から包み込んだ。

グレイは、たったそれだけの事に、泣きそうになっていた。包み込まれた拳から伝わる温もりが、彼の心の奥底まで解けるかのようだった。

（ああ……僕が、本当に欲しかったのは……）

誰かと繋がれた時に得られる、ただの人間としての温もりだったのかもしれない。

三人は、祈る。佐天の帰還を信じて。

「……確かに、これはキツイですね。けど、あの娘が後ろにいるんです。もう私は、負けられないんですよ！」

彼女らがいる車両を守ろうと、神裂が駆ける。かつて別れてしまったインデックスを守ろうと。『聖人』の力をフルに使い、巨人に抗って天を翔ける。

傷、付いていく。

「まったくもってその通りだね、神裂。彼女に近づこうと言うんだ、木偶は木偶のまま、灰へと帰りたまえ！」

大切な人たちが、大切な仲間が、傷付いていく。
「っ、フザケんじゃ、ないわよ……私の友達に、アンタ達なんかが、これ以上何もさせないわよ!!」
絶望は、目の前にある。終焉は、すぐそこまで迫っている。
(((――――だけど!!)))
だからって、それに負ける理由にはならない。絶望によって、諦観する理由にはならない。
――だから。
(((私たちは、負けたくない!)))
人類は、決して歩みを止めない。希望が、見えるからじゃない。どんな絶望があっても、どんな終焉が待っていても、それを受け入れることなんて出来ないから。

――――――――これが、わたしたちの〝意志〟だから。

だから、最期まで。最期まで、自分の意志で。周囲を囲む異形全てがその手に宿らせた破滅の光を、睨みつけてやる。こちらを嘲り笑うあの男の顔から、決して目をそらさずに。意志を、曲げずに。貫き通して!
……ああ、もし叶うのならば。
少し、ほんの少しだけ。
負けないために。前へ進むために。
――――が……欲しか……――――
(……)
それは、届かないはずの声。
(……)
誰にも届かない、消えゆくだけの願い。
(……)
声にもならない、心の底からの叫び。
(……)
けれど。それは――――

『――――わかった!!』

――届いた。

声と共に、佐天の身体が舞い上がった。その身体から膨大な光と共に、無数の粉雪が舞い踊る。まるで彼女を中心として、猛吹雪が訪れたように。

そんな有り得ない光景に目を丸くしていた初春とユーゴーは、不意に頭をぽんと軽く撫でられたような感触を味わった。

「――頑張ったわね。アンタたち」

その、声に。その懐かしさに。ユーゴーの思考は、完全に停止してしまっていた。

「だけど、ここからは任せておきなさい。元々わたしたちの摘み残しだしね」

視界が、ぼやける。涙が溢れて、溢れて、以前よりずっと大人びた彼女の背中がまともに見えなくなる。

「だから――――後は、『リーダー』の私に任せなさい」

『……っ、恵、さん!!』

幾千の悪意の前に、敢然と立ちはだかる女性。かつて見た彼女と同じ、誰よりも頼れる背中。

『――――光(ちから)が――』

そして、彼女のＡＲＭＳも、また。

『――――光(ちから)が、欲しい!!』

全ての悪意を跳ね除け、顕現する〝女王〟。今再び、世界を越え、時代を越え。眠りについていた≪女王(クイーン・オブ・ハート)≫が、唯一無二の相棒(パートナー)と

共に、この世界へと光臨した。

０８０　兄弟―ブラザーフッド―

その存在は、圧倒的だった。

『――光（ちから）が、欲しい?!』

周囲に広がる異形共の悪意、その一切を通さぬ不壊の城壁。

『――光（ちから）が、欲しいのなら――』

その城壁の主たる〝女王〟は、光の中で、再び相見えた男を鋭く睨みつけていた。

『――与えましょう!!』

彼の者の名は、≪女王（クイーン・オブ・ハート）≫。かつての世界に存在したオリジナルＡＲＭＳの一体。

「なぜだ……なぜ貴様がここにいる!? ≪女王（クイーン・オブ・ハート）≫!!」

キース・ホワイトは狼狽を露わにし、眼前の女王に口角泡を飛ばした。ここは、かつてＡＲＭＳが存在した世界ではない。次元という壁を隔てた先にある並行世界だ。幾つも枝分かれした世界の中から、自分たちがいる世界を見つけ出すことなど不可能なはずだった。そう考えていたからこそ、この世界に存在するバンダースナッチを追い詰めたことで安心しきっていた。

だというのに、その前提はいともたやすく崩された。眼前の女王は、確かにそこにいる。それが間違いもない結果だった。

そんなホワイトの様子に、軽く溜息を吐きながら彼女――≪女王≫をその身に宿す女性、『久留間恵』が答えた。

「別に、そこまで不思議じゃないわよ……しいて言うなら、そこの二人のおかげね」

そう言って振り向いた先にいたのは、今なお佐天の傍らに寄り添っている三人の中でも、女性と少年――ユーゴー・ギルバートとキース・グレイだった。

「どんな原理かは知らないけど、向こうの世界でくつろいでた私たちの頭の中に、突然そこのキースの声と一緒にユーゴーの声が聞こえてきた。何が起こっているのかは分からなかったけど、その声に応えな

きゃって思ったら、こっちの世界に精神体だけ飛ばすことが出来たのよ」

そう答える間も、恵の身体は端の方がおぼろげで、砂のように崩れたりくっついたりを繰り返している。どうやら単純な精神体の映像ではなく、佐天のナノマシンを触媒に身体を構成しているようである。

恵の言葉に、すぐさまホワイトは思考を加速させる。かつてはエグリゴリの最高頭脳の一人として君臨した彼だ。有り得ない可能性を取捨選択し、やがてキース・グレイに再び目を向けた時、彼は正答へと至った。

「『黄金錬成（アルス＝マグナ）』……！」

キース・グレイがアザゼルと融合するため、発動させ続けていた魔術の存在をようやく思い出した。数ある魔術の中でも、『黄金錬成（アルス＝マグナ）』の発動条件と効力は異端の域に入る。何せ『思考したことが、そのまま現実になる』のだから。ホワイトにとってアザゼルとの融合を果たした今、そんな魔術は無用の長物だったが、今この場ではまずかった。キース・グレイと共に、祈りを捧げた人間がいたのだから。

「キース・グレイが思考したことによって、『黄金錬成（アルス＝マグナ）』が発動し……それを受けて、思念のエキスパートと言える『精神感応（テレパス）』の娘が、オリジナル共に思念を飛ばしたのか!?」

『黄金錬成（アルス＝マグナ）』は、思考したことが直接魔術の効力となる。今やＡＲＭＳだけではなく、アザゼルまで取り込んだキース・グレイの能力増強は最大だろう。そして、彼が先程まで考えていたことはたった一つ。身体が崩れていく今わの際で、彼が祈ったのは、『祈りよ届け』というただそれだけ。だが、その祈りは確かに届いた。どこまでも遠くに声を届けることが出来るユーゴーの『祈り』は、グレイの魔術によって膨れ上がり、世界を穿って確かに届けるべき相手へと届いたのだ。

これは、ただの偶然だろうか？否。グレイは、ユーゴーは、ここにいる皆は口を揃えて言うだろう。これは、『ヒトの意志が生んだ奇跡だ』と。

「さて……」

恵が横たわる佐天とその傍らの初春に微笑みかけた後、再び前を見据える。彼女のかける眼鏡の奥から、かつてブルーメンの一員として戦い続けた日々の強気な眼差しがホワイトを貫いた。

「ここに来る途中で大体の事情は悟ったけど……よくも私たちの『妹』に、好き勝手やってくれたわね!!　撃ち返しなさい、≪女王（クイーン・オブ・ハート）≫!!」

『悪意ある者どもよ！　汝自身の悪意で、己が身を焼くが良い――――――『アイギスの鏡』ッ!!』

瞬間――全てが反転した。炎が、雷が、棘が、光が、力が全て反転し、それを発したモデュレイテッドを砕いていく。形勢は一瞬にして逆転した。

そして、更に『奇跡』は続く。

恵の背中を頼もしく見つめるユーゴーの傍らに、再び佐天から吹き出たナノマシンの雪が集まり始めたのだ。その数は、『3』。三人の男性の姿を取って、地面にゆっくりと降り立って行く。

「……フ――――ッ、ここが並行世界なんだね。何だか不思議な感じだね。あまり、元の世界と変わらないって言うか……」

そんなことを言う男性は、優し気な目元を緩め、周囲を物珍し気に見て回っていた。

「おぉい、そんな場合じゃねえだろ。俺らの不始末で、こっちの世界の『妹』に迷惑かけてるって話なんだ。さっさとキースの野郎を、ぶっ倒そうぜ！」

髪を短く刈り込んだ青年は、タンクトップの中に納まる鍛え上げた両腕をぐるぐると回していた。

そして、降り立ってから後、もっとも落ち着いた空気を醸し出していた男性が口を開いた。

「……そうだな。例え世界を隔てても、俺達はＡＲＭＳを宿した『兄弟』だ。だったら、助けてやらないとな……！」

その三人の姿は、かつてとは違っていた。少年であったはずの三人は成長し、今は一人前の男性へと変貌を遂げていた。けれど、その雰囲気は、その魂は、その意志は変わらない。かつて最も心優しかった

少年は、包容力溢れる青年へと成長していた。怒りと復讐に燃えていた少年は、情熱を内に秘める青年へと成長していた。そして、彼女が最も愛した少年は――――変わらず己が意志を貫き通せる青年だった。

知らず、彼女（ユーゴー）の口から、彼らの名がこぼれた。

「武士君……隼人君……それに……高槻君!!」

その声に、かつて少年であった三人は、ほんの僅か口元だけ緩めた。

そして――――世界に、『声』が響き渡る。

――――力が、欲しいか……!?

その『声』に、世界が震える。その『存在』に、世界が畏れる。その畏怖は、世界に『共振』となって鳴り響いた。

――――力が、欲しいのなら……!!

その恐怖に、真っ先に耐え切れなくなったのは、ホワイトだった。すぐさま周辺に横たわっていたモデュレイテッドを呼び覚まし、『声』の根源へと向かわせる。しかし、そんなことで間に合うとは、ホワイト自身も思っていなかった。

『――――くれてやる!!』

その瞬間、舞い上がったのは、偉大なる天空の覇者。移植者巴武士の脚となり、翼となって世界を翔ける者。音を超え、光となって『導く者』――――≪白兎（ホワイトラビット）≫。

『――――くれてやる!!』

接近しつつあった異形共が、なす術なく引き裂かれる。それを為したのは、一人の勇壮たる戦士。その『剣の主』たる新宮隼人の手足と

なって、敵たる全てを斬り払う者。『神の槍』を振るい、『護る者』――――≪騎士（ナイト）≫。

『――――くれてやる!!』

そして、最後に現れるは、暴虐たる破壊の化身。悪鬼羅刹のごとき面相で、周囲を威圧する魔獣そのもの。その胸に秘めるは、唯一の友たる『高槻涼と共に生き、共に死ぬ』という堅き『意志』のみ。絶対の権化たる『破壊者』――――≪魔獣（ジャバウォック）≫。

悪意が砕かれ、希望が生まれる。全てのオリジナルＡＲＭＳは、今まさに眠りから覚め、最後の『妹』を助けるべくこの世界へと集結するのだった。

０８１　散華―グロリアスデス―

見渡す限りの悪意が蠢く。一つとして同じ姿のいない異形どもが、悪意の王からの命を受けて這い寄る。それは、さながら死者の軍勢。あらゆる生ある者を恨み、憎み、永遠に嫌悪する怪異そのもの。生命ある者たちにとって致命的であるはずの軍勢は――。

『愚かな！　ついにヒトの意志すら失くした者どもよ！　お前たちでは決して敵わぬということすら忘れたか！』

鎧袖一触。たった一体の騎士に、紙屑のように弾き飛ばされた。その様は精強、その槍は無双。たったひと振りで近づいてくる異形を全て弾き飛ばした≪騎士（ナイト）≫は、己が魂そのものとも言える槍に、火を灯す。内に秘めた焔が、光が、眩しい程に迸る。やがて、包んでいた殻すらも割り砕いて、彼の魂の槍――『ミストルテインの槍』がその真なる姿、双頭の光の槍へと変貌する。

『忘れたとあらば、思い出させてやる――意志と共にお前たちが捨ててしまった、本当の〝力〟というものを!!』

今や光そのものと言える神の槍を振るい、≪騎士（ナイト）≫は蠢く闇へと斬り込んでいった。

そして、彼らの上空を、高速で飛び交う者たちがいた。翼や翅の生えた異形。かつてモデュレイテッドであった時に、それらの器官を新たに獲得することに成功した者たち。彼らは己の特性を生かし、空から目標点へと攻撃を仕掛けるつもりだった。

しかし、さっきから一向に進むことが出来ない。≪女王（クイーン・オブ・ハート）≫によるものでは無い。先程から無限のように沸き続け進行し続ける軍勢が、ある地点の先で謎の崩壊を遂げているのだ。既にヒトですら無くなった異形には、その原因を推察することすら出来ない。

『……とうとう、考えることすら出来なくなったか』

不意に背後から響いた声に、反射的に異形達が振り向く。意志を失くした彼らにとって、それは思考ではなく、ただの反射。心を失くした彼らにとって、その声に含まれる悲嘆を感じることは永遠にない。

『ARMSの意志どころか、移植者の意志すら失くしてしまったお前たちでは、決して我らには勝てん……』

その瞳に、その声に、意志あるが故の悲しみを、哀れみを、嘆きを乗せて、≪白兎(ホワイトラビット)≫は語る。既にその言葉は届かないと、理解っていて、なお。

『言ったはずだ！〝意志〟こそが、無限の可能性だと!!』

巴武士の意志と、≪白兎(ホワイトラビット)≫の意志。その二つの意志によって生み出された無窮の光を纏い、音速を超えた≪白兎(ホワイトラビット)≫は、一筋の閃光となって駆け抜けた。

雲霞の如く押し寄せる異形の群れ。天を≪白兎(ホワイトラビット)≫、地を≪騎士(ナイト)≫が押し戻す中、砲戦に特化したモデュレイテッドたちが執拗に攻撃を加える箇所があった。炎が、雷が、あらゆる破壊が一点に集中して放たれていく。まるで、その煙の向こうを見ないように。その先にいる存在を、必死に否定するかのように、最も多くの力が集約していた。

そんな破壊の爆心地に、魔獣の咆哮が響き渡る。

『オォオオオオオオオオオオオアァアアアアアアアアアアアアアアアア――――!!!』

炎が、煙が吹き飛ばされる。奥から出てきた敵に、破損は一切ない。それがどれほど絶望的な事実なのか、考えることすら出来ない異形たちは、ただ機械的に自分たちの砲塔を向けた。

≪魔獣(ジャバウォック)≫がその掌に宿した、〝破壊〟の光を理解しないまま。

『何度も言わせるな……！』

炎を喰らい、雷を喰らい、膨れ上がる真の〝破壊〟そのものは――

『ARMSの何たるかも理解せず、〝力〟のみを求めてきたお前たちでは………我らには勝てん!!』

――≪魔獣(ジャバウォック)≫の叫びと共にその掌から解き放たれ、周囲の異形を焼き尽くした。

……その一連の光景を見ていたキース・グレイは。かつて胸に抱いていた炎が、再び灯るのを感じていた。そうだ。これだ。何者にも阻むことが出来ない、ヒトの心。プログラムなどに左右されず、最後にはそれすら食い破った確固たる〝意志〟。彼らオリジナルのことを

知った時、彼がどうしようもなく惹かれ、尊敬の念を抱いたのは、彼らの剛く堅いその意志によるものだった。

――父の作った、試験管のようなプログラムすらも打ち砕ける〝意志〟だった。

（どうして……！）

自分はどこで、間違えてしまったのか。どうして彼らの傍らで、父と戦う道を選ばなかったのか。一握の灰となって崩れていく中で、心に抱いていたのは、ただその後悔だけだった。

そんな彼にとって、その声は、福音だったのかもしれない。

『――――グレイ。顔を、上げるんだ』

自分の声に、どこか似通ったハスキーな声。その声に驚いて、思わず俯けていた顔を上げた。そこにいたのは、自分とよく似た顔立ちの、ベリーショートの金髪を持つ妙齢の女性。かつて知られていた鋭い面差しは、どこか柔らかさを持った物へと変化していたが、その美貌は忘れない。

「バイオ、レット……？」

≪ハンプティ・ダンプティ≫の中にあった記憶でしか知らない存在。自分と同じ染色体を持ちながら、唯一の女性体クローンとして生まれたキースシリーズ。決して会うことは無いと思っていた――――自分の、『姉』。

『彼ら（オリジナル）と共に、私の所にもお前たちのテレパシーは届いていた。この世界の事情も、こちらでお前が起こした事件についても把握している』

そう告げたバイオレットは、グレイの傍らへと膝を突き、その身体を抱き上げた。ごく近い距離で、双子のように似通った視線が交錯する。叱責を覚悟し、ぎゅっと力を籠めて瞳を閉じたグレイを……バイオレットは、その優し気な手つきで撫でた。

『……お前は、悪くない』

その言葉に、グレイの頑なだった心の奥底に、罅が入った。

『私たちキースシリーズは、皆作られた存在として、自分自身の基盤を求めるようになる。ブラック兄さんも、シルバー兄さんも、グリーン

も……私だって、そうだ』

愛おし気に、優し気に撫でられるたび、グレイの鎧がはげ落ちていく。キース・グレイとして、『王』を求めた者としての矜持が、根こそぎ融けていく。

『私たち兄弟の中には、自らの存在を確固たるものとするため、狂気に奔る者すらいた。無暗に生命を奪い、それによってしか自分を保てない者すらいたんだ』

やめてくれ。これ以上、僕を弱くしないで。

『けれど、お前はそんな殺戮に走らなかった。あくまで計画ありきではあったが、助けられる者は助け、助けようとする努力を惜しまなかった。それは、父の干渉を受けている中でも、決して変わらなかった。……だから、な』

これ以上、弱くなったら――――。

『お前は、私たちキースシリーズの、〝誇り〟だ』

〝涙〟を、堪えることが出来ないから。

「姉、さん、ね、えさ……！　う、ぁ、あ、あぁあああああああああああああああ!!!!」

キースシリーズの末弟としてではなく、冷酷非道な計画の主導者としてではなく、今ようやく一人の十歳の少年に戻って、グレイは泣いた。進んで、迷って、足を止めて。全てのしがらみを取り去って、やっと一人の少年に戻れて、グレイは泣いた。

バイオレットは、ただ黙って弟を抱き締めていた。その涙が止まるまで。その慟哭が治まるまで。彼の身体に微細な罅が入っていくのを目にしながら、その罅が少しでも遅くなるようにと願いながら、力の限り抱き締めていた。

やがて、しゃくり上げながらも、グレイは泣き止み、未だ涙の跡が残る顔を上げた。

「……まだ、僕たちにも出来ることはあるよね」

その瞳には既に決意が満ちていた。バイオレットが何か伝えたわけではない。けれど聡明な弟は、伝える前から全てを悟っていた。

……その結果、どうなるかも。すべて。

『……今現在、戦況は四体のオリジナルによって維持されているが、彼らは所詮散布されたナノマシンで形作られた仮初の存在だ。元凶たるキース・ホワイトを打破するには、こちらの世界の者たちの協力と、バンダースナッチの適合者、佐天涙子の覚醒が必要だ』

「うん、わかってる」

『佐天涙子の覚醒には、既に〝彼女ら〟が取り組んでいる。だから後は、こちらの世界の者たちの協力と、彼らの強化が必要になるわけだが……』

「……やっぱり。そう、なんだね」

『……』

語らずとも、伝わった。伝わってしまった。

「僕の中のすべての〝力〟、それを僕の身体と共に、周囲一帯に分け与えればいいんだね」

現在戦力外となっているこの街の住人達を強めるには、それしかない。幻想御手（レベルアッパー）を取り込み、アザゼルさえ取り込んだ原初にして無限の可能性。何にでもなれるグレイが、この街で今も戦っている彼らに、最適な〝力〟を届けるしかない。

その言葉を告げた時、今度はバイオレットが泣きそうな顔になっていた。ミストルテインの槍で斬られたグレイは、助からない。そんなことは分かっているはずなのに、涙を必死にこらえていた。グレイはそんな彼女の顔が、少しだけ可笑しくて、和らげるように笑みを浮かべた。

「……大丈夫。悲しくないよ」

この街に来て数年。思えば生まれてからほとんどの時間を、この街で過ごしてきた。眩しい位明るいこともあれば、唾棄すべき闇もまた隠れている。どうしようもない街だけど、それでも。

「ずっと過ごした、この街で死ぬんだったら、そんなに悪くない、から、ね……」

キース・グレイだったものたちが、〝灰〟となって砕けていく。大地に積もり、風に舞い、空へと舞い上がっていく。バイオレットは彼の最期を看取り、その頬を涙で濡らしていく。

そんな彼女を見ながら、グレイの意識は、空にあった。
『……お前もまた、〝生〟を解き放ったのだな』
彼のすぐ後ろで、そんな声が響いた。振り向くと、漆黒のスーツを纏った長髪の男性が佇んでいた。
『セロよ……ならば、俺達もまた、この自慢の弟の行動に力を貸そうか』
その脇に、また新たな男性が現れた。今度の男性は短髪、ワイシャツにネクタイを締めた姿。
『〝力〟が足りぬとあらば、俺達の〝力〟も渡すと良い』
また新たに、軍服の男性。
『そうだね、兄さん。カツミの〝力〟を受け継いだ少女と、その友人の為だからね』
新たに、年若いスーツの青年。
『プログラムに抗い、自らを取り戻す為だというのなら――オレも力を貸そう』
最後に、少しだけデザインの違う軍服に身を包んだ男性。
グレイの周囲を、いつしか多くの人々が囲んでいた。それはかつて去って行ってしまった人たち。決して会えぬはずだった『きょうだい』たち。
「ああ……ここが、僕の〝居場所(い え)〟だったんだ」
その言葉を最後に残し、グレイの意識は空に溶けていった。

０８２　継承―レガシィ―

世界に、〝灰〟が舞い上がる。キース・グレイだった存在が、世界の彼方此方に散っていく。そしてかつて彼だった〝灰〟が、周囲の者達、特に学園都市の能力者たる彼女らに届いた時――

――力が、欲しいか？

その場にいた皆は、確かにそんな言葉を聞いた。抜けていた〝力〟が、湧き上がる。ホワイトの圧倒的な〝力〟に、折れそうだった意志（ココロ）が再び活力を取り戻す。そうして彼女らは、能力を司る頭脳がどこまでも冴え渡り、今まで考えたことも無かった能力の演算式が浮かぶのを感じ取った。

「？　これ……」

『――そうだ。それは、お前の能力の新たな『可能性』だ』

「?!　だ、誰よ、アンタ!?」

御坂が気付くと、すぐ近くに半透明の人影が立っていた。軍服を着込んだ男で、軍帽の下から覗く鋭い視線を御坂へと向けている。

『オレは、『キース・シルバー』。あの弟（グレイ）が死に際まで、特に心を砕いていた佐天涙子とその友人たちの中で、お前が最もオレの〝力〟を受け継ぐに相応しかった。そのため〝力〟を直接届けるために、オレが現れたのだ』

「力って……」

『キース・ホワイトが率いる、ＡＲＭＳ軍団を倒せる〝力〟だ』

その言葉に御坂が表情を引き締め、改めて正面を見据える。大分数を減らしているが、それでも全滅には至っていない。あの雲突く巨人が際限なく生み出し続けているのだ。いずれはまた自分たちを包囲し出すだろう。

静かに状況を把握する御坂とは対照的に、彼女の身体から発生する放電は、徐々にボルテージを上げていく。まるで、彼女がその内に秘

める様々な激情を現すように。
「……本当に、アンタの〝力〟でアイツらを蹴散らせるの？」
『……見縊るな。オレが渡すのは、正真正銘『戦いの神』の〝力〟。その道を阻む者など、どこにもいはしない。もっとも、貴様が不甲斐なければそれまでだがな』
「っ、上等っ!!」
彼女が伸ばした両手の中で、放電された電撃が光球を形作っていく。空中を浮遊していた粒子に片っ端から電流を流し、強制的に電荷を帯びさせていく。次第に限定空間内部は超高温のプラズマへと変化し、その脇を固めるように彼女が愛用する超電磁砲（レールガン）の電磁レールが照準を定めた。
『さあ、解き放て！　その〝力〟を！　そして高らかに謳え。あらゆるものに支配されぬ、〝力〟の自由を！』
「あ～～、もううっさいわね、アンタ！　上等じゃない、撃ってやるわよ！　この――」
そうして、光（ちから）は放たれた。
「――『ブリューナクの槍』をっ!!」
荷電粒子砲『ブリューナクの槍』。電撃によって生み出される隔絶的な熱量によって、射線上のモデュレイテッドは有無を言わさず熔解した。
一方、それを横目で捉えていた白井はと言うと。
「――また強くなりましたわね、お姉様。これでまた、追いつくのが大変になりますわ」
『……それでも君は、諦めるつもりがないのかい？』
「ええ、もちろん。当然ではありませんの？」
さも当たり前だと言う様に返されたことで、白井の後ろに浮かぶ半透明のスーツの男性は、半ば苦笑していた。
「グリーンさん、でしたか？　まあ、貴方には感謝しておきます。貴方がくれた演算式（ちから）のおかげで今まで出来なかったことが出来るようになりましたし、これでお姉様の露払いとして胸を張って堂々と働けます」

『この戦いの後、僕らの与えた〝力〟がそのまま残るとは限らないよ？』

「あら。貴方のお兄様ではありませんが、見縊らないでいただけますか？」

そこで会話を切り、彼女もまた正面を見据える。眼前には、数えるのも億劫になるほどのモデュレイテッドの群れ。そんな軍勢に対し、白井はその右手で手刀の形を作り――――横一線に、振り抜いた。

ただの、一振り。それだけで彼女の目の前のモデュレイテッドは、上下に切り離され絶命した。

「『魔剣アンサラー』――――必ず私も、この境地に至ってみせますわ」

そして、彼らとは離れた場所では。

「みーちゃん、みさきちゃん、下がってて！」

ＡＲＭＳ≪トゥイードルダム・トゥイードルディ≫の解放形態、流動する液体金属となったエリーが、二人の親友を庇うように前に出た。

『……怖いか？』

傍らに浮遊する、半透明でワイシャツ姿の男性が語り掛けてくる。

「……だいじょうぶ。こわくないよ、ブルーおじさん。大切な『ともだち』を二人もなくしちゃう方が怖いもん」

『そうか……ならば、大丈夫だ。今のお前ならば、全てを守れる』

その言葉に呼応するように、エリーの身体がぶるりと震える。次の瞬間、その身体の全てを覆い尽くすように、夥しい数の針（ニードル）がその尖端を周囲の異形へと向けた。

『さあ、放て！『魔弾タスラム』を!!』

「はいっ!!」

全ての異形に突き刺さり、その体内で起爆する魔弾。包囲網を狭める相手に対し、全方位を網羅する攻撃。守られるばかりだった彼女もまた、戦う覚悟を決めたのだった。

そして、再び操車場の只中では。

「――――成程。これであれば、確かに私はまだ戦えそうです。とミコは

新たな〝力〟に期待を示します」

ＡＲＭＳ≪ユニコーン≫を発動させていた御坂ミコ。その彼女の後ろに、黒一色のスーツを纏った長髪の男性が佇んでいた。

『その力も、私自身の〝力〟と言う訳では無いがね。それもまた今はいない兄弟たちから受け継いできた〝力〟だ』

「構いませんよ、ブラック。この状況を打破できるのであれば。と、ミコは早速〝力〟を行使します！」

その言葉と共に、彼女の傷ついた両腕に、罅が入る。ビキビキと、まるで殻の中から新たな生命が生まれ出るように蠢いた。そして、砕け、五指を喪った両手首の下から、新たに鋭利な刃が二本生まれた。

『神剣フラガラッハ』。単分子の刃で、触れる者全て斬り裂いてみせます。と、ミコは宣言致します」

この世で最も鋭利な剣と、雷速の脚。新たなチカラを得た人馬の騎兵は、並み居る異形の間を駆け抜け、その四肢を斬り裂いた。

「……」

繰り広げられる彼女らの攻防を、一方通行（アクセラレータ）は憮然として見ていた。彼の所にも、実は力を与えようという申し出は届いていた。しかし、彼はそれを拒んだ。誰かから力を与えられることを彼の矜持が許さなかったのか、それとも別の理由なのか、それは彼自身にも分からなかった。

「……ッ、クソが」

歯を食い縛り、自身の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）を制御し、掌握する。周囲に存在するありとあらゆる物理現象を把握し、ベクトルを操作し、己が力を自ら構築するために。

「……」

負けられない。実験にこれ以上関わる必要性はかなり薄く感じているが、それでも誰かの助力で強くなろうとは思わない。自分は、第一位なのだ。この学園都市で最強の能力者なのだ。その事実だけが、彼を支え、誰かに寄り掛かることを良しとはしなかったのだ。

「……？」

不意に、妙な感覚に捕らわれる。周囲に満ちているのは、第三位や

空間系能力者の影響が主なはず。だというのに、周辺に散布されているのは、かなり異様で多種なＡＩＭ拡散力場が存在しているように感じるのだ。

（……さっきのグレイとかいうガキや、あのホワイトとかいう奴が使ってた影響か？）

多種で多様で多彩な能力の〝力〟そのもの。自分がそれまで操っていた単純なベクトルとは一線を画す〝力〟の集合。その中に、ほんのわずかに残る、能力とは異なる〝何か〟。新たな〝力〟を得るために、一方通行（アクセラレータ）は躊躇なくそれら全てへと手を伸ばした。

「ｑｗｒｒａａｏｎａｕｏｇａｓａｂｄｓｙｖｃｙａｖｙｐｌａｊｓｕａａｈａｇａ!?」

能力の中にほんのわずかに残っていた理解不能な〝何か〟によって、思考が蹂躙される。演算が乱され、能力を行使することすら出来なくなる。

それでも。それでも、手を伸ばす。何故か。どうしてこんなに必死に手を伸ばすのか。思考もおぼつかなくなった彼の頭の中。わずかに残るのは、〝灰〟になった彼の死に顔。他の誰かに認められたくて、結局〝力〟を求めた彼の死に顔が――――いつか、〝無敵〟を求めた誰かに重なった。

「ｑｗｏｈｆｕａｏｅｕｒｕａｏｎｑｕｑｕｕｎｄｈｗｏｃｇｆｓａｄａｆｇｊ殺ａｐ――」

周辺のＡＩＭと、僅かな『魔力』を操り切り、彼の背中に漆黒の翼が生み出された。

新たなチカラに目覚めた者たちが、周囲を包囲する異形を押し返していく。補充は後から後からなされていくが、少しずつ、本当に少しずつ押し返され始めていく。その事実に、戦場を俯瞰していたキース・ホワイトは歯噛みした。

（何故だ！　何故こんな……！）

思えば、最初から予想外の連続だった。世界すら飛び越えたオリジナルの介入。そこから、死んだはずのキースシリーズの亡霊たちが、子供たちに力を与え始めた。それによって戦局は一気に悪化し、今で

は押し返され始めている。
　当初の予定では早々に圧倒的な実力差を見せつけ、この学園都市で有数の実力を誇るらしい彼らの恭順を得るはずだった。何一つ上手くいかない戦場に、歯ぎしりしながら、ホワイトは逆転の一手を打った。
「『灰は灰に』！」
「はぁっ!!」
　前線を押し戻し始めている能力者勢に対し、魔術師の二人は未だトレーラーの近くで戦っていた。それというのも、このトレーラーには彼ら二人が必ず守ると誓ったインデックスが乗っていたのだ。その近くには、先日魔術関連の事件に関わった姫神秋沙も。彼らの優先順位から言っても、この場を離れる訳にはいかなかったのだ。
　そうして、彼ら二人が懸命に戦い続ける中、彼らの後ろの景色が、不意に揺らいだ。
「二人とも!!」
「!!」
　インデックスの必死の叫びに、同時に振り返る。見ると、トレーラーの手前に新たな異形が虚空から滲むように現れており、その手に付いた鋭利な棘をインデックスと姫神の頭上に振り上げていた。空間転移（テレポート）。空間を飛び越えて、弱点を狙うホワイトの一手。守られていた筈の二人の生命に危機が迫る。
「インデックス!!」
　悲壮な顔の二人が叫び、身を寄せ合ったインデックスと姫神は、来たる衝撃に思わず身を竦ませ……
　――目の前で、黄金の彫像と化した異形に、目を丸くした。
「……え？」
「……。これ……？」
　インデックスは、目の前で起こった現象について記憶に無い。だけど分かる。それがどんな魔術によるものなのか。姫神は、記憶にある。それがかつて誰が用いていた『錬金術』なのかは。
『――――呆然。余りの間抜けさに、失望したぞ『必要悪の教会（ネセサリウス）』』

虚空に声が響き渡る。その声の主が、周囲の〝灰〟を集めるように形を作り、異形に突き刺さった鎖付きの黄金の鏃を引き寄せた。
「貴方は……！」
「……やれやれ。迷って出たのか、アウレオルス」
神裂とステイルがその人影を看破する。アウレオルス＝イザード。かつてローマ正教に所属した稀代の錬金術師。キース・グレイに吸収されたはずの彼が、今再び戦場へと降り立っていた。
『偶然。先程私を捕らえていたキース・グレイの意識が消失していくのを感じた。そのため自由になった私は、戦場の多くを把握していたが、お前たちでどうにか出来そうだったので、手出しをするつもりもなかったのだ』
「……まるで僕たちが情けなかったから、出て来ざるを得なかったみたいな言い草だね？」
『当然。余りの不甲斐なさにほんの僅か手を貸してやったに過ぎん。元々私とお前たちは敵同士だ』
……そんなことを言いながらも、肩越しに振り返ってインデックスと姫神の無事を確かめるアウレオルス。二人を見つめる彼の姿に、ステイルは数日前にこの学園都市で敵対した時のような危機感は既に感じていなかった。優し気に『生徒』を見守り、親愛の情を向ける瞳。あの瞳は、間違いなく、かつてインデックスを見守った『先生』のものだ。
ふっと口元を緩め、前へと視線を戻す。敵は相変わらず多い。ただまあ、先程までのような焦燥感はもう感じなかった。
「さて、それじゃあやられっ放しは性に合わないし、そろそろ反撃といこうか」
「……そうですね。もう先程のように彼女らの命を狙わせはしません」
『必然。防衛は私が回る。お前たちは、周辺の敵を掃討せよ』
後から出てきた幽霊もどきの癖に偉そうに言うアウレオルスに苦笑しつつ、ステイルと神裂はモデュレイテッドの群れへと突っ込んでいった。

（……おのれ！）

起死回生の一手も潰され、ホワイトの苛立ちは最高点に達していた。当初は、この場にいる者たちは生かしておき、自身の手駒として動かすつもりでいたが、もはやそんなことすら頭から抜け落ちていた。

ホワイトの目の前、戦場の高空に歪みが生まれる。学園都市で取り込んだ一万人の能力を混ぜ合わせ、合成し、全く新たな概念を生み出していく。そうして現れたのは、膨大な〝力〟の塊。ただ触れた者を破壊せずにはいられない、観測できないチカラそのもの。

「――――さらばだ」

戦場へと堕ちていく黒いチカラ。気付いたところで、誰も止められぬ圧倒的な破壊の具現を――

――上条当麻が、受け止めた。

「ぐっ、がっ、あぁああああああ?!」

空中で、目の前に迫る黒い何かに、右手が軋む。受け止められていることが奇跡であるかのように、右手が内から沸騰する。

負けない。負けてたまるか。これ以上誰も死なせられない。今だって、瞼に浮かぶ。死に際のグレイの顔が。助けられなかった妹達(シスターズ)の顔が。だから、死なせない。これ以上、俺の目の前で、誰一人だって死なせない。

拮抗が、僅かに崩れる。受け止めていた筈の右手が弾け、肩口から吹き飛ばされる。限界。幻想殺し(イマジンブレイカー)の限界――――けど、駄目だ。まだだ。まだ、つかみ取れる。

その瞬間を目にした周囲の者たちは、一様に言葉を失った。突如として現れた黒い球体。それに突っ込んでいき、右手で受け止めた上条当麻。そして、その右手を吹き飛ばされたと思ったら――

――突如として、その肩口から、巨大な〝竜〟の頭部が顕れた。

『――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――！！！』

顕れた頭部が、その強靭な顎で球体に噛み付く。『竜王の顎(ドラゴンストライク)』。圧倒的なその猛威に、球体はなおも抵抗するように明滅した。

『……
!!!
!!』

上条の肩口から、新たな竜が八頭、顕れる。それぞれに異なる頭部を振りかざし、黒い球体を手当たり次第に喰い尽くしていく。ホワイトの切り札だったはずの黒いチカラは、やがて徐々にその大きさを縮めていき、最後には霞のように消えた。

「っ、お、う、あ、あぁあああああああああああああああああああああああああ!!」

右腕から生えた八頭の竜を従え、上条もまたモデュレイテッドの群れへと堕ちていく。そこにいる生命なき異形を喰い尽くすために。謎多き少年、上条当麻もまた、その右手の奥の謎と共に戦場へと参戦した。

次第、次第に押し返していく戦場。光線が飛び、竜が舞う。そんなどこか非現実的な光景を、佐天の隣で祈る初春は呆然と見ていた。

なんで、自分には、力が無いんだろう。どうして、自分は、こうして親友の隣で祈ることしか出来ないんだろう。なんで、どうして、自分には……

そんな思いに囚われていた彼女の肩を、優しく叩く誰かがいた。軽い衝撃に、ふと顔を上げ、自分のすぐ近くに現れた人影を呆然と見上げる。若い女性だ。その長い髪を後ろで一つに束ね、幼い少女を抱っこしている女性だった。幼子を慈しむその心情が現れた顔は、先程戦場へと参戦した恵と呼ばれる女性ととてもよく似ていた。

『――ここは、わたしたちが受け持つわ』

そう告げた彼女の傍らに、二人の少女がいた。年恰好も、その顔も、まるで鏡写しのようによく似た少女だった。けれど、分かる。彼女らが、一体誰なのか。どういう存在なのか。かつてユーゴーやバンダースナッチが象ったその姿かたちを見れば、よく分かった。

『今も眠り続ける彼女は、わたしたちが必ず起こして見せる。だから、貴女は――』

『もし戦場に出ることを望むのならば、私の〝力〟を与えよう』

女性の言葉を遮って言葉を告げたのは、彼女らの後ろに現れた軍服

の男性。その左頬を平行に横切る傷痕が特徴の男性だった。
「……〝力〟って？」
『言葉の通りだ。お前は祈ることしか出来ぬと思ってこんな所にいるようだが、もしお前が友人のために戦場に出たいと言うのなら、俺の〝力〟を与えれば、それがかなう』
「でも……だけど！　私の能力は、中途半端で！　『手で包み込んだものの温度を保つ』位しか出来なくて……！」
『十分だ』
そう言って、有無を言わさず演算式を伝えてくる。それを感じ取り、頭の中で理解し、驚愕した。
「これ、って……」
『お前の能力の、正しく発展形とも言える能力だ。お前のその――――両手で包み込んだ範囲の、『水分子を振動させる』能力のな』
〝力〟を与えられた、両手を見つめる。出来るのだろうか、自分にも。今まで決して、前に出ようとはしなかった。誰かを後ろから支えられるなら、それでいいと思っていた。
だけど。
一度だけ振り向いて、眠り続ける彼女を見る。佐天涙子。大事な、本当に大切な親友だと断言できる存在。彼女は、苦しんでいる。苦しみながら、戦っている。生きるために。もう一度、自分や白井さんや、御坂さんに会うために。生き残るために、今も戦っているのだ。
目を瞑り、異形を見つめる。佐天の戦いを、妨げる者。佐天を傷つけようとする者。だったら、ここを守るのは、彼女の親友の自分の役目だ。
「……佐天さんのこと、お願いします」
幼子を抱く女性に言い置いて、両手を前へと突き出す。相手に向かって向けた掌から、ブゥウン、と羽音のような振動音が響き渡る。断続的な振動が伝わり、大気が歪み、彼女の両手の輪郭がぼやけ始める。
自身の〝力〟が確実に受け継がれていくその光景を、軍服の男性――キース・レッドは、どこかくすぐったそうに見つめていた。

『さあ、響かせろ！　≪グリフォン≫の咆哮を!!』
「う、わぁぁあああああああああああ!!」
初春の魂からの叫びと共に、前方のモデュレイテッドは一切の区別なく、その身を粉々に粉砕された。

083　再誕―リバース―

周囲のモデュレイテッドたちが、キースからの贈り物を受け取った御坂たちによって徐々に殲滅されていく中、未だ目覚めない者がいた。

「はぁ……はぁ……」

佐天涙子は、胸に穿たれた傷口から未だにとめどなく出血しながら、それでもか細い呼吸を保っていた。

「……」

そんな彼女の傍らに、四人の人影が近づいていく。一人は、幼子を連れた若い女性。その子供を慈しむように抱き上げ、慈愛に満ちた表情を浮かべていることから、その幼子の母親であると分かる。もう二人は、外見がよく似た二人。ウェーブのかかった金髪で、ふわふわした揃いのワンピースを纏い、優しげな視線を佐天へと向ける二人の少女。そして、最後の一人。若い母の腕の中に抱かれた幼子は、どこか二人の少女に似通った瞳を、興味深そうに佐天へと向けていた。

やがて、お互いにそっくりな二人の少女が、佐天の傍らへと座り、振り返って女性へと頷いた。それを受け、女性と幼子もまた、佐天の反対側へと座り、全員で静かに傷口へと手を重ね合わせた。

そのまま、四人の意識は奥深くへと沈んでいく。そこは、佐天とその家族が今も戦い続ける『鏡の国』にして、『不思議の国』だった。

（……）

白に、覆いつくされていく。上も下も、右も左も、純白に支配された世界に、新しい雪が積もっていく。まるで、何物にも未だ染まっていない、まっさらなキャンバスのような世界。かつて母に生み出されてすぐ、こちらの世界に飛ばされてきた彼女を象徴するかのように、無垢な世界。そんな世界に、今、新たな雪が積もっていく。

ぼんやりと力の入らぬ身体を、そんな純白の世界に投げ出して、佐天は遥か上空から降り積もる雪を見ていた。雪雲を背景に、佐天の手を取り、顔をへの字に歪めているバンダースナッチを見ていた。

（……この雪、バンちゃんの『涙』だ）

自分が、泣かせているのだ。不意を少し突かれたくらいでコアに罅を入れられて、今にも死にそうな顔で倒れて、心配させているのだ。

（まいったなぁ……）

「家族になろう」と言い出したのは、自分の方なのに。これからずっと一緒にいようと、決めたのは自分の方なのに。決めたことも守れず、言うだけ言って死にかけている。佐天は、自分の惨状が少し情けなくなった。

「……ぁ……」

「っ！　大丈夫!?」

掠れたような声しか出なかったが、それでもバンダースナッチには聞き取れた。握り締めていた佐天の手に力が籠り、ぎゅっと握り締められる。

「はは……ごめんねぇ……こんなあっさりやられちゃって……」

「何言ってんのよ！　こんな時に、そんなこと気にしなくていい!!　待ってて、今全力でコアの修復を進めているから！」

「……」

力ない佐天の言葉に、バンダースナッチは必ず助けると返した。けれど、なんとなく佐天には自分がどうなるのかわかったような気がした。もし本当に助かるなら、彼女がこんなに悲しそうな顔をするはずがない。もし本当に出来るなら、自分は既に外に出ているはずだから。

ここが自分の結末だと、分かってしまった。

「私……死ぬんだね」

「――――ッ!!」

佐天のその言葉に、バンダースナッチは何も返せなかった。ただ悔しそうに下唇を噛んで俯いただけ。それだけで、全て伝わった。

「そっか……」

その事実を受け止めても、佐天の心には余り波風が立たなかった。ああ、自分はいなくなってしまうんだな、と乾いた認識を浮かべただけだった。

「……」

外の皆は、大丈夫だろうか。初春は、自分が死んだら、また泣き叫びそうだ。大人しそうに見えるが、実は彼女は結構感情が激しい方だ。そのリアクションが面白くて、何度もスカートめくりなんてしていたが。御坂さんは、また怒りそうだ。なに勝手に死んでんのよ！とか言って、下手したらあの世まで追って来て、電撃をお見舞いしてきそうだ。白井さんは、一見冷静に取り繕うだろうけど、何だかんだで情の深い人だから、人一倍責任とか感じてしまいそうだ。インデックスは……寂しがりだったから、一番心配だけど、飢え死にしないことを心から願う。

「……」

そんなことをつらつらと考えていると、ふと自分の傍らの少女が目に入った。

――バンダースナッチ。自分と今は同じ身体を共有していて、掛け替えのない家族になった少女。自分がいなくなってしまったら、この少女はどうなるのだろうか。彼女だけでも、生き残れるのだろうか。その場合、彼女は自分の死に涙してくれるのだろうか。それともしかしたら――彼女まで巻き込んで、死なせる羽目になってしまうのだろうか。

そこまで考えて、佐天の胸にほんの小さな熾火のような想いが灯った。初春。御坂さん。白井さん。インデックス。それに加えて、バンダースナッチとこの場にはいないユーゴーさん。このまま死んだら、自分と深く関わった人々を悲しませることになる。大きな後悔を残すことになる。そんなことになったら――死んでも死にきれない。

「死に、たく、ないよ……」

力の入らぬ口を僅かに動かし、彼女はそれだけを口にした。佐天の手を握り締めていたバンダースナッチの両手に、これまでにない力が籠った。

「――――死なせませんよ」

言葉は、天から降って来た。視線を上げて見ると、純白の雪の中、見慣れた人影が佐天の傍らへと舞い降りて来ていた。ユーゴー・ギルバート。バンダースナッチと共に、佐天の身体に宿ったＡＲＭＳの中に宿る女性だ。

「ユー、ゴーさ……」

「遅くなってすいません、佐天さん。『援軍』の皆さんをここまで案内するのに手間取ってしまって」

「え……？」

よく見ると、彼女は一人ではなかった。彼女の後ろに四人の人影が見える。その四人の集団のうち、手前に佇む外見がそっくりな二人の少女は、何度も見たことがある風体をしていた。

傍らのバンダースナッチと、全く同じ外見をしていた。

「……『アリス』？」

バンダースナッチの生みの親。かつてアザゼルと一体化し、すべてのＡＲＭＳの母となった少女。ヒトを愛する白いアリスと、ヒトを憎む黒いアリスに分かたれた存在。目の前にいるのは、そんな分かたれた二人の少女だと一目で分かった。

二人のアリスは無言で佐天のすぐ近くまで歩み寄ると、バンダースナッチに握られた方とは逆の手を二人で手に取り、言葉を告げた。

「「――――ありがとう」」

それは、純粋な感謝の言葉だった。

「……バンダースナッチ（この）は、私たちが生み出した最後の子供（こ）だから」

「変わって欲しかったけど、私たちでは変えることが出来なかったから」

「だから、ほんのわずかな可能性にかけてこの世界に送り込んだの」

「だから、嬉しい。この子が、本当に失いたくないと思える〝絆〟を手に出来たことを」

「「だから、ありがとう」」

二人のアリスから交互に述べられたのは、本当に心からの感謝だった。変わって欲しかった。けれど、変えられなかった。『絶望』を押し付けてしまった。それでも『家族』に出会えた。様々な想いが重なり

合って、二人のアリスから出た言葉は佐天への感謝だけだった。
「……それじゃあ、願いましょう」
佐天の手を精一杯握る二人のアリスの後ろから、子供連れの女性が手を伸ばす。彼女のかつての名は、赤木カツミ。かつてはバンダースナッチをその身に宿した、佐天の先輩。二人のアリスの手の上から佐天の手を握り締めた彼女の手に、横から小さな手の平が添えられる。彼女の名もまた、『ありす』。カツミと涼の間に生まれた、未来を象徴するかのような少女。
「そうですね。佐天さんを必ず現実に帰してあげないと」
そう言って、ユーゴーもまたバンダースナッチの隣へと移動し、佐天の手を握る。その顔には、不安など一切感じさせない。佐天が必ず現実に帰れると、信じているからだ。
「〝想い〟こそがＡＲＭＳの力――」
「だから、私たちが曇りなく願えば――」
「必ず貴女は、現実に戻れるわ」
「――うん。私もねがう」
「外では、皆が待っていますよ」
願う。６人の人間が一心不乱に願う。彼女の帰還を。彼女の復活を。ただただ一心に願っていく。
バンダースナッチも、また願う。不安を覆い隠し、彼女が現実へと帰還できることを。自分の『家族』として、また一緒にいられる未来を。だから、願う。
願う。
願う。
願う。
願う。
願う。
願う。
――想いは、どんな現実だって覆せる――
――さあ、見せてください――

――――奇跡を!!

白の世界に、光が満ちる。無色だった光は、やがて彼女らの想いを乗せて、その色を変えていく。世界に満ちる光の色は、〝青〟。それはかつて一人の少女が絶望の中で何よりも願った〝希望〟の色。〝青い希望（ブルー・ウィッシュ）〟を乗せ、今一人の少女が世界へと帰還する。

０８４　蝗王―アバドン―

現実での戦況は、一進一退の攻防を見せていた。当初こそ、キースシリーズの力を受け継いだ御坂たちにキース・ホワイトが押される展開となっていたが、ホワイトがモデュレイテッドへの細かな制御を放棄して大量生産のみを重視した結果、殲滅力よりも新たに生み出される数の方が上回る結果となり、戦線を立て直されてしまったのだ。

「ああ、もう！　キリがないわね！」

「文字通りゴキブリですわ！」

周囲の異形を粗方殲滅し、御坂と白井が一息つく。視線を少し上げて見ると、宙の満月に届きそうなほど屹立した暗闇の巨体からは、相変わらず夥しい量の異形が降り注いでいた。

視線を横に流すと、モデュレイテッドが密集した一角では、背中から黒い翼を発生させた一方通行が紙でも千切るみたいに周囲の敵を蹂躙している。その向こうでは、何かよく分からない八俣のドラゴンを腕から生やした上条が暴れまわっている。他にも反対側へと視線を巡らせると掌から破壊の振動を迸らせた初春が近づくものを粉砕しているし、とんでもない速度で戦場を駆け抜け異形を細切れにしているミコもいる。

……けれど。

今は拮抗出来ているが、このままではジリ貧だ。現に最初に参戦した四人のＡＲＭＳの周辺には、自分たちの周辺の数よりも軽く五倍はいる軍勢が足止めし、満足に動くことも出来ないでいる。数の暴力という言葉の意味を存分に味わっている最中だ。

「まだまだ負けるとは思わないけど……」

「私たちには、体力（スタミナ）というものがございますから。長引けば不利になるのはこちらですわね」

学園都市の能力者は、能力を無限に使える訳ではない。使いすぎれば負荷はかかるし、時々倒れる人間もいる。しかも今は、普段慣れない使い方を行い続けているのだ。それが徐々に疲労と言う形になっ

て彼らを苛んできていた。
そして、それを見透かしたように、ホワイトは動く。天を覆う巨体が腕を一振りすると、さらに数を増した異形が舞い降りてくるのが見えた。
「はー、ったく！　次来るわよ、黒子!!」
「お任せくださいお姉様！　露払いの役、立派に成し遂げて見せますわ！」
そうして、互いに奮い立たせあう二人の遥か後方から――。
『オ――――――――――――――――』
最初は小さく、かすかに。だけどそれは段々と力強く、確かに。
『オォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――ッ!!!』
待ち望んでいた、懐かしい咆哮が聞こえてきた。
その声に、その叫びに、最も近くにいた初春が振り返る。彼女が見たのは、以前にも見た氷水晶（アイスクリスタル）のような幻想的な異形。だけど、違う。以前とは、はるかに違いすぎる。その四肢を形作る結晶の透明度が違う。その裡に内包した、青い光の輝きが違う。何より、その存在から感じる威圧感が遥かに異なっていた。
「……佐天さん？」
思わず呟いたそんな問い掛けに、僅かも時間を置かず返事が返った。
「――ただいま、初春」
声自体は、何時もの彼女の声。だけど、やはり違う。その声に感じたのは圧倒的な包容力。何もかも包み込むような底知れない優しさ。そして、そこに感じる確かな意志だった。
「もう、大丈夫だから」
ほんの僅かな呟き。それに呼応するかのように、水晶の中に内包さ

れた光が、明滅を始めた。それははじめはゆっくり、徐々に光を強め、より早く。

「バンちゃんの想い……ユーゴーさんの想い……」

光と共に、周囲に音が響き渡る。それはＡＲＭＳの叫び。世界を揺るがし、席巻するかのように吠え立てる『共振』。

「カツミさんの想い……アリス達の想い……全部、全部受け止めたから」

全ての光は集約し、佐天の右腕に宿ったのは、この世の全ての〝青〟をまとめ上げたかのような美しい光球。まるで青い太陽がこの世に誕生したかのような光景だった。

そんな光景に、最も不快感を露わにしたのは、天高くから見下ろしていたこの男。

「……フン。悲しみの色。嘆きの色。相も変わらず下らぬ色だ」

キース・ホワイトは、断じて〝青〟という色を認めない。そのため彼が生み出したキースシリーズには、オーソドックスな色なのに『ブルー』というカラーネームを唯一採用しなかったほどだ。

「所詮、子供の夢見た夢想の色などで……世界は変えられぬ!!」

――それが、アリスが最も愛した〝希望〟の色だったからだ、などとは決して認めようとはしない。

天を衝く巨体が、文字通り山となってバンダースナッチへと迫り、無数の異形は津波となって殺到する。常人であれば絶望するような戦力差、圧倒的な光景。それに対して佐天は、決して曲げることのない視線でホワイトを見据え――。

「――これが、私たちの想い」

『――滅ぼすがいい、『アバドンの魔軍』よ』

静かな言葉と共に、青い光球は空へと解き放たれ――爆散した。瞬間、その場にいた者たちは皆、空が鮮やかな青空へと変わる光景を目撃した。そして、猛烈な爆風が周囲に一気に拡散していくのを確認した。

「な――――」

最初に異変が起こったのは、青い光を全身に浴びたキース・ホワイト。見ると、輪郭さえおぼろげだった≪ハンプティ・ダンプティ≫の身体中に、僅かに白いものが混ざり始めている。それは、確かに『霜』だった。

「馬鹿な!?　≪ハンプティ・ダンプティ≫が、神の卵が凍り付くなど!?」

そんなことを叫び、霜を擦って削り落とす。しかし、足りない。身体中あちこちに、まるで飛び火したように発生した『霜』は、徐々に徐々に、だが確実にその範囲を広げていく。

異変は、周囲でも起こっていた。先程の爆風にその身を晒していたモデュレイテッド達が、その身体の彼方此方に生じた『霜』によって確実に動きを阻害され、少しずつではあるがその活動が鈍っていく。

当然その現象は、御坂たちがいた現場だけにとどまらない。

「こ、これって……？」

「……一体何じゃん？」

「……（御坂さんや、佐天さんたちが何かしたかしら？）」

警備員（アンチスキル）と風紀委員（ジャッジメント）たちは、目の前で霜に浸食されていき、確実に氷像へと変わっていく異形達を目撃した。

「おいおい、これだけで動けなくなるなんて根性が足んねぇな！」

「うるせぇ！　こっちは暴れ足りねえんだよ!!」

「全くだな。こんなところで足止めされた俺様の憂さ晴らしに、もう少し付き合っても良かっただろうに」

そんなことを言い合う超能力者（レベル5）どもを尻目に、それぞれの同僚たちは、強制的に巻き込まれてつい先ほどようやく終わった無限湧きの無双ゲーみたいな戦闘に、疲弊しきりだった。

「……すごいわねぇ☆」

「うん、きれいだねー」

「アレとやり合わなくて、ホント良かった……」

一面に広がる少々不細工な氷像を目にし、食蜂らは呑気な言葉を交わしていた。

「ぐっ！　くそお！　くそおおお！」

そして、キース・ホワイトも、少しずつではあるが、動きが鈍くなっていた。今や『霜』は身体のあちこちにまだらのように広がっており、擦っても擦ってもまるで落ち切らない量だ。それでもあきらめず、少しでも落とそうと身体の彼方此方を擦る。

『――――無駄だ、キース・ホワイト』

ホワイトのそんな行動の一切を眺めながら、バンダースナッチが静かにそんなことを言った。

「っ、何を、した?!　貴様がさっき撃ち放ったのは、一体なんだ!?」

『……ただの、ナノマシンだ』

その言葉に、思わずホワイトがこすり合わせていた両手を止めた。

「何……?」

『あれは、ＡＲＭＳにとってもっともありふれたナノマシンだ。栄養や〝力〟を吸収し、生物的な恒常性まで保有し、繁栄のためにその数を増やしていく、最も単純な〝生命〟としての在り方』

しかし、とバンダースナッチは告げる。アリスの絶望を体現し、神獣の具現となった存在は言う。

『あれを生み出す段階で、『想い』を込めたのは我と佐天涙子だけではない！　ユーゴー・ギルバートが、かつての赤木カツミが、その娘が！　そして何より、二人に分かたれたアリスもまた、全身全霊で想いを込めた!!』

だからこそ、あのナノマシンはおおよそ通常では有り得ない進化を遂げた。絶望に決して足を止めない彼女らの願いが、一つの形へと昇華した。

『あのナノマシンは、行く手を阻む絶望を、決して許しはしない……！　標的となった対象のありとあらゆる〝力〟を吸収し、喰らい尽くし！　熱を、電流を、魔力を、能力を、エネルギーを奪い尽くし！　その〝力〟を以て、爆発的にその数を増やしていく!!　あらゆる食物を喰らい尽くす、飛蝗のように！　故に名付けたのだ、『アバドンの魔軍』と!!』

この世界に存在するものは、どんなものであれ何らかの〝力〟の作

用によって存在している。生物が放つ体温は、熱エネルギーだし、神経伝達は物質の移動と電気エネルギーだ。〝力〟を用いないで存在できるものなど居はしないし、それを奪い尽くされたら滅びるしか道はない。

『アバドンの魔軍』とは、あらゆる〝絶望〟を喰い尽くし、〝希望〟を生み出す無限の萌芽。追いつかれ、喰いつかれたら、後は滅びが待つだけの文字通りの魔の軍勢。

しかし、そんな運命など、この男が納得できようはずもない。

「っ……！」

くぐもったような呻きがわずかに漏れた。見ると、≪ハンプティ・ダンプティ≫の巨体は、九割がた『霜』が降りていた。動くことはすでに叶わず、見る見るうちに氷像へと姿を変えていく。

「……おおおおおおおおおっ!!」

そんな氷像と化した≪ハンプティ・ダンプティ≫の眉間から、一つの小さな姿が飛び出した。針金のような細い体躯。その中心に据えられた、ずんぐりとした楕円形の不格好な本体。神の卵が割れた≪ハンプティ・ダンプティ≫、その真の姿だった。よく見ると、その両腕だけが、≪ハンプティ・ダンプティ≫本来の物とは違っていた。右腕は逞しく力に満ちた『ジャバウォックの爪』、左腕は光り輝く『ミストルテインの槍』。その二種類の『ＡＲＭＳ殺し』で周囲の殻ごとナノマシンを引き裂いて、本体だけ脱出してきたのだ。

「お前たちのような、子供に何が分かる……！」

命からがら脱出してきたというのに、その声には微塵も疲れを感じさせない。その声から感じるのは、妄執。ＡＲＭＳ計画に生涯を捧げ、幾千もの生命を奪ってきた一人の男の怨念。

「人類には、今こそ『王』が!!　『神の代弁者』が、必要なのだ!!　それこそが人類の『運命』なのだ！　それが分からぬ子供の夢想など、この≪ハンプティ・ダンプティ≫が、粉微塵に引き裂いてくれる!!」

「そんな『運命』なんて！　私が、私たちが！　殴りつけてでも変えてやるわ!!」

夥しい氷像が立ち並ぶ大地の上空。〝絶望の根源〟と、〝絶望を滅

ぼす者〟の両者は、遂に正面から対峙したのだった。

０８５　人間―ヒューマン―

「なぜ、分からない！　なぜ気付かない!!」

　言葉と共に、想いがぶつかる。上空高くで、幾度も幾度もぶつかり合う。ぶつけているのは、叫んでいるのは、ＡＲＭＳ計画の第一人者にして、幾千の生命を奪ってきた男――キース・ホワイト。

「っ、４５億年前！　地球が、今の環境に落ち着く折に！　星から分かたれた、もう一つの進化の到達点が！　現代において人類に出会ったという事実の『意味』に！　どうして気付かないのだ!!」

　かつて、地球から別れた『きょうだい』がいた。その『きょうだい』は、その後の地球とは全く異なる進化の系統樹を辿ることとなった。豊富に存在した炭素をその身に取り込み、有機生命体の系統樹を育んでいった地球とは異なり。分かたれた隕石に含まれていた珪素を軸に、数多の金属をその身に取り込み、有機生命に比べ圧倒的に強靭で長大な寿命を誇る金属生命体を生み出すこととなった。

「その末裔（すえ）こそが、アザゼルであり、ＡＲＭＳなのだ！　有機と金属、二つの生命の系統樹の混合種（ハイブリッド）こそが、次なる地球の担い手なのだ！　その事実にどうして思い至らない！」

　全く異なる進化を遂げた、二つの種。今現在その叡智によって地球上を席巻している、霊長の到達点、『人類』。そしてもう一つは、その生み出された環境ゆえに、生命の強靭さにおいて他の追随を許さない金属生命、『アザゼル』。

　……全く異なる二つの生命を混ぜ合わせ、統合し、次なる人類を生み出そうとした。世界で日々生み出される多くの悲劇を、困難を、乗り越えていける生命を生み出すつもりだった。現生人類を遥かに越える種族を生み出そうとした。

　その結晶が、『ＡＲＭＳ』だった。

「そのＡＲＭＳを!!　計画の主導者たるこの私（ホワイト）が手に入れた、今！　『王』として神の代弁者となるのは、私以外にいないとなぜ理解しない!!」

キース・ホワイトの両腕は、『ジャバウォックの爪』と『ミストルテインの槍』のまま。その背中からは、幾本もの枝が生え、四方八方へと荷電粒子砲を、空間の断裂を、爆散する魔弾を、集束光のレーザーを放ち続けていた。その攻撃の雨は地上へと余すところなく降り注ぎ、御坂たち地上の戦力は、上空に上がることすら出来ないでいた。

「……ホント、迷惑な攻撃よね」

「ですが、この攻撃が止まないことには、私たちでは佐天さんの援護も出来ませんわ」

御坂と白井が空を見上げたまま嘆息する。無差別攻撃が始まった時点で、地上戦力の全員は女王の力場（クイーン・オブ・ハート フィールド）内に逃げ込んでいた。確かな実力を持つ彼女らならその気になれば上空へたどり着く方法も無くはないが、それでも後が続かない。この場は佐天に任せるほか無かった。

「……だけど、彼らは」

そんな中、初春がふと戦場となった上空の片隅を見上げた。

「どうして、手を出さないんでしょう……？」

初春の視線の先。上空高くで静止したまま、キース・ホワイトと佐天の戦いに手を出さずにいる三つの影――――オリジナルＡＲＭＳを有する、高槻、隼人、武士の姿があった。

◇　◇　◇

「……なあ、本当にこのまま手出ししなくていいのかよ？」

圧縮空気を背中から噴出しながら隼人が言う。眼下では今も彼なりの理論と思想を展開し続けるキース・ホワイトが苛烈ともいえる攻撃を繰り出していた。それに対し佐天とバンダースナッチは、一見すると攻められるままでいるように見える。

「……ああ。隼人からすると、妹分が心配かもしれないけどな」

「ケッ！　そんなに心配なんかしてねーよ！」

高槻の言葉に強がって返しながらも、隼人の眼は常に戦いの様子から離れない。彼女が危ない目に陥ったなら、何が何でも介入する気が満々だった。

「まあ、隼人君の心配もわかるけどね。それでも、〝答え〟を出すのは

彼女じゃなきゃいけないと僕も思う」
「〝答え〟、か……」
「そう――――この世界で、これから生きていくのは、彼女自身なんだから」
武士はそう告げ、眼下の攻防を真っ直ぐに見据える。恐らく、戦いはこれだけでは終わらない。今回、佐天の前に立ちはだかったのは自分たちの刈り残しともいえる存在だったが、この世界に生きる者はそれだけではない。この学園都市を統括する権力に狙われることもあるだろうし、魔術というこの世界特有の技術者集団もいる。これから先、それらの勢力に彼女の圧倒的な力が狙われた場合、対処できるのは彼女自身以外にいないのだ。
だからこそ、高槻たちはこの戦いを通して、佐天涙子という人物のすべてを見ておきたかった。かつてエグリゴリという巨大な組織を相手にして、自分たちが戦う覚悟を決めたように。果たして彼女がどんな〝答え〟を出すのか知っておきたかったのだ。
眼下では、延々と攻撃が続けられている。キース・ホワイトはまるで癇癪を起した子供のように、苛烈な攻撃を以てバンダースナッチへと当たり散らしていた。
「いい加減に悟るがいい……！」
≪ハンプティ・ダンプティ≫の背中から、ベキベキという異音が鳴り響く。枝状だった翼部分が捻じ曲がり、そこから爪が長く伸びた異形の掌を生じさせた。その形状は、明らかに≪帽子屋（マッドハッター）≫のもの。新たに増えた異形の掌の間に、巨大なプラズマが形成される。
「今こうして、私がＡＲＭＳという『新人類』に到達したのも！　全ては、４５億年もの『過去』から続く『運命』なのだ！　それが理解できるものだけが『未来』の『王』としてふさわしいのだ！　『王』に立つのは、立つべき資格を持つのは！　私以外にいない!!」
そうして放たれる巨大な光球。一方通行が放ったものと比べても、遜色ない大きさ。そんな暴力の塊が目の前に迫る中、佐天はただ静かに右腕を引き――――

「――――知るかバカぁあああああああああああああああああああああ!!!」

罵倒と共に、ただの拳で光球を貫き、霧散させて、その向こう側のキース・ホワイトをぶん殴った。

「「「……は？」」」

思わず殴り飛ばされたホワイトも、それを見守っていた高槻たちも呆けてしまった。さっきまでのＡＲＭＳの極地ともいえる攻撃に対抗したのは、ただの拳。それも、プラズマを力づくで霧散させるなんておまけつきだ。力に対しての小難しい考察だとか、人類進化にかけるホワイトの理屈だとか……色々あったその他諸々を一蹴したのは、一人の女子中学生の罵倒と拳だった。

「ふー……」

そんな周囲の困惑とか驚愕とか絶句とかを置いてけぼりに、佐天は振り抜いた拳を自分の正面に持ってくると、そのまま具合を確かめるようにぐるぐると腕を回していた。

「さっきから色々言ってたところ、本当に悪いんだけどね……」

溜息交じりに、佐天は告げる。

「正直、人類の進化とか、４５億年の過去とか、未来の王の資格だとか……そんなに色々言われても、私にはそれが正しいのかどうかなんて分からないわよ。私ってただの、いち女子中学生だもん」

実に、あっけらかんと。ホワイトの理想だとかなんだとかを、『分からない』の一言で切って捨てた。

「変な理屈を、この戦いに持ち込まないでよ……私があなたを倒したいのは、そういうことじゃないんだから、さ」

そう告げて、ゆっくりと両腕を広げる。その姿に呼応するように、眼下の地上で、淡くゆっくりと光が灯り始める。

「私は、みんなといたい……」

光の正体は、モデュレイテッドを覆いつくしていた霜。それらが淡く発光し、地上を青く染め上げていた。

「仲の良い友達と。一緒にいたい誰かと……」

地上から、光が集う。それは粉雪のように空中に舞い上がり、もう一度佐天の元へ、バンダースナッチへと還っていく。

「何より……大切な『家族』と!!」

佐天の言葉と共に、バンダースナッチの全身が、再び激しく青く輝く。世界を染め上げ、何物にも追随を許さない青い『太陽』のように。

「ただ、みんなと一緒にいたいから！　それを邪魔するあなたを許せないのよ!!」

その瞬間、バンダースナッチは〝閃光〟となった。

「な……」

咄嗟にホワイトは身体をひねって躱したが、僅かに掠った右の脚が破片となって消失した。

「バカな……？　『高速移動』!?」

そんな能力は、バンダースナッチには無かったはず。焦燥と共に振り返り、高速で移動する彼女に荷電粒子砲の飽和射撃を撃ち込む。

雷光は当たらず、バンダースナッチはその空間から完全に消失した。

「これは――――ガッ?!」

ホワイトの背中に、衝撃が奔る。間違いない。グリーンの『空間転移』だ。再び振り返ると、今度はバンダースナッチの数そのものが増えていた。『バロールの魔眼』だ。

「ばら撒いたナノマシンを再び取り込むことで……その対象の能力まで取り込んだのか……！」

言ったそばから、周辺に重力子の集中が起き、空間全体が起爆する。たまらずその場から空間転移で逃げ出し、同じ能力で反撃する。今度はそれを、光の屈折による幻像によって躱していく。

今の彼女は、文字通りこの世界最強の存在だ。学園都市が誇る能力者を一万人分も取り込み、この世界独自の魔術もその一端を行使でき、その上今までに生まれたＡＲＭＳの能力のほとんどを行使できる。間違いなく、この世界の頂点と言える存在だろう。

それでも、負けられない。『王』に相応しいのは誰か、確信を持っているがゆえに。『神』には届かざるとも、『王』には届きうると自信を

持っていたがゆえに。
――だから。
「『未来』は！　『王』は、わが手に――――!!」
ただそれだけを叫び突っ込んでくるホワイトに、佐天は一度瞑目し、その溢れんばかりの力を、右手だけに集中させる。その腕がサファイヤのように輝き、爪が眩いばかりに光を放つ。
「だから、知らないって、言ってるでしょ……！」
『未来』？『王』？知ったことじゃない。そんなもののために戦ってるわけじゃない。
「私は！　みんなと一緒に、『今』を生きてる！　ただの『人間』なんだから!!」
叫びと共に、五指が奔る。空間そのものに軌跡を残しながら、ただの『人間』の爪が圧倒的な威力を秘めて迫って来る。それに対してキース・ホワイトは、その両手の『ＡＲＭＳ殺し』を盾のように翳し――――
「……ッ!!?」
――騎士の槍も、魔獣の爪も。破壊され、破砕され、粉砕されて、その五体の全てと共に、千々の破片となって地上へと墜落していった。

086　平和―ピース―

妹達（シスターズ）とＡＲＭＳに関わる一連の事件が終わった後――。事件の渦中にあった佐天涙子と上条当麻は……。

病院に、強制入院となった。

「……あのさ、ビリビリ」

「あァん?!　アンタ、まだビリビリ呼ばわりなワケ!?」

「ひっ！　スイマセンごめんなさい悪気は無かったです！　……いや、それは置いといて、とりあえず聞きたいんだけどさ」

「何よ?」

呼び名のせいか未だに固い口調の御坂の様子に、一度はぁ、と息を吐いてから、聞いた。

「……なんで俺は、病院のベッドに拘束ベルトで拘束されているのでせうか?」

試しに少しだけベルトを引っ張ってみて、そのビクともしない強固っぷりに溜息を漏らしながら、出来れば納得できる答えが出てくることを祈りつつ、回答を求めてみた。

「なんで、もないでしょ?　今回アンタ、『右腕』が根元から無くなってたじゃない。ここの院長先生が、一度精密検査したいって説明したじゃない」

「いや、それは俺としても有り難い話だし、そこは承諾しましたのことよ?　けど、なんでここまで厳重に縛るのかって聞きたいんだけど」

「あー……それは先生曰く、これから行われる検査項目で逃げようと動いたり、痙攣したりしないように」

「待って待ったちょっと待って!?　俺これからどんな検査受けさせられるの!?　目にした瞬間逃げたり、検査中に痙攣したりするの?!」

「……ま、まあ大丈夫よ。ここは病院なんだし、何かあっても治療はしてくれるって」

「検査で治療が必要な怪我するんなら、本末転倒ですよね?!　今回珍しく大きな怪我はなかったし、細かい怪我も彼女に治して貰ったのに

意味ないじゃないですかやだー！」

そのままドッタンバッタンと暴れること暫し。拘束を抜け出すことも出来ず、余計な体力を消耗しまくった上条がベッドで大人しくなると、やがて憂いを浮かべた表情で、今最も御坂に確認したかったことを聞いた。

「あー、それなら、さ……『彼女』は」

「ああ……佐天さんなら」

上条達が騒いでいた病室から階を隔てた特別病棟。清潔なベッドの上に横たわる長い黒髪の少女。今回のＡＲＭＳ事件の主軸とも言えた少女――佐天涙子は、今……

「う〜〜〜〜……ものすごい、ダルイ……」

ベッドの中で、疲労困憊と言った感じの身体を横たえ、土気色の顔色で悶えていた。

なぜ、こんなことになったのか？それは彼女が、あの日行った行動に起因する。そもそも彼女の能力はナノマシンを媒介にした種々のチカラのやり取りとなるわけだが、それにしたところで、扱うのはあくまで本人である。あの日、あの戦いの中だけで彼女は膨大な力を放出したり、取り込んだりを繰り返していた。自分にかかる負担を一切考えずに、である。

……その結果として、体力全快になる『魔法の薬』があるからと言って、フルマラソンの全速力を何度も繰り返したような負荷が、諸々の後始末を終えた彼女に現在進行形で襲い掛かっているのである。当然起き上がることも出来ず、体調は過去最低の底辺のまま、記録を更新し続けている。

「……まあ、その体調不良の原因のほとんどが『自業自得』って言うのが佐天さんらしいですね」

「う〜〜い〜〜は〜る〜……もっと優しい言葉かけてくれたっていいじゃ〜〜ん〜〜」

「いやです♪」

「親友が、冷たい……」

よよよ、とわざとらしく泣き崩れて、シーツで目元を押さえる。それでも初春も初春で、ニッコニッコとした冷たい笑みを絶やさない辺り、佐天の扱いに慣れてきたと言うべきか。

「そんじゃ～……みんな、はぁあ～～」

「ああ……大丈夫ですよ、佐天さん。先生が検査した結果、妹達（シスターズ）全員、寿命も体調も完全に快復しています」

……そう。今現在、妹達（シスターズ）の面々は、グレイが助けた個体も、それ以外の個体もクローン体ゆえに短かったテロメアや寿命、それにその他の問題点も含めて完全な健康体となっている。なぜこんなことが起きたのか？それを知るには、あの日の戦いの後まで話を遡る必要がある。

まず、あのキース・ホワイトとの頂上決戦の後、当然の結果として実験云々が警備員（アンチスキル）や風紀委員（ジャッジメント）にバレた。いくら統括理事会がゴーサインを出していたとはいえ、実験それ自体が倫理に反して極めて非人道的なのだから、問題にならない訳もない。幸い誰のクローンが使われたとか、誰が関わっていたかとかについては、学園都市全体に広まる前に緘口令は敷かれたようだが、それでも実験が中止になるには十分だった。そうなると当然協力していた企業はすぐさま蜥蜴のしっぽ切りを行い、全責任も負債も天井という男が負うことになるようだった。

そして問題になったのは、妹達（シスターズ）の治療に関してである。彼女らはクローンであるため、極端にテロメアが短い。学園都市で最高峰のカエル顔の名医ならば治療法も見つけられるだろうが、患者は一万人近いのだ。全員に手が回る訳もない。

そこで考え出されたのが、キース・グレイが遺していった完全治療用ＡＲＭＳ、『メディカライズＡＲＭＳ』を用いる方法である。これなら全員に移植するだけでテロメアはおろか、体内の障碍は全て治るので画期的な方法であった。もっともこの方法も、グレイが遺したメディカライズＡＲＭＳがほんの少量だったこともあり、危うくお蔵入りになるところだった。

それら諸問題を解決したのは、バンダースナッチである。彼女は佐天と協力して、ほんのわずかな『アバドンの魔軍』を生成。それを、残っていたメディカライズＡＲＭＳへと『感染』させた。そして改めてメディカライズＡＲＭＳを取り込んだ『魔軍』を吸収して、メディカライズＡＲＭＳそのものの性能を秘めたナノマシンを新たに生成。妹達（シスターズ）全員へと散布する運びとなった。

一応妹達（シスターズ）へ散布する前に、きちんと検証実験も済ませてある。丁度重症を負っていたはずのとある不幸少年がいたため、彼には栄誉ある実験台（いけにえ）になってもらい、まったくの健康体となったのを確認してから散布した。おかげで妹達（シスターズ）は、検査が終わり次第退院できる運びとなったのである。

「……でも、全力戦闘後にそんな大規模で無茶なＡＲＭＳ発動を行ったせいで、佐天さんの方が限界を迎えるとは思いませんでしたね」

「う〝ぅ～～……身体が重い〝～、怠い〝～、眩暈と吐き気と頭痛が一斉に襲ってくる〝～～～」

……ちなみに治療方針が決まって、それら全力行使が全て終わったのは、東の空が白々と輝く頃だったりもした。全力戦闘繰り返して、そのまま徹夜である。たとえＡＲＭＳがあろうと、倒れても不思議ではない。

と、佐天がそんな風に近くにいる初春に体調の絶不調を訴えていると、彼女らのいる部屋の数階下の方から、何やら叫び声が聞こえてきた。

「ちょっと!!　待ちなさいよ、食蜂ォッ!!　何いきなり来てソイツのベッドに潜り込もうとしてんの?!」

「アラぁ☆　やっぱりそんなお子様な発育の人には解らないのかしらぁ☆?　ここからは大人の時間よぉ☆」

「喧嘩売ってんのか、ゴラァッ!!」

「あ〝ぁあああああああ?!」

「「……」」

一段と激しい叫び声の後に、まるで雷が落ちたような轟音と、巻き添えで痺れたような哀れな男子高校生の悲鳴が聞こえてきた。

治療が終わって判明したことだが、何でも上条と食蜂は一年前からの知り合いで、ある事件を機に上条の中からその時の記憶が失われ、脳にも障害が残っていたそうだ。本来治療法は無いはずだったが、メディカライズＡＲＭＳ投与実験により、その障害から快復。自分を思い出してくれた嬉しさから、食蜂がかなりハッチャケることとなった。……上条争奪戦に、新たに食蜂（きょうてき）が加わることで、御坂とインデックスの機嫌はとんでもなく悪くなったが。

まあ、これも彼女らみんなが勝ち取った平和な光景なのかもしれない。

「ふぅーーーー……」

ほんの少しアンニュイな気分を味わいながら、あの日一握の灰となったキース・ホワイトの事を思い出すのだった。

０８７　会食―パーティー―

――……ククク……全く、どうしてこうもお前たち（オリジナル）は、度し難い程に愚かなのだ？

――人類は、今こそ変革すべき時代を迎えているというのに……

最期にそんな言葉を投げかけながら、塵となって崩れていったキース・ホワイトのことを思い出す。正しく呪いにしか聞こえない恨み言で憂鬱になった気分を、夏らしく晴れ渡った空を見上げて少しだけ紛らわせる。

「ああ……今日もいい天気ですね……」

「いえ、佐天さん？　今見るべきは絶対に天気ではなく、目の前に広がる現状ですわ」

そんな非情な白井の宣告に、仕方なく視線を正面へと戻す。先程まで自分、初春、御坂、白井の四人だけだったファミレスのテーブル席は、近場のテーブル席からわざわざ話のために移動してきた人員で、隙間なく囲まれる状態と相成った。

「なんで、るいこは私に隠れて美味しい物を食べようとしてるんだよ!?」

「……。ごめん。止められなかった。」

「インデックスから、佐天様の料理の腕前はお聞きしました。この後ぜひ腕を振るってください。と、ミコは暗に食わせろと要求します」

どこから嗅ぎ付けたのか、店に入る時には既に後ろにいたインデックスと姫神。そしてインデックスと食事談義で仲良くなった、御坂ミコ。

「よお！　何か元気無えな。根性が足りねえぞ、根性が！」

席に着いたあたりでトイレから戻って来て、こっちを確認するや寄って来た削板軍覇。

「ウルセェぞ、テメエら！　騒ぎてえならカラオケボックスにでも行きやがれ!!」

「まあ、確かに超やかましいですね」

「結局こういうところで品性って現れるワケよ！」

「北北西から信号が来てる……」

案内された席が隣同士だったことに、騒音のクレームを付けられるまで気付かれなかったアイテム御一行……。

何故かあの日の事件の関係者が、結構な数揃い踏みとなってしまった。ほのぼのパートであるはずのファミレスが、日常の一ページが、あっという間に学園都市をも揺るがす爆心地（グラウンド・ゼロ）へと早変わりだ。

……何か、悪いことしたかなぁ。

結局あの後、疲労困憊と徹夜明けから回復したのは翌日になってからの事で、午前中に各種検査を終え、昼前には退院となったのだ。ちなみに一緒に入院していた上条は、黒焦げでビクビクと痙攣している姿があの後発見され、退院はさらに伸びた。そして、昼食時だったので退院祝いも兼ねてファミレスに入ってみたら、見事に現在の状況である。

はぁ……と重い、本当に重い溜息を漏らしつつ、騒がしい日常に加わることが出来ている御坂ミコの横顔を見つめる。彼女を含めた妹達（シスターズ）は、既に内外の医療関係企業への移送が決定されている。本来違法のクローン体、それも超能力者（レベル5）のクローンだ。たとえレベルが本来より低くとも研究的価値は計り知れない上、人数が多すぎるため結局企業の力を借りる結果となってしまった。

それでも今回の非人道的実験の全貌が明らかになった上での移送だから、移送先の研究機関で行われる実験も体調管理と能力測定の範疇を越えないものと、研究そのものを極めて制限する条件が付け加えられることとなった。まあ、実際制限する意図があるのだろう。倫理的に問題がありすぎるクローンを受け入れた企業が非人道的処置を執り行ったなど、スキャンダルどころではないのだから。

もちろん中にはこの学園都市に残る者もいる。上条に御坂妹と呼ばれる娘を筆頭に、何人かは計画に関わっていなかった医療施設などで受け入れ予定だ。御坂妹と何人かは、カエル顔の先生の病院で体調管理と社会勉強の真っ最中。エリーについては、食蜂保有の研究施設で警策女史と共に、施設の防衛を兼ねて同居中である。

そして、御坂ミコに関しては……。

「とりあえず、今日の晩御飯は期待しています。具体的には、フランス料理のフルコースを。と、ミコは新たな食への探求に心躍らせます」
「……せめて、一般的な夕食で勘弁して」
何故か、インデックスと共に、佐天の自宅の学生寮で預かることが決定していた。オマケに布束氏曰く、「一般常識はある程度叩き込んだから」とのことで、夏休み明けに柵川中学の一学年に転校できるよう手続きを進めているとのことだった。どうやってるのか知らないが、「御坂美琴の親戚で、学年一つ下の妹分」というカバーストーリーまで加えて、戸籍を絶賛偽造中らしい。
……あの人は、一体どれだけ余罪を増やすつもりなのだろうか？
頭の痛くなる事態に、佐天が絶賛現実逃避中であったところ、不意に隣のボックス席にいた絹旗が椅子越しに振り向いて話しかけてきた。
「まあ、ここで会えたのは超グッドタイミングです。少し貴女の今後について語っておきましょうか」
紡がれた言葉は、今回の事件の中心であった御坂美琴でもミコでもなく、佐天へと向かっていた。
「……今後？」
「ええ……今朝方、統括理事会の通達で、貴女を『一般には流布されない、あくまで非公式にではあるが、『八人目』の超能力者（レベル5）として認める』と」
――一般には認められない『八人目』。それを知っていて、なおかつ本人に告げることが出来るという事は、その肩書が認められているのは、彼女らが息づく世界だけなのだろう。佐天も今回の件で薄々、この都市にそうした側面が存在し、そこで暗躍する人々がいることを正しく認識しつつあった。
決して日の当たる表には出られない、学園都市の――『暗部』ともいうべき存在を。
「まあ、表立っての物でもないので、補助金だとか学園都市側の便宜を図れるだとかはありません。それよりも警告したいのは、別の側面です」

曰く、今後はそうした世界に息づく勢力から、狙われる危険性が高まるとのこと。そうした勢力に対し、身辺に十二分に気を配っておくべきこと。本当に、彼女の老婆心からの警告であると断りを告げられて、最後に。

「では、最後に。私たちと連絡先を交換しておきましょう。何かあった時に超相談できるように」

「「ハァ?!」」

そんな締めくくりに、佐天だけでなく、彼女の同席者であった麦野やフレンダまでもが絶句した。

「オイコラ絹旗！　テメェ何考えてんだ!?」

「そーそー！　結局なんでコイツとアドレス交換なんてしなくちゃなんないワケ!!」

がーがーと叫ばれる内容に、絹旗は首を竦めながらやれやれと横に振った。

「落ち着いて下さい、二人とも。これは単なるリクルート活動の一環です」

そうして絹旗が説明したのは、以下のような内容。つまり、あれだけの勢力に狙われる佐天が、今後学園都市の闇に呑まれない可能性は低い。そうした場合、状況次第では敵対勢力に取り込まれる恐れまであるのだ。その仮定の通り敵対したならば、第二位すら撃退出来る戦力を持つ彼女と互角に渡り合える人員は、リーダーの麦野位だろう。今後の情勢次第でもあるが、チームの最大戦力をわざわざぶつけなければならないような仮想敵は作りたくない。

「……であれば、他の勢力が獲得に動いていない今のうちに、超良好な関係を築いておくべきと判断しました。今後ウチに配属となれば、それだけで戦力倍増ですから」

「あー、成程ー……」

フレンダは納得したが、麦野はそう簡単に納得できない。何せ第二位を撃退したのだ。リーダーのはずの自分より戦力評価が上の人員など、チームの不和を招きかねない。それ以前にプライドが許さない。

「で、どうですか、佐天涙子？　我々とのアドレス交換に応じますか？」

プライベート用の端末を差し出す絹旗の横で、じゃあ私もー、と言ってフレンダも端末を取り出す。麦野は相変わらず不機嫌顔だが、止める様子はなく、滝壺はテーブルに突っ伏すように寝ている。

そして、件の佐天はというと、

「……まあ、アドレス位ならいいですけど」

結構あっさりと自分の端末を差し出すのだった。

「……案外応じないのでは、と考えていましたが。超あっさり出しますね」

「え、そーなの？」

「いやー、実際狙われそう、って言うのはその通りだと思いますしね。それに対しての保険とか、相談相手とか貴重ですし。……あー、でも」

手早く端末の操作をして、アドレスを交換しつつ、最後にほんの少しやり返すように絹旗へと告げる。

「私は、あなた達と同じ世界へ行き着くつもりはありませんよ？『人間』として、これからも日の当たる『日常』を生きるって、あの時誓いましたから」

あの日、キース・ホワイトに向けて告げた言葉を、もう一度思い出すのだった。

０８８　終章―エピローグ―

――ヒトは、『無』から生まれ、死する時に再び『無』へと還る。その道程に何も携えることは許されず、あたかも風に舞う塵のように――

「……」

「……どうした？　勝利の凱歌ならば、少しくらい笑ってはどうかね？」

ぼろぼろと崩れ、塵となって風に舞い上げられながらも、キース・ホワイトはそんなことを宣った。既に彼の腰から下は見る影もなく崩れている。後数分もせずに、彼は最期の時を迎えるだろう。今まで、幾千もの生命を弄んできた男の最期としては、相応しいものなのかもしれない。

それでも、佐天はその最期を嘲笑うことが出来なかった。どんな男であれ、生命を奪うことは辛かった。だからせめて、その最期を全て見届けようと眼を見開き、奥歯を強く噛み締めるだけ……。

「…っ……」

「やれやれ……やはり貴様らオリジナルは、どいつもこいつも甘いな」

はぁ、とホワイトは小さく溜息を漏らすと、すぐさま口元を歪めて見せる。

「確かに、今回一たびは私が破れた。世界中に神の意志を伝える『神の代弁者』たる『王』になる野望は、ここに潰えたと言えよう」

「……その割には、余り悲しそうじゃないんだけど」

横から割り込んで来た御坂の指摘に、ホワイトはますます笑みを深めて見せる。肩を震わせ、歪ませた口元を大きく開き、遂には両手まで広げて大声で笑い出した。

「――ははははは！　当たり前だろう！　私はこれまでに、二度までも滅びたことがある人間だ!!　それがまるで〝運命〟の悪戯であるかのように、三度まで好機を与えられた！　一度目は科学者として、二度目と三度目はＡＲＭＳとして！　ならば『四度目』が無

いなどと、誰が言い切れる？」

『次』があれば、今度は必ず目的を遂げて見せる――――、とホワイトはそう告げる。そしてまた呵呵大笑をその場へと響かせる。それはまるで、最後には自分の勝ちだと、今回の事件など未だ前哨戦に過ぎないのだと、告げているかのようで、思わず御坂はホワイトの胸倉をつかんでやろうと近付いた。しかしその肩にそっと手を置かれ、止められる。静かで強い瞳をした、佐天涙子に止められる。

「……確かに、今日の戦いは、〝運命〟の悪戯だったのかも知れないし、あるいは『定め』だったのかも知れない」

「……ほう？」

「けど、それでも私たちは、その戦いを乗り越えて見せた」

その佐天の言葉に、笑い続けていたホワイトの笑みが完全に曇る。その表情には、明らかな不快感が見て取れた。

「……だから、なんだ？　お前たちならば〝運命〟すらも越えられるとでも嘯く気か？　それこそ子供の夢想だと、なぜ気付かない！」

「例えどこかの誰かが私たちの〝運命〟も〝未来〟も！　レールみたいに定めていたとしても！　そんなものに従う義理なんて、どこにもある訳ない!!」

絶対に、誰かが作った絵図面の通りになんて動いてやらない。レールがあるなら、破壊してでも道を作る。人類（ヒト）が〝運命〟の奴隷だとしても、その鎖（さだめ）を引き千切る自由だって必ず皆が持っていると信じている。それが、彼女の意志。それこそが、佐天涙子という少女だった。

彼女の意志を見届け、ほっと安堵している者たちもいた。かつてオリジナルを移植し、少年時代を激動の中で過ごした年長者四人は、彼女の決して曲がらない意志を見て、肩の荷が降りた思いがした。

ホワイトは相変わらず、憎憎し気に佐天の事を見つめていたが、やがて崩壊が身体全体に及び、端の方から静かに崩れ始めていた。いよいよ最期の時だ。

「……貴様がどれだけ喚こうと、〝運命〟は貴様を縛り続けるだろう」

「……」

「それだけではない……人類（ヒト）の持つ『原罪』とも言うべき意志もまた、

貴様の前に立ちはだかるだろう……」
「『原罪』、って……？」
「〝欲望〟だ」
それもまた、人類が持ち得る意志。人類を今日の発展へと押し上げた、紛う事なき『原動力』。人類が人類である限り、捨てることなど出来ない〝本能〟そのもの。
「求める者がいる限り、戦いが止むことは無い……今日この日、私が破れたとしても、再び〝欲望〟に囚われた何者かが世界に現れ、貴様の前に立ち塞がるだろう……」
「……それでも。絶対に、諦めない」
――佐天はどこまでも、佐天という人類の意志を貫き続ける。ホワイトはその言葉を聞き、不快気に顰められていた顔を、ふっと緩めた。
「果たして貴様が、どこまでその頑迷な意志を貫ける、のか……精々、見もの、だ、な……」
くくっ、という喉の奥から出した嘲笑が風の中に溶けて、末期の灰が宙に舞っていく。ＡＲＭＳ計画の提唱者、全ての絶望を振りまいた男――キース・ホワイトは、そうしてこの世界から永遠に去っていった。

◇　◇　◇

「……てん、さん……佐天さん!!」
「うひえっ?!　な、なに、初春？」
耳元での大声に、佐天の意識が浮上する。どうやらファミレスを出た後、あの日の事を思い出してぼうっとしていたようだ。
「大丈夫ですか？　まだ疲れが残ってるんでしょうか。なんなら私がマッサージしましょうか？」
「止めておきなさい、初春。未だに振動数も規模もろくに制御できない貴女がマッサージなど行えば、佐天さんが挽き肉になるだけですわ」
「そ、そんなことしませんよ！」
「でも、私も黒子もあの日以来能力の加減が上手くいかないのよねぇ……弱くなってるわけじゃないんだけど、調節がしづらいっていう

か」

そう言って御坂が試しに、手元に電撃を発生させる。火花程度のつもりで出したそれは、明らかにバチバチと空中を激しく鳴らす程に放電していた。明らかにあの日ＡＲＭＳによって、それぞれの発展型とも言える能力を得た後遺症だった。

「……えっと、大丈夫、なんですか？」

「ああ、別に何てことないのよ。さっきも言ったように弱くなったどころか、むしろ強くなってる位なんだし。偶に力加減間違えたりする程度ね」

「そのせいで、上条さんが真っ黒になったんですよね……」

「類人猿とはいえ、少しあの殿方が可哀想でしたわ……」

「い、いや！　あれはアイツが悪いって言うか！　ていうか、黒子！　普段アイツに当たりが強いアンタが、何で非難すんのよ!!」

そのまま顔を少し赤らめながら、某高校生への不満を口にする御坂。そんな年頃の少女らしい反応に、思わず嘆息する白井。少しおどおどしながらも、御坂を宥めにかかる初春。

そんな友人たちの光景を目にして、思わず佐天はふっと口元を緩める。彼女にとって、この日常こそが、〝運命〟だとか〝未来〟だとかの目に見えない何かよりも、掛け替えのないものだと、今なら間違いなく言い切ることが出来た。

◇　◇　◇

――藍空市、共同墓地。

十年の時を経て、少しだけ古ぼけた墓石の前で、四人の男女が静かに手を合わせていた。

「ユーゴー……俺達の〝妹〟のこと、気遣ってくれていてありがとう……」

高槻のその言葉に、皆が墓石に対しはにかんだように笑いかける。あの日、別れの時、彼らの精神をこの世界に戻してくれたのはユーゴーだった。その際、僅かだが同じように礼を言った彼らに、彼女はほんの少しだけ苦笑するように答えた。

「『気にする必要はありませんよ。私にとっても佐天さんはもう、〝妹

〝みたいなものですから』なんてね……」
「実にユーゴー（あのコ）らしかったわね」
「けどまあ、元気にしてるようで良かったんじゃねえか？」
隼人のそんな言葉に、武士も恵も笑みを浮かべる。ユーゴーには何度も助けられた。マンハッタンでは生命まで賭して助けてくれた。そんな彼女が精神体だけとは言え、遠い世界で元気に暮らしているというのは、彼らにとってほんの少しでも救われたような思いだった。
「……また俺達の力が必要になったら、世界の壁なんて〝破壊〟してでも駆けつけてやる。だからそれまで彼女の事、頼んだぞ……」
高槻の言葉に、全員の瞳に意志が宿る。彼女なら、一人でも何とかするかもしれない。だけど、もし自分たちの力が必要な時が来たら、自分たちの歩みは誰にも止められない。彼らの胸に確かに宿る〝意志〟こそが、無限の可能性なのだから。

◇　◇　◇

『――では、佐天涙子についてはそのように？』
『ああ――極めて稀少な実験体（サンプル）として監視を強め、当面は現状維持に努めてくれ』
フラスコの中に浮かぶ男か女かもわからぬ人物が、モニター越しに指示を出す。逆さまになったその人物が、まるで何の問題もないかのように雑務をこなしていく様子は、傍から見たら異常だろう。それでも、そのフラスコの正面に立つ人物は、それを指摘することも無く、只々嘘臭い笑みを浮かべていた。
「――これで佐天涙子は、晴れて要注意人物（ブラックリスト）入り。監視を厳に、って言ったところで現場の奴らが独断専行しない理由もない。あわよくば彼女もプランに組み入れようって腹か、アレイスター？」
『――さて、どうだろうな。私はあくまで監視体制の強化を命じただけにすぎんよ』
そんな訳がないだろうに――と思いつつ、内心を噛み殺す。間違えてはいけない。彼にとっての優先順位。何よりも優先すべきもののために、時には情を殺すことも――

『――――そんな言い訳が、通じるとでも思っていたのかね？　アレイスター』

不意に、二人しかいないはずの空間に、第三者の声が響き渡った。

土御門はぎょっとして辺りを見回すが、アレイスターはあくまでも慣れたものとして応対する。

『……君か。この連絡手段を使うとは、珍しいこともあったものだ』

『ああ……君が僕の『患者』を再び狙うだろうと思って、取り急ぎ話がしたくてね？』

佐天涙子を『患者』と呼び、語尾を僅かに上げる口調。間違いなく、第七学区で一病院の『医者』であり続けるあの男――≪冥土返し（ヘブンキャンセラー）≫。

『……君との協約には、違反していない。あくまでも監視体制を強めただけで私が直接手出しをするわけでもない。そこについては、現段階では約束しておこう』

『……』

アレイスターの言葉に沈黙が下りる。僅かに聞こえるのは、土御門が唾を嚥下する音だけとなって数分……。

『……いいだろう、アレイスター。そこまでなら君の行動を認めよう。――――だけどね？』

去り際、それまでの真剣な様子を一変させ、半ば苦笑しているかのような軽い口調で語り掛ける。

『僕が完治させられなかった〝絶望〟と言う名の病を、あの娘（コ）は自分の〝意志〟一つで覆してみせたんだ。甘く見ていると、君も君のプランも、滅ぼされるかもしれないね？』

そんな言葉が、窓のないビル――アレイスターの牙城に残響のように残っていた。

◇　◇　◇

「佐天さーん。どうしたのー？」

「参りませんの？　佐天さん」

「みんな、待ってますよー！」

澄み渡る青空の中、道の先にいる友人たちが語り掛けてくる。ふと横を見ると、自分にとってかけがえのない家族と言える二人の姿が浮かんでいた。

『また遅れると、煩くなるわよ？』

『行きましょう、佐天さん』

二人の姿を捉え、目を閉じ、一度足を止めて思い切り伸びをする。再び眼を開けた時、彼女の顔には大輪の向日葵のような笑顔が浮かんでいた。

「――――さあっ！　行きますか！」

第四部　番外編
０８９　後日譚―アフターエピソード―

※　その後の禁書展開編―ダイジェスト―

どうして、こんなことになったのだろう？

私は、私たちは、ただ日常の中にいたかった。私が料理をして、居間ではミコがよだれを垂らしながら待っていて、足音を忍ばせながらインデックスが出来たての唐揚げをつまみ食いにやって来る……。

そんな当たり前の日常が本当に大切で、かけがえのないものなんだって失って初めて気づいた。あの日、英国旅行に行ったインデックスと、その付き添いに任命された上条さんを空港に見送りに行ったのが、インデックスを見た最後の姿で――。

――彼女は今も、私たちの家には戻ってこない。

英国で、ローマ正教のトップに攫われたとは後で聞いた。上条さんは自分が絶対に取り返すなんて伝えてきたけど、それでも大人しく待っていることなんて出来なくて。大事なルームメイトを、大事な『家族』を何としても取り戻したくて。

だから――

「それでッ！　結局どうして私が巻き込まれてるってワケよ!!」

雪原のど真ん中をひた走る一台のワンボックスカー。その車中において、涙目の金髪少女に襟首掴まれてガクガクと頭を揺さぶられる羽目になりました。

「いやー、上条さんからの情報で、インデックスがロシアにいるってことが分かってね？　そこまでの道のりもそれなりにあるし、通訳も必要でしょ？　で、見た感じ『現地のヒトっぽく』見えるフレンダにお願いしようかなー、と……」

「私の母国ココじゃないから、結局ロシア語なんて１ミリも話せないワケよ！　第一、そっちの無表情無口系絶賛無免許運転女がロシア語もスワヒリ語も話せるって話じゃない!!　そっちに頼めばいいワケよ！」

「心外ですね。誰が無表情無口系ですか。とミコは遺憾の意を表します」
やれやれだぜ、と首を振りながら、運転席のマルチリンガル少女が嘆息する。ちなみに無免許運転は否定しない。現在進行形で罪を重ねている真っ最中だからだ。
「じゃあ、今からでも降りる?」
「それが出来たら――!」
佐天の提案に対してのフレンダの返答は、車中の者にはよく聞こえなかった。突如として閃光が車の後輪近くに着弾し、雪原の一画が水蒸気爆発を引き起こしたからだ。
「…………」
話を中断されたことなど、既にフレンダの頭の中には無かった。たった今の閃光、それは彼女にとって余りにも心当たりがありすぎるものであって。

「フーレーンーダぁ?」

その声は、フレンダの聴覚に余りにはっきりと届いた。喉が引きつる、冷や汗が吹き出る。ギギギとまるで壊れかけのブリキ人形のように首を回し、声と閃光を投げかけられた方向へと視線を向け――。

ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね?

ガチでブチコロシ五秒前、我らが麦野サンが降臨していた。
「いやぁあああああああああああああああああああああああああああ?!
ゴメン、ゴメンなのよ、むぎの! 無料(タダ)でロシアにバカンスに行けるって、誘われただけなワケよ! 許して! 悪気は一切無かったから、だから――」
「駄目」
「ひぃいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!?」

ロシアに行くところまでは良かったのだ。無料バカンスなんて有り難いと思ってもいたのだ。ところが、いざ着いてみたら大戦勃発で帰還命令が出て、帰ろうとしたらそのまま目の前にいる二人に拉致られて、あれよあれよという間にハイエースされて……。

……気が付いたら、自分の所属する暗部の同僚全員に、帰還命令破った自分の確保命令が下っていました。しかも『生死問わず（デッドオアアライブ）』で。

「ナンデェ?!　ナンデこうなったワケよ!?」

このままでは「フレンダ」は、「フレ／ンダ」になってしまう。せっかくあの暗部抗争からも逃げ切ったというのに。第二位に追い詰められて情報吐かされそうになった時に、佐天のアドレスにＳＮＳを飛ばしたおかげで逃げ切れたというのに。何とか生き延びねばと、彼女は必死になって灰色の脳細胞をフル稼働し続けていた。

◇　◇　◇

――そうして、雪景色のロシアを逃げに逃げ、追いかけに追いかけ。いつしか彼女らは目的の場所へとたどり着く。そこは、この世界の果て、魔術という名の神秘が世界に顕した一つの奇跡の中心地。

「――端役が、場違いにも俺様の前に立つかよ」

それは、異形の『右手』を持つ青年だった。鳥類のような、爬虫類のような、とにかく『右手』だと辛うじて分かるナニカが肩口から生えていた。その『右手』を以て『奇跡』を。神の如き所業を成し遂げようとしていた。

世界の大多数にとって、もしかしたら、目の前の青年は正しいのかもしれない。間違っているのは自分たちの方なのかもしれない。そんな思いは、確かにこの胸にある。

――けれどもそんな『迷い』は、この胸の中のたった一つの想いが否定する。

「アンタが正しいかどうかなんて、問題じゃない……！」

『右手』が、変わる。目の前の青年をも越える、更なる異形へと。

『神の如き者（ミカエル）』を喰らい尽くす『神獣（バンダースナッチ）』へと。

「私の親友に、手を、出すなッ!!」

上空数千メートル、ベツレヘムの星にて。世界の命運を決めるバト

ルは幕を開けた。

※　異世界観光旅行編―イフストーリー―

閑静な住宅街、そこに奇妙な集団が降り立った

「おー、ここがバンちゃんやユーゴーさんの故郷なんですね！」

「学園都市に比べると、些か文明レベルが落ちますね。排ガスは身体に悪いですよ。とミコは注意喚起します」

『……うるさいわね。ポリバケツが自動走行してる、あの街がオカシイんだって悟りなさいよ』

『あはは……でもこの藍空市は、本当に良い街ですから』

黒髪の少女は、台詞も半ばでさっさと走り去ってしまう。お目当てはどうやらクレープ屋。異世界の味を存分に味わうつもりのようだ。

「もう、佐天さんは……」

「でも、大丈夫でしょ。メニューにはオーソドックスなものしか書いてないみたいだし」

「そうですわね。以前食べたヤシの実クレープを越えるインパクトは早々ありませんわ」

「るいこー！　私にもイチゴとチョコ増シ増シ・全部のせ三つ欲しいんだよー!!」

そんなことを言い合いながら、彼女らもまた店へと特攻するのだった。

◇　◇　◇

そうして、昔の皆を誘ってのお花見の席にて。

「ちょ、アリスちゃん?!　何でスルスル桜の木を登ってるの!?」

「ああ、時々キャンプに連れて行ってるからな……。それよりコレ、少し食うか?」

「なんでセミの素揚げが、花見の料理に出てきますの?!」

「出されたものはちゃんと食べるべきなんだよ、くろこ?」

「美味しいのでしょうか?と、ミコは未知の食の探究に心躍らせます」

「それよりも、気配もなくいつの間にか合流してる、こっちの背広の人が疑問なんだけど……」

「なに……少し、忍術をね……」
『まだ、お二人はご結婚されていないんですか……。二人の赤ちゃんにも会ってみたかったんですが』
「あ、あああ赤ちゃん?!　ちょっとユーゴー！　私たちにはまだ早いわよ」
「オイ、いくら何でも動揺し過ぎだろ。まあ、今の仕事が落ち着いたら考えるさ。随分待たせちまってるからな」
「おー！　ついに決心したの、隼人お兄ちゃん!!」
「まったく、凡人とは騒がしい奴らだ……」
「フフ……。何だかんだで、皆が少し羨ましいかな。僕なんてイタリアを飛び回ってるから、全然恋人作る暇がないよ」
「あらあら、武士君も大変ねぇ……。今度ご近所の奥さんに聞いて、涼と同年代位のお嬢さん見繕ってみようかしら?」
それはとある春の日、夢か幻か、心穏やかなある日の出来事――。

０９０　能力表―スペックシート―

※　主人公

佐天　涙子（さてん　るいこ）

学園都市、柵川中学一年生にして無能力者。――だったのだが、別世界から漂着したＡＲＭＳに適合したせいで大幅に運命が変わる。最終的には、非公開であるが学園都市第八位の超能力者（レベル５）に。他にも学生寮の同室がインデックスと御坂ミコであったりと、本来の彼女とはかなり異なっている。

性格的には、正史とあまり変わらない。ただバンダースナッチというかけがえのない家族、インデックスやミコとの交流から、より周囲の人間関係を大事にしている。

能力

空力探査（エアロソナー）（レベル５）

元々佐天が持っていた、幻想御手（レベルアッパー）利用で漸く使える程度の空力使い（エアロハンド）の能力が、ＡＲＭＳによって極大化したもの。その真骨頂は効果範囲内の大気の状態『全て』を認識し、また操ることにある。効果範囲内であれば、窒素装甲や窒素爆槍も使える。

ＡＲＭＳ

神獣（バンダースナッチ）

言わずと知れた佐天のＡＲＭＳ。当初は冷気を司り、周囲の窒素の態様を変えるくらいしか出来なかったが、現在では散布したナノマシンの周辺の元素を自由に蒸発・凝固・液状化させることが可能。テレスティーナの巨大ロボを蒸発させたのはこの能力による。最終決戦以降、散布したナノマシンを再吸収した影響で、学園都市一万人分の能力と『黄金錬成』、アドバンストＡＲＭＳの多様な能力すらも取り込んでいる。エピローグ後は、治療用のメディカライズＡＲＭＳを散布することも可能。

最大の攻撃は、ありとあらゆるエネルギーを『喰って増える』とい

う機能に特化させたナノマシン『アバドンの魔軍』。喰らい付かれた相手は熱エネルギーすら失って氷像と化す。

※　サブキャラクター

御坂ミコ

佐天の介入で生き残った妹達、ミサカ９９８２号。治療のため両脚にレプリカントＡＲＭＳを移植している。元々の電撃使いの能力は増幅され、自分を電磁加速させる高速戦闘が得意。柵川中学一年に編入予定。インデックスと共に、佐天の家計のエンゲル係数上昇に一役買っている。

ＡＲＭＳ

幻獣（ユニコーン）

脚甲（グリーブ）型の高速戦闘用ＡＲＭＳ。解放されると人馬型の形態となる。キース・ブラックから受け取った『神剣フラガラッハ』と電磁加速で、あらゆる敵を斬り裂く戦闘を行う。

エリー

ドリーの妹にして記憶を共有している少女。試作型のレプリカントＡＲＭＳを移植されている。元々はミサカネットワークの実験個体であるため、電撃使いとしての素養はそれほど高くない。但し、ネットワークをＡＲＭＳが増幅した影響で、電波ジャックやジャミング、レーダーに近い能力を持つ。

ＡＲＭＳ

鏡像（トゥイードルダム・トゥイードルディ）

全身に散在しているエリーのＡＲＭＳ。身体のどこかの機能を代替しているわけではないため、一番近いのはキース・バイオレット。液体金属型のＡＲＭＳで、その形状を自由に変化可能。発動に慣れてくれば、身体の一部だけ変貌させることも出来る。最終決戦において、キース・ブルーから『魔弾タスラム』を継承。全方位に電磁加速させた魔弾を発射可能になった。